經典部

第四卷

BL 1411 T8J3 1929 v.4

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂
國譯大藏経

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v. 4

昭和新纂 國譯大藏經 經典部 第四卷

摩訶般若波羅蜜經第二 目次

卷第二十

累教品第六十六……一

無盡品第六十七……九

攝五品第六十八……一三

卷第二十一

方便品第六十九……二五

三慧品第七十……四一

卷第二十二

道樹品第七十一……五六

道行品第七十二……六二

三善品第七十三……六六
偏學品第七十四……六八
卷第二十三
三次品第七十五……八〇
一念品第七十六……八九
六喩品第七十七……一〇一
卷第二十四
四攝品第七十八……一一〇
善達品第七十九……一二〇
卷第二十五
實際品第八十……一四一
具足品第八十一……一五三
卷第二十六
淨土品第八十二……一六五
畢定品第八十三……一七三

差別品第八十四……一八〇
七譬品第八十五……一八三
平等品第八十六……一八八
如化品第八十七……一九五
卷第二十七
常啼品第八十八……一九八
法尙品第八十九……二一七
囑累品第九十……二二六

佛說仁王般若波羅蜜經　目次

卷上
序品第一……二二九
觀空品第二……二三三
菩薩敎化品第三……二三五
二諦品第四……二四六

卷　下

護國品第五……二五〇
散華品第六……二五四
受持品第七……二五五
囑累品第八……二六四

金剛般若波羅蜜經　目次

金剛般若波羅蜜經……二六九

大般若波羅蜜多經第十般若理趣分　目次

般若理趣分……二八七

摩訶般若波羅蜜多心經　目次

摩訶般若波羅蜜多心經……三〇七

金光明最勝王經　目次

卷第一

序品第一……三〇九
如來壽量品第二……三一五

卷第二

分別三身品第三……三三一
夢見金鼓懺悔品第四……三四二

卷第三

滅業障品第五……三五五

卷第四

最淨地陀羅尼品第六……三七一

卷第五

蓮華喩讃品第七……三八七
金勝陀羅尼品第八……三九二
重顯空性品第九……三九四
依空滿願品第十……三九八

四天王觀察人天品第十一……四一六

卷第六

四天王護國品第十二……四一九

卷第七

無染著陀羅尼品第十三……四二八
如意寶珠品第十四……四三〇
大辯才天女品第十五之一……四三四

卷第八

大辯才天女品第十五之二……四四七
大吉祥天女品第十六……四五二
大吉祥天女增長財物品第十七……四五四
堅牢地神品第十八……四五七
僧愼爾耶藥叉大將品第十九……四六一
王法正論品第二十……四六四

卷第九

善生王品第二十一……四七四
諸天藥叉護持品第二十二……四七八
授記品第二十三……四八八
除病品第二十四……四九〇
長者子流水品第二十五……四九七

卷第十

捨身品第二十六……五〇五
十方菩薩讚歎品第二十七……五二三
妙幢菩薩讚歎品第二十八……五二四
菩提樹神讚歎品第二十九……五二五
大辯才天女讚歎品第三十……五二七
付囑品第三十一……五二八

摩訶般若波羅蜜經 第二

經典部
第四卷

摩訶般若波羅蜜經　卷第二十

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

【累教品】般若の體用と機の障、德とを三周廣說し、ここに般若道を付屬するなり。

【一】帝釋前品に諸說するところ正しきやと問ひ、佛これを印可し、須菩提の深空を示し更に行般若菩薩の勝れるを說く。

【四念處等】四念處等も空無相無作とし、この法中皆和合して畢竟空を說く。

累教品第六十六

(一)爾時、釋提桓因佛に白して言さく、『世尊、我れ是の如く說き是の如く答ふるを、法に隨順すと爲すや不や、正答と爲すや不や。』佛釋提桓因に告げて言はく、『憍尸迦、汝の說く所も實に皆隨順す。』釋提桓因言さく、『希有なり、世尊、須菩提の樂說する所皆是を空と爲し、無相と爲し無作と爲し、四念處と爲し、乃至阿耨多羅三藐三菩提と爲す。』佛釋提桓因に告げて言はく、『須菩提比丘の空を行ずる時、檀那波羅蜜得べからず、何に況んや檀那波羅蜜を行ずる者をや、乃至般若波羅蜜得べからず、何に況んや般若波羅蜜を行ずる者をや。四念處得べからず、何に況んや四念處を修する者をや、乃至八聖道分得べからず、何に況んや八聖道分を修する者をや。禪解脫三昧定得べからず何に況んや禪解脫三昧定を修する者をや。佛の十力得べからず、何に況んや佛の十力を修する者をや、四無所畏得べからず、何に況んや能く四無所畏を生ずる者をや、四無礙智得べからず、何に況んや四無礙智を生ずる者をや、大慈大悲得べからず、何に況んや大慈大悲を行ずる者をや、十八不

【須菩提比丘等】須菩提は畢竟空を行ずる人にして世世修集し、空解脫門を以て道に入る。又この門を以て衆生を教化し、深空法に入つて法を得ず、人を得ざるを說く。

【離行等】諸法實相に相應するなり。

【聲聞辟支佛の諸行等】二乘の所行は菩薩の如く慈悲心、度生心、淨佛土、無量佛法、轉法輪、無餘涅槃、三世度生なきを以て菩薩の般若行に劣る。

【二】、諸天散華供發す、諸比丘を以て佛に供養し最上行を行ぜんことを誓ひ、佛はその宿善と授記とを說く。

共法得べからず、何に況んや十八不共法を生ずる者をや。阿耨多羅三藐三菩提得べからず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得る者をや。一切智得べからず、何に況んや一切智を得る者をや。如來得べからず、何に況んや當に如來と作るべき者をや、無生法得べからず、何に況んや無生法を得て證を作す者をや。三十二相得べからず、何に況んや三十二相を得る者をや。八十隨形好得べからず、何に況んや八十隨形好を得る者をや。何を以ての故に。憍尸迦、須菩提比丘の一切法離行、一切法無所得行、一切法空行、一切法無想行、一切法無作行なればなり。憍尸迦、是を須菩提比丘の所行と爲す。菩薩摩訶薩の般若波羅蜜行に比せんと欲せば、百分して一にも及ばず、千分千萬億分乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。何を以ての故に。佛行を除きて是菩薩摩訶薩の行ずる般若波羅蜜は、聲聞辟支佛の諸行中に於て最尊最妙最上なればなり。是を以ての故に、菩薩摩訶薩、一切衆生の中に於て最上を得んと欲せば、當に是般若波羅蜜行を行ずべし。何を以ての故に。憍尸迦、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、能く佛法を具足し、一切種智を得、一切煩惱の習を斷じて作佛すべければなり。』

(三)是時會中、諸の三十三天、天の曼陀羅華を以て佛及び僧に散ず。是時、八百の比丘、座より起ちて華を以て佛に散じ、偏に右の肩を袒ぎ、合掌して右膝を地に著け佛に白して言さく、『世尊、我等は當に是無上の行を行ずべし、聲聞辟支佛の行ずること能はざる所なればなり。』爾時、佛は諸比丘の心行を知り、便ち微笑したまふ、諸佛の法の如く種種の色光青

【五色天華】五色天華もて佛を供養するが故に、世界中に常に五色の天華を雨らすなり。

【三】佛因みに般若行者の功德を讚歎す、今聞經するもの過去既に惡離に住せずして般若を得、後ち佛に面して無上果を得んと說き阿難に付囑す。

【人中等】三惡道中罪苦多く、欲界天の淨妙の五欲に著し、無色界無形、鬼神利根にして惱覆多し、故に專ら般若を行ずる能はず、能く苦樂意を制して般若を行じ得るは人中なり。

【兜率天上等】常に一生補處の菩薩ありて般若を聞く故行じ得。

黄赤白紅縹、口の中より出でて徧く三千大千世界を照し、佛を遶ること三匝にして還て頂より入る。爾時阿難偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、佛に白して言さく、『世尊、何の因緣もて微笑したまふや、諸佛は無因緣を以ては笑みたまはざればなり。』佛阿難に告げたまはく、『是八百の比丘は、星宿劫中に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、佛散華と名け、皆同一の字なり。比丘僧の國土、壽命、皆等しくして各十萬歳を過ぎ、出家し、作佛す。是時、諸の國土は常に五色の天華を雨らす。是を以ての故に、阿難、菩薩摩訶薩、最上の行を行ぜんと欲せば、應當に般若波羅蜜を行ずべし。』

(三)佛阿難に告げたまはく、『若し善男子善女人有りて、能く是深般若波羅蜜を行ぜば、當に知るべし、是菩薩人中に死して此間に生じ、若は兜率天上に死し來りて此間に生ず、若は人中、若は兜率天上に廣く是深般若波羅蜜を聞けばなりと。阿難、我れ是菩薩摩訶薩の能く是深般若波羅蜜を行ずるを見る。阿難、若し善男子善女人有りて、是深般若波羅蜜を聞き、受持し讀誦し、親近し正憶念し、轉た復般若波羅蜜を以て教へ菩薩道を行ずる者、當に知るべし、是菩薩は面り佛に從ひて深般若波羅蜜を聞き、乃至親近し、亦諸佛に從て善根を種ゑたりと。善男子善女人當に是念を作すべし、我等は聲聞に從ひて種うる所の善根に非ず、亦聲聞に從ひて聞く所の是深般若波羅蜜ならずと。阿難、若し善男子善女人有りて、是深般若波羅蜜を受持し、讀誦し親近し、義に隨ひ法に隨ひて行ぜば、當に知るべし、是善男子善女人は則ち面り佛を見たてまつると爲す。阿難、若し善男子善女人有

【諸佛の福田】佛に從つて善根を種うれば必ず三乘法を以て涅槃に入り虛ならず、法華中說の如しと雖も、又般若を要することを說くなり。

【我般若…囑累す】般若能く諸苦を救ひ衆生を利益するを以て以下慇懃に阿難に囑累するを明す。

りて、是深般若波羅蜜を聞き、信心清淨にして沮壞すべからざれば、當に知るべし、是善男子善女人は曾て佛に供養し、善根を種ゑ、善知識と相得たりと。阿難、諸佛の福田に於て善根を種うれば、虛誑ならず、要ず聲聞辟支佛を得、而して解脫を得と雖も、應當に深く了了六波羅蜜乃至一切種智を行ずべし。阿難、若し菩薩、深く了了六波羅蜜乃至一切種智を行ずるも、是人若し聲聞辟支佛道に住し、阿耨多羅三藐三菩提を得ずば、是處有ること無し。是故に阿難、我れ般若波羅蜜を以て汝に囑累す。阿難、汝若し一切法を受持するに、般若波羅蜜を除きては、若は忘れ、若は失ふも其過小小にして大罪有ること無し。阿難、汝深般若波羅蜜を受持して、若し一句を忘失せば、其過甚だ大なり。阿難、汝若し深般若波羅蜜を受持し、還て忘失せば其罪甚だ多し。是を以ての故に、阿難、汝に是深般若波羅蜜を囑累す。汝當に善く受持し讀誦して利せしむべし。阿難、若し善男子善女人有りて、般若波羅蜜を受持すれば、則ち過去未來現在の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を受持すと爲す。阿難、若し善男子善女人、現在我を供養し恭敬し、尊重し讚歎し、華香瓔珞擣香澤香、衣服幡蓋もてせんとせば、應に般若波羅蜜を受持し、讀誦し說き、親近し、供養し恭敬し、尊重し讚歎し、華香乃至幡蓋もてすべし。阿難、般若波羅蜜を供養すれば、則ち我を供養し、亦過去未來現在の佛を供養し已ると爲す。若し善男子善女人有りて、深般若波羅蜜を說くを聞き、信心清淨にして恭敬し愛樂すれば、則ち信心清淨にして過去未來現在の諸佛を恭敬し愛樂し已ると爲す。阿難、汝佛を愛樂して捨離せざれば、當に般

若波羅蜜を愛樂して捨離すること莫るべし。阿難、深般若波羅蜜は乃至一句も失せしむべからず。阿難、我れ囑累の因緣を說くこと甚だ多し、今は但だ略して說くのみ。我の世尊たるが如く、般若波羅蜜も亦是れ世尊なり。是を以ての故に、阿難、種種の因緣もて汝に般若波羅蜜を囑累す。阿難、今我れ一切世間の天人阿修羅中に於て汝に囑累す。諸の佛を捨てず、法を捨てず、僧を捨てず、過去未來現在の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を捨てざらんと欲する者は、愼で般若波羅蜜を捨つること莫れ。阿難、是れ我が弟子を教化する所の法なり。阿難、若し善男子善女人、深般若波羅蜜を受持し讀誦し說き正憶念し、復他人の爲に種種其義を廣說し開示し演暢し分明にし解し易からしめば、是善男子善女人は疾に阿耨多羅三藐三菩提を得、疾に薩婆若に近づく。何を以ての故に。般若波羅蜜中に諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を生ずればなり。阿難、過去未來の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は皆般若波羅蜜の中より生じ、今現在東方南方西方北方四維上下の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提も亦般若波羅蜜より生ず。是を以ての故に、阿難、諸の菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すれば、應に六波羅蜜を學すべし。何を以ての故に。阿難、六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の母にして諸菩薩を生ずるが故に。阿難、若し菩薩摩訶薩有りて是六波羅蜜を學せば、皆當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是を以ての故に、我れ六波羅蜜を以て倍復汝に囑累す。阿難、是六波羅蜜は、是れ諸佛の無盡の法藏なり。阿難、十方諸佛の現在の說法は皆六波羅蜜法藏中より出で、過去の諸佛も亦六波羅蜜中より學して、阿耨多羅三

【四】般若大乘の自度二乘法に優るを說き、付囑の所以を明す。

藐三菩提を得たり、未來の諸佛も亦六波羅蜜中より學して、阿耨多羅三藐三菩提を得べし、過去未來現在の諸佛の弟子も皆六波羅蜜中より學して滅度を得、已に得たり、今得、當に滅度を得べし。

(四)阿難、汝聲聞人の爲に法を說きて、三千大千世界の中の衆生をして皆阿羅漢果の證を得しむるとも、猶未だ我が弟子の事と爲さず。汝若し般若波羅蜜相應の一句義を以て菩薩摩訶薩に教ふれば、則ち我が弟子の事と爲す、我も亦歡喜す、三千大千世界の中の衆生に教へて阿羅漢を得しむるに勝る。復次に阿難、是三千大千世界の中の衆生、前ならず後ならず、一時に皆阿羅漢果の證を得、是諸の阿羅漢、布施の功德、持戒禪定の功德を行ぜば、是功德多きや不や。』阿難言さく『甚だ多し、世尊。』佛言はく『弟子の般若波羅蜜相應の法を以て、菩薩摩訶薩の爲に說くこと乃至一日する、其福の甚だ多きには如かず。一日を置きて但だ半日、半日を置きて但だ一食の頃、一食の頃を置きて但だ須臾の間說くとも、其福甚だ多し。何を以ての故に、菩薩摩訶薩の善根は一切の聲聞辟支佛に勝るが故に、菩薩摩訶薩は自ら阿耨多羅三藐三菩提を得、亦他人に示教し利喜して阿耨多羅三藐三菩提を得しめんと欲す。阿難、是の如く菩薩は六波羅蜜を行じ、四念處を行じ、乃至一切種智を行じ、善根を增益して、若し阿耨多羅三藐三菩提を得ざれば、是處有ること無し。是般若波羅蜜品を說く時、佛四衆の中に在り、天人龍鬼神緊那羅摩睺羅伽等、大衆の前に於て神足變化を現じ、一切の大衆皆阿閦佛の比丘僧に圍遶せられて大衆に說法したまふを見

【阿閦佛の弟子等】阿閦佛會の夢幻なる如く諸法も亦是の如し、般若も囑累も所著なきを示す。

る。譬へば大海水の如し。皆是阿羅漢、漏已に盡きて復煩惱無く、皆自在を得、俱解脫心解脫慧解脫を得て、其心の調柔なること譬へば大象の如し、所作已に辨じ、己利を逮得し、諸有結を盡して正智もて解脫を得、一切の心心數法の中に自在を得、及び諸の菩薩摩訶薩の無量の功德成就す。爾時、佛神足を攝めたまへば、一切大衆は復阿閦佛の聲聞人、菩薩摩訶薩及び其國土を見ず、眼と對を作さず。何を以ての故に。佛神足を攝めたまへるが故に。『爾時、佛阿難に告げたまはく、『是の如く阿難、一切の法は眼と對を作さず、法法相見ず、法法相知らず。是の如く阿難、阿閦佛の弟子、菩薩國土の眼と對を作さざるが如く、是の如く阿難、一切の法は眼と對を作さず、法法相見ず、法法相知らず。何を以ての故に。一切の法は知る無く見る無く、作す無く動ずる無く、捉ふべからず、思議すべからず、幻人の如く受無く覺無く眞實無ければなり。菩薩摩訶薩の是の如く行ずるを般若波羅蜜を行じ、亦諸法に著せずと爲す。阿難、菩薩摩訶薩の是の如く學するを般若波羅蜜を學することを爲すと名く。諸波羅蜜を得んと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。何を以ての故に。是の如く學するを名けて第一學、最上學、微妙學と爲せばなり。是の如く學して一切世間の護無き者を安樂にし、利益するを護を作すと爲す。是の如く學するは、是れ諸佛の學する所なり。諸佛は是學中に住して、能く右手を以て三千大千世界を擧げて還て本處に著け、是中の衆生覺知する者無し。何を以ての故に。阿難、諸佛は是般若波羅蜜を學して、過去未來現在の法中に無礙知見を得ればなり。阿難、般若波羅蜜は諸學中に於て最尊第一、最

【五】無量不可盡を以て般若を讚ず。

【名衆等】般若の義無量なるも名衆等言語章句卷數に量あり、故に囑累す。

【離】離の故に本來不生不集、又不盡不滅なり。

【覆面の舌相】世間相法舌能く鼻を覆へば是不妄語相なり、況んや面を覆ふをや。

妙無上なり。

(五)阿難、人有りて般若波羅蜜の邊際を得んと欲せば、虛空の邊際を得んと欲すと爲す。何を以ての故に。阿難、般若波羅蜜は量有ること無し。我れ初に般若波羅蜜の量を說かず、名衆、句衆、字衆、是れ量有るも、般若波羅蜜は量有ること無し。』阿難佛に白して言さく、『世尊、般若波羅蜜は何を以ての故に量有ること無きや。』佛阿難に告げたまはく、『般若波羅蜜は盡くる無きが故に量有ること無し、般若波羅蜜は離なるが故に量有ること無し。阿難、過去の諸佛は皆是般若波羅蜜を學して度を得。是般若波羅蜜、故に盡きず。未來世の諸佛も、亦是般若波羅蜜を學して度を得。是般若波羅蜜、故に盡きず。現在十方の諸佛も、皆是般若波羅蜜を學して度を得。是般若波羅蜜、故に盡きず。已に盡きず、今盡きず、當に盡きざるべし。阿難、般若波羅蜜を盡さんと欲せば、虛空を盡さんと欲すと爲す、般若波羅蜜は盡すべからず、已に盡きず、今盡きず、當に盡きざるべし。禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜は盡すべからず、已に盡きず、今盡きず、當に盡きざるべし。乃至一切種智も亦是の如し。何を以ての故に。是一切の法は皆無生なればなり。若し法無生なれば云何が盡くること有らんや。』爾時、佛覆面の舌相を出して阿難に告げたまはく、『今日より四衆の中に於て般若波羅蜜を廣演し、開示し、分別して、當に分明にして解し易からしむべし。何を以ての故に。是深般若波羅蜜の中に廣く諸法の相を說き、是中に聲聞辟支佛を求め、佛を求むる者は皆當に中に於て學し、學し已りて各々成就することを得ればなり。

【行者の足】この般若を得れば能く菩薩道を行ずるを喩ふ。

【無盡品】般若諸法の無盡甚深を説く。

【一】須菩提佛より般若諸相を聞き、初に畢竟空、中に嘱累を聞くも、佛後還た空を説きて、盡くるなきが如し、故に諸佛無上道の甚深を念じて無盡を問ふなり。ここに五蘊十二因縁等の無盡を明す。

【云何が般若を生ずべきや】般若は虚空の如くにして不可盡ならば、菩

阿難、是深般若波羅蜜は則ち是れ一切の字門なり。是深般若波羅蜜を行ぜば、能く陀羅尼門に入る、是陀羅尼を學して諸の菩薩は一切の樂說辯才を得。阿難、般若波羅蜜は是れ三世諸佛の妙法なり。是を以ての故に、阿難、我れ汝の爲に了了と說く。若し人有りて深般若波羅蜜を受持し、讀誦し親近せば、是人は則ち能く三世諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を持するなりと。阿難、我れ般若波羅蜜は是れ行者の足なりと說く。汝は是般若波羅蜜を持し、陀羅尼を得るが故に、則ち能く一切の諸法を持す。』

無盡品第六十七

(一)爾時、須菩提是念を作さく、「是諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は甚深なり、我れ當に佛に問ふべし」と、是念を作し已りて佛に白して言さく、『世尊、是般若波羅蜜は盡くべからざるや。』佛言はく、『虛空盡くべからざるが故に、般若波羅蜜は盡くべからず。』『世尊、云何が應に般若波羅蜜を生ずべきや。』佛言はく、『色盡くべからざるが故に、般若波羅蜜應に生ずべし。受想行識盡くべからざるが故に、般若波羅蜜應に生ずべし。檀那波羅蜜盡くべからざるが故に、般若波羅蜜應に生ずべし。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜盡くべからざるが故に、般若波羅蜜應に生ずべし。乃至一切種智盡くべからざるが故に般若波羅蜜應に生ずべし。復次に須菩提、癡は空にして盡くべからざるが故に、

薩云何が心中に能く生じ能く行じて果を得るや。

【色不可盡の故】色の初後中生不可得なるは般若の生にして色の眞相なれば色不可盡といふ。色生あれば必ず盡あるを以てなり。

【擬】無明なり、以下十二因緣法を明す、これに三種あり、一は凡夫肉眼所見の顚倒、我心に著し諸煩惱業を起し生死中に往來するもの、二は聖賢法眼を以て諸法を分別し、世間を厭うて出でんとする二乘及び未得忍菩薩の所觀、三は菩薩大人十二因緣の根本を究盡せんとするもの、得忍乃至成佛までの菩薩の所觀なり、今この深觀因緣を明す。

【諸邊の顚倒】邊とは斷常滅有無實

菩薩摩訶薩の般若波羅蜜應に生ずべし。行は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。識は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。名色は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。六處は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。六觸は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。受は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。愛は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。取は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。有は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。生は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。老死憂悲苦惱は空にして盡くべからざるが故に、菩薩の般若波羅蜜應に生ずべし。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜應に生ずべし。須菩提、是十二因緣、是れ獨り菩薩の法にして能く諸邊の顚倒を除く。道場に坐する時、應に是の如く觀じ、當に一切種智を得べし。須菩提、若し菩薩摩訶薩有りて、虛空不可盡の法を以て、般若波羅蜜を行じ、十二因緣を觀ぜば、聲聞辟支佛地に墮せずして、阿耨多羅三藐三菩提に住す。須菩提、若し菩薩道を求めて而して轉還する者は、皆般若波羅蜜の念を離るるが故に、是人は如何が般若波羅蜜を行じ、虛空不可盡の法を以て十二因緣を觀ずべきかを知らず。須菩提、若し菩薩道を求めて而して轉還する者は、皆是方便力を得ざるが故に、阿耨多羅三藐三菩提に於て轉還す。須菩提、若し菩薩摩訶薩阿耨多羅三

空世間有等、この一切定相差別に執するをいふ。
【墮せず】この深觀成ぜば退せず、若し深觀成ぜずば佛道を退し二乘となる。
【轉還】退墮するなり。
【法の因緣等】一法の定んで自在なるを說くものなり。
【法の常等】常因微塵世等を說くをいふ。
【法の我等】因緣生不自在なれば、我乃至知者見者なし。
【法の無常等】定相なく無所得なれば、無常無我の取るべきものなきをいふ。
【二】菩薩五觀を得る時諸魔愁憂することを明す。

藐三菩提に於て轉還せざる者は、皆是方便力を得るが故に、須菩提、菩薩摩訶薩は應に虛空不可盡の法を以て般若波羅蜜を觀じ、虛空不可盡の法を以て般若波羅蜜を生ずべし。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の十二因緣を觀ずる時、法の因緣無くして生ずるを見ず、法の常にして滅せざるを見ず、法の我、人、壽者、命者、衆生、乃至知者見者有るを見ず、法の無常なるを見ず、法の苦なるを見ず、法の寂滅非寂滅なるを見ず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、應に是の如く十二因緣を觀ずべし。須菩提、若し菩薩摩訶薩能く是の如く般若波羅蜜を行ぜば、是時、色の若は常若は無常、若は苦若は樂、若は我若は無我、若は寂滅若は非寂滅なるを見ず、受想行識も亦是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩は是時亦般若波羅蜜をも見ず、亦是法を以て般若波羅蜜を見ることを見ず。禪那波羅蜜乃至阿耨多羅三藐三菩提にも、亦阿耨多羅三藐三菩提をも見ず、亦是法を以て阿耨多羅三藐三菩提を見ることをも見ず。是の如く須菩提、一切法得べからざるが故に、是を般若波羅蜜に應ずる行と爲す。

〔二〕若し菩薩、無所得の般若波羅蜜を行ずる時、惡魔の愁毒すること箭の心に入るが如し、譬へば人新に父母を喪ふが如し。是の如く須菩提、是惡魔、菩薩の無所得般若波羅蜜を行ずるを見る時、便ち大に愁毒すること箭の心に入るが如し。「須菩提佛に白して言さく、「世尊、但だ一魔のみ愁毒するや、三千大千世界の中の魔も亦復愁毒するや。」佛須菩提に告げたまはく、「三千大千世界の中の諸の惡魔、皆愁毒すること箭の心に入るが如く、各共座

【菩薩有ゆる……廻向す】二種人あり軟根人は信力多く慧力少く取相して廻向す、利根は慧多く信少くしてこの取相を破して戯論す、この二人皆、六度を具足せず、信慧平等具足の故に六度を具するなり。

に於て自ら安んずること能はず。須菩提、菩薩摩訶薩能く是の如く般若波羅蜜を行ぜば、是時、一切世間の天及び人阿修羅其便を得て、其をして憂惱せしむること能はず。須菩提、是を以ての故に、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に是般若波羅蜜を行ずべし。菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足し修す。須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、諸波羅蜜を具足す。』須菩提佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、云何が檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足するや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は有らゆる布施を皆薩婆若に廻向す、是の如く須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、檀那波羅蜜を具足す。須菩提、菩薩摩訶薩は有らゆる持戒を皆薩婆若に廻向す、是を尸羅波羅蜜を具足すと爲す。菩薩摩訶薩は有らゆる忍辱を皆薩婆若に廻向す、是を羼提波羅蜜を具足すと爲す。菩薩摩訶薩は有らゆる精進を皆薩婆若に廻向す、是を毘梨耶波羅蜜を具足すと爲す。菩薩摩訶薩は有らゆる禪定を皆薩婆若に廻向す、是を禪那波羅蜜を具足すと爲す。菩薩摩訶薩は有らゆる智慧を皆薩婆若に廻向す、是を般若波羅蜜を具足すと爲す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、六波羅蜜を具足す。』

攝五品第六十八

【攝五品】菩薩一波羅蜜を行ずれば他の五波羅蜜を攝することを明す。

【一】布施に他の五波羅蜜を攝することを說く。

【慈】善業にして衆生を利益するのための故に名く。三慈業は不貪不瞋正見にして、能く三種身業四種口業を生ず。

【瞋】瞋の上なるは殺害、中は罵詈、下は心瞋るなり。

【一心】世間の禪定樂を求めず、涅槃樂を求めず、意を攝して一切種智中にあり。

(一)須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取るや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩の布施する時、是布施を以て薩婆若に廻向し、衆生の中に於て慈の身口意業に住す、是を菩薩の檀那波羅蜜に住して尸羅波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩は檀那波羅蜜に住して羼提波羅蜜を取るや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩の布施する時、受者瞋恚罵辱惡言もて之に加ふるも、是時、菩薩は忍辱して瞋恚の心を生ぜず。是を菩薩の檀那波羅蜜に住して、羼提波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩は、檀那波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩の布施する時、受者瞋恚罵辱惡言もて之に加ふるも、菩薩は布施の心を增益して是念を爲す、我れ應當に施して、惜む所有るべからざるべしと、卽時に身精進心精進を生ず。是を菩薩の檀那波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩の布施する時、薩婆若に廻向して聲聞辟支佛地に趣かず、但だ一心に薩婆若を念ずるのみ。是を菩薩の檀那波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜に住して般若波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩の布施する時、布施の空にして幻の如くなることを知

【布施の空】一切法有爲と觀ずれば布施も虚誑不堅固にして夢幻の如し。

【益あり益なし】諸法空の故に我の所與なく、若し果報を求むれば畢竟空の無上道を求むべし、布施相の如し、この故に益あるを見ず、畢竟空の故に亦益なきをも見ざるなり、即實相に入れば有利無利を分別せず、受者は恩分を求めず、施者は果報を求めざるなり。

【二二】戒に他の五波羅蜜を攝するを說く。

【尸羅の中に住し】戒を主とするは出家に就ていふ。欲界には持戒力を上となし、能く餘の布施聞思修慧等を成就するなり。

【聲聞等】菩薩に二種破戒あり、一には十不善道、二

り、衆生の爲に布施して益有り益無きことを見ず。是を菩薩の檀那波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取ると爲す。』

(三)須菩提佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜に住して、檀那波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を取るや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜の中に住し、身口意に布施の福德を生じて、阿耨多羅三藐三菩提を助く。是功德を以て聲聞辟支佛地を取らず、尸羅波羅蜜の中に住して他の命を奪はず。他の物を劫奪せず、邪婬を行ぜず、妄語せず、兩舌せず、惡口せず、綺語せず、貪嫉せず、瞋恚せず、邪見ならずして有らゆる布施す。饑うる者には食を與へ、渇する者には飲を與へ、乘を須むるには乘を與へ、衣を須むるには衣を與へ、香を須むるには香を與へ、瓔珞を須むるには瓔珞を與へ、塗香、臥具、房舍、燈燭、資生に須ふる所、盡く之を給與す。是布施を持て衆生と之を共にし阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の如く廻向せば聲聞辟支佛地に墮せず。須菩提、是を菩薩摩訶薩の尸羅波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜に住して、羼提波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩摩訶薩の尸羅波羅蜜の中に住するや。若は衆生有り、來りて節節支解するも、菩薩は是中に於て瞋恚の心、乃至一念をも生ぜずして、是言を作す。我れ大利を得、衆生來りて我が支節を取るも、我れ一念の瞋恚も無しと。是を菩薩の尸羅波羅蜜の中に住して、羼提波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜

には向二乘地なり、之に反するを二種持戒となす。【節節支解】肉身を割截す、人の自ら愛惜最も大なるものを擧げて他の財產眷屬等を攝す。【身精進】財物務力を供して厭はず、心精進は慳貪等の惡心に妨げられざるなり。【甘露地】不滅の解脫涅槃なり。【聲聞辟支佛を貪らず】煩惱動亂して戒を破らんとする時禪定樂を求めて五欲を制し、而も定に著せず無上道に進むを以て聲聞辟支佛を貪らざるなり。【數法】數量差別せるをいひ相法は相貌形狀の差別。【漚和拘舍羅力】方便力と譯す。【三】忍に他の五波羅蜜を攝することを明す、菩薩は忍を第一とす。

を取るや。』佛言はく、『若し菩薩摩訶薩、身精進心精進にして常に捨てざれば、是念を作さく、「一切の衆生は生死の中に在り、我れ當に拔きて甘露地に著かしむべし」と。是を菩薩の尸羅波羅蜜の中に住して、毘梨耶波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は初禪第二第三第四禪に入りて、聲聞辟支佛地を貪らさく、是念を作さく、「我れ當に禪那波羅蜜の中に住して、一切の衆生を生死より度すべし」と。是を菩薩の尸羅波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は尸羅波羅蜜の中に住して、法の若は作法若は無作法、若は數法若は相法、若は有若は無として見るべきもの有ること無く、但だ諸法の如相に過ぎざるを見るのみ、般若波羅蜜漚和拘舍羅力を以ての故に、聲聞辟支佛地に墮せず。是を菩薩の尸羅波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取ると爲す。』

(三)須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は羼提波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩初發心より乃至道場まで、其中間に於て、若は一切衆生來りて瞋恚し罵詈し、若は節節支解するも、菩薩は忍辱に住して是念を作さく、「我れ應に一切の衆生に布施すべし、是衆生に與へざるべからず、食を須むるには食を與へ、飮を須むるには飮を與へ、乃至資生に須ふる所盡く皆之を與ふ。是功德を持て、一切の衆生と之を共にし阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是菩薩、廻向する時に二心を生ぜず、誰か廻向する者

【一心】廻向者と廻向處との分別。

【三種の心】無人、無法、無廻向處なり。

【乃至一人等】一世界を過ぐるも一人を解脱せしめず、僅かに五戒を持せしむるのみなるも愁憂せず、一人相一切人相なればなり。

【離生喜樂】欲界の欲惡を離れて明了なる覺觀を得、身心靜かにして喜樂を生ず。

【淨心心數法】禪定中所得の慈悲等の諸清淨心。

ぞ、何處に廻向す」と。是を菩薩の羼提波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は羼提波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩初發心より乃至道場まで其中間に於て、終に他の命を奪はず、與へざるを取らず、乃至邪見ならず、聲聞辟支佛地を貪らず、是功徳を持て、一切の衆生と之を共にし阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是菩薩、廻向する時に三種の心生ぜず、誰か阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、何法を以て廻向し、何處に廻向すと。是を菩薩の羼提波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は羼提波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は羼提波羅蜜に住して精進を生じ、是念を作す。我れ當に一由旬、若は十由旬、百千萬億由旬を往き、一國土を過ぎ、乃至百千萬億の國土を過ぎ乃至一人に教へて五戒をも持せしむべし、何に況んや須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を得しむるをや。是功徳を持て一切の衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩の羼提波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は羼提波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は羼提波羅蜜に住して欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀離生喜樂初禪に入り、乃至第四禪に入る。是諸禪の中の淨心心數法もて皆薩婆若に廻向す、廻向する時、是菩薩、諸禪及び禪支皆得べからず。是を菩薩の羼提波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は羼提波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は羼提波羅蜜に住して、諸法若

【禪支】禪の支分。
【住して】忍の故に惡を加へらるるも慈悲を行ひ、福德を得るが故に、心柔軟にして法忍を得易きをいふ。
【證をなさず】空寂滅に安住して解脱をなさず。
【四】精進に住して他の五波羅蜜を攝することを明す。精進別に體なく、五波羅蜜を勸めて休息せざるなり。
【自ら殺生せず等】十善各四ありて四十種善道といふ。

は離相、若くば寂滅相、若は無盡相を觀じ、寂滅相を以て證を作さず、乃至道場に坐し、一切種智を得、道場より起て便ち法輪を轉ず。是を菩薩の羼提波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取ると爲す、取らず捨てざるが故に。』

(四)須菩提佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取るや。』佛須菩提に告げたまはく『菩薩は毘梨耶波羅蜜に住し身心精進して懈らず息まず、是念を作さく、「我れ必ず應に當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし得ざるべからず」と。是菩薩は衆生を利益することを爲すが故に、一由旬若は百千萬億由旬を往き、若は一國土を過ぎ、若は百千萬億の國土を過ぎて、毘梨耶波羅蜜の中に住し、若し一人に敎へて佛道中、若は聲聞道中、若は辟支佛道中に入らしむることを得ざるも、或は一人に敎へて十善道を行ぜしむることを得ば、精進して懈らず、是法施を作し及び財施を以て具足せしむ。是功德を持て衆生と之を共にし阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、聲聞辟支佛地に廻向せず。是を菩薩の毘梨耶波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は毘梨耶波羅蜜に住し、初發意より乃至道場に坐するまで、自ら殺生せず、他を敎へて殺さしめず、不殺生の法を讃じ、不殺生の者を歡喜し讃歎す、乃至自ら邪見を遠離し、他を敎へて邪見を遠離せしめ、不邪見の法を讃じ、不邪見の者を歡喜し讃歎す。是菩薩は尸羅波羅蜜を行ずる因緣もて、欲界色界無色界の福を求めず、聲聞辟支佛地を求めず。是功德を持て、衆生と之を共にし

「我を割く者は誰ぞ」割者なく、割かるる者なしと念ずるなり。

阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。三種の心を生ぜず、廻向の者を見ず、廻向の法を見ず、廻向の處を見ず。是を菩薩の毘梨耶波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は、毘梨耶波羅蜜に住して、羼提波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は毘梨耶波羅蜜に住し、初發意より乃至道場に坐するまで、其中間に於て、若は人、若は非人來りて節節支解するも、菩薩は是念を作さく「我を割く者は誰ぞ、我を截る者は誰ぞ、我を奪ふ者は誰ぞ」と。復是念を作さく「我れ大に善利を得、我れ衆生の爲の故に身を受く、衆生還て自ら來り取る」と。是時、菩薩は正しく諸法の實相を憶念す。是功德を持て衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、聲聞辟支佛地に廻向せず。是を菩薩の毘梨耶波羅蜜に住して、羼提波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は毘梨耶波羅蜜に住して欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪第二第三第四禪に入り、慈悲喜捨に入り、乃至非有想非無想處に入り、是禪無量無色定を持て果報を受けずして、衆生を利益するの處に生じ、六波羅蜜を以て衆生を成就す、謂ゆる檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜なり。一佛國より一佛國に至りて、諸佛に親近し供養し、善根を種うるが故に、是を菩薩の毘梨耶波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は毘梨耶波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は毘梨耶波羅蜜に住して、檀那波羅蜜の法を見ず、檀那波羅蜜の相を見ず、乃至禪那波羅蜜の法を見ず、禪那波羅蜜の相を見ず、四念

處乃至一切種智も亦法を見ず、亦相を見ず、一切法の非法非非法を見て、法の中に於て著する所無し。是菩薩の所作、所言の如し。是を菩薩の毘梨耶波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取ると爲す。」

【五】禪に住して五度を攝するを明す。

(五)須菩提佛に白して言さく「世尊、云何が菩薩摩訶薩は禪那波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取るや。」佛言はく「菩薩摩訶薩は禪那波羅蜜に住して諸欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪第二第三第四禪に入り、慈悲喜捨乃至非有想非無想處に入り、禪那波羅蜜の中に住して心亂れず二施を行じ、以て衆生に法施財施を施す、自ら二施を行じ、他を教へて二施を行ぜしめ、二施の法を讃歎し、二施を行ずる者を歡喜し讃歎す。是功徳を持て衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、聲聞辟支佛地に向はず。是を菩薩の禪那波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取ると爲す。」「世尊、云何が菩薩摩訶薩は禪那波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取るや。」佛言はく「菩薩は禪那波羅蜜に住して、婬欲瞋恚愚癡の心を生ぜず、他を惱ます心を生ぜず、但だ一切智相應の心を修行するのみ。是功徳を持てし、衆生と之を共にし阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、聲聞辟支佛地に向はず。是を菩薩の禪那波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取ると爲す。」「世尊、云何が菩薩摩訶薩は禪那波羅蜜に住して、羼提波羅蜜を取るや。」佛言はく「菩薩は禪那波羅蜜に住し、色を觀ること聚沫の如く、受を觀ること泡の如く、想を觀ること野馬の如く、行を觀ること芭蕉の如く、識を觀ること幻の如し。是觀を作す時、五陰の堅固相無きことを見て、是念

【聚沫等】不堅固を喩ふ。

【有佛無佛】法相は佛の出沒に依りて增減せず。

を作さく「我を割く者は誰ぞ、我を截る者は誰ぞ、誰か受し、誰か想し、誰か行じ、誰か識し、誰か罵る者ぞ、誰か罵を受くる者ぞ、誰か瞋恚を生ず」と。是を菩薩の禪那波羅蜜に住して、羼提波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は禪那波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は禪那波羅蜜に住して欲を離れ惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪第二第三第四禪に入る。是の諸くの禪及び支、相を取らず、種種の神通を生じ、水を履むこと地の如く、地に入ること水の如し、先に說けるが如し。天耳は二種の聲、若は天若は人を聞き、他心の若は攝心、若は亂心乃至有上心無上心なるを知り、種種の宿命を憶すること先に說けるが如し。天眼淨を以て人眼を過ぎて衆生の乃至業の如く報を受くるを見ること先に說くが如し。菩薩は是五神通に住して一佛國より一佛國に至り、諸佛に親近し供養して善根を種ゑ、衆生を成就して佛國土を淨む。是功德を持て衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩の禪那波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は禪那波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は禪那波羅蜜に住して、色を得ず、受想行識を得ず、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜を得ず、般若波羅蜜を得ず、四念處を得ず、乃至一切種智を得ず、諸法の有爲性を得ず、諸法の無爲性を得ず、得ざるが故に作さず、作さざるが故に生ぜず、生ぜざるが故に滅せざるなり。何を以ての故に。有佛無佛、是如、法相、法性常住にして不生不滅、常に一心に薩婆若に應じて行ず。是を菩

【六】慧によりて他の五波羅蜜を攝することを明す。

【十四空】空を説く六空、十二、十四、十八等所執の多少に隨ふのみ。

【慳著の心なし】佛は諸煩惱習を斷ずる故慳著なく、菩薩は般若力を以て制して貪著を起らしめず。

薩の禪那波羅蜜に住して、般若波羅蜜を取ると爲す。』

(六)須菩提佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取るや。』佛言はく『菩薩は般若波羅蜜に住し、内空の内空得べからず、外空の外空得べからず、内外空の内外空得べからず、空空の空空得べからず、乃至一切法空の一切法空得べからず。菩薩は是十四空の中に住して色相の若は空若は不空なるを得ず、受想行識相の若は空若は不空なるを得ず、四念處の若は空若は不空なるを得ず、乃至阿耨多羅三藐三菩提の若は空若は不空なるを得ず、有爲性無爲性の若は空若は不空なるを得ず。是菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜の中に住し、有らゆる布施をなす、若は飲食衣服、種種資生の具もてし、是布施の空なることを觀ず。何等か空なる、施者、受者、及び財物空にして慳著の心をして生ぜしめず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、初發意より乃至道場に坐するまで、妄想分別すること有ること無く、諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ時に慳著の心無きが如く、菩薩摩訶薩も亦是の如く般若波羅蜜を行ずる時に、慳著の心無し。是菩薩の尊ぶべき所の者は般若波羅蜜是なり。是を菩薩の般若波羅蜜に住して、檀那波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取るや。』佛言はく『菩薩は般若波羅蜜に住して、聲聞辟支佛の心を生ぜず。何を以ての故に。是菩薩、聲聞辟支佛地得べからず、聲聞辟支佛に趣向する心も亦得べからざればなり。是菩薩摩訶薩は初發意より乃至道場に坐するまで、其中間に於て、自ら殺生せず、

【隨順法忍】法空を觀じて法愛尙存するを柔順忍とす、柔順忍中衆生不可得なるを衆生忍といひ、法不可得なるを法忍といふ。隨忍の義同じ。

他を敎へて殺さしめず、不殺の法を讃じ、不殺生の者を歡喜し讃歎す。乃至自ら邪見ならず、他を敎へて邪見ならしめず、不邪見の法を讃歎し、不邪見の者を歡喜し讃歎す。是持戒の因緣を以て、法の若は聲聞、若は辟支佛地として取るべき無し、何に況んや餘法をや。是を菩薩の般若波羅蜜に住して、尸羅波羅蜜を取ると爲す。」『世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜に住して、羼提波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は般若波羅蜜に住し隨順法忍を生じ、是念を作さく「諸法の中に法の若は起り若は滅し、若は生じ若は死し、若は罵詈を受け若は惡口を受け、若は割かれ若は截られ、若は破られ若は縛られ、若は打たれ若は殺さるるもの有ること無し」と。是菩薩は初發意より乃至道場に坐するまで、若し一切衆生來りて罵詈し惡口し、刀杖瓦石もて割截し傷害するも、心動かされずして是念を作さく「甚だ怪むべし、此法の中に法の罵詈惡口割截傷害を受くる者有ること無し、而も衆生は是苦惱を受く」と。是を菩薩の般若波羅蜜に住して、羼提波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜を取るや。』佛言はく、『菩薩は般若波羅蜜に住して、衆生の爲に法を說き、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行ぜしめ、敎へて四念處乃至八聖道分を行ぜしめ、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を得しめ、阿耨多羅三藐三菩提を得しめ、有爲性の中に住せず、無爲性の中に住せざる、是を菩薩の般若波羅蜜に住して、毘梨耶波羅蜜を取ると爲す。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取るや。』佛言はく、

【逆順出入】一背捨を出でて二背捨に入る、乃至滅受想定に入るは順なり、滅受想定を出でて非有想非無想定に入り初背捨に至るは逆なり。逆順出入するは定自在なり。

【淨背捨身等】内外清淨の色解脱を身に成就するなり。

【滅受想定】心心所都滅の定境。

【師子奮迅三昧】師子の奮迅して自在なる如く、智慧力の故に諸法に自在を得るなり。

【超越三昧】諸地を超過して自在に出入する三昧。聲聞は一定を超ゆるのみ、諸佛菩薩のみ能くこの定を得。

『菩薩は般若波羅蜜に住し、諸佛の三昧を除きて餘の一切の三昧、若は聲聞の三昧、若は辟支佛の三昧、若は菩薩の三昧に入り、皆行じ皆入る。是の菩薩は諸三昧に住して八背捨に逆順出入す。何等をか八とす、内色相有りて外色を觀ずる是れ初背捨なり、内色相無く外色を觀ずる二背捨なり、淨背捨身に證を作す三背捨なり、一切の色相を過ぎ有對相を滅し種種相を念ぜざるが故に無量虚空處に入る四背捨なり、一切の虚空處を過ぎて無邊識處に入る五背捨なり、一切の識處を過ぎて無所有處に入る六背捨なり、一切の無所有處を過ぎて非有想非無想處に入る七背捨なり、一切の非有想非無想處を過ぎて滅受想定に入る八背捨なり。是の八背捨に於て九次第定に逆順出入す。何等をか九とす、諸欲を離れ、諸惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪に入り、乃至非有想非無想處を過ぎて滅受想定に入る、是を九次第定逆順出入と名く。是の菩薩は八背捨九次第定に依りて、師子奮迅三昧に入る。云何が師子奮迅三昧と名くるや。須菩提、菩薩は欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪に入り、乃至滅受想定に入り、滅受想定より起ちて還て非有想非無想處に入り、非有想非無想處より起ち、乃至還て初禪に入る。是の菩薩は師子奮迅三昧に依て超越三昧に入る。云何が超越三昧と爲す。須菩提、菩薩は欲を離れ、諸惡不善法を離れ、有覺有觀、離生喜樂、初禪に入り、初禪より起ちて乃至非有想非無想處に入り、非有想非無想處より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて還て初禪に入る。初禪より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて二禪に入る。二禪より起ちて滅受想定に入り、

滅受想定より起ちて三禪に入る。三禪より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて四禪に入る。四禪より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて空處に入る。空處より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて識處に入る。識處より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて無所有處に入る。無所有處より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて非有想非無想處に入る。非有想非無想處より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて散心の中に入る。散心の中より起ちて滅受想定に入り、滅受想定より起ちて還つて散心の中に入る、散心の中より起ちて非有想非無想處に入り、非有想非無想處より起ちて還て散心の中に住す。散心の中より起ちて無所有處に入り、無所有處より起ちて散心の中に住す。散心の中より起ちて識處に入り、識處より起ちて散心の中に住す。散心の中より起ちて空處に入り、空處より起ちて散心の中に住す。散心の中より起ちて第四禪の中に入り、第四禪の中より起ちて散心の中に住す、散心の中より起ちて第三禪の中に入り、第三禪の中より起ちて散心の中に住す。散心の中より起ちて第二禪の中に入り、第二禪の中より起ちて散心の中に住す、散心の中より起ちて初禪の中に入り、初禪の中より起ちて散心の中に住す。是菩薩摩訶薩は超越三昧に住して、諸法の等相を得。是を菩薩の般若波羅蜜に住して、禪那波羅蜜を取ると爲す。』

【方便品】一波羅蜜に他五波羅蜜を攝する方便力成就の人は、發意已來無量劫を經般若を護持することを明す。【一】菩薩利根にして一波羅蜜邊に能く五波羅蜜を具する方便力の成就せる過去前緣を明し、般若の導御たるを說く。【善根】深心を以て六度を行じ無上道の爲の故に功德をなすを善根を種うといふ。

摩訶般若波羅蜜經　卷第二十一

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

方便品第六十九

（一）爾時、須菩提佛に白して言さく、『世尊、是菩薩摩訶薩、是の如きの方便力成就する者、發意して以來幾の時なるや。』佛須菩提に告げたまはく、『是菩薩摩訶薩、能く方便力を成就する者、發意して以來無量億阿僧祇劫なり。』須菩提言さく、『世尊、是菩薩摩訶薩、是の如きの方便力を成就する者、幾の佛にか供養することを爲す。』佛言はく、『是菩薩方便力を成就する者、如恆河沙等の諸佛を供養す。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩是の如きの方便力を得る者、何等の善根を種うるや。』佛言はく、『菩薩是の如きの方便力を成就する者、初發意より以來、檀那波羅蜜に於て具足せずと云ふこと無く、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜に於て具足せずと云ふこと無し。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩是の如きの方便力を成就する者は甚だ希有なり。』佛言はく、『是の如く是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩是の如き方便力を成就する者は甚だ希有なり。須菩提、譬へば日月周行して四天下を照し、多く益する所有るが如し。般若波羅蜜も

【輪寶】諸王に千子八萬四千小王及び六寶あるも金輪寶有るに非れば轉輪聖王とせず。

【菩薩旃陀羅】魔來りてその名字を稱し、授記を與ふとききて輕慢を生ずる者をいふ。

亦是の如く、五波羅蜜を照して多く益する所有り。須菩提、譬へば轉輪聖王の如し、若し輪寶無ければ名けて轉輪聖王と爲すことを得ず、輪寶成就するが故に轉輪聖王と名くることを得。五波羅蜜も亦是の如く、若し般若波羅蜜を離るれば波羅蜜の名字を得ず、般若波羅蜜を離れざるが故に波羅蜜の名字を得。須菩提、譬へば無夫の婦は人侵凌す可きこと易きが如し、五波羅蜜も亦是の如く、般若波羅蜜を遠離せば、魔若くば魔天之を壞すること則ち易し。譬へば有夫の婦は人侵凌すべきこと難きが如し、五波羅蜜も亦是の如く、般若波羅蜜を得れば、魔若くば魔天沮壞すること能はず。須菩提、譬へば軍將の鎧仗具足せば、隣國彊敵壞する能はざる所の如し。五波羅蜜も亦是の如く、般若波羅蜜を遠離せざれば、魔若くは魔天、若は增上慢人乃至菩薩旃陀羅の壞する能はざる所なり。須菩提、譬へば諸の小國王の隨時に朝し轉輪聖王に侍するが如し、五波羅蜜も亦復是の如く、般若波羅蜜に隨順す。譬へば衆川萬流皆恆河に入り大海に隨入するが如く、五波羅蜜も亦是の如く、般若波羅蜜の守護する所となる、故に薩婆若に隨到す。譬へば人の右手作す所、事便なるが如く、般若波羅蜜も亦是の如く、人の左手事を造るに不便なるが如く、五波羅蜜も亦是の如し。譬へば衆流の若は大若は小、倶に大海に入り合して一味となるが如し、五波羅蜜も亦是の如く、般若波羅蜜の護る所と爲り、般若波羅蜜に隨ひて、薩婆若に入り、波羅蜜の名字を得。譬へば轉輪聖王の四種兵の輪寶前に在りて導き、王意に住らんと欲せば、輪則ち住ることを爲し、四種兵をして、其所願を滿さしめ、輪も亦其處を離れざるが如く、般

【二】諸法空にして方便力の故に六度を行ずることを明す。

【方便力】金色身三十二相八十隨形好無量光明神通變化十力四無所畏十八不共法一切種智大慈大悲等。

若波羅蜜も亦是の如く、五波羅蜜を導きて、薩婆若に到り、常に是中に住し、其處を過ぎず。譬へば轉輪聖王の四種兵の輪寶前に在りて導くが如く、般若波羅蜜も亦是の如く、五波羅蜜を導き、薩婆若に到り、般若波羅蜜に住し、亦分別せず、檀那波羅蜜我に隨從し、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、我に隨はず、檀那波羅蜜も亦分別せず、我れ般若波羅蜜に隨從す、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜に隨從せず、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜も亦是の如し。何を以ての故に。諸波羅蜜性能く作す所無く、自性空、虛誑野馬の如くなればなり。』

（二）爾時、須菩提佛に白して言さく『世尊、若し一切法、自性空なれば、云何が菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行じ、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきや。』佛須菩提に告げたまはく『菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行ずる時、是念を作さく、「是世間心皆顚倒す、我れ若し方便力を行ぜざれば、衆生を生死より度脫すること能はず、我れ當に衆生の爲の故に、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行ずべし」と。是菩薩は衆生の爲の故に內外物を捨て捨つる時是念を作さく、「我れ捨つる所無し」と。何を以ての故に。是物、必ず當に壞敗すべし、菩薩は是の如きの思惟を作し、能く檀那波羅蜜を具し、衆生の爲の故に。終に破戒せず。何を以ての故に。菩薩是念を作さく、「我れ衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を發す、若し殺生せば是れ應ぜざる所なり、乃至我れ衆生の爲の故に阿耨多羅三藐三菩提を發す、若し邪見を作し、若し聲聞辟支佛地に貪著せば、是れ應ぜざる所なり」

【三】諸波羅蜜差別なくして般若第一最妙法なる所以を說く。

と。菩薩摩訶薩は是の如く思惟して、能く尸羅波羅蜜を具足す。菩薩は衆生の爲の故に瞋心せず、乃至一念を生ぜず。菩薩是の如く思惟す「我れ應に衆生を利益すべし、云何が而も瞋心を起すや」と。菩薩は是の如く能く羼提波羅蜜を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、常に懈怠心を生ぜず、菩薩は是の如く行じて能く毘梨耶波羅蜜を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、散亂心を生ぜず、菩薩は是の如く行じて能く禪那波羅蜜を具足す。菩薩は衆生の爲の故に、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に智慧を離れず。何を以ての故に、智慧を除きて、餘法を以て衆生を度脫すべからざるが故に、菩薩は是の如く行じて能く般若波羅蜜を具足す。」

(三)須菩提佛に白して言さく「世尊、若し諸波羅蜜差別相無ければ、云何が般若波羅蜜、五波羅蜜中に於て、第一最上微妙なるや。」佛須菩提に告げたまはく「是の如く是の如し、諸波羅蜜差別無しと雖も、若し般若波羅蜜無ければ、五波羅蜜は波羅蜜の名字を得ず、般若波羅蜜に因て、五波羅蜜は波羅蜜の名字を得。須菩提、譬へば、種種の色の身、須彌山王の邊に到れば、皆同一色なるが如し。五波羅蜜も亦是の如く、般若波羅蜜に因て、薩婆若中に到れば、一種にして異ること無く、是は檀那波羅蜜、是は尸羅波羅蜜、是は羼提波羅蜜、是は毘梨耶波羅蜜、是は禪那波羅蜜、是は般若波羅蜜なりと分別せず。何を以ての故に、是諸波羅蜜は自性無きが故に。是因緣を以ての故に、諸波羅蜜差別無し。」須菩提、佛に白して言さく「世尊、若し實義に隨へば、分別無し、云何が般若波羅蜜、五波羅蜜の中に

【玉女寶】 七寶の第一。

【四】俗諦に差別して般若を第一とする意を明し、不取不念の般若行を述ぶ。

【薩婆若の中に至りて等】諸善法和合して能く煩惱を破して無上道を得と雖も、中に般若の力なくば薩婆若に至ることを得ず。

【不取不捨】一切法は因緣生にして自性無なるが故に取らず、取らざるが故に捨せず、憶念を以て取相せざるの故なり。

に於て、最上微妙なるや。』佛言はく、『是の如く是の如し、須菩提、實義の中、分別有ること無しと雖も、但だ世俗の法のみを以ての故に、假に檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を說き、衆生を生死より度せんと欲する事を爲す。是れ衆生實には生ぜず、死せず、起らず、退せず。須菩提、衆生所有無きが故に、當に知るべし、一切法所有無し。是因緣を以ての故に、般若波羅蜜は五波羅蜜の中に於て、最上最妙なりと。須菩提、譬へば閻浮提の衆女人中、玉女寶の第一最上最妙なるが如く、般若波羅蜜も亦是の如く、五波羅蜜の中に於て、第一最上最妙なり。』

(四)須菩提佛に白して言さく、『世尊、佛何の意を以ての故に、般若波羅蜜は最上微妙なりと說くや。』佛須菩提に告げたまはく、『是般若波羅蜜は、一切の善法を取て薩婆若の中に到りて、不住に住するが故に。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、般若波羅蜜は法の取るべく、捨つべき有りや不や。』佛言はく、『不、須菩提、般若波羅蜜は法の取るべき無く、法の捨つ可き無し。何を以ての故に、一切の法、不取不捨の故に。』『世尊、般若波羅蜜は何等の法に於て、不取不捨なるや。』佛言はく、『般若波羅蜜は色に於て不取不捨、受想行識、乃至、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不取不捨なり。』『世尊、云何が色を取らず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を取らざるや。』佛言はく、『若し菩薩、色を念ぜず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざれば、是を色を取らず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を取らずと名く。』須菩提言さく、『世尊、若し色を念ぜず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざれば、云何が善根

を增益することを得るや。善根增せざれば、云何が諸波羅蜜を具足するや、若し諸波羅蜜を具足せざれば、云何が阿耨多羅三藐三菩提を得るや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し菩薩、色を念ぜず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざれば、是時善根增益す。善根增益するが故に、諸波羅蜜を具足す。諸波羅蜜具足するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。何を以ての故に。色を念ぜず、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざる時、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。」『世尊、何の因緣の故に、色を念ぜざる時、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を念ぜざる時、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得るや。』佛言はく、『念を以ての故に、欲界、色界、無色界に著す、念ぜざるが故に、所著無し。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、應に所著有るべからず。』『世尊、菩薩摩訶薩、是の如く般若波羅蜜を行ずれば、當に何處に住すべきや。』佛言はく、『菩薩摩訶薩、是の如く行ずれば、色に住せず、乃至、一切種智に住せず。』『世尊、何の因緣の故に、色中に住せず、乃至、一切種智中に住せざるや。』佛言はく、『不著の故に住せず。何を以ての故に。是菩薩は、法の著すべく、住す可き有るを見ざればなり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は不著不住法を以て、般若波羅蜜を行ず。須菩提、若し菩薩摩訶薩、是念を作さく、「若し能く是の如く行じ、是の如く修す、是れ般若波羅蜜を行ずるなり。我れ今般若波羅蜜を行じ、般若波羅蜜を修す」と。若し是の如く相を取らば、即ち般若波羅蜜を遠離す。若し般若波羅蜜を遠離せば、則ち檀那波羅蜜を遠離し、乃至一切種智を遠離す。何を以ての故に、般若波羅蜜は著する處有ること

【五】自相を離れて行成ずべきやを辨じて、諸法不生これ能く般若を行ずることを說く。

無く、亦著する者無く、自性無きが故に。菩薩摩訶薩、若し復是の如く相を取らば、則ち般若波羅蜜に於て退し、若し般若波羅蜜を退せば、則ち是れ阿耨多羅三藐三菩提を退するなり、受記を得ず。菩薩摩訶薩、復是念を作さく、「是般若波羅蜜に住し、能く檀那波羅蜜を生じ、乃至、能く大悲を生ず」と。若し是念を作さば、則ち般若波羅蜜を失ふ事を爲す。般若波羅蜜を失ふ者は、則ち檀那波羅蜜を生ずること能はず、乃至、大悲を生ずること能はず。菩薩若し復是念を作さく、「諸佛は諸法の受想無きを知るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と。菩薩若し是の如きの演說、開示、教詔を作さば、則ち般若波羅蜜を失ふ。何を以ての故に。諸佛は諸法に於て、知る所無く、得る所無く、亦法の說くべき無ければなり、何に況んや、所得有るべけんや、是處有ること無し。」須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩の般若波羅蜜を行ずる、云何が是過失無きや。』佛言はく、『若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行じ、是念を作さく、「諸法所有無く、取るべからず。若し法所有無く取るべからざれば、則ち所得無し」と。若し是の如く行ずれば、般若波羅蜜を行ずと爲す。若し菩薩摩訶薩、無所有法に著すれば、則ち般若波羅蜜を遠離す。何を以ての故に。般若波羅蜜中、著法有ること無きが故に。』

(五)須菩提佛に白して言さく『世尊、般若波羅蜜は般若波羅蜜を遠離するや、檀那波羅蜜は檀那波羅蜜を遠離するや、乃至、一切種智は一切種智を遠離するや。世尊、若し般若波羅蜜は般若波羅蜜を遠離し、乃至、一切種智は一切種智を遠離すれば、菩薩は云何が般若波

【是れ色等】是れ色は色を破し、誰の色は人を破すなり。

【駕駟等】馬は車を致す力あるも御者無ければ所至なし、布施等亦般若の調御なくして佛道に至る能はず。

【菩薩道に非ず】今二乘をいふも、凡夫及諸煩惱、亦菩薩道に非ず、但だ麁の故に說かず。

羅蜜を得、乃至、一切種智を得るや。」佛言はく「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、色を生ぜず。是れ色誰の色なりと。乃至、一切種智を生ぜず、是れ一切種智、誰の一切種智なりと。是の如きの菩薩、能く般若波羅蜜を生じ、乃至能く一切種智を生ず。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、色若は常、若は無常、若は苦、若は樂、若は我、若は非我、若は空、若は不空、若は離、若は非離を觀ぜず。何を以ての故に。自性自性を生ずる能はざればなり。乃至、一切種智も亦是の如し。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、是の如く色を觀じ、乃至、一切種智を觀じて、能く般若波羅蜜を生じ、乃至能く一切種智を生ず、譬へば轉輪聖王所至の處、四種の兵有りて、皆隨從するが如く、般若波羅蜜も亦是の如く、所至の處、五波羅蜜ありて、皆悉く隨從し、薩婆若中に到て住す。譬へば善く駕駟を御し、平道を失せざれば、意の至る所に隨ふが如く、般若波羅蜜も亦是の如く、五波羅蜜を御し、正道を失せざれば、薩婆若に至る。」須菩提言さく「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の道、何等か是れ非道なるや。」佛言はく「聲聞道は菩薩道に非ず、辟支佛道は菩薩道に非ず、一切智道、是れ菩薩摩訶薩の道なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の道非道と名く。」須菩提言さく「世尊、諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜は、大事の爲の故に起る、謂ゆる是れ道、是れ非道なりと示す。」佛言はく「是の如く是の如し、須菩提、般若波羅蜜は大事の爲の故に興る、謂ゆる是れ道、是れ非道なりと示す。須菩提、是般若波羅蜜は無量の衆生を度せんが爲の故に興り、阿僧祇の衆生を利益せんが爲の故に興る。般若

【一八】般若所生なく空なるは六度を行ずるに妨なきを明す。

【一九世尊、云何が菩薩等】以下六度の修行を明す。

【合せず散せず】色等顛倒煩惱和合の故に合し正慧を以て觀ずるが故に散ず、菩薩利智慧を以て深く觀ずれば、則ち合なく散なし。

波羅蜜は是利益を作すと雖も、亦色を受けず、亦受想行識を受けず。須菩提、般若波羅蜜は是れ諸菩薩摩訶薩に阿耨多羅三藐三菩提を導示し、能く聲聞辟支佛地を遠離し、薩婆若に住せしむ。般若波羅蜜は所生無く、所滅無し、諸法常住の故に。」

(一九)須菩提言さく「世尊、若し般若波羅蜜所生無く所滅無ければ、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、云何が應に布施すべき、云何が應に持戒すべき、云何が應に忍辱すべき、云何が應に勤精進すべき、云何が應に禪定に入るべき、云何が應に智慧を修すべき。」佛須菩提に告げたまはく「菩薩摩訶薩は薩婆若を念じて應に布施すべし、薩婆若を念じて應に持戒忍辱精進禪定智慧すべし。是菩薩摩訶薩は是功德を持して衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。若し是の如く廻向すれば、則ち具足して六波羅蜜及び慈悲心諸功德を修す。須菩提、若し菩薩摩訶薩六波羅蜜を遠離せざれば、則ち薩婆若を遠離せず。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すれば、六波羅蜜を應に學すべし應に行ずべし、菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行ずれば、一切善根を具足し、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩、應に六波羅蜜を習行すべし。」須菩提言さく「世尊、云何が菩薩摩訶薩、應に六波羅蜜を習行すべき。」佛言はく「菩薩摩訶薩は應に是の如く觀ずべし。色合せず散せず、受想行識合せず散せず、乃至、一切種智合せず散せず。是を菩薩摩訶薩、六波羅蜜を習行すと名く。復次に須菩提、

【菴羅果】アームラ(Amra)山柰と譯す。

【波那娑果】パナサ(Panasa)波羅蜜といふ。樹は般若、果は無上道、士夫は行者、水は五波羅蜜に喩ふ。

菩薩摩訶薩は應に是念を作すべし、我れ當に色中に住せず、受想行識中に住せず、乃至、一切種智中に住せざるべし、是の如く應に六波羅蜜を習行すべし。何を以ての故に。是色所住無く、乃至、薩婆若所住無ければなり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は無所住法を以て六波羅蜜を習行し、應に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提、譬へば士夫、菴羅果若は波那娑果を食はんと欲せば、當に其子を種ゑ、隨時に溉灌し守護し、漸漸に生長し、時節和合すれば、便ち果實ありて之を食ふことを得るが如し。須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、當に六波羅蜜を學し、布施を以て衆生を攝取し、持戒忍辱精進禪定智慧もて衆生を攝取し、衆生を生死より度すべし。是の如く行ずれば、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩、他人の語に隨はざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。佛國土を淨め衆生を成就せんと欲し、道場に坐せんと欲し、法輪を轉ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、應に是の如く般若波羅蜜を學すべきや。』佛言はく、『菩薩は應に是の如く般若波羅蜜を學すべし、諸法に於て自在を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。何を以ての故に。是般若波羅蜜を學すれば、一切諸法中に於て自在を得るが故に。復次に須菩提、般若波羅蜜は一切諸法中に於て最大なり。譬へば大海の萬川中に於て最大なるが如し。般若波羅蜜も亦是の如く一切諸法中に於て最大なり。是を以ての故に、諸の聲聞辟支佛及び菩薩道を求めんと欲するものは、應當に般若波羅蜜、乃至一切種智を學

【七】正學正觀を明す。【多く學す】俗法道法を學し、諸度、畢竟空を學し、起滅如幻を學するをいふ。凡夫は起を學するも滅を學す能はず、聲聞は滅を學して起を學せざるなり。而もこの起滅は夢幻の如く畢竟空の故に實に所學なきなり。

すべし。須菩提、譬へば射師意の如きの弓箭を執り、怨敵を畏れざるが如く、菩薩摩訶薩も亦是の如く般若波羅蜜乃至一切種智を行ずれば、魔若は魔天の壊すること能はざる所なり。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すれば、應に般若波羅蜜を學すべし。是般若波羅蜜を行ずる菩薩は、十方諸佛の念ずる所と爲る。』須菩提佛に白して言さく『世尊、云何が十方諸佛、是菩薩摩訶薩を念ずるや。』佛須菩提に告げたまはく『菩薩摩訶薩の檀那波羅蜜を行ずる時、十方諸佛皆念ず。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行ずる時、十方諸佛皆悉く念ず。』『云何が念ずるや。』『布施得べからず、持戒忍辱精進禪定智慧得べからず、乃至、一切種智得べからず、菩薩能く是の如く諸法を得ざるが故に、諸佛は是菩薩摩訶薩を念ず。復次に須菩提、諸佛は色を以てせざるが故に念ず、受想行識を以てせざるが故に念ず、乃至、一切種智を以てせざるが故に念ず。』

（七）須菩提言さく『世尊、菩薩摩訶薩多く學する所有れども、實には學する所無し。』佛言はく『是の如く是の如し。須菩提、菩薩は多く學する所有れども、實には學する所無し。何を以ての故に。是菩薩の學する所の諸法、皆得べからざればなり。』須菩提佛に白して言さく『世尊、佛の說きたまふ所の法、若は略若は廣、此法の中に於て、諸の菩薩摩訶薩、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲せば、六波羅蜜の若は略若は廣、應に受持し親近し讀誦し、讀誦し已りて思惟し正觀すべし。心心數法行ぜざるが故に。』佛須菩提に告げたまはく、

【佛の說きたまふ所の法】八萬四千法蘊十二部經。

【答は略】小品一品一段又は諸法空無作無生無滅等。

【廣】八萬四千法蘊乃至無量佛法、又は諸法の種種別相。

【心心數法行ぜず】無相三昧に入る。

【如相】諸法如如の相即ち不生不滅不住異なり、一相無生相なり。

【無際】相の取るべきなく、一定法の著すべきなし。

【無分無非分】無分とは彼此示すべからず、無分別無量相なり、無非分とは無量無相等に著せざるなり。

『是の如く是の如し、菩薩摩訶薩、略廣六波羅蜜を學すれば、當に一切法の略廣の相を知るべし』。須菩提言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は一切法の略廣の相を知るや』。佛言はく『色如相を知り、受想行識を知り、乃至一切種智如相を知る。是の如く能く一切法の略廣の相を知る』。須菩提言さく『世尊、云何が色如相、云何が受想行識、乃至一切種智如相なるや』。佛須菩提に告げたまはく『是色、如無生無滅無住異、是を色如相と名け、乃至一切種智、如相無生無滅無住異、是を一切種智如相と名く、是中、菩薩摩訶薩、應に學すべし。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は諸法の實際を知る時、一切法の略廣の相を知る』。『世尊、何等か是れ諸法の實際なるや』。佛言はく『無際是を實際と名く。菩薩は是際を學し、一切諸法の略廣の相を知る。須菩提、若し菩薩摩訶薩諸法の法性を知らば、是菩薩は能く一切法の略廣の相を知る』。『世尊、何等か是れ諸法の法性なるや』。佛言はく、『色性是を法性と名け、是性無分無非分なり。須菩提、菩薩摩訶薩は法性を知るが故に、一切法の略廣の相を知る』。須菩提佛に白して言さく『世尊、復云何が應に一切法の略廣の相を知るべき』。佛言はく『若し菩薩摩訶薩、一切法の合せず散ぜざるを知るなり』。須菩提言さく『世尊何等の法か合せず散ぜざるや』。佛言はく『色合せず散ぜず、受想行識合せず散ぜず、乃至一切種智合せず散ぜず、有爲性無爲性合せず散ぜず。何を以ての故に。是諸法自性無なり、云何が合有り散有らんや。若し法自性無ければ、是を非法と爲す。法と非法とは合せず散ぜざるなり。是の如く應に一切法の略廣の相を知るべし』。須菩提言

【略攝】般若は是れ安隱道にして一切菩薩の學すべきところなり。

【八】略攝門甚深なるも、鈍根散心の菩薩も亦入るべきことを明す。

さく『世尊、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を略攝すと名く。世尊、是略攝般若波羅蜜中、初發意の菩薩摩訶薩は應に學すべし、乃至十地の菩薩摩訶薩も亦應に學すべし。是菩薩摩訶薩、是略攝般若波羅蜜を學すれば、則ち一切法の略廣の相を知る。

(八)世尊、是門には利根の菩薩摩訶薩のみ能く入る。』佛言はく『鈍根の菩薩も亦是門に入るべし、中根の菩薩、散心の菩薩も亦是門に入るべし、是門無礙なればなり。若し菩薩摩訶薩の一心に學する者は皆是門に入り、懈怠少精進妄憶念亂心の者は入ること能はざる所なり。精進不懈怠正憶念攝心の者は能く入る、阿惟越致地に住せんと欲し、一切種智を逮せんと欲する者能く入る。是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を所說の如く當に學すべし、禪那波羅蜜所說の如く當に學すべし、乃至檀那波羅蜜を所說の如く當に學すべし。是菩薩摩訶薩、當に一切智を得べし。是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずれば、所有の魔事起らんと欲するも即ち滅す。是を以ての故に、菩薩摩訶薩方便力を得んと欲すれば、當に般若波羅蜜を行ずべし。若し菩薩摩訶薩是の如く行じ、是の如く習し。是の如く般若波羅蜜を修すれば、是時無量阿僧祇國土中、現在の諸佛、是般若波羅蜜を行ずる菩薩を念ず。何を以ての故に。是般若波羅蜜中、過去未來現在の諸佛を生ずるが故に。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は應に是の如く思惟すべし。過去未來現在の諸佛の得る所の法、我も亦當に得べしと。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に般若波羅蜜を習すべし。若し是の如く般若波羅蜜を習すれば、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は常に應に薩婆若の念を遠

【法王子地】補處の菩薩たるをいふ。

離せざるべし。若し菩薩摩訶薩、是の如く般若波羅蜜を行ずること、乃至彈指の頃なるも是菩薩の福德甚だ多し。若し人有りて三千大千國土中の衆生をして自ら恣に布施せしめ、乃至敎へて持戒禪定智慧せしめ、敎へて解脫を得、解脫智見を得しめ、敎へて須陀洹果、乃至阿羅漢果辟支佛道を得しむるも、是菩薩摩訶薩是の如く般若波羅蜜を行ずること、乃至彈指の頃なるには如かず。何を以ての故に。是般若波羅蜜中、布施持戒禪定智慧、須陀洹果乃至辟支佛道を生ずればなり。十方現在の諸佛も亦般若波羅蜜中より生じ、過去未來の諸佛も亦般若波羅蜜中より生ずるが故に。

復次に須菩提、菩薩摩訶薩は應に薩婆若を念ずべし、般若波羅蜜を行ずること、若は須臾の時、若は半日、若は一日、若は一月、若は百日、若は一歲、若は百歲、若は一劫、若は百劫、乃至無量無邊阿僧祇劫ならば、是菩薩は是般若波羅蜜を修し、福德甚だ多く、十方恆河沙等の世界中の衆生に、布施、持戒、禪定、智慧、解脫、解脫知見を敎へ、敎へて須陀洹果乃至辟支佛道を得しむるに勝る。何を以ての故に。諸佛は般若波羅蜜中より生じ是布施持戒禪定智慧、解脫解脫智見、須陀洹果乃至辟支佛道果を說けばなり。若し菩薩摩訶薩有りて、般若波羅蜜に所說の如く住せば、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は是れ阿惟越致なり、諸佛の念ずる所と爲り、是の如きの方便力成就す。當に知るべし、是菩薩摩訶薩は無量百千萬億の諸佛に親近し供養し、善根を種ゑ、善知識と相隨ひ、久しく六波羅蜜を行じ、久しく十八空四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智を修す。當に知るべし、

【非字門】如法性實際をいふ、この中文字なければなり。
【言不言】字門非字門の如し。
【一言等】言不言淨不淨を了知し、能く邪道を伏す。

【捨道】一地より一地に至り、下地を捨つるをいふ。
【不捨道を知る】地中に住するは邪見なるを知り貪著せず。

是菩薩法王子地に住し、諸願を滿足し、常に諸佛を離れず、諸善根を離れず、一佛國より一佛國に至る。當に知るべし、是菩薩は辯才無盡にして具足して陀羅尼身を得、色具足し受記具足するが故に、衆生の爲に身を受く。當に知るべし、是菩薩は善く字門を知り、善く非字門を知り、言を善くし、不言を善くし、一言を善くし、二言を善くし、多言を善くし、善く女語を知り、善く男語を知り、善く色乃至識を知り、善く世間性を知り、善く涅槃性を知り、善く法相を知り、善く有爲相を知り、善く無爲相を知り、善く有法を知り、善く無法を知り、善く自性を知り、善く他性を知り、善く合法を知り、善く散法を知り、善く相應法を知り、善く不相應法を知り、善く相應不相應法を知り、善く如を知り、善く不如を知り、善く法性を知り、善く法位を知り、善く緣を知り、能く無緣を知り、善く陰を知り、善く界を知り、善く入を知り、善く四諦を知り、能く十二因緣を知り、善く四禪を知り、善く四無量心を知り、善く無色定を知り、善く六波羅蜜を知り、善く四念處を知り、乃至、善く一切種智を知り、善く有爲性を知り、善く無爲性を知り、善く有性を知り善く無性を知り、善く色觀を知り、善く受想行識觀を知り、乃至善く一切種智觀を知り善く色色相空を知り、善く受想行識識相空を知り、乃至、善く菩提菩提相空を知り、善く捨道を知り、善く不捨道を知り、善く生を知り、善く滅を知り、善く住異を知り、善く欲を知り、善く瞋を知り、善く癡を知り、善く不欲を知り、善く不瞋を知り、善く不癡を知り、善く見を知り、善く不見を知り、善く邪見を知り、善く正見を知り、善く一切見を知

【諸根】二十二根、度すべきと、度すべからざるとの諸機根。【諸根具足】度すべきもの、又は諸善根具足なり。【慧等】慧とは一切智慧の總相、疾慧は速に諸法を知る、出慧は諸難煩惱を脱出す、淨慧は佛法に通達す、廣慧は眞俗に通ず、深慧は諸法無屈無相に達す、大慧は達度深慧をいひ、又佛般若を信ずるをいふ、佛は生中の最大、般若は法中の最大なればなり、無等慧は般若にありて般若に著せざるなり、實慧は無相眞實に契ふ。【待衆生】衆生を待合はせ獨り涅槃に入らざるをいふ。【心等】心は衆生の善無心、深心は清淨の本心、實善なるもの、信進等皆この本心より來る。

り、善く名を知り、善く色を知り、善く名色を知り、善く因緣を知り、善く次第緣を知り、善く緣緣を知り、善く增上緣を知り、善く行相を知り、善く苦を知り、善く集を知り、善く滅を知り、善く道を知り、善く地獄を知り、善く餓鬼を知り、善く畜生を知り、善く人を知り、善く天を知り、善く地獄趣を知り、善く餓鬼趣を知り、善く畜生趣を知り、善く人趣を知り、善く天趣を知り、善く須陀洹を知り、善く須陀洹果を知り、善く須陀洹道を知り、善く斯陀含を知り、善く斯陀含果を知り、善く斯陀含道を知り、善く阿那含を知り、善く阿那含果を知り、善く阿那含道を知り、善く阿羅漢を知り、善く阿羅漢果を知り、善く阿羅漢道を知り、善く辟支佛を知り、善く辟支佛果を知り、善く辟支佛道を知り、善く佛を知り、善く一切智を知り、善く一切智道を知り、善く諸根を知り、善く諸根具足を知り、善く慧を知り、善く疾慧を知り、善く有力慧を知り、善く利慧を知り、善く出慧を知り、善く達慧を知り、善く廣慧を知り、善く深慧を知り、善く大慧を知り、善く無等慧を知り、善く實慧を知り、善く過去世を知り、善く未來世を知り、善く現在世を知り、善く方便を知り、善く待衆生を知り、善く心を知り、善く深心を知り、善く義を知り、善く語を知り、善く分別三乘を知る。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、般若波羅蜜を生じ、般若波羅蜜を修すれば、是の如き等の利益を得。」

三慧品第七十

（一）須菩提佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜を行じ、云何が般若波羅蜜を生じ、云何が般若波羅蜜を修するや」。佛言はく、「色寂滅の故に、色空の故に、色虚誑の故に、色不堅實の故に、應に般若波羅蜜を行ずべし。受想行識も亦是の如し。汝の問ふ所の如く、云何が般若波羅蜜を生ずるやとは、如虚空生の故に、應に般若波羅蜜を生ずべし。汝の問ふ所の如く、云何が般若波羅蜜を修するやとは、諸法破壊を修するが故に、應に般若波羅蜜を修すべし。」須菩提言さく、「世尊、般若波羅蜜を行じ、般若波羅蜜を生じ、般若波羅蜜を修するは、應に幾時なるべきや。」佛言はく、「初發意より、乃至道場に坐するまで、應に般若波羅蜜を行ずべし、生ずべし、修すべし。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、次第心もて應に般若波羅蜜を行ずべきや。」佛言はく、「常に薩婆若心を捨てず、餘念をして入ることを得しめざるを、般若波羅蜜を行ずと爲し、般若波羅蜜を生ずと爲し、般若波羅蜜を修すと爲す。若し心心數法行ぜざるが故に般若波蜜蜜を行ずと爲し、般若波羅蜜を生ずと爲し、般若波羅蜜を修すと爲す。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を修すれば、當に薩婆若を得べきや不や。」佛言はく、「不。」「世尊、般若波羅蜜を修せざれば薩婆若を得るや不や。」佛言はく、「不。」「世尊、修するも修せざるも薩婆

【三慧品】般若行を明し中に三慧を説くを以て名く。

【一】既に般若の功徳を知りこれを得んとす、今行と生と修を明す。行とは乾慧地にあり生とは無生忍法を得るをいひ、修とは得忍の後禅定を以て般若を熏習するをいふ。

【色寂滅等】五蘊は世間心所行の結縛處なるも般若の智慧力の故に空ならしむることをう即ち是れ涅槃寂滅相なり。

【如虚空生の故】若しは有若しは無言語道斷にして定相なければ説くべからず又空中法の生所生なく世間虚空の如く染著なし。

【破壊を修す】般若を以て甚深禅定に入り般若力を以て定及定縁を破す般若一切法を捨して不著相の故に。

【應に幾時等】般若の行修は初發心より乃至道場に坐するまでを明す。【道場に坐するまで】般若佛心中に到れば轉じて薩婆若と名く、理一なるも名變ずる故道場に至るまでを限りとす。【次第心】相續次第して生ずる心、總じて一心といひ、又常念といふ。【係念】貪瞋等の心、此心久しくして般若を害するを入るといふ。【心心數法行ぜず】小乘には無想滅盡無餘涅槃に入るをいふも、今は無相三昧なるをいふ。【修】常行積修に名く、是れ心心數法力の故に修といふ。修猶得ず況んや不修をや。般若無爲法の故に不修といひ、能觀實相の故に修といふ。二俱に過ある故不と

若を得るや不や。」佛言はく、「不。」『世尊、非修も非不修も薩婆若を得るや不や。」佛言はく、「不。」『世尊、若し爾らざれば、云何が當に薩婆若を得べき。」佛言はく、「菩薩摩訶薩の薩婆若を得ること如相の如し。」『世尊、云何が如相の如くなる。」「實際の如し。」「云何が實際の如くなる。」「法性の如し。」「云何が法性の如くなる。」「我性衆生性壽命性の如し。」『世尊、云何が我性衆生性壽命性なるや。」佛須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何、我衆生壽命法得べきや不や。」須菩提言さく、「得べからず。」佛言はく、「若し我衆生壽命得べからざれば、云何が當に我性衆生性壽命性有ることを說くべき、若し般若波羅蜜中一切法有ることを說かざれば、當に一切種智を得べし。」須菩提言さく、『世尊、但だ般若波羅蜜のみ是れ不可說なるや、禪那波羅蜜乃至檀那波羅蜜も亦不可說なるや。」佛須菩提に告げたまはく、「般若波羅蜜は不可說なり、檀那波羅蜜乃至一切法、若は有爲、若は無爲、若は聲聞法、若は辟支佛法、若は菩薩法、若は佛法も亦不可說なり。」『世尊、若し一切法不可說ならば、云何が是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ人、是れ天、是れ須陀洹、是れ斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、是れ諸佛なりと說くや。」佛須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何、是衆生の名字、實に得べきや不や。」須菩提言さく、「世尊、得べからず。」佛言はく、「若し衆生得べからざれば、云何が當に地獄、餓鬼、畜生、人天、須陀洹、乃至佛有ることを說くべき。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、應に一切法不可說を學すべし。」須菩提言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ず

いふなり、第四の非修非不修も著相の故に得ざるなり

【如相の如し等】四句不可得なるが如く不可得の得なるを明し、以下般若の行學を示す。

【有若は無等】有は欲色無色の三有、無は斷滅の邊見、作さずは善惡三業なきをいひ、起さずは業相應の諸法なきをいふ。

る時、應に色を學すべきや、受想行識を學すべきや、乃至一切種智を學すべきや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を學する時、應に色不增不減を學すべし、乃至應に一切種智不增不減を學すべし。』須菩提言さく、『世尊、云何が色不增不減を學し、乃至一切種智不增不減を學するや。』佛言はく、『不生不滅の故に學す。』『世尊、云何が不生不滅の學と名くるや。』佛言はく、『諸の行業、若は有若は無を起さず、作さざるが故に。』『世尊、云何が諸の行業、若は有若は無を起さず、作さずと名くるや。』佛言はく、『諸法自相空と觀ずるが故に。』『世尊、云何が應に諸法自相空と觀ずべき。』佛言はく、『應に色色相空を觀ずべし、應に受想行識識相空を觀ずべし、應に眼眼相空乃至意、色乃至法、眼識界乃至意識界、意識界相空を觀ずべし、應に內空內空相空を觀ずべし、乃至應に自相空自相空相空を觀ずべし、應に四禪四禪相空乃至滅受想定滅受想定相空を觀ずべし、應に四念處四念處相空、乃至阿耨多羅三藐三菩提阿耨多羅三藐三菩提相空を觀ずべし。是の如く須菩提、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時應に諸法自相空を行ずべし。』『世尊、若し色色相空、乃至阿耨多羅三藐三菩提阿耨多羅三藐三菩提相空ならば、云何が菩薩摩訶薩應に般若波羅蜜を行ずべきや。』佛言はく、『行ぜざる、是を般若波羅蜜を行ずと名く。』『世尊、云何が、行ぜざる是を般若波羅蜜を行ずとするや。』佛言はく、『般若波羅蜜不可得の故に、菩薩も不可得、行も亦不可得、行者、行法、行處、亦不可得の故に、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜざるを行ずと名く、一切の諸戲論不可得の故に。』『世尊、若し、行ぜざる

【初發意等】不行を行とするは初發意の心則ち迷惑し、若し行を行とせば顚倒たり、是故に初心に般若行じ難きを問ふ、故に無所得法を修行すべきことを答ふ。【二】有所得無所得を明す、【二有る者】眼を以て色を知る如く眼と色と相待なるをいふ。【有所得中等】諸法を緣じ相を取り道を行ずるが故に畢竟空無所得を得ば、顚倒を行じて眞實を得るの過あり。【無所得中】緣を作さず取らず行ぜず無所得なるは無。故に無所得を得ば無所有なるを以て無が有を生ずる過あり。【平等】無所得に因て有所得を破し、無所得も亦捨し、畢竟空なり。

是を般若波羅蜜を行ずとせば、初發意の菩薩、云何が般若波羅蜜を行ずるや。」「須菩提、菩薩は初發意より以來、應に空無所得法を學すべし。是菩薩、無所得法を用ての故に布施、持戒、忍辱、精進、禪定し、無所得法を用ての故に智慧を修す、乃至一切種智も亦是の如し。」

（二）須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が有所得と名け、云何が無所得と名くるや。」佛須菩提に告げたまはく、「諸の二有る者、是れ有所得なり、二有ること無き者、是れ無所得なり。」「世尊、何等か是れ二有所得、何等か是れ不二無所得なるや。」佛言はく、「眼色を二と爲す、乃至意法を二と爲す、乃至阿耨多羅三藐三菩提佛を二と爲す、是を名けて二と爲す。」「世尊、有所得中より無所得ありや、無所得中より無所得ありや。」佛言はく、「有所得中より無所得あるにもあらず。無所得中より無所得あるにもあらず。須菩提、有所得、無所得、平等なる、是を無所得と名く。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は有所得無所得平等法中に於て應に學すべし。須菩提、菩薩摩訶薩の是の如く般若波羅蜜を學する、是を無所得と名くれば過失あること無し。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩般若波羅蜜を行じ、有所得を行ぜず、無所得を行ぜざれば、云何が一地より一地に至り、一切種智を得るや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、有所得中に住せず、一地より一地に至る。何を以ての故に。有所得中に住すれば、一地より一地に至ること能はざればなり。何を以ての故に。須菩提、無所得は是れ般若波羅蜜相、無所得は是れ阿耨

【過失なし】平等觀學には兩俱過失なし。

【是れ色等】惱相是れ色、苦樂相是れ受とする類、以下重ねて無相無作を明す。

【三】俗諦より三乘三聚等の分類あるを明す。

多羅三藐三菩提相、無所得は亦是般若波羅蜜を行ずる者の相なればなり。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を行ずべし。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し般若波羅蜜得べからず、阿耨多羅三藐三菩提も亦得べからず、般若波羅蜜を行ずる者も亦得べからざれば、云何が菩薩摩訶薩、諸法相を分別して、是れ色、是れ受想行識、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提とするや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時色を得ず、受想行識を得ず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ず。』『世尊、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、色得べからず、乃至阿耨多羅三藐三菩提得べからざれば、云何が檀那波羅蜜を具足し、乃至般若波羅蜜を具足し、菩薩法位中に入り、入り已りて佛國土を淨め、衆生を成就し、一切種智を得、一切種智を得已りて、法論を轉じ、佛事を作して、衆生を生死より度するや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、色を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を爲さざるが故に、般若波羅蜜を行ず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩は何事を爲すが故に、般若波羅蜜を行ずるや。』佛言はく、『所爲無きが故に般若波羅蜜を行ず。何を以ての故に。一切諸法は所爲無く所作無し、般若波羅蜜も亦所爲無く所作爲し、阿耨多羅三藐三菩提も亦所爲無く所作爲し、菩薩も亦所爲無く所作無し、是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に般若波羅蜜を行じて、所爲無く所作無かるべし。』

〔三〕須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し諸法所爲無く、所作無ければ、三乘、聲聞辟支佛

【所爲あり所作ある中に等】所得所爲所作ある風俗に於て分別あるのみ。

【二】慧眼等五眼。

【三聚】一聚何不可得、云何ぞ三を得んや、顚倒を破せんがために三を分つ。能く顚倒を破するを正定といひ、必ず顚倒を破する能はざるを邪定、因緣を得れば破し得ざれば破する能はざるを不定とす。

佛乘有ること分別すべからず。」佛須菩提に告げたまはく、『諸法の所爲無く所作無き中に、分別有ること無く、所爲有り所作有る中に、分別有り。何を以ての故に。凡夫愚人は聖法を聞かず、五受陰、謂ゆる色受想行識に著し、檀那波羅蜜に著し、乃至阿耨多羅三藐三菩提に著すればなり。是人、是色有ることを念じて、是色を得、乃至是阿耨多羅三藐三菩提有ることを念じ、是阿耨多羅三藐三菩提を得。是菩薩、是念を作さく、「我當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、我れ當に衆生を生死より度すべし」と。須菩提、我れ五眼を以て觀るも、尚ほ色、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得ず、何に況んや、是狂愚人は目無くして、阿耨多羅三藐三菩提を得、衆生を生死より、度脫せんと欲するをや。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し佛五眼を以て觀るも、衆生の生死中より、度すべき者を見ざれば、今世尊、云何が阿耨多羅三藐三菩提を得、衆生に三聚、正定、邪定、不定有りと分別するや。』『須菩提、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得、初に衆生の三聚、若は正定、若は邪定、若は不定を得ず。須菩提、衆生無法に法想有るを以て、我れ其妄著を除くを以て、世俗法の故に、得ること有るを說く、第一義には非ず。』『世尊、第一義に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るに非ずや。』佛言はく、『不。』『世尊、顚倒に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得るや。』佛言はく、『不。』『世尊、若し第一義中に住して得ず、亦顚倒中に住しても得ずば、將に世尊、阿耨多羅三藐三菩提を得ざる無きか。』佛言はく、『不、我れ實に阿耨多羅三藐三菩提を得たるも、所作の若は有爲相、若は無爲相なる無きのみ。須菩提、譬へば佛の所化人は有爲

【四】一切法化の如くなるを以て眞化の別なきを明す

【須扇多】スシャマタ(Susamatha)善寂慧と譯す。

相に住せず、無爲相に住せざるも、化人亦來行り去行り、亦は坐し亦は立するが如し。須菩提、是化人、若し檀那波羅蜜を行じ、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、四禪、四無量心、四無色定、五神通を行じ、四念處を行じ、乃至八聖道分を行じ、空三昧、無相三昧、無作三昧に入り、内空乃至無法有法空を行じ、八背捨、九次第定、佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て法輪を轉ず。是化人、無量の衆生三聚有るを化作す。須菩提、汝が意に於て云何、是化人、檀那波羅蜜を行ずる有り、乃至三聚衆生有りや不や。」須菩提言さく「不。」「須菩提、佛も亦是の如く、諸法は化の如く、化人の化の衆生を度するが如くにして、實の衆生の度すべきもの有ること無きを知る。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、佛の所化人の如く行ず。」

(四)須菩提佛に白して言さく「世尊、若し一切法化の如くならば、佛と化人と、何等の差別有りや。」佛須菩提に告げたまはく「佛と化人とは、差別有ること無し。何を以ての故に。佛能く作す所有り、化人も亦能く作す所有ればなり。」「世尊、若し佛無ければ、化のみ獨り能く作す所有りや不や。」佛言はく「能く作す處有り。」須菩提言さく「世尊、云何が佛無く化能く作す所有りや。」「須菩提、譬へば過去に佛有り須扇多と名く、菩薩を化せんと欲するが爲の故に、佛を化作して、自ら滅度せるが如し。此化佛は住すること半劫、佛事を作し、菩薩行者に應ずる記を授け已りて滅度す。一切世間の衆生は、佛實に滅度すと謂

【諸法相を壞し】諸法を分別するは諸法實相を壞するはとせば、佛の五蘊等を說くは諸法を壞することとなる。

ふ。須菩提、化人實には、無生無滅なり。是の如く須菩提、菩薩は般若波羅蜜を行じ、當に諸法化の如きを信知すべし。』『世尊、若し佛と佛の所化人と差別無くば、云何が布施をして清淨ならしむるや。人佛を供養せば、是衆生、乃至無餘涅槃まで福德盡きざるが如く、若し化佛を供養せば、是人、乃至無餘涅槃まで福德も亦盡きざるべきや。』佛須菩提に語りたまはく、『佛諸法實相を以ての故に、一切衆生、天、及び人の與めに福田と作る。化佛も亦諸法實相を以ての故に、一切衆生、天、及び人の與めに福田と作る。』佛須菩提に告げたまはく、『是化佛及び佛に於て種うる所の福德を置き、若し善男子善女人有りて、但だ敬心を以て佛を念ずるに、是善根の因緣は、乃至苦を畢るまで其福盡きず。須菩提、是敬心もて佛を念ずるを置き、若し善男子善女人有りて、但だ一華を以て虛空中に散じ、佛を念ずるも、乃至苦を畢るまで、其福盡きず。須菩提、是敬心念佛、散華念佛を置き、若し人有りて南無佛を一稱するも、乃至苦を畢るまで其福盡きず。是の如く須菩提、佛の福田中に種うる其福無量なり、是を以ての故に、須菩提、當に知るべし、佛と化佛と差別有ることと無しと、諸の法相異ること無きが故に、須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を行じ、諸法の實相中に入るべし。是諸法の實相は應に壞すべからず、謂ゆる般若波羅蜜相、乃至阿耨多羅三藐三菩提相なり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し諸法の實相應に壞すべからざれば、佛何を以て諸法相を壞し、是れ色、是れ受想行識、是れ內法、是れ外法、是れ善法是れ不善法、是れ有漏、是れ無漏、是れ世間、是れ出世間、是れ有諍法、

【世俗の法等】實に名相なきも世俗有とするが故に名相をいふにして、これを說くも實有なりと著せざれば實相を壞せずとの

是れ無諍法、是れ有爲法、是れ無爲法等と言ふ。世尊、將に諸法相を壞すること無しとするか。」佛須菩提に告げたまはく「不、名字の相を以ての故に、諸法を示し、衆生をして解せしめんと欲す、佛は諸法の法相を壞せざるなり。」須菩提佛に白して言さく「世尊、若し一切法名字の相を以ての故に諸法を說き、衆生をして解せしめんとするも、世尊、若し無く相無くんば、云何が名相を以て衆生に示し解せしめんと欲するや。」佛須菩提に告げたまはく「世俗の法に隨ひ名相有りとするも、實には著處無し。須菩提、凡人の如きは苦を說くを聞きて、名に著し、相に隨ふ。須菩提、諸佛及び弟子は名に著せず、相に隨はず。須菩提、若し名名に著し相相に著せば、空も亦應に空に著すべし、無相も亦應に無相に著すべし、無作も亦應に無作に著すべし、實際も亦應に實際に著すべし、法性も亦應に法性に著すべし、無爲性も亦應に無爲性に著すべし。須菩提、一切法但だ名相有るのみ、是法名相中に住せず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、但だ名相中に住するのみ、應に般若波羅蜜を行ずべし、是名相中にも亦著すべからず。」「世尊、若し一切有爲法但だ名相のみなれば、菩薩摩訶薩、誰の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、種種の勤苦を受くる。菩薩は行道の時、布施し、持戒し、忍辱勤精進を行じ、禪定に入り、智慧を修し、四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至八聖道分を行じ、空を行じ、無相を行じ、無作を行じ、佛の十力を行じ、乃至大慈大悲を具足するや。」佛言はく「須菩提の所說の如く、若し一切有爲法但だ名相のみ有れば、菩薩摩訶薩、誰の爲の故に、菩薩道を行ずるやとは、須菩

【名相の名相等】名相中名相も空にして、一切法も名相も空、一故にこの邊を離れ一切智に住して衆生を度す。

【五】三智を說く。

【一切名等】二乘は內外法の無常無我等の總相を知るのみ。

【一切道】四あり一は人天中爾樂を受くるの道、他三は三乘道、內二乘道は三十七道品を以て涅槃に入り菩薩道は道品六度を以て二利を事とす

【道中に住し等】道中作證に二過ある故に否定す一には結使ありて正智なきこと二に一切有爲虛誑なるとなり

【非道中等】道中を得ず況んや非道をや故に不といふ

提、若し有爲法但だ名相有るのみならば、等しく是名相の名相も亦空なり。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は菩薩道を行じ、一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉じ法輪を轉じ已りて三乘法を以て衆生を度脫す、是名相も亦生無く滅無く住異無し。』

（五）爾時、須菩提佛に白して言さく、『世尊、世尊は一切種智を說きたまふや。』佛須菩提に告げたまはく、『我れ一切種智を說く。』須菩提言さく、『佛は一切智を說き、道種智を說き、一切種智を說く、是三種の智に何の差別有りや。』佛須菩提に告げたまはく、『薩婆若は是れ一切聲聞辟支佛の智、道種智は是れ菩薩摩訶薩の智、一切種智は是れ諸佛の智なり。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何の因緣の故に、薩婆若は是れ聲聞辟支佛の智なるや。』佛須菩提に告げたまはく、『一切名謂ゆる內外法は、是れ聲聞辟支佛能く知る、一切道一切種智を用ふる能はじ。』須菩提言さく、『世尊、何の因緣の故に、道種智は是れ諸菩薩摩訶薩の智なるや。』佛須菩提に告げたまはく、『一切道は菩薩摩訶薩應に知るべし。若は聲聞道辟支佛道、菩薩道、應に具足して知るべし。亦應に是道を用て衆生を度するも、亦實際證を作さざるべし。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、佛說の如く、菩薩摩訶薩、應に諸道を具足すべし、應に是道を以て實際證を作すべからざるや。』佛須菩提に告げたまはく、『是菩薩未だ佛土を淨めず、未だ衆生を成就せずば、是時應に實際證を作すべからず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩道中に住し、應に實際證を作すべきや不や。』佛言はく、『不。』『世尊、非道の中に住して、實際證を作すや。』佛言はく、『不。』『世尊、道非道に住し、實際證を作

【道非道等】道非道亦二過あり、道非非道も著相を脫せず、故に否定するなり。
【汝が意に於て云何】須菩提は自ら所得の道中に於て了了にして惑なきを反省せしむるために反問するなり。
【一相の故に一切種智】一切種智を明すに二種相あり、諸法實相に通達する寂滅相、二には名相文字言說通達無礙なり。
【六】斷證差別を述ぶ。
【結斷】煩惱を斷ずるなり。
【煩惱斷等】斷ずる時に差別あるも斷じ終らば差別なきなり。
【不】悉く無爲にして有爲斷なきを答ふ。

すや。』佛言はく、『不。』『世尊、非道亦非非道に住し、實際證を作すや。』佛言はく、『不。』『世尊、菩薩摩訶薩は何處に住して、實際證を作すべきや。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何。汝道中に住して、諸法を受けざるが故に、漏盡き、心解脫を得たりや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。』『汝非道に住して、漏盡き心解脫を得たりや不や。』『不、世尊。』『汝道非道に住して、漏盡き心解脫を得たりや不や。』『不、世尊。』『汝非道亦非非道に住して、漏盡き心解脫を得たりや不や。』『不、世尊。我れ所住無く、諸法を受けずして漏盡き心解脫を得たり。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩も亦是の如く、所住無くして應に實際證を作すべし。』須菩提言さく、『世尊、云何が一切種智の相と爲すや。』佛言はく、『一相の故に一切種智と名く、謂ゆる一切法寂滅相なり。復次に諸法の行類、相貌、名字を顯示して說く、佛實の如く知る、是を以ての故に、一切種智と名く。』

(六)須菩提佛に白して言さく、『世尊、一切智、道種智、一切種智、是三種の智あらば、結斷差別有り、盡有り、餘有りや不や。』佛言はく、『煩惱斷すれば差別無し、諸佛は煩惱習一切悉く斷ず、聲聞辟支佛は煩惱習悉く斷ぜず。』『世尊、是諸人、無爲法を得ずして、煩惱を斷ずることを得るや。』佛言はく、『不。』『世尊、無爲法中差別することを得べきや不や。』佛言はく、『不。』『世尊、若し無爲法中差別を得べからずんば、何を以ての故に、是人煩惱習斷じ、是人煩惱習斷ぜずと說くや。』佛須菩提に告げたまはく、『習は煩惱に非ず、是れ聲聞辟支佛の身口、婬欲、瞋恚、愚癡の相に似たるもの有り、凡夫具人は之れが爲に

【斷結等】結使斷ずるが故に後際無餘涅槃を說くのみ。

【常に般若を說く等】般若の名義を釋して行般若を說く。

罪を得、是三毒者は諸佛有ること無し。」須菩提佛に白して言さく「世尊、若し道法無く、涅槃も亦法無ければ、何を以ての故に、分別して、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ佛なりと說くや。」佛須菩提に告げたまはく「是れ皆無爲法にして、而も分別有るを以て、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ佛なりとす。」「世尊、實に無爲法なるを以ての故に、分別して須陀洹、乃至佛有りや。」佛須菩提に告げたまはく「世間の言說の故に差別有り、第一義には非ず、第一義中分別說有ること無し。何を以ての故に。第一義中には言說の道無し、斷結するが故に、後際を說く。」須菩提言さく「世尊、諸法の自相空中に、前際得べからず、何に況んや後際有るを說かんや。」佛須菩提に告げたまはく「是の如く是の如し、諸法の自相空中に、前際有ること無し、何に況んや後際有らんや、是處り有ること無し。須菩提、衆生は諸法の自相空なるを知らざるを以ての故に、是れ前際、是れ後際なりと說くことを爲すのみ、諸法の自相空中、前際後際得べからず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に自相空法を以て、般若波羅蜜を行ずべし。須菩提、若し菩薩自相空法を行ずれば、則ち所著の若は內法、若は外法、若は有爲法、若は無爲法、若は聲聞法、若は辟支佛法、若は佛法無し。」須菩提佛に白して言さく「常に般若波羅蜜を說く、般若波羅蜜は何の義を以ての故に般若波羅蜜と名くるや。」佛言はく「第一義を得て一切法を度し、彼岸に到る、是義を以ての故に、般若波羅蜜と名く。復次に須菩提、諸佛菩薩辟支佛阿羅漢は、是般若

【無常義等】四聖行なり、常無常何れに取著するも般若に應ぜず、今の無常等は無著不戲の義なり。

【苦智等】十一智を擧ぐ、常には前十智を說く、如實智は諸法の實相に契へる佛所得の智なり。

【七】義非義を辨ず。

波羅蜜を用て、彼岸に度ることを得。是義を以ての故に、般若波羅蜜と名く。復次に須菩提、分別し籌量し、一切法を破壞し、乃至微塵にも、是中堅實を得ず。是義を以ての故に、般若波羅蜜と名く。復次に須菩提、諸法如法性實際、皆般若波羅蜜中に入る、是義を以ての故に、般若波羅蜜と名く。復次に須菩提、是般若波羅蜜、法の若は合、若は散、若は色、若は無色、若は可見、若は不可見、若は有對、若は無對、若は有漏、若は無漏、若は有爲、若は無爲なるもの有ること無し。何を以ての故に。是般若波羅蜜は色無く、形無く對無く一相謂ゆる無相なればなり。復次に須菩提、是般若波羅蜜は、能く一切法一切樂說辯一切照明を生ず、須菩提、是般若波羅蜜は、魔、若は魔天、聲聞辟支佛を求むる人、及び餘の異道梵志、怨讎惡人も菩薩の般若波羅蜜を行ずるを壞すること能はず。何を以ての故に。是人輩、般若波羅蜜中、皆得べからざるが故に、須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜の義を行ずべし。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、深般若波羅蜜の義を行ぜんと欲せば、應に無常義、苦義、空義、無我の義を行ずべし。亦應に苦智義、集智義、滅智義、道智義、法智義、比智義、世智義、他心智義、盡智義、無生智義、如實智義を行ずべし。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜義の爲の故に、應に般若波羅蜜を行ずべし。』

(七)須菩提佛に白して言さく、『世尊、是深般若波羅蜜中、義と非義と皆得べからざれば、云何が菩薩深般若波羅蜜義の爲の故に、應に般若波羅蜜を行ずべき。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は深般若波羅蜜義の爲の故に、應に是の如く念ずべし、貪欲は義に非ず、

【虛空如】虛空眞如法界なり。

【無爲般若】般若に有爲無爲の二あり、有爲般若を學して六度を具し十地中に住す、無爲般若を學して一切惑習を滅して佛道を成ず。

是の如きの義、應に行ずべからず。瞋恚、愚癡は義に非ず、是の如きの義、應に行ずべからず。一切邪見は義なし、是の如きの義、應に行ずべからず。何を以ての故に。三毒如相は義有ること無く非義有ること無く、一切邪見如相は義有ることなく、非義有ること無ければなりと。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は應に是念を作すべし、色は義に非ず非義に非ず、乃至識は義に非ず非義に非ず、檀那波羅蜜、乃至阿耨多羅三藐三菩提は義に非ず非義に非ず。何を以ての故に。須菩提、佛の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、法の若は義、若は非義を得べきもの有ること無ければなり。須菩提、有佛無佛に諸法法相常住にして義有ること無く非義有ること無し。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、應に義及び非義を離るべし。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何を以ての故に般若波羅蜜は義に非ず非義に非ざるや。』佛須菩提に告げたまはく、『一切有爲法は無作相なり、是を以ての故に般若波羅蜜は義に非ず非義に非ず。』『世尊、一切賢聖、若は佛、若は佛弟子、皆無爲を以て義と爲す。云何が佛、般若波羅蜜は義非義有ること無しと云ふや。』佛言はく、『一切賢聖、若は佛、若は佛弟子、皆無爲を以て義と爲すと雖も、亦以て增せず、亦以て損せず。須菩提、譬へば虛空如、衆生を益すること能はず、衆生を損する能はざるが如し。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜は增有ること無く損有ること無し。』『世尊、菩薩摩訶薩は無爲般若波羅蜜を學せずして、一切種智を得んや。』佛言はく、『是の如く是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩は是無爲般若波羅蜜を學して當に一切種智を得べし、二法を以てせざる

【是れ得】二不二是れ無分別にして所得なし、有爲法を行ずるも心相を取らざるが故に一切種智を得。

が故に。」「世尊、不二法能く不二法を得るや。」佛言はく、「不。」須菩提言さく、「二法能く不二法を得るや。」佛言はく、「不。」須菩提言さく、「世尊、菩薩摩訶薩、若し二法を以てせず、不二法を以てせざれば、云何が當に一切種智を得べき。」「須菩提、無所得は即ち是れ得なり、是を以て得るも得る所無きなり。」

【道樹品】種樹を以て喩說し如相を明し、菩薩の功德方便を述ぶ。
【一】樹喩を明す
【甚深】前に無所得の行般若を聞き未曾有なりと讃嘆す。
【葉等】樹葉蔭凉を與ふることを三惡の熱苦を離るるに喩ふ。
【華等】華色好香淨柔軟なるを施戒等の人大福樂を與ふるに喩ふ。

摩訶般若波羅蜜經　卷第二十二

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

道樹品第七十一

（一）須菩提佛に白して言さく、「世尊、是般若波羅蜜は甚深なり。世尊、諸の菩薩摩訶薩は、衆生を得ずして、而も衆生の爲に阿耨多羅三藐三菩提を求む、是を甚難と爲す。世尊、譬へば人の虛空中に於て樹を植ゑんと欲するが如く是を甚難と爲す。世尊、菩薩摩訶薩も亦是の如く衆生の爲の故に阿耨多羅三藐三菩提を求め、衆生も亦得べからず。」佛須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、諸の菩薩摩訶薩は甚だ難しと爲す所、衆生の爲の故に阿耨多羅三藐三菩提を求めて、吾我に著する顚倒の衆生を度す。譬へば人の樹を種うるに樹の根莖枝葉華果を識らずして而して愛護し、漑灌し漸漸長大にし、華葉果實を成就し、皆之を用ふることを得るが如し。是の如く須菩提、諸の菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に阿耨多羅三藐三菩提を求め、漸漸に六波羅蜜を行じて一切種智を得、佛樹を成就し、華葉果實を以て衆生を益す。須菩提、何等をか葉の衆生を益すると爲す、菩薩摩訶薩に因て三惡道を離るることを得る、是を葉の衆生を益すると爲す。何等をか華の衆生を益すると爲す、菩

【果等】果の色香味力を聖道果に喩ふ。

【一】菩薩は佛の如く如相を學成することを明す。

【如】諸法如を得るが故に如來と名く。

薩に因て刹利大姓婆羅門大姓居士大家、四天王天處乃至非有想非無想處に生ずることを得る、是を華の衆生を益すると爲す。何等をか果の衆生を益すると爲す、是菩薩は一切種智を得、衆生をして須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果、辟支佛道、佛道を得しむ、是衆生は漸漸に三乘法を以て無餘涅槃に於て而して般涅槃す、是を果の衆生を益すると爲す。是菩薩摩訶薩は衆生の實法を得ずして而も衆生を度して、我顛倒の著を離れしめ、是念を作さく「一切の諸法中に衆生の我所無く、衆生の爲に一切種智を求むるも、是衆生實に得べからず」と。

(一)須菩提佛に白して言さく「世尊、當に知るべし、是菩薩は佛の如しと爲す。所以は何ん、是菩薩の因緣の故に、一切地獄種一切畜生種一切餓鬼種を斷じ、一切諸難を斷じ、一切貧窮下賤道を斷じ、一切欲界色界無色界を斷ずればなり。」佛言はく「是の如く是の如し、須菩提、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は佛の如し。須菩提、若し菩薩摩訶薩發心して阿耨多羅三藐三菩提を求めざれば、世間則ち過去未來現在の諸佛無く、世間亦辟支佛阿羅漢阿那含斯陀含須陀洹も無く、三惡趣及び三界も亦斷ずる時無し。須菩提、汝の說く所の如く、是菩薩摩訶薩は、當に知るべし、佛の如しと。是の如く是の如し、須菩提、當に知るべし、是菩薩は實に佛の如しと。何を以ての故に。如を以ての故に如來と說き、如を以ての故に辟支佛阿羅漢一切賢聖と說き、如を以ての故に色乃至識と說き、如を以ての故に一切法乃至有爲性無爲性と說く、是諸の如は如實にして無異なり、是を以ての故に說て名けて如と

【如相を以ての故等】如相を得ると同じきを以て佛の如しとす、我心を以て菩薩を貪貴せざる故に、畜生も亦如あるも未發未利益の故に佛の如しと名けざるなり【如般若】如相般若、一切法如なり【根具足】信進等五善根三乘差別あるもこの根具足を得れば度すべし、若し根あるも度すべからざるは先世の惡業罪重きに由る故に、復衆生の業因緣をも知るといふ。

【三】菩薩の禮すべく功德多きを說く。

爲す。諸の菩薩摩訶薩は是如を學し、一切種智を得て如來と名くるを得たり。是因緣を以ての故に、菩薩摩訶薩は、當に知るべし、佛の如し、如相を以ての故にと說く。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に如般若波羅蜜を學すべし。菩薩如般若波羅蜜を學すれば則ち能く一切法如を學し、一切法如を學すれば則ち一切法如を具足することを得。一切法如を具足し已りて一切法如に住し、自在を得。一切法如に住し、自在を得已りて善く一切衆生の根を知る、善く一切衆生の根を知り已りて一切衆生の根具足することを知り、亦一切衆生の業因緣をも知る、一切衆生の業因緣を知り已りて願智具足することを得、願智具足することを得已りて三世の慧を淨む、三世の慧を淨め已りて一切衆生を饒益す、一切衆生を饒益し已りて佛國土を淨む、佛國土を淨め已りて一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉ず、法輪を轉じ已りて衆生を三乘に於て安立し、無餘涅槃に入らしむ。是の如く須菩提菩薩摩訶薩は一切の功德、自ら利し人を利することを得んと欲し、應に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。』

(三)須菩提佛に白して言さく『世尊、是諸の菩薩摩訶薩は能く說の如く深般若波羅蜜を行ず、一切世間の天及び人阿修羅は當に爲に禮を作すべし。』佛須菩提に告げたまはく『是の如く是の如し、是菩薩摩訶薩は能く說の如く深般若波羅蜜を行じ、一切世間の天及び人阿修羅は當に爲に禮を作すべし。』『世尊、是初發意の菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求めて、幾所の福德を得るや。』佛須菩提に告げたまはく『若し千世界中の

【入法位】發心正性離生の菩薩進みて無生法忍に入れるなり。

【向佛道】不退成佛に向ふ菩薩。

【四】深般若無相得難きを以て初學の念ずべき一切種智を明す。

衆生、皆聲聞辟支佛の意を發せば、汝が意に於て云何、其福多きや不や。』須菩提言さく、『甚だ多く無量なり。』佛須菩提に告げたまはく、『其福の初發意の菩薩摩訶薩に如かざること、百倍千倍巨億萬倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。何を以ての故に、聲聞辟支佛の意を發す者は、皆菩薩に因て出るが故に、菩薩は終に聲聞辟支佛に因て出でず。二千世界、三千大千世界中も亦是の如し。是三千大千世界中の意を發して聲聞辟支佛を求むる者を置き、若し三千大千世界中の衆生皆乾慧地に住すれば、其福多きや不や。』須菩提の言さく、『甚だ多く無量なり。』佛言はく、『初發意の菩薩に如かざること、百倍千倍巨億萬倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。是乾慧地に住する衆生を置き、若し三千大千世界中の衆生、皆性地八人地見地薄地離欲地已辦地辟支佛地に住すれば、是一切の福徳を初發意の菩薩に比せんと欲するに、百倍千倍巨億萬倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。須菩提、若し三千大千世界中の初發意の菩薩の入法位の菩薩に如かざること、百倍千萬倍巨億萬倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。若し三千大千世界中の入法位の菩薩の向佛道の菩薩に如かざること、百千萬倍巨億萬倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。若し三千大千世界中の向佛道の菩薩の佛の功徳に如かざること、百千萬倍巨億萬倍乃至算數譬喩の及ぶこと能はざる所なり。』

(四)須菩提佛に白して言さく、『世尊、初發心の菩薩摩訶薩は、當に何等の法を念ずべきや。』佛言はく、『應に一切種智を念ずべし。』須菩提言さく、『何等をか是れ一切種智とする、一

【一切種智を念ずべし】小雜樂を捨て大淸淨樂を得、顚倒虛誑の樂を捨て實樂を得、繫縛樂を捨て解脫樂を得、獨善樂を捨て衆生善樂を得るを念じて一切種智に專らなるべし「

【念無く等】度不度等の分別なきをいひ、生無くば別法の生起なく、示無くば教示すべきところもなく、舉覺無所有にして空なり。

【念を增上となし】佛一切種智を得て復思惟せず、復難易なく、遠近所念皆得る故に念を增となすといふ。

切種智は何等の緣、何等の增上、何等の行、何等の相ぞや。」佛須菩提に告げたまはく、「一切種智は所行無く念無く生無く示無し。須菩提の所問の如き、一切種智は何等の緣何等の增上何等の行何等の相とは、須菩提、一切種智は無法を緣とし念を增上と爲し、寂滅を行と爲し、無相を相と爲す。須菩提、是を一切種智の緣增上行相と名く。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、但だ一切種智のみ無法なりや。色受想行識も亦無法なり、內外の法も亦無法なり、四禪四無量心四無色定四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分空三昧無相三昧無作三昧八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲大喜大捨、初神通第二第三第四第五第六神通、有爲相無爲相も亦無法なりや。」佛須菩提に告げたまはく、「色も亦無法なり、乃至有爲相無爲相も亦無法なり。」須菩提言さく、「世尊、何の因緣の故に一切種智は無法、色も無法、乃至有爲無爲相も亦無法なりや。」佛言はく、「一切種智は自性無きが故に、若し法自性無くば是を無法と名く。色乃至有爲無爲相も亦是の如し。」「世尊、何の因緣の故に諸法は自性無きや。」佛言はく、「諸法は和合因緣生の法中自性無し、若し自性無くば是を無法と名く。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は應に一切法無性なりと知るべし。何を以ての故に。一切法性空なるが故に、是を以ての故に、當に知るべし一切無法性なりと。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し一切法無性なれば、初發意の菩薩は何等の方便力を以てか、能く檀那波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就する。能く尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、

【無性を學し等】畢竟空を觀じて諸福德を集め有無二法能く一時に行ずるは方便力の故なり。

【一念相應の慧】最後心斷結の智慧

初禪乃至第四禪を行じ、慈心乃至捨心を行じ、空處乃至非有想非無想處、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、空三昧無相三昧無作三昧八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲を行じ、能く一切種智を行じて佛國土を淨め衆生を成就するや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は能く諸法の無性を學し、亦能く佛國土を淨め衆生を成就して、國土も衆生も亦無性なりと知る、即ち是れ方便力なり。須菩提、是菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行じて佛道を修學し、尸羅波羅蜜を行じて佛道を修學し、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じて佛道を修學し、乃至一切種智を行じて佛道を修學し、亦佛道無性なることを知る。是菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行じて佛道を修學し、乃至未だ佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲、一切種智を成就せざる、是を爲に佛道を修學すと爲す、能く是佛道の因緣を具足し已りて、一念相應の慧を用て一切種智を得。爾時、一切の煩惱の習永く盡きて生ぜざるを以ての故に、是時に佛眼を以て三千大千世界を觀ずるに無法も尚ほ得べからず、何に況んや有法をや。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に無性の般若波羅蜜を行ずべし。須菩提、是を菩薩摩訶薩の方便力と名く。無法尙ほ得べからず、何に況んや有法をや。須菩提、是菩薩摩訶薩の若は布施する時、布施無法にして尙ほ知るべからず、何に況んや有法をや。受者及び菩薩心、無法にして尙ほ知るべからず、何に況んや有法をや。乃至一切種智の得者、得法、得處無法にして尙ほ知るべからず、何に況んや有法をや。何を以ての故に。一切法の本性爾ればなり。佛作に非ず、

【道行品】般若道と菩薩行を說き、菩薩行佛陀菩提を問答す。

【一】般若即菩薩行なるを說く、菩薩の三業所作多し今正行を決す。

聲聞辟支佛の作に非ず、亦餘人の作にも非ず。一切の法は作者無きが故に。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、諸法と諸法の性とは離るるや。』佛言はく、『是の如く是の如し、諸法と諸法の性とは離る。』『世尊、若し諸法と諸法の性と離るれば、云何が離法能く離法の若は有、若は無なるを知る。何を以ての故に。無法は無法を知る能はず、有法は有法を知る能はず、無法は有法を知る能はず、有法は無法を知る能はざればなり。世尊、是の如きの一切の法は所有相無し、云何が菩薩摩訶薩は是分別を作す、若は有なり、若は無なりと。』佛言はく、『菩薩摩訶薩は世諦を以ての故に衆生に示す、若は有なり、若は無なりと、第一義を以てするには非ず。』『世尊、世諦と第一義諦とは異有りや。』『須菩提、世諦と第一義諦とは異無きなり。何を以ての故に、世諦の如は即ち是れ第一義諦の如なればなり。衆生は是如を知らず、見ざるを以ての故に、菩薩摩訶薩は世諦を以て、若は有なり、若は無なりと示す。復次に須菩提、衆生は五受陰中に於て著相有るが故に、無所有なることを知らず。是衆生の爲の故に、若は有なり、若は無なりと示し、淸淨無所有なることを知らしむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は當に是般若波羅蜜を行ずるを作すべし。』

道行品第七十二

（一）須菩提佛に白して言さく、『世尊、世尊は菩薩行を說きたまふ、何等か是れ菩薩行なる。』

【阿耨多羅三藐三菩提等】悲心及空智慧を以て無上菩提に向ふ諸善行是れ菩薩の正行なり。これ菩薩の惡無記及著心の善を簡捨す。

【文字入無文字】文字も不生空に入るを云ふ。

【二】菩薩行の果報は佛なり、經に常に佛と說ける義について問答す。

【實義實相等】四 畢竟異とするは名のみなるも、差別せば實義は諸法實相の不生滅なるをいひ、煩惱已に盡き一切智を得、法義無礙なるを通達といひ一切法の有無了了たるを實の如く知るといふ。

【菩提】(Bodhi)ボデイ 智と譯す 佛即ち智者所成の實智慧なり。

佛言はく『菩薩行とは、阿耨多羅三藐三菩提の爲に行ず、是を菩薩行と名く。』『世尊、云何が菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の爲に行ずる、是を菩薩行と名くるや。』佛言はく『若し菩薩摩訶薩、色空を行じ、受想行識空を行じ、眼空乃至意を行じ、色空乃至法を行じ、眼界空乃至意識界を行じ、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、內空を行じ、外空を行じ、空空を行じ、大空を行じ、第一義空有爲空無爲空畢竟空無始空散空諸法空性空自相空無法空有法空無法有法空を行じ、初禪第二第三第四禪を行じ、慈悲喜捨を行じ、無量虛空處を行じ、無量識處無所有處非有想非無想處を行じ、四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分を行じ、空三昧を行じ、無相三昧を行じ、無作三昧を行じ、八背捨九次第定を行じ、佛の十力を行じ、四無所畏を行じ、四無礙智を行じ、十八不共法を行じ、大慈大悲を行じ、淨佛國土を行じ、成就衆生を行じ、諸の辯才を行じ、文字入無文字を行じ、諸陀羅尼門を行じ、有爲性を行じ、無爲性を行じ、如と阿耨多羅三藐三菩提との二を作さず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるを阿耨多羅三藐三菩提の爲に行ずと名く、是を菩薩行と名く。』

(三)須菩提佛に白して言さく『世尊、說きて佛と言ふ、何の義の故に佛と名くるか。』佛須菩提に告げたまはく『諸法の實義を知るが故に名けて佛と爲す、復次に諸法の實相を得るが故に名けて佛と爲す、復次に實義に通達するが故に名けて佛と爲す、復次に實の如く一切法を知るが故に名けて佛と爲す。』須菩提言さく『何の義の故に菩提と名くるや。』『須菩提、

空義は是れ菩提の義なり、如義法性義實際義は是れ菩提の義なり。復次に須菩提、名相言說は是れ菩提の義なり、須菩提、菩提の實義は壞すべからず、分別すべからざる、是れ菩提の實義なり。復次に須菩提、諸法實相の不誑不異なる是れ菩提の義なり。是を以ての故に菩提と名く。復次に須菩提、是菩提は是れ諸佛所有の故に菩提と名く。復次に須菩提、諸佛正徧智の故に菩提と名く。「須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、是菩提の爲に六波羅蜜を行じ、乃至一切種智を行ぜば、諸法に於て何をか得し何をか失し、何をか增し何をか減じ、何をか生じ何をか滅し、何をか垢とし何をか淨とする。「佛須菩提に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、菩提の爲に六波羅蜜を行じ、乃至一切種智を行ぜば、諸法に於て得する無く失する無く、增する無く減ずる無く、生ずる無く滅する無く、垢とする無く淨とする無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、得失增減生滅垢淨を爲さざる故に出づ。「須菩提言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて若し得失を爲さず、乃至垢淨を爲さざる故に出づれば、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜を行じて、能く檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を取り、云何が內空乃至無法有法空を行じ、云何が禪無量心無色定を行じ、云何が四念處乃至八聖道分を行じ、云何が空無相無作解脫門を行じ、云何が佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲を行じ、云何が聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位中に入るや。「佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、二法を以てせ

【後意】菩薩の最後心。

【利根を增益せず】是れ顚倒にして善根を增長する能はず、人夢中に財を得たりとするも竟に所得なきが如し。

【善根のためならず】無上菩提を貴ぶがために供養等をなすにして、善を貴ぶが爲にあらず。

【諸佛等】病人に於ける良藥の如く、佛は良醫、善知識は藥草、善根は看病者なり。

ざるが故に、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、二法を以てせざるが故に、乃至一切種智を行ず。須菩提言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、二法を以てせざるが故に檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を行じ、二法を以てせざるが故に乃至一切種智を行ぜば、菩薩初發意より乃至後意まで、云何が善根を增益するや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し二法を行ずれば善根增益することを得ず。何を以ての故に。一切の凡夫人は皆二法に依て善根を增益することを得ざればなり。菩薩摩訶薩は不二法を行じ、初發意より乃至後意まで、其中間に於て善根を增益す。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は一切世間の天及び人阿修羅の能く伏する無く、能く其善根を壞して聲聞辟支佛地に墮せしむる無し、及び諸惡不善法も菩薩を制して能く檀那波羅蜜を行じて善根を增益せざらしむること能はず、乃至般若波羅蜜も亦是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を行ずべし。」「世尊、菩薩摩訶薩は善根の爲の故に般若波羅蜜を行ずるや不や。」佛言はく、「不。須菩提、菩薩も亦善根の爲ならざるが故に般若波羅蜜を行じ、亦非善根の爲ならざるが故に般若波羅蜜を行ず。何を以ての故に。須菩提、菩薩摩訶薩の法は未だ諸佛を供養せず、未だ善根を具足せず、未だ眞の知識を得ざれば、一切種智を得ること能はざればなり。」須菩提言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩は諸佛を供養し、善根を具足し、眞の知識を得、能く一切種智を得るや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は初發意より諸佛を供養し、諸佛所說の十二部經修多羅乃至優婆提舍をば、是菩薩は聞持し、誦利し、心觀了

達す。了達するが故に陀羅尼を得。陀羅尼を得るが故に能く無礙智を起し、無礙智を起すが故に所生の處乃至薩婆若まで終に忘失せず。亦諸佛所に於て善根を種ゑ、是善根の爲に護られて、終に惡道諸難に墮せず。是善根の因緣を以ての故に深心清淨を得、深心清淨を得るが故に、能く佛國土を淨め衆生を成就す。是善根の所護を以ての故に、常に眞の知識、謂ゆる諸佛諸菩薩及び諸聲聞能く佛法衆を讚歎する者を離れず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に諸佛を供養し、善根を種ゑ、善知識に親近すべし。」

三善品第七十三

須菩提佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩若し諸佛を供養せず、善根を具足せず、眞の知識を得ざれば、當に薩婆若を得べきや不や。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は諸佛を供養し、善根を種ゑ、眞の知識を得るも、一切種智は尙得難し、何に況んや諸佛を供養せず、善根を種ゑず、眞の知識を得ざるをや。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は諸佛を供養し、善根を種ゑ、眞の知識を得るも、何を以ての故に一切種智を得ること能はざるや。」佛須菩提に告げたまはく、「是菩薩摩訶薩は方便力を遠離し、諸佛に從ひて方便力を聞かず、種うる所の善根具足せず、常に善知識の敎に隨はざればなり。」「世尊、何等をか是れ方便力とし、菩薩摩訶薩は是方便力を行じて一切種智を得るや。」佛言

【聞持等】聞きて當に受持すべく、忘せざるが爲に誦讀して利せしむ。

【心觀了達】常に心を經卷に繫け次第憶念し、先づ義を宣說し、後了達するをいふ。

【陀羅尼】二種あり、聞持と實相となり、讀誦し常念して聞持を得、義理に通達して實相を得。

【深心清淨】衆生中にて慈悲心、不捨心、救度心を得、諸法に無我畢竟空心を得、佛に佛想、涅槃想を生ぜず、怨賊と雖も害を加へざるをいふ。

【佛法衆】三寶なり。

【三善品】一切種智を成就するに修する六度善根を明す。復諸佛善根知識を明す故に三善と名くるなり。

【諸佛を供養せず】諸法空ならば修善

不修不修善異ならず、修善を要せざるべしとて問ふ。

【方便力】般若波羅蜜をいふ。

【慳貪等】慳貪乃至愚癡は、六度に反する六蔽、慢乃至邪慢は七慢、慢は等を等とし劣を劣とする正しきに似たるも自ら高くするあり、大慢は劣を等に、等を優とす、慢々とは我れ劣りて却つて優れりとす、我慢は我見所取なりとす、增上慢は自計によりて自高卑他をなす、不如慢又卑慢とす、恭謙を誇る、邪慢は邪見所取なり。

はく、「菩薩摩訶薩は初發意より檀那波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる念もて、佛若は辟支佛若は聲聞、若は人若は非人に布施し、是時に布施想受者想を生ぜず。何を以ての故に。一切法の自相空無生無定相無所轉なることを觀じて諸法の實相、謂ゆる一切法の無作無起相に入ればなり。菩薩は是方便力を以ての故に善根を增益し、善根を增益するが故に檀那波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、布施して世間の果報を受けず、但だ一切衆生を救度せんと欲するが故に檀那波羅蜜を行ず。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より尸羅波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる念もて持戒する時、婬怒癡の中に墮せず、亦諸の煩惱纏縛及び諸の不善破道法、若は慳貪破戒瞋恚懈怠亂意愚癡慢大慢慢慢我慢增上慢不如慢邪慢、若は聲聞心、若は辟支佛心にも墮せず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は一切法の自相空無生無定相無所轉なることを觀じて諸法の實相、謂ゆる一切法の無作無起相に入ればなり。菩薩は是方便力を成就するが故に善根を增益し、善根を增益するが故に尸羅波羅蜜を行じ、佛國土を淨め衆生を成就し、持戒して世間の果報を受けず、但だ一切の衆生を救度せんと欲するが故に尸羅波羅蜜を行ず。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より羼提波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる念もて方便力成就するが故に、見諦道思惟道を行ずるも、亦須陀洹果斯陀含阿那含阿羅漢果を取らず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は諸法の自相空無生無定相無所轉なることを知り、是助道法を行ずと雖も而も聲聞辟支佛地を過ぐ。須菩提、是を菩薩の無生法忍と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より毘梨耶波羅蜜を

【見諦道思惟道】見道初果、斯陀含向後を思惟道即ち修道とす。

【徧學品】菩薩諸道を徧學して菩薩位に入ることを明す。

【一】諸法性無所有の故に動ぜざることを明す。

行じて初禪に入り、乃至第四禪に入り、四無量心四無色定に入り、諸禪に出入すと雖も而も果報を受けず。何を以ての故に。是菩薩は是方便力を成就するが故に、諸の禪定の自相空無生無定相無所轉なることを知り、佛國土を淨め衆生を成就し、精進して世間の果報を受けず、但だ一切の衆生を救度せんと欲するが故に毘梨耶波羅蜜を行ずればなり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より禪那波羅蜜を行じ、應に薩婆若に應ずる念もて八背捨九次第定に入るも、亦須陀洹果を證せず、乃至阿羅漢果を證せず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は諸法の自相空無生無定相無所轉なることを知ればなり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より般若波羅蜜を行じ、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲を學し、乃至未だ一切種智を得ず、未だ佛國土を淨めず、未だ衆生を成就せず、其中間に於て是の如く學すべし。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は諸法の自相空無生無定相無所轉なることを知ればなり。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を行じ、果報を受けざるべし。

徧學品第七十四

〔一〕爾時、須菩提佛に白して言さく、世尊、是菩薩摩訶薩は大智慧成就し、是深法を行ずるも亦果報を受けず。佛須菩提に告げたまはく、是の如く是の如し、菩薩摩訶薩は大智慧成

【菩薩大智慧を成就し等】菩薩六變を行じ、世間果報を受けざるを未曾有と歎ずるなり。

【無所有】諸法性は衆因緣生の故に自在ならず定相なし、故に所有なし。

【二】菩薩戲論不戲論の相を説く。

就し、是深般若波羅蜜を行ずるも亦果報を受けず。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は諸法性中に動ぜざるが故に。」「世尊、何等をか諸法性中に動ぜずとなす。」佛言はく、「無所有性中に於て動ぜざるなり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は色性中に動ぜず、受想行識性中に動ぜず、檀那波羅蜜性中に動ぜず、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜性中に動ぜず、四禪性中に動ぜず、四無量心性中に動ぜず、四無色定性中に動ぜず、四念處性中に動ぜず、乃至八聖道分性中に動ぜず、空三昧無相無作三昧乃至大慈大悲性中に動ぜず。何を以ての故に。須菩提、此諸法性は即ち是れ無所有なればなり。須菩提、無所有法なるを以て能く所有法を得ず。」須菩提言さく、「世尊、所有法は能く所有法を得るや不や。」佛言はく、「不。」「世尊、所有法は能く無所有法を得るや不や。」佛言はく、「不。」「世尊、無所有法は能く無所有法を得るや不や。」佛言はく、「不。」「世尊、若し無所有能く所有を得ず、所有能く所有を得ず、所有能く無所有を得ず、無所有能く無所有を得ずば、將に、世尊、道を得ざる無きか。」佛言はく、「得ること有るも此四句を以てせず。」「世尊、云何が得ること有りや。」佛言はく、「所有に非ず、無所有に非ず、諸の戲論無き、是を得道と名く。」

〔二〕須菩提佛に白して言さく、「世尊、何等をか是れ菩薩摩訶薩の戲論とする。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、色を觀じて若は常若は無常なりとせば、是を戲論と爲す。受想行識を觀じて若は常若は無常なりとせば、是を戲論と爲す。色を觀じて若は苦若は樂とし、

受想行識をば若は苦若は樂とす、是を戲論と爲す。色を觀じて若は我若は非我とし、受想行識をば若は我若は非我とし、色をば若は寂滅若は不寂滅とし、受想行識をば若は寂滅若は不寂滅とす、是を戲論と爲す。苦聖諦見るべく、集聖諦斷ずべく、滅聖諦證すべく、道聖諦修すべしと、是を戲論と爲す。四禪四無量心四無色定を修すべしと、是を戲論と爲す。四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分を修すべしと、是を戲論と爲す。空解脫門無相解脫門無作解脫門を修すべしと、是を戲論と爲す。八背捨九次第定を修すべしと、是を戲論と爲す。我れ當に須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を過ぐべしと、是を戲論と爲す。我れ當に菩薩の十地を具足すべしと、是を戲論と爲す。我れ當に菩薩位に入るべしと、是を戲論と爲す。我當に佛國土を淨むべしと、是を戲論と爲す。我れ當に衆生を成就すべしと、是を戲論と爲す。我れ當に佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法を生ずべしと、是を戲論と爲す。我れ當に一切種智を得べしと、是を戲論と爲す。我れ當に一切煩惱習を斷ずべしと、是を戲論と爲す。須菩提、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、色をば若は常若は無常なりとし、戲論すべからざるが故に戲論せず。受想行識をば若は常若は無常なりとし、戲論すべからざるが故に戲論せず。乃至一切種智戲論すべからざるが故に戲論せず。何を以ての故に。性は戲論ならざるの性、無性も戲論ならざるの無性なり、性と無性とを離れて更に法の得べき無し。謂ゆる戲論とは戲論の法、戲論の處なり、是を以ての故に、須菩提、色は戲論無く、受想行識乃至一切種智も戲論無し。是の如く須菩提、

菩薩摩訶薩は戲論無き般若波羅蜜を行ずべし。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が色は戲論すべからざる、乃至一切種智は戲論すべからざるや。』佛須菩提に告げたまはく、『色性無く、乃至一切種智性無し。須菩提、若し法性無ければ、卽ち是れ戲論無し。是を以ての故に色は戲論すべからず、乃至一切種智は戲論すべからず。須菩提、若し菩薩摩訶薩、能く是の如く戲論無き般若波羅蜜を行ずれば、是時に菩薩位に入ることを得。』

〔三〕須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し諸法性有ること無くば、菩薩は何等の道を行じてか菩薩位に入る、聲聞道を用ふると爲んや、辟支佛道を用ふると爲んや、佛道を用ふると爲んや。』佛須菩提に告げたまはく、『聲聞道を以てせず、辟支佛道を以てせず、佛道を以てせずして菩薩位に入ることを得。菩薩摩訶薩は徧く諸道を學して菩薩位に入ることを得。須菩提、譬へば八人の先づ諸道を學し、然して後に正位に入り、未だ得果せずして、而して先づ果道を生ずるが如し。菩薩も亦是の如く、先づ徧く諸道を學し、然して後に菩薩位に入り、亦未だ一切種智を得ずして、而して先づ金剛三昧を生ず。爾時、一念相應の慧を以て一切種智を得。』〔四〕須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、徧く諸道を學して菩薩位に入らば、八人は須陀洹に向ひて須陀洹を得、斯陀含に向ひて斯陀含を得、阿那含に向ひて阿那含を得、阿羅漢に向ひて阿羅漢辟支佛道佛道を得。是諸道は各各異り。世尊、若し菩薩摩訶薩、徧く諸道を學して、然して後に菩薩位に入る者、是菩薩若し八道を生ぜば應に八人と作るべし、見道を生ぜば應に須陀洹と作るべし、思惟道を生ぜば應に斯陀含

【三】菩薩入位の道を明す。意に戲論なきは是れ三乘道なり、故に四句を離れて徧學す。

【八人】三界の見惑は本來空と證り入忍を具足したる位、卽ち見道十五心の位。

【爾時】若し菩薩金剛三昧に住し、最後心に在る時なり。

【八道】四諦の法と類とを觀るなり。

【是八人の智斷等】二乘人は諸佛菩薩の智に於て少氣分を得るのみ、故に學忍の八智無學の十斷皆是れ無生法忍中に攝す。

【須陀洹等】須陀洹斯陀含は略して三結廣くは八十八結を斷じ、阿那含

と作り阿那含と作り阿羅漢と作るべし、若し辟支佛道を生ぜば辟支佛と作る。世尊、若し菩薩摩訶薩八人と作り、然して後に菩薩位に入るとせば是處有ること無し。菩薩位に入らずして一切種智を得るといふも亦是處無し。須陀洹と作り乃至辟支佛と作り、然して後菩薩位に入るといふも亦是處有ること無し、菩薩位に入らずして一切種智を得るといふも亦是處無し。世尊、我れ云何が當に知るべきや、菩薩摩訶薩の徧く諸道を學して菩薩位に入るを得るといふことを。」佛須菩提に告げたまはく「是の如く是の如し、若し菩薩摩訶薩、八人と作り須陀洹果を得、乃至阿羅漢果を得、辟支佛道を得て、然して後に菩薩位に入るといはば是處有ること無し。菩薩位に入らずして當に一切種智を得べしといふも是處有ること無し。須菩提、若し菩薩摩訶薩ありて初發意より六波羅蜜を行ずる時、智觀を以て八地を過ぐ。何等をか八地とす、乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辦地、辟支佛地なり。道種智を以て菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて一切種智を以て一切の煩惱習を斷ず。須菩提、是八人の若は智若は斷、是れ菩薩の無生法忍なり。須陀洹の若は智若は斷、斯陀含の若は智若は斷、阿那含の若は智若は斷、阿羅漢の若は智若は斷、辟支佛の若は智若は斷、皆是れ菩薩の無生法忍なり。菩薩は是の如く聲聞辟支佛道を學し、道種智を以て菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて一切種智を以て一切の煩惱習を斷じて佛道を得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は徧く諸道を學すること具足して應に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、是を以て衆生を饒益す。」須菩提佛に白

は略して五下分結を廣くは九十二結を斷じ、阿羅漢は上下分十結を斷じ、略しては三漏盡き、廣くは一切煩惱を斷ず、是を各各若は智若は斷と云ふ。

【諸法の相貌等】無生法忍に住して諸法實相を得、實相に隨つて諸法の名相語言を取り自ら解し他を悟らしむるなり。

【偏く等】梵音說法の相なり。

【地獄の道】十不善道なり。

【地獄の因】三毒、三毒增長して貪嫉瞋恚邪見の三不善道を生じ、三不善道は七不善道の因なり。

【地獄の果】彼の因を以て地獄身を受け、身心苦惱するをいふ。

【應に障ふべきを知るべし】三惡道中は常に苦を受

して言さく、「世尊、世尊の說きたまふ所の道は聲聞道、辟支佛道、佛道なり。何等をか是れ菩薩の道種智となす。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は應に一切の道種淨智を生ずべし。須菩提、何等をか是れ道種淨智となす。若し諸法の相貌顯示すべき所の法、菩薩應正に知るべきは正に知り已りて、他の爲に演說し開示し、諸の衆生をして解することを得しむ。是菩薩摩訶薩は、應に一切の音聲語言を解すべく、是音聲を以て說法し、偏く三千大千世界に滿つること響相の如し。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は應に先づ一切道を具足し學すべし、道智具足し已れば應に衆生の深心を分別し知るべし。謂ゆる地獄の衆生、地獄の道、地獄の因、地獄の果、應に障ふべきを知るべし。畜生餓鬼の道、畜生餓鬼の因、畜生餓鬼の果、應に障ふべきを知るべし。諸の龍鬼神揵闥婆緊那羅摩睺羅伽阿修羅の道と因と果と、應に障ふべきを知るべし。人の道と因と果と、應に知るべし。諸天の道と因と果と、應に知るべし。四天王天三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天梵天光音天偏淨天廣果天無想天阿婆羅訶天無熱天易見天喜見天阿迦尼吒天の道と因と果と、應に知るべし。無邊虛空處無邊識處無所有處非有想非無想處の道と因と果と、應に知るべし。四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分の因と果と、應に知るべし。空解脫門無相解脫門無作解脫門、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲の因と果と、應に知るべし。菩薩は是道を以て、衆生をして須陀洹道乃至阿羅漢辟支佛道、乃至阿耨多羅三藐三菩提に入らしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩の淨道種智と名く。菩薩は是道種智を學し已り

て衆生の深心相に入り、入り已りて衆生の心に隨ひて如應に說法し、言ふ所虛からず。何を以ての故に。須菩提、是菩薩摩訶薩は善く衆生の根相を知り、一切衆生の心心數法生死所趣を知ればなり。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如く般若波羅蜜を行ずべし。何を以ての故に。一切の諸善法助道法は皆般若波羅蜜中に入り、諸の菩薩摩訶薩聲聞辟支佛の行ずべき所なればなり。」

（四）須菩提佛に白して言さく「世尊、若し四念處乃至阿耨多羅三藐三菩提、是一切の法は皆合せず散ぜず、色無く形無く、對無く、一相謂ゆる無相なり。世尊、云何が是助道法能く阿耨多羅三藐三菩提を取らん」世尊、是は合せず散ぜず、色無く形無く對無く、一相謂ゆる無相の法にして取る所無く捨つる所無し。譬へば虛空の取る無く捨つる無きが如くなればなり。」佛言はく「是の如く是の如し、須菩提、諸法の自相は空にして取る所無く捨つる所無し。須菩提、衆生有りて諸法の自相空なることを知らざれば、是衆生の爲の故に助道法を顯示して阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。復次に須菩提、有ゆる色受想行識、有ゆる檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、有ゆる內空外空乃至無法有法空、初禪乃至非有想非無想處、四念處乃至八聖道分、三解脫門八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲一切種智等の諸法、是聖法中に於て皆合せず散ぜず、色無く形無く對無く、一相謂ゆる無相なり。世俗法を以ての故に衆生の爲に說きて解せしむ、第一義を以てするに非ず。須菩提、是一切法中に於て、菩薩摩訶

け、得道の因緣有ることなきを明にするをいふ。

【畜生餓鬼等】十不善道に上中下あり、上は地獄、中は畜生、下は餓鬼なり。

【諸の龍鬼神等】十善道にも亦三あり、上は天、中は人、下は鬼神、十善道に住すれば能く欲を離れて色界に生じ、色を離れて無色界に生ずるも、下善鬼神は障遮たるを免れず。

【應に知るべし】天人中には得道の因緣あるが故に遮不遮不定なれば、遮を說くべからず、只分別して知るのみといふなり。

【如應】小乘法を以て度すべき者には小乘法を以て度し、大乘法を以て度すべきものには大乘法を以てす。

【四】諸法無相にして取捨なければ

ば、道法の菩提を取るべきものなき眞實無著を述べ聖法の學を明かにす。

【智見】初知を智、深入を見とし、未了を知、已了を見とし、定散に通ずるを知、定心なるを見とす。

【五】聖法を說き、相を學せず、無相を修することを明す、聖法とは般若異名の字なり。

【欲瞋癡】一切煩惱は顚倒の故に無所有なれば合せず、合なければ散なし、合散なければ輕他自高のことなし。

薩は智見を以て如法に學すべし、學し已りて諸法の用ふべきと用ふべからざるとを分別す。』須菩提言さく『世尊、何等の法をか菩薩、分別し已て用ふべしとし、用ふべからずとするや。』佛言はく『聲聞辟支佛の法は分別して用ふべからずと知り、一切種智は分別して用ふべしと知る。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は是聖法中に於て、應に般若波羅蜜を學すべし。』

(五)須菩提佛に白して言さく『世尊、何を以ての故に名けて聖法と說き、何等をか是れ聖法となす。』佛須菩提に告げたまはく『諸の聲聞辟支佛法、諸の菩薩摩訶薩及び諸佛は欲瞋癡に於て合せず散ぜず、身見戒取疑と合せず散ぜず、欲染瞋恚と合せず散ぜず、色染無色染掉慢無明と合せず散ぜず、初禪乃至第四禪と合せず散ぜず、慈悲喜捨虛空處乃至非有想非無想處と合せず散ぜず、四念處乃至八聖道分と合せず散ぜず、內空乃至大悲、有爲性無爲性と合せず散ぜざるなり。何を以ての故に。是一切の法は皆色無く形無く對無く、一相謂ゆる無相なればなり。無色法は無色法と合せず散ぜず、無形法は無形法と合せず散ぜず、無礙法は無礙法と合せず散ぜず、一相法は一相法と合せず散ぜず、無相法は無相法と合せず散ぜず。須菩提、是無色無形無礙一相謂ゆる無相の般若波羅蜜を、諸の菩薩摩訶薩は應に學すべし、學し已りて諸法の相を得ず。』須菩提佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩は色相を學せざるや。受想行識相を學せざるや。』『眼相乃至意相を學せず、色相乃至法相を學せず、地種相乃至識種相を學せず、檀那波羅蜜相、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪

那波羅蜜、般若波羅蜜相を學せず、内空相乃至無法有法空相を學せず、初禪相乃至第四禪相を學せず、慈相乃至捨相を學せず、無邊空相乃至非有想非無想相を學せず、四念處相乃至八聖道分相を學せず、空三昧相無相無作三昧相を學せず、八背捨九次第定相を學せず、佛の十力相四無所畏相四無礙智相十八不共法相大慈大悲相を學せず、苦聖諦相集滅道聖諦相を學せず、逆順十二因緣相を學せず、有爲性相無爲性相を學せざるや。世尊、若し諸法の相を學せざれば、菩薩摩訶薩は云何が諸法の相若は有爲若は無爲を學し、學し已りて聲聞辟支佛地を過ぎん。若し聲聞辟支佛地を過ぎざれば、云何が菩薩位に入らん。若し菩薩位に入らざれば、云何が當に一切種智を得べけん。若し一切種智を得ざれば、云何が當に法輪を轉ずべけん。若し法輪を轉ぜざれば、云何が三乘を以て衆生の生死を度せん。佛須菩提に告げたまはく、若し諸法實に有相ならば、菩薩は應に是相を學すべし。須菩提、一切法は實に相無く色無く形無く礙無く、一相謂ゆる無相なるを以て、是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は相を學せず無相を學せず。何を以ての故に。有佛無佛諸法一相の性常住なればなり。須菩提佛に白して言さく、世尊、若し一切法有相に非ず無相に非ざれば、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜を修せん。若し般若波羅蜜を修せざれば聲聞辟支佛地を過ぐること能はず。若し聲聞辟支佛地を過ぎざれば菩薩位に入ること能はず。若し菩薩位に入らざれば無生法忍を得ず、若し無生法忍を得ざれば諸の菩薩神通を得ること能はず、若し菩薩神通を得ざれば佛國土を淨め衆生を成就すること能はず、若し佛國土を淨め

【壞】諸法相相なく、無相の相も亦壞して法の取るべきものなし。

【無常相等】四相觀の十六行相、閉相は靜なり盡なり、出相は離なり、實出現なり、正相如なり、正量なり、迹相行なり入道なり、離相出なり乘なりとす。

衆生を成就せざれば一切種智を得ること能はず、若し一切種智を得ざれば法輪を轉ずること能はず、若し法輪を轉ぜざれば衆生をして須陀洹果斯陀含阿那含阿羅漢果辟支佛道を得しむること能はず。阿耨多羅三藐三菩提を得しむること能はず、亦衆生をして布施福をも得しむること能はず、亦持戒修定福をも得しむること能はず。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、諸法は無相にして一相に非ず異相に非ず、若し無相を修すれば、是れ般若波羅蜜を修するなり。』須菩提言さく、『世尊、云何が無相を修する、是れ般若波羅蜜を修するとなす。』佛言はく、『諸法の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり。』『世尊、云何が諸法の壞を修する、是れ般若波羅蜜を修するとなす。』佛言はく、『色の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、受想行識の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、眼の壞、耳鼻舌身意法の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、色法の壞、聲香味觸法の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、不淨觀の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、初禪の壞、第二第三第四禪の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、慈悲喜捨の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、無邊空處無邊識處無所有處非有想非無想處の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、念佛念法念僧念戒念捨念天念滅念阿那般那の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、無常相苦相無我相空相集相因相生相緣相閉相滅相妙相出相道相正相迹相離相の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、十二因緣の壞を修する、我相衆生壽命相の壞を修する、乃至知者見者相の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、

常相樂相淨相我相の壞を修する、是れ般若波羅蜜を修するなり、四念處を修する、乃至八聖道分の壞を修する、是れ般若波羅蜜を修するなり、空三昧無相三昧無作三昧の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、八背捨九次第定の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、有覺有觀三昧無覺有觀三昧無覺無觀三昧の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、苦聖諦集聖諦滅聖諦道聖諦の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、苦智集智滅智道智の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、盡智無生智の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、法智比智世智他心智の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、檀那波羅蜜の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、內空外空內外空空空大空第一義空有爲空無爲空畢竟空無始空散空性空諸法空自相空不可得空無法空有法空無法有法空の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり。須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、一切智の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり、斷一切煩惱習の壞を修する是れ般若波羅蜜を修するなり。「須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が色の壞を修し、乃至斷一切煩惱習の壞を修する、是を般若波羅蜜を修すると名くるや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、色法有りと念ぜざる是れ般若波羅蜜を修するなり、受想行識有りと念ぜざる、乃至斷一切煩惱習法有りと念ぜ

【有法の念】般若中無法無なり、況んや有法と念ぜば般若に應ぜざるなり。

【順忍】大論は是を小乘の順忍とし、小乘の順忍無なり、況んや大乘をやと解す。

ざる是れ般若波羅蜜を修するなり。何を以ての故に。有法の念は般若波羅蜜を修せざればなり。須菩提有法の念は檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を修せず。何を以ての故に。須菩提、是人は法に著して檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜を行ぜざればなり。是の如く著する者は解脫有ること無く、道有ること無く、涅槃有ること無し。有法の念は四念處四正勤四如意足、五根五力七覺分八聖道分を修せず、空三昧を修せず、乃至一切種智を修せず。何を以ての故に。是人は法に著するが故に。』須菩提佛に白して言さく『世尊、何等をか是れ有法とし、何等をか是れ無法となす。』佛須菩提に告げたまはく『二は是れ有法、不二は是れ無法なり。』『世尊、何等をか是れ二となす。』佛言はく『色相は是れ二なり、受想行識相は是れ二なり、眼相乃至意相は是れ二なり、色相乃至法相は是れ二なり、檀那波羅蜜乃至佛相、阿耨多羅三藐三菩提相、有爲無爲性相は是れ二なり。須菩提、一切の相は皆是れ二なり、一切の二は皆是れ有法なり。適有法有れば便ち生死有り、適生死有れば生老病死の憂悲苦惱を離るることを得ず、是因緣を以ての故に、須菩提、當に知るべし、二相とは檀那波薩蜜乃至般若波羅蜜有ること無く、道有ることと無く、果有ること無く、乃至順忍有ること無し。何に況んや色の相を見、乃至一切種智の相を見るをや。若し修道無ければ、云何が須陀洹果乃至阿羅漢果辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提及び斷一切煩惱習を得んや。』

【三次品】法相なくして順忍、成佛を得るを明し、菩薩の次第を明し、次第學次第行次第道を細說す。
【一】如何に順忍成佛等を得るかを明す、この順忍は六乘の順忍なり。

摩訶般若波羅蜜經　卷第二十三

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

三次品第七十五

(一)爾時、須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し法相有れば、尚順忍を得ず、何に況んや得道をや。世尊、若し法相無ければ當に順忍を得べきや不や、若は乾慧地、若は性地、若は八人地、若は見地、若は薄地、若は離欲地、若は已辦地、若は辟支佛地、若は菩薩地、若は佛地、若は修道、是修道に因て當に煩惱を斷ずべきや不や。是煩惱を以ての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入ることを得ず、若し菩薩位に入らざれば則ち一切種智を得ず、一切種智を得ざれば即ち能く一切煩惱習を斷ずることを得ず。世尊、若し法相有ること無ければ、是れ諸法は則ち不生なり。若し是諸法を生ぜざれば、則ち一切種智を得ること能はず。」佛須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、若し法有ること無ければ、則ち順忍乃至斷一切煩惱習有り。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、法相有りや不や。謂ゆる色相乃至識相、眼相乃至意相、色相乃至法相、眼界相乃至意識界相、四念處相乃至一切種智相、若は色相色斷相乃至識相識斷相、十二入十八界も亦

【有法等】有法は有爲法に、無法は無爲法に名く、有爲八聖道を行じて諸惑を斷じ無爲果を得、復五度を有法といひ是れ菩薩道、般若は無法、是れ菩薩果とし、或は般若は智慧有爲の道、如法性實際常有にして緣生たる故果となす。【如是、一切法は無所有性】須菩提の問を印可し、自證を擧げて無所有なるを以て智斷證成を明す。【離生喜樂】五欲を捨離して生じたる喜樂、初二禪は有喜樂、三禪は無喜樂なり。

是の如く、若は無明相若は無明斷相、乃至憂悲愁惱相憂悲愁惱斷相、若は欲相若は欲斷相、若は瞋相若は瞋斷相、若は癡相若は癡斷相、若は苦相若は苦斷相、若は集相若は集斷相、若は滅相若は滅斷相、若は道相若は道斷相、乃至一切種智相、斷一切煩惱習相と。』佛言はく、『不、須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、法相非法相有ること無し、即ち是れ菩薩の順忍なり。須菩提、若し法相有ること無く、非法相有ること無ければ即ち是れ修道、亦是れ道果なり。須菩提、菩薩摩訶薩の有法は是れ菩薩道なり、無法は是れ菩薩果なり、是の因緣を以ての故に、當に知るべし、一切法は無所有性なり。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、若し一切法無所有性なれば、佛は云何が一切法無所有性なるを知るが故に成佛することを得、一切法に於て自在力を得たまへる。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、一切法は無所有性なり。我れ本菩薩道を行ずる時、六波羅蜜を修して諸欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀離生喜樂、初禪に入り、乃至第四禪に入る。是諸禪及び支に於て相を取らず、是禪有ることを念ぜず、禪味を受けず。是禪を得ず、無染清淨にして四禪を行じ、我れ是諸禪に於て果報を受けず、四禪に依て住して五神通、身通天耳知他人心宿命通天眼通を起し、諸神通に於て相を取らず、是神通有ることを念ぜず、神通味を受けず、是神通を得ず、我れ是五神通に於て分別して行ぜず、須菩提、我れ爾時に一念相應の慧を用て阿耨多羅三藐三菩提を得、謂ゆる是れ苦聖諦、是れ集、是れ滅、是れ道聖諦なりと、十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲を成就し、作佛することを得て三聚

【性】二あり、自性他性なり、自性とは、自身不淨性に名け、他性とは衣服等の莊嚴身具に名く、此皆無常虚誑にして苦惱の因緣たり。

【二】新學菩薩の如何に行ずべきかを明す。

【新學】無量劫來發意するも、未だ諸法實相を得ざるに名く。

【云何が等】新學は但だ布施持戒等を行ぜしむべきに、諸法無所有空を行ぜしむるを問ふ。

衆生、正定聚邪定不定を分別す。須菩提佛に白して言さく、「云何が世尊、諸法の無所有性中に於て四禪六神通を起し、亦衆生無きを而も分別して三聚と作すや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し諸欲惡不善法の若性の若は自性、若は他性有らば、我れ本菩薩の行を爲せし時、欲惡不善法の無所有性なることを觀じて初禪に入ること能はず。諸の欲惡不善法性の若は自性、若は他性有ること無く、皆是れ無所有性なるを以ての故に、我れ本菩薩道を行ぜし時、諸の欲惡不善法を離れて初禪に入り、乃至第四禪に入れり。須菩提、若し諸神通の性の若は自性、若は他性あらば、我れ是神通の無所有性なることを知り、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。神通性の若は自性、若は他性有ること無く、皆是れ無所有性なるを以て、是を以ての故に、諸佛は神通に於て無所有性なることを知り、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。」

〔二〕須菩提言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、諸法の無所有性なることを知れば、四禪五神通に因て阿耨多羅三藐三菩提を得。世尊、新學の菩薩摩訶薩は云何が諸法の無所有性中に於て次第行、次第學、次第道あり、是次第行次第學次第道を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得るや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、若は初め諸佛より聞き、若は多く諸佛を供養せる菩薩より聞き、若は諸の阿羅漢、若は諸の阿那含、若は諸の斯陀含、若は諸の須陀洹に聞く所、無所有を得るが故に是れ佛なり、無所有を得るが故に是れ阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹なり、一切の賢聖皆無所有を得るを以ての故に名有り、一切有爲の

作法は所有の性無く、乃至毫末許の如きも所有有ること無し、是菩薩摩訶薩は、是を聞き已りて是念を作さく「若し一切の法、性有ること無ければ、無所有性を得るが故に是れ佛なり、乃至無所有性を得るが故に是れ須陀洹なり。我れ若し當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきも、若は得ざるも一切法常に無有性なれば、我れ何を以てか發心して阿耨多羅三藐三菩提を得ざらんや。阿耨多羅三藐三菩提を得已りて一切衆生の有相を行ずるに、當に無所有中に住することを得しむべきなり」と。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如く思惟し已りて阿耨多羅三藐三菩提心を發す、一切衆生を度せんが爲の故に。菩薩摩訶薩の行ずる所の次第行次第學次第道とは、過去の諸の菩薩摩訶薩の道を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得る所の如く、是新發意の菩薩は應に六波羅蜜、謂ゆる檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を學すべし。是菩薩摩訶薩、若し檀那波羅蜜を行ずる時に、自ら布施を行じ、亦人を教へて布施せしめ、布施の功德を讚歎し、布施を行ずる者を歡喜し讚歎す、是布施の因緣を以ての故に大財富を得。是菩薩は慳心を遠離して衆生に布施し、飮食衣服香華瓔珞房舍臥具燈燭、種種資生に須ふる所盡く之を給與す。菩薩摩訶薩は是布施及び持戒を行じて天人中に生じて大尊貴なることを得、是持戒布施を以ての故に禪定衆を得、是布施持戒禪定を以ての故に智慧衆解脱衆解脱知見衆を得。是菩薩は是布施持戒禪定衆智慧衆解脱衆解脱知見衆に因るが故に、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて佛國土を淨むることを得、佛國土を淨め已りて衆生を成就す、衆生を成就

【次第行等】行、學、道は語異るも義一なり、次第とは麁より細に、易より難に進むなり。
【多く諸佛を供養せる菩薩】觀音勢至文殊彌勒等。
【名有り】賢聖學無學の名稱分別あるをいふ。
【是念等】法を聞き次第に學して、分別するに諸法空なるを念じ發心す。
【發心して阿耨…得ざらんや】實相增減なければ、作佛するもせざるも等一なれど、發心して作佛せざらんやとなり。
【菩薩…行ずるところ等】菩薩の次第行學を六度に就て明す。
【1】布施に就て。
【持戒布施等】衣食等の布施は所益少くして持戒の無

慚無畏を以て衆生に施すに如かず、故に施より持戒となり、戒を護るが故に定心を得。

【智慧衆等】定心清淨の故に戲論なく諸著を捨て慧衆を成じ、この慧を以て煩惱、縛を破し解脫を得、了了知見して解脫を證するを得。此に五分をいふも六度と通ず。

【2】持戒に就て。

【3】忍辱に就て。

し已りて一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉ず、法輪を轉じ已りて三乘の法を以て衆生をして生死を度脫せしむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は是布施を以て次第行、次第學、次第道あるも是れ皆得べからず。何を以ての故に。自性所有無きが故に。(2)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より以來自ら持戒を行じ、人を教へて持戒せしめ、持戒の功德を讃歎し、持戒を行ずる者を歡喜し讃歎す、持戒及び布施の因緣の故に天人中に生じて大尊貴なることを得。貧窮の者を見ては施すに財物を以てし、持戒せざる者には教へて持戒せしめ、亂意の者には教へて禪定あらしめ、愚癡の者には教へて智慧あらしめ、解脫無き者には教へて解脫あらしめ、解脫知見無き者には教へて解脫知見あらしめ、是持戒禪定智慧解脫解脫知見を以ての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて佛國土を淨むることを得、佛國土を淨め已りて衆生を成就し、衆生を成就し已りて一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉ず、法輪を轉じ已りて三乘法を以て衆生を度脫す。是の如く須菩提、菩薩は是持戒を以て次第行し、次第學、次第道するも是事皆得べからず。何を以ての故に。一切法の自性所有無きが故に。(3)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初より已來、自ら羼提波羅蜜を行じ、人を教へて羼提を行ぜしめ、羼提の功德を讃歎し、羼提を行ずる者を歡喜し讃歎す。羼提波羅蜜を行ずる時に布施の衆生をして各滿足せしめ、教へて持戒せしめ、教へて禪定乃至解脫知見せしめ、是布施持戒禪定智慧の因緣を以ての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位中に入り、菩薩位中に入り已りて佛國土を淨むることを得、佛

【4】精進に就て。

【5】禪定に就て。

【6】般若に就て。

國土を淨むることを得已りて衆生を成就し、衆生を成就し已りて一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉じ、法輪を轉じ已りて三乘法を以て衆生の生死を度脱す。是の如く須菩提、菩薩は羼提波羅蜜を以て次第行、次第學、次第道するも、是事皆得べからず。何を以ての故に。一切法の自性所有無きが故に。(4)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初より已來、自ら毘梨耶波羅蜜を行じ、人を教へて毘梨耶を行ぜしめ、毘梨耶を行ずる功德を讚歎し、毘梨耶を行ずる者を歡喜し讚歎す。乃至是事皆得べからず、自性所有無きが故に。(5)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初より已來、自ら禪に入り無量心に入り無色定に入り、亦人をも教へて禪に入り無量心に入り無色定に入らしめ、禪に入り無量心に入り無色定に入る功德を讚歎し、禪無量心無色定を行ずる者を歡喜し讚歎す。是菩薩は諸の禪定無量心に住して、布施の衆生をして各滿足せしめ、教へて持戒せしめ、教へて禪定智慧あらしめ、是布施禪定智慧解脱解脱知見の因緣を以ての故に、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入る、菩薩位に入り已りて佛國土を淨め、佛國土を淨め已りて衆生を成就し、衆生を成就し已りて一切種智を得、一切種智を得已りて法輪を轉ず、法輪を轉じ已りて三乘法を以て一切の衆生を度脱す。乃至是事皆得べからず。自性所有無きが故に。(6)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は初より已來、般若波羅蜜を行じ、布施の衆生をして各滿足せしめ、教へて持戒禪定智慧解脱解脱知見せしむ。是菩薩は般若波羅蜜を行ずる時に、自ら六波羅蜜を行じ、亦他人をも教へて六波羅蜜を行ぜしめ、六波羅蜜の功德を讚歎し、六波羅蜜を行ずる者を歡喜し讚歎す。

【三】菩薩の次第行學を六念に就て明す。

【1】初に念佛に就て、五蘊色身等を以て念ぜざるは無性にて相應する念佛なるを明す。

是菩薩は是檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜の因縁及び方便力を以て、聲聞辟支佛地を過ぎて菩薩位に入る。乃至是事得べからず、自性所有無きが故に。須菩提、是を初發意菩薩摩訶薩の次第行次第學次第道と名く。

(三)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の次第行次第學次第道とは、菩薩摩訶薩初より已來、一切種智相應の心を以て諸法の無所有性を信解して六念、謂ゆる念佛念法念僧念戒念捨念天を修するなり。(1)須菩提、云何が菩薩摩訶薩は念佛を修す、菩薩摩訶薩の念佛は色を以て念ぜず、受想行識を以て念ぜず。何を以ての故に。是れ色は自性無く、受想行識も自性無ければなり、若し法自性無ければ是を無所有と爲す。何を以ての故に。憶する無きが故に、是を念佛と爲す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の念佛は三十二相を以て念ぜず、亦金色身を念ぜず、丈光を念ぜず、八十隨形好を念ぜず。何を以ての故に。是れ佛身は自性無きが故に。若し法無性なれば、是を無所有と爲す。何を以ての故に。憶する無きが故に。是を念佛と爲す。復次に須菩提、戒衆を以て佛を念ずべからず、定衆智慧衆解脫衆解脫知見衆を以て佛を念ずべからず。何を以ての故に。是衆自性有ること無ければなり、若し法自性無ければ是を無所有と爲す。何を以ての故に。憶する無きが故に。是を念佛と爲す。復次に須菩提、十力を以て佛を念ずべからず、四無所畏四無礙智十八不共法を以て佛を念ずべからず、大慈大悲を以て佛を念ずべからず。何を以ての故に。是諸法自性無ければなり、若し法自性無ければ是を法に非ずと爲す、念ずる所無き、是を念佛と爲す。復次に須菩提、十二因緣

【2】念法。

【3】念僧。

【4】念戒。

法を以て佛を念ずべからず。何を以ての故に。是因緣法は自性無ければなり。若し法自性無ければ是を法に非ずと爲す、念ずる所無き是を念佛と爲す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、應に念佛すべし、是を菩薩初發意の次第行次第學次第道と爲す。是菩薩摩訶薩は次第行次第學次第道中に住して、能く四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分を具足し、空三昧無相無作三昧乃至一切種智を修行す、諸法の性所有無きが故に、是菩薩は諸法性所有無く、是中有性無く、無性無きことを知る。(2)須菩提、云何が菩薩摩訶薩は應に念法を修すべき。須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、善法を念ぜず不善法を念ぜず、有記法を念ぜず無記法を念ぜず、世間法を念ぜず出世間法を念ぜず、淨法を念ぜず不淨法を念ぜず、聖法を念ぜず凡夫法を念ぜず、有漏法を念ぜず無漏法を念ぜず、欲界繋法色界繋法無色界繋法を念ぜず。有爲法無爲法を念ぜず、何を以ての故に、是諸法は自性無ければなり、若し法自性無ければ是を法に非ずと爲す、念ずる所無き、是を念法と爲す。念法中に無所有性を學するが故に、乃至當に一切種智を得べし。是菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時、諸法の無所有性を得、是無所有性中非有相非無相なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に念法を修すべし、是法中に於て乃至少許の念も無し、何に況んや念法をや。(3)須菩提、菩薩摩訶薩は云何が應に念僧を修すべき。須菩提、菩薩摩訶薩の念僧は、無爲法なるが故に、佛の弟子衆有ることを分別するも、是中乃至少許の念無し、何に況んや念僧をや。是の如く菩薩摩訶薩は應に念僧すべし。(4)須菩提、菩薩摩訶

【聖戒等】聖戒乃至知者所讚の戒は道共戒。具足戒は廣略の律義戒、隨定戒は定共戒と分ちて得べきも、總じては無所得無盡の淸淨戒なり。

【5】念捨。

【自念捨他念捨】施捨の能所自他を分別するなり。

【6】念天。

【四】諸法非有にして道智果ありとする所以を問答す。

【是色性實有等】聲聞の智慧を以て色等の法を見る是れ實有等とすべきやを反問す。

薩は云何が應に念戒を修すべき。須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より已來、應に聖戒、無缺戒、無隙戒、無瑕戒、無濁戒、無著戒、自在戒、智者所讚の戒、具足戒、隨定戒を念ずべし。應に是戒は無所有性なりと念ずべし。乃至少許の念も無し、何に況んや念戒をや。(5)須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より已來應に念捨すべし、若は自念捨若は念他捨、若は捨財若は捨法、若は捨煩惱、是捨得べからずと觀ずるが故に、乃至少許の念も無し、何に況んや念捨をや。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に念捨すべし。(6)須菩提、云何が菩薩摩訶薩は應に念天すべき。須菩提、菩薩摩訶薩は是念を作さく「四天王諸天は信戒施聞慧有る所のもの、此間に命終して彼の天處に生ぜり、我も亦是信戒施聞慧有り。乃至他化自在天は信戒施聞慧有る所のもの、此間に命終して彼の天處に生ぜり、我も亦是信戒施聞慧有り」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に是天を念ずべし、無所有性中尚少許の念も無し、何に況んや念天をや。須菩提、菩薩摩訶薩は是六念を行ず。是を次第行次第學次第道と名く。」

(四)爾時、須菩提佛に白して言さく「世尊、若し一切法無所有性なれば、謂ゆる色乃至識、眼乃至意、色乃至法は是れ無所有性なり、眼界乃至意識界も是れ無所有性なり。檀那波羅蜜乃至般若波羅蜜、內空乃至無法有法空、四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智も是れ無所有性なりと念ず。世尊、若し一切法無所有性なれば、是れ則ち道無く智無く果無からんか。」佛須菩提に告げたまはく「汝是色性實有なりと見るや不や、乃至一切種智の

【淨命】正命なり。

【一念品】無所得即道果とし、一念に萬行を具し、一無相の六度圓修を說く。

【二】無所得是れ道果なるを明す。

性實有なりと見るや不や。』須菩提言さく『見ざるなり、世尊。』佛須菩提に告げたまはく、『汝若し諸法實有なりと見ざれば、云何が是問を作すや。』須菩提言さく『世尊、我れ是法に於て敢て疑ひ有らず、但だ當來世の諸比丘にして聲聞辟支佛道菩薩道を求むる者の爲にす。是人當に是の如く言ふべし、若し一切の法無所有性なれば、誰か垢、誰か淨、誰か縛、誰か解なると。是を知らず解せざるが故に、而して戒を破し正見を破し威儀を破し淨命を破す。是人は是事を破するが故に、當に三惡道に墮すべし。世尊、我れ當來世に是の如きの事有らんことを畏れ、是を以ての故に、佛に問ひたてまつる。世尊、我是法中に於て信じて疑はず悔いざるなり。』

一念品第七十六

(一)須菩提佛に白して言さく『世尊、若し一切法の性無所有なれば、菩薩何等の利益を見るが故に、衆生の爲に阿耨多羅三藐三菩提を發すや。』佛須菩提に告げたまはく『一切法の性無所有なるが故に、菩薩是を以ての故に、衆生の爲に阿耨多羅三藐三菩提を求む。何を以ての故に。須菩提、諸の得有り著有る者は、解脫すべきこと難ければなり。須菩提、諸の相を得る者は道有る無く果有る無く、阿耨多羅三藐三菩提有ること無し。』須菩提佛に白して言さく『世尊、相を得ること無き者は、道有り果有り阿耨多蜜三藐三菩提有りや不や。』

【報得】果報として得たるところ。

「須菩提、所得無きは即ち是れ道、即ち是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。法性壞せざるが故に。若し無所得法に道を得んと欲し、果を得んと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すれば、法性を壞せんと欲すと爲す。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し無所得法即ち是れ道、即ち是れ果、即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なれば、云何が菩薩の初地乃至十地有り、云何が無生法忍有り、云何が報得の神通有り、云何が報得の布施持戒忍辱精進禪定智慧有り、是果報法中に住して能く衆生を成就し、能く佛國土を淨め、及び諸佛に衣服飮食、香華瓔珞、房舍臥具燈燭、種種資生所須の具を供養し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得て是福德を斷せず、乃至般涅槃の後、舍利及び弟子供養を得、爾乃ち滅盡するや。」佛須菩提に告げたまはく、「諸法無所得相なるを以ての故に、菩薩の初地乃至十地を得、報得の神通布施持戒忍辱精進禪定智慧有り、衆生を成就し佛國土を淨む、亦善根の因緣を以ての故に能く衆生を利益し、乃至般涅槃の後舍利及び弟子供養を得。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し諸法無所得相なれば、布施持戒忍辱精進禪定智慧、諸の神通、何の差別か有らん。」佛須菩提に告げたまはく、『無所得法の布施持戒忍辱精進禪定智慧神通差別有ること無し、衆生布施乃至神通に著するを以ての故に分別して說くのみ。』『世尊、云何が無所得法の布施乃至神通差別有ること無き。』『須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、布施を得ず、施者受者、皆得べからずして而も布施を行ず、戒を得ずして而も戒を持し、忍を得ずして而も忍辱を行じ、精進を得ずして而も精進を行じ、禪を得ずして而

【二】一念に六度萬行を具する義を問答す。

【一念】菩薩無生忍を得て一切煩惱を斷じ、諸の憤想分別を除き、無漏心中に安住するなり。

【遠離せず】若し般若を離るれば次第漸行なるも、般若を離れざれば、諸法無礙にして一念中に萬德を行ず。

も禪を行じ、智慧を得ずして而も智慧を行じ、神通を得ずして而も神通を行じ、四念處を得ずして而も四念處を行じ、乃至八聖道分を得ずして而も八聖道分を行じ、空三昧無相無作三昧を得ずして而も空無相無作三昧を行じ、衆生を得ずして而も衆生を成就し、淨佛國土を得ずして而も佛國土を淨め、諸佛法を得ずして而も、阿耨多羅三藐三菩提を得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如きの無所得の般若波羅蜜を行ずべし。菩薩摩訶薩は是無所得の般若波羅蜜を行ずる時、魔若しは魔天破壞すること能はず。」

須菩提佛に白して言さく「世尊、云何が菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、一念中に六波羅蜜四禪四無量心四無色定四念處四正勤四如意足、五根五力七覺分八聖道分三解脫門、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲三十二相八十隨形好を具足し行ずる。」佛須菩提に告げたまはく「菩薩摩訶薩のあらゆる布施は般若波羅蜜を遠離せず、修する所の持戒忍辱精進禪定は、般若波羅蜜を遠離せず、四禪四無量心四無色定修四念處乃至八十隨形好は般若波羅蜜を遠離せず。」須菩提佛に白して言さく「世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を遠離せざるが故に、一念中に六波羅蜜乃至八十隨形好を具足し行ずる。」佛言はく「菩薩の般若波羅蜜を行ずる時のあらゆる布施は、般若波羅蜜を遠離せず、不二相なるを以てなり。持戒の時も亦不二相なり、忍辱を修し精進を勸め禪定に入るも亦不二相なり、乃至八十隨形好も亦不二相なるを以てなり。」須菩提佛に白して言さく「世尊、云何が菩薩摩訶薩の布施する時に不二相なる、乃至八十隨形好を修するに不二相なるや。」「須菩提、

【無相心等】憶想分別を除ける一念、得忍菩薩所行と未得忍菩薩所行の二種中今前者をいふ。

【三】無相無作にして六度諸法を具足することを明す。一に布施。

菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、檀那波羅蜜を具足せんと欲して、檀那波羅蜜中に諸波羅蜜及び四念處乃至八十隨形好を攝す。」『世尊、云何が菩薩布施する時、諸の無漏法を攝するや。』佛須菩提に告げたまはく『若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、無漏心に住して布施すれば、無漏心中に於て相を見ず、謂ゆる誰か施し誰か受け、施す所何物なると。是無相心無漏心、斷愛斷慳貪心を以て而して布施を行じ、是時に布施を見ず、乃至阿耨多羅三藐三菩提の法を見ず。是菩薩は無相心無漏心を以て持戒して、是戒を見ず乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て忍辱して、是忍辱を見ず乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て精進して、是精進を見ず乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て禪定に入り、是禪定を見ず乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て智慧を修して、是智慧を見ず乃至一切の佛法を見ず。無相心無漏心を以て四念處を修して、是四念處を見ず乃至八十隨形好を見ず。」

『世尊、若し諸法無相無作なれば、云何が檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足し、云何が四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分を具足し、云何が空三昧無相三昧無作三昧佛十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲を具足し、云何が三十二相八十隨形好を具足する。』佛須菩提に告げたまはく『菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずるや、無相心無漏心を以て布施し、食を須つに食を與へ、乃至種種の所須、盡く之を給與す、若は內若は外、若は其身を支解し、若は國城妻子を衆生に布施す。

【四】持戒。

若し人有り、來りて菩薩に語りて言く、何ぞ是布施を用て是益する所無きの行般若波羅蜜を爲す」菩薩是念を爲さく、「是人來りて我が布施を呵すと雖も我れ終に悔いず、我れ當に勤て布施を行じて與へざるべからず、施し已りて一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、亦是相を見ず。誰か施し、誰か受け、施す所何物なる、廻向者は誰なる、何等か是れ廻向法なる、何等か是れ廻向處謂ゆる阿耨多羅三藐三菩提なる、是相皆見るべからず。何を以ての故に。一切法は內空を以ての故に空なり、外空の故に空なり、內外空の故に空なり、空空有爲空無爲空畢竟空無始空散空性空一切法空自相空の故に空なり」是の如く觀じて是念を作さく、「廻向者は誰れなる、何處に廻向する、何法を用て廻向する」是を正廻向と名く。爾時に菩薩は能く衆生を成就し佛國土を淨め、能く檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜乃至三十七助道法、空無相無作三昧乃至十八不共法を具足す。是菩薩、是の如く檀那波羅蜜を具足して、而も世間の果報を受けざること、譬へば他化自在諸天の意の所須に隨ひて卽ち皆之を得るが如く、菩薩も亦是の如く心に所願を生じ、意に隨ひて卽ち得。是菩薩摩訶薩は、是布施の果報を以ての故に能く諸佛を供養し、亦能く一切衆生天人及び阿修羅を滿足す。是菩薩は檀那波羅蜜を以て衆生を攝取し、方便力を用て三乘法を以て衆生を生死より度脫す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は無相無得無作の諸法中に於て檀那波羅蜜を具足す。

(四)須菩提、菩薩摩訶薩は云何が無相無得無作法中に於て尸羅波羅蜜を具足する。須菩提、

【聖無漏入八聖道分戒】道共戒にして無漏道に於て自ら成就する戒行なり。
【自然戒】性相應法を皆具足の戒。
【報得戒】定報によりて生ずる戒。
【受得戒】羯摩作法によりて受得せる戒。
【心生戒】自誓受得の戒。
【修得】上界定修行の力によりて得るを云ふ。

是菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜を行ずる時、種種の戒、謂ゆる聖無漏入八聖道分戒、自然戒、報得戒、受得戒、心生戒を持す。是の如き等の不缺不破不雜不濁不著自在戒、智所讃戒、是の戒は所取、若は色若は受想行識、若は三十二相八十隨形好若は刹利大姓婆羅門大姓居士大家、若は四天王天三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天梵衆天光音天徧淨天廣果天無想天無煩天無熱天妙見天喜見天阿迦尼吒天虛空處天識處天無所有處天非有想非無想處天、若は須陀洹果、若は斯陀含果、若は阿那含果、若は阿羅漢果、若は辟支佛道、若は轉輪聖王、若は天王無きを用て、但だ一切衆生の爲に之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。無相無得無二を以て廻向す、世俗法の爲の故に第一實義には非ず。是菩薩は尸羅波羅蜜を具足し、方便力を以て四禪を起し、味著せざるが故に五神通を得、四禪に因て天眼を得。是菩薩は二種の天眼、修得と報得とに住す。天眼を得已りて東方現在の諸佛を見、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで、所見の事の如く失せず、南西北方四維上下の現在の諸佛乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るまで所見の如く失せず。是菩薩は天耳淨を用て人耳に過ぎて十方諸佛の說法を聞き、所聞の如く失せず、能く自ら饒益し亦他人をも益す。是菩薩は知他心智を以て、十方諸佛の心を知り、及び一切衆生の心を知り、亦能く一切衆生を饒益す。是菩薩は宿命智を用て過去の諸業因緣を知り、是業因緣を失せざるが故に、是衆生の在在處處生ずる所悉く知る。是菩薩は是漏盡智を用て、衆生をして須陀洹果乃至阿羅漢果辟支佛道を得しめ、在在處處能く衆生をして善法の中に入らしむ。是の如く須菩提、

【五】忍辱。

菩薩摩訶薩は諸法の無相無得無作の中に於て尸羅波羅蜜を具足す。」「(五)世尊、云何が諸法無相無作無得なるに、菩薩摩訶薩能く羼提波羅蜜を具足するや。」「須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より已來乃至道場に坐するまで、其中間に於て、若し一切衆生來り、瓦石刀杖を以て是菩薩に加へんに、菩薩は是時に瞋心を起さず、乃至一念をも生ぜず、爾時に菩薩は二種の忍を修すべし、一には一切衆生の惡口罵詈若は刀杖瓦石を加へんに瞋心起らず、二には一切法無生無生法忍なり、菩薩若し人來りて惡口罵詈し、或は瓦石刀杖を以て之を加へんに、爾時、菩薩は是の如く思惟すべし、我を罵る者は誰か、譏り訶する者は誰か。誰か打擲する者なる、誰か有受者なると。是時に菩薩は應に諸法の實性を思惟すべし、謂ゆる畢竟空にして法無く、衆生無く、諸法尙得べからず、何に況んや衆生有らんやと。是の如く諸法の相を觀ずる時に罵者を見ず、割截者を見ず、是菩薩、是の如く諸法の相を觀ずる時に即ち無生法忍を得。云何が無生法忍と名くる。諸法の相常に不生なれば、諸の煩惱も本より已來亦常に不生なることを知ればなり。是菩薩摩訶薩は是二忍に住して、能く四禪四無量心四無色定四念處乃至八聖道分三解脫門、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲を具足す。是菩薩は是聖無漏出世間法に住し、一切聲聞辟支佛に共ならずして聖神通を具足す。聖神通に住し已りて天眼を以て東方の諸佛を見、是人は念佛三昧を得、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで終に斷絕せず、南西北方四維上下も亦復た是の如し。是菩薩は天耳を用て十方諸佛の所說の法を聞き、所聞の如く衆生の爲に說

く。是菩薩は亦十方諸佛の心を知り、及び一切衆生の念を知り、知り已りて其心に隨ひて而して說法す。是菩薩は宿命智を以て一切衆生の宿世の善根を知り、衆生の爲に說法し、其をして歡喜せしむ。是菩薩は漏盡神通を以て衆生を敎化して三乘を得しむ。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以て衆生を成就し、一切種智を具足し、阿耨多羅三藐三菩提を得て法輪を轉ず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は無相無得無作の法中に羼提波羅蜜を具足す。

(六)須菩提言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は云何が諸法の無相無作無得法中に於て、能く毘梨耶波羅蜜を具足するや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、身精進心精進を成就して初禪に入り、乃至第四禪に入りて種種の神通力を受け、能く一身を分ちて多身と爲し、乃至手に日月を捫摸す、身精進を成就するが故に飛で東方に到り、無量百千萬の諸佛世界を過ぎて諸佛に飲食衣服醫藥臥具、香花瓔珞種種所須を供養し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、福德果報終に滅盡せず。是菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時に、一切世間の天及び人は勤め設けて衣服飲食を供養し、乃至無餘涅槃に入りし後、舍利及び弟子供養を得。亦是神通力を以ての故に諸佛の所に至りて法敎を聽受し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に違失せず。是菩薩は一切種智を修する時、佛國土を淨め衆生を成就す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて身精進を成就し、能く毘梨耶波羅蜜を具足す。須菩提、云何が菩薩は心精進を成就して能く毘梨耶波羅蜜を具足する。

【六】精進。

須菩提、菩薩摩訶薩の心精進とは、是心精進聖無漏を以て八聖道分に入り、身口の不善業をして入ることを得しめず。亦諸法の相を取らず、若は常若は無常、若は苦若は樂、若は我若は無我、若は有爲若は無爲、若は欲界若は色界若は無色界、若は有漏性若は無漏性、若は初禪乃至第四禪、若は慈悲喜捨、若は無邊虛空處乃至非有想非無想處、若は四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分、若は空無相無作、若は佛の十力乃至十八不共法なりと相を取らず。若は常若は無常、若は苦若は樂、若は我若は無我、若は須陀洹果若は斯陀含果若は阿那含果若は阿羅漢果、若は辟支佛道、若は菩薩道、若は阿耨多羅三藐三菩提、若は是れ須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢、若は是れ辟支佛是れ菩薩是れ佛なりと相を取らず。是衆生は三結を斷ずるが故に須陀洹を得、是衆生は三毒薄きが故に斯陀含を得、是衆生は下分結を斷ずるが故に阿那含を得、是衆生は上分結を斷ずるが故に阿羅漢を得、是衆生は辟支佛道を以ての故に辟支佛を得、是衆生は道種智を行ずるが故に菩薩と名くるも、亦是諸法の相を取らず。何を以ての故に。性を以て相を取るべからず、是性無きが故に。是菩薩は是心精進を以ての故に廣く衆生を利益するも、亦衆生を得ず。是を菩薩の毘梨耶波羅蜜を具足し、諸佛法を具足し、佛國土を淨め衆生を成就すと爲す、不可得の故に。是菩薩は身精進心精進成ずるが故に、一切諸善法を攝取す、是法も亦著せざるが故に、一佛國より一佛國に至りて、衆生を利益せんが爲に作す所の神通意に隨ひて無礙なり。若は諸華を雨し、若は諸香を散じ、若は伎樂を作し、若は大地を動し、若は光明を放ち、若は

【四七】禪定。

七寶莊嚴の國土を示し、若は種種身を現じ、若は大智光明を放ちて聖道を知らしめ、殺生乃至邪見を遠離せしめ、或は布施を以て衆生を利益し、或は持戒を以て、或は身體を支解するを以て、或は妻子を以て、或は國土を以て、或は己身を以て給施し、所に隨ひて方便して衆生を利益す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、無相無作無得の諸法中に、身心精進を用て能く毘梨耶波羅蜜を具足す。」

「世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、無相無作無得の法中に住して能く禪那波羅蜜を具足するや。」「須菩提、菩薩摩訶薩は佛の諸禪定を除き、餘の一切の諸禪三昧皆能く具足す。是菩薩は諸欲諸惡不善法を離れ、離生喜樂有覺有觀にして初禪に入り乃至第四禪に入る、是慈悲喜捨の心を以て一方に徧滿し、乃至十方一切世間に徧滿す。是菩薩は一切の色相を過ぎ、有對相を滅し、別異相を念ぜざるが故に無邊虛空處に入り、乃至非有想非無想處に入る。是菩薩は禪那波羅蜜中に於て住し、逆順に八背捨九次第定に入り、空三昧無相無作三昧に入り、或る時は無相三昧に入り、或る時は如電光三昧に入り、或る時は聖正三昧に入り、或る時は如金剛三昧に入る。是菩薩は禪那波羅蜜中に住し、三十七助道法を修し、道種智を用て一切禪定に入り、乾慧地性地八人地見地薄地離欲地已辦地辟支佛地を過ぎて菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて佛地を具足す、是諸地中に乃至阿耨多羅三藐三菩提を行じて中道に道果を取らず。是菩薩は是禪那波羅蜜中に住して、一佛國より一佛國に至りて諸佛を供養し、諸佛の植うる所の諸善根に從ひて佛國土を淨め、一國よ

【八】 般若。

り一國に至りて衆生を利益す。或は布施を以て衆生を攝取し、或は持戒を以てし、或は三昧を以てし、或は智慧を以てし、或は解脱を以てし、或は解脱知見を以て衆生を攝取し、衆生を敎へて須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を得しめ、諸有の善法、能く衆生をして得道せしむるもの皆敎へて得しむ。是菩薩は此禪那波羅蜜中に住して、能く一切陀羅尼門を生じ、四無礙智を得、報得諸神通を得。是菩薩は終に母人の胞胎に入らず、終に五欲を受けず、生不生無し、生ずと雖も亦生法の汚す所と爲らず。何を以ての故に。是菩薩は一切の作法を見ること幻の如くして、而も衆生を利益し、亦衆生及び一切の法を得ずして衆生を敎へて無所得處を得しむればなり。是は世俗法なるが故に第一實義には非ず。是禪那波羅蜜に住して一切禪定解脱三昧を行じ、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、終に禪那波羅蜜を離れず。是菩薩は是の如く道種智を行ずる時に、一切種智を得て一切の煩惱習を斷じ、斷じ已りて自ら其身を益し亦他人をも益す、自ら益し他を益し已りて一切世間の天及び人阿修羅の爲に福田を作す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時に、能く無相禪那波羅蜜を具足す。」「世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時に、無相無作無得法中に住し、般若波羅蜜を修し具足するや。」「須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、諸法に於て定實の相を見ず。是菩薩は色不定にして實相に非ずと見、乃至識不定にして實相に非ずと見る、色生を見ず乃至識生を見ず、若し色生を見ず乃至識生を見ざれば一切法若は有漏若は無漏、

【空淨佛道】空無相清淨なる無上菩提の行法なり。

來處を見ず去處を見ず、亦集處をも見ず。是の如く觀ずる時、色性乃至識性を得ず、亦有漏無漏法性をも見ず。是菩薩は般若波羅蜜を行ずる時に、一切諸法の無所有相を信解す。是の如く信解し已りて內空乃至無法有法空を行じ、諸法に於て所著無し、若は色若は受想行識乃至阿耨多羅三藐三菩提なりと。是菩薩は無所有の般若波羅蜜を行じて能く菩薩道、謂ゆる六波羅蜜乃至三十七助道法、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法三十二相八十隨形好を具足す。是菩薩は空淨佛道中、謂ゆる六波羅蜜三十七助道法報得の神通に住し、是法を以て衆生を饒益し、宜しく布施を以て攝すべきは、教へて布施せしめ、持戒を以て攝すべきは、教へて持戒せしめ、宜しく禪定智慧解脫解脫知見を以て攝すべきは、教へて禪定智慧解脫解脫知見を修せしめ、宜しく諸道法を以て教ふべき者は、教へて須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を得しめ、宜しく佛道を以て化すべき者は、教へて菩薩道を得、佛道を具足せしむ。是の如き等、其所應の道地に隨ひて而して之を敎化し、各をして所を得しむ。是菩薩は種種の神通力を現ずる時、無量如恆河沙の國土を過ぎて衆生を生死より度脫し、其所須に隨ひて皆之を供給し各をして滿足せしめ、一國土より一國土に至りて淨妙國土を見、以て自ら己の佛國土を莊嚴す。譬ば他化自在天中に資生の所須、意に隨ひて自ら至るが如く、亦諸淨佛國の求欲を離るるが如し。是人は是報得の檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜報得の五神通を以て菩薩道を行じ、道種智一切功德を成就して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是菩薩は爾

【無相法中】能く具足して大恩分大功徳成就す。

【六喩品】前に一念中に諸度を具することを明し、此品諸法空無相なるも能く諸度を具することを明す。【一】無相中六度を差別し修行することを問答す。

【菩薩は五陰の夢の如く等】空法差別に著するを以て問ふなり、五陰夢幻の如く空有執せずば、六度を行じて空を妨げずと答ふ。

時に色法乃至識を受けず、一切法若は善若は不善、若は世間若は出世間、若は有漏若は無漏、若は有爲若は無爲を受けず。是の如く一切法皆受けず、是菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、國土一切所有衆生の物皆主有ること無し。何を以ての故に。是菩薩は一切の法を行じて受けず、得べからざるを以ての故に。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は無相法中に能く般若波羅蜜を具足す。」

六喩品第七十七

「須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が無相、不可分別、自相空なる諸法中に六波羅蜜、謂ゆる檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を具足し修する。世尊、云何が無異法中に而も分別して異相を說く。世尊、云何が般若波羅蜜は檀尸羼提精進禪を攝する。世尊、云何が異相法を行じ、一相道を以て得果するや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は五陰の夢の如く響の如く影の如く焔の如く幻の如く化の如くなるに住す。是中に住して布施を行じ、戒を持し、忍辱を修し、精進を勤め、禪定に入り、智慧を修す。是五陰は實に夢の如く響の如く影の如く焔の如く幻の如く化の如し、五陰は夢の如く無相なり、乃至化の如く無相なりと知る。何を以ての故に。夢は自性無く、響影焔幻化皆自性無し、若し法自性無ければ、是法は無相なり、若し法無相なれば、是法

【菩薩の布施無相なり等】六度圓具を明す、一に布施如幻無相。

【報得の無漏】常に無漏清淨波羅蜜を修する故に、自ら得るところをば報得無漏とし、能く、變身神足等をなす。

は一相、謂ゆる無相なればなり。是の因緣を以ての故に、須菩提當に知るべし、菩薩の布施無相なり、施者無相なり、受者無相なりと。能く是の如く布施を知るは、是れ能く檀那波羅蜜を具足す。乃至能く般若波羅蜜を具足し、能く四念處乃至八聖道分を具足し、能く內空乃至無法有法空を具足し、能く空三昧無相無作三昧を具足し、能く八背捨九次第定五神通五百陀羅尼門を具足し、能く佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法を具足す。是の菩薩は是報得の無漏法中に住し、飛んで東方無量國土に到り、諸佛に衣服飮食を供養し、乃至其所須に隨ひて而して之を供養し、亦衆生を利益するに、布施を以て攝すべき者は、而して布施もて之を攝し、持戒を以て攝すべき者は敎へて持戒せしめ、忍辱精進禪定智慧を以て攝すべき者は、敎へて忍辱精進禪定智慧あらしめて而して之を攝取す、乃至種種の善法を以て攝すべき者は、種種善法を以て而して之を攝取す。是の菩薩は、是の一切の善法を成就して世間身を受くるも、世間生死の汚す所と爲らず、衆生の爲の故に、天上人中に於て尊貴富樂を受け、是尊貴富樂を以て衆生を攝取す。是の菩薩は一切法の無相なることを知るを以ての故に、須陀洹果を知るも亦中に住せず、斯陀含果阿那含果阿羅漢果を知るも亦中に住せず、辟支佛道を知るも亦中に住せず。何を以ての故に、是の菩薩は一切種智を用て一切法を知り已りて、當に一切種智を得べく、聲聞辟支佛と共ならざればなり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は一切法の無相なることを知り已りて、六波羅蜜の無相なることを知り、乃至一切佛法の無相なることを知る。

【二】持戒。【聖人】應供の智者。【八聖道分等】無相相は正見、正見力を得已つて正行と名け是時衆生を惱まさず諸惡を作さざるは正語正業正命、發心所作は精進、繫念は正念、攝心は正定なり。【名字戒】名字施設の戒。自然戒は法爾具足の戒、律儀戒は止惡防非の法門、作戒は作法受得身口業別戒、無作戒は本有無作の無量戒、威儀戒は凡威儀の三千八萬乃至無量の戒、非威儀戒は威儀に異る性戒なり。【是願等】戒善を小果に廻向せざるなり、無上菩提尙所得なし、況んや小果をや。【一相】無相無住無得なり、何ぞ彼此の果を得んとせんや。

（二）復次に須菩提、菩薩摩訶薩は五陰の夢の如く響の如く影の如く焔の如く幻の如く化の如くなるに住し、能く無相尸羅波羅蜜を具足す。是戒は不缺不破不雜不著にして聖人の讃ずる所の無漏戒なり、八聖道分に入る。是戒中に住して一切戒、謂ゆる名字戒自然戒律儀戒、作戒無作戒、威儀戒非威儀戒を持す。是菩薩摩訶薩は、諸戒を成就して是願を作さず、我れ此戒の因緣を以ての故に、刹利大姓婆羅門大姓居士大家、若は小王家、若は轉輪聖王家、若は四天王天處に生じ、若は三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天に生ぜんと。是願を作さず、我れ持戒の因緣の故に、當に須陀洹果斯陀含果阿羅漢果辟支佛道を得べしと。何を以ての故に。一切の法無相謂ゆる一相、無相の法は能く無相の法を得ず、有相の法は能く有相の法を得ず、有相の法は能く無相の法を得ず、無相の法は能く有相の法を得ざればなり。是の如く須菩提、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、能く無相尸羅波羅蜜を具足して、而して菩薩位に入り、菩薩位に入り已りて無生法忍を得、道種智を行じて報得の五神通を得、五百陀羅尼門に住して四無礙智を得、一佛國より一佛國に至りて諸佛を供養し、衆生を成就し、佛國土を淨む、五道の中に入ると雖も生死の業報染汚すること能はず。須菩提、譬へば轉輪聖王の化するに坐臥行住すと雖も來處を見ず、去處を見ず、住處坐處臥處を見ずして、而して能く衆生を利益するも、亦衆生を得ざるが如し、菩薩も亦是の如し。須菩提、譬へば須扇多佛の阿耨多羅三藐三菩提を得、三乘の爲に法輪を轉じて菩薩の記を得ること有ること無き者を化し、作佛し已りて身壽命を捨て、無餘涅槃に入るが

【三】忍辱。

【生忍と法忍】衆生の無生空と、諸法の無生空とを證するなり。

【無相忍】無生忍なり、無生の故に能所我他等の相あることなし。

如く、須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く般若波羅蜜を行ずる時に、能く尸羅波羅蜜を具足す、尸羅波羅蜜を具足し已りて一切の善法を攝す。

(三)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、五陰の夢の如く響の如く影の如く焰の如く幻の如く化の如くなるに住し、無相羼提波羅蜜を具足す。「世尊、云何が菩薩摩訶薩は無相羼提波羅蜜を具足するや。」「須菩提、菩薩摩訶薩は二忍中に住して能く羼提波羅蜜を具足す。何等をか二忍とする、生忍と法忍となり。初發意より乃至道場に坐するまで、其中間に於て、若し一切の衆生來りて、罵詈惡語、或は瓦石刀杖を以て是菩薩に加へんに、是菩薩は羼提波羅蜜を具足せんと欲するが故に、乃至一念の惡をも生ぜずして、是菩薩は是の如く思惟す、『我を罵る者は誰か、我を割く者は誰か、惡言を以て我に加ふる者は誰か、瓦石刀杖を以て我を害する者は誰か』と。何を以ての故に。是菩薩は一切法に於て無相忍を得たるが故に。云何が是念を作さん、是人我を罵り我を害すと。若し菩薩摩訶薩、是の如く行ずれば、能く羼提波羅蜜を具足し、是羼提波羅蜜を具足するを以ての故に無生法忍を得。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が無生法忍と爲し、是忍何をか斷ずる所とし、何をか知る所とする。」佛須菩提に告げたまはく、「法忍を得て乃至少許の不善法を生ぜず、是故に無生忍と名く。一切の菩薩の斷ずる所の煩惱の盡くる、是を斷と名け、知慧を用て一切法の不生なることを知る、是を智と名く。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、諸の聲聞辟支佛の無生法忍と、菩薩摩訶薩の無生法忍とは何等の異が有る。」佛

【須陀洹の若は智若は斷】菩薩の無生法忍智斷との同異を明す。
【異と爲す】總ての智斷を成就して別法を得たりとせず、これ二乘に優る異點なり。
【四】精進。

須菩提に告げたまはく、「諸の須陀洹の若は智若は斷、是を菩薩の忍と名け、斯陀含の若は智若は斷、是を菩薩の忍と名け、阿那含の若は智若は斷、是を菩薩の忍と名け、阿羅漢の若は智若は斷、是を菩薩の忍と名け、辟支佛の若は智若は斷、是を菩薩の忍と名け、是を異と爲す。須菩提、菩薩摩訶薩は、是忍を成就して一切の聲聞辟支佛に勝れ、是報得の無生忍中に住して菩薩道を行じ、能く道種智を具足す。道種智を具足するが故に、常に三十七助道法及び空無相無作三昧を離れず、五神通を離れず、五神通を離れざるが故に、能く衆生を成就し佛國土を淨む。衆生を成就し佛國土を淨め已りて、當に一切種智を得べし。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は無相羼提波羅蜜を具足す。

(四)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は無相の五陰の夢の如く響の如く影の如く焰の如く幻の如く化の如くなるに住して、身精進心精進を行ず。身精進を以ての故に神通を起し、神通を起すが故に十方國土に到りて、諸佛を供養し衆生を饒益す。身精進力を以て衆生を教化して三乘に住せしむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、能く無相精進波羅蜜を具足す。是菩薩は心精進聖無漏精進を以て八聖道分中に入り、能く毘梨耶波羅蜜を具足す。是毘梨耶波羅蜜は皆一切の善法、謂ゆる四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分四禪四無量心四無色定八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法を攝す。是中に菩薩は、是法を行じて應に一切種智を具足すべし、一切種智を具足し已りて一切煩惱の習を斷じ、三十二相身を具足し滿じ、無等無量の光明を放つ、光明を放ち

【五】禪定。

【聖正】無漏聖道に安立するなり。

【色界等】定味の報境なればなり。

已りて三び十二行法輪を轉ず。法輪を轉ずるが故に、三千大千國土は六種に震動し、光明徧く三千大千國土を照し、三千大千國土中の衆生は說法の聲を聞き、皆三乘法を以て、而して度脫することを得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は精進波羅蜜中に住して、能く大饒益し、及び能く一切種智を具足す。

(五)復次に須菩提、菩薩は無相の五陰の夢の如く響の如く影の如く焰の如く幻の如く化の如くなるに住して、能く禪那波羅蜜を具足す。」「世尊、云何が菩薩は五陰の夢の如く響の如く影の如く焰の如く幻の如く化の如くなるに住して、能く禪那波羅蜜を具足するや。」「須菩提、菩薩摩訶薩は初禪に入り、乃至第四禪に入り、慈悲喜捨に入り、無量心に入り、無邊虛空處に入り、乃至非有想非無想處に入り、空三昧無相無作三昧に入り、如電光三昧に入り、如金剛三昧に入り、聖正三昧に入り、諸佛三昧を除いて諸餘の三昧、若は聲聞辟支佛と共に三昧に入り、皆證し皆入るも亦三昧味を受けず、亦三昧果を受けず。何を以ての故に。是菩薩は是三昧の無相無所有性なることを知ればなり。云何が無相法に無相法味を受け、無所有法に無所有法味を受けん。若し味を受けざれば、則ち禪定力に隨ひて、若は色界若は無色界を生ぜず。何を以ての故に。是菩薩は是二界を見ず、亦是禪をも見ず、亦入禪の者をも見ず、亦是法を用て入禪するものをも見ず、入禪の處をも見ざればなり。若し是法を得ざれば、爾時に菩薩は即ち能く無相禪那波羅蜜を具足す。菩薩は是禪那波羅蜜を用て、能く聲聞辟支佛地を過ぐ。」「須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩は無相

【六】般若。

禪那波羅蜜を具足するが故に、能く聲聞辟支佛地を過ぐるや。』佛須菩提に告げたまはく、『是菩薩は善く內空を學し、善く外空を學し、乃至善く無法有法空を學し、是諸空に於て法の住すべき處無し。若は須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果乃至一切種智、是諸法の空も亦空なり。菩薩摩訶薩は是の如く諸法空を行じて、能く菩薩位中に入る。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩の位なる、云何が位に非ざるや。』『須菩提、一切の有所得は是れ菩薩の位に非ず、一切の無所得は是れ菩薩の位なり。』『世尊、何等をか是れ有所得とし、何等をか是れ無所得とする。』『須菩提、色是れ有所得、受想行識是れ有所得、眼耳鼻舌身意乃至一切種智是れ有所得、是れ菩薩の位に非ず。須菩提、菩薩の位とは、是れ諸法の示すべからず、說くべからざるなり。何等の法をか示すべからず說くべからずとする。若は色乃至一切種智なり。何を以ての故に。須菩提、色の性は是れ示すべからず、說くべからず、乃至一切種智の性は是れ示すべからず、說くべからざればなり。須菩提、是の如きを菩薩の位と名く。是菩薩は入位中に一切禪定三昧具足するも、尙ほ禪定三昧力に隨ひて生ぜず、何に況んや婬怒癡に住し、中に於て罪業を起して生ぜんや。菩薩は但だ幻の如く法中に住して衆生を饒益するも、亦衆生を得ず、亦幻を得ず、若し得る所無ければ、是時に能く衆生を成就し、佛國土を淨む。是の如く須菩提、是を菩薩の無相禪那波羅蜜を具足し、乃至能く法輪を轉ずと名く、謂ゆる不可得の法輪なり。

(六)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、一切法を夢の如く響の如く影の如く

焰の如く幻の如く化の如しと知る。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は云何が一切法を夢の如く響の如く影の如く焰の如く幻の如く化の如しと知る。』『須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時に、夢を見ず、夢を見る者を見ず、響を見ず、響を聞く者を見ず、影を見ず、影を見る者を見ず、焰を見ず、焰を見る者を見ず、幻を見ず、幻を見る者を見ず、化を見ず、化を見る者を見ず。何を以ての故に。是夢響影焰幻化は皆是れ凡夫愚人の顛倒の法なるが故に。阿羅漢は夢を見ず、夢を見る者を見ず、乃至化を見ず、化を見る者を見ず。辟支佛菩薩摩訶薩諸佛も亦夢を見ず、亦夢を見る者を見ず、乃至化を見ず、亦化を見る者を見ず。何を以ての故に。一切法は無所有性不生不定なればなり。若し法にして無所有性不生不定なれば、菩薩摩訶薩は當に云何が般若波羅蜜を行じ、是中に生相定相を取らん、是處然らず。何を以ての故に。若し諸法にして少多も性有り生有り定有らば、般若波羅蜜と名けざればなり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、色に著せず、乃至識に著せず、欲色無色界に著せず、諸禪解脱三昧に著せず、四念處乃至八聖道分に著せず、空三昧無相無作三昧に著せず、檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜に著せず、著せざるが故に能く菩薩の初地を具足し、初地中に於ても亦著を生ぜず。何を以ての故に。是菩薩は是地を得ず、云何が著を生ぜん。乃至十地も亦是の如し。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるも亦般若波羅蜜を得ず、若し般若波羅蜜を行ずる時に、般若波羅蜜を得ざれば、是時に一切法を見て、皆般若波羅蜜中

に入るも亦是法を得ず。何を以ての故に。是諸法と般若波羅蜜とは無二無別なればなり。何を以ての故に。諸法は如法性實際に入るが故に、分別すること無ければなり。』須菩提佛に白して言さく『世尊、若し諸法相無く分別無ければ、云何が是れ善、是れ不善、是れ有漏、是れ無漏、是れ世間、是れ出世間、是れ有爲、是れ無爲なりと說かん。』『須菩提、汝が意に於て云何、諸法實相の中に法有りて、是れ善、是れ不善、乃至是れ有爲、是れ無爲、是れ須陀洹果乃至阿羅漢果、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと說くべきや不や。』『世尊、說くべからざるなり。』『須菩提、是因緣を以ての故に、當に知るべし、一切法は無相無分別無生無定にして示すべからず。須菩提、我れ本菩薩道を行ぜし時も、亦法の性として若は色、若は受想行識、乃至若は有爲、若は無爲、須陀洹果乃至阿耨多羅三藐三菩提なりと得べきもの有ること無し。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、初發意より乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、應に善く諸の法性を學すべし、善く諸の法性を學するが故に、是を阿耨多羅三藐三菩提道と名く。是道を行じて能く六波羅蜜を具足し、衆生を成就し佛國土を淨め、是法中に住して阿耨多羅三藐三菩提を得、三乘法を以て衆生を度脫するも亦三乘に著せず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は無相の法を以て應に般若波羅蜜を學すべし。』

摩訶般若波羅蜜經　卷第二十四

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

四攝品第七十八

【四攝品】空にして善を修するを明す、

【一】二空にして而も諸法を分別することの甚深希有なることを明す。

【善業不善業】罪福を信じて三善業あり、信ぜずして三不善業起る、善福は欲界中の善法善樂果報に名け、不善は憂悲苦惱の果報に名け、不動は色無色界を生ずる因縁業に名く。菩薩はこの三種業皆實ならずと知るなり。

【二空】人法二空、畢竟空は諸法を破し、無始空は衆生相を破す。

（一）須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し諸法、夢の如く響の如く影の如く焰の如く幻の如く化の如くにして實事有ること無く、無所有性自相空なれば、云何が是れ善法、是れ不善法、是れ世間法、是れ出世間法、是れ有漏法、是れ無漏法、是れ有爲法、是れ無爲法なりと分別し、是法能く須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果を得、能く辟支佛道を得、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや。」佛須菩提に告げたまはく、「凡夫愚人は夢を得、夢を見る者を得、乃至化を得、化を見る者を得て、身口意に善業不善業無記業を起し、福業若は罪業を起し、不動業を作す。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、二空中に住し、畢竟空無始空もて衆生の爲に說法して、是言を作さく。『諸衆生、是れ色は空にして所有無し、受想行識は空にして所有無し、十二入十八界は空にして所有なし、色は是れ夢なり、受想行識は是れ夢なり、十二入十八界は是れ夢なり、色は是れ響なり、是れ影なり、是れ焰なり、是れ幻なり、是れ化なり。受想行識も亦是の如し、十二入十八界も是れ夢なり、是れ響なり、是れ

【大福報より拔出】布施を以て慳貪法より拔出せしむるも、衆生はまた是れに著する故、爲に布施果報も實空なることを說き、持戒せしむるなり。

【種種の因緣】布施持戒禪定無常の過失を示す。

影なり、是れ焰なり、是れ幻なり、是れ化なり。是中に陰入界無く、夢無く、亦夢を見る者も無く、響無く、亦響を聞く者も無く、影無く、亦影を見る者も無く、焰無く、亦焰を見る者も無く、幻無く、亦幻を見る者も無く、化無く、亦化を見る者も無く、一切法は根本實性無く所有無し。汝等無陰中に陰有るを見、無入に入有るを見、無界に界有るを見る。是一切の法は皆因緣和合より生じ、顚倒心を以て起り、業の果報に屬す。汝等何を以ての故に諸法空、無根本中に於て、而も根本相を取るや。」是時、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、慳法中に於て衆生を拔出して、敎へて檀那波羅蜜を行ぜしめ、是布施の功德を以て大福報を得、大福報より拔出して敎へて持戒せしむ、持戒の功德もて天上尊貴の處に生ず。復拔出して初禪に住せしむ、初禪の功德もて梵天處に生ず。二禪三禪四禪、無邊空處識處無所有處、非有想非無想處も亦是の如し。衆生の行ずる是布施及び布施の果報、持戒及び持戒の果報、禪定及び禪定の果報より、種種の因緣もて、拔出して無餘涅槃及び涅槃道中に安置す。謂ゆる四念處四正勤四如意足、五根五力七覺分八聖道分空解脫門無相無作解脫門、八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法なり。衆生を安隱にして聖無漏法、無色無形無礙法中に住せしめ、須陀洹果を得べき者有らば、安隱敎化して須陀洹果に住せしめ、斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道を得べき者有らば、斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道に住せしめ、阿耨多羅三藐三菩提を得べき者有らば、安隱敎化して阿耨多羅三藐三菩提中に住せしむ。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、諸の菩

【二】更に般若を行ひて諸道を教化するの希有なるを明す。
【一心に諦に聽け等】布施持戒等は前にも説くも、前は生身一國土に就てし今は變化身無量世界に就ていふを異とす。

薩摩訶薩は、甚だ希有にして及び難し。能く是深般若波羅蜜を行じ、諸法は無所有性畢竟空無始空にして、而も諸法を是れ善、是れ不善、是れ有漏、是れ無漏、乃至是れ有爲、是れ無爲なりと分別す。〔二〕佛須菩提に告げたまはく、〔三〕是の如く是の如し、諸の菩薩摩訶薩は、甚だ希有にして及び難し。能く是深般若波羅蜜を行じ、諸法は無所有性畢竟空無始空にして、而も諸法を分別す。

(三)須菩提、汝等若し是菩薩摩訶薩の希有にして及び難き法を知らば、則ち一切の聲聞辟支佛も報ゆる能はざるを知る、何に況んや餘人をや。〔二〕須菩提佛に白して言さく、〔三〕世尊、何等をか是れ菩薩摩訶薩の希有にして及び難き法にして、諸の聲聞辟支佛の有ること無き所となすや。〔二〕佛須菩提に告げたまはく。〔二〕一心に諦に聽け、菩薩摩訶薩有りて般若波羅蜜を行じ、報得の六波羅蜜中に住し、及び報得の五神通三十七助道法に住し、諸の陀羅尼諸の無礙智に住して十方の國土に到り、布施を以て度すべき者は布施を以て之を攝し、持戒を以て度すべき者は持戒を以て之を攝し、忍辱精進禪定智慧を以て度すべき者は其の所應に隨ひて而して之を攝取し、初禪を以て度すべき者は初禪を以て之を攝し、二禪三禪四禪、無邊空處無邊識處無所有處非有想非無想處を以て度すべき者は其所應に隨ひて而して之を攝取し、慈悲喜捨心を以て度すべき者は慈悲喜捨心を以て而して之を攝取し、四念處四正勤四如意足、五根五力七覺分八聖道分、空三昧無相無作三昧を以て度すべき者は其所應に隨ひて而して之を攝取す。〔三〕世尊、菩薩摩訶薩は云何が布施を以て衆生を饒益するや。〔三〕須

【佛は福田等】分別門には聲聞辟支佛尚佛に及ばざる、故に畜生には比すべからざるも、空法門に入れば則ち等觀を得るなり。

【是衆生】一切衆生を度せんとするもの、豈に是を漏らすべけんや。

菩提、菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、其所須に隨ひて布施し、飲食衣服車馬香華瓔珞種種の所須、盡く之を給與す、若は供養するに佛辟支佛阿羅漢阿那含斯陀含須陀洹等しくして異ること無く、若は施すに正道中に入れる人及び凡人、下、禽獸に至るまで皆分別すること無く等一に布施す。何を以ての故に。一切法は異らず分別せざるが故に、是菩薩は異ること無く分別すること無く布施し已りて、當に無分別法の報謂ゆる一切種智を得べし。須菩提、若し菩薩摩訶薩、乞匈する者を見れば、若は是心を生ず、佛は是れ福田なり、我れ應に供養すべし、禽獸は福田に非ざれば供養すべからずと、是れ菩薩の法に非ず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は、阿耨多羅三藐三菩提心を發して是念を作さず、是衆生は應に布施を以て饒益すべく、是は是衆生に布施すべからず。布施の因緣の故に、刹利大姓婆羅門大姓居士大家に生じ、乃至是布施の因緣を以て三乘法を以て之を度して無餘涅槃に入らしむべしと。若し衆生來りて菩薩に從て乞はんに、亦異心を生じて是に與ふべし。是に與ふべからずと分別せず。何を以ての故に。是菩薩は是衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發せばなり。若し分別し簡擇せば、便ち諸佛菩薩辟支佛、學無學人、一切世間の天及び人の呵責する處に墮す。誰か汝一切衆生を救ひ、汝一切衆生の舍、一切衆生の護、一切衆生の依と爲りて而も與ふべきと與ふべからざるとを分別し簡擇せよと請はん。復次に若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、若は人、若は非人來りて菩薩の身體支節を求乞せんと欲するに、是時に二心を生ずべからず、若は與へん、若は與へずと。何を以ての

【三】以下三惡道の敎化法施を明す。

【三事】神通憶念敎說の三。

【是衆生】三惡道中に於て餘の功德あるは則ち度せられ、重罪あるものは菩薩を見ず。

故に。是菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に身を受く、衆生來りて取る、何ぞ與へざるべけんや。我れ衆生を饒益するを以ての故に是身を受く、衆生乞はざるも自ら之を與ふべし、何に況んや乞はれて而も與へざらんや。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、應に是の如く學すべし。復次に須菩提、若し菩薩摩訶薩、乞ふ者有るを見れば、應に是念を生ずべし、是中に誰か與へ、誰か受け、施す所何物なるか、是れ一切法の自性は皆得べからず、畢竟空なるを以ての故に。空相法與ふる無く奪ふ無し。何を以ての故に、畢竟空の故に、內空の故に、外空內外空大空第一義空自相空の故に。是諸空に住して布施せば、是時に檀那波羅蜜を具足す。檀那波羅蜜を具足するが故に、若は內外法を斷ずる時に是念を作す、我を截る者は誰か、我を割く者は誰かと。

(三)復次に須菩提、我れ佛眼を以て東方如恆河沙等の諸の菩薩摩訶薩を見るに、大地獄に入りて火を滅し、湯を冷かならしめ、三事を以て敎化す、一には神通力、二には知他心、三には說法なり。是菩薩は神通力を以て大地獄の火を滅し、湯を冷かならしめ、知他心を以て慈悲喜捨し、意に隨ひて說法す。是衆生は菩薩に於て淸淨心を生じ、地獄より脫することを得て、漸く三乘法を以て苦際を盡すことを得。南西北方四維上下も亦是の如し。復次に須菩提、我れ佛眼を以て十方世界を觀じ、如恆河沙等の國土の中の諸菩薩を見るに、諸佛の爲に給使し、諸佛に供給し、隨意に愛樂し尊敬し、若は諸佛の所說盡く能く受持し、乃至阿耨多羅三藐三菩提終に忘失せず。復次に須菩提、我れ佛眼を以て十方如恆河沙

【菩薩の肉を食する者】則ち慈心を生じて柔軟となり愛敬を生じ惡道を脫するなり。

【四】以下諸天の敎化法施を明す。

【梵天は邪見に著す】梵天は衆生の父、一切を造り自ら常住なりとする邪見殊に强しといふ。婆羅門所尊の梵天をいふ。

等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を觀ずるに、畜生の爲の故に其壽命を捨て、身體を割截して諸方に分散す。諸の衆生有て、是諸の菩薩摩訶薩の肉を食する者は、皆菩薩を愛敬す、愛敬するを以ての故に、卽ち畜生道を離るることを得て諸佛に値遇し、佛の說法を聞きて說の如く修行し、漸く三乘聲聞辟支佛佛法を以て、無餘涅槃に於て而して般涅槃す。是の如く須菩提、諸の菩薩摩訶薩の益する所甚だ多く、衆生を敎化して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、說の如く修行し、乃至無餘涅槃に於て而して般涅槃す。復次に須菩提、我れ佛眼を以て十方如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を見るに、諸の餓鬼の飢渴の苦を除く。是諸の餓鬼は皆菩薩を愛敬す、愛敬するを以ての故に、餓鬼道を離るることを得て諸佛に値遇し、諸佛の說法を聞きて說の如く修行し、漸く三乘聲聞辟支佛佛法を以て而して般涅槃し、乃至無餘涅槃す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は衆生を度せんが爲の故に大悲心を行ず。

(四)復次に須菩提、我れ佛眼を以て見るに、諸の菩薩摩訶薩は四天王天上に在りて說法し、三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天上に在りて說法す。諸天は菩薩の說法を聞きて、漸く三乘を以て而して滅度することを得。須菩提、是諸天衆中に五欲に耽著する者有れば、是菩薩は火起り其宮殿を燒くことを示現し、而して爲に說法して是言を作さく、「諸天、一切有爲の法は、悉く皆無常なり、誰れか常に安らかなる者を得ん」と。復次に須菩提、我れ佛眼を以て十方世界を觀じ、如恆河沙等の國土の中を見るに、諸の梵天は邪見に著

【五】以下四攝法中につき布施を廣說す。

【何等の財施等】二施中、財施は有量にして欲界繫、果報の故に略說し、法施は無量にして三界出三界果報に通じ、財施は又法施により生ずる故廣說するなり。

【一日戒】在家が布施等の日に限りて入齋戒を受くるなり。

【或は相或は觸】數息觀を行じて外相內觀を調御するなり。

す、諸の菩薩摩訶薩は教へて邪見を遠離せしめて是言を作さく「汝等云何が空相虛妄の諸法中に於て而も邪見を生ずる」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は大慈心に住して衆生の爲に說法す。須菩提、是を諸菩薩の希有にして及び難きの法と爲す。

(五)復次に須菩提、我れ佛眼を以て十方世界如恆河沙等の國土の中の諸の菩薩摩訶薩を觀ずるに、四事を以て衆生を攝取す。何等をか四とす、布施と愛語と利益と同事となり。云何が菩薩は布施を以て衆生を攝する。須菩提、菩薩は二種の施を以て衆生を攝取す、財施と法施となり。何等の財施か衆生を攝する。須菩提、菩薩摩訶薩は金銀瑠璃頗梨眞珠珂貝珊瑚等の諸の寶物を以てし、或は飲食衣服臥具房舍燈燭華香瓔珞、若は男若は女、若は牛羊象馬車乘を以てし、若は己身を以て衆生に給施し、衆生に語りて言はく「汝等若し所須有らば各來りて之を取れ、己の物を取るが如くして疑難を得ること莫れ」と。是菩薩は施し已りて、教へて三歸依、歸依佛歸依法歸依僧せしむ。或は教へて五戒を受けしめ、或は教へて一日戒せしめ、或は教へて初禪あらしめ、乃至教へて非有想非無想定あらしめ、或は教へて慈悲喜捨あらしめ、或は教へて念佛念法念僧念戒念捨念天あらしめ、或は教へて不淨觀あらしめ、或は教へて安那般那觀、或は相或は觸あらしめ、或は教へて四念處四正勤四如意足五根五力、七覺分八聖道分、空三昧無相無作三昧、八背捨、九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲三十二相八十隨形好あらしめ、或は教へて須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果あらしめ、或は教へて辟支佛道あらしめ、或は教へて阿耨多

【六】更に法施を廣說す。法は世間出世間法なり。

【一切種智を得れるや】一切智を得れば佛にして菩薩にに非ず佛ならずば一切種智なき故に問ふなり。

羅三藐三菩提あらしむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以て衆生に教へ、財施し已りて復教へて無上安隱涅槃を得しむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩の希有にして及び難きの法と名く。

(六)須菩提、菩薩は云何が法施を以て衆生を攝取する。須菩提、法施に二種有り、一には世間、二には出世間なり。何等をか世間の法施と爲す、世間法を敷演し顯示する謂ゆる不淨觀、安那般那念、四禪四無量心四無色定、是の如き等の世間法及び諸餘の凡夫と共に行ずる所の法、是を世間の法施と名く。是菩薩は是の如きの世間法を施し已りて、種種の因縁もて教化して世間法を遠離せしむ、世間法を遠離し已りて方便力を以て聖無漏法及び聖無漏法果を得しむ。何等をか是れ聖無漏法とし、何等をか是れ聖無漏法果なりとす。聖無漏法とは三十七助道法三解脱門なり、聖無漏法果とは須陀洹果乃至阿羅漢果辟支佛道阿耨多羅三藐三菩提なり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の聖無漏法は須陀洹果中の智慧、乃至阿羅漢果中の智慧、辟支佛道中の智慧、三十七助道法中の智慧、六波羅蜜中の智慧、乃至大慈大悲中の智慧、是の如き等の一切の法、若は世間若は出世間の智慧、若は有漏若は無漏、若は有爲若は無爲、是法中の一切種智、是を菩薩摩訶薩の聖無漏法と名く。何等をか聖無漏法果と爲す。一切煩惱の習の相續を斷ずる是を聖無漏法果と名く。須菩提佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は一切種智を得るや不や。』佛言はく、『是の如く是の如し、須菩提、菩薩摩訶薩は一切種智を得。』須菩提言さく、『菩薩と佛とは何等の異有りや。』佛言はく、

【七】法中出世間法を別說す。初に三十七道品。

『異有り、菩薩摩訶薩の一切種智を得たる、是を名けて佛と爲す。所以は何ん、菩薩心と佛心とは異有ること無ければなり。菩薩は是一切種智の中に住して、一切法に於て照明せざる無し、是を菩薩摩訶薩の世間の法施と名く。須菩提、菩薩摩訶薩は世間の法施に因緣して出世間の法施を得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は衆生を敎へて世間法を得しめ、方便力を以ての故に敎へて出世間法を得しむ。須菩提、何等をか是れ菩提の出世間法となす。凡夫法と共に同ぜざる謂ゆる四念處四正勤四如意足、五根五力七覺分八聖道分、三解脫門八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法三十二相八十隨形好、五百陀羅尼門、是を出世間法と名く。

(七)須菩提、云何が四念處と爲す。菩薩摩訶薩は內身循身觀を觀じ、外身循身觀を觀じ、內外循身觀を觀じ、勤めて精進し一心に智慧觀を以て觀じ、身の集因緣生なることを觀じ、身滅を觀じ、身の集生滅を觀じて是道を行ずるに所依無く、世間に於て所受無し、受心法念處も亦是の如し。須菩提、云何が四正勤と爲す、未だ生ぜざる惡不善法は不生の爲の故に勤て生欲精進す、已に生じたる惡不善法は斷の爲の故に勤て生欲精進す、未だ生せざる善法は、生の爲の故に勤て生欲精進す、已に生じたる諸の善法は增長し修し具足せんが爲の故に勤て生欲精進す、是を四正勤と爲す。須菩提、云何が四如意足と爲す。欲三昧をもて斷行して初如意足を成就し、精進三昧心三昧思惟三昧をもて斷行して如意足を成就す。云何が五根と爲す。信根精進根念根定根慧根なり。云何が五力と爲す。

【八】次に三昧を明す。

【九】次に佛力を明す。

信力精進力念力定力慧力なり。云何が七覺分と爲す。念覺分擇法覺分精進覺分喜覺分除息覺分定覺分捨覺分なり、云何が八聖道分と爲す。正見正思惟正語正業正命正精進正念正定なり。

(八)云何が三三昧と爲す。空三昧門無相無作三昧門なり。云何が空三昧と爲す。空行無我行を以て心を攝す、是を空三昧と名く。云何が無相三昧と爲す。寂滅行離行を以て心を攝す、是を無相三昧と爲す。云何が無作三昧と爲す。無常行苦行もて心を攝す、是を無作三昧と名く。云何が八背捨と爲す。內色相有りて外色を觀ず、是れ初背捨なり、內色相無く外色を觀ず、是れ二背捨なり、淨背捨是れ三背捨なり、一切の色相を過ぎ一切の有對相を滅し一切の異相を念ぜざるが故に、無邊虛空を觀じて無邊虛空處に入り、乃至一切の非有想非無想處を過ぎて滅受想背捨に入る、是を八背捨と名く。云何が九次第定とする。行者欲惡不善法を離れ有覺有觀にして、離生喜樂ありて初禪に入り第二第三第四禪、乃至非有想非無想處を過ぎて滅受想定に入る、是を九次第定と名く。

(九)云何が佛の十力と爲す、是處不是處を如實に知り、衆生の過去未來現在の諸業諸法受法を知り、造業處を知り、因緣を知り報を知る、諸禪定解脫三昧定の垢淨分別相を如實に知り、他の衆生の諸根上下の相を知り、他の衆生の種種の欲解を知り、世間種種無數の性を知り、一切到道相を知り、種種の宿命を知り、一世乃至無量劫を如實に知り、天眼もて衆生乃至善惡道に生ずるを見、漏盡するが故に無漏心解脫を如實に知る、是を佛の十力と

爲す。云何が四無所畏と爲す。佛誠言を作さく、「我は是れ一切正智人なり」と、我は沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて實の如く是法を知らずと言ふも、乃至是微畏相を見ず。是を以ての故に我れ安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて師子吼を作し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は實に轉ずること能はず、一の無所畏なり。佛誠言を作さく、「我れ一切漏盡す」と、若は沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて、實の如く是漏盡きずと言ふも、乃至是微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて師子吼を作し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門婆羅門若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は實に轉ずること能はず。二の無畏なり。佛誠言を作さく、「我れ障法を說く」と、若は沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて實の如く是法を受くるも道を障へずと言ふも、乃至是微畏相を見ず、是を以ての故に、我れ安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて師子吼を作し、能く梵輪を轉ず、諸の沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は復餘衆は實に轉ずること能はず、三の無畏なり。佛誠言を作さく、「我が說く所の聖道は能く世間を出で、是行に隨って能く苦を盡す」と、若は沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて實の如く、是道を行ずるも世間を出づること能はず、苦を盡すこと能はずと言ふも、乃至是微畏相を見ず。是を以ての故に、我れ安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆中に在りて

【一〇】次に生身の相好の勝德を明す。初に三十二相、世間三十相あるも三十二相具足せるは佛菩薩なりとす。
【伊泥延】アイネーヤ(Aineya)羚羊なり。

師子吼を作し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は實に轉ずること能はず、四の無畏なり。云何が四無礙智と爲す。一には義無礙智、二には法無礙智、三には辭無礙智、四には樂說無礙智なり。云何か義無礙智と爲す、義に緣る智慧是を義無礙智と爲す。云何が法無礙智と爲す、法に緣る智慧是を法無礙智と爲す。云何が辭無礙智と爲す、辭に緣る智慧是を辭無礙智と爲す。云何が樂說無礙智と爲す、樂說に緣る智慧是を樂說無礙智と爲す。云何が十八不共法と爲す。一には諸佛身に失無く、二には口に失無く、三には念に失無く、四には異想無く、五には不定の心無く、六には不知已捨の心無く、七には欲滅ずる無く、八には精進滅ずる無く、九には念滅ずる無く、十には慧滅ずる無く、十一には解脫滅ずる無く、十二には解脫知見滅ずる無く、十三には一切の身業智慧に隨て行じ、十四には一切の口業智慧に隨て行じ、十五には一切の意業智慧に隨て行じ、十六には智慧過去世を知ること無礙、十七には智慧未來世を知ること無礙、十八には智慧現在世を知ること無礙なり。

(一〇)云何が三十二相となす。一には足下安平立、平にして奩底の如し、二には足下に千輻輞輪輪相を具足す、三には手足の指長くして餘人に勝る、四には手足柔輭にして餘身の分に勝る、五には足跟廣くして具足滿好なり、六には手足の指合し縵網妙好にして餘人に勝る、七には足趺高平にして好く跟と相稱ふ、八には伊泥延鹿蹲蹲纖好、伊泥延鹿王の如し、九には平住して兩手膝を摩す、十には陰藏の相馬王象王の如し、十一には身は縱廣等にして

【尼倶盧】ニヤグローダ（Nyagrodha）榕樹なり。

【迦蘭頻伽】カラギンカ（Kalaviṅka）黄鶯なり。

【兜羅】ツーラ（Tūla）綿なり。

【二】二に八十隨形好八十種の好相生身を莊嚴し映發す。

【無見頂】頂上肉髻なり。

【耳輪埵成】耳根具足し厚廣修長なり。

【那羅延】ナーラーヤナ（Nārāyaṇa）第一人天なり强壯威勢あるをいふ。

尼倶盧樹の如し、十二には一一の孔より一毛生じ、色青く柔軟にして右旋す、十三には毛上向し青色柔軟にして右旋す、十四には金色相其色微妙にして閻浮檀金に勝る、十五には身光の面一丈なり、十六には皮薄く細く滑かにして塵垢を受けず蚊蚋を停めず、十七には七處滿ず、兩足の下兩手の中兩肩の上、頂中、皆滿じ字相分明なり、十八には兩腋の下滿ず、十九には上身師子の如し、二十には身廣く端直なり、二十一には肩圓好なり、二十二には四十齒あり、二十三には齒白く齊密にして根深し、二十四には四牙最も白くして大なり、二十五には方頰車師子の如し、二十六には味中に上味を得、咽中の二處津液流出す、二十七には舌大きく軟薄にして能く覆面して耳の髮際に至る、二十八には梵音深遠にして迦蘭頻伽の聲の如し、二十九には眼色金精の如し、三十には眼睫牛王の如し、三十一には眉間の白毫相軟白にして兜羅綿の如し、三十二には頂髻肉骨より成る、是三十二相は佛身に成就し、光明徧く三千大千國土を照す、若し廣く照さんと欲すれば則ち徧く十方無量阿僧祇の國土に滿つ、衆生の爲の故に丈光を受く、若し無量光を放てば則ち日月時節歲數無し。佛の音聲は徧く三千大千國土に滿ち、若し大聲を欲すれば則ち十方無量阿僧祇の國土に滿つ、衆生の多少に隨て音聲徧く至る。

（二）云何が八十隨形好と爲す。一には無見頂、二には鼻直高好にして孔現れず、三には眉初生の月の如くにして紺琉璃色なり、四には耳輪埵成し、五には身堅實にして那羅延の如し、六には骨際鉤鎖の如し、七には身一時に廻すること象王の如し、八には行く時に足の地を

【逶迤】曲折正しからざること。【識滿足】果報生識にして身圓滿なれば識も具足すといふなり。【一切樂觀】見者皆樂みて厭ふことなし。【頻婆果】ビムバ(Bimba)熟する時眞紅となる果物。【摩陀那果】マダナ(Madana)頭頂圓滿に喩ふ。

去ること四寸にして印文現ず、九には爪赤銅色の如く薄くして潤澤あり、十には膝骨堅著にして圓好なり、十一には身淨潔なり、十二には身柔軟なり、十三には身曲らず、十四には指長く纖圓かなり、十五には指文莊嚴なり、十六には脈深し、十七には踝現れず、十八には身潤澤なり、十九には身自ら持して逶迤せず、二十には身滿足す、二十一には識滿足す、二十二には容儀備足す、二十三には住處安らかにして能く動かす者無し、二十四には威一切に震ふ、二十五には一切樂觀す、二十六には面大長ならず、二十七には容貌を正しくして色を撓さず、二十八には面具足滿ず、二十九には脣赤くして頻婆果の色の如し、三十には音響深し、三十一には臍深く圓好なり、三十二には毛右旋す、三十三には手足滿ず、三十四には手足意の如し、三十五には手文明直なり、三十六には手文長し、三十七には手文斷ぜず。三十八には一切惡心の衆生も見れば和悅す、三十九には面廣く姝好なり、四十には面淨滿して月の如し、四十一には衆生の意に隨て和悅して與に語る、四十二には毛孔より香氣を出す、四十三には口より無上香を出す、四十四には儀容師子の如し、四十五には進止象王の如し、四十六には行法鵝王の如し、四十七には頭摩陀那果の如し、四十八には一切の聲分具足す、四十九には牙利なり、五十には舌の色赤し、五十一には舌薄し、五十二には毛紅色なり、五十三には毛潔淨なり、五十四には廣長の眼なり、五十五には孔門相具す、五十六には手足赤白にして蓮華の色の如し、五十七には臍出でず、五十八には腹現れず、五十九には細腹なり、六十には身傾動せず、六十一には身を持するこ

【邊光各一丈】身の周邊廣さ一丈を照らすをいふ。

【二】字法を說き四攝中の布施を說き結ぶなり。

【無字】字を超越せる諸法實相義なり。

と重し、六十二には其身分大なり、六十三には身長し、六十四には手足潔淨にして軟澤なり、六十五には邊光各一丈なり、六十六には光身を照して而して行く、六十七には等しく衆生を視る、六十八には衆生を輕ぜず、六十九には衆生に隨て音聲過ぎず減ぜず、七十には說法して著せず、七十一には衆生の語言に隨て而して說法を爲す、七十二には一發音もて衆聲に報ゆ、七十三には次第有て因緣說法す、七十四には一切衆生觀相を盡すこと能はず、七十五には觀ずる者厭足すること無し、七十六には髮長好なり、七十七には髮亂れず、七十八には髮旋好なり、七十九には髮の色青珠の如し、八十には手足に德相あり。須菩提、是を八十隨形好と爲し、佛身に成就す。

（二）復次に須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生を敎化す、善男子當に善く學して諸字を分別すべし、亦當に善く一字乃至四十二字を知るべし、一切の語言は皆初字門に入り、一切の語言は亦第二字門乃至第四十二字門に入り、一切の語言は皆其中に入り、一字皆四十二字に入り、四十二字も亦一字に入る。是れ衆生應に是の如く善く四十二字を學し、善く四十二字を學し已りて能善く字法を說き、善く字法を說き已りて善く無字法を說く。須菩提、佛の善く字法を知り善く字を知り善く無字を知り、無字法の爲の故に字法を說くが如くすべし。何を以ての故に。須菩提、一切の名字法を過ぐるが故に名けて佛法と爲す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は二施を以て衆生を攝取す、謂ゆる財施と法施となり、是を菩薩の希有にして及び難き事と爲す。

【一三】四攝法後三を略說す。

【同事】所作所行を同じくして相從ふこと。

【一四】法空にして諸法を行ずることを明す。

（一三）云何が菩薩摩訶薩は愛語もて衆生を攝取すと爲す。菩薩摩訶薩は六波羅蜜を以て衆生の爲に說法し、是言を作さく、「汝、六波羅蜜を行じて一切善法を攝すべし」と。云何が菩薩摩訶薩は利行もて衆生を攝取すと爲す。菩薩摩訶薩は長夜に衆生を教化して六波羅蜜を行ぜしむ。云何が菩薩摩訶薩は同事もて衆生を攝取すと爲す。菩薩摩訶薩は六神通力を以ての故に、種種變化して五道中に入り、衆生と與に同事す。此四事を以て而して之を攝取す。

（一四）須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し衆生畢竟して得べからずば、法も亦た得べからず、法性も亦た得べからず、畢竟空無始空なるが故に。世尊、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜を行じ、禪那波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を行ずる時に四禪四無量心四無色定三十七助道法、十八空を行じ、空無相無作三昧、八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法、三十二相八十隨形好を行ぜん。云何が報德五神通に住して衆生の爲に說法す。衆生は實に得べからず、衆生得べからざるが故に色得べからず、乃至識も亦得べからず、五陰得べからざるが故に六波羅蜜乃至八十隨形好も皆得べからず、是不可得中に衆生無く、色無く乃至八十隨形好無ければなり。世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、衆生の爲に說法す。世尊、菩薩の般若波羅蜜を行ずる時、菩薩も尙得べからず、何に況んや當に菩薩法行るべけんや。」佛須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、汝が言ふ所の如く、衆生得べからざるが故に、當に知るべし、是れ內空外空內外空空空大空第一義空有爲空無爲空畢竟空無始空散空諸法空自相空性空不可得空有法空

【衆生の爲に說法】法輪を轉じて說法するも一法一相の轉ずるなきをいふ。

無法空無法有法空なりと。衆生得べからざるが故に、當に知るべし、五陰空十二入空十八界空十二因緣空四諦空、我空、壽者命者生者、養者育者、衆數者人者、作者使作者、起者使起者、受者使受者、知者見者皆空なり。衆生得べからざるが故に、當に知るべし、四禪空四無量心空四無色定空なり。當に知るべし、四念處空乃至八聖道分空、空空無相空無作空、八背捨空九次第定空なり。衆生得べからざるが故に、當に知るべし、佛の十力空四無所畏空四無礙智空十八不共法空なり。當に知るべし、須陀洹果空斯陀含果空阿那含果空阿羅漢果空辟支佛道空なり。當に知るべし、菩薩地空阿耨多羅三藐三菩提空なり。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如く一切法の空なることを見、衆生の爲に說法して諸空の相を失せず、是菩薩は是の如く觀ずる時に一切法無礙を知る、一切法無礙を知り已りて、諸法相の不二不分別なることを壞せず、但だ衆生の爲に實の如く說法す。譬へば佛の所化人は化人復無量千萬億人を化作して、教へて布施せしむる者有り、教へて持戒せしむる有り、教へて忍辱せしむる有り、教へて精進せしむる有り、教へて禪定せしむる有り、教へて智慧せしむる有り、教へて四禪四無量心四無色定せしむる者有るが如し。汝が意に於て云何、佛の所化人諸法を分別し破壞すること有りや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。』『是化人は心無く心數法無し、云何が諸法を分別し破壞せん。是を以ての故に、須菩提、當に知るべし、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、衆生の爲に應の如く說法し、衆生を顚倒地より拔出し、衆生をして各所應の如く住地を得しむ、不縛不脫法を以ての故に。何を以ての故に。須

【一五】法性轉ぜざれば諸法平等なるも、俗諦に善惡あるを明す。

【黑法】惡不善法、白法の善法に對す。

菩提、色は不縛不脱なり、受想行識は不縛不脱なり、色の無縛無脱なる是れ色ならず、受想行識の無縛無脱なる是れ色ならず。何を以ての故に。色は畢竟清淨なるが故に。受想行識乃至一切法、若は有爲若は無爲も亦畢竟清淨なるが故に。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は衆生の爲に說法するも亦衆生及び一切法を得ず、一切法得べからざるが故に。菩薩は法に住せざるを以ての故に諸法の相中、謂ゆる色空乃至有爲無爲法空に住す。何を以ての故に。色乃至有爲無爲法の自性得べからざるが故に、住處有ること無し。無所有法は無所有法に住せず、自性法は自性法に住せず、他性法は他性法に住せず。何を以ての故に。是一切法は皆得べからざるが故に、不可得の法當に何處にか住すべけん。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、是諸空を以て能く是の如く說法し、是の如く般若波羅蜜を行じ、諸佛及び聲聞辟支佛に於て過有ること無し。何を以ての故に。諸佛及び菩薩辟支佛阿羅漢は是法を得已りて、衆生の爲に說法するも亦諸法の相を轉ぜず。何を以ての故に。如法性の實際轉ずべからざるが故に。所以は何ん。諸法性無きが故に。』

(一五)須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し法性如實際轉ぜざれば色と法性とは異なるや不や、色と如實際とは異なるや不や。受想行識乃至有爲無爲法、世間出世間、有漏無漏異なるや不や。』佛言はく、『不、色は法性と異ならず。如と異ならず、實際と異ならず、受想行識乃至有漏無漏も亦異ならず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し色は法性と異ならず、如と異ならず、實際と異ならず、受想行識乃至有漏無漏異ならずんば、云何が黑法を分別

【一六】凡夫無知の故に第一義を以て道論ずべからず、道果ありとすべからざるを明す。

し、黑報謂ゆる地獄餓鬼畜生有らん、白法の白報謂ゆる諸天及び人有らん、黑白法の黑白報有らん、不黑不白法の不黑不白報謂ゆる須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道阿耨多羅三藐三菩提有らん。」佛須菩提に告げたまはく「世諦の故に分別して果報有りと說く第一義には非ず、第一義の中には因緣果報を說くべからざればなり。何を以ての故に。是第一義は實に相有ること無く分別有ること無く、亦言說も無し、謂ゆる色乃至有漏無漏法は不生不滅相、不垢不淨にして畢竟空無始空なるが故に。」

須菩提佛に白して言さく「世尊、若し世諦を以ての故に分別して果報有りと說き、第一義に非ずんば、一切凡夫人は應に須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道、阿耨多羅三藐三菩提を有すべし。」佛須菩提に告げたまはく「汝が意に於て云何、凡夫人は是れ世諦なり、是れ第一義諦なりと知ることを爲すや不や。若し是を知れば、凡夫人は應に是れ須陀洹果乃至阿耨多羅三藐三菩提を有つべし。須菩提、凡夫人は實に世諦を知らず、第一義諦を知らず、道を知らず、分別道果を知らざるを以て、云何が當に諸果有らん。須菩提、聖人は世諦を知り、第一義諦を知り、道有り修道有り、是故を以て聖人は差別して諸果有り。」須菩提佛に白して言さく「世尊、修道せば果を得るや不や。」佛言はく「不、須菩提、修道するも果を得ず、修道せざるも亦果を得ず、亦道を離るるも果を得ず、亦道中に住するも果を得ず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時に、衆生の爲の故に諸果を分別するも、亦是有爲性と無爲性とを分別せず。」「世尊、若し有爲性と無爲性とを

分別せずして諸果を得れば、云何が世尊、自ら三結を說き盡すが故に須陀洹と名け、婬怒癡薄きが故に斯陀含果と名け、五此間結の盡くるを阿那含と名け、五彼間結の盡くるを阿羅漢と名け、所有の集法皆滅散する相を辟支佛道と名け、一切煩惱の習を斷ずるが故に阿耨多羅三藐三菩提と名けん。世尊、我れ當に云何が有爲性と無爲性とを分別せずして諸果を得ることを知るべけんや。』佛須菩提に告げたまはく、『汝須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道阿耨多羅三藐三菩提を以て、是諸果は是れ有爲なり、是れ無爲なりとせんや。』須菩提言さく、『世尊、皆是れ無爲なり。』『須菩提、無爲法中に分別有りや不や。』『不、世尊、若し善男子善女人一切法若は有爲、若は無爲一相謂ゆる無相なりと通達せば、是時に若は有爲若は無爲なりと分別すること有りや不や。』『不、世尊。』『是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は衆生の爲に說法して諸法を分別せず、謂ゆる內空の故に乃至無法有法空の故に、是菩薩は自ら無所著の法を得、亦人に敎へて無所著の法、若は檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、初禪乃至第四禪、慈悲喜捨、無邊空處乃至非有想非無想處、若は四念處乃至一切種智を得しむ。是菩薩は自ら著せざるが故に、亦他人を敎へて無所著を得しむ、著する所無きが故に礙ふる所無し。譬へば佛の所化人の布施するも亦布施の報を受けず、但だ衆生を度せんが爲の故に、乃至一切種智を行じて一切種智の報を受けざるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如く六波羅蜜乃至一切法有漏無漏有爲無爲を行じて住せず、亦報をも受けず、但だ衆生を度せんが爲の故なり。何を以ての故に。

【善達品】先に一切諸法に善達すといふを承けて、本品にその義を分明す。

【一】善達の相を明す。善達とは、法性の相を取らず、法性中に住せず、疑はず闘えず、說法するに無罣無礙無進なり。

【是事】能達の菩薩所達の法。

【是法】內外有漏無漏等。

【化人如何が修道あらん】化人は化事を成就するも、自ら修道解脫なし、菩薩は然らざるべしとす。

【所化人】變化と異る實事ありやを問ふ。

【菩薩…諸法の相に達す】三毒等なく、心心數法を皆先世の虛誑顚倒法にして因緣生と知るが故に信ぜず隨はざるなり。

是の菩薩摩訶薩は善く一切諸法の相に達するが故に。』

善達品第七十九

（一）須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩は善く諸法の相に達するや。』佛須菩提に告げたまはく、『譬へば化人の婬怒癡を行ぜず、色乃至識を行ぜず、內外法を行ぜず、諸の煩惱結使を行ぜず、有漏法無漏法、世間法出世間法、有爲法無爲法を行ぜず亦聖果も無きが如く、菩薩も亦是の如く是事有ること無く、亦是法を分別せざる、是を善く諸法の相に達すと名く。』須菩提言さく、『世尊、化人云何が修道有らん。』佛言はく、『化人の修道は垢ならず淨ならず亦五道生死にも在らず。須菩提、汝が意に於て云何、佛の所化人は根本實事有りや不や、垢有り淨有りや不や。』須菩提言さく、『不、佛の所化人は根本實事有ること無く、亦垢無く、亦淨無く亦五道生死にも在らず。』『是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の善く諸法の相に達するも亦是の如し。』須菩提言さく、『世尊、一切の色は化の如くなりや不や、一切の受想行識は化の如くなりや不や。』佛言はく、『一切の色は化の如く、一切の受想行識は化の如し。』『世尊、若し一切の色化の如く、一切の受想行識化の如く、一切法化の如くなれば、化人色無く受想行識無く、垢無く淨無く五道生死も無く、亦解脫處も無し、菩薩何等の功用か有らん。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、菩薩摩訶薩の本菩

【何等の功用かあらん】佛何を以て種種菩薩の功德を讚じ、菩薩に因て三惡道を斷じ、能く衆生を拔出して涅槃を得しむとするやを問ふ。

【是故】法の幻化を知らざるが爲に起惡造罪受苦するをいふ。

【二】名、相を說いて假設とし無明を明す。【名、相】名は熱物を火と名くるが如く、相は煙を見てその火相を知るが如し。

薩道を行ずる時に、頗し衆生有て地獄餓鬼畜生人天中より解脫を得ることを見るや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。』佛言はく、『是の如く是の如し、須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如く、衆生の三界より解脫を得るを見ず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は一切法幻の如く化の如しと見知すればなり。』『世尊、若し菩薩摩訶薩、一切諸法幻の如く化の如しと見知せば、何事の爲の故に六波羅蜜四禪四無量心四無色定三十七助道法を行じ、乃至大慈大悲淨佛國土成就衆生を行ずるや。』佛須菩提に告げたまはく、『若し衆生自ら諸法幻の如く化の如しと知らば、菩薩摩訶薩は終に阿僧祇劫に於て衆生の爲に菩薩道を行ぜず。須菩提、衆生自ら諸法の幻の如く化の如くなることを知らざるを以て、是故を以て、菩薩摩訶薩は無量阿僧祇劫に於て六波羅蜜を行じ、衆生を成就し、佛國土を淨め、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し一切法夢の如く響の如く影の如く焰の如く幻の如く化の如くなれば、衆生何處に在りてか住し、菩薩六波羅蜜を行じて而して之を拔出せんや。』『須菩提、衆生は但だ名相虛妄憶想分別中に住す、是故に菩薩は般若波羅蜜を行じ、名相虛妄中に於て衆生を拔出す。』

(二)須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等をか是れ名とし、何等をか是れ相とする。』佛言はく、『此名は强て但だ假の施設を作す、謂ゆる此れ色此れ受想行識、此れ男此れ女、此れ大此れ小、此れ地獄此れ畜生此れ餓鬼、此れ人、此れ天、此れ有爲此れ無爲なり、此は是れ須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道なり、此れ佛道なりと。須菩提、一切の和

【本來】相を本とし名を末とす。男女の相貌を男女と名くるが如し。
【麁若は細】肉眼所見を麁色とし、微塵を細とす、麁の和合は空なるものみならず、細色も亦定實の性なし。
【無色法】受想行識の法をいふ。

合法は皆是れ假名なり、名を以て諸法を取る、是故に名と爲す。一切の有爲法は但だ名相有るのみ、凡夫愚人は中に於て著を生ず、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に名字中に於て教へて遠離せしめ、是言を作さく、「諸の衆生、是名は但だ空名有るのみ、虚妄憶想分別中に生じて、汝等虚妄憶想に著すること莫れ、此事本來皆無自性空なるが故に智者の著せざる所なり」と、是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、衆生の爲に說法す。須菩提、是を名と爲す。何等をか相と爲す。須菩提二種の相有り、凡夫人所著の處なり。何等をか二と爲す、一には色相、二には無色相なり。須菩提何等をか色相と名くる、諸の所有の色若は麁若は細、若は好若は醜、皆是れ空なり、是空法中に憶想分別し著心取相す、是を名けて色相と爲す。何等をか是れ無色相とする。諸の無色法を憶想分別し著心取相するが故に煩惱を生ず、是を無色相と名く。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、衆生を教へて是相著を遠離せしめ、無相法中に二法、謂ゆる是れ相、是れ無相なりと墮せざらしむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、衆生を教へて相を遠離し、無相性中に住せしむ。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し一切法但だ名相有るのみなれば、云何が菩薩は般若波羅蜜を行じて能く自ら饒益し、亦他人を教へて善利を得しむる、云何が菩薩は諸地を具足し、一地より一地に至りて衆生を教化して三乘を得しむるや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し諸法の根本定んで有にして但だ名相のみに非ざれば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時に自ら

益すること能はず、亦他人をも利益すること能はざらん。須菩提、諸法は根本の實事有ること無く、但だ名相有るのみ。是故に菩薩は般若波羅蜜を行ずる時に能く禪那波羅蜜を具足す、無相なるが故に。毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を具足す、無相なるが故に。四禪那波羅蜜四無量心波羅蜜四無色定波羅蜜を具足す、無相なるが故に。四念處波羅蜜を具足す、無相なるが故に。乃至八聖道分波羅蜜を具足す、無相なるが故に。內空波羅蜜を具足す、無相なるが故に。乃至無法有法空波羅蜜を具足す、無相なるが故に。八背捨波羅蜜を具足す、無相なるが故に。九次第定波羅蜜を具足す、無相なるが故に。佛十力波羅蜜を具足し、乃至十八不共法波羅蜜を具足す、無相なるが故に。是菩薩は無相なるが故に自ら是諸の善法を具足し、亦他人を敎化して善法を具足せしむ、無相なるが故に。須菩提若し諸法の相當に實有なる毫釐許の如くなる者あるべく、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、諸法の無相無憶念なることを知りて阿耨多羅三藐三菩提を得、亦衆生を敎へて無漏法を得しむること能はず。何を以ての故に。一切無漏法は無相無憶念なるが故に。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、無漏法を以て衆生を利益す。」

【三】三乘差別を說くも實に一切法無相なるを明す。

(三)須菩提佛に白して言さく「世尊、若し一切法無相無憶念なれば、云何なる數か是れ聲聞法、是れ辟支佛法、是れ菩薩法、是れ佛法なるや。」佛須菩提に告げたまはく「汝が意に於て云何、無相法と聲聞法とは異なれりや不や。」「不、世尊。」「無相法と辟支佛法菩薩法佛

【無相の法等】無相を以ての故に三乘諸道あるを以て三乘と說くを難ずべからず。

【餘法を以て等】唯三解脱門を要す三解脱は實法、餘の四念處等は方便なり。

【四】三解脱門を學して諸善法に通達するを廣說す。

法とは異なれりや不や。」「不、世尊。」佛須菩提に告げたまはく、「無相の法は卽ち是れ須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛法菩薩法佛法なり。」須菩提言さく、「是の如し、世尊。」「須菩提、是因緣を以ての故に、當に一切法は皆是れ無相なりと知るべし。須菩提、菩薩摩訶薩は是一切法の無相を學し、善法謂ゆる六波羅蜜四禪四無量心四無色定四念處乃至十八不共法を增益することを得。何を以ての故に。菩薩は餘法を以て要と爲すこと三解脱門謂ゆる空無相無作の如くならず。所以は何ん、一切善法皆三解脱門に入ればなり。何を以ての故に。一切法の自相空是を空解脱門と名け、一切法の無相是を無相解脱門と名け、一切法の無作無起相是を無作解脱門と名くればなり。若し菩薩摩訶薩三解脱門を學せば、是時に能く五陰相を學し、能く十二入相を學し、能く十八界相を學し、能く四聖諦十二因緣法を學し、能く內空外空乃至無法有法空を學し、能く六波羅蜜四念處乃至八聖道分を學し、能く佛の十力四無所畏、四無礙智十八不共法を學す。」

(四)須菩提佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、能く五受陰相を學するや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、色の相を知り、色の生滅を知り、色の如を知る、云何が色の相を知る、色の畢竟空なる、內分分異處にして實無きこと、譬へば水沫の堅固なること無きが如くなるを知る、是を色の相を知ると爲す。云何が色の生滅を知る、色の生ずる時從て來る所無く、去て至る所無し、若し不來不去ならば是を識の生滅相を知ると爲す。云何が色の如を知る、是色の如は生ぜず滅せず來

らず去らず增せず減ぜず垢ならず淨ならず、是を色の如を知ると名く。須菩提、如の名如の實虛しからず、如の前後中も亦た爾り、常にして異ならず、是を色の如を知ると爲す。云何が受の相を知り、云何が受の生滅を知り、云何が受の如を知る、菩薩、諸受の相、水中の泡の一起一滅するが如くなるを知る。是を受の相を知ると爲す。受の生滅を知るとは、是受は從て來る所無く、去て至る所無き、是を受の生滅を知ると爲す。受の如を知るとは、是如は生ぜず滅せず來らず去らず增せず減ぜず垢ならず淨ならず、是を受の如を知ると爲す。云何が想の相を知り、云何が想の生滅を知り、云何が想の如を知る。想の相を知るとは、是想は熖水の得べからずして、而も妄に水想を生ずるが如し。是を想の相を知ると爲す。想の生滅を知るとは、是想は從て來る所無く、去て至る所無し、是を想の生滅を知ると爲す。想の如を知るとは、諸の想の如は生ぜず滅せず來らず去らず增せず減ぜず垢ならず淨ならず、實相に於て轉ぜず、是を想の如を知ると爲す。云何が行の相を知り、云何が行の生滅を知り、云何が行の如を知る。行の相を知るとは、行は芭蕉の葉葉除却するが如く堅實なることを得ず、是を行の相を知ると爲す。行の生滅を知るとは、諸行の生ずる從て來る所無く、去て至る所無き、是を行の生滅を知ると爲す。行の如を知るとは、諸行は生ぜず滅せず來らず去らず增せず減ぜず垢ならず淨ならず、是を行の如を知ると爲す。云何が識の相を知り、云何が識の生滅を知り、云何が識の如を知る。識の相を知るとは、識は幻師の四種兵を幻作するが如く、實行ること無し、識相も亦是の如し、是を識の相を

【二法】苦樂等の差別。

【五】諸法分別に就て法性を壞せざるを明して法性を辨ず。

知ると爲す。識の生滅を知るとは、是識の生ずる時に從て來る所無く、滅する時に去る所無し、是を識の生滅を知ると爲す。識の如を知るとは、識は生ぜず滅せず來らず去らず垢ならず淨ならず增せず減ぜずと知る、是を識の如を知ると爲す。云何が諸の入、眼の眼性空乃至意の意性空、色の色性空乃至法の法性空を知り、云何が眼界の眼界空、色の色界空、眼識の眼識界空、乃至意識界も亦是の如しと知る、云何が四聖諦を知る、苦聖諦を知る時に二法を遠離して苦諦の不二不別なることを知る、是を苦聖諦と名く、集盡道も亦是の如し。云何が苦の如を知る、苦聖諦即ち是れ如なり、如は即ち是れ苦聖諦なりと知る。集盡道も亦是の如し。云何が十二因緣を知る、十二因緣の不生の相を知る、是を十二因緣を知ると名く。」

〔五〕須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時に各各分別して諸法を知れば、將に色性を以て法性を壞し、乃至一切種智性もて法性を壞する無きや。」佛須菩提に告げたまはく、「若し法性の外に更に法有れば應に法性を壞すべし、法性の外に法得べからず、是故に壞せず。何を以ての故に。須菩提、佛及び佛弟子は法性の外に法の得べからざることを知る、得べからざるが故に法性の外に法有りと說くべからず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、應に法性を學すべし。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩若し法性を學すれば學する所無しと爲すや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩法性を學すれば則ち一切法を學す、何を以ての故に。一切法は即ち是れ

法性なればなり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、何の因緣の故に一切法即ち是れ法性なりや。」佛言はく、「一切法皆無相無爲性中に入る、是因緣を以ての故に法性を學すれば、則ち一切法を學するなり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し一切法即ち是れ法性ならば、菩薩摩訶薩は何を以ての故に般若波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜を學し、菩薩摩訶薩は何を以ての故に初禪第二第三第四禪を學し、菩薩摩訶薩は何を以てか慈悲喜捨を學し、何を以てか無邊虛空處無邊識處無所有處非有想非無想處を學し、何を以てか四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分を學し、何を以てか空無相無作解脫門を學し、何を以てか八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法を學し、何を以てか六神通を學し、何を以てか三十二相八十隨形好を學し、何を以てか學して刹利大姓婆羅門大姓居士大家に生じ、何を以てか學して四天王天處三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天に生じ、何を以てか學して梵天王住處光音天徧淨天廣果天無想天淨居天に生じ、何を以てか學して無邊空處に生じ無邊識處に生じ無所有處に生じ非有想非無想處に生ぜん。何を以てか初發意第二第三第四第五第六第七第八第九第十地を學し、何を以てか聲聞地辟支佛地菩薩摩訶薩法位を學し、何を以てか成就衆生淨佛國土を學し、何を以てか諸の陀羅尼を學し、何を以てか樂說法を學し、何を以てか阿耨多羅三藐三菩提を學し、學し已つて一切種智を得、一切法を知るや。世尊、諸法の法性中に是分別無し。世尊、將に菩薩は非道中に墮すること無からんか。何を以ての故に。世尊、法性中に是の如きの

分別無く、法性中に色無く受想行識無く、諸法性も亦色受想行識を遠離せず、色は即ち是れ法性、法性は即ち是れ色なり、受想行識も亦是の如く、一切法も亦是の如くなればなり。」佛、須菩提に告げたまはく「是の如く是の如し、汝が言ふ所の如く、色は即ち是れ法性、受想行識は即ち是れ法性なり。須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時に、若し法性の外に法有ることを見ば、阿耨多羅三藐三菩提を求めずと爲す。菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、一切の法性は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なりと知る、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切法は即ち是れ法性なりと知り已りて、無名相の法を以て、名相を以て說く、謂ゆる「是れ色なり、是れ受想行識なり、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提なり」と。須菩提、譬へば工なる幻師若は幻師の弟子の多人の處に立ちて、種種の形色男女象馬端嚴園林及び諸の廬館流泉浴池、衣服臥具香華瓔珞餚膳飲食を幻作し、諸の伎樂を作りて以て衆人を樂ましむるが如し。又復た人を幻作して布施持戒忍辱精進禪定智慧せしめ、是幻師は復た刹利大姓婆羅門居士大家、四天王天處、須彌山三十三天夜摩天兜率陀天化樂天他化自在天を幻作して以て衆人に示す。復、梵衆天乃至非有想非無想天を幻作し、又須陀洹斯陀含阿羅漢辟支佛、菩薩摩訶薩の初發意より檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、初地を行じ乃至十地を行じて菩薩位に入り、神通に遊戲して衆生を成就し佛國土を淨め、諸禪解脫三昧に遊戲し、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲を行じて、佛身の三十二相八十隨形好を具足す

るを幻作して、以て衆人に示す。是中無智の人は歎ず、未曾有なり、是人は多能にして巧に衆事を爲して衆人を娯樂せしむ、種種の形色乃至三十二相八十隨形好もて佛身を莊嚴すと。其中の有智の士は思惟して言はく「未曾有なり、是中に實事有ること無し、而も無所有法を以て衆人を娯樂せしめ、形相有らしむ、事の事相無く有の有相無し」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は法性を離れて法有るを見ず、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、衆生を得ずと雖も而も自ら布施し、亦人を敎へて布施せしめ、布施法を讃歎し、布施を行ずる者を歡喜し讃歎す、自ら持戒し、亦人を敎へて持戒せしめ、自ら忍辱し、亦人を敎へて忍辱せしめ、自ら精進し、亦人を敎へて精進せしめ、自ら禪を行じ、亦人を敎へて禪を行ぜしめ、自ら智慧を修し、亦人を敎へて智慧を修せしめ、智慧を修する法を讃歎し、智慧を修する者を歡喜し讃歎す。自ら十善を行じ、亦他人を敎へて十善を行ぜしめ、十善を行ずる法を讃歎し、十善を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら五戒を受行し、亦他人を敎へて五戒を受行せしめ、五戒の法を讃歎し、五戒を受行する者を歡喜し讃歎す。自ら八戒齋を受け、亦他人を敎へて、八戒齋を受けしめ、八戒齋の法を讃歎し、八戒齋を行ずる者を歡喜し讃歎す。自ら初禪を行じ乃至自ら第四禪を行じ、自ら慈悲喜捨を行じ、自ら無邊空處乃至非有想非無想處を行じ、亦他人を敎へて行ぜしむ。自ら四念處乃至八聖道分を行じ、自ら三解脱門佛の十力を行じ、乃至自ら十八不共法を行じ、亦他人を敎へて十八不共法を行ぜしめ、十八不共法を讃歎し、十八不共法を行ずる者を歡喜し讃歎す。須菩提、若し法

性前後中に異有らば、是菩薩摩訶薩は方便力を以ての故に法性を示し、衆生を成就すること能はず。須菩提、法性前後中に異無きを以て、是故に菩薩は般若波羅蜜を行じ、衆生を利益せんが爲の故に菩薩道を行ず。』

【實際品】前品の法性即ち是れ實際の故に般若を行ずるを明す。【一】衆生畢竟虛誑にして不可得なれば能く衆生の爲めに般若を行ずるを明す。

摩訶般若波羅蜜經 卷第二十五

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

實際品第八十

(一)須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し衆生畢竟じて得べからざれば、菩薩は誰れの爲の故に般若波羅蜜を行ずるや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩は實際の爲の故に般若波羅蜜を行ず。須菩提、實際と衆生際と異なれば、菩薩は般若波羅蜜を行ぜず。須菩提、實際と衆生際とは異ならず、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は衆生を利益せんが爲の故に般若波羅蜜を行ず。復次に須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、實際の法を壞せざるを以て、衆生を實際の中に立つ。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し實際即ち是衆生際なれば、菩薩は則ち實際を實際に於て建立すと爲す。世尊、若し實際を實際に於て建立せば、則ち自性を自性に於て建立すと爲す。世尊、自性は自性に於て建立することを得ず。世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生を實際に於て建立するや。』佛須菩提に告げたまはく、『實際は實際に於て建立すべからず、自性は自性に於て建立すべからず。須菩提、今菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時に、方便力を以ての故に、衆生を實際に於て建立

【二】方便般若に於て初に布施空を明す。

【布施異】布施に布施の別法ありとするをいふ。

【甘露味】八聖道分なり。

【甘露味の果】不滅即ち涅槃なり。

【三】次に持戒空

す、實際も亦衆生際と異ならず、實際と衆生際とは二無く別無きなり。」須菩提佛に白して言さく「世尊何等をか是れ諸の菩薩摩訶薩の方便力となし、是方便力を用て、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時に、衆生を實際に於て建立するも、亦實際の相を壞せざるや。」

(二)佛須菩提に告げたまはく「若し菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、衆生を布施に於て建立し、建立し已れば、布施の先後際相の空なることを說きて是言を作さく「是の如きの布施は前際空なり、後際空なり、中際も亦空なり、施者も亦空なり、施報も亦空なり、受者も亦空なり」と。諸の善男子善女人、是一切法は實際の中に得べからず、汝等布施異、施者異、施報異、受者異を念ずること莫れ、若し汝等、布施異、施者異、施報異、受者異を念ぜざれば、是時に布施は能く甘露味に趣き、甘露味の果を得。汝善男子、是布施を以ての故に、色に著すること莫れ、受想行識に著すること莫れ、何を以ての故に。是れ布施は布施相空、施者は施者空、施報は施報空、受者は受者空なればなり。空中に布施得べからず、施者得べからず、施報得べからず、受者得べからざればなり。何を以ての故に。是れ諸法は畢竟じて自性空なるが故に。

(三)復次に須菩提、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、衆生を敎へて持戒せしめ、衆生に語りて言はく「汝善男子、殺生法を除捨し乃至邪見法を除捨せよ。何を以ての故に。善男子、汝の分別する所の法の如く是諸法は是の如きの性無ければなり。汝善男子、當に諦に思惟すべし、何等か是れ衆生にして命を奪はんと欲し、何等の物を用

【四】次に忍辱空

てか命を奪はん、乃至邪見も亦是の如しと。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如きの方便力もて衆生を成就し、是菩薩摩訶薩は即ち衆生の爲に布施持戒の果報を說く、是布施持戒の果報の自性空なり、布施持戒の果報の自性空なることを知り已りて、是中に著せず、著せざるが故に、心散らずして能く智慧を生ず、是智慧を以て一切結使の煩惱の習を斷じて無餘涅槃に入る、是世俗の法にして、第一實義に非ず。何を以ての故に。空中に滅すること有る無く、亦滅せしむるものも無ければ、諸法は畢竟じて空なり、即ち是涅槃なればなり。

(四)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は衆生の瞋恚惱心を見て、敎へて言はく「汝善男子、來りて忍辱を修行せよ、忍辱を作す人は當に忍辱を樂むべし、汝の瞋る所の者は自性空なり。汝來れ、善男子、是の如く思惟せよ、我れ何所の法中に於て瞋る、誰か瞋者爲る、瞋る所の者は誰ぞ、是法は皆空なり、是性空なり、法として空ならざる無し、時に是空は諸佛の作に非ず、辟支佛聲聞の作に非ず、菩薩摩訶薩の作に非ず、諸天鬼神、龍王、阿修羅、緊那羅、摩睺羅伽に非ず、四天王天に非ず、乃至他化自在天に非ず、梵衆天に非ず、乃至淨居天に非ず、無邊空處乃至非有想非無想處諸天の所作に非ずと。汝當に是の如く思惟すべし、誰をか瞋り、誰か是瞋者なる、何等か是瞋事なる、是一切法は性空なり、空法中に瞋る所有ること無し」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、是因緣を以て、衆生を性空に於て建立し、次第し漸漸に示敎利喜して阿耨多羅三藐三菩提を得しむ、是世俗の法にして第一實義には非ず。何を以ての故に。是性空の中に得者有ること無く、得法

【五】次に精進突

有ること無く、得處有ること無ければなり。須菩提、是を實際性空の法と名く。一切の法は衆生薩は衆生の爲の故に是法を行じ、衆生も亦得べからず。何を以ての故に。一切の法は衆生の相を離るればなり。

(五)復次に須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力の故に、衆生の懈怠なるを見て、敎へて身精進心精進ならしめて是言を作さく、「諸の善男子、諸法性空の中に懈怠の法無く、懈怠の者無く、懈怠の事無し、是一切の法性皆空にして性空に過ぎたる無ければ汝等身精進心精進を生じ、善法を生ずる爲の故に懈怠すること莫れ。善男子若は布施、若は持戒、若は忍辱、若は精進、若は禪定、若は智慧、若は諸の禪定解脫三昧、若は四念處乃至八聖道分、若は空解脫門無相無作解脫門乃至十八不共法中に懈怠すること莫れ、諸の善男子、是一切法性空の中に當に相を礙うる無きを知るべし、無礙法の中には懈怠者無く、懈怠法無し。」是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生を敎へて性空に住し、二法に墮せざらしむ。何を以ての故に。是性空の中、二無く別無きが故に、是無二法なれば則ち著すべき處無し。復次に須菩提、菩薩摩訶薩性空般若波羅蜜を行ずる時、衆生を敎へて精進せしめ、是言を作さく、「諸の善男子、勤めて精進せよ、若は布施、若は持戒、若は忍辱、若は精進、若は禪定、若は智慧、若は禪定解脫三昧、若は四念處乃至八聖道分、若は空解脫門無相無作解脫門、若は佛の十力、若は四無礙智、若は十八不共法、若は大慈大悲と。是諸法に於て、汝等二相を念ずること莫れ、不二相を念ずること莫れ、

【六】次に禪定空

何を以ての故に。是法性皆空なり、是性空法は二相を用て念ずべからず、不二相を用て念ずべからざればなり。」是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に衆生を成就し、衆生を成就し已りて次第に敎へて須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得しめ菩薩位に入りて、阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。

(六)復次に須菩提、菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、衆生の亂心せるを見て、方便力を以て、衆生を利益せんが爲の故に是言を作さく「諸の善男子、當に禪定を修すべし、汝亂想を生ずること莫く當に一心を生ずべし。何を以ての故に。是法性皆空なり、空の中に法の若は亂若は一心として得べきもの有ること無ければなり」と。汝等是三昧に住して有らゆる作業、若は身、若は口、若は意に、若は布施し、若は持戒し、若は忍辱を行じ、若は勤めて精進し、若は禪定を行じ、若は智慧を修し、若は四念處を行じ、乃至若は八聖道分を行じ、若は諸解脫次第定を行じ、若は佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲三十二相八十隨形好を行じ、若は聲聞道、若は辟支佛道、若は菩薩道、若は佛道、若は須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道、若は一切種智、若は成就衆生、若は淨佛國土、汝等皆當に所願に隨つて得べし、性空に住するが故に。是の如く須菩提、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、方便力もて衆生を利益せんが爲の故に初發意より終に懈廢せず、常に善法を求めて衆生を利益し、一佛國より一佛國に至りて諸佛を供養し、諸佛に從つて法を聞き、捨身し受身し、乃至阿耨多羅三藐三菩提まで終に忘失せざれば、是菩薩は常に諸の陀羅

【七】 次に般若空

尼法を得て諸根具足す、謂ゆる身根語根意根なり。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は常に一切種智を修し、一切種智を修するが故に一切の諸道皆修す、若は聲聞道、若は辟支佛道、若は菩薩道、若は菩薩の神通道なり。神通道を行じて菩薩は常に衆生を利益し、終に忘失せず、是菩薩は報得神通に住して衆生を利益し、生死五道に入るも終に耗減せざればなり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて性空に住し、禪定を以て衆生を利益す。

〔七〕復次に須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて性空に住し、方便力を以ての故に衆生を利益して是言を作さく「汝等諸の善男子、一切法の性空を觀ぜよ、善男子、汝等當に諸業の若は身業、若は口業、若は意業を作して甘露味に趣き、甘露果を得べし。性空の中には法として退する有ること無し。何を以ての故に。性空は退せず、亦退する者無ければなり、性空は法に非ず、亦非法にも非ざるを以て無所有法の中に於て云何が當に退すること有るべけん」と。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、是の如く衆生を教へて常に懈廢せざらしむ。是菩薩は自ら十善を行じ、亦他人をも教へて十善を行ぜしむ、五戒八戒成就齋も亦是の如くす。自ら初禪を行じ、亦他人をも教へて初禪を行ぜしむ、乃至第四禪も亦是の如くす。常に自ら慈心を行じ、亦他人をも教へて慈心を行ぜしむ、乃至捨心も亦是の如くす。自ら無邊空處を行じ、亦他人をも教へて無邊空處を行ぜしむ、乃至非有想非無想處も亦是の如くす。自ら四念處を行じ、亦他人をも教へて四念處を行ぜしむ、乃至八聖道分、佛の十力乃至八十隨形好も亦是の如くす。自ら須陀洹果の中に於て智慧を生ず

【八】性空即ち諸法實相は不可得にして衆生を成就するを說く。

るも亦是中に住せず、亦他人をも教へて須陀洹果を得しむ、乃至阿羅漢も亦是の如くす。自ら辟支佛道の中に於て智慧を生ずるも亦是中に住せず、亦他人をも教へて辟支佛道を得しむ。自ら阿耨多羅三藐三菩提道に至り、亦他人をも教へて阿耨多羅三藐三菩提道に至らしむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力の故に終に懈廢せざるなり。」

(八)須菩提佛に白して言さく『世尊、若し諸法の性常に空なれば、常空中に衆生得べからず、法非法も亦得べからざるなり。菩薩摩訶薩は云何が一切種智を求むるや。』佛須菩提に告げたまはく『是の如く是の如し、汝が言ふ所の如く、諸法の性皆空なれば、空中に衆生得べからず、法非法も亦得べからざるなり。須菩提、若し一切法の性空ならずば、菩薩摩訶薩は性空に依りて阿耨多羅三藐三菩提を成じ、衆生の爲に性空の法を說かざらん。須菩提、色の性空、受想行識の性空なれば、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、五陰性空の法を說き十二入十八界性空の法を說き、四禪四無量心四無色定四念處乃至八聖道分の性空の法を說き、三解脫門八背捨九次第定、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲三十二相八十隨形好性空の法を說き、須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道、一切種智斷煩惱習性空の法を說く。須菩提、若し內空の性空ならず、外空乃至無法有法空の性空ならずば、則ち空性を壞す、是性空なれば不常不斷なり。何を以ての故に。是性空なれば住處無く、亦從て來る所無く、亦從て去る所も無ければなり。須菩提、是を法の住相と名く。

是中に法無く、聚無く散無く、增無く減無く、生無く滅無く、垢無く淨無し、是を諸法の相と爲す。菩薩摩訶薩は是中に住して阿耨多羅三藐三菩提心を發し、法として發す所有るを見ず、無發無作なり、是を法の住相と名く。是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、一切法の性空なるを見、阿耨多羅三藐三菩提を轉ぜず。何を以ての故に。是菩薩は法の能く障礙するもの有ることを見ず、當に何處にか疑を生ずべけん、是を阿耨多羅三藐三菩提と名く。性空なれば衆生を得ず、我を得ず、人を得ず、壽を得ず、命を得ず、乃至知者見者を得ざるなり。性空の中に色得べからず、受想行識得べからず、乃至八十隨形好得べからざるなり。須菩提、譬へば佛の四衆、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷を化作して、常に是諸衆の爲に法を說きて千萬億劫斷ぜざるが如し。』

佛須菩提に告げたまはく、『是諸の化衆は當に須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果を得阿耨多羅三藐三菩提の記を得べきや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。何を以ての故に。是諸の化衆は根本實事有ること無きが故に、一切諸法性空にして、亦根本實事無ければ何等か是衆生、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、阿耨多羅三藐三菩提の記を得ん。』『須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如し、衆生の爲に性空の法を說くも、是衆生實に得べからず。衆生の顚倒に墮するを以ての故に、衆生を拔て不顚倒に住せしむ。顚倒は即ち是無顚倒なり、顚倒不顚倒一相なりと雖も、而も多く顚倒し、少く顚倒せず、無顚倒處の中には即ち我無く衆生無く、乃至知者見者無し。無顚倒處の中には亦色無く受想行識無く、十二入無く乃至阿

耨多羅三藐三菩提も無し、是を諸法の性空と名く。菩薩摩訶薩は是中に住して般若波羅蜜を行ずる時、衆生の相顚倒中に於て衆生を拔出す、謂ゆる無衆生を有衆生相中より拔出し、乃至智者見者相中より拔出す。無色色相中、無受想行識、受想行識相中に於て衆生を拔出す。十二入十八界乃至一切の有漏法も亦是の如し。須菩提、亦諸の無漏法、謂ゆる四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分有り、是の如き等の法、無漏法なりと雖も亦第一義相に如かず。第一義相とは無作無爲無生無相無說なり、是を第一義と名け、亦性空と名け、亦諸佛の道とも名く。是中に衆生を得ず、乃至知者見者を得ず、色受想行識を得ず、乃至八十隨形好を得ず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は道法の爲の故に阿耨多羅三藐三菩提心を求むるに非ず、諸法實相性空の爲の故に阿耨多羅三藐三菩提を求む。是性空の前際も亦是性空なり、後際も亦是性空なり、中際も亦是性空なり、常に性空にして性空ならざる時無ければなり。菩薩摩訶薩は是性空般若波羅蜜を行じて衆生の種種相に著するを拔出せんと欲するが爲の故に道種智を求む、道種智を求むる時に徧く一切道、若は聲聞道、若は辟支佛道、若は菩薩道を行ず。是菩薩は一切道を具足し、衆生を邪想著より拔出し、佛國土を淨め已りて其壽命に隨て阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提、過去十方の諸佛の道は謂ゆる性空なり、未來現在十方の諸佛の道も謂ゆる性空なり、性空を離れては世間に道無く道果無し、要ず親近の諸佛に從て是諸法の性空なるを聞き、是法を行じて薩婆若を失せざれ。』

【九】性空に住して諸法を壊せざるを明す。

（九）須菩提佛に白して言さく、『世尊、甚だ希有なり、諸の菩薩摩訶薩有て是性空の法を行ずるも亦性空の相を壊せず、謂ゆる色と性空と異り、受想行識と性空と異り、乃至阿耨多羅三藐三菩提と性空と異るとは。』『須菩提、色は即ち是性空なり、性空は即ち是色なり、乃至阿耨多羅三藐三菩提は即ち是性空なり、性空は即ち是阿耨多羅三藐三菩提なり。』佛須菩提に告げたまはく、『若し色と性空と異り、若し受想行識と性空と異り、乃至阿耨多羅三藐三菩提と性空と異らば、菩薩摩訶薩は一切種智を得ること能はず。須菩提、今色は性空に異らず、乃至阿耨多羅三藐三菩提は性空に異らず。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は一切法の性空なることを知り、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求む。何を以ての故に。是中に法の若は實、若は常なる有ること無ければなり。但だ凡夫は色受想行識に著し、凡夫は色相を取り、受想行識相を取り、我心有て内外の法に著するが故に、後身の色受想行識を受く。是因縁を以ての故に、生、老病死の愁憂苦惱を脱することを得ずして、五道に往來す。是事を以ての故に、菩薩摩訶薩は性空波羅蜜を行じて、色等の諸法相を壊せず、若は空、若は不空なりと。何を以ての故に。色性空相は色を壊せず、謂ゆる是色是れ空なり。是受想行識乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如し。譬へば虚空の虚空を壊せず、内虚空の外虚空を壊せず、外虚空の内虚空を壊せざるが如し。是の如く須菩提、色は色の空相を壊せず、色の空相は色を壊せざるなり。何を以ての故に。是二法は性有ること無ければ、能く壊する所有らんや、謂ゆる是れ空なり、是れ非空なりと。乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如し。』須

菩提佛に白して言さく、『世尊、若し一切の法、空にして分別する無ければ、云何が菩薩摩訶薩は初發意より已來是願を作す、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと。世尊、若し一切の法、分別する無ければ、云何が菩薩は發心して、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと言ふや。世尊、若し諸法を分別せば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、若し菩薩摩訶薩、一相を行ずれば、阿耨多羅三藐三菩提無し。若し分別して二分と作さば、阿耨多羅三藐三菩提無し。若し諸法を二とせず分別せざれば、則ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。菩提は是れ不二相、不壞相なり。須菩提、是菩提は色の中に行ぜず、受想行識の中に行ぜず、乃至菩提も亦菩提の中に行ぜざるなり。何を以ての故に。色は即ち是れ菩提なり、菩提は即ち是色にして二ならず、分別すべからざればなり、乃至十八不共法も亦是の如し。是菩提は非取の故に行じ、非捨の故に行ず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、菩提を非取の故に行じ、非捨の故に行ぜば、菩薩摩訶薩は菩提を何處に行ずるや。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、佛の所化人の如き何處に在て行ず、若は取中に行じ、若は捨中に行ずるや。』須菩提言さく、『世尊、非取中に行じ、非捨中に行ずるなり。』佛言はく、『菩薩摩訶薩の菩提も亦是の如く、非取中に行じ、非捨中に行ず。須菩提、汝が意に於て云何、阿羅漢の夢中の菩提、何處にか行ず、若は取中に行じ、若は捨中に行ずるや不や。』『不、世尊。非取中に行じ、非捨中に行ずるなり。何を以ての故に。阿羅漢は畢竟不眠なり、云何が夢中に菩提を

若は取中に行じ、若は捨中に行ぜんや。』『須菩提、菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如く、非取中に行じ、非捨中に行ず。謂ゆる色の中に行じ、乃至一切種智の中に行ずるなり。』『世尊、將に菩薩摩訶薩は十地を行ぜず、六波羅蜜を行ぜず、三十七助道法を行ぜず、十四空を行ぜず、諸禪定解脫三昧を行ぜず、佛の十力乃至八十隨形好を行ぜずんば五神通に住し、佛國土を淨め、衆生を成就し、阿耨多羅三藐三菩提を得ること無けん。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、汝が言ふ所の如く、今菩薩たとひ菩提處行無しと雖も、若し十地六波羅蜜四禪四無量心、四無色定四念處乃至八聖道分、空無相無作解脫、佛の十力乃至八十隨形好を具足せず、常捨行、不諍法、不錯謬法、是の諸の法を具足せざれば、終に阿耨多羅三藐三菩提を得ず。是菩薩摩訶薩は色相中に住し、受想行識相中に住し、乃至阿耨多羅三藐三菩提相中に住して、能く十地を具足し、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。是相、常に寂滅し、法として能く增じ、能く減じ、能く生じ、能く滅し、能く垢れ、能く淨め、能く得道し、能く得果する有ること無し。世諦の法なるが故に。菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る、第一實義に非ず。何を以ての故に、第一義中に色有ること無く、乃至阿耨多羅三藐三菩提無く、亦阿耨多羅三藐三菩提を行ずる者も無ければなり。是一切の法は皆世諦なるを以ての故に、第一義には非ずと說く。須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より已來、阿耨多羅三藐三菩提を行ずるも、菩提も亦增ぜず、衆生も亦減ぜず、菩薩も亦增減無し。須菩提、汝が意に於て云何、若し人初めて得道する時、無間三昧に住し、

無漏根成就し、若は須陀洹果、若は斯陀含果、若は阿那含果、若は阿羅漢果を得れば、汝爾時に若は夢、若は心、若は道、若は道果を所得する有りや不や。』須菩提言さく、『世尊、得ざるなり。』佛須菩提に告げたまはく、『云何が當に阿羅漢道を得たる者と知るべきや。』『世尊、世諦の法なるが故に分別して阿羅漢道と名く。』佛言はく、『是の如く是の如し、須菩提、世諦の故に說きて菩薩と名け、說きて色受想行識乃至一切種智と名く。是菩提の中、法の若は增、若は減なりとして得べき無し、諸法の性空なるを以ての故に。諸法性空尚ほ得べからず、何に況んや初發心乃至十地心、六波羅蜜、三十七助道法、空三昧無相無作三昧乃至一切の佛法を得んや。當に所得有らば、是處有ること無かるべし。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を行じ、阿耨多羅三藐三菩提の法を得て、衆生を利益す。』

具足品第八十一

(一)須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜十八空三十七助道法、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法を行じて、菩薩道を具足せず、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はずんば、世尊、菩薩摩訶薩は當に云何が菩薩道を具足し、能く阿耨多羅三藐三菩提を得べきや。』佛須菩提に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、方

【具足品】菩薩道を具足する義を明す。

【一】云何が菩薩道を具足して無上菩提を得るやを明す。

【方便力】決定して施施者、受者の三事を得ず、又この三事を離れずしての布施度を行ずるの類なり。若しこれなくば斷滅邊著空に墮す。

【照明】具足と一義なり。
【習するや】般若は深果報利益ありと雖も決定性なくば習し難かるべしとなり。
【色を壞せず】色の無常空無所有をいはざるなり。
【色に隨はず】眼の如く色を見て取相生著せず、色の常無常を說かず、世性、極微、自在天等より生ずとせず。
【性無きが故に】四大和合を假に名けて色となし、是の中に定一實法の色あることなし。

便力を以ての故に、檀那波羅蜜を行ずるに施を得ず、施者を得ず、受者を得ず、亦是法をも遠離せず、檀那波羅蜜を行ずるは是則ち菩薩道を照明するなり。是の如く須菩提、菩薩は方便力を以ての故に菩薩道を具足す、具足し已りて能く阿耨多羅三藐三菩提を得、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、乃至十八不共法も亦是の如し。』舍利弗佛に白して言さく、「世尊云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を習するや。』佛舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるに、方便力を以ての故に、色を壞せず、色に隨はず。何を以ての故に。是色性無きが故に、壞せず隨はず。乃至受想行識も亦是の如し。舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるに、方便力を以ての故に、檀那波羅蜜を壞せず、隨はず。何を以ての故に。檀那波羅蜜の性無きが故に。乃至十八不共法も亦是の如し。』舍利弗佛に白して言さく、「世尊、若し諸法、自性の壞すべく隨ふべき者無くんば、云何が菩薩摩訶薩は能く般若波羅蜜、諸の菩薩摩訶薩の所學の處を習するや。何を以ての故に。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざればなり。』佛舍利弗に告げたまはく、「汝が言ふ所の如く、菩薩は般若波羅蜜を學せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、方便力を離れざるが故に得べし。舍利弗、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、若し一法性の得べき有らば、當に取るべし、若し得べからざれば何の取る所ありて、謂ゆる此は是れ般若波羅蜜なり、是れ禪那波羅蜜なり、是れ毘梨耶波羅蜜なり、是れ羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀那波羅蜜なり、是れ色受想行識なり、乃至是れ阿耨多羅三藐三菩提なりとせんや。

【學する相】般若の無取なりとするところをいふ。

【二】諸法實性なくして凡聖あるは無性にて相應すると否とによるも、實は人法共に空なる空の同じきことを明す。

【諸法の根本等】深く諸法性空を行ずるが故に一切法の根本あるを見ず即ち懈せず怠せず

舍利弗、是般若波羅蜜は相を取るべからず、乃至一切諸佛の法は相を取るべからず。舍利弗、是を不取般若波羅蜜乃至佛法と名く、是菩薩摩訶薩の學すべき所にして、菩薩摩訶薩は是中に於て學する時、學する相も亦得べからず、何に況んや般若波羅蜜、佛法、菩薩法、辟支佛法、聲聞法、凡夫人法をや。何を以ての故に。舍利弗、諸法は一法として性有ること無ければなり。是の如きの無性の諸法、何等をか是凡夫人、須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛、菩薩、佛とせんや。若し是諸の賢聖無くんば、云何が法有らん。是法を知るが故に分別して是凡夫人なり、須陀洹なり、斯陀含なり、阿那含なり、阿羅漢なり、辟支佛なり、菩薩なり、佛なりと說く。」

（二）舍利弗佛に白して言さく、「世尊、若し諸法性無く實無く根本無ければ、云何が是凡夫人なり。乃至是佛なりと知らん。」佛舍利弗に告げたまはく、「凡夫人所著の處、色性有り、實有りや不や。」「不、世尊、但だ顚倒心を以ての故に。受想行識乃至十八不共法も亦是の如し。」「舍利弗、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、諸法の性無く根本無きことを見るが故に、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發す。」舍利弗佛に白して言さく「世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、諸法の性無く根本無きことを見るが故に、能く阿耨多羅三藐三菩提心を發すや。」佛舍利弗に告げたまはく「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、諸法の根本あるを見、中に住して退沒し、懈怠の心を生ぜず、舍利弗、諸法の根本は實に我無く所有無く性常に空なり、但だ顚倒愚癡の故に、

【自ら立つて幻師の如く】種種神通變化して說法度人すること幻師所作の如く、無憎無愛の等心もて說法するをいふ。

【聖法】四聖諦法即ち一切聖人所行の法なり。前の六法により人より天に進むも、更に波羅蜜となり出世の勝果を得るをいふ。

【二諦の中】但空但有を說かざるをいふ。

【心曠大】無所依無所得なるをいふ。

衆生は陰入界に著す。是菩薩摩訶薩は、諸法の所有無く性常に空にして、自相空なることを見る時、般若波羅蜜を行じ、自ら立て幻師の如く、衆生の爲に說法す。慳者には爲に布施の法を說き、破戒者には爲に持戒の法を說き、瞋る者には爲に忍辱の法を說き、懈怠の者には爲に精進の法を說き、亂者には爲に禪定の法を說き、愚癡の者には爲に智慧の法を說き、衆生をして布施乃至智慧に住せしめ、然して後に爲に聖法を說き、能く苦を出す。是法を以ての故に、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果辟支佛道、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は是衆生の無所有を得て、敎へて布施持戒乃至智慧あらしめ、然して後爲に聖法を說き、能く苦を出す。是法を以ての故に、須陀洹果乃至阿耨多羅三藐三菩提を得。』佛舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、有所得の過罪有ること無し。何を以ての故に。舍利弗、是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時に、衆生を得ず、但だ空法相續の故に衆生と爲すのみなればなり。舍利弗、菩薩摩訶薩は二諦の中に住して、衆生の爲に世諦と第一義諦とを說法す。舍利弗、二諦の中に衆生得べからずと雖も、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるに方便力を以ての故に、衆生の爲に說法し、衆生是法を聞く。今世に吾我尙ほ得べからず、何に況んや當に阿耨多羅三藐三菩提者及び所用の法を得べけんや。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以ての故に、衆生の爲に說法す。』舍利弗佛に白して言さく、『世尊、是菩薩摩訶薩の心曠大にして、法の若は一相、若は異相、若は別相として得べきもの有ること

【不縛不解】久遠以來の顚倒煩惱皆不實の故に不縛といひ、縛なき故不解なり、縛は垢、解は淨なり。

【先有後無等】先に迷へる間は有るも今悟るを以て無なりとせば尙過あり。

【有佛無佛等】佛の有無に關せず諸法實相にして常住なり。

と無し、而も能く是の如く大誓莊嚴す。是莊嚴を用ての故に欲界に生ぜず、色界に生ぜず、無色界に生ぜず、有爲性を見ず、無爲性を見ず、而も三界の中に於て衆生を度脫するも、亦衆生を得ず。何を以ての故に。衆生は不縛不解なればなり。衆生不縛不解なるが故に、垢無く淨無く、垢無く淨無きが故に五道を分別する無し、五道の分別する無きが故に業無く煩惱無し、業無く煩惱無きが故に亦果報も有るべからず、是果報を以ての故に三界の中に生ずるなり。『佛舍利弗に告げたまはく、『是の如く是の如し。汝が言ふ所の如く、若し衆生先有後無なれば、諸佛菩薩は則ち過罪有り、諸法五道生死も亦是の如し。若し先有後無なれば、諸佛菩薩は則ち過罪有り。舍利弗、今有佛にも無佛にも諸法の相は常住にして異らず、是法相の中、尙ほ我無く衆生無く壽命無く乃至知者無く見者無し、何に況んや當に色受想行識有るべけんや。若し是法無ければ、云何が當に五道を往來して衆生を拔出する處有るべけんや。舍利弗、是諸法の性は常に空なり、是を以ての故に、諸の菩薩摩訶薩は過去の佛に依て是法相を聞き、阿耨多羅三藐三菩提の意を發す。是中に法の我として當に得べき有ること無く、亦衆生の定んで著する處の法有ること無く、出すべからず、但だ衆生の顚倒を以ての故に著するのみ。是を以ての故に菩薩摩訶薩は大誓莊嚴を發し、常に阿耨多羅三藐三菩提を退せざるなり。是菩薩は、我れ當に阿耨多羅三藐三菩提を得ざるべきや、我れ必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきやを疑はず、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、實法を用て衆生を利益し、顚倒を出でしむ。舍利弗、譬へば幻師の百千萬億人を幻作して

【三】須菩提の問に依り行菩薩道の相を示す。
【菩薩…衆生を成就等】菩薩行の第一に無所得の布施を明す。

種種の飲食を與へ、飽滿し歡喜し、唱へて我れ大福を得たりと言はしむるが如し。汝が意に於て云何、是中に人有り、食飲飽滿するや不や。』『不、世尊。』佛言はく、『是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は初發意より已來、六波羅蜜四禪四無量心四無色定四念處乃至八聖道分、十四空三解脫門八背捨九次第定、佛の十力乃至十八不共法を行じ、菩薩道を具足し、衆生を成就して佛國土を淨むるも、衆生の法として度すべき無し。』

(三)須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等をか是菩薩摩訶薩の道とし、菩薩は是道を行じて、能く衆生を成就し、佛國土を淨むるや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は初發意より已來、檀那波羅蜜を行じ、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜を行じ、乃至十八不共法を行じて、衆生を成就し、佛國土を淨む。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行じ、衆生を成就するや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩行りて檀那波羅蜜を行ずる時、自ら布施し、亦衆生を教へて布施せしめて、是言を作さく、「諸の善男子、汝等布施に著すること莫れ、汝布施に著するが故に當に更に身を受くべし、更に身を受くるが故に多く衆の苦を受くるなり。諸の善男子、諸法相の中に施す所無く、施者無く、受者無し、是三法は皆性空なり、是性空の法は取るべからず、取るべからざるの相は是れ性空なり」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行ずる時、衆生に布施するも、是中に布施を得ず、施者を得ず、受者を得ず。何を以ての故に。無所得の波羅蜜、是を名けて檀那波羅蜜と爲せばなり。是菩薩は是三法を得ざるが

故に能く衆生を教へて須陀洹果を得しめ、乃至阿羅漢果辟支佛道阿耨多羅三藐三菩提を得しむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行ずる時に衆生を成就す。是菩薩自ら布施を行じ、亦他人を教へて布施を行ぜしめ、布施の法を讃歎し、布施を行ずる者を歡喜し讃歎す。是菩薩は是の如く布施し已りて刹利大姓婆羅門大姓居士大家に生じ、若は小王、若は轉輪聖王と作る。是時に四事を以て衆生を攝取す。何等をか四とす、布施と愛語と利行と同事となり。是四事もて衆生を攝取し已りて、衆生漸漸に戒四禪四無量心四無色定四念處乃至八聖道分、空無相無作三昧に住し、正位の中に入ることを得、須陀洹果を得、乃至阿羅漢果を得、若は辟支佛道を得、若は教へて阿耨多羅三藐三菩提を得しめて、是言を作さく「諸の善男子、汝等當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし、是阿耨多羅三藐三菩提は得易きのみ。何を以ての故に。定法として衆生 所著の處有ること無く、但だ顚倒の故に衆生 著するのみなればなり。是故に汝等自ら生死を離れ、亦當に他を教へて生死を離れしむべし。汝等當に發心して能く自ら利益し、亦當に他人をも利益すべし」と。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く檀那波羅蜜を行ずべし、是檀那波羅蜜を行ずる因緣の故に、初發意より已來、終に惡道に墮せず、常に轉輪聖王と作る。何を以ての故に。其種うる所に隨て大果報を得ればなり。是菩薩、轉輪聖王と作る時、乞ふ者有るを見て是念を作さく「我れ餘事の爲の故に轉輪聖王の果を受けず、但一切の衆生を利益せんが爲の故のみ」と。是時に是言を作さく「此は是汝の物なり、汝自ら之を取れ、難ずる所有ること莫れ、我れ惜

【四】無所得の布施中に他の五法を行ずるを明す。

む所無し、我れ衆生の爲の故に生死を受く、汝等を憐愍するが故に大悲を具足す、是大悲を行じて衆生を饒益するも、亦實に定んで衆生相を得ず、但だ假名字有るが故に是衆生を說くべきも、是名字も亦空にして響聲の如く實に相を說くべからず」須菩提、菩薩薩訶薩は應に是の如く檀那波羅蜜を行じ、衆生の中に於て惜む所無く、乃至自身の肌肉をも惜まず、何に況んや外物をや。是法を以ての故に能く衆生をして生死を出す。何等をか是法とす、謂ゆる檀那波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、乃至十八不共法もて衆生をして生死の中より脫することを得しむるなり。

(四)復次に須菩提、菩薩薩訶薩は檀那波羅蜜の中に住し、布施し已りて是言を作さく、「諸の善男子、汝等來りて持戒すべし、我れ當に汝等に供給して乏短する所無からしむべし。衣服臥具乃至資生に須ふる所盡く當に汝に給すべし。汝等乏少の故に戒を破る、我れ當に汝の須ふる所を給し、若は飮食乃至七寶を乏ずる所無からしむべし。汝等是戒律儀の中に住し、漸漸に當に苦を盡すことを得、三乘に乘じて而して度脫することを得べし、若は聲聞乘、若は辟支佛乘、若は佛乘なり。」復次に須菩提、菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜の中に住し、若し衆生の瞋惱するを見れば、是言を作さく、「諸の善男子、汝等何の因緣を以ての故に瞋惱す我れ當に汝の所須を學ぶべし、汝等の欲する所、我れより之を取れ、悉く當に給し、汝をして若は飮食衣服乃至資生に須ふる所を乏ずる所無からしむべし」と。是菩薩は檀那波羅蜜の中に住し、衆生を教へて忍辱せしめ、是言を作さく、「一切の法の中に堅實なること有ること

と無し、汝等の瞋る所、是因緣空にして、堅實なる無く、皆虛妄憶想より生ず。汝等根本有ること無きを以て瞋恚し壞心し、惡口罵詈し、刀杖もて相加へて以て命を害ふに至る。汝等是虛妄の法を以て瞋を起す。故に、地獄畜生餓鬼の中及び餘の惡道に墮し、無量の苦を受くること莫れ。汝等是虛妄無實の諸法たるを以ての故に而も罪業を作ること莫れ。是罪業を以ての故に、尙ほ人身すら得ず、何に況んや佛世に生ずることを得んや。諸人佛世に値ひ難く人身は得難し、汝等好時を失すること莫れ、若し好時を失すれば、則ち救ふべからず」と。是菩薩摩訶薩は是の如く衆生を教化して自ら忍辱を行じ、亦他人をも教へて忍辱を行ぜしめ、忍辱の法を讃歎し、忍辱を行ずる者を歡喜し讃歎す。是菩薩は衆生をして忍辱の中に住せしめ、漸く三乘を以て衆苦を盡すことを得しむ。是の如く菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜に住し衆生をして忍辱に住せしむ、須菩提、云何が菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜に住し、衆生をして精進ならしむるや。須菩提、菩薩は衆生の懈怠なるを見て是の如く言ふ、「汝等何を以て懈怠するや。」衆生言はく、「因緣少きが故に」と。是菩薩、檀那波羅蜜を行ずる時に、諸人に語りて言はく、「我れ當に汝の因緣をして具足せしむべし、若は布施、若は持戒、若は忍辱、是の如き等の因緣の故に汝をして具足せしめん。」是衆生は菩薩の利益因緣を得るが故に身精進し、口精進し、心精進す。身精進口精進心精進なるが故に一切の善法具足し聖無漏法を修す、聖無漏法を修するが故に當に須陀洹果乃至阿羅漢果辟支佛道を得、若は阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行ずる時精

進波羅蜜に住して、衆生を攝取す。須菩提、云何が菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行ずる時に衆生を教化し、禪那波羅蜜を修せしむるや。』佛須菩提に告げて言はく、『菩薩衆生の亂心するを見て是言を作さく、「汝等禪定を修すべし。」衆生言はく、「我等の因縁具足せざるが故に」と。菩薩言はく、「我れ當に汝等の與めに因縁と作るべし、是因縁を以ての故に、汝の心をして覺觀に隨はざらしめ、心をして馳散せざらしめん。」衆生は是因縁を以ての故に覺觀を斷じ、初禪二禪三禪四禪に入り、慈悲喜捨心を行ず。衆生是禪無量心の因縁を以ての故に、能く四念處乃至八聖道分を修し、三十七助道法を修する時、漸く三乘に入りて而して般涅槃し終に道を失はず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行ずる時に、禪那波羅蜜を以て衆生を攝取し、禪那波羅蜜を行ぜしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行じ、般若波羅蜜を以て衆生を攝取するや。須菩提、菩薩は衆生の愚癡にして智慧有ること無きを見て是言を作さく、「汝等何を以ての故に智慧を修せざるや。」衆生言はく、「因縁未だ具足せざるが故に」と。菩薩は檀那波羅蜜の中に住して是言を作さく、「汝等の須ふる所の智慧を具足することを得んとせば、我れより之を取れ、謂ゆる布施持戒忍辱精進禪定、是因縁具足し已りて、汝等是の如く思惟すべし、般若波羅蜜を思惟する時、法の得べきもの有りや不や、若は我、若は衆生、若は壽命乃至知者見者、得べきや不や。若は色受想行識、若は欲界色界無色界、若は六波羅蜜、若は三十七助道法、若は須陀洹果、若は斯陀含、若は阿那含阿羅漢果辟支佛道、若は阿耨多羅三藐三菩提、得べきや不や。」是衆生是の如く思

【五】更に布施中諸菩薩行によりて衆生を攝取することを明す。

惟する時に般若波羅蜜の中に於て法の得べく著すべき處有ること無し。若し諸法に著せざれば、是時、法の生有り滅有り、垢有り淨有るを見ず。是れ地獄なり、是れ畜生なり、是れ阿修羅なり、是れ天なり、是れ人なり、是れ持戒なり、是れ破戒なり、是れ須陀洹なり、是れ斯陀含なり、是れ阿那含なり、是れ阿羅漢なり、是れ辟支佛なり、是れ佛なりと分別せず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行ずる時に般若波羅蜜を以て衆生を攝取す。

(五)須菩提、云何が菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜の中に住し、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜乃至三十七助道法を以て衆生を攝取するや。須菩提、菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜の中に住し、供養の具を以て衆生を利益す、是利益の因緣を以ての故に衆生は能く四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分を修し、衆生は是三十七助道法を行じ、生死の中に於て解脱することを得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は無漏の聖法を以て衆生を攝取す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は衆生を教化する時に是の如く言はく「諸の善男子、汝等我より須ふる所の物を取れ、若は飲食衣服臥具、香華乃至七寶等の種種資生に須ふる所の物、汝等是を以て衆生を攝取し、汝等長夜に利益し安樂にして、是念を作すこと莫れ、是物は我が所有に非ず、我れ長夜に衆生の爲の故に此諸の物を集む、汝等當に是物を己の物と異ること無きが如く取り、衆生を教化して布施持戒忍辱精進禪定智慧を行ぜしめ、乃至三十七助道法、佛の十力乃至十八不共法を得しめ、亦諸の無漏法、謂

ゆる須陀洹乃至阿羅漢果、辟支佛道阿耨多羅三藐三菩提を得しむべし。」是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜を行ずる時、應に是の如く衆生を敎化して三惡道及び一切生死往來の苦を離ることを得しむべし。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜に住して衆生を敎化し、是言を作さく、「衆生汝等何の因緣を少くが故に破戒するや、我れ當に汝のために因緣、若は布施乃至智慧及び種種資生に須ふる所を具足することを作すべし。」是菩薩摩訶薩は尸羅波羅蜜に住して衆生を利益し、十善道を行じ十不善道を遠離せしむ。是諸の衆生は諸の戒を持して破戒せず、缺戒せず、濁戒せず、雜戒せず、取戒せず、漸く三乘を以て而して苦を盡すことを得。尸羅波羅蜜を首と爲し、檀那波羅蜜に說くが如く、餘の四波羅蜜も亦是の如し。』

【雜戒】世間外道の戒行を混ず。

【取戒】戒禁取にして持戒取著の見をなす。

摩訶般若波羅蜜經　卷第二十六

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

淨土品第八十二

（一）爾時、須菩提是念を作さく、『何等をか是れ菩薩摩訶薩の道とし、菩薩は是道に住して能く是の如きの大誓莊嚴を作す』と。佛須菩提の心に念ずる所を知り、須菩提に告げたまはく、『六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の道、三十七助道法は是れ菩薩摩訶薩の道、十八空は是れ菩薩摩訶薩の道、八背捨九次第定は是れ菩薩摩訶薩の道、佛の十力乃至十八不共法は是れ菩薩摩訶薩の道なり、一切の法も亦是れ菩薩摩訶薩の道なり。須菩提、汝が意に於て云何。頗し法として菩薩の學せざる所有らば、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや不や。須菩提、法として菩薩の學すべからざる所の者有ること無し。何を以ての故に。若し菩薩、一切の法を學せざれば、一切種智を得ること能はざればなり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し一切の法空なれば、云何が菩薩は一切の法を學すと言ふや、將た世尊無戲論中に戲論を作す無きや、謂ゆる是れ法、是れ非法、是れ世間法、是れ出世間法、是れ有漏法、是れ無漏法、是れ有爲法、是れ無爲法、是れ凡夫人法、是れ阿羅漢法、是れ辟支佛法、是

【淨土品】前品に續きて菩薩道を行じ佛國土を淨むることを明す。

【一】須菩提の念に對し更に菩薩所道を辨じて大誓莊嚴たることを明す

【六波羅蜜】菩薩の初發心道にして多く衆生のためにす、四禪八背捨九次第定及び三十七道品は但涅槃を求め、十八空佛の十力等は佛道を求むるものにして二乘に出過せり。

【將た等】法空にして法を分別し、法を學すとするの戲論に墮せざるやを問答す。

【是れ法、是れ非法】東西上下乃至二乘法佛法の類。

【一切の法空ならざれば】即ち是れ無生無滅の故に四諦なく三寶なく成佛なし。

【一切法等】無分別中に諸法を分別して、衆生の意分別して極好志願するに應ずるなり。

れ佛法なりと。」佛、須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、一切の法は實に空なり。須菩提、若し一切の法空ならざれば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得ず。須菩提、今一切の法、實に空なるが故に、菩薩摩訶薩は能く阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提、汝が言ふ所の如く、若し一切の法空なれば、將た佛無戲論中に於て戲論を作し、此彼を分別して、是れ世間法、是れ出世間法、乃至是れ佛法なり分別するなきやとは、須菩提、若し世間の衆生、一切法の空なることを知らば、菩薩摩訶薩は一切の法を學ばずして一切種智を得ん。須菩提、今衆生は實に一切法の空なることを知らず、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸法を分別して衆生の爲に說く。須菩提、是菩薩道に於て初より已來、應に是の如く思惟すべし、『一切諸法の中に定性得べからず、但和合の因緣に從て法を起すが故に名字の諸法有るのみ』と。我れ當に思惟すべし、『諸法の實性として著する所、若は六波羅蜜性、若は三十七助道法、若は須陀洹果乃至阿羅漢果、若は辟支佛道、若は阿耨多羅三藐三菩提無し』と。何を以ての故に。一切の法、一切法性空なり、空は空に著せず、空も亦得べからず、何に況んや空の中に著する有らん。須菩提、菩薩摩訶薩は是の如く思惟し、一切法に著せずして一切法を學し、是學中に住して、衆生の心行を觀ず。是衆生の心、何處に在りてか行ずる。衆生の虛妄不實の中に行ずるを知る。是時菩薩は是念を作さく、『是衆生は不實虛妄法に著す、度し易きのみ』と。是時菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の中に住し、方便力を以ての故に、是の如く衆生を教化して言はく、『汝、諸の衆生、當

【四禪】[illegible]

【二】[illegible]

【二の因緣】[illegible]

に有為を行ふ義諦を除くべき、彼の二者の如を守るに、自ら貪著する其をべし。何を以ての故に、是中に堅實の法無ければなり。斯陀含果、阿那含果も亦、定んで本進の如し。前の教法、是の説を作して、須陀洹乃至阿羅漢果、辟支佛道、佛道を得べきも、是の説を作りと名すること見るべし。一切の法は皆化し、菩薩道を行じて、而も所著無し。是中に堅實無ることを知るべきが故に、かくの如く化せば、是を菩薩道を行ずと名く。諸法に於て所著無きが故に。何を以ての故に、一切の法所有無ければなり。是無きを以ての故に、畢竟空なるが故に。

「須菩提、是菩薩摩訶薩は是の如く菩薩道を行ずる時、住する所無し。是菩薩は不住法を用ての故に、檀那波羅蜜を行ずるも未だ是中に住せず、尸羅波羅蜜を行ずるも未だ是中に住せず、羼提波羅蜜を行ずるも未だ是中に住せず、毘梨耶波羅蜜を行ずるも未だ是中に住せず、禪那波羅蜜を行ずるも未だ是中に住せず、般若波羅蜜を行ずるも未だ是中に住せず、初禪を行ずるも未だ是中に住せず。何を以ての故に、是初禪の自相空、行者も亦空、所用の法も亦空なればなり。第二第三第四禪も亦是の如く、慈悲喜捨、虚空處乃至非有想非無想處も亦是の如く修し、須陀洹果を得るも未だ是中に住せず、斯陀含阿那含阿羅漢果を得るも未だ是中に住せず、辟支佛道を得るも未だ是中に住せず。」須菩提、佛に白して言く、「世尊、何の因縁の故に是中に住せざる。」佛言く、「二の因縁の故に是中に住せず、何等をか二とす。一には是の諸法の性空にして、住者無く、所用の法も無く、住者も無きなり。二には少事を取り一足れりと為さずして是念を作さく、『我れ須陀洹果を得ざるべからず、我れ當に須陀洹果を得

べきも、我れ但だ是中に住すべからず、乃至辟支佛道、我れ得ざるべからず、我れ必ず當に辟支佛道を得べきも但だ是中に住すべからず、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得るも住すべからず。何を以ての故に。我れ初發意より已來、更に餘心無く一心に阿耨多羅三藐三菩提に向へばなり」と。須菩提、菩薩は一心に阿耨多羅三藐三菩提の中に向ひて餘心を遠離し、作す所の身口意業皆阿耨多羅三藐三菩提に應ず。須菩提、是菩薩摩訶薩は是一心に住して、能く菩提道を生ず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し一切の諸法生ぜざれば、云何が菩薩摩訶薩は能く菩提道を生ずるや。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、一切の法生ずること無し。云何が生ずること無きや。所作無く所起無き者には一切の法生ぜざるなり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、有佛にも無佛にも、諸法の法相は常住ならずや。』佛言はく、『是の如く是の如し、有佛無佛、是諸法の法相は常住なり。衆生は是法の法相に住することを知らざるを以て、是爲の故に、菩薩摩訶薩は衆生の爲の故に菩提道を生じて、是道を用て衆生を生死より拔出す。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、生道を用て菩提を得るや。』佛言はく、『不。』『世尊、不生道を用て菩提を得るや。』佛言はく、『不。』『世尊、不生非不生道を用て菩提を得るや。』佛言はく、『不。』須菩提言さく、『世尊、云何が當に菩提を得べきや。』佛言はく、『道を用て菩提を得るに非ず、亦非道を用て菩提を得るに非ず。須菩提、菩提は即ち是れ道、道は即ち是れ菩提なり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し菩提即ち是れ道、道即ち是れ菩提ならば、若し爾らば、今菩薩未だ佛と作ら

【所作なく等】無作解脱を得三業を起さざるもののために、一切法無生と説くなり。

【有佛にも…常住ならずや】諸法無生は解脱人のために說く故に、聖人法相空なるが如く、有佛無佛常住同一なるべきを問ふ。

【生道】有爲法を觀じて生滅相を實とするなり。

【不生道】無爲無作を實とするなり。然らば菩提亦得べからず、生不生倶に過失あり。

【道…菩提】道即菩提一如にして諸法實相に名け、諸佛所得の究竟實相に異ることなきなり。

【若し爾らば等】菩薩道を行ずれば即ち佛なるべし、道即菩提の故に、又菩提即ち道といはば佛即ち菩薩なるべしとの難なり。

【佛と爲す】三十二相ありて身を莊嚴し、六度等の功德心を莊嚴するも、佛とは名けず、菩提を得るを佛と名くれば佛と菩薩と混ずることなし。

【三】淨佛國土を明す、佛土とは無量無邊の三千大千世界に名く。

【菩薩ありて等】以下菩薩の除くべき麁惡業を明す。

ざる時、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。云何が諸佛の多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀と說き、三十二相八十種隨形好、十力四無所畏四無礙智十八不共法大慈大悲有りや。』佛須菩提に告げたまはく『汝が意に於て云何、佛は菩提を得るや不や。』『不、世尊。』『佛は菩提を得ず。何を以ての故に。佛は卽ち是れ菩提、菩提は卽ち是れ佛なればなり。須菩提の問ふ所の如くんば、菩薩の時も、亦應に菩提を得べし。須菩提、是菩薩摩訶薩は六波羅蜜三十七助道法を具足し、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法を具足し、如金剛三昧を具足し、住し、一念相應の慧を用て阿耨多羅三藐三菩提を得。是時に名けて佛と爲す、一切法の中に於て自在を得。』

(三)須菩提佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩は佛國土を淨むるや。』佛言はく、『菩薩有りて初發意より已來、自ら身の麤業を除き、口の麤業を除き、意の麤業を除き、亦他人の身口意の麤業を淨む。』『世尊、何等をか是菩薩摩訶薩の身麤業口麤業意麤業となす。』佛須菩提に告げたまはく、『不善業、若は殺生乃至邪見、是を菩薩摩訶薩の身口意の麤業と名く。復次に須菩提、慳貪心破戒心瞋心懈怠心亂心愚癡心、是を菩薩の意の麤業と名く。復次に戒の淨らかならざる、是を菩薩の身口の麤業と名く。復次に須菩提、若し菩薩、四念處行を遠離すれば、是を菩薩の麤業と名く。四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分空三昧無相無作三昧を遠離するも、亦菩薩の麤業と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は須陀洹果を貪り乃至阿羅漢果を貪り、辟支佛道を證する、是を菩薩摩訶薩の麤業と名く。復

【色相等】諸法畢竟空中に於て取相して著心を生ずる所謂色相を取する等に麁業と名くるなり。

【麁業相を遠離し等】成就すべき淨善業を明す。

【三尊】佛と賢聖僧と凡夫僧となり。

【百味】種種の妙味。

【天香細滑】妙香料を以て身に塗るなり。

次に須菩提、菩薩の色相受想行識相、眼耳鼻舌身意相、色聲香味觸法相、男相女相、欲界相色界相無色界相、善法相不善法相、有爲法相無爲法相、是を菩薩の麁業と名く。菩薩摩訶薩は皆是の如きの麁業相を遠離し、自ら布施し、亦他人を教へて布施せしめ、食を須つには食を與へ、衣を須つには衣を與へ、乃至種種資生に須つ所盡く之を給與し、亦他人を教へて種種布施せしめ、是福德を持て一切の衆生と之を共にし、淨佛國土に廻向するが故に。持戒忍辱精進禪定智慧も亦是の如くす。是菩薩摩訶薩は或は三千大千國土の中に滿つる珍寶を以て三尊に施與し、是願を作して言はく「我れ善根の因緣を以ての故に我が國土をして皆七寶を以て成ぜしめん」と。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は天の伎樂を以て佛及び塔に樂しめ、是願を作して言はく「是善根の因緣を以ての故に我が國土中に常に天樂を聞かしめん」と。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は三千大千國土の中に滿つる天香を以て、諸佛及び諸佛の塔を供養し、是願を作して言はく「是善根の因緣を以ての故に、我が國土中に常に天香有らしめん」と。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は百味の食を以て佛及び僧に施し、是願を作して言はく「是善根の因緣を以ての故に、我が國土中の衆生をして皆百味の食を得しめん」と。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は天香細滑を以て佛及び僧に施し、是願を作して言はく「是善根の因緣を以ての故に、我が國土中の一切の衆生をして天香細滑を受けしめん」と。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は隨意の五欲を以て、佛及び僧幷に一切の衆生に施し、是願を作して言はく「是善根の因緣を以ての故に、我が國土中の弟子及び一切の衆生をして

皆隨意の五欲を得しめん」と。是菩薩は隨意の五欲を以て一切の衆生と共に淨佛國土に廻向し、是願を作して言はく「我れ佛を得る時、是國土中、天の五欲の心に應じて至るが如くせん」と。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、是願を作して言はく「我れ當に自ら初禪に入り、亦一切の衆生を敎へて初禪に入らしめ、第二第三第四禪、慈悲喜捨心乃至三十七助道法も亦是の如くし、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得る時、一切の衆生をして四禪を遠離せず、乃至三十七助道法を遠離せざらしめん」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は能く佛國土を淨む。是菩薩は爾所の時に隨て菩薩道を行じ、諸願を滿足す。是菩薩は自ら一切の善法を成就し、亦一切衆生の善法をも、成就せしむ。是菩薩は身を受くること端正にして、所化の衆生も亦端正なることを得。所以は何ん、福德の因緣厚きが故に。須菩提、菩薩摩訶薩は應に是の如く佛國土を淨め、是國土の中、乃至三惡道の名も無く、亦邪見三毒二乘聲聞辟支佛の名も無く、耳に無常苦空の聲有ることを聞かず、亦我所有無く、乃至諸の結使煩惱の名も無く、亦諸果を分別するの名も無く、風は七寶の樹を吹き度すべき所に隨て音聲を出す。謂ゆる空無相無作、如諸法實相の音、有佛無佛、一切法一切法相空、空の中に相有ること無く、無相の中には則ち作出無し、是の如きの法音あり。若は晝、若は夜、若は坐、若は臥、若は立、若は行、常に此法を聞く。是菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、十方國土の中の諸佛は讚歎し給ふ、衆生是佛の名を聞きて必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。是菩薩は阿耨多羅三藐三菩提を得る時に說法す、衆生聞く者信ぜ

【畢定品】菩薩は畢定究竟すべきを明す。

【一】佛道の必定を明す。

ずして疑を生じ法を是れ非法なりと言ふもの有ること無し。是れ何を以ての故に。諸法實相の中、皆是れ法にして非法有ること無ければなり。諸有薄福の人は諸佛及び弟子の中に於て善根を種ゑず、善知識に隨はず、我見の中に沒在し、乃至一切種種見の中に沒在し、邊見に墮在して、若は斷、若は常なりとす。是の如きの人は邪見を以ての故に、非佛を佛と言ひ、佛を非佛と言ふ。是の如きの人は非法を法と言ひ、法を非法と言ふ。是の如きの人は破法の故に身壞し命終て惡道地獄中に墮す。諸佛の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、此衆生の五道を往來するを見て、邪聚を離れ正定聚の中に立たしめて、更に惡道に墮せざらしむ。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の淨佛國土の中の衆生は雜穢心、若は世間法、若は出世間法、若は有漏、若は無漏、若は有爲、若は無爲なる無く、乃至是國土の中の衆生は必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。須菩提、是を菩薩摩訶薩の佛國土を淨むると爲す。』

畢定品第八十三

〔一〕須菩提佛に白して言さく『世尊、是菩薩摩訶薩は畢定すと爲すや、畢定せずと爲すや。』佛須菩提に告げたまはく『菩薩摩訶薩は畢定にして不畢定に非ず。』『世尊、何處にか畢定す、聲聞道中と爲んや、辟支佛道中と爲んや、佛道中と爲んや。』佛言はく『菩薩摩訶薩は聲聞辟支佛道中に畢定するに非ず、是れ佛道中に畢定す。』須菩提佛に白して言さく『世

【若しは惡道に墮し】布施持戒等の善法を修すれば三惡道に墮するの處あることなし。

【善法を修する得ざる等】邊國は障礙多く善法を修することを得ず。

【邊國】三寶の名なく七衆を知らず但今世の現事を貴びて福德の道法を貴ばず。

【惡邪見家】世世惡見なり、若し世世常に正見を行ずるもの、かかる家に生ぜず。

【無作見家】六十二種皆邪見なるも無作最も重し、無作は功德を作して涅槃を求めずして天作或は世界始來といふ。

【深心】深惡心なり。

尊、初發意の菩薩の畢定と爲んや、最後身の菩薩の畢定と爲んや。」佛言はく、「初發意の菩薩も亦畢定し、阿惟越致の菩薩も亦畢定し、後身の菩薩も亦畢定す。」「世尊、畢定の菩薩は墮して惡道中に生ずるや不や。」「不、須菩提、汝が意に於て云何、若は八人、若は須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛は、惡道中に生ずるや不や。」「不、世尊。」「是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より已來、布施持戒忍辱精進し、禪定を行じ、智慧を修し、一切の不善業を斷ずるに若は惡道に墮し、若は長壽天、若は善法を修することを得ざる處に生じ、若は邊國に生じ、若は惡邪見家無作見家に生じ、是中佛名無く、法名無く、僧名無き是處有ること無し。須菩提、初發意の菩薩は阿耨多羅三藐三菩提に於て、深心を以て十不善道を行ぜば、是處有ること無し。」「世尊、若し菩薩摩訶薩、是の如きの善根功德の成就する有りて、佛の如く自ら本性を說き、不善の果報を受けば、是時、善根何れの所にか在ると爲す。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は衆生を利益せんが爲の故に、隨て身を受け、是身を以て衆生を利益す。須菩提、菩薩摩訶薩は畜生と作る時、是方便力有り、若し怨賊來りて殺害せんと欲すれば、是無上の忍辱、無上の慈悲心を以て、身を捨てて怨賊を惱まさず。汝、諸の聲聞辟支佛は是力を有する無けん。是を以ての故に、須菩提、當に知るべし、菩薩摩訶薩は大慈心を具足せんと欲し、衆生を憐愍し利益せんが爲の故に、畜生身を受く。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は何等の善根の中に住してか是の如きの諸身を受くるや。」佛須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は初發意より乃至道場

【白淨無漏法】性空によつて善法を行ずるをいふ。

【二】白淨に住する相を明す。

まで、其中間に於て善根の具足せざる者有ること無し、具足し已りて當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は初發意より當に學して一切の善根を具足すべし、善根を學し已りて當に一切種智を得、當に一切煩惱の習を斷ずべし。』須菩提佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩は是の如きの白淨無漏法を成就して、而して惡道畜生の中に生ずるや。』佛須菩提に告げたまはく『汝が意に於て云何、佛は白淨無漏法を成就するや不や。』須菩提言さく『佛は一切の白淨無漏法を成就す。』『須菩提、若し佛自ら畜生身を化作して佛事を作し、衆生を度す、實に是れは畜生なりや不や。』須菩提言さく『不。』佛言はく『菩薩摩訶薩も亦是の如く白淨無漏法を成就し、衆生を度せんが爲の故に畜生の身を受け、是身を用て衆生を教化す。』佛須菩提に告げたまはく『阿羅漢の如きは變化身を作して、能く衆生をして歡喜せしむるや不や。』須菩提言さく『能くす。』佛言はく『是の如く是の如し、須菩提、菩薩摩訶薩は是白淨無漏法を用て、度すべき衆生に隨つて身を受け、是身を以て衆生を利益するも亦苦痛を受けず。須菩提、汝が意に於て云何。幻師の種種の形、若は象馬牛羊男女等を幻作し、是の如き等を以て衆生に示す、須菩提、是象馬牛羊男女等は實に有りや不や。』須菩提言さく『不、世尊。』佛言はく『是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は白淨無漏法を成就し、種種の身を現作し、以て衆生に示すが故に、是身を以て一切を饒益するも亦衆苦を受けず。』

(二)須菩提佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩の大方便力は聖無漏智慧を得て、而して度

【神通波羅蜜を起し等】以下神通波羅蜜に住する相を明す。

すべき所の衆生の身に隨て、種種の形を作し、以て衆生を度す。世尊、菩薩摩訶薩は何等の白淨法に住してか、能く是の如きの方便力を作し、而も染汚を受けざるや。』佛言はく、『菩薩は般若波羅蜜を用て是の如きの方便力を作し、十方如恆河沙等の國土の中に於て、衆生を饒益するも亦是身を貪著せず。何を以ての故に。著、著者、著法、著處、是三法は皆得べからずして、自性空なるが故に。空は空に著せず、空中に著者無く、亦著處も無ければなり。何を以ての故に。空中に空相得べからざるが故に。須菩提、是を不可得空と名く。菩薩は是中に住して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。』『世尊、菩薩は但だ般若波羅蜜の中に住して、阿耨多羅三藐三菩提を得、餘法の中に住せざるや。』『須菩提、頗し法として般若波羅蜜に入らざる者有りや不や。』『世尊、若し般若波羅蜜の自性空なれば、云何が一切法皆般若波羅蜜の中に入るや。』『世尊、空中に法の若は入、若は不入なる有ること無し。』『須菩提、一切法の一切法相空なりや不や。』『世尊、空なり。』『須菩提、若し一切法の一切法相空なれば、云何が一切法空中に入らずと言ふや。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切法空中に住して能く神通波羅蜜を起し、是神通波羅蜜の中に住して、十方如恆河沙等の國土に到り、現在の諸佛を供養し、諸佛の說法を聞き、諸佛の所に於て善根を種うるや。』佛、須菩提に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、是十方如恆河沙等の國土を觀ずるに皆空なり、是國土の中の諸佛も亦性空なり、但だ名字を假るの故に諸佛身を現はすのみ、假る所の名字も亦空なり、若し

【天眼天耳等】以下六通に就て細說す。

十方の國土及び諸佛の性空ならざれば、空は偏有りと爲す、空は不偏なるを以ての故に、一切法の一切法相空なり。是を以ての故に一切法の一切法相空なり。是故に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を用て神通波羅蜜を生じ、是神通波羅蜜の中に住して、天眼天耳如意足、知他心、宿命智を起し、衆生の生死を知る。若し菩薩、神通波羅蜜を遠離せば、轉じて衆生を饒益することを得ること能はず、亦阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、是菩薩摩訶薩の神通波羅蜜は是れ阿耨多羅三藐三菩提の利益道なり。何を以ての故に。是天眼を用て自ら諸の善法を見、亦人を教へて諸の善法を得しめ、善法に於ても亦著せず、諸の善法の自性空なるが故に、空は著する所無ければなり。若し著すれば則ち味を受く、是空の中に味有ること無し。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、能く是の如きの天眼を生じ、是天眼を用て一切法空を觀じ、是法空を見て相を取らず、業を作らず、亦人の爲に是法を說くも亦衆生の相を得ず、衆生の名をも得ず、是菩薩摩訶薩は無所得の法を用ての故に、神通波羅蜜を起し、是神通波羅蜜を用て、神通の作すべき所の者を能く作す。是菩薩は天眼を用て人眼に過ぎ、十方の國土を見る、見已りて飛で十方に到り、衆生を饒益す、或は布施を以てし、或は持戒を以てし、或は忍辱を以てし、或は精進を以てし、或は禪定を以てし、或は智慧を以て衆生を饒益し、或は三十七助道法を以てし、或は諸禪解脫三昧を以てし、或は聲聞法を以てし、或は辟支佛法を以てし、或は菩薩法を以てし或は佛法を以て衆生を饒益す。慳者の爲には是の如きの法を說く、諸の衆生當に布施

を行ずべし、貧窮は是れ苦惱の法なり、貧窮の人は自ら益すること能はず、何ぞ能く他を益せん。是を以ての故に、汝等當に勤めて布施し、自身にも樂を得、亦能く他をして樂を得しめ、貧窮の故を以て共に相ひ食噉すること莫らしむべし、三惡道を離るることを得ざればなり。破戒の者の爲には說法すらく、諸の衆生破戒の法は大苦惱なり、破戒の人は自ら益すること能はず、何ぞ能く他を益せん。破戒の法は苦の果報を受け、若は地獄に在り、若は餓鬼に在り、若は畜生に在らん、汝等三惡道の中に墮せば自ら救ふこと能はず、何ぞ能く人を救はん。是を以ての故に、汝等破戒の心に隨ひ死する時に悔ゆること有るべからず。若し共に相瞋諍する者有らば、是の如きの法を說け、諸の衆生、共に相瞋ること莫れ、瞋つて人心を亂せば善法に順ぜず、汝等今共に相瞋りて心を亂せば、或は地獄若は餓鬼畜生の中に墮せん。是を以ての故に、汝等一念の瞋恚心をも生ずべからず、何に況んや多きをや。懈怠の衆生の爲には、說法して精進を得しめ、散亂の衆生をして禪定を得しめ、愚癡の衆生をして智慧を得しむるも亦是の如し。婬欲を行ずる者には不淨を觀ぜしめ、瞋恚の者には慈心を觀ぜしめ、愚癡の衆生には十二因緣を觀ぜしめ、非道を行ずる衆生には正道謂ゆる聲聞道辟支佛道に入らしめ、是衆生の爲に是の如く說法す。汝等の著する所の如き是法は性空なり、性空の法の中には著することを得べからず。不著相は是れ空相なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、神通波羅蜜の中に住して衆生の爲に利益を作す。須菩提、菩薩若し神通を遠離せば、衆生の意に隨つて善く法を說くこ

と能はず。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、應に神通を起すべし。須菩提、譬へば鳥の翅無ければ高く翔ること能はざるが如く、菩薩は神通無ければ、意に隨つて衆生を教化すること能はず。是を以ての故に、須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、應に諸の神通を起すべし。諸の神通を起し已りて、若し衆生を饒益せんと欲せば、意に隨つて能く益す。是菩薩は天眼を用て如恒河沙等の諸の國土を見、及び是國土の中の衆生を見、見已りて神通力を用て往きて其所に到り、衆生の心を知り、其所應に隨つて爲に法を說く。或は布施を說き、或は持戒を說き、或は禪定を說き、乃至或は涅槃法を說く。是菩薩は天耳を用て二種の音聲若は人、若は非人を聞き、天耳を用て十方の諸佛の說きたまふ所の法を聞き、皆能く受持し、聞く所の如く法を衆生の爲に說き、或は布施を說き乃至或は涅槃を說く。是菩薩は他心智を淨め、他心智を用て衆生の心を知り、其所應に隨つて爲に法を說く。或は布施を說き、乃至或は涅槃を說く。是菩薩の宿命智は種種の本生の處を憶念し、亦自ら憶し、亦他人を憶し、是宿命智を用て過去在在處處の諸佛の名字、及び弟子衆を憶念し、衆生有て宿命を信樂せば、爲に宿命の事を現じて、而して說法を爲す、或は布施を說き、乃至或は涅槃を說く。如意神通力を用て種種無量の諸佛の國土に到り、諸佛を供養し、諸佛に從つて善根を種ゑ、本國に還り來り、是菩薩は漏盡通智を證し、是漏盡神通智の證を用ての故に、衆生の爲の故に、應に隨つて法を說く、或は布施を說き、乃至或は涅槃を說く。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅

蜜を行ずる時、應に是の如きの諸の神通を起すべし。菩薩は是神通を修するを用ての故に、意に隨つて身を受くるも苦樂に染まざるなり。譬へば佛の所化人の一切の事を作すも苦樂に染まざるが如し。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、應に是の如く神通に遊戲し、能く佛國土を淨め、衆生を成就すべし。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は佛國土を淨めず、衆生を成就せざれば、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。何を以ての故に。因緣具足せざるが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はざるなり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等をか是れ菩薩摩訶薩の因緣具足し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得るとなす。』佛須菩提に告げたまはく、『一切の善法は、是れ菩薩の阿耨多羅三藐三菩提の因緣なり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ善法なる、是善法を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得るや。』佛須菩提に告げたまはく、『菩薩は初發意より已來、檀那波羅蜜是れ善法の因緣なり、是中に是れ施者なり、是れ受者なりと分別する無し、性空なるが故に。是檀那波羅蜜を用て能く自ら利益し、亦能く衆生を利益して、生死より拔出し、涅槃を得しむ。是の諸の善法は皆是れ菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の因緣なり。是道を行じて、過去未來現在の諸の菩薩摩訶薩は生死を得度す。已に度し、今度し、當に度すべし。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪那波羅蜜、般若波羅蜜、四禪四無量心四無色定四念處乃至八聖道分、十八空八背捨九次第定陀羅尼門、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法、是の如き等の功德、皆是れ阿耨多羅三藐三菩提道なり。須菩提、是を善法と名く。菩薩摩訶

【差別品】初段差別を明し、次に四諦に就て明す。
【二】佛菩薩並に諸法の差別を明す
【若し…是れ菩薩法ならば】菩薩若し佛の如く行ずれば佛と異ることなかるべし、との疑に對し、解して得向の異とす。
【無礙道】初發心より乃至金剛三昧に至る。
【一切の暗蔽なき】一切法中の疑を斷じて了せざるところなし。

薩は是善法を具足し已りて當に一切種智を得べし。一切種智を得已りて當に法輪を轉じ、法輪を轉じ已りて當に衆生を度すべし。』

差別品第八十四

（二）須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し是諸法にして、是れ菩薩法ならば、何等か是れ佛法なる。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が問ふ所の如く、是諸法是れ菩薩法ならば、何等か是れ佛法なるとは、須菩提、菩薩法も亦是れ佛法なり、若し一切種を知れば是れ一切種智を得、一切煩惱の習を斷ず、菩薩は當に是法を得べく、佛は一念相應の慧を以て一切の法を知り已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たり、須菩提、是を菩薩と佛との差別と爲す。譬へば向道と得果と異るが如し、是二人は俱に聖人爲るも而も得向の異有り。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩の無礙道中に行ずる、是を菩薩摩訶薩と名く。解脫道中に一切の暗蔽無き、是を名けて佛と爲す。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し一切法自相空なれば、自相空法中に、云何が差別の異有らん、是れ地獄、是れ餓鬼、是れ畜生、是れ天、是れ人、是れ性地人、是れ八人地人、是れ須陀洹人、是れ斯陀含阿那含阿羅漢人、是れ辟支佛、是れ菩薩、是れ多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀なりと。世尊、諸人の得べからざるが如く、業因緣も亦得べからず。果報も亦得べからず。』佛言はく、『是の如く是の如し、汝の言ふ

【得ざるなり】佛は邪見五道に墮せず、假に名くるのみにして、其の實は如幻如夢なり。
【若は黑】黑業は不善業果、地獄等の苦を受くるところなり。
【若は白】善業果報を受くるところ、所謂諸天、その受樂は隨意なるを以て自在明了なり。
【若は黑白】善不善混ずる人、阿修羅八部等なり。
【不黑不白】善惡果報を離れたる無漏清淨なるをいふ。
【諸佛の所等】諸佛及び弟子所に於て諸法空を聞くをいふ。
【無衆生】無所有中に於て妄に憶想分別して所得ありとし、衆生なきに衆生の想を生ず。

所の如く、自相空法中には衆生無く、業因緣無く、果報無し。須菩提、若し衆生有りて是諸法の自相空なることを知らざれば、是衆生は業因緣、若は善、若は惡、若は無動を作り、罪業の因緣の故に三惡道の中に墮し、福業の因緣の故に人天の中に在りて生じ、無動業の因緣の故に色無色界の中に生ず、是菩薩摩訶薩は檀那波羅蜜乃至十八不共法を行ずる時、盡く是助道法を受行し、如金剛三昧に入り、阿耨多羅三藐三菩提を得、得已りて衆生を饒益す。是利常に失せざるが故に、五道生死の中に墮せず。』須菩提佛に白して言さく『世尊、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得已りて六道生死を得るや不や。』佛言はく『得ざるなり。』須菩提言さく『世尊、業の若は黑、若は白、若は黑白、若は不黑不白なるを得るや不や。』佛言はく『不。』『世尊、若し得ざれば、云何が是れ地獄餓鬼畜生人天、須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛菩薩諸佛なりと說かん。』『須菩提、若し衆生、諸法の自相空なることを知れば、菩薩摩訶薩は阿耨多羅三藐三菩提を求めず、亦衆生を三惡趣乃至往來五道生死の中より拔かず。須菩提、衆生實に諸法の自性空なることを知らざるを以ての故に、五道生死を脫することを得ず、是菩薩は諸佛の所に從つて諸法の自相空を聞き、發意して阿耨多羅三藐三菩提を求む。須菩提、諸法は爾かく凡人の著する所の如くならず、是衆生は無所有法の中に於て顚倒妄想分別して、法を得、無衆生に衆生相有り、無色に色相有り、無受想行識相有り、乃至一切有爲法無所有なるに、顚倒妄想の心を用て身口意業の因緣をなし、五道生死の中に往來し、脫することを得ず。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切

善法般若波羅蜜の中に內り、菩薩道を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、衆生の爲に四聖諦、苦、苦集、苦滅、苦滅道を說き開示し分別す。一切助道善法は皆四聖諦中に入り、是助道善法を用ての故に分別するに三寶有り。何等をか三とす、佛寶法寶僧寶なり、是三寶を拒逆し信ぜざるが故に五道生死を離るることを得ず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、苦聖諦を用て得度するや、苦智を用て得度するや、集聖諦を用て得度し、集智を用て得度し、滅聖諦を用て得度し、滅智を用て得度し、道聖諦を用て得度するや、道智を用て得度するや。』佛須菩提に告げたまはく、『苦聖諦もて得度するに非ず、亦苦智もて得度するに非ず、乃至道聖諦もて得度するに非ず、亦道智もて得度するに非ず、須菩提、是四聖諦は平等なるが故に我れ說く、即ち是れ涅槃なりと。苦聖諦を以てせず、亦苦智を以てせず、集滅道聖諦を以てせず、亦集滅道智を以てせずして涅槃を得。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、何等をか是れ四聖諦の平等相となす。』『須菩提、若し苦無く苦智無く、集無く集智無く、滅無く滅智無く、道無く道智無ければ、是を四聖諦の平等相と名く。復次に須菩提、是四聖諦は、如法相法性法住法位實際と異らず。有佛にも無佛にも法相常住なり、不誑不失の爲の故に。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、實諦に通達せんが爲の故に般若波羅蜜を行ず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は實諦に通達せんが爲の故に般若波羅蜜を行じ、實諦に通達するが故に聲聞辟支佛地に墮せずして、直に菩薩位の中に入るや。』佛須菩提に告げたまはく、『若し菩薩摩訶

【一切助道善法等】助道法多きも四諦を說くは皆此に攝する事を以てなり。苦は解脫を要する第一事にして、進むでその因を滅するが四諦なればなり。

【二】前說の四聖諦を細說す。

【苦聖諦等】但苦の得道するに非ず、必ず苦智を待つ、苦を離れて智なく、苦智を離れて苦諦の名くるなし。

【四聖諦は…異ならず】四諦平等にして眞實不變常住なり。

【不誑不失】實相不誑なるを以て常住不滅なり衆生を失せず。

【四聖諦の所不攝法】虛空非擇滅無爲をいふ。
【菩薩位】性地中の住。小乘の煖等四善根位の如く、菩薩こゝに住して作佛を求めず。
【頂墮】法相をとり作佛を求めずば頂より墮すといふ。
【苦不生緣苦心】菩薩四諦に通達せば苦も苦相を取らず苦諦を緣ぜざるをいふ。
【自相空】自相空は中空にして、理破あるの故に心沒せず、能く無所得畢竟の深空に入るなり。
【七譬品】甚深般若の性空なる難解難量なるを譬喩を以て說示す。
【一】性空によらば差別の差別とすべきなきも衆生顚倒の故に差別す、今妄見を破し濟度の爲に差別を說くを明らかにす。

薩、實の如く諸法を見、見已りて無所有法を得、無所有法を得已りて一切法空、四聖諦の所攝、四聖諦の所不攝法皆空なりと見る。若し是の如く觀ずれば、是時便ち菩薩位中に入る、是を菩薩の性地中に住し頂墮に從はずと爲す。是頂墮を用ての故に聲聞辟支佛地に墮す。是菩薩は性地中に住して、能く四禪四無量心四無色定を生ず。是菩薩は是初定地中に住して、一切の諸法を分別し、四聖諦に通達し、苦不生緣苦心を知り、乃至道不生緣道心を知り、但だ阿耨多羅三藐三菩提心に順じて諸法の如實相を觀ず。世尊、云何が諸法の如實相を觀ずる。』佛言はく、『諸法空を觀ず。』『世尊、何等か空觀なる。』佛言はく、『自相空なり、是菩薩は是の如きの智慧を用て一切法空を觀じ、法性として見るべき無く、是法性中に住して阿耨多羅三藐三菩提を得。何を以ての故に。性相無ければなり。是阿耨多羅三藐三菩提は、諸佛の所作に非ず、辟支佛の所作に非ず、亦阿羅漢の所作にも非ず、亦向道人の所作にも非ず、亦得果人の所作にも非ず、亦菩薩の所作にも非ず。但だ衆生は諸法の如實相を知らず見ず、是事を以ての故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に衆生の爲に說法す。』

七譬品第八十五

〔一〕須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し諸法性無所有にして佛の所作に非ず、辟支佛の所

【顛倒】四顛倒なり。
【愚癡】三界繋の無明なり。

作に非ず、阿羅漢の所作に非ず、阿那含の所作に非ず、斯陀含須陀洹の所作に非ず、向道人に非ず、得果人に非ず、菩薩の所作に非ずんば、云何が分別して諸法の異有りて、是れ地獄、是れ畜生、是れ餓鬼、是れ人、是れ天、乃至非有想非無想天なりとせん。是業因縁を以ての故に地獄に生ずる者有りと知り、是業因縁の故に畜生餓鬼に生ずる者有りと知り、是業因縁の故に人中に生じ、四天王天に生じ、乃至非有想非無想天に生ずる者有りと知り、是業因縁の故に、須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛を得る者有りと知り、是業因縁の故に是れ諸の菩薩摩訶薩なりと知り、是業因縁の故に是れ多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀なりと知らんや。世尊無性法の中には業用有ること無ければ、作業の因縁の故に若は地獄餓鬼畜生に墮し、若は人若は天に生じ、乃至非有想非無想天に生じ、是業因縁を以ての故に須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛菩薩摩訶薩を得、菩薩道を行じて當に一切種智を得べく、一切種智を得るが故に能く衆生を生死中より拔出すとせんや。佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し。無性法中に業無く果報無し。須菩提、凡夫人は聖法に入らず、諸法の無性相を知らずして、顛倒愚癡の故に、種種の業因縁を起す、是諸の衆生、業に隨つて身、若は地獄身、若は畜生身、若は餓鬼身、若は人身、若は天身四天王天身、乃至若は非有想非無想天身を得、是無性法は業無く果報無く、無性は常に是れ無性なり。須菩提の言ふ所の如く、若し一切法無性なれば、云何が是れ須陀洹乃至諸佛一切種智を得んやとは、須菩提、汝が意に於て云何、道は是れ無性なりや不や。須陀洹果乃至諸佛の一切種智は、

【二】以下譬喩を説く。初に夢喩。

是れ無性なりや不や。』須菩提言さく『世尊、道は無性なり、須陀洹果も亦無性なり、乃至諸佛の一切種智も亦無性なり。』『須菩提、無性の法は能く無性の法を得るや不や。』『不、世尊。』佛須菩提に告げたまはく『有性の法は能く有性の法を得るや不や。』『不、世尊。』『須菩提、無性の法及び道、是一切の法は皆合せず散ぜず、色無く形無く、對無く一相謂ゆる無相なり。須菩提、是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、方便力を以て衆生を見るに、顚倒を以ての故に五陰に著し、無常中に常相、苦中に樂相、不淨中に淨相、無我中に我相ありとし、無所有處に著す。是菩薩は方便力を以ての故に、無所有中に於て衆生を拔出す。』須菩提佛に白して言さく『世尊、凡夫人の著する所、頗し實有り、不異不著の故に業を起し、業因緣の故に五道生死の中より脫することを得ざる有りや。』佛須菩提に告げたまはく『凡夫人の著する所、業を起す處、毛髮許の如きの實事も無し、但だ顚倒の故に。

(二)須菩提、今汝が爲に譬喩を説かん、智者は譬喩を以て解することを得。須菩提汝が意に於て云何。夢中に見る所の人の五欲の樂を受くる如き、實の住處有りや不や。』須菩提佛に白して言さく『世尊、夢尙虛妄にして得べからず、何に況んや夢中に住して五欲の樂を受くるをや。』『汝が意に於て云何。諸法の若は有漏若は無漏、若は有爲若は無爲、頗し夢の如くならざる者有りや不や。』『世尊、諸法の若は有漏若は無漏、若は有爲若は無爲、夢の如くならざる者無し。』佛須菩提に告げたまはく『汝が意に於て云何、夢中に五道生死の往來有りや不や。』『世尊、無きなり。』『汝が意に於て云何。夢中に修道有り、是修道を用て

若は垢に著し、若は淨を得るや不や。』『不、世尊。何を以ての故に。是夢法は實事有ること無く、垢淨を說く可からざればなり。』

(三)「汝が意に於て云何。鏡中の像は實事有りや不や。能く業因緣を起し、是業因緣を用て、地獄餓鬼畜生の中に墮し、若は人、若は天四天王天處、乃至非有想非無想天處に生ずるや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。是像は實事有ること無く、但だ小兒を誑かすのみ。是事、云何が當に業因緣有るべき、是業因緣を用て、當に地獄に墮し乃至非有想非無想處に生ずべけんや。』「汝が意に於て云何。是鏡中の像、修道有り、是修道を用て、若は垢に著し、若は淨を得るや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。何を以ての故に。是像は空にして實事無く、垢淨を說くべからざればなり。』

(四)「汝が意に於て云何。深澗中に響有るが如く、是響に業因緣有り。是業因緣を用て、若は地獄に墮し乃至若は非有想非無想處に生ずるや不や。』須菩提言さく、『不、世尊、是事空にして實の音聲有ること無し、云何が當に業因緣有り是業因緣を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に至るべけんや。』『汝が意に於て云何。是響頗し修道有りて、是修道を用て、若は垢に著し、若は淨を得るや不や。』『不、世尊、是事實無く、是れ垢なり、是れ淨なりと說くべからざればなり。』

(五)「汝が意に於て云何。燄の非水に水相、非河に河相を見る如き、是燄頗し業因緣有り、是業因緣を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や。』『不、世尊。燄の中に水

【三】鏡中像喩。

【四】響喩。

【五】焰喩。

【六】揵闥婆城喩。

【七】幻師喩。

は畢竟得べからず、但だ無智人の眼を誑かすのみ。云何が當に業因緣有り、是業因緣を用て地獄に墮し乃至非有想非無想處に生ずべけんや。」「汝が意に於て云何。是燄修道有りて、是修道を用て、若は垢に著し、若は淨を得るや不や。」「不、世尊。是燄は實事有ること無く、垢淨を說くべからず。」

「(六)汝が意に於て云何。揵闥婆城日の出づる時、揵闥婆城を見るが如き、無智人は城無きに城有りと想ひ、廬觀無きに廬觀有りと想ひ、園無きに園有りと想ふ。是揵闥婆城頗し業因緣有り、是業因緣を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や。」「不、世尊。是業是揵闥婆城は畢竟得べからず、但だ愚夫の眼を誑かすのみ。云何が當に業因緣有り、是業因緣を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや。」「汝が意に於て云何。是揵闥婆城修道有りて、是修道を用て若は垢に著し、若は淨を得るや不や。」「不、世尊。是揵闥婆城は實事有ること無く、垢淨を說くべからず。」

「(七)須菩提、汝が意に於て云何、幻師の種種の物、若は象若は馬、若は牛若は羊、若は男若は女を幻作す。汝が意に於て云何。是幻に業因緣有り、是業因緣を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や。」「不、世尊、是幻法空にして實事無し、云何が當に業因緣有り、是業因緣を用て地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや。」「汝が意に於て云何。是幻修道有りて、是修道を用て、若は垢に著し、若は淨を得るや不や。」「不、世尊、是法實事有ること無く、垢淨を說くべからず。」

(八)『須菩提、汝が意に於て云何。佛の所化人の如き、是化人業因緣有り、是業因緣を用て、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずるや不や。』『不、世尊、是化人は實事有ること無し、云何が當に業因緣有り、是業因緣を用て、地獄に墮し、乃至非有想非無想處に生ずべけんや。』『汝が意に於て云何。是化人修道有りて、是修道を用て、若は垢に著し、若は淨を得るや不や。』『不、世尊、是事實有ること無く、垢淨を說くべからず。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、是空相中に於て垢者有り、淨者有りや不や。』『不、世尊、是中無所有にして垢に著する者有ること無く、淨を得る者有ること無し。』『須菩提、垢に著する者有ること無く、淨を得る者有ること無きが如く、是因緣を以ての故に亦垢淨無し、何を以ての故に。我我所に住する衆生は垢有り淨有り、實見の者は垢ならず淨ならず、實見の者の垢ならず淨ならざるが如く、是の如く亦垢淨無し。』

平等品第八十六

(一)須菩提佛に白して言さく、『世尊、見實の者は垢ならず淨ならざれば、見不實の者も亦垢ならず淨ならず。何を以ての故に。一切法性無所有なるが故に。世尊、無所有中に垢無く淨無ければ、有所有中にも亦垢無く淨無し。世尊、無所有中有所有中にも亦垢無く淨無し。世尊、云何が實語の者の垢ならず淨ならざるが如く、不實語の者も亦垢ならず淨ならざる

【八】化人喩。

【汝が意に於て云何等】前の譬喩に對して法空を說く。

【實見の者】空の如く實相を見る者。

【平等品】前品に續きて諸法平等に成佛すべき義を明す。

【一】諸法平等を明す。諸法性無所有なれば不垢不淨なるは實不實見にありても、實不實語にありても亦同じ。實見實語とするの要ありや否やを問ふなり。

【諸法平等】垢淨に別相なしと雖も諸法平等を說くべきが故に淨となす。

【云何が菩薩等】一切法は不可說にして乃至化の如くんば、云何が無根本法中に生心作願するやを問ふ。

【若し一切法等】菩薩は實法を求むるための故に般若を行じて佛道を得るに、何ぞ不實法を行ずるや、不實法は六度等を行ずる能はざるべしとす。

や。』佛須菩提に告げたまはく、『是諸法平等の相、我れ說く是れ淨なりと。須菩提、何等か是れ諸法平等なる、謂ゆる如不異不誑法相法性法住法位實際は、有佛にも無佛にも法性常住なり、是を淨と名く。世諦の故に說く、最第一義に非ず。最第一義は一切の語言論議音聲を過ぎたり。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し一切法空說くべからずば、夢の如く響の如く焰の如く影の如く幻の如く化の如くならん。云何が菩薩摩訶薩、是夢の如く響の如く焰の如く幻の如く影の如く化の如き法を用て、根本定實有ること無しとし、云何が能く阿耨多羅藐三菩提心を發し、是願を作すや。我れ當に檀那波羅蜜を具足し、乃至般若波羅蜜を具足すべし、我れ當に神通波羅蜜を具足し、智波羅蜜を具足し、四禪四無量心四無色定四念處を具足し、八聖道分を具足すべし、我れ當に三解脫門八背捨九次第定を具足すべし。我れ當に佛の十力を具足し、乃至十八不共法を具足すべし。我れ當に三十二相八十隨形好を具足すべし。我れ當に諸陀羅尼門諸三昧門を具足すべし。我れ當に大光明を放ち徧く十方を照し、諸の衆生の心を知り、應の如く說法すべしとせんや。』佛須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何。汝が說く所の諸法は夢の如く響の如く焰の如く影の如く幻の如く化の如くなりや不や。』須菩提言さく、『爾り世尊、若し一切法、夢の如く乃至化の如くなれば、菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜を行ぜん。世尊、是夢乃至化は虛妄不實なり。世尊、不實虛妄の法を用て、能く檀那波羅蜜乃至十八不共法を具足すべからず。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、不實虛妄の法は檀那波羅蜜乃至十八不共法を具足すること能はず、是不

【無生等】諸法實に出生なし一相無相寂滅涅槃なり。

【この不取を用ての故】一切法は不可取相とせば助道因緣ならざるはなく、邪行錯謬せばこれ不實とす。

實虚妄の法を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず。須菩提、是一切の法は皆是れ憶想思惟の作法なり、是思惟憶想の作法を用ては一切種智を得ること能はず。須菩提、是一切の法は能く道法を助け、其果を益すること能はず。謂ゆる是諸法は無生無出無相なり。菩薩初發意より已來、作す所の善業、若は檀那波羅蜜乃至一切種智、何を以ての故に諸法皆夢の如く乃至化の如しと知る。是の如き等の法は檀那波羅蜜乃至一切種智を具足せず、衆生を成就し、佛國土を淨むることを得、阿耨多羅三藐三菩提を得ること能はず、是菩薩摩訶薩の作す所の善業、檀那波羅蜜乃至一切種智、夢の如く乃至化の如しと知り、亦一切衆生も夢中に行ずる如しと知り、乃至化中に行ずる如しと知る。是菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を是れ有法なりとして取らず、是不取を用ての故に一切種智を得、是諸法は夢の如く取る所無し、乃至諸法は化の如く取る所無しと知る。何を以ての故に。般若波羅蜜は是れ取るべからざるの相、禪那波羅蜜乃至十八不共法は是れ取るべからざるの相なればなり。是菩薩摩訶薩は、一切法は是れ取るべからざるの相なりと知り已りて、發心して阿耨多羅三藐三菩提を求む。何を以ての故に。一切法は取るべからざるの相にして根本定實無く、夢の如く乃至化の如く、不可取相法を以て不可取相法を得ること能はず、但だ衆生是の如きの諸の法相を知らず見ざるを以て、是菩薩摩訶薩は是衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提を求む。是菩薩は初發意より已來、有らゆる布施は一切衆生の爲の故に、乃至有らゆる所修の智慧は皆一切衆生の爲にして己身の爲にせず。菩薩摩訶薩は餘事の爲にせざる

【甘露性中等】涅槃性中に住すれば我等の妄想復生ぜず。

【動心念心】思惟憶想分別なり。

【二】佛の實成せるところの法は世諦なるを明し、無性平等の義を細說す。

が故に阿耨多羅三藐三菩提を求む、但だ一切衆生の爲にするが故に。是菩薩は般若波羅蜜を行ずる時、衆生を見るも衆生無く、但だ衆生相の中に住し、乃至知者無く見者無きも知見相の中に住し、衆生をして顚倒を遠離せしむ。遠離し已りて甘露性中に置て住す、是中に住するも妄相、謂ゆる衆生相乃至知者見者相有ること無し。是時に菩薩は動心念心戲論心皆捨て、常に不動心不念心不戲論心を行ず。須菩提、是方便力を以ての故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、自ら著する所無く、亦教へて一切衆生をして著する所無きことを得しむ。世諦の故に第一義に非ず。」

（二）須菩提佛に白して言さく、「世尊、世尊の阿耨多羅三藐三菩提を得たまへる時に、諸佛の法を得るは、世諦を以ての故に得るか、第一義中を以て得るか。」佛言はく、「世諦を以ての故に、佛是法を得たりと說く。是法の中に法を得て、是人是法を得たりとすべきもの有ること無し。何を以ての故に。是人の是法を得るは、是を大有所得と爲す、二法を以てするは無道無果なればなり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し二法を行じて無道無果なれば、不二法を行ずるは有道有果なりや不や。」佛言はく、「二法を行じて無道無果なれば、不二法を行ずるも亦無道無果なり、若し二法無ければ不二法無し、即ち是れ道、即ち是れ果なりとせんや。何を以ての故に。是の如きの法を用て道を得、果を得、是の如きの法を用て道を得ず、果を得ずとするは、是を戲論と爲せばなり。諸の平等法の中に戲論有ること無し、無戲論相は是れ諸法平等なり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、諸法無所有性

【云何が…三寶あらん】若し凡夫乃至佛に差別あるなくば、云何が三寶ありて三乘の世間にありて衆生を利益するやと問ふ。

なれば、是中何等をか是れ平等となす。』佛言はく、『若し有法有ること無く、無法有ること無く、亦諸法、平等相をも說かず、平等を除きて更に餘法無く、一切の法を離るるは平等相なり。平等相とは若は凡夫、若は聖人、行ずること能はず、到ること能はず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、乃至佛も亦行ずること能はず、亦到ること能はざるや。』佛言はく、『是諸法の平等は一切の聖人皆行ずること能はず、亦到ること能はず、謂ゆる諸の須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛、諸の菩薩摩訶薩及び諸佛なりとも。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、佛は一切諸法の中に行力自在なり、云何が佛も亦行ずること能はず、亦到ること能はずと說きたまふや。』佛須菩提に告げたまはく、『若し諸法の平等と佛と異有れば、當に是の如く問ふべし。須菩提、「今諸の凡夫人は平等なり、諸の須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛、諸の菩薩摩訶薩、諸佛及び聖法皆平等なり。是れ一平等にして二無し、謂ゆる是れ凡夫人、是れ須陀洹乃至佛なり」と。是一切法平等の中に皆得べからず。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、若し諸法平等の中に皆、是れ凡夫人、乃至是れ佛なりと得べからざれば、世尊、凡夫人と須陀洹乃至佛と分別有ること無しと爲るや。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、諸法平等の中には、是れ凡夫人、是れ須陀洹、乃至是れ佛なりと分別すること有ること無し。』『世尊、若し諸の凡夫人須陀洹乃至佛を分別すること無くんば、云何が分別して三寶有らん、現に世間に於て佛寶法寶僧寶あり。』佛言はく、『汝が意に於て云何、佛寶法寶僧寶と諸法等と異るや、不や。』須菩提佛に白して

【大恩力】如實知による正教の慈恩をいふ。
【三】諸法平等ならば如何が差別を分別すべきやを明す。

言さく、「我れ佛より聞く所の義の如くんば、佛寶法寶僧寶と諸法等と異ること無し。世尊、是佛寶法寶僧寶は卽ち是れ平等なり、是法は皆合せず散ぜず、色無く形無く、對無く、一相謂ゆる無相なり、佛は是力有つて能く無相諸法處の所を分別す。是れ凡夫人、是れ須陀洹、是れ斯陀含、是れ阿那含、是れ阿羅漢、是れ辟支佛、是れ菩薩摩訶薩、是れ諸佛なりと。」佛須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、若し諸佛、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸法を分別せざれば、當に是れ地獄、是れ餓鬼、是れ畜生、是れ人、是れ天、是れ四天王天、乃至是れ他化自在天、是れ梵天、乃至是れ非有想非無想處天、是れ四念處乃至八聖道分、是れ內空乃至是れ無法有法空、是れ佛の十力乃至十八不共法なりと知るべきや不や。」須菩提言さく、「知らざるなり、世尊。」「是を以ての故に、須菩提、當に知るべし、佛は大恩力有りて、諸法平等の中に於て動ぜずして、而も諸法を分別す。」

(三)須菩提佛に白して言さく、「世尊、佛の諸法平等の中に於て動ぜざるが如く、凡夫人も亦、諸法平等の中に於て動ぜず、須陀洹乃至辟支佛も亦諸法平等の中に於て動ぜず。世尊、若し諸法等相なれば、卽ち是れ凡夫人相、卽ち是れ須陀洹相、乃至諸佛卽ち是れ平等相なり。世尊、今諸法の各の相謂ゆる色相の異、受想行識相の異、眼相の異、耳鼻舌身意相の異、地相の異、水火風空識相の異、欲相の異、瞋癡相の異、邪見相の異、禪相の異、無量心相の異、無色定相の異、四念處相の異、乃至八聖道分相の異、檀那波羅蜜相の異、乃至般若波羅蜜相の異、三解脫門相の異、十八空相の異、佛の十力相の異、四無所畏相の異、

四無礙智相の異、十八不共法相の異、有爲法性の異、無爲法性の異、是凡夫人相の異、乃至佛相の異ありて、諸法各各相異る。云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、諸法の異相の中に分別を作さざらん。若し分別を作さざれば般若波羅蜜を行ずること能はず。若し般若波羅蜜を行ずること能はざれば一地より一地に至ること能はず。若し一地より一地に至らざれば菩薩位に入ること能はず。菩薩位に入ること能はざるが故に聲聞辟支佛地を過ぐること能はず。聲聞辟支佛地を過ぐること能はざるが故に神通波羅蜜を具足すること能はず。神通波羅蜜を具足せざるが故に檀那波羅蜜を具足すること能はず。乃至般若波羅蜜を具足し、一佛國より一佛國に至りて諸佛を供養し、諸佛の所に於て善根を種ゑ、是善根を用て能く衆生を成就し、佛國土を淨むること能はず。」佛須菩提に告げたまはく、「汝の問ふ所の如く、是諸法相も亦是れ凡夫人なり、亦是れ須陀洹乃至佛なり。」「世尊、是諸法各各の相あり、謂ゆる色相の異乃至有爲無爲相の異あるに、云何が菩薩摩訶薩は一相を觀じて、分別を作さざるとは。」「須菩提、汝が意に於て云何。是色相空なりや不や、乃至諸佛の相空なりや不や。」「世尊、實に空なり。」「須菩提、空の中に各各の相法は得べきや不や、謂ゆる色相乃至諸佛相なりと。」須菩提言さく、「得べからず。」佛言はく、「是因緣を以ての故に當に知るべし、諸法平等の中には凡夫人に非ず亦凡夫人をも離れず、乃至佛に非ず亦佛をも離れず。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、是平等は是れ有爲法と爲んや、是れ無爲法と爲んや。」佛言はく、「有爲法に非ず、無爲法に非ず。何を以ての故に。有爲法を

離れて無爲法は得べからず、無爲法を離れて有爲法は得べからざればなり。須菩提、是有爲性無爲性、是二法は合せず散せず、色無く形無く、對無く、一相謂ゆる無相なり、佛も亦世諦を以ての故に說く。第一義を以てするに非ず。何を以ての故に。第一義の中には身行無く、口行無く、意行無く、亦身口意の行を離れずして第一義を得ればなり。是諸の有爲法無爲法の平等相、卽ち是れ第一義なり。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、第一義の中に動ぜずして而も菩薩事を行じ、衆生を饒益す。」

如化品第八十七

【如化品】前品の諸法平等に就て化の如しとして說明す。

【神力を用ひず】菩薩は諸法實相を以て衆生を利益せず但衆生畢竟空を知らざる故に敎へて知らしむるなり實相に說くべきもの、利益すべきもの、用ふる神力なし。

【吾我の相等】一切無吾我の相を以て衆生を敎化し、見愛を斷じて生死を脫せしむ。

須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し諸法平等にして爲作すべきところ無ければ、云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、平等法の中に於て動ぜずして而も菩薩事を行じ、布施愛語利益同事を以てせん。」佛須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、汝の言ふ所の如く、是諸法は平等にして所作無し。若し是衆生自ら諸法の平等なることを知れば、佛は神力を用ひず、諸法平等の中に於て動ぜずして而も衆生の吾我の相を拔出す。空を以て五道生死乃至知者見者相を度し、色相乃至識相、眼相乃至意相、地種相乃至識種相を度し、有爲性相を遠離して無爲性相を得しむ。無爲性相は卽ち是れ空なり。」須菩提言さく、「世尊、何等か空なるを用ての故に一切の法空なる。」佛言はく、「菩薩は一切の法相を遠離す、是

【一切の法相を遠離す】空に種々あるも無所得畢竟空を以ての故に、一切の法相を遠離するなり。【空も空なるを以ての故に等】十八の事實を破する、ために十八空あり、衆生心中の變化空を破するが故に空を用ふるなり。

空を用ての故に一切の法空なり。須菩提、汝が意に於て云何、若し化人有りて化人を作らば、是化は頗し實事有りて空ならざる者有りや不や。」須菩提言さく、「不、世尊。」是化人は實事にして而も空ならざるもの有ること無し、是空及び化人の二事は合せず散ぜず、空も空なるを以ての故に空なり、是れ空なり是れ化なりと分別すべからず。何を以ての故に。是二事は等しく空中に得べからざればなり、謂ゆる是れ空なり、是れ化なりと。所以は何ん、須菩提、色は即ち是れ化なり、受想行識は即ち是れ化なり、乃至一切種智は即ち是れ化なればなり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、若し世間法、是れ化なれば、出世間法も亦復た是れ化なりや不や。謂ゆる四念處四正勤四如意足五根五力七覺分八聖道分三解脱門、佛の十力四無所畏四無礙智十八不共法、幷に諸の法果及び賢聖人、謂ゆる須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢辟支佛菩薩摩訶薩諸佛。世尊、是法も亦是れ化なりや不や。」佛須菩提に告げたまはく、「一切の法は皆是れ化なり、是法の中に於て聲聞法の變化有り、辟支佛法の變化有り、菩薩摩訶薩法の變化有り、諸佛法の變化有り、煩惱法の變化有り、業因緣法の變化有り。是因緣を以ての故に、須菩提、一切の法は皆是れ變化なり。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、是諸の煩惱を斷ずる、謂ゆる須陀洹果斯陀含果阿那含果阿羅漢果辟支佛道の諸の煩惱習を斷ずる、皆是れ變化なりや不や。」佛須菩提に告げたまはく、「若し法に生滅の相有れば皆是れ變化なり。」須菩提言さく、「世尊、何等の法か變化に非ざる。」佛言はく、「若し法、無生無滅なれば是れ、變化に非ず。」須菩提言さく、「何等か是れ不生不滅な

【諸法本ありて等】佛意新發意の怖畏する無の故なり、諸法本來自無にして今も亦無なるを了知せば煩惱顚倒なく恐怖なし畢竟諸法性空の義これ般若なり。

る、變化に非ざる。』佛言はく、『誑相無き涅槃、是法は變化に非ず。』『世尊、佛の自ら說きたまふ如き諸法平等は、聲聞の作に非ず、辟支佛の作に非ず、諸の菩薩摩訶薩の作に非ず、諸佛の作に非ず、有佛にも無佛にも諸法の性、常に空にして、性空即ち是れ涅槃なり、云何が涅槃の一法を化の如きに非ずと言ふや。』佛須菩提に告げたまはく、『是の如く是の如し、諸法の平等は聲聞の所作に非ず、乃至性空は即ち是れ涅槃なり。若し新發意の菩薩、是一切法皆畢竟じて性空なり、乃至涅槃も亦皆化の如しと聞かば、心則ち驚怖せん、是新發意の菩薩の爲の故に、分別して生滅は化の如しとし、不生不滅は化の如くならずとす。』須菩提佛に白して言さく、『世尊、云何が新發意の菩薩を教へて性空なることを知らしめん。』佛須菩提に告げたまはく、『諸法本有りて今無きや。』

【常啼品】前末に先無今性空の解し難き爲に、常啼菩薩の本緣を述べて證とし、般若求行の義を明す。【一】常啼般若を求むるは空中の教によることを明す。【薩陀波崙】サダープラーラーパ（Sadāpralāpa）常啼と譯す。今經に本生因緣を細述す。

摩訶般若波羅蜜經　卷第二十七

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯す

常啼品第八十八

（一）佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を求め、當に薩陀波崙菩薩摩訶薩、是菩薩の今大雷音佛の所に在りて、菩薩道を行ずるが如くすべし。」須菩提佛に白して言さく、「世尊、薩陀波崙菩薩摩訶薩は云何が般若波羅蜜を求むるや。」佛言はく、「薩陀波崙菩薩摩訶薩は本般若波羅蜜を求むる時、身命を惜まず、名利を求めず、空閑林中に於て空中に聲を聞く。言はく、「汝善男子、是より東に行き疲極を念ずること莫れ、睡眠を念ずることと莫れ、飲食を念ずること莫れ、晝夜を念ずること莫れ、寒熱を念ずること莫れ、内を念ずること莫れ、外を念ずること莫れ。善男子、行く時に左右を觀ること莫れ、汝行く時に身相を壞すること莫れ、色相を壞すること莫れ、受想行識相を壞すること莫れ。何を以ての故に。若し是諸相を壞すれば、佛法中に於て則ち爲に礙有り、若し佛法に於て礙有れば、便ち五道生死の中に往來し、亦般若波羅蜜を得ること能はざればなり。」爾時に薩陀波崙菩薩、空中の聲に報へて言はく、「我れ當に敎に從ふべし。何を以ての故に。我れ一切

【世利心】世間の名欲心。
【五欲等】外法、性空の假法を欲樂として受けしむるをいふ。
【實法明】諸法實相に通達するをいふ。
【三事】次に出づる方便、種善根、同事の三なり。

の衆生の爲に大明と作らんと欲し、一切諸佛の法を集めんと欲し、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲するが故に。」薩陀波崙菩薩は復空中の聲を聞く。言はく、「善い哉善い哉、善男子、汝空無相無作の法に於て、應に信心を生じ、離相を以て心に般若波羅蜜を求め、我相を離れ乃至知者見者相を離るべし、當に惡知識を遠離すべし、當に善知識に親近し供養すべし。何等か是れ善知識なる。能く空無相無作無生無滅の法、及び一切種智を說きて、人の心をして歡喜信樂に入らしむる、是を善知識と爲す。善男子、汝若し是の如く行ずれば、久しからずして當に般若波羅蜜を聞くべし、若は經卷の中より聞き、若は菩薩の說く所に從ひて聞く。善男子、汝の從ひて聞く所の是般若波羅蜜の處に、應に心に如佛の想を生ずべし。善男子、汝當に恩を知つて是念を作すべし、從ひて聞く所の是般若波羅蜜は即ち是れ我が善知識なり、我れ是法を聞くを用ての故に、疾に不退轉を得、阿耨多羅三藐三菩提に於て諸佛に親近し、常に有佛の國土中に生じて衆難を遠離し、無難處を具足することを得。善男子、當に是功德を思惟し籌量し、從つて聞く所の法處に於て、心に如佛の想を生ずべし。汝善男子、世利心を以ての故に、法師に隨逐する莫れ、但だ法を愛し、法を恭敬する爲の故に、說法の菩薩に隨逐せよ、爾時に當に魔事を覺知すべし。若し惡魔、說法の菩薩の與に五欲の因緣を作し、假爲法の故に受けしむるも、若し說法の菩薩實法明に入らば、功德力を以ての故に、受けて而も染する所無し。又三事を以ての故に、是五欲を受け、方便力を以ての故に、衆生をして善根を種ゑしめんと欲するが故に、衆生と共事を同ぜんと

【大師】佛なり。

【二】中途の思惟をあげて求法の強きを明す。

欲するが故に受く。汝是中に於て汚心を生ずること莫く、當に淨想を起し、自ら念ずべし。「我れ未だ漚和拘舍羅を得ず、大師方便法を以て衆生を度し、福德を獲しめんが爲の故に是諸欲を受け、菩薩智慧に於て著する無く、礙ふる無く欲染を爲さず」と。善男子、即ち當に諸法の實相を觀ずべし。諸法の實相とは謂ゆる一切法垢ならず淨ならず。何を以ての故に。一切法の自性空にして衆生無く、人無く我無く、一切法は幻の如く夢の如く、響の如く影の如く、焰の如く化の如くなればなり。善男子、是諸法の實相を觀じ已りて、當に法師に隨ふべし、汝久しからずして當に般若波羅蜜を成就すべし。復次に善男子、汝當に復魔事を覺知すべし。若し說法の菩薩、般若波羅蜜を受けんと欲する人を見て、意に存念せざるも、汝心に怨恨を起すべからず。汝但だ當に法を以ての故に恭敬心を生じ、厭懈の意を起す莫く、當に常に法師を隨逐すべし。」

（二）爾時、薩陀波崙菩薩、是空中の教を受け已りて、是れより東に行くこと久しからずして復是念を作さく「我れ云何が空中の聲に問はざりし、我れ當に何處に去るべき、去ること當に遠近なるべき、當に誰に從つて般若波羅蜜を聞くべき」と。是時即ち啼哭憂愁に住して是念を作さく「我れ是中に住し、一日一夜若は二三四五六七日七夜を過ぎ、此中に住して疲極を念はず、乃至饑渴寒熱を念はず、般若波羅蜜を聞き聽受するの因緣を聞かずば、終に起たざるなり」と。須菩提、譬へば人の一子の卒に死する有りて憂愁し苦毒し、唯だ懊惱を懷きて餘念を生ぜざるが如し。是の如く須菩提、薩陀波崙菩薩は爾時に異心有ること無く、但

【衆香】揵陀羅越なり、國土富樂七寶を出すこと多しとす。

だ念ずらく「我れ何の時か當に般若波羅蜜を聞くことを得べき、我れ云何が空中の聲に問はざりし、我れ應に何處に去るべき、去ること當に遠近なるべき、當に誰に從つて般若波羅蜜を聞くべき」と。須菩提、薩陀波崙菩薩の是の如く愁念する時、空中に佛有りて薩陀波崙菩薩に語りて言はく「善い哉善い哉、善男子。過去の諸佛の菩薩道を行ずる時、般若波羅蜜を求めしも亦汝の今日の如し。善男子、汝は是れ勤て精進し、法を愛樂するを以ての故に、是れより東に行き、此を去ること五百由旬にして城有り、衆香と名く、其城七重にして七寶もて莊嚴し、臺觀欄楯皆七寶を以て校飾し、七寶の塹、七寶の行樹周匝して七重なり。其城縱廣十二由旬にして豐樂安靜人民熾盛なり。五百市里街巷相當して端嚴なること畫の如く、橋津地の如く寛博淸淨なり、七重の城上皆七寶の樓櫓有り、寶樹行列し、黃金白銀硨磲碼碯珊瑚瑠璃玻梨紅色眞珠を以て、以て枝葉と爲し、寶繩連綿して、金もて鈴と爲し、網を以て城上を覆ひ、風鈴を吹きて聲す、其音和雅にして衆生を娛樂せしむ。譬へば巧作の五樂の甚だ喜樂すべきが如く、金網寶鈴、其音是の如きを以て衆生を樂ましむ。其城の四邊の流池淸淨にして冷暖調適なり、中に諸の船有て七寶もて嚴飾す、是れ諸の衆生の宿業の致す所にして、此寶船に乘じて娛樂遊戲す。諸池の水中に種種の蓮華ありて、靑黃赤白衆の雜好華徧く水上に覆ふ、是三千大千國土の有らゆる衆華皆其中に在り、其城の四邊に五百の園觀有りて、七寶もて莊嚴し、甚だ愛樂すべきなり。一一の園中に各五百の池有り、池の各縱廣十里にして、皆七寶を以て校成し、雜色莊嚴す、諸池の

【適くとして等】不取著なるをいふ。

【曇無竭】ダルマガテー(Dharmagate)法盛と譯す。

水の中に亦青黃赤白の蓮華有りて水上に彌覆す。是の諸の蓮華の大さ車輪の如くにして、青色には青光あり、黃色には黃光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、諸池の水の中に鳧鴈鴛鴦異類の衆鳥の音聲相和す。是の諸の園觀の適くとして所屬無きは、是れ諸の衆生の宿業の致す所なり、長夜に深法を信樂し、般若波羅蜜を行ずる因縁の故に、是の果報を受く。善男子、是の衆香城の中に大高臺有りて、曇無竭菩薩摩訶薩の宮舍上に在り、其宮の縱廣一由旬にして、皆七寶を以て校成し、雜色もて莊嚴し、甚だ喜樂すべきなり。垣墻七重にして皆亦七寶なり、七寶の欄楯、七寶の樓閣、寶塹七重し、皆七寶を以て周匝し、深塹七寶もて累成し、七重の行樹、七重の枝葉、七重に圍遶す、其宮舍の中に四種の娛樂園有り、一を常喜と名け、二を離憂と名け、三を華飾と名け、四を香飾と名く。一一の園中に各八池有り、一は賢と名け、二は賢上と名け、三は歡喜と名け、四は喜上と名け、五は安隱と名け、六は多安隱と名け、七は遠離と名け、八は阿惟越致と名く、諸池の四邊の面、各一寶にして黃金白銀瑠璃玻梨玫瑰もて池の底を爲し、其上に金沙を布く、一一の池側には八梯陛有りて、種種の妙寶以て嚴飾を爲す、諸梯陛の間に閻浮檀金の芭蕉行樹有り、一切の池中に種種の蓮華の青黃赤白なる、水上に彌覆す、諸池の四邊に好華樹を生じ、風諸華を吹きて池の水の中に墮す。其池は八功德水香を成就し、若は栴檀色味具足し、輕くして且つ柔軟なり、曇無竭菩薩は六萬八千の婇女と與に五欲を具足し、共に相娛樂す。善男子、曇無竭菩薩は諸の婇女と與に遊戲娛樂し已りて、日に三時、般若波

【三】法盛菩薩に聞くべきを知りて常啼歡喜して往求す。

羅蜜を說く、衆香城の內の男女大小、其城中に於て多く人の聚る處に大法座を敷く。其座の四足は或は黃金を以てし、或は白銀を以てし、或は瑠璃を以てし、或は玻璃を以てし、敷くに綩綖雜色茵褥を以てし、諸の幃帶を垂れ、妙白氎を以て、而して其上を覆ひ、散ずるに種種の雜妙華香を以てす、座の高さ五里にして白珠帳を張り、其地の四邊に五色の華を散じ、衆の名香を燒き、澤香を地に塗る、般若波羅蜜を供養し、恭敬するが故に。曇無竭菩薩は、此座上に於て般若波羅蜜を說く、彼の諸の人衆は是の如く曇無竭を恭敬し供養す、般若波羅蜜を聞かんが爲の故に。是大會に於て百千萬衆の諸天世人、一處に和集す、中には聽く者有り、中には受くる者有り、中には持する者有り、中には誦する者有り、中には書する者有り、中には正觀する者有り、中には說の如く行ずる者有り。是時に衆生は是因緣を以ての故に皆惡道に墮せず、阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せず。汝善男子、曇無竭菩薩の所に往詣して、當に般若波羅蜜を聞くべし。善男子、曇無竭菩薩は世世に是れ汝の善知識にして、能く汝に阿耨多羅三藐三菩提を敎へて、示敎利喜す。是曇無竭菩薩も本般若波羅蜜を求めし時、亦汝の今の如くせり、汝去て晝夜を計ること莫れ、障礙の心を生ずること莫れ、汝久しからずして、當に般若波羅蜜を聞くことを得べし。

〔三〕爾時、薩陀波崙菩薩摩訶薩は、歡喜心悅して是念を作さく、「我れ當に何の時か是善知識を見ることを得て般若波羅蜜を聞くことを得べきや」と。須菩提、譬へば人の毒箭の爲に中てらるる有りて更に餘念無く、唯だ何の時か當に良醫を得て毒箭を拔出し、我れ此苦を除くべ

【四】諸佛常啼を安慰して信受せしむ。

きやと念ずるが如し。是の如く須菩提、薩陀波崙菩薩摩訶薩は更に餘念無く、但だ是願を作さく、「我れ何の時か當に曇無竭菩薩を見ることを得て、我をして般若波羅蜜を聞くことを得しむべき、我れ是般若波羅蜜を聞き、諸の有心を斷ぜん」と。是時に薩陀波崙菩薩は是處に於て住し、曇無竭菩薩を念じて一切法の中に無礙の智見を得、即ち無量三昧門現に前に在るを得。謂ゆる諸法性觀三昧、諸法性不可得三昧、破諸法無明三昧、諸法不異三昧、諸法不壞自在三昧、諸法能照明三昧、諸法離闇三昧、諸法無異相續三昧、諸法不可得三昧、散華三昧、諸法無我三昧、如幻威勢三昧、得如鏡像三昧、得一切衆生語言三昧、一切衆生歡喜三昧、入分別音聲三昧、得種種語言字句莊嚴三昧、無畏三昧、性常默然三昧、得無礙解脫三昧、離塵垢三昧、名字語句莊嚴三昧、見諸法三昧、諸法無礙頂三昧、如虛空三昧、如金剛三昧、不畏著色三昧、得勝三昧、轉眼三昧、畢法性三昧、能與安隱三昧、師子吼三昧、勝一切衆生三昧、華莊嚴三昧、斷疑三昧、隨一切堅固三昧、出諸法得神通力無畏三昧、能達諸法三昧、諸法財印三昧、諸法無分別見三昧、離諸見三昧、離一切闇三昧、離一切相三昧、解脫一切著三昧、除一切懈怠三昧、得深法明三昧、不可奪三昧、破魔三昧、不著三界三昧、起光明三昧、見諸佛三昧なり。是の如く薩陀波崙菩薩は是諸三昧の中に住し、即ち十方無量阿僧祇の諸佛を見て、諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說く。

(四)是時に十方の諸佛は薩陀波崙菩薩を安慰して言はく、「善い哉善い哉、善男子、我等の本菩薩道を行ぜし時も、般若波羅蜜を求めて是諸三昧を得たり。亦汝の今得る所の如く我等

も是諸三昧を得、善く般若波羅蜜に入り、方便力を成就して阿惟越致地に住せり。我等是諸三昧を觀ずるに、法の三昧を出で三昧に入る者有るを見ず。亦佛道を行ずる者を見ず、亦阿耨多羅三藐三菩提を得る者を見ず。善男子、是を般若波羅蜜と名く。謂ゆる是諸法有りと念はざるなり。善男子、我等は無所念法の中に於て住して、是金色身丈大光明三十二相八十隨形好不可思議智慧、無上戒無上三昧佛無上智慧を得、一切の功德皆悉く具足す、一切の功德具足するが故に、佛も尚相を取て說き盡すこと能はず、何に況んや聲聞辟支佛及び諸餘の人をや。是を以ての故に、善男子、是佛法の中に於て、倍恭敬し愛念じ清淨心を生ずべし、善知識の中に於て如佛の想を生ずべし。何を以ての故に。善知識の守護する爲の故に、菩薩は疾に阿耨多羅三藐三菩提を得ればなり。」是時に薩陀波崙菩薩、十方の諸佛に白して言さく、「何等をか是れ我が善知識として、親近し供養すべき所の者とせん。」十方の諸佛、薩陀波崙菩薩に告げて言はく、「汝善男子、曇無竭菩薩は世世に教化して汝をして阿耨多羅三藐三菩提を成就せしむ。曇無竭菩薩は汝を守護し、汝に般若波羅蜜方便力を教ふ、是れ汝の善知識なり、汝曇無竭菩薩を供養すること、若は一劫若は二劫若は三劫、乃至百劫を過ぎて頂戴し恭敬し、一切の樂具、三千世界の中の有らゆる妙色聲香味觸を以て、盡く以て供養するも未だ須臾の恩に報ゆること能はず。何を以ての故に。曇無竭菩薩摩訶薩の因緣の故に、汝をして是の如き等の諸三昧を得、般若波羅蜜方便力を得しむればなり。」諸佛は是の如く教化し安慰し、薩陀波崙菩薩をして歡喜せしめ已りて忽

【五】常啼は三昧より出て恭敬心増長するを明す。

【中道】法盛菩薩に謁せんために東行する途中なり。

然として現ぜず。

(五)是時に薩陀波崙菩薩は三昧より起ちて、復佛を見ず、是念を作さく、「是諸佛は何所より來り、去て何處に至る、諸佛を見ざるが故に、復惆悵して樂まず、誰か我が疑を斷たん」と。復是念を作さく、「曇無竭菩薩は久遠より已來、常に般若波羅蜜を行じて方便力を得、及び諸陀羅尼を得、菩薩法中に於て自在を得、多く過去の諸佛を供養し、世世に我が師と爲りて常に我を利益す、我れ當に曇無竭菩薩に問ふべし、諸佛は何所より來り、去て何處に至ると。」爾時、薩陀波崙菩薩は曇無竭菩薩に於て恭敬愛樂尊重の心を生じ、是念を作さく、「我れ當に何を以てか曇無竭菩薩を供養すべき、今我れ貧窮にして華香瓔珞燒香澤香衣服幡蓋、金銀眞珠琉璃頗梨珊瑚琥珀無く、是の如き等を以て般若波羅蜜及び說法師曇無竭菩薩を供養すべき物有ること無し、我れ法として空く曇無竭菩薩の所に往くべからず、我れ若し空しく往けば喜悅心生ぜず、我れ當に身を賣て財を得、般若波羅蜜の爲の故に法師曇無竭菩薩を供養せん。何を以ての故に。我れ世世に身を喪ふこと無數なり、無始の生死の中に、或は死し或は賣り、或は欲の因緣の爲の故に、世世に地獄の中に在りて無量の苦惱を受け、未だ曾て淸淨法の爲にせざるが故に、說法師を供養せんが爲の故に身を喪はん。」と。是時、薩陀波崙菩薩中道に一大城に入り、市肆上に至り高聲に唱へて言はく、「誰か人を須ひんと欲する、誰か人を須ひんと欲する、誰か人を買はんと欲する。」と。爾時に惡魔是念を作さく、「是薩陀波崙は法を愛するが故に、自ら身を賣りて般若波羅蜜の爲の故

【六】帝釋、常啼を試みて踊喜するを明し、長者女も亦感動して事を俱にす。

に、曇無竭菩薩を供養せんと欲す、當に般若波羅蜜及び方便力を正問することを得べし。云何が菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて疾に阿耨多羅三藐三菩提を得、當に多聞具足すること大海の水の如くなることを得べき。是時沮壞すべからず、一切の功德を具足することを得て、諸の菩薩摩訶薩を饒益し、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に我が境界を過ぎ、亦餘人を教へて我か境界を出で、阿耨多羅三藐三菩提を得しめん。我れ今當に其事を壞すべし」と。爾時、惡魔は隱蔽して諸の婆羅門居士をして、其自ら賣るの聲を聞かざらしむるも、一長者女を除いて魔蔽ふ能はず、其宿因緣を以ての故に。爾時、薩陀波崙は身を賣るに售れず、憂愁啼哭し、一面に在りて立て涕泣して言はく「我れ大罪の爲に身を售れず、我れ自ら身を賣て、般若波羅蜜の爲の故に、曇無竭菩薩を供養せん。」と。爾時、釋提桓因是念を作さく「是薩陀波崙菩薩は法を愛し、自ら其身を賣て般若波羅蜜の爲の故に曇無竭菩薩を供養せんと欲す。我れ當に之を試みて、是善男子、實に深心愛法の故を以て是身を捨つるや不やを知らん」と。

(六)是時に釋提桓因は婆羅門の身を化作し、薩陀波崙菩薩の邊に在りて行きて問うて言はく「汝善男子、何を以てか憂愁啼哭し、顏色憔悴するや。」と。一面に在りて立て答へて言はく「婆羅門、我れ法を愛敬す、自ら身を賣て般若波羅蜜の爲の故に、曇無竭菩薩を供養せんと欲し、今我れ身を賣るに買ふ者有ること無し。自ら念ずらく、福薄くして財寶有ること無ければ、自ら身を賣て般若波羅蜜及び曇無竭菩薩を供養せんと欲するも、而も買ふ

者無し。」と。爾時に婆羅門も薩陀波崙菩薩に語て言はく「善男子、我れ人を須ひず、我れ今天を祠らんと欲して、當に人心人血人髓を須ふべし。汝能く賣て我に與ふるや不や。」爾時に薩陀波崙菩薩是念を作さく「我れ大利を得たり、第一の利を得たり、我れ今便ち般若波羅蜜方便力を具足せんが爲に、是心血髓を買ふ者を得たり。」と。是時心大に歡喜し悅樂し憂無く、柔和心を以て婆羅門に語りて言はく「汝の須ふる所の者我れ盡く汝に與へん。」と。婆羅門言はく「善男子、汝何の價を須ふる。」答へて言はく「汝が意に隨て我に與へよ。」と。卽時に薩陀波崙は右手に利刀を執て左臂を刺して血を出し、右の髀肉を割き、復骨を破て髓を出さんと欲する時に、一長者女の閤上に在る有りて、遙に薩陀波崙菩薩の自ら身體を割きて壽命を惜まざるを見て、是念を作さく「是善男子、何の因緣の故に、其身を困苦す、我れ當に往きて問ふべしと。」長者女卽ち閤を下りて、薩陀波崙の所に到りて問ひて言はく「善男子、何の因緣をもて其身を困苦し、是心血髓を用て、何等をか作す。」と薩陀波崙答へて言はく「婆羅門に賣與し、般若波羅蜜の爲の故に曇無竭菩薩を供養せん。」と。長者女言はく「善男子、是賣身を作し、欲して自ら心血髓を出し、曇無竭菩薩を供養して、何等の功德利益を得んと欲するや。」薩陀波崙答へて言はく「善女人、是人は善く般若波羅蜜及び方便力を學す、是人は當に我が爲に菩薩の作すべき所、菩薩所行の道を說くべし、我れ是法を學し、是道を學して阿耨多羅三藐三菩提を得る時に、衆生の爲に依止と作り、當に金色身三十二相八十隨形好、丈光無量明、大慈大悲大喜大捨、四無所

畏、佛の十力四無礙智十八不共法、六神通不可思議清淨戒禪定智慧を得、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸法の中に於て一切無礙智見を得、無上法寶を以て一切の衆生に分布し與へん。是の如き等の諸の功德利、我れ當に彼に從て之を得べし。」と。是時に長者女は是上妙の佛法を聞きて大に歡喜し、心驚き毛竪ち、薩陀波崙菩薩に語りて言はく、「善男子、甚だ希有なり、汝が說く所は微妙にして値ひ難し、是一一の功德法の爲の故に、應に如恆河沙等の身を捨つべし、何を以ての故に、汝の說く所は甚大微妙なればなり。汝善男子、汝の今須ふる所、盡く當に相與ふべし、金銀眞珠琉璃頗梨琥珀珊瑚等の諸の珍寶物、及び華香瓔珞塗香燒香幡蓋衣服伎樂等の物、供養の具もて般若波羅蜜及び曇無竭菩薩を供養すべし。汝善男子、自ら其身を困苦すること莫れ、我も亦曇無竭菩薩の所に往き、汝と共に諸の善根を植ゑんと欲す、是の如きの微妙の法を、汝の說く所の如く得んが爲の故に。」爾時、釋提桓因は卽ち本身に復て薩陀波崙菩薩を讃じて言はく、「善い哉善い哉、善男子、汝堅く是事を受け、其心動ぜず、諸の過去の佛の菩薩道を行ずる時も亦是の如くして、般若波羅蜜及び方便力を求め、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。善男子、我れ實には人の心血髓を用ひず、但だ來りて相試む、汝何等をか願ふ、我れ當に相與ふべし。」薩陀波崙言はく、「我に阿耨多羅三藐三菩提を與へよ。」釋提桓因言はく、「此は我が力の辦ずる所に非ず、是れ諸佛の境界なり、必ず相供養せん、更に餘願を索めよ。」薩陀波崙言はく、「汝若し此無力に於て必ず供養を見ば、我が是身をして平復して故の如くならしめよ。」是

時に薩陀波崙の身、即ち平復して瘡瘢有ること無く、本の如くして異ならず。釋提桓因は其願を與へ已りて忽然として現ぜず。爾時、長者女薩陀波崙菩薩に語りて言はく「善男子、來りて我が舍に到り、須ふる所有らば我が父母に從て之を索めよ、盡く當に相與ふべし、我れ亦當に我が父母を辭し、諸侍と與に從て汝と共に往て曇無竭菩薩を供養せん、求法の爲の故に。」即時に薩陀波崙菩薩は長者女と與に倶に其舍に到り、門外に在りて住す。長者女入りて父母に白さく「我れ衆の妙華香及び諸の瓔珞塗香燒香幡蓋衣服、金銀琉璃頗梨眞珠琥珀珊瑚、及び諸の伎樂供養の具を與へ、亦我が身と及び先に給使する所の五百の侍女と、薩陀波崙菩薩と共に曇無竭菩薩の所に到らんことを聽したまへ、般若波羅蜜を供養せんが爲の故に。曇無竭菩薩は當に我等が爲に說法すべし、我れ當に說の如く行じ、當に諸佛の法を得べし。」と。女の父母は女に語りて言はく「薩陀波崙菩薩は是れ何等の人なりや。」女言はく「是人は今門外に在り、是善男子は深心を以て阿耨多羅三藐三菩提を求め、一切衆生の無量生死の苦を度せんと欲す。是善男子は法の爲の故に、自ら其身を賣りて般若波羅蜜を供養す、般若波羅蜜は菩薩所學の道と名く。般若波羅蜜を供養し、及び曇無竭菩薩を供養せんが爲の故に、市肆上に在りて高聲に唱へて言はく、誰か人を須ひんと欲する、誰か人を須ひんと欲する、誰か買はんと欲すると。身を賣るに售れず、一面に在りて立て憂愁啼哭す。是時に釋提桓因化して婆羅門と作り、來りて之を試みんと欲し、問ひて言はく、善男子、何を以て憂愁啼哭し一面に在りて立つと。答へて言はく、

婆羅門、我れ身を賣らんと欲す、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩摩訶薩を供養せんが爲の故に。而も我れ福薄くして身を賣るに售れずと。婆羅門語らく、是れ善男子、我れ人を須ひざるも、我れ天を祠らんと欲す、當に人心人血人髓を用ふべし、汝能く賣るや不やと。是時に是善男子、復憂愁せず、其心和悅して語らく、是れ婆羅門、汝が須ふる所、我れ盡く相與へんと。婆羅門言はく、汝何の價を須ふると。答へて言はく、汝が意に隨て我に與へよと。即時に是善男子は右手に利刀を執り、左臂を刺して血を出し、右髀の肉を割き、復骨を破て髓を出さんと欲す、我れ閣上に在りて遙に是事を見、我れ爾時に是念を作さく、是人何の故に其身を困苦す、我れ當に往きて問ふべしと。即ち閣を下り往きて善男子に問はく、汝何の因緣の故に自ら其身を困苦すると。是善男子我に答へて言はく、姉、我れ法の爲の故に般若波羅蜜及び曇無竭菩薩說法者を供養せんと欲す、我れ貧窮にして所有無く、金銀琉璃硨磲碼碯珊瑚琥珀頗梨眞珠華香伎樂無し、姉、我れ法を供養せんが爲の故に自ら其身を賣るに、今買ふ者を得たり、人心人血人髓を須ふと、我れ是價を用て、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩說法者を供養せんと。我れ是善男子に問はく、汝今自ら身より心血髓を出して曇無竭菩薩を供養し、何の功德を得んと欲すと。是善男子の言はく、曇無竭菩薩は當に我が爲に般若波羅蜜及び方便力を說くべし、此は是れ菩薩の學すべき所、菩薩の作すべき所、菩薩の行ずべき所の道なり、我れ當に是道を學し、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切衆生の爲に依止と作るべし、我れ當に金色身三十二相八十隨形好丈光明無量明、大慈

大悲大喜大捨四無所畏四無礙智、佛の十力十八不共法、六神通不可思議清淨戒禪定智慧を得、阿耨多羅三藐三菩提を得、諸法の中に於て一切無礙の智見を得、無上法寶を以て一切衆生に分布し與ふべし。是の如き等の微妙の大法なれば、我れ當に彼に從て之を得べしと。我れ是微妙不可思議の法、諸佛の功德を聞き、其大願を聞きて、我れ心に歡喜し、是念を作さく、是清淨微妙の大願甚だ希有なり、乃ち是の如く是一一の法の爲の故に、如恆河沙等の身命を捨つべし。善男子は法の爲に能く苦行難事を受け、謂ゆる身命を惜まず、我れ多く妙寶有り、云何が願を生ぜざらん、勤めて是の如きの法を求め、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩を供養せんと。我れ是の如く思惟し已りて薩陀波崙菩薩に語らく、汝善男子、其身を困苦すること莫れ、我れ當に我が父母に白して、多く汝に金銀琉璃硨磲碼碯、珊瑚琥珀頗梨眞珠、華香瓔珞塗香末香、衣服幡蓋及び諸の伎樂を與へ、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩說法者を供養すべし。我れ亦父母に諸の侍女と共に汝と倶に去りて曇無竭菩薩說法者を供養せんことを求め、汝と共に諸の善根を植ゑ、是の如き等の微妙清淨の法を得んが爲に、汝が說く所の如くせんと。父母、今我れ幷に五百の侍女、先に給ふ所の者を聽したまへ、亦我に衆の妙華香瓔珞塗香末香、衣服幡蓋伎樂、金銀琉璃供養の具を持て、薩陀波崙菩薩と共に去りて、般若波羅蜜及び曇無竭菩薩說法者を供養せんことを聽したまへ、是の如き等の清淨微妙の諸佛の法を得んが爲の故に。」爾時に父母、女に報へて言はく、「汝の讚ずる所の者は希有にして及び難き說なり。是善男子の法の爲に精進して大に法相

【七】長者女父母の許諾を得て、常啼と倶に法盛菩薩及び般若を供養するを明す。

を樂む、及び是れ諸佛法不可思議なり、一切世間の最第一たり、一切衆生の歡樂の因緣なり、是善男子は是法の爲の故に大誓莊嚴す。我等聽さん、汝往いて曇無竭菩薩を見て親近し供養せよ、汝大心を發し、佛法を得んが爲の故に是の如く精進す、我等云何が當に隨喜せざるべけんや。」と。是女は曇無竭菩薩を供養せんが爲の故に、聽許を蒙むることを得て、父母に報へて言はく、「我等も亦是に隨つて心歡喜す、我れ終に人の善法の因緣を斷たず。」と。

(七)是時に長者女は七寶車五百を莊嚴し、身及び侍女種種の寶物莊嚴供養の具を乘せ、種種水陸の生華及び金銀寶華衆色寶衣、好香擣香澤香瓔珞及び衆味飲食を持ちて、薩陀波崙菩薩五百侍女と共に各一車に載せ、恭敬し圍遶し、漸漸に東に去り、衆香城を見るに七寶の莊嚴、七重圍遶し、七寶の塹、七寶行樹、皆亦七重なり、其城の縱廣十二由旬なり、豐樂安靜にして甚だ喜樂すべく、人民熾盛なり、五百市里街巷相當り、端嚴なること畫の如く、橋津は地の如く、寬博淸淨にして遙に衆香城を見る。既に城中に入りて曇無竭菩薩の坐を見るに、高臺法座上、無量百千萬億の衆に恭敬圍遶せられて說法す。薩陀波崙菩薩は曇無竭菩薩を見る時、心即ち歡喜し、譬へば比丘の第三禪攝心安隱に入るが如し。見已りて是念を作さく、我等儀應に車に載せて曇無竭菩薩に趣くべからずと。是念を作し已りて下車し步して進む。長者女並に五百侍女も皆亦下車す、薩陀波崙菩薩は長者女及び五百の侍女と與に衆寶莊嚴し、圍遶恭敬し、倶に曇無竭菩薩の所に到る。爾時、曇無竭菩

薩摩訶薩は七寶臺有りて赤牛頭栴檀以て莊嚴と爲し、眞珠羅網以て臺上を覆ひ、四角に皆摩尼珠寶を懸け、以て燈明と爲し、及び四寶の香爐には當に名香を燒く、般若波羅蜜を供養せんが爲の故に。其臺の中に七寶の大床有りて、四寶の小床を重ねて其上に敷き、黃金を以て般若波羅蜜を牒書して小床の上に置き、種種の幡蓋莊嚴もて其上に垂覆す。薩陀波崙菩薩及び諸の女人は是妙臺の衆寶嚴飾を見、及び釋提桓因の無量百千萬の諸天と與に、天の曼陀羅華、碎末栴檀磨、衆寶屑を以て、以て臺上に散じ、天の伎樂を虛空中に於て鼓し、此臺を娛樂するを見る。爾時、薩陀波崙菩薩釋提桓因に問ひて言はく「憍尸迦、何の因緣の故に無量百千萬の諸天と與に、天の曼陀羅華、碎末栴檀磨、衆寶屑を以て、以て臺上に散じ、天の伎樂を虛空中に於て鼓し、此臺を娛樂するや。」釋提桓因答へて言はく、「汝善男子、知らずや此は是れ摩訶般若波羅蜜なり、是れ諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く諸佛を生じ、菩薩を攝持す、菩薩は是般若波羅蜜を學して一切諸功德を成就し、諸佛法一切種智を得。」と。是時に薩陀波崙即ち歡喜悅樂して釋提桓因に問ひて言はく「憍尸迦、是般若波羅蜜は諸の菩薩摩訶薩の母にして、能く諸佛を生じ、菩薩を攝持す、菩薩は是般若波羅蜜を學して一切の功德を成就し、諸佛法一切種智を得て、今何處に在りや。」釋提桓因言はく「善男子、是臺の中に七寶の大床有り、四寶の小床重ねて其上に敷く、黃金を以て般若波羅蜜を牒書し、小床の上に置き、曇無竭菩薩七寶の印を以て之に印す、我等は能く開いて以て汝に示すこと能はず。」と。是時、薩陀波崙は長者女及び五百の侍女

と與に供養具を取り、華香瓔珞幡蓋を分ちて二分と作し、一分もて般若波羅蜜に供養し、一分もて法座上の曇無竭菩薩に供養す。爾時、薩陀波崙菩薩は五百の女人と與に華香瓔珞幡蓋伎樂及び諸の珍寶を持て、般若波羅蜜を供養し已り、然して後曇無竭菩薩の所に向ひ、到り已りて、曇無竭菩薩の法座上に在りて坐するを見、諸の華香瓔珞擣香澤香、金銀寶華幡蓋寶衣を以て、曇無竭菩薩の上に散じ、法の爲の故に供養す。是時に諸の華香寶衣、曇無竭菩薩の上に虚空中に於て、化して華臺と成り、碎末栴檀寶屑、金銀寶華、化して寶帳と成り、寶帳の上に散ずる所の種種の寶衣化して寶蓋と爲り、寶蓋の四邊に諸の寶幡を垂る、薩陀波崙及び諸の女人は是曇無竭菩薩の作す所の變化を見て大に歡喜し、是念を作さく、未曾有なり、曇無竭大師の神德乃ち爾るなり、菩薩道を行ずる時の神通力なほ能く是の如し、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得る時をやと。是時に長者女及び五百の女人は清淨信心し、曇無竭菩薩を敬重し、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、是願を作して言はく「曇無竭菩薩の如く菩薩の諸の深法を得、曇無竭菩薩の如く般若波羅蜜を供養し、曇無竭菩薩の如く大衆の中に於て般若波羅蜜の義を演說し顯示し、曇無竭菩薩の如く般若波羅蜜方便力を得、神通を成就し、菩薩事の中に於て自在を得ること、我も亦當に是の如くすべし。」と。是時に薩陀波崙菩薩及び五百の女人は、華香寶物もて般若波羅蜜及び曇無竭菩薩を供養し已りて、頭面して曇無竭菩薩を禮し、合掌恭敬して、一面に立ち、一面に立ち已りて、曇無竭菩薩に白して言さく「我れ本般若波羅蜜を求むる時に、空閑林中

に於て空中の聲を聞けり、言はく、善男子、是れより東に行け、當に般若波羅蜜を聞くことを得べしと。我れ是語を受けて東に行く、東に行くこと久しからずして是念を作さく、我れ何ぞ空中の聲に問はざりし、我れ當に何處に去りて是を去ること遠近なるべきかを當に誰に從ひて聞くべきと。我れ是時は大に憂愁啼哭す。是處に於て住ること七日七夜、憂愁するが故に乃至飮食を念はず、但だ我れ何の時か當に般若波羅蜜を聞くことを得べきと念ず、我れ是の如く憂愁して一心に般若波羅蜜を念じ、佛身の虛空中に在るを見る。我に語りて言はく、善男子、汝の大欲大精進の心を放捨すること莫れ、是大欲大精進の心を以て是より東に行け、此を去ること五百由旬にして城有り、衆香と名く。是中に菩薩摩訶薩有りて曇無竭と名く、是人の所に從ひて當に般若波羅蜜を聞くことを得べし、是曇無竭菩薩は世世に是れ汝の善知識にして、常に汝を守護すと。我れ佛より教誨を受け已りて便ち東に行き、更に餘念無く、但だ我れ何の時か當に曇無竭菩薩の我が爲に般若波羅蜜を說くを見るべきと念ず。我れ爾時、中道に住して一切法の中に於て無礙の智見を得、諸法性等諸三昧の現に前に在ると觀ずることを得、是三昧に住し已りて、十方無量阿僧祇の諸佛の是般若波羅蜜を說けるを見る。諸佛は我を讚じて言はく、善い哉善い哉、善男子、我れ本般若波羅蜜を求むる時に諸三昧を得たること、亦汝の今日の如し、是諸三昧を得已りて徧く諸佛法を得たりと。諸佛は我が爲に廣く法を說き、我を安慰し已りて忽然として現せず。我れ三昧より起ちて是念を作さく、諸佛は何處より來り、去て何所に至る、我れ諸佛を見ざ

るが故に大に愁憂すと。復是念を作さく、曇無竭菩薩は先佛を供養して衆の善根を植ゑ、久しく般若波羅蜜を行じ、及び方便力を以て、菩薩道の中に於て自在を得たり。是れ我が善知識にして我を守護す、我れ當に曇無竭菩薩に是事を問ふべし、諸佛は何所より來り、去て何所に至ると。我れ今大師に問ふ、是諸佛は何處より來り、去て何處に至る。大師、我が爲に諸佛の從て來る所と去て之く處とを說き、我をして知ることを得、知り已りて亦常に諸佛を見ることを離れざらしめよ。」

法尙品第八十九

（一）爾時、曇無竭菩薩摩訶薩は薩陀波崙菩薩に語て言はく、「善男子、諸佛は從て來る所無く、去て亦至る所無し。何を以ての故に。諸法如は不動相なり、諸法如は即ち是れ佛なればなり。善男子、無生の法は來る無く去る無し、無生の法は即ち是れ佛なればなり。無滅の法は來る無く去る無し、無滅の法は即ち是れ佛なればなり。實際の法は來る無く去る無し、實際の法は即ち是れ佛なればなり。空は來る無く去る無し、空は即ち是れ佛なればなり。善男子、無染は來る無く去る無し、無染は即ち是れ佛なればなり。寂滅は來る無く去る無し、寂滅は即ち是れ佛なればなり。虛空性は來る無く去る無し、虛空性は即ち是れ佛なればなり。善男子、是諸法を離れては更に佛無し、諸佛如と諸法如とは一如にして分別無し。

【法尙品】前に續きて曇無竭常啼に說法するを明す。

【一】諸佛諸法一如にして來去なきを明し、常啼は諸法空を知るも佛身を尊重する故に法空を觀ずるが能はざればなり。

【諸法如】諸法實相即ち性空の諸法なり。

【諸數法等】一如にして二も三もなく無差別なるを明す。憶想分別取相名字中に數あり、如實に是れあることなし。

【色身等】法身と共に二種佛身、法身は眞佛、色身は世諦の爲の故にあるを說く。

善男子、是如は常一にして無二無三なり、諸數法を出で、所有無きが故に。譬へば春末月の日中熱時に、人有り焰の動ずるを見て之を逐ひ、水を求めて得んと望むが如し。汝が意に於て云何、是水は何の池何の山何の泉より來り、今何所にか去る、若は東海西海南海北海に入らんや。」薩陀波崙言さく「大師、焰の中尙ほ水無し、云何が當に來る處去る處有るべき。」曇無竭菩薩は薩陀波崙菩薩に語りて言はく「善男子、愚夫無智は熱渴の爲に逼められ、焰の動ずるを見て水無きに水想を生ず。善男子、若し人有りて、諸佛來る有り、去る有りと分別せば、當に知るべし、是人は皆是れ愚夫なり。何を以ての故に。善男子、諸佛は色身を以て見るべからず、諸佛の法身は來る無く去る無く、諸佛の來る處去る處も亦是の如し。善男子、譬へば幻師の種種の、若は象、若は馬、若は牛、若は羊、若は男、若は女を幻作するが如し。是の如き等の種種の諸物、汝が意に於て云何、是幻事何處より來り、去て何所にか至る。」薩陀波崙言さく「大師、幻事は實無し、云何が當に來る處去る處有るべき。」「善男子、是人の佛來る有り去る有りと分別するも亦是の如し。善男子、譬へば、夢中に若は象、若は馬、若は牛、若は羊、若は男、若は女を見るが如し。汝が意に於て云何、夢中に見る所、來る處有り、去る處有りや不や。」薩陀波崙言さく「大師、是夢中に見る所は虛妄なり、云何が當に來去有るべき。」「善男子、是人の佛來る有り去る有りと分別するも、亦是の如し。佛の說きたまふ諸法は夢の如し、若し衆生有りて、諸法は夢の如しと知らざれば、名字色身を以て是れ佛なりとし、是人は諸佛來る有り去る

【虚妄にして……食せず】斎生に布施して果を得るも盡くるあり量あり、衆生の生死を度する能はざる故虚食すとし、聖賢の信施を受くるを不虚食といひ、聖者を應供といふ。【衆生の善根等】海中に寶の生ずる因縁なくして生ずることなし、四天下衆生の福徳の因縁を以ての故に寶を生ずるなり。【箜篌】くだらごと。

有りと分別す、諸法の實際相を知らざるが故に皆是れ愚夫無智の數なり。是諸人は數數五道を往來して般若波羅蜜を遠離し、諸佛法を遠離す。善男子、佛の說きたまふ諸法は幻の如く夢の如し。若し衆生有りて如實に知れば、是人は諸法を分別して若は來り若は去り、若は生じ若は滅すとせず。若し諸法を分別して若は來り若は去り、若は生じ若は滅すとせざれば、則ち能く佛の說きたまふ所の諸法の實相を知るなり。是人は般若波羅蜜を行じて、阿耨多羅三藐三菩提に近づく、名けて眞の佛弟子と爲す。虚妄にして人の信施を食せず、是人は應に供養を受けて、世間の福田と爲るべし。善男子、譬へば大海水の中の諸寶の東方より來らず、南方西方北方四維上下より來らず、衆生の善根の因緣の故に、海此寶を生じ、此寶も亦因無く緣無くして生ぜず、是寶は皆因緣和合によりて生じ、是寶若し滅するも亦去て十方に至らず、諸緣合するが故に有り、諸緣離るるが故に滅するが如し。善男子、諸佛身も亦是の如く、本業の因緣によりて果報生じ、生ずる時十方より來らず、滅する時も亦去て十方に至らず、但だ諸緣合するが故に有り、諸緣離るるが故に滅す。善男子、譬へば箜篌の聲を出す時來る處無く、滅する時去る處無く、衆緣和合するが故に生ず。槽有り頸有り、皮有り弦有り、柱有り棍有り、人の手を以て之を鼓する有り、衆緣和合して而して是聲有り。是聲も亦槽より出でて、頸より出でず、皮より出でず、弦より出でず、棍より出でず、亦人の手より出でず、衆緣和合して爾して乃ち聲有り。是因緣離るる時も亦去る處無きが如し。善男子、諸佛身も亦是の如く無量功德の因緣によりて生じ、一因一緣

【二】帝釋、常啼を讃じ天華を捧ぐるを以て、華を受けて法盛に供養す。

【三】是時に長者女等長者女及び五百侍女身を以て供養す。

一功徳によりて生ぜず、亦因縁無くして有らず、衆縁和合するが故に有り。諸佛身獨り一事によりて成ぜず、來りて從る所無く、去て至る所無し。善男子、當に是の如く諸佛の來相去相を知るべし。善男子、亦當に一切法の來去無きの相を知るべし。汝若し諸佛及び諸法の來る無く去る無く、生ずる無く滅する無きの相を知らば、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得、亦能く般若波羅蜜及び方便力を行ぜん。

爾時、釋提桓因は天の曼陀羅華を以て薩陀波崙菩薩摩訶薩に與へ、是言を作さく「善男子、是華を以て曇無竭菩薩摩訶薩を供養せよ、我れ當に汝を守護し供養すべし。所以は何ん、汝の因緣力の故に、今日百千萬億の衆生を饒益し、阿耨多羅三藐三菩提を得しむればなり。善男子、是の如きの善人は甚だ遇ひ難しと爲す。一切の衆生を饒益せんが爲の故に、無量阿僧祇劫に是の如き勤苦を受く。」薩陀波崙菩薩摩訶薩は釋提桓因の曼陀羅華を受け、曇無竭菩薩の上に散じて白して言さく「大師、我れ今日より身を以て師に屬し供給し供養せん。」是の如く白し已りて合掌して師の前に立つ。是時に長者女及び五百の侍女は薩陀波崙菩薩に白して言さく「我等も今日より亦身を以て師に屬し、我等是善根の因緣を以ての故に當に是の如きの法を得、亦師の得たる所の如く、師と共に世世に諸佛を供養し、世世に當に師を供養せん。」と。是時、薩陀波崙菩薩、長者女及び五百の女人に語らく「若し汝等、至誠心を以て我に屬すれば、我れ當に汝を受くべしと」。諸女言さく「我等至誠心を以て師に屬し、當に師の教に隨はん。」と。是時、薩陀波崙菩薩は、長者女及び五百の女人と、

【三】曇無竭七歳入定中の事項について述ぶ。

【二儀】行と住となり。

並に諸の莊飾する寶物、上妙の供具及び五百乘の七寶車をもて曇無竭菩薩に奉上し、白して言さく「大師、我れ是五百女人を持て大師に奉給せしめ、是五百乘車もて師の所用に隨へん」と。爾時、釋提桓因は薩陀波崙菩薩を讃じて言はく「善い哉善い哉、善男子、菩薩摩訶薩は一切の所有を捨つること應に是の如くすべし。是の如く布施せば、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得、是の如く說法人を供養することを作さば、必ず能く般若波羅蜜及び方便力を聞くことを得ん。過去の諸佛の本菩薩道を行ずる時も亦是の如く布施中に住し、般若波羅蜜及び方便力を聞くことを得て、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。」

(三)爾時、曇無竭菩薩は薩陀波崙菩薩をして、善根を具足せしめんと欲するが故に、五百乘車及び長者女及び五百侍女を受け、受け已りて還て薩陀波崙菩薩に與ふ。是時、曇無竭菩薩は說法し、日沒に起ちて宮中に入る。薩陀波崙菩薩摩訶薩是念を作さく「、我れ法の爲の故に來る、坐臥すべからず、當に二儀を以てすべし、若は行き、若は立て以て法師の宮中より出でて說法するを待たん」と。爾時、曇無竭菩薩は七歳一心に無量阿僧祇菩薩三昧の中に入り、及び般若波羅蜜方便力を行ず、薩陀波崙菩薩は七歳經行し住立して坐せず臥せず、睡眠有ること無く、欲恚惱心無く、味に著せず、但だ曇無竭菩薩摩訶薩の何の時に當に三昧より起ち「出でて說法すべきかを念ずるのみ。薩陀波崙菩薩は七歳を過ぎ已りて、是念を作さく「我れ當に曇無竭菩薩摩訶薩の爲に說法の座を敷くべし、曇無竭菩薩摩訶薩當に上に坐して說法せん、我れ當に灑掃淸淨にし、種種の華を散じて是處を莊嚴せん、曇無

竭菩薩摩訶薩の當に般若波羅蜜及び方便力を說くべきが爲の故に」と。是時に薩陀波崙菩薩は長者女及び五百の侍女と與に、曇無竭菩薩摩訶薩の爲に七寶床を敷き、五百女人は各上衣を脫ぎ以て座上に敷き、是念を作さく「曇無竭菩薩摩訶薩は當に此座上に坐し、般若波羅蜜及び方便力を說くべし」と。薩陀波崙菩薩は座を敷き已り、地に灑ぐ水を求めて而も得ること能はず、所以は何ん、惡魔隱蔽して水をして現ぜざらしむればなり。魔是念を作さく「薩陀波崙菩薩は水を求めて得ず、阿耨多羅三藐三菩提に於て、乃至一念劣心異心を生ずれば、則ち智慧照さず、善根增さず、一切智に於て稽留する有らん」と。爾時、薩陀波崙菩薩是念を作さく、「我れ當に自ら其身を刺して、血を以て地に灑ぎ、塵土の來りて大師を坌す無からしむべし。我れ何ぞ是身を用ひん、此身は必ず當に破壞すべし、我れ無始生死より以來、數數身を喪ふも未だ曾て法の爲にせず」と。即ち利刀を以て自ら刺し、血を出して地に灑ぐ。薩陀波崙菩薩及び長者女並に五百侍女は皆異心無ければ、惡魔も亦便を得ること能はず。是時に釋提桓因は是念を作さく「未曾有なり、薩陀波崙菩薩は法を愛し、乃爾刀を以て自ら刺し、血を出して地に灑ぐ、薩陀波崙及び衆の女人の心動轉せざれば、惡魔破旬其善根を壞すること能はず、其心堅固にして大莊嚴を發し、身命を惜まず、深心を以て阿耨多羅三藐三菩提を求め、當に一切衆生の無量生死の苦を度せんと欲す」釋提桓因は薩陀波崙菩薩を讚じて言はく、「善い哉善い哉、善男子、汝の精進力大堅固にして動じ難く不可思議なり、汝の法を愛し法を求むる最も無上なりと爲す。善男子、過去の諸

【四】曇無竭重ねて般若の相を說く。

佛も亦是の如く深心を以て法を愛し、法を惜み、法を重じ、諸の功德を集めて阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と。薩陀波崙菩薩是念を作さく、「我れ曇無竭菩薩摩訶薩の爲に法座を敷き、掃灑淸淨已に訖る、當に何處に於て好名華を得、此地を莊嚴すべき、若し曇無竭菩薩摩訶薩法座上に坐して說法する時も、亦當に散華もて供養すべし」と。釋提桓因薩陀波崙菩薩の心に念ずる所を知り、卽ち三千石の天の曼陀羅華を以て薩陀波崙に與ふ。薩陀波崙は華を受け已りて、半を以て地に散じ、半を留めて曇無竭菩薩摩訶薩の法座上に坐して說法したまふ時を待て、當に供養すべしとす。爾時曇無竭菩薩摩訶薩は七歲を過ぎ已りて諸三昧より起ち、般若波羅蜜を說かんが爲の故に、無量百千萬の衆の與に恭敬し、圍遶せられて、法座上に往きて坐す、薩陀波崙菩薩の曇無竭菩薩摩訶薩を見る時、心に悅樂を得ること、譬へば比丘の第三禪に入るが如し。

【四】爾時、薩陀波崙菩薩及び長者女並に五百の侍女は曇無竭菩薩摩訶薩の所に到りて、天の曼陀羅華を散じ、頭面を禮し畢り、退いて一面に坐す。曇無竭菩薩は其の坐するを見已りて薩陀波崙菩薩に告げて云はく、「善男子、諦に聽け、諦に受けよ、今當に汝が爲に般若波羅蜜相を說くべし。善男子、諸法等しきが故に當に知るべし、般若波羅蜜も亦等し。諸法離るるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦離る。諸法不動なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦不動なり。諸法無念なるが故に、當に知るべし。般若波羅蜜も亦無念なり。諸法無畏なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無畏なり。諸法一味なるが故に

【諸法等三昧等】前述の諸法等しきが故に般若も亦平等なり等の義に安住するをいふ。

當に知るべし、般若波羅蜜も亦一味なり。諸法無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。諸法無生なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無生なり。諸法無滅なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無滅なり。虚空無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。大海水無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。須彌山莊嚴なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦莊嚴なり。虚空無分別なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無分別なり。色無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。受想行識無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。地種無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。水種火種風種無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。空種無邊なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無邊なり。如金剛等しきが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦等し。諸法無分別なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無分別なり。諸法性不可得なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜性も亦不可得なり。諸法無所有等なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無所有等なり。諸法無作なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦無作なり。諸法不可思議なるが故に、當に知るべし、般若波羅蜜も亦不可思議なり。是時、薩陀波崙菩薩摩訶薩は即ち坐處に於て諸三昧を得たり。謂ゆる諸法等三昧、諸法離三昧、不動三昧、無念三昧、諸法無畏三昧、諸法一味三昧、諸法無邊三昧、諸法無生三昧、諸法無滅三昧、虚空無邊三昧、大海水無邊三昧、須彌山莊嚴三昧、虚空無分別三

【五】前記の常啼の因縁の如く、今佛にも諸佛にも理同じきを明す。

味、色無邊三昧、受想行識無邊三昧、地種無邊三昧、水種火種風種空種無邊三昧、如金剛等三昧、諸法無分別三昧、諸法不可思議三昧。是の如き等の六百萬の諸三昧門を得たり。」と。』

(五)爾時、佛須菩提に告げたまはく、『我れ今三千大千世界の中に於て、諸の比丘僧の與に圍遶せられ、是の如きの相、是の如きの像貌、是の如きの名字を以て、是摩訶般若波羅蜜を說き、薩陀波崙は是六百萬の三昧門を得たるが如く、東方南方西方北方四維上下を見るに、如恆河沙等の三千大千世界の中の諸佛、諸比丘の與に恭敬し圍遶せられ、是の如きの相、是の如きの像貌、是の如きの名字を以て、是摩訶般若波羅蜜を說くも亦是の如し。薩陀波崙菩薩は是より已後、多聞智慧不可思議にして大海水の如く、常に諸佛を離れず、有佛の國中に生じ、乃至夢中にも、未だ曾て佛を見ざる時あらず、一切の衆難皆悉く已に斷ちて、在所の佛國に願に隨て往生す。須菩提當に知るべし、是般若波羅蜜の因緣は能く菩薩摩訶薩の一切の功德を成就し、一切種智を得。是を以ての故に、須菩提、諸の菩薩摩訶薩にして、若し六波羅蜜を學せんと欲し、深く諸佛の智慧に入らんと欲し、一切種智を得んと欲すれば、應に是般若波羅蜜を受持し讀誦し正憶念し、廣く他人の爲に說き、亦經卷を書寫し供養し尊重し讚歎し、香華乃至伎樂もてすべし。何を以ての故に。般若波羅蜜は、是れ過去未來現在十方諸佛の母にして、十方諸佛の尊重する所なるが故に。』

囑累品第九十

〔一〕爾時、佛阿難に告げたまはく、「汝が意に於て云何、佛は是れ汝が大師なりや不や、汝は是れ佛の弟子なりや不や。」阿難言さく、「世尊、佛は是れ我が大師なり、修伽陀は是れ我が大師なり、我は是れ佛の弟子なり。」佛言はく、「是の如く是の如し、我は是れ汝が大師なり、汝は是れ我が弟子なり、若し弟子の作すべき所の者の如く、汝已に作し竟る。阿難、汝の身口意慈業を用て我に供養し供給し、亦常に我が意の如くして、違失有ること無し。阿難、我が身現在せば、汝の愛敬し供養し供給する心常に清淨なり。我れ滅度して後、是一切の愛敬供養供給の事、當に般若波羅蜜を愛敬し供養すべし、乃至第二第三、般若波羅蜜を以て汝に囑累す。阿難、汝忘るること莫れ、失ふこと莫れ、最後斷種人と作ること莫れ。阿難、爾所の時に隨て般若波羅蜜は世に在り。當に知るべし、爾所の時に佛の世に在して說法する有り。阿難、若し般若波羅蜜を書し、受持し讀誦し正憶念し、人の爲に廣說し恭敬し尊重し讚歎し、華香幡蓋寶衣燈燭種種もて供養する有らば、當に知るべし、是人は見佛を離れず、聞法を離れず、爲に常に佛に親近す。」

〔二〕佛般若波羅蜜を說き已りたまふや、彌勒等の諸の菩薩摩訶薩、慧命須菩提、慧命舍利弗、大目揵連、摩訶迦葉、富樓那彌多羅尼子、摩訶拘絺羅、摩訶迦旃延、阿難等、並に一

【囑累品】般若を付囑して佛子は斯法を尊重し護持すべきを說く。流通分なり。

【一】正しく阿難に付囑す。阿難は記憶第一と稱せらる。

【修伽陀】スガタ(Sugata)善逝と譯す、佛の十號の一。

【作すべき所】善の三業を以て師に供給す。

【我れ滅度の後等】滅後は在世に師に事ふるところを以て法に事ふべし。

【第二第三】三反び囑累懇懃を表す。

【最後斷種人】子孫相續せざるをいふ。

【二】在會大衆の歡喜を明す。

切の大衆、及び一切世間の諸天人、揵闥婆、阿修羅等佛の說きたまふ所を聞きて、皆大に歡喜せり。

摩訶般若波羅蜜經　終

佛說仁王般若波羅蜜經

經典部
第四卷

佛說仁王般若波羅蜜經　卷上

姚秦三藏鳩摩羅什譯す

序品第一

(一)是の如く我聞けり。一時、佛、王舍城、耆闍崛山の中に在したまふ。大比丘衆八百萬億の學無學と與なり。皆阿羅漢なり。有爲の功德と無爲の功德と、無學の十智と有學の八智と、有學の六智、三根と、十六の心行と、法假虛實觀と、受假虛實觀と、名假虛實觀と、三空觀門と、四諦と十二因緣と無量の功德とを皆成就せり。復た八百萬億の大仙の緣覺あり。斷に非ず、常に非ず、四諦十二因緣皆成就せり。復九百萬億の菩薩摩訶薩あり。皆阿羅漢にして、實智の功德と方便智の功德あり、獨大乘を行じて、四眼、五通、三達、十力、四無量心、四辯、四攝、金剛滅定、一切の功德皆成就せり。復千萬億の五戒の賢者あり。皆阿羅漢を行じ、十地に廻向して五分法身を具足し、無量の功德皆成就せり。復た十千の五戒の淸信女あり。皆阿羅漢を行じ十地皆成就し、始生の功德も住生の功德も終生の功德も三十生の功德も、皆成就せり。復十億の七賢の居士あり。德行具足し、二十二品、十一切入、八除入、八解脫、三慧、十六諦、四三二一品、觀じて九十忍を得、一切の功德みな

【序品】本經の序說諸の聽法者のために略して仁王般若の位地を簡ぶなり。

【一】證信序、聲聞衆乃至五道の衆生等佛の說法を聽かんがために、各自寶蓮華の上に坐す。

【王舍城】ラージヤグリハ(Rājagrha)中印度摩訶陀國の都城。

【耆闍崛山】グリドフラクータ(Grdhrakūta)靈鷲山と譯す。王舍城の東北にある山。

【阿羅漢】アルハン(Arhan)應供、殺賊等と譯す。

【有爲の功德等】有爲は智德を、無爲は斷德を擧ぐ、境に約せば道諦は有爲滅諦は無爲なり

【無學の十智】四諦、法比等他心盡無生の十。

【有學の八智】阿那含人の盡智無生

成就せり。復萬萬億の九梵あり。三淨三光三梵と、五喜樂天と、天定と功德定と味と、常樂神通と十八生處の功德皆成就せり。復億億の六欲の諸の天子あり。十善の果報と神通の功德とを皆成就せり。復十六の大國王あり、各各一萬二萬乃至十萬の眷屬を有し、五戒も十善も三歸の功德も淸信の行をも具足せり。復五道の一切の衆生あり。復他方の不可量の衆あり。復十方の淨土を變じて、百億の高座を現じ、百億の須彌の寶華を化するあり。各各座の前の華の上に坐す。復無量の化佛あり。無量の菩薩と比丘と八部の大衆とあり、各各寶蓮華に坐せり。華上に皆無量の國土あり、一一の國土の佛及び大衆は、今の如くにして異なることなし。一一の國土中の一一の佛及び大衆、各各般若波羅蜜を說きたまへば他方の大衆及び化衆此三界の中の大衆十二大衆皆來つて集會し、九劫の蓮華の座に坐せり。其會は方の廣さ九百五十里にして、大衆は僉然として坐せり。

(二)爾時に十號と三明大滅諦金剛智の釋迦牟尼佛は、初年の月八日に、方に十地に坐し大寂室三昧に入りて、思緣して大光明を放ち三界の中を照したまふ。復頂上より千の寶蓮華を出したまへば、其華は上非想非非想天に至る。光も亦復爾り。乃ち他方の恆河沙の諸佛の國土に至る。時に無色界より無量に變ぜる大香華を雨ふらせば、香は車輪の如く、華は須彌山王の如く、雲の如くにして下れり。十八の梵天王百に變ぜる異色の華を雨ふらし、六欲の諸天も無量の色華を雨ふらし、其佛座の前には、自然に、九百萬億劫の華を生じ、上非悲非非想天に至る。是時に世界は其地六種に震動せり。

智を除ける餘の八智。

【有學の六智】須陀洹、斯陀含の無學に在る故盡、無生を除き、根本禪を得ざるが故に他心智を、先有非始得の故に等智を除く。餘の六なり。

【三根】未智、已智、無智の三根。

【十六心】小乘によるに苦法忍苦法智乃至道類忍道類智をいひ、又八忍八智にも名く。

【法假虛實觀等】五陰等の法を法假といひ、五陰の衆生を成ずるを受假といひ、上二假に取するを名假と云ふ。法假實ならば二假虛なるを虛實觀といふ。

【三空觀門】空無相無作の三三昧なり。

【大仙の緣覺】外況を以て內に大辟支佛を成ずるに名く。

【斷に非ず等】緣生

の故に非斷、生じ已りて滅する故非常なり。
【實智…方便智】實相般若を實智、方便般若を方便智といふ。
【獨大乘】二乘を雜へざる唯大乘なり。
【四眼】肉、天、慧、法の四眼。
【五通】身通天眼天耳他心宿命。
【三達】宿命達、天眼達、漏盡達。
【十力】菩薩の十力なり。一發心堅固、二大慈力、三大悲力、四精進力、五禪定力、六智慧力、七不厭生死力、八無生法忍力、九解脫力、十無礙力。
【四無量心】慈悲喜捨。
【四辯】法辯、辭辯、樂說辯、義辯。
【四攝】布施愛語利益同事。
【金剛滅定】第十地の上忍の定、金剛の如きこの慧を

(三)爾時に諸の大衆は俱に共に僉然として疑を生じ、各相謂つて言はく、『四無所畏十八不共法五眼の法身の大覺世尊は、前に已に我等大衆の爲に、二十九年摩訶般若波羅蜜、金剛般若波羅蜜、天王問般若波羅蜜、光讃般若波羅蜜を說きたまふ。今日如來は大光明を放つて斯に何事をか作したまふ』と。時に十六大國王中の舍衞國の主、波斯匿王名を月光と曰ひ、德行は十地と六度と三十七品と四の不壞の淨あり。摩訶衍の化を行ず、次第に居士、寶、蓋、法、淨名等の八百人に問ひ、復た須菩提、舍利弗等の五千人に問ひ、復彌勒、師子吼等の十千人に問へるに、能く答ふる者無し。

時に波斯匿王は卽ち神力を以て、八萬種の音樂を作し、十八の梵、六欲の諸天も亦八萬種の音樂を作せしに、聲は三千乃至十方恆河沙の佛土を動かし、緣ありて斯に現ず。彼の他方の佛國中、南方の法才菩薩は、五百萬億の大衆と共に、俱に來りて此大會に入り、東方の寶柱菩薩は、九百萬億の大衆と共に俱に來つて此大會に入り、北方の虛空性菩薩は、百千萬億の大衆と共に、俱に來りて此大會に入り、西方の善住菩薩は、十恆河沙の大衆と共に俱に來りて此大會に入り、六方も亦復是の如くす。樂を作すことも亦然り。亦復共に無量の音樂を作して、如來を覺悟したてまつれば、佛卽ち時を知りたまひ、衆生の根を得て、卽ち定より起ち、方に蓮華の師子座の上に坐したまふこと、金剛山王の如し、大衆は歡喜して、各各無量の神通を現じ、地及び虛空に住せり。

以て菩薩は煩惱を斷じて壞せらるることなし。又首楞嚴三昧に名く。【賢者】調心修道の人に名く。【十地】乾慧地性地八人地見地薄地離欲地已辨地辟支佛地菩薩地佛地。【五分法身】戒定慧解脫解脫知見。【淸信女】優婆夷なり。【始生等】始生は入地心、住生は住地心、終生は滿地心なり。【三十生】十地の各に三生ありて合して三十生となる。【七賢】二種あり小乘のは五停心より世第一法まで、大乘のは一初發心、二有相の行人、三無相の行人、四方便の行人、五習種性の人、六性種性の人、七道種の人なり。【二十二品】四念處四正勤四如意足

觀空品第二

〔一〕爾時、佛、大衆に告げたまはく、『吾今十六大國王の意を知るに、國土を護るの因緣を問はんと欲す、吾今先づ諸の菩薩の爲に、佛果を護るの因緣と、十地の行を護るの因緣とを說かん。諦に聽け諦に聽け。善く之を思念して、如法に修行せよ』。時に波斯匿王言さく、『善いかな、大事の因緣の故に即ち百億種の色華を散じ、變じて百億の寶帳と成して、諸の大衆を蓋へり。『爾時に大王、復起ちて禮を作し、佛に白して言さく、『世尊、一切の菩薩は云何が佛果を護り、云何が十地の行の因緣を護りたまへるや』。佛言はく、『菩薩は四生を化するに、色如、受想行識如、衆生我人常樂我淨如、知見壽者如、菩薩如、六度四攝一切行如、二諦如を觀ぜず。是故に一切の法性は眞實空にして、不來不去無生無滅なり。眞際に同じく法性に等しく、無二無別にして、虛空の如し。是故に陰入界には、我も無く、所有の相も無し。是を菩薩の十地を行化する般若波羅蜜と爲す』。

〔二〕佛に白して言さく、『若し諸法爾ならば、菩薩の衆生を護化するは、衆生を化すとせんや』。『大王、法性は色受想行識なり。常樂我淨なり。色に住せず、非色に住せず、非非色に住せず、乃至受想行識にも亦住せず、住せざるにも非ず。何を以ての故に、色如に非ず、色如ならざるにも非ず、世諦の故に、三假の故に、衆生を見ると名く。一切の生は性實な

五根五力合して二十二品なり。【十一切入】青黃白赤地水火風空識の十處。【八除入】八勝處ともいふ。一內有色相外觀色少。二內有色相外觀色多。三內無色相外觀色少、四內無色相外觀色多、五青、六黃、七赤、八白。【八解脫】一內有色相外觀色、二內無色相外觀色、三觀淨色、四空處、五色處、六無所有處、七非相處、八滅盡解脫。【三慧】聞思修の三なり。【十六諦】十六行のこと。【四三二一品等】煖頂忍世第一法、是を四現忍といひ、三とは前より煖を除き、二は頂法を、一は忍を除くなり。四三二一を合して十品に欲界より非想に至る九地を觀

るが故に、乃至諸佛と三乘と七賢と八聖とを亦見と名け、六十二見をも亦見と名く。大王、若し名を以て一切の法乃至諸佛三乘四生を見ると名くれば、一切の法を見るに非ざるに非ざるなり。』

（三）佛に白して言さく、『般若波羅蜜は有法なりや、非非法なりや。摩訶衍は云何が照さん。』

『大王、摩訶衍は非非法と見るなり。法若し法非非法なれば、是を非非法空と名く。法性も空なり、色受想行識も空なり、十二入十八界も空なり、六大の法も空なり、四諦十二因緣も空なり。是法は卽ち生じ、卽ち住し、卽ち滅し、卽ち有り、卽ち空なり。刹那刹那にも亦た是の如く、法は生じ法は住し法は滅するなり。何を以ての故に。九十の刹那を一念と爲し、一念の中の一刹那に九百の生滅を經るなり。乃至色の一切の法も亦是の如し。般若波羅蜜は空なるを以ての故に、緣を見ず諦を見ず、乃至一切の法は空なり、內も空、外も空、內外も空、有爲も空、無爲も空、無始も空、性も空、第一義も空、般若波羅蜜も空、因も空、佛果も空、空空の故に空なり。但法集なるが故に有なり、受集の故に有なり、名集の故に有なり、因集の故に有なり、果集の故に有なり、十行の故に有なり、佛果の故に有なり、乃至六道も一切有なり。善男子、若し菩薩有りて法と衆生と我人と知見とを見ば、斯人は世間を行じて世間に異ならざるなり。諸法に於て動ぜず、到らず、滅せず、相も無く無相も無し。一相の法も亦如かなり。諸の佛法僧も亦如かなり。是れ卽ち初地の一念心に、八萬四千の般若波羅蜜を具足するなり。卽ち載するを摩訶衍と名け、

じて九十忍を得。

【三淨】第三禪の三天、云く小淨無量淨遍淨となり。

【三光】第二禪の三天、卽ち少光無量光光音是れなり。

【三梵】初禪の三天卽ち梵衆梵輔大梵なり。

【五憘樂天】四禪九天中後五に名く卽ち無煩無熱善現善可見色究竟是なり。

【天定】報定なり。

【功德定】淨定なり。

【味】味定にして禪定に愛著するなり。

【常樂神通】修得報得の二種神通なり。

【六欲】四天王、忉利、炎摩、兜率、化樂、他化自在の六天。

【淸信の行】四信成就の故、又普く大乘の正信を得しに名く。

【八部】刹利、沙

卽ち滅するを金剛と名け、亦定と名け、亦一切行と名く。光讚般若波羅蜜中に說くが如し。大王、是經の名味句は、百佛千佛百千萬佛の說きたまへる名味句なり。恆河沙の三千大千國土の中に於いて無量の七寶を盛りて、三千大千國土の中の衆生に施し、皆七賢四果を得せしめんも、此經の中に於て、一念の信を起さんには如かず。何に況んや一句を解する者をや。句も句に非ず、句に非ざるに非ず、故に般若は句に非ず、句は般若に非ず、般若も亦菩薩に非ざるなり。何を以ての故に。十地三十生も空なるが故に、始生と住生と終生とは不可得なり、地地の中の三生も空なるが故に。亦薩婆若に非ず、摩訶衍に非ず、空なるが故に。

(四)大王、若し菩薩の境を見、智を見、說を見、受を見るは、聖見に非ざるなり。倒想に法を見るは、凡夫の人なり。三界を見るは、衆生果報の名なり。六識の無量の欲を起すこと無窮なるを、名けて欲界藏の空と爲し、色に惑ひて起す所の業果を名けて、色界藏の空となし、心に惑ひて起す所の業果を名けて、無色界藏の空となす。三界も空なれば、三界の根本たる無明藏も亦た空なり。三地に九の生滅あり、前三界の中の、餘の無明習の果報も空なり。金剛の菩薩は、理盡三昧を得るが故に、或果の生滅も空なり。有果も空、因も空なるが故に空なり。薩婆若も亦空なり。滅果も空なり。或は前に已に空なるが故に、佛の得たまへる三無爲の果たる智緣滅と非智緣滅と虛空と薩婆若の果も、空なり。善男子、若し修習し聽說するあるも、聽くことも無く說くことも無く、虛空の如し、法は法性に同じ

門、婆羅門、四天王、三十三天、六欲天、魔及び梵衆、或は天龍の八部に名く。
【九劫の蓮華】 九層の華座なり。
【二】 發起序、說經の時節に就て明し及び波斯匿王以下來會の大衆の所作を辨ず。
【三明】 三世を圓鑒するの德。
【大滅】 佛の斷德を歎ず。又涅槃に名く。
【金剛智】 究竟の果地卽ち金剛道種智なり。
【大寂定】 眞如空性にして止觀の所依をいふ。
【思緣】 大智もて明察するなり。
【三】 仁王般若を說かんが爲に放ち給ふ大光明についての疑問を述べ、次に說法の時到るを明す。
【四無所畏】 一切智、漏盡、盡苦道、

く、聽も同じく說も同じ。一切の法も皆如かなり。大王、菩薩の佛果を修護すること、此の若しと爲す。般若波羅蜜を護るものは、薩婆若と十力と十八不共法と五眼と五分法身と四無量心と一切功德の果を護ると爲すこと此の如しと爲す。』佛の法を說きたまふ時、無量の人天衆は法淨眼と性地と信地とを得、百千の人有りて皆大空菩薩の大行を得たり。

菩薩敎化品第三

(一)佛に白して言さく、『世尊、十地の行を護る菩薩は、云何なる行をか行ずべく、云何なる行をもて衆生を化し、何なる相を以てか衆生を化すべき。』佛言はく、『大王、五忍は是れ菩薩の法なり。伏忍の上中下と、信忍の上中下と、順忍の上中下と、無生忍の上中下と、寂滅忍の上下とを名けて、諸佛菩薩の般若波羅蜜を修すと爲す。善男子、初めて相信を發す恆河沙の衆生は、伏忍を修行して、三寶の中に於て、習種性の十心を生ず。信心、精進心、念心、慧心、定心、施心、戒心、護心、願心、廻向心なり。是を菩薩の能く少分に衆生を化すと爲す。已に二乘の一切の善地を超過せり。一切の諸佛菩薩は十心を長養して聖胎と爲すなり。次第に乾慧を起し、性種性の十心あり。謂ゆる四の意止たる、身受心法は、不淨にして苦、無常にして無我なり。三の意止たる三善根は、慈と施と慧となり。三意止とは、謂ゆる三世の過去の因忍と、現在の因果忍と、未來の果忍となり。是菩薩は亦

說障道無畏の四。
【十八不共法】身口意に失なきと、異想、不定心、不知已捨心無きと、欲、精進、念、慧、解脫、解脫知見に減無きと、身口意の隨智慧行と智慧三世の無礙なるを知るとなり。
【法身】眞法を體とし妙解を軀となす故に法身といふ。
【大覺】覺中の極に名く。
【舍衛國】シュラーワスティ(Srāvasti)聞者城と譯す。拘薩羅國の都城。
【波斯匿王】プラセーナジット(Prasenajit)月光、勝軍等と譯す。
【四不壞淨】信佛信法信僧信戒の四不壞なり。
【摩訶衍の化等】月光所弘の大乘なり。
【寶等】寶は寶積蓋は月蓋、法は法賊、淨名は維摩詰

能く一切衆生を化するなり。已に能く我人知見衆生等の想を過ぎ、及び外道の倒想の壞する能はざる所なり。復十の道種性の地あり、謂ゆる色識想受行を觀じて、戒忍と知見忍と定忍と慧忍と解脫忍とを得るなり。三界の因果を觀ずるに、空忍と無願忍と無想忍とあり。二諦の虛實を觀ずるに一切の法の無常なるを無常忍と名く。一切の法は空なるをもて無生忍を得るなり。是菩薩は十堅心をもて轉輪王と作り、亦能く四天下を化し、一切衆生の善根を生ぜしむ。また信忍の菩薩は、謂ゆる善達明中の行者にして、三界の色煩惱の縛を斷じ、能く百佛千佛萬佛の國中を化するに、百身千身萬身を現じて、神通無量の功德あり。常に十五心を以て首と爲す。四攝法と四無量心と四弘願と三解脫門となり。是菩薩は善覺地より薩婆若に至るまで、此十五心を以て、一切の行の根本種子と爲す。又順忍の菩薩とは、謂ゆる見と勝と現法となり。能く三界の心等の煩惱の縛を斷ずるが故に、一身を十方の佛國の中に現じて、無量不可說の神通もて衆生を化す。又無生忍の菩薩とは謂ゆる遠と不動と觀慧となり。亦三界の心色等の煩惱習を斷ずるが故に、不可說不可說の功德神通を現ず。復次に寂滅忍とは、佛と菩薩と同じく此忍を用ひて、金剛三昧に入るなり。下忍の中に行ずるを名けて菩薩と爲し、上忍の中に行ずるを薩婆若と爲す。共に第一義諦を觀じて、三界の心習無明を斷じ、相を盡すを金剛と爲し、相と無相とを盡すを薩婆若と爲す。世諦と第一義諦との外に超度するを、第十一地の薩婆若と爲す。非有非無と覺り、湛然として淸淨なり。常住不變にして眞際に同じく法性に等し。無緣の大悲もて、一切衆生

【須菩提】スブーテ(Subhuti) 解空第一の弟子。【舍利弗】シャーリプトラ(Sariputra) 智慧第一の弟子。【彌勒】マイトレーヤ(Maitreya)慈氏と譯す。當來成佛の菩薩、兜率天に住す。【觀空品】諸佛菩薩無相の妙慧を以て無明の妙境を照すを明す。正しく護果を明す。【二】以下正宗分月光問答し護果の義を諮請するなり。【佛果を護る等】本品の護果經文なり。【十地の行を護る等】次の教化品にいふ護因の經文なり。【大事因緣】般若に言ふ窮理の寂を明說するなり。【四生】胎卵濕化の四生。【如】佛性法性正

を教化し、薩婆若乘に乘じて、來りて三界を化す。善男子、一切衆生の煩惱は、三界の藏を出でず。一切衆生の果報たる二十二根も三界を出でず、諸佛の應化の法身も亦三界を出でず。三界の外に衆生無し、佛は何の化する所ぞ。是故に我は言はく、「三界の外に別に一衆生界の藏ありとは、外道の大有經中の說にして、七佛の所說にあらず。」大王、我は常に一切衆生に語らく、「三界の煩惱の果報を斷じ盡せるをば名けて佛と爲し、自性清淨なるを覺薩婆若の性と名く。衆生の本業、是れ諸佛菩薩の本業にして、本修行せし所たり、五忍の中に十四忍を具足せりと」』佛に白して言さく、『云何が菩薩は本業清淨にして衆生を化するや。』佛言はく、『一地より乃至後の一地にいたるまで、自ら行ずる處と及び佛の行處と一切を知見するが故なり。本業とは、若し菩薩にして百佛國の中に住するときは、閻浮の四天王と作つて百の法門を修し、二諦平等の心もて一切衆生を化す。若し菩薩にして千佛國の中に住するときは、忉利天の王と作つて千の法門を修し、十善道もて一切衆生を化す。若し菩薩にして十萬佛國の中に住するときは、燄天王と作つて十萬の法門を修し、四禪定もて一切の衆生を化す。若し菩薩にして百億佛國の中に住するときは、兜率天王と作つて百億の法門を修し、道品を行じて一切の衆生を化す。若し菩薩にして千億佛國の中に住するときは、化樂天王と作つて千億の法門を修し、二諦と四諦と八諦ともて一切の衆生を化す。若し菩薩にして十萬億佛國の中に住するときは、他化天王と作つて十萬億の法門を修し、十二因緣の智もて一切の衆生を化す。若し菩薩に

道不二の異名なり【衆生等】衆生我人は顚倒法、常樂我淨は淸淨法、若し能く體すれば此の二畢竟空と知る故に如といふなり【知見壽者】意識を知、眼識を見、色心不斷を壽者といふ。【六度…一切行如】行空を明す。皆如の故に有なり。【二諦如】能觀の、みならず所觀も空なり。【一切の法性】諸法實相なり。【眞實空】二乘所解の空に非るなり【眞際】諸法實相に同じ。【無二無別】四生と常樂の四德と無二無別なりとの意【二】月光重ねて前義の衆生不可得なるを云何に化すべきやに就て請ふ【色如にあらず】色を折して後空なるに非ず色の體本

して百萬億佛國の中に住するときは、初禪王と作つて百萬億の法門を修し、方便智と願智もて一切の衆生を化す。若し菩薩にして百萬微塵數の佛國の中に住するときは、二禪の梵王と作つて百萬億阿僧祇微塵數の法門を修し、雙照の方便神通智もて一切の衆生を化す。若し菩薩にして百萬億阿僧祇微塵數の佛國の中に住するときは、三禪の大梵王と作つて百萬億阿僧祇微塵數の法門を修し、四無礙智を以て一切の衆生を化す。若し菩薩にして不可說不可說の佛國の中に住するときは、第四禪の大靜天王三界の主と作つて、不可說不可說の法門を修し、理盡三昧を得て佛の行處に同じて三界の原を盡し、一切衆生を敎化すること佛の境界の如くす。是故に一切菩薩の本業化行は淸淨なり。若し十方の諸の如來も、亦是業を修して薩婆若の果に登れば、三界の王と作つて一切の無量の衆生を化す。』

(二)爾時に百萬億恆河沙の大衆は各座より起ちて、無量不可思議の華を散じ、無量不可思議の香を燒き、釋迦牟尼佛及び無量の大菩薩を供養し、掌を合せて、波斯匿王の般若波羅蜜を說くを聽き、今佛前に於て偈を以て讃じて曰く、

世尊導師は金剛の體なり、心行寂滅にして法輪を轉じ
八辯の洪音もて衆の爲に說きたまふ。時に衆道を得たるもの百億萬なり
時に六天と人とは出家して、道に比丘衆と成つて菩薩を行ず
五忍の功德は妙法門にして、十四の正士は能く諦かに了れり
三賢と十聖とは忍の中に行じ、唯佛一人のみ能く原を盡したまふ

来空なるが故なり
【世諦】色諦心諦空諦の三種あり。
【三假】法受名の三假。
【性實なるが故】衆生の體即ち寂滅空なるなり。
【八聖】四向四果に名く。
【六十二見】諸陰有と計せば常見、無と計せば斷見にして、この斷常により六十二見を生ず。
【若し名を以て等】一切法は但名のみあつて實なし、乃至三乘四生等も亦然り、若しかく見ることを得ば是れ眞實見なり。
【三】般若の分別觀照について明す
【有法なりや等】有法ならば般若の照用辨ずべきも、既に是れ非有非無とせば照用辨じ難かるべしとなり摩訶衍は般若に名く
【非非法】非有非

佛と衆と法との海は三寶の藏にして、無量の功德中に攝在せり
十善の菩薩は大心を發して、長く三界苦輪の海に別る
中下品の善は粟散王となり、上品の十善は鐵輪王となる
習種は、銅輪二天下に、性種性は銀輪三天に
道種の堅德は轉輪王となり。七寶の金光は四天下にあり
伏忍の聖胎は三十人、十信と十止と十堅心となり
三世の諸佛は中に於て行じ、此伏忍に由て生ぜざるなし
一切の菩薩行の本原なり、是故に發心信心を難しとなす
若し信心を得れば、必らず退かず、進んで無生の初地の道に入り
衆生を教化して覺の中に行ず、是を菩薩の初發心と名く
善覺の菩薩は四天の王として、二諦平等の道を雙べ照す
權に衆生を化して百國に遊び、始て一乘無相の道に登り
理の般若に入るを名けて住と爲し、住して德行を生ずるを名づけて地と爲す
初住の一心に德行を足すれば、第一義に於て而も動ぜざるなり
離達の開士は忉利王として、形を六道の千國土に現じ
無緣無相にして第三諦なり、死も無く生も無く二照もなし
明慧の空照は炎天王として、形を萬國に應じて群生を導く

無なり、この故に一切を照らすことと虚空の如し。【非非法空】能観所観の空なるに名く。【六大】四大と空識なり。【生等】諸法集起の故に生、暫時還停を住、起らざるを滅、集起の故に有自體空の故に空といふ。【縁…諦】十二因縁、四諦なり、又縁を心空に、諦を境空に名く。【内も空等】以下十二空を述ぶ。【法集なるが故等】細色を以て麤色を成ずるをいふ。【受集等】四大の四塵を成ずるなり。【名集等】名句等聲を攬つて塵を成ずるなり。【因集等】煩惱業等縁に從つて集起するなり。【果集等】五陰等の報は結業より生

忍心は無二なり、三諦の中に有を出でて無に入り變化して生ず
善覺と離と明の三道の人は、能く三界の色の煩惱を滅し
還つて三界の身口の色を觀じて、法性第一なれば遺なく照す
炎慧の妙光は大精進なり、兜率天の王として億國に遊ぶ
實智は縁寂なり、方便道もて無生に達して空有を照し了る
勝慧は三諦自ら達して明かに、化樂天の王として百億の國あり
空空を諦觀して二相無く、六道に變化して入ること無間なり
法現の開士は自在の王たり、無二無照にして理空に達し
三諦現前して大智光あり、千億の土を照して一切を教ふ
焔と勝と法現とは無相の定もて能く三界の迷心の惑を洗ふ
空慧は寂然として縁觀なく、還つて心空を觀ずるに無量の報あり
遠達の無生は初禪の王として、常に萬億の土に衆生を教ふ
未だ報身を度せずんば一生在り、進んで等觀法流の地に入り
始めて無縁の金剛忍に入り、三界の報形永く受けず
第三義を觀じて二照なく、二十一生空寂を行とす
三界の愛習順道の定は、遠達の正士のみ獨り諦かに了す
等觀の菩薩は二禪の王たり、變生の法身は無量の光あり

ずるなり。
【十行の故等】十信より十地に至るに緣に從つて集起するを通じて十行等といふなり。
【佛果の故等】菩提涅槃は因行により得る故にいふ。
【諸法…動ぜず等】若し色を折して空を得しならんには是れ壞法なるも體に能く色を解せば是れ空にして不動なり。
【八萬四千の般若】賢劫經は修行度乃至分舍利度を三百五十度といひ、一度中に六度ありて合して二千百度、一度中に十善ある故二萬千度、四善根を以て之を分つて八萬四千の諸波羅蜜となるなり。
【名味句】一字を字二字を名、四字以上を句、句の所詮を味といふ。
【句句に非ず等】句相無き故に非句

百恆の土に入りて一切を化し、圓に三世恆劫の事を照す
返照と樂虛と無盡原とは、第三の諦に於て常に寂然たり
慧光の開士は三禪の王として、能く千恆に於て一時に現じ
常に無爲に在て空寂を行とし、恆沙の佛藏を一念に了す
灌頂の菩薩は四禪の王たり、億恆の土に於て群生を化し
始めて金剛に入りて一切を了し、二十九の生をば永く已に度す
寂滅忍中の下忍の觀にして、一たび轉ずれば妙覺常に湛然たり
等と慧と灌頂との三品の士は、前の餘習の無明の緣を除く
無明の習相の故煩惱は、二諦の理窮むるを以て一切盡す
圓智の無相は三界の王たり、三十生を盡して大覺に等し
大寂にして無爲なるは金剛藏なり、一切の報盡きて無極の悲あり
第一義諦は常に安隱にして、原を窮め性を盡して妙智を存す
三賢十聖は果報に住し、唯佛一人のみ淨土に居りたまふ
一切の衆生は暫く報に住し、金剛の原に登れば淨土に居す
如來の三業の德は極まり無し、我れ今月光三寶を禮す
法王は無上にして人中の樹なり、大衆を覆蓋して無量の光あり
口に常に法を說いて義無きに非ず、心智寂滅にして無緣を照したまふ

無何相の故に非非何なり。

【般若は句に非ず等】般若は智、句は文、智文皆無所有の故にいふ。

【四】上述の非を述べて是を顯はす

【三地に九の生滅】八九十地に皆三心ある故に九生滅なり。

【理盡三昧】十地の菩薩は照窮り因盡くるが故に理盡なり。

【有果も空等】若諸無相なるをいひ集諸無集なるを因空といふ菩提空なるを薩婆若空といひ、涅槃空なるを滅果空といふ。

【智緣滅】佛は正しく心を觀じて煩惱を滅するに名く

【非智緣滅】性本來清淨にして煩惱垢なき故觀行を用ひずして惑を滅するなり。

【法眼淨】小乘の見道なり、初めての

人中の獅子は衆の爲に說きたまへば、大衆歡喜して金華を散じ
百億萬の土は、六たび大いに動じ、含生の類も妙果を受く
天尊は快く十四の王を說きたまふ、是故に我れ今略して佛を歎じたてまつる

時に諸の大衆は、月光王の十四王の無量の功德藏を歎ずるを聞いて、大いなる法利を得たり。即ち座の中に於て、十恆河沙の天王と、十恆河沙の梵王と、十恆河沙の鬼神王と、乃至三趣とありて無生法忍を得、八部の阿須輪王は現に鬼身を轉じて天上に道を受け、三生にして正位に入る者あり、或は四生五生乃至十生にして正位に入ることを得、聖人の性を證して、一切無量の報を得たり。

(三)佛、諸の道果を得る實の天衆に告げたまはく、「善男子、是月光王は、已に過去の十千劫中の龍光王佛の法中に於て、四住の開士と爲り、我は八住の菩薩たり。今我が前に於て大師子吼すること是の如く是の如し。汝が言ふ所の如し。眞の義を得て、說くこと思議すべからず、度量すべからず。唯佛と佛とのみ乃ち斯事を知りたまふ。

善男子、其說く所の十四の般若波羅蜜の三忍と地地の上中下の三十忍とは、一切の行藏にして一切の佛藏なり不可思議なり。何を以ての故に。一切の諸佛も是中に生じ、是中に滅し、是中に化し、生も無く、滅も無く、化も無く、自も無く、他も無し、第一にして無二なり。化に非ず、不化に非ず、相に非ず、無相に非ず、來も無く、去も無く、虛空の如きが故に。一切の衆生は、生無く滅無く、縛解無く、因に非ず果に非ず、因果に非ざるに

四諦を證すること明白なるが故に名く。又初めて初地を證するにも名く。

【性地】十解以上に名く。

【信地】十信已下。

【大空】初地已上二空増長するをいふ。

【大行】初地已上八萬四千の諸度行なり。

【教化品】五忍十地に依り衆生を化する實智方便を明す。

【一】十地の行化相を明す。

【伏忍の上中下等】是れ得聖の方便行信忍は入聖の初門順忍は無生果の近縁、無生忍は向果の功能、寂滅忍は因果合說なり。

【相信】初發心にして未だ理を見ざる十信人なり。

【願心】勝果を求むる心。

【廻向心】菩提を求むる心。

も非ず。煩惱は我と人と知と見と受者となり。我所は一切の苦受の行空なるが故に。一切の法集は、幻化の五陰にして、合も無く散も無し。法は法性に同じく寂然として空なるが故に。法は境界空なり。空にして無相なれば、轉ぜず顚倒せず幻化に順ぜず、三寶も無く聖人も無く六道も無し。虚空の如くなるが故に、般若は知も無く見も無く、行にあらず緣にあらず、因にあらず受にあらず、一切の照相を得ざるが故に。行道、斯行道の相は虚空の如きが故に。法の相も是の如し、何ぞ心の得、無心の得有るべけんや。是を以て般若の功德は、衆生の中に行ずべからざるを行じ、五陰の法の中に行ずべからざるを行じ、境の中に行ずべからざるを行じ、解の中に行ずべからざるを行ず。是故に般若は不可思議なり。而も一切の諸佛菩薩は、中に於て行ずるが故に亦不可思議なり。一切の諸の如來の、幻化無住の法中に於て、化することも亦不可思議なり。善男子、此功德藏は、假使無量恒河沙の第十三灌頂の開士、是功德を說くとも、百千億分の中、王の所說の如きは、大海の一滴の如くならん。我れ今略して分義の功德を述ぶるに、大いに一切衆生を利益することあり。亦過去來今の無量の諸の如來の爲に述ぶる所は、三賢十聖の讃歎すること無量なりとも、是れ月光王の分義の功德なるべし。善男子、是十四の法門は、三世の一切の衆生、一切の三乘、一切の諸佛の修習する所なり。未來の諸佛も亦復是の如し。若し一切の諸佛菩薩は、此門に由らずして、薩婆若を得ば、是處あることなし。何を以ての故に。一切の佛及び菩薩は異路なきが故に。是故に一切諸の善男子、若し人あり諸忍の法門の信忍、

止忍、堅忍、善覺忍、離達忍、明慧忍、焰慧忍、勝慧忍、法現忍、遠達忍、等覺忍、慧光忍、灌頂忍、圓覺忍を開かば、是人は百劫千劫無量恆河沙の生生の苦難を超過し、此法門に入りて、『現身に報を得ん。』時に諸の衆中に、十億の同名の虛空藏海の菩薩ありて、歡喜し法樂して、各各散華し、虛空の中に於て變じて無量の華臺と成り、上に無量の大衆ありて十四の正行を說けり。十八の梵六欲天王も亦寶華を散じ、各虛空の臺上に座して十四の正行を說き、受持し讀誦して其義理を解せり。無量の諸の鬼神も、現身に般若波羅蜜を修行せり。

(四)佛、大王に告げたまはく、『汝は先に云何が衆生相を化すべきと言へり。若し幻化の身を以て幻化の者を見ば是れ菩薩の眞に衆生を行化するなり。衆生の識の初一念識も木石に異なり、生得の善、生得の惡あり。惡は無量の惡識の本たり、善は無量の善識の本たり。初の一念より金剛の終の一念にいたるまで、中に於て不可說不可說の識を生じて衆生の色心を成す。是れ衆生の根本なり。色をば色蓋と名け、心をば識蓋想蓋受蓋行蓋と名く。蓋とは陰覆を用と爲し、身をば積聚に名く。大王、此一色の法は無量の色を生ず。眼の所得を色と爲し、耳の所得を聲と爲し、鼻の所得を香と爲し、舌の得を味と爲し、身の得を觸と爲す。堅持するを地と名け、水を潤と名け、火を熱と名け、輕動を風と名け、五識を生ずる處を根と名く。是の如く一色一心に不可思議の色心あり。大王、凡夫の六識は麤なるが故に、假名の靑黃方圓等の無量の假の色法を得、聖人の六識は淨なるが故に、實法の色香

【意止】智慧を以て心を止住せしむるなり。四意止とは四念處、意は心にして身受等は所觀の境なり。

【我人…想を過ぎ】五陰無我と觀ずるが故なり。

【外道…壞す能はず】三世因果非斷非常と觀ずるが故なり。

【十堅心】上にいふ、五分法身、三空忍、及二諦の虛實を觀ずるなり。

【善達明】善は善覺忍、達は觀達忍、明は明慧忍なり。

【三解脫門】無漏の三三昧なり。

【見等】見は第四の炎慧地、勝は第五の難勝地、現法は第六の現前地なり。

【三界の…斷ず】、この三位は三界の心諸、無生無所得と觀じ、心相を取せざるが故に煩惱の縛を斷ずるなり。

【遠等】遠は遠行地、不動は不動地、觀慧は善慧地なり
【世諦…超度す】一切智は中道を證して一實諦の故に
【二十二根】眼等の六根、苦乃至捨の五、男女命の三、信乃至慧の五、三無漏根をいふ。
【諸佛…出でず】所化の衆生の故に
【二諦等】眞俗二諦無相一味なるを平等心といふ。
【二諦等】利他行相の眞俗二諦、四諦とは無作有作の四諦、八諦とは無常苦空無我と常樂我淨の八をいふ。
【三界の源等】無明は三界の源、この地よく無明を盡くすなり。
【二】大衆慶びて法利をうけて供養す。
【八辯の洪音】八辯は一最好、二易了、三調和、四柔濡、五不誤、六不妄、

味觸の一切の實の色法を得るなり。衆生とは世諦の名なり。若しくは有、若しくは無、但衆生の憶念より生ずるを名けて世諦と爲す。世諦は假誑幻化の故に有なり、乃至六道も幻化なり、衆生の見も幻化なり。幻化にして、幻化の婆羅門刹利毘舍首陀神我等の色と心とを見るを幻諦と名く。幻諦の法は、未だ佛の出世したまはざる前には、名字も無く義も無きを幻法と名く。幻化は名字も無く、體相も無く、三界の名字も無く、善惡の果報六道の名字も無し。

(五)大王、是故に諸佛は世に出現して、衆生の爲の故に、説いて三界六道の名字を作したまふ。是を無量の名字と名く。空法と四大法と心法と色法との如し。相續の假法は、一に非ず異に非ず。一も亦續かず異も亦續かず。一に非ず異に非ざるが故に相續諦と名く。相待の假法をば、一切相待と名け、亦は不定相待と名く。五色等の法と有と無と一切等法との如し。一切の法は皆緣より成り、假りに衆生を成す。倶時の因果、異時の因果、三世の善惡は一切の幻化なり。是れ幻諦の衆生なり。大王、若し菩薩も上の所見の如く、衆生も幻化なり、皆是れ假誑なり、空中の華の如し。十住の菩薩諸佛の五眼は、幻諦の如くに見て、菩薩の衆生を化することも此のごとしと爲したまふ。【二】

此法を説きたまふ時に、諸の無量の天子若び諸の大衆ありて、伏忍を得たるもの、空無生忍を得たるもの、乃至一地十地不可説の德行を得たるものあり。

洪倧慧、八深遠。七とは大音なり。

【粟散王等】瓔珞經に十善を修するに三あり上品は鐵輪、中品は粟散、下品は人王と。

【習種等】習種は十住、性種は十行、道種は十廻向の菩薩なり。

【十止】十行なり

【十堅心】十廻向なり。

【若し信心等】重ねて十住第七不退を讃ずるなり。

【開士】菩薩大士なり。

【第三諦】緣相を離れて空なるをいふ。

【空照】別教人の三地に於て人法二空に達し忍を成就するをいふ。

【忍心は無二】能觀の智有無二相を離る。

【遣なく照す】變化の色を觀じて法性に同ずる故に。

【炎慧の妙光】所

二諦品第四

(一)爾時、波斯匿王言さく『第一義諦の中に世諦有りや不や。若し無しと言はば、智は應に二なるべからず。若し有りと言はば、智は應に一なるべからず。一二の義、其事云何。』佛、大王に告たまはく『汝は過去七佛に於て、已に一義二義を問へり。汝今聽くこと無く我今說くこと無し。聽くこと無く說くこと無きを卽ち一義二義と爲すが故に、諦かに聽き諦かに聽きて、善く之を思念し、法の如くに修行せよ。七佛の偈も是の如し。』

無相の第一義は、自も無く他作も無し
因緣は、本より自ら有にして、自も無く他作も無し
法性は本より無性なり。第一義も空如なり
諸有は本より有法にして、三假の集は假有なり
無と無との諦は實に無なり、寂滅にして第一空なり
諸法は因緣の有なり。有無の義は是の如し
有と無とは本より自ら二なり、譬へば牛の二角の如し
照解すれば無二なりと見るも、二諦は常に卽せず
解心は不二なりと見る、二を求むるに不可得なり

二諦は一なりと謂ふに非ず、非二も何ぞ得べけんや
解に於ては常に自ら一にして、諦に於ては常に自ら二なり
此無二に通達すれば、眞に第一義に入る
世諦は幻化より起る、譬へば虚空の華の如し
影と三手との無なるが如く。因緣の故に誑有なり
幻化は幻化を見る、衆生を幻諦と名く
幻師は幻法を見れども、諦實は則ち皆無なり
名けて諸佛の觀と爲す、菩薩の觀も亦た然かなり

『大王、菩薩摩訶薩は、第一義の中に於て常に二諦を照して衆生を化す。佛と及び衆生とは、一にして而も二無し。何を以ての故に、衆生空なるを以ての故に、菩提の空に置くことを得、菩提空なるを以ての故に、衆生の空に置くことを得ればなり。一切の法は空なるを以ての故に。空も空なり。何を以ての故に。般若は無相にして二諦は虚空なり、般若空なれば、無明より乃至薩婆若にいたるまで、自相も無く他相も無きが故に。五眼成就する時は、見れども所見無し。行も亦受けず、不行も亦受けず。非行非不行も亦受けず、乃至一切の法も亦受けず。菩薩の未だ成佛せざる時は、菩提を以て煩惱と爲し、菩薩の成佛する時は、煩惱を以て菩提と爲す。何を以ての故に。第一義に於ては不二なるが故に。諸佛如來も乃至一切の法も如なるが故に。』

知障を斷ずることと炎の薪を燒くが如きをいふ。
【空空】空を以て空を遣するなり。
【法現】第六地菩薩の般若を圓滿せるをいふ。
【空慧等】緣空を境となす故に空慧行相寂靜にして能所緣相なき故に無緣觀なり。
【遠達の無生】最後邊は純ら眞如無生觀をなすに名く。
【等觀法流】雙觀の故に等といひ、功用の水なきに法流といふ。
【無緣の金剛忍】息相堅固の故に名く。
【二照なし】中道を得、第一義なるが故に。
【二十一生】初地より七地まで地に三世を分つて二十一生なり。
【愛習】無明習、愛佛の習あつて道定に違せざるを順道

道定といふ。【變生の法身】第七地に變易を受くるに名く。【返照等】返照とは過去七地前のことを照すをいひ、樂慮とは現在の事を緣ずるをいひ、無盡源は未來のことを照すをいふ。【慧光】第九善慧地の菩薩。【三十九の生】三十生中一生未だ盡きざる故に。【八部の阿須輪】四天王住下に羅睺、毘摩質多羅、般利毘樓閣、須彌山下に恐兜、富樓摩、下婆羅呵、兜卒樓と合して八部なり。【三】月光久しく多佛を供養せるを讃ず。【四住】十地中の第四炎地。【八住】不動地。【三忍】伏忍中の信止堅の三忍なり。【地地等】十地各上中下ありて三十

（三）佛に白して言さく、「云何が十方の諸の如來と一切の菩薩とは、文字を離れずして而も諸法の相を行ずるや。」「大王、法輪とは、法本も如なり。重誦も如なり。受記も如なり。不誦偈も如なり。無問自說も如なり。戒經も如なり。譬喩も如なり。法界も如なり。本事も如なり。方廣も如なり。未曾有も如なり。論議も如なり。是名味句も音聲も、果たる文字記句も一切如なり。若し文字を取るものは空を行ぜざるなり。

（三）大王、如如の文字を修するは、諸佛の智母なり。一切衆生の性、根本の智母を即ち薩婆若の體と爲す。諸佛の未だ成佛せざるときは、當佛を以て智母と爲し、未得を性と爲し、已得を薩婆若と爲す。三乘の般若は不生不滅にして自性常住なり、一切の衆生は、此を以て覺性と爲すが故に。若し菩薩は受も無く文字も無く、文字を離れて文字に非ざるにも非ず、修すれども修無きを文字を修するものと爲す。般若の眞性を得れば般若波羅蜜なり。大王、菩薩の佛を護り衆生を化するを護り、十地の行を護ることは此の若しと爲す。」

（四）佛に白して言さく、「無量の品の衆生なれば、根も亦無量なりや、行も亦無量なりや、法門は一と爲んや、二と爲んや、無量と爲んや。」

「大王、一切の法の觀門は、一に非ず二に非ず、乃至無量ならんや。一切の法は亦有相にあらず無相に非ざるに非ず。若し菩薩は衆生を見るに、一とも見二とも見、又は一とも見ず二とも見ず。一二とは第一義諦なり。大王、若しくは有、若しくは無とは即ち世諦なり。三諦を以て一切の法を攝す。空諦と色諦と心諦となり。故に我は一切の法は三諦を出

忍なり。

【法集】五陰の和合に名く。

【信忍…圓覺忍】順次に習種性性種性道種性初地乃至佛地をいふ。

【十八の梵】初禪に梵衆梵輔大梵、二禪に少光無量光光音、三禪に小淨遍淨無量淨、四禪に福生福愛廣果無想無煩無熱善現善見色究竟の九。

【四】第三問に答へて衆生所化の相を辨ず。

【初の一念…色心を成す】生死の内に於て無明の縁念念に生滅心を起すが故に不可說の識といふ、これ因にして衆生の色心を生ずるなり。

【五】佛の出世は衆生の爲に一切世界六道無量種種の色心等の名字を立つるを明す。

【相續の假法】諸法一とせば常見、

ですと說く。我も人も知も見も五受陰も空なり、乃至一切の法も空なり。衆生の品品根行の不同なるが故に、法門も一に非ず二に非ず。大王、七佛の摩訶般若波羅蜜を說きたまふと、我が今般若波羅蜜を說くとは、二も無く別も無し。汝等大衆、當に此經を受持し讀誦し解說すべし。功德無量不可說にして不可說の諸佛あらん、一一の佛は無量不可說の衆生を教化し、一一の衆生みな成佛することを得ん。是佛は復無量不可說の衆生を教化して皆成佛することを得しめん。是れ上の三佛の般若波羅蜜經を說きたまふとき八萬億の偈あり、一偈の中に於て、復分ちて千分と爲し、一分の中に於て、一分の句義を說くとも、窮盡すべからず。況んや復此經中に於て、一念の信を起さば、是諸の衆生は百劫千劫十地等の功德を超えん。何に況んや受持し讀誦し解說するものの功德をや。即ち十方の諸佛と等うして異りあること無けん。當に知るべし是人は即ち是れ如來なり、佛を得ること久しからじ。』時に諸の大衆此經を說きたまふを聞き、十億の人は三空忍を得、百萬億の人は大空忍の十地の性を得たり。

(五)『大王、此經を名けて、仁王問般若波羅蜜經と爲す。汝等は、般若波羅蜜經を受持せよ。是經に復無量の功德あれば、名けて護國土の功德と爲す。亦は一切の國王の法藥と名く。服行するに大用あらずといふこと無し。舍宅を護るの功德あり、亦一切衆生の身を護る。即ち、此般若波羅蜜は、是れ國土を護ること、城塹墻壁刀劍鉾楯の如し。汝應に受持せば般若波羅蜜も亦復是の如くなるべし。』

念念に異るとせば斷見、この二見を離れて前法生後後法と知るなり。【二諦品】先に幻化を以て衆生を化するを明すも、化は孤起することなく、所觀境界の教、即ち眞俗二諦有るを此品に辨ず。【二】諦不二なるを辨ず。【照解すれば無二等】佛菩薩は心內に諸法畢竟清淨空と達すればなり。【三手】三本の手を有する人間の意【常に二諦を照らして等】大悲の般若は衆生を化するに薩婆若を以てする故に生死にあるも著せず、大悲を以ての故に涅槃に住せざるなり。【二】說法不二なるを明す。【法本…論議】スートラ(Sutra)乃至ウパデーシヤ(Upadesa)まで所

佛說仁王般若波羅蜜經　卷下

姚秦三藏鳩摩羅什譯す

護國品第五

(一)爾時、佛、大王に告げたまはく、「汝等善く聽け、吾今正に國土を護る法用を說かん。汝當に、般若波羅蜜を受持すべし。國土亂れんと欲し、破壞し、劫燒し、賊來りて國を破らんと欲する時に當りて、當に百の佛像と百の菩薩像と百の羅漢像と百の比丘衆と四大衆と七衆とを請じて、共に、百の法師を聽請して、般若波羅蜜を講ぜしむべし。百の師子吼の高座の前に、百燈を燃し、百の和香を燒き、百種の色花を以て用ひて、三寶を供養し、三衣什物もて法師を供養し、小飯中食、亦復時を以てすべし。大王、一日二時に此經を講讀せよ。汝が國土の中に、百部の鬼神あり、是一一の部に復百部ありて、此經を聞かんことを樂ふ。此諸の鬼神は、汝が國土を護るべし。大王、國土亂るる時は、先づ鬼神亂る。鬼神亂るるが故に、萬民亂れ、賊來りて國を劫し、百姓亡喪して、臣と君と太子と王子と百官と共に是非を生ず。天地怪異にして、二十八宿星の道も日月も時を失し度を失し、多くの賊起ること有り。大王、若し火難水難風難一切の諸難あらば、亦應に此

經を講讀すべし。法用は上に說くが如し。大王、但に國を護るのみに非ず、亦福を護ることあり。富貴官位七寶を求めば、意の如く行來せん。男女を求め、慧解名聞を求め、六天の果報、人中の九品の果樂を求めんにも、亦此經を講讀すべし。法用は上に說くが如し。大王、但に福を護るのみに非ず、亦衆難を護るなり。若しくは疾病苦難、杻械枷鎖其身を檢繫し、四重の罪を破り、五逆の因を作し、八難の罪を作して六道の事を行じ、一切の無量の苦難にも、亦此經を講ぜよ。法用は上に說くが如し。

(一)大王、昔日王あり、釋提桓因と云ふ。頂生王來りて天に上り其國を滅ぼさんと欲す。時に帝釋天王即ち七佛の法用の如く、百の高座を敷き、百の法師を請じて、般若波羅蜜を講ぜしかば、頂生は即ち退けり。滅罪經の中に說くが如し。大王、昔天羅國に王有り。一りの太子ありて、王位に登らんと欲す。一に班足と名く。太子外道の羅陀師より教を受く、「千の王頭を取りて以て家神を祭らば、自ら其位に登るべし」と。已にして九百九十九王を得たれども一王を少けり。即ち北、萬里を行いて即ち一王を得たり、普明王と名く。其普明王、班足王に白して言さく、「願くば一日を聽せ。沙門に飯食せしめて、三寶を頂禮せん」と。其班足王は之を許すこと一日なり。時に普明王は、即ち過去七佛の法に依りて、百の法師を請じ、百の高座を敷き、一日二時に、般若波羅蜜の八千億の偈を講じ竟る。其第一の法師は、普明王の爲に偈を說いて言はく、

劫燒くること終に訖れば、乾坤も洞然たり

謂十二分教なり。

【三】三種佛性を明す。

【智母】因緣生の智は教を智母とす。且つ空は文字の如く、文字は空の如き故如如といふ。この如如に因り佛智を生ずるが故に智母といふ。

【性】佛性、意は衆生の身にありては佛性と名け、佛の身にありては一切智と名くるなり

【三乘の般若等】薩婆若を得れば正しく體を觀ずるを以て、生者生ぜず滅者滅せずと知る。故自性常住なり。

【四】法門不二を明す。

【一念の信を起さば等】一念無所得の薩婆若の信は有所得の百千劫に十地を修するに超ゆとなり。

【大空忍の十地性】無所得空にして初

須彌も巨海も、都て灰となつて燐けん
天龍も福盡きて、中に於て彫喪し
二儀すら倘ほ殞ぶ、國何の常かあらん
生老病死は、輪轉して際なし
事と願と違へば、憂悲して害を爲す
欲深ければ禍重し、瘡疣は外に無し
三界は皆苦なり、國に何の賴かあらん
有は本自から無なり、因緣もて諸を成す
盛なる者は必ず衰へ、實なるものは必ず虛し
衆生は蠢蠢として都て幻居の如し
聲も響も俱に空にして、國土も亦如なり
識神は形無く、假に四蛇に乘ぜり
無明の寶象、以て樂車と爲す
形には常の主なく、神には常の家なし
形神すら倘ほ離る、豈に國あらんや

爾時、法師此偈を說き已る時、普明王の眷屬は法眼空を得、王自らは虛空等定を證し、聞法悟解して、還つて天羅國班足王の所に至り、衆の中に於て、九百九十九王に告げて言

地已上の聖種性にあるをいふ。【五】經の名字と勸持とを讃ず。【護國品】所護の國土を明し、世間の利益を辨ず。この經によらば七難を除き災障起らざるが故に護國といふ。【一】護國の行法を明す。【百の佛像…百の法師】七種福田なり。【百の師子坐…小飯中食】六種供養の具なり。【什物】三衣鉢坐具剃刀褐子鳥子刀子漉水袋鉢袋針筒をいふ。【二十八宿】角亢氐房心尾箕東方宿なり。斗牛女虛危室壁北方宿なり。奎婁胃昴畢觜參西方宿なり。井鬼柳星張翼軫南方宿なり。【帝…九品果樂】九種福なり。

はく「命に就くの時到る。人人皆應に過去七佛の仁王般若波羅蜜經中の偈句を誦すべし」と。時に班足王は諸王に問うて言はく「皆何の法をか誦する」と。時に普明王は即ち上の偈を以て王に答ふ。王は是法を聞いて空三昧を得、九百九十九王も亦法を聞き已りて三空門定を證せり。時に班足王は極めて大いに歡喜して、諸王に告げて言はく「我、外道の邪師の爲に誤らる、君等の過に非ず。汝、本國に還りて、各法師を請じて、般若波羅蜜の名味句を講すべし」と。時に班足王は國を以て弟に付し、出家し道を爲めて、無生法忍を證せり。十王地の中に說くが如し。五千の國王も常に是經を誦して、現世に報を生ぜり。

(三)大王、十六大國の王の國を護るの法を修することも應に是の如くなるべし。汝當に奉持すべし。天上人中六道の衆生も皆應に七佛の名味句を受持すべし。未來世の中に無量の小國王有りて、國土を護らんと欲するも亦復爾り。應に法師を請じて般若波羅蜜を說かしむべし。『爾時、釋迦牟尼佛、般若波羅蜜を說きたまふ時、衆中の五百億の人は初地に入ることを得、復六欲の諸の天子八十萬人有りて性空地を得、復十八梵王ありて無生忍を得、無生法樂忍を得、復先に已に菩薩を學する者ありて、一地二地三地乃至十地を證し、復八部の阿須輪王ありて十三昧門を得、三の三昧門を得、鬼身を轉じて天上の正受を得、此會に在る者も皆自性信乃至無量空信を得たり。吾今略して天等の功德を說く、具には盡すべからず。

【九品の果樂】上品の上は道種性金輪王、中は性種性銀輪王、下は習種性銅輪王、中品の上は鐵輪王、中は粟散王、下は小國王、下品の上は刹利大姓、中は婆羅門、下は居士大家、合して九品也。
【八難の罪】疾病乃至五逆なり。
【五逆】殺父殺母殺眞人羅漢出佛身血破和合僧。
【二】昔喩を引いて今益の虛ならざることを明す。
【乾坤も洞然】天地通じて燒くるなり。
【二儀】陰陽即ち天地なり。
【事と願と違へば等】求むれど得ざるなり。
【因緣もて諸を成ず】因緣により空華等あるも假名にして實あることなし。
【盛なる者等】始

終空なり。
【衆生は蠢蠢として等】生空を明すとし【聲も等】相空を明す。
【四馳】四大に喩ふ。
【形】四大なり。
【法眼空】人空のこと、虛空等定は法空なり。
（二）勸持得益を明す。
【初地】十信の初心。
【性空地】十解なり。
【無生法樂忍】十廻向なり。
【十三昧門】十一切入のこと。
【自性信】四不壞信或は十信に名く。
【空信】初地に入るなり。或は種性已上に名く。
【散華品】物の供養を示して供養せしむるなり。卽ち十六國王上に般若の得益衆きを聞き慶喜して散華供養するに名く。

散華品第六

爾時、十六大國の王は、佛の十萬億の偈をもて、般若波羅蜜を說きたまへるを聞き、歡喜無量なり。卽ち百萬億の蓮華を散ずるに虛空の中に於て變じて一座と爲る。十方の諸佛は共に此座に坐して般若波羅蜜を說きたまふ。無量の大衆は、共に一座に坐し、金羅華を持して、釋迦牟尼佛の上に散ずるに、萬輪の華と成つて大衆の上を蓋ひ、復八萬四千の般若波羅蜜の華を散ずるに、虛空の中に於て變じて白雲の臺と成る。臺中の光明王佛は、無量の衆と共に、般若波羅蜜を說きたまふ。臺中の大衆は、雷吼華を持して、釋迦牟尼佛及び諸の大衆に散ず。復妙覺華を散ずるに虛空の中に於て變じて金剛城と作る。城中の師子吼王佛は、十方の佛と大菩薩と共に第一義諦を論じたまふ。時に城中の菩薩は、光明華を持して、釋迦牟尼佛の上に散ずるに、一の華臺と成り、臺中の十方の佛及び諸の天は、天華を釋迦牟尼佛の上に散ずるに、虛空の中に於て、紫雲の蓋と成り、三千大千世界を覆ふ。蓋中の天人は恆河沙の華を散ずるに雲の如くに下れり。時に諸の國王は、散華し供養し已りて、過去の佛、現在の佛未來の佛に般若波羅蜜を說きたまへと願ふ。一切の受持する者は、比丘比丘尼、信男信女の求むる所、意の如くにして、常に般若波羅蜜を行ぜよと願ふ。佛、大王に告げたまはく「是の如く是の如し。王の說く所の如く、般若波

羅蜜は應に說くべく應に受くべし。是れ諸佛の母なり、諸菩薩の母なり、神通の生處なり。』時に佛は王の爲に五の不思議神變を現じ、一華を無量華に入れ、無量華を一華に入れ、一佛土を無量の佛土に入れ、無量の佛土を一佛土に入れ、無量の佛土を一毛孔の土に入れ、一毛孔の土を無量の毛孔の土に入れ、無量の須彌と無量の大海とを芥子の中に入れ、一佛身を無量の衆生身に入れ、無量の衆生身を一佛身に入れ、六道身に入れ、地水火風身に入れたまふ。佛身も不可思議なり、衆生身も不可思議なり、世界も不可思議なり。佛の神足を現じたまふ時、十方の諸の天人は佛華三昧を得、十恆河沙の菩薩は現身に成佛し、三恆河沙の八部の王は菩薩の道を成じ、十千の女人は、現身に神通三昧を得たり。善男子、是般若波羅蜜は、三世の利益あり、過去には已に說き、現在には今說き、未來には當に說くべし。諦かに聽け諦かに聽け、善く之を思念して法の如くに修行せよ。』

受持品第七

（一）爾時に月光は心に念じて口に言さく、『釋迦牟尼佛を見たてまつれば無量の神力を現じたまひ、亦千華臺上の寶滿佛を見たてまつれば、是れ一切の佛の化身の主なり。復千華葉の世界の上の佛を見たてまつれば、其中の諸佛は各般若波羅蜜を說きたまふ。』佛に白して言さく、『是の如き無量の般若波羅蜜は、說くべからず、解すべからず、識を以て識るべ

【諸佛の母等】諸佛の母とは實相般若、菩薩の母とは觀照般若、神通生處とは文字般若を顯す。又般若は諸佛菩薩神通を生ずる故に母といふ。

【時に佛等】以下神力を明す。

【佛華三昧】華嚴三昧第十地の得なり。

【神通三昧】五神通なり。

【受持品】十三法師を明し、開いて奉行すれば爲に受け、久しくば失はざれば爲に持するを明す。

【一】十三法師を問答す。

【釋迦牟尼等】一に釋尊の神力を見るは法身佛、二に寶滿を見るは報身佛、三に千華の上の佛を見るは化身佛なり。

からず。云何ぞ諸の善男子は、是經の中に於て明了に覺解して、法の如くに一切の衆生の爲に空法の道を開かしめんとするや。「大牟尼言はく、『十三の觀門を修行する諸の善男子ありて大法王と爲り、習忍より金剛頂に至るまで皆法師たり、依持し建立す。汝等大衆は應に佛を供養するが如くに之を供養すべし、應に百萬億の天華天香を持し、以て奉上すべし。善男子、其法師とは、是れ習種性の菩薩なり。若は在家の婆差優婆差、若は出家の比丘比丘尼は、十善を修行して、自ら己身の地水火風空識は分分不淨なりと觀じ、復十四根を觀ず。謂ゆる五情と五受と男と女と意と命とに、等しく無量の罪過あるが故に、即ち無上菩提の心を發し、常に三界の一切の念念皆不淨なりと修するが故に、不淨忍の觀門を得、佛家に住在して六の和敬を修す。謂ゆる三業と同戒と同見と同學となり。八萬四千の波羅蜜の道を行ず。善男子、習忍以前に十善を行ずる菩薩に退あり進あり。譬へば輕毛の風に隨つて東西するが如く、是諸の菩薩も亦復是の如し。十千劫を以て十正道を行じ、三菩提心を發して、乃ち當に習忍の位に入り、亦常に三伏忍の法を學すと雖も、而も字もて名くべからず、是れ不定の人なり。是定の人は生空の位に入る。聖人の性なるが故に、必らず五逆六重二十八輕を起さざればなり。佛法の經書に反逆の罪を作りて佛說に非ずと言ふは、是處有ること無し。能く一阿僧祇劫を以て、伏道忍の行を修して、始めて僧伽陀位に入ることを得。

復次に性種性は十慧の觀を行じて、十顚倒を滅す。及び我人知見は分分に假僞なり、

【空法の道】人法の境に於て空慧を開發するをいふ。
【十三の觀門】三賢十聖なり。
【依持し建立す】衆の所依となり、能く衆を攝持して正法を建立するなり。
【習種性等】十三法師中第一法師を明す。
【五情】五根なり。
【五受】苦樂憂喜捨なり。皆是有漏なる故に無量罪過あり。
【生空位に入る】人空無我の解を得るなり。
【六重】殺等の四重に沽酒と四衆の罪過を說かざるとを加ふ。
【二十八輕】不供養父母師長乃至行路之時遇見病者不住瞻視方便付囑而捨去、優婆塞戒經に出づ。
【佛法の經書に等】佛說を非とし非佛

但名のみあり、但受のみあり、但法のみあり、不可得にして、定相無し、自他の相無きが故に、空觀を修護し、亦觀じ、亦百萬の波羅蜜を行じて、念念に心を去らしめず。二阿僧祇劫を以て、十正道の法を行じて波羅陀の位に住す。

復次に道種性は、堅忍の中に住して、一切の法は生無く住無く滅無しと觀ず。謂ゆる五受も三界も二諦も自他の相無し。如實の性にして不可得なるが故に、而も常に第十の第一義諦に入れば、心心寂滅なり。而も生を三界に受く。何を以ての故に。業習の果報未だ壞盡せざるが故に、道に順じて生ずるなり。復三阿僧祇劫を以て、八萬億の波羅蜜を修し、當に平等の聖人地を得べし。故に阿毘跋致の正位に住す。

復次に善覺の菩薩摩訶薩は、平等に住して四攝を修行し、念念に心を去らしめず、無相の捨に入りて、三界の貪煩惱を滅し、第一義諦に於て不二なるを法性の無爲と爲す。理を緣じて一切の相を滅するが故に、智緣滅にして無相無爲と爲す。初忍に住する時、未來の無量の生死は智緣に由らずして滅するが故に、非智緣滅にして無相無爲なり。自他の相無ければ無相なり、無相なるが故に無量の方便皆現前す。實相の方便を觀ずる者は、第一義諦に於て、沈まず出でず轉ぜず顚倒せざるなり。遍く方便を學ぶとは、證に非ず不證に非ず、而も一切を學す。回向方便とは、果に住するにも非ず、果に住せざるにも非ず、而も薩婆若に向ふ。魔自在方便とは、非道に於て佛道を行ずれば、四魔に動ぜられざるなり。一乘方便とは、不二の相に於て、衆生の一切の行に通達するなり。變化方便とは、願力を

説を實とする類。

【一阿僧祇劫等】善趣初心より滿心習種位に至る。

【僧伽陀位】習種性なり、義を以て翻せば離著地といふ。人我に著せざるを以てなり。

【十慧】教化品にいふ十止心なり。

【十顚倒】常樂我淨三煩惱三世執なり。

【波羅陀位】性種性なり、又所習の所行を堅に守して失はざるが故に守護度ともいふ。

【堅忍】前教化品中の十堅忍なり。

【生を三界に受く等】業習未だ盡きざるが故に三賢の菩薩は三途に生を受くるなり、而も無始の願を因とし大悲を緣として發願し三途に入つて衆生を教化するなり。

【阿毘跋致】アヴイヴルチカ（Avaivartika）不退と譯

す。
【證にあらず等】空有並に觀じて齊しく不二を行ずる故なり。又大小遍く學する故に一切を學するなり。
【果に住するに非ず等】人天二乘果に住せざるをいひ初地已上の四種果に住するを非不住果といふ。
【非道に於て等】魔に同じて佛道を行ずるなり。
【四魔】煩惱陰死天の四。
【不二の相等】唯大乘不二法門を行じて衆生を化するなり。
【鳩摩羅伽】童子地なり、生を以て佛家に在る故に離欲地とも勝惡魔地ともいふ。
【闍陀波羅】無畏地或は滿足と翻ず。
【三明の觀等】三世無生の故に無來無去無住處なり。
【伽羅陀】度邊と

以て、自在に一切の淨佛國土に生ずるなり。是の如く善男子、是れ初學の智なり。有無の相に於て而も不二なれば、是れ實智の照なり。功用の證せず沈まず出でず到らざるは是れ方便の觀なり。譬へば水と波とは、一にあらず異にあらざるが如し。乃至、一切の行波羅蜜と禪定と陀羅尼と不一不二なるが故に、一一の行成就し、四阿僧祇劫の行を以て行ずるが故に、此功德藏門に入る、三界業習の生なきが故に、故を畢へて新しきを造らず。願力を以ての故に、變化して一切の淨土に生ず。常に捨觀を修するが故に、鳩摩羅伽の位に登り、四大寶藏を以て常に人に投與す。

復次に德慧の菩薩は、四無量心を以て三行の瞋等の煩惱を滅し、中忍の中に住して一切の功德を行ずるが故に、五阿僧祇劫を以て大慈の觀心を行し、心常に現在前して、無相の闍陀波羅の位に入りて一切の衆生を化す。

復次に明慧の道人は、常に無相忍の中に三明の觀を行ずるを以て、三世の法は來も無く去も無く住處も無しと知り、心心寂滅す。三界の癡煩惱を盡して、三明の一切功德の觀を得るが故に、常に六阿僧祇劫に無量の明波羅蜜を集む。故に伽羅陀の位に入り、無相の行もて、一切の法を受持す。

復次に爾焰聖覺達の菩薩は、順法忍を修行して、五見の流に逆らひ、無量の功德を集めて、須陀洹の位に住す。常に天眼天耳宿命他心身の通達を以て、念念の中三界の一切の見を滅するなり。亦七阿僧祇劫に、五神通、恆河沙の波羅蜜を行ずるを以て、常に心を離

譯す。癡等の邊を度するなり。【爾焔聖覺達】爾焔とは智母に名け既に進みて思惟と斷ずるが故に覺達といふ。【五見の流に逆ふ】四地菩薩は能く五見煩惱の習氣を滅するが故に。【須陀洹】永く煩惱を斷じて初めて修無漏を得るをいふ。【順道忍】五地菩薩順忍の中品を修して如道と隨順して觀ずるなり。【內道論等】十二部經をいひ、外道論とは四韋陀をいふ。【三界の疑等の煩惱】一身見二戒取三疑にして人我久しく盡くされば二惑も亦除かれ始めて疑を除くなり、疑は心煩惱にして功用は三界を以て本となすなり。漏盡無畏を明す。

れず。

復次に勝達の菩薩は、順道忍に於て四無畏を以て、那由他の諦と內道論と外道論と藥方と工巧と咒術とを觀るが故に、我は是れ一切智人なり、三界の疑等の煩惱を滅するが故に我相已に盡せり。地地に所出あることを知るが故に、出道と名く。所不出あり故に障道と名く。三界の疑に逆らひ、無量の功德を修集するが故に、卽ち斯陀含の位に入る、復八阿僧祇劫の中に集行して、諸の陀羅尼門を行ずるが故に、常に無畏觀を行じて心を去らしめず。

復次に常現の眞實は、順忍の中に住して中道の觀を作し、三界の集因集業の一切の煩惱を盡すが故に、有にあらず無にあらず、一相無相にして無二なりと觀ずるが故に阿那含の位を證す。復九阿僧祇劫に於て、昭明の中道を集むるが故に、樂力もて、一切の佛國土に生ず。

復次に玄達の菩薩は、十阿僧祇劫の中に無生法樂忍を修する者を名けて縛忍となす。一切の道に順じて生じ、而も一心の忍中に、三界の集因業果を滅し、後身の中に住して、無量の功德の行みな成就し、無生智と盡智と五分法身と皆滿足して、第十地の阿羅漢梵天の位に住す。常に三の空門の觀を行じ、百千萬の三昧を具足して法藏を弘化す。

復次に等覺とは、無生忍の中に住して、心心の寂滅を觀ずれども、而も無相の相、無身の身、無知の知なり。而して心を用ひて群方の方に乘じ、憺泊にして無住の住に住し、有に在れども常に空を修し、空に處すれども常に萬化す。雙べて一切の法を照すが故に、是

【地地に所出等】盡苦道無畏を明す。
【所不出等】障道無畏なり。
【斯陀含】一來といひ欲色界修道の六品を斷ずるなり。三品餘あるが故に人天中に一往來す。
【頓忍中に住す等】六地菩薩の無所得觀を作すを明す。
【集因集業等】業は斷ずべからざるも煩惱を斷ずれば業因自ら滅するなればなり。
【阿那含】不還と譯し、五下分結を斷じて欲界に還へらざるなり。
【無生法樂忍】七地に無生を得て始めて法の神に適ふを證するなり。
【後身の中等】三界の繫業分段の窮するに名く。
【心心の寂滅等】無所得心なり。
【無相の相】八地無功用の相なり。
【無身の身】八地

處非是處乃至一切智の十力觀を知るが故に、摩訶羅伽の位に昇り、一切の國土の衆生を化し、千阿僧祇劫に十力の法を行じ、心心相應して常に見佛三昧に入る。

復次に慧光の神變は、上上の無生忍に住して心心の相を滅す。法眼は一切の法を見、淨の三眼は色と空とを見、大願力を以て常に一切の淨土に生ず。萬阿僧祇劫に無量の佛光三昧を集めて、而も能く百萬恆河沙の諸佛の神力を現じ、婆伽梵の位に住して、常に佛華三昧に入る。

復次に觀佛の菩薩は、寂滅忍に住するものの、始めて發心せしより今に至るまで、百萬阿僧祇劫を經て、百萬阿僧祇劫の功德を修するが故に、一切の法解脫に登りて金剛臺に住す。

(三)善男子、習忍より頂三昧に至るまで、皆名けて一切の煩惱を伏すと爲す。而も無相の信もて一切の煩惱を滅し、解脫の智を生じて第一義諦を照すは、名けて見と爲さず、謂ゆる見とは是れ薩婆若なり。是故に我昔より以來、常に唯佛のみ知見し覺りたまふ所なりと說く。頂三昧より以下習忍に至るまでは、知らず見ず覺らざる所なり。唯佛のみ頓に解したまふ。名けて信と爲さず、漸漸に伏する者なり。慧は起滅すと雖も、能生無く、滅無きを以てなり。此心若し滅すれば、則ち果として滅せざる無し。無生無滅にして、理盡金剛三昧に入れば、眞際に同じく法性に等し。而も未だ無等の等に等しきこと能はざるなり。譬へば人あり、大高臺に登つて、下の一切を觀るに、斯く了せざる無きが如し。理盡三昧

に住するも亦復是の如し、常に一切の行を修して功德藏を滿じ、婆伽度の位に入つて、亦復常に佛慧三昧に住す。善男子、是の如く諸の菩薩は皆能く一切十方の如來の國土の中に於て、衆生を化して正しく正義を說き、實相を受持し讀誦し解達して、我が今日の如く等うして異あること無し。』

(三)佛、波斯匿王に、告げたまはく『我が滅度の後、法の滅せんと欲する時に當りて、是般若波羅蜜を受持し、大いに佛事を作さん。一切の國土の安立し、萬姓の快樂ならんことは、皆般若波羅蜜に由れり。是故に諸の國王に付囑して、比丘比丘尼清信男清信女に付囑せず。何を以ての故に。王力無きが故に。故に付囑せざるなり。汝は當に受持し讀誦して、此經の義理を解すべし。大王、吾が今化する所は、百億の須彌と百億の日月となり。一一の須彌に四天下あり。其南閻浮提に十六の大國と五百の中國と十千の小國とあり。其國土の中に七つの災難あり。一切の國王は、是難の爲の故に、般若波羅蜜を講讀せば、七難即ち滅し、七福即ち生じ、萬姓安樂にして帝王歡喜せん。云何が難と爲す。日月度を失し、是節反逆し、或は赤き日出で、黑き日出で、二三四五日出で、或は日蝕して光無く、或は日輪の一重なると二三四五重の輪現はる、變怪の時に當りて此經を讀說せよ。一難と爲すなり。二十八宿度を失し、金星彗星輪星鬼星火星水星風星刀星南斗北斗五鎭の大星一切國の主星と三公星と百官星と、是の如きの諸星各各變現するとき、亦此經を讀說せよ。二の難と爲すなり。大火の國を燒いて萬姓燒き盡され、或は鬼火龍火天火山神火人

無功用の法身なり【群方の方】類聚を以て方となく物の在處に隨つて化するなり。

【摩訶羅伽】大臣と翻ず、空有並に觀じ化行佛に參ずるが故に。

【具佛三昧】念佛三昧を證するなり

【慧光等】慧は般若、光は法身、神變は解脱なり、即ち善慧地なり。

【心心の相を滅す】心の自性を滅するを滅心、心所を滅するを滅相といふ。

【三眼】肉天慧の三、肉天は麁細の色、慧は空を見るなり。

【婆伽梵】世尊と翻ず、又破淨地ともいふ。

【佛華三昧】首楞嚴三昧なり。

【觀佛】法雲地なり。

【二】顯勝を校量して行の分齊を彰はす。

【無相の信】初地より三地に至る信忍位中なり。【無等の等等】未だ佛と等しからざるなり。【婆伽度位】施德地といふ、又能く雲を以て說法を雨らす故に破度地ともいふ。【佛慧三昧】定慧具足するが故に名く。【三】以下勸持供養を明す。【吾が今化する等】般若弘化の說所を明す。【是の般若波羅蜜等】以下般若の德能く七難を滅するを明す。【心識の神本】般若は無所得にして諸佛の因を以て般若無所得と悟り、又是れ佛母の故に本となすなり。【國王の父母】般若の國土を護ること父母の如し。【神符】如實の境

火樹木火賊火あらば、是の如きの變怪にも亦此經を讀說せよ。三の難と爲すなり。大水百姓を漂沒し、時節反逆し、冬の雨あり夏の雪あり、冬の時に雷電霹靂し、六月に氷霜雹を雨らし、赤水黑水靑水を雨ふらし、土山石山を雨ふらし、沙礫石を雨ふらし、江河逆さまに流れ、山を浮べ石を流す、是の如き變の時にも亦此經を讀說せよ。四の難と爲すなり。大風吹いて萬姓を殺し、國土山河樹木一時に滅沒し、時ならずして大風黑風赤風靑風天風地風火風ふく、是の如く變ずる時にも、亦此經を讀誦せよ。五の難と爲すなり。天地國土は亢陽として炎火洞然たり、百草亢旱して五穀登らず。土地赫然として萬姓滅盡す。是の如き變の時にも亦此經を讀說せよ。六の難と爲すなり。四方より賊來りて國を侵し、內外に賊起り、火賊水賊風賊鬼賊ありて、百姓荒亂し刀兵劫起る。是の如く怪の時にも亦此經を讀誦せよ。七の難と爲すなり。大王、是般若波羅蜜は、是れ諸佛菩薩、一切衆生の心識の神本なり。一切の國王の父母なり。亦は神符と名け、亦は辟鬼珠と名け、亦は如意珠と名け、亦は護國珠と名け、亦天地鏡と名け、亦は龍寶神王と名く。」

佛、大王に告げたまはく、「應に九色の幡の長さ九丈なると九色の華の高さ二丈なると千支の燈の高さ五丈なると九玉の箱と九玉の巾とを作るべし。亦七寶の案を作つて經を以て上に置くべし。若し王行かん時は、常に其前の足一百步の所に於て、是經は常に千の光明を放ち、千里の內をして七難起らず、罪過をして生ぜざらしめん。若し王住する時は、七寶の帳を作りて、中の七寶の高座に經卷を以て上に置き、日日に供養し、散華燒香して、

界に通達して天魔外道を伏し、世出世の善根悉く守護する故に名く。

【辟鬼珠】鬼神の難を除くが故なり

【如意珠】般若の力よく國土を安穩ならしむる故に。

【天地鏡】般若は世界を照らして無所有なるが故に。

【龍寶神王】般若能く諸善神を出すが故に。

【幡乃至七寶の案】六種供養なり。

【四】此の經を受持すべきを明し、諸國王に付囑するを述ぶ。

【憍薩羅國…波提國】十六國を列ぬるなり。

【四大四色の勝出の相】八勝處觀を成ずる故に勝出相なり。八勝處とは地水等能造の四大と青黃等所造の四大なり。

父母に事ふるが如く帝釋に事ふるが如くせよ、大王、我れ今五眼を以て、明かに三世を見るに一切の國王は皆過去に五百の佛に侍ふるに由りて、帝王の主と爲ることを得たり。是故に一切の聖人羅漢は、爲に彼國に來り生じて大利益を作さん。若し王の福盡ん時には、一切の聖人は皆捨て去らん。若し一切の聖人去らん時は七難必らず起らん。大王、若し未來世に諸の國王有りて三寶を護持せば、我は五大力の菩薩をして、往いて其國を護らしめん。一に金剛吼菩薩は、手に千寶相の輪を持て、往いて彼の國を護り、二に龍王吼菩薩は、手に金輪燈を持て、往いて彼國を護り、三に無畏十力吼菩薩は、手に金剛杵を持て、往いて彼國を護り、四に雷電吼菩薩は、手に千寶の羅網を持て、往いて彼國を護り、五に無量力吼菩薩は、手に五千の劍輪を持て、往いて彼國を護らん。是五大士は、五千の大神王なり。汝が國中に於て、大いに利益を作さん。當に形像を立てて之を供養すべし。

(四)大王、吾今三寶を以て汝等一切の諸王に付囑す。憍薩羅國と舍衛國と、摩竭提國と波羅㮈國と迦夷羅衛國と鳩尸那國と鳩睒彌國と鳩留國と罽賓國と彌提國と伽羅乾國と乾陀衛國と沙陀國と僧伽陀國と揵如掘闍國と波提國と、是の如き一切の諸國王等は、皆應に般若波羅蜜を受持すべし。時に諸の大衆及び阿須輪王は、佛の未來世に七つの畏るべきことあるを說きたまふを聞き、身毛爲に堅ち、聲をあげ大いに叫んで言はく、「願くば彼國に生ぜざらん」と。時に十六大國の王は、卽ち國事を以て弟に付して出家し、道を修して四大四

【四大…識】十一切入觀なり。
【緣觀中道華】緣覺中乘の華なり。
【三十七品華】聲聞華。
【道迹果を證す】初地解滿足を得るなり。
【妙覺三昧】理盡三昧なり。
【圓明三昧】照理盡くるなり。
【世諦三昧】凡夫の所見に約じて定相を明すなり。
【眞諦三昧】二乘所見の偏眞に明すなり。
【第一義諦三昧】中道第一義にして亦實相三昧ともいふ。
【王三昧】一切の三昧を總攝すること王の能く統領するが如し。
【七財三昧】信戒慚愧多聞智慧捨離なり。
【二十五有三昧】無垢三昧を得て地獄有を破し乃至我

色勝出の相を觀ず。四大四色不用識の空は入の行相にして、三十忍の初地の相、第一義諦は九地の相なり。是故に大王は凡夫の身を捨てて六住の身に入り、七報身を捨てて八法身に入り、一切の行般若波羅蜜を證せり。十八の梵天、阿須輪王は、三乘の觀を得て、無生の境に同じ、復空華と法性華と聖人華と順華と無生華と法樂華と金剛華と緣觀中道華と三十七品華とを散華し供養して、佛の上及び九百億の大菩薩衆に散じ、其餘の一切の衆は、道迹果を證して、心華と空華と心樹華と六波羅蜜華と妙覺華とを散じ佛の上及び一切衆に散じ、十千の菩薩は、來世の衆生を念じて、卽ち妙覺三昧と圓明三昧と金剛三昧と世諦三昧と眞諦三昧と第一義諦三昧とを證せり。此三諦の三昧は、是れ一切の三昧の王三昧なり。亦無量の三昧を、七財三昧二十五有三昧一切行三昧を得たり。復十億の菩薩ありて金剛頂に登り、現に正覺を成じたまへり。』

囑累品第八

(一)佛、波斯匿王に告げたまはく『我汝等を誡勅す。我が滅度の後、八十年八百年八千年の中に、佛も無く法もなく僧もなく信男も無く信女も無き時あらん。此經と三寶とを、諸の國王と四部の弟子とに付囑す、受持し讀誦し解義せよ。三界の衆生の爲に空慧の道を開き、七賢の行と十善の行を修して一切の衆生を化せよ。

三昧を得て非想處を斷ずる等所謂二十五有を壞するなり。

【嘱累品】如來愍懃に諸國王並に衆菩薩に此經嘱寄するを明す。

【一】月光に總じて流通を勸め以て嘱累するを明す。

【七賢行】五停心觀別想總想念處煖頂忍世第一法なり

【二】七門を擧げて諸國王及四部の弟子を誡む。一に人の出家障ふるを得ざるを明す。

【五濁】衆生濁命濁見濁煩惱濁劫濁なり。

【吾が道を壞亂せん等】次に俗官の僧を治するを得ざるを明す。

【法末の世の中に等】比丘を繫縛すること獄囚の法の如くなるを得ざるを述ぶ。

【我滅度の後等】四部衆國王等を誡

（二）後の五濁の世には比丘比丘尼四部の弟子天龍八部一切の神王國王大臣太子王子は、自ら高貴を恃んで吾が法を滅破し、明かに制法を作りて我が弟子の比丘比丘尼を制し、出家して道を行ずることを聽さず、亦復佛像の形も佛塔の形も造作することを聽さず、統官を立てて衆を制し、籍を安じて僧を記し、比丘をば地に立て白衣をば高座せしめ、兵奴は比丘となつて別請の法を受け、知識の比丘も共に心を一にすることを爲し、親善の比丘も爲に齋會を作して、福を求むること外道の法の如くならば、都て吾が法にあらず。當に知るべし、爾時に正法の將に滅せんこと久しからざらん。

大王、吾が道を壞亂せんこと、是れ汝等が作す所ならん。自ら威力を恃んで、我が四部の弟子を制せば、百姓疾病して苦難せずといふこと無けん。是れ破國の因緣なり。五濁の罪を說くこと劫を窮むれども盡きず。

大王、法末世の時に諸の比丘四部の弟子あらんに、國王大臣は各非法の行を作して、横に佛と法と衆僧との與に大非法を作し、諸の罪過を作り、法に非ず律に非ずして比丘を繫縛し、獄囚の法の如くならば、爾時は法滅すること久しからざらん。

大王、我が滅度の後、未來世の中に四部の弟子、諸の小國の王、太子、王子の乃ち是れ住持して三寶を護らんものにして、轉た更に三寶を滅破すること、師子の身中の蟲の、自ら師子を食ふが如くならば、外道に非ざれども多く我が佛法を壞すれば大なる罪過を得るなり。正教衰薄にして、民に正行なく、漸く惡を爲すを以て、其壽日に減じて百歳に

む、皆是佛法を任持するの人なり。

【未來世の中の等】國王太子四衆に制戒を立つること兵奴法の如く、統官もて人を治むること俗法の如くんば、佛法久しからずして滅すべきを誡む。【未來世…諸小國王等】小國四衆を誡めて非法得罪を爲さざらしむるを明す。【此經を流通せば等】第七に諸比丘

至らん時、人は佛教を壞して復孝子なく、六親不和にして天神も祐けず、疾疫の惡鬼日に來つて侵害し、災怪首尾し連禍縱横ならん。死しては地獄餓鬼畜生に入り、若し出でて人とならば兵奴の果報たること、響の聲に應ずるが如く、人の夜書するに火滅するも字存するが如くならん。三界の果報も亦復是の如し。

大王、未來世の中の一切の國王太子王子四部の弟子は、横に佛弟子の與に制戒を書記し、白衣の法の如く兵奴の法の如くせん。若し我が弟子、比丘比丘尼にして籍を立てて官の爲に使はるれば、都て我が弟子に非ず、是れ兵奴の法なり。統官を立てて僧典を攝し、僧の籍を主どる大小の僧統共に相攝縛せんこと、獄囚の法、兵奴の法の如し。爾時に當つて佛法久しからざらん。

大王、未來世の中の諸の小國の王、四部の弟子にして、自ら此罪を作し破國の因縁とし、自ら之を受けば、佛法僧に非ず。

大王、未來世の中に此經を流通せば、七佛の法器たり、十方の諸佛の常に行道したまふ所なり。諸の惡比丘は、多く名利を求めて、國王太子王子の前に於て、自ら佛法を破るの因縁と國を破るの因縁を說かんに、其王別まへずして此語を信聽し、横に法制を作つて佛の戒に依らずんば、是を破佛破國の因縁と爲す。爾時に當つて正法久しからざらん。〔二〕

〔三〕爾時、十六大國の王は、佛の七たび誡めて說きたまふ所の未來世の事を聞き、悲啼涕出づ。其聲三千を動かし、日月五星二十八宿は光を失して現ぜず。時に諸の王等は、各

七佛教に依らずして佛法に依託し世の名利等を求め自ら破佛の因縁を説くを誡む。【三】諸國王佛の七誡を聞いて四衆を制せざるを誓ふを明す。

至心に佛語を受持し、四部の弟子の出家行道を制せずして當に佛の教の如くなるべし。爾時大衆、十八の梵天王、六欲の諸天子歎じて言はく、『爾時に當りて世間空虚にして是に無佛の世とならん。』爾時、無量の大衆の中に百億の菩薩あり、彌勒師子月等と、百億の舍利弗須菩提等と五百億の十八の梵王六欲の諸天と、三界六道と阿須輪王等は、佛の說きたまへる護佛果の因緣と護國土の因緣とを聞いて、歡喜すること無量なり、爲に佛に禮を作して般若波羅蜜を受持せり。

佛說仁王般若波羅蜜經　終

金剛般若波羅蜜經

經典部
第四卷

金剛般若波羅蜜經

姚秦天竺三藏鳩摩羅什譯す

(一)是の如く我聞けり。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に在したまふ。大比丘衆千二百五十人と倶なり。

爾時に世尊、食時に衣を着け鉢を持して、舍衞大城に入りて食を乞ひ、其城中に於て次第に乞ひ已りて、還りて本處に至り飯食し訖りて衣鉢を收め足を洗ひ已りて座を敷いて坐したまへり。時に長老須菩提は、大衆の中に在り、即ち座より起ち、偏に右の肩を袒ぬぎ、右の膝を地に著け、合掌恭敬して、佛に白して言さく『希有なり、世尊、如來は善く諸の菩薩を護念し、善く諸の菩薩を付囑したまふ。世尊、善男子善女人の阿耨多羅三藐三菩提心を發さんものは、應に云何が住し、云何が其心を降伏すべきや。』佛言はく、『善い哉善い哉。須菩提、汝が說く所の如く、如來は善く諸の菩薩を護念し、善く諸の菩薩に付囑したまふ。汝いま諦に聽け、當に汝が爲に說くべし。善男子善女人にして阿耨多羅三藐三菩提心を發さんものは、應に是の如く住し、是の如く其心を降伏すべし。』『唯然り、世尊、願くば樂んで聞かんと欲す。』

(二)佛、須菩提に告げたまはく、『諸の菩薩摩訶薩は、應に是の如く其心を降伏すべし。有ゆ

【一】序分を述ぶ。【舍衞國】シュラーヷスティ(Srāvasti)拘薩羅國の都城。【祇樹給孤獨園】ジェータヷナ・アナータピンダダ・アーラマ(Jetavana-anāthapindada-ārāma)所謂祇園精舍なり。【長老】智德ある僧。【須菩提】スブーチィ(Subhūti)善吉と譯す、佛弟子中解空第一と稱せらる。【阿耨多羅三藐三菩提】アヌッタラサムヤクサンボデイ(Anuttara-samyak-smbodhi)無上正偏知、無上正等正覺と譯す。佛の覺智なり。【二】以下正宗分、先づ伏すべき心相を明す。【有色等】欲界と色界の衆生を云ひ、無色とは無色

界に於ける、其の心禪定と相應したる衆生に名く。

【有想等】第四禪中の無想天を無想、無色界の最後天に名けて非有想非無想といひ、この二處を除いて三界に通ずるに有想といふ。

【實に衆生…得るものなし】不顚心を明すなり。

【三】無住無所得に住して妙行を修すべきを明す。

【色に住せずして等】布施に三種、即ち一自身に著せずして布施を行じ、二無所住にして布施を行じ、三六塵に住せずして布施を行ずる中の第三施に當る、是れ果報に著せざるなり。

【相に住せずして布施せば等】有所得心もて種々修行を積むも道に乖く故福多からず、今

る一切衆生の類、若しくは卵生、若しくは胎生、若しくは濕生、若しくは化生、若しくは有色、若しくは無色、若しくは有想、若しくは無想、若しくは非有想、若しくは非無想なるもの、我皆無餘涅槃に入れて之を滅度せしむ。是の如く無量無數無邊の衆生を滅度すれども、實には衆生の滅度を得る者無し。何を以ての故に。須菩提、若し菩薩にして我相、人相、衆生相、壽者相あらば、即ち菩薩にあらざればなり。

(三)復次に、須菩提、菩薩は法に於て應に住する所無くして布施を行ずべし。謂ゆる色に住せずして布施し、聲香味觸法に住せずして布施するなり。須菩提、菩薩は應に是の如く布施して相に住せざるべし。何を以ての故に。若し菩薩にして相に住せずして布施せば、其の福德思量すべからざればなり。須菩提、意に於て云何。東方の虛空は思量すべきや不や。』『不、世尊。』『須菩提、南西北方四維上下の虛空は思量すべきや不や。』『不、世尊。』『須菩提、菩薩の相に住せざる布施の福德も、亦復是の如く思量すべからず。須菩提、菩薩は但應に敎ふる所の如く住すべし。

(四)須菩提、意に於て云何。身相を以て如來を見たてまつるべきや不や。』『不、世尊。身相を以ては如來を見たてまつることを得べからず。何を以ての故に、如來の說きたまへる身相は、即ち身相に非ざればなり。』佛、須菩提に告げたまはく、『凡そ有ゆる相は、皆是れ虛妄なり、若し諸相は相に非ずと見ば、則ち如來を見たてまつらん。』

(五)須菩提、佛に白して言さく、『世尊、頗し衆生有りて是の如きの言說章句を聞くことを得

無所得の施は道と相應せば福多きなり。

【四】無所住にして如來を見るを說く。

【身相を以て等】生住滅の三相もて如來の無爲法身は見得べからずとなり。

【身相に非ず】法身無爲の相をいふ。

【凡そあらゆる相等】是皆憶想分別の有なるが故に虛妄なり。

【五】正信希有なるを明す。

【頗し衆生等】修行するも所行なく、無所得にして菩提を得と雖も實に所得なければ此事信じ難きを以て問ふなり。

【後の五百歲】像法時なり。

【持戒修福】持戒は出家、修福は在家なり。

【此を以て等】無

て、實の信を生ずるや不や。』佛、須菩提に告げたまはく、『是說を作すこと勿れ。如來の滅後、後の五百歲、持戒修福の者あり、此章句に於て能く信心を生じ、此を以て實と爲さん。當に知るべし、是人は、一佛二佛三四五佛に於て、善根を種ゑず、已に無量千萬億の佛の所に於て、諸の善根を種う。是章句を聞いて、乃至一念も淨信を生ずるものは、須菩提、如來の悉く知り悉く見たまふ所なり。是諸の衆生は、是の如きの無量の福德を得ん。何を以ての故に。是諸の衆生は、復我相人相衆生相壽者相無く、法相も無く亦非法相も無ければなり。何を以ての故に。是諸の衆生にして若し心に相を取らば、則ち我人衆生壽者に著すと爲し、若し法相を取るも、卽ち我人衆生壽者に著すればなり。何を以ての故に。若し非法相を取るも、卽ち我人衆生壽者に著すればなり。是故に法を取るべからず、非法をも取るべからず。是義を以ての故に、如來は常に「汝等比丘、我が說法は筏の喩の如し、法すら尙應に捨つべし、何に況んや非法をや」と說きたまふ。

(六)須菩提、意に於て云何。如來は阿耨多羅三藐三菩提を得たまふや。如來に所說の法有りや。』須菩提言さく、『我が佛の所說の義を解するが如きは、定法の阿耨多羅三藐三菩提と名くるもの有ること無し。亦如來の說きたまふべき定法有ること無し。何を以ての故に。如來の說きたまふ所の法は、皆取るべからず說く可らず、法にも非ず非法にも非ず。所以は何ん。一切の賢聖は皆無爲法を以て而も差別あればなり。』

(七)『須菩提、意に於て云何。若し人、三千大千世界に滿る七寶を以て、用て布施せんに、是

人の得る所の福德は、寧ろ多しと爲んや不や。』須菩提言さく、『甚だ多し、世尊。何を以ての故に。是福德は卽ち福の性に非ざればなり。是故に如來は福德多しと說きたまふ。』

『若し復人あり、此經中に於ける乃至四句の偈等を受持して、他人の爲に說かば、其福は彼よりも勝れたり。何を以ての故に、須菩提、一切の諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆此經より出づればなり。須菩提、謂ゆる佛法とは卽ち佛法に非ず。

(八)須菩提、意に於て云何。須陀洹は能く是念を作して、我須陀洹の果を得たりと爲んや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。何を以ての故に、須陀洹を名けて入流と爲す、而も入る所無く、色聲香味觸法に入らざる、是を須陀洹と名くればなり。』『須菩提、意に於て云何。斯陀含は能く是念を作して、我斯陀含の果を得たりと爲んや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。何を以ての故に。斯陀含を一往來と名くれども、而も實には往來無し、是を斯陀含と名くればなり。』『須菩提、意に於て云何。阿那含は能く是念を作して、我阿那含の果を得たりとせんや不や。』須菩提言さく、『不、世尊よ。何を以ての故に。阿那含を名けて不來と爲す、而も實には不來無し、是を阿那含と名くればなり。』『須菩提、意に於て云何。阿羅漢は能く是念を作して、我阿羅漢の道を得たりと爲んや不や。』須菩提言さく、『不、世尊。何を以ての故に。實に法の阿羅漢と名くるもの有ること無ければなり。世尊、若し阿羅漢にして、是念を作し、我は阿羅漢の道を得たりとせば、卽ち我人衆生壽者に著すと爲す。

所得の實信なり、又般若を是れ法の實相と信ずるなり。

【我相等】五陰中に我、我所心を起すを我、不斷不絕相續して世に住するを衆生、一根の命あつて斷ぜざれば猶我ありと計するを人、外道の神我ありと計するを壽者と名く。

【法相もなく等】我を見ざるも五陰法あると見るに無法相をいひ、五陰の本無名なるに非法といひ、空を病むも亦空の故に無非法といふ。

【心に相を取る等】衆生相に取すれば外道の有我人と計すると同じ。

【法相を取る等】計法の人は法見のみならず我見を起すを以てなり。

【非法相を取る等】非法ありとせば法見を起し、從つて

我見を生ずるを以てなり。

【筏の喩】賊に逐はれて筏に乘じ河を度りて彼岸に至れば河筏兩つともに捨つるの喩なり。

【八】說法の無得無說を明す。

【定法の阿耨…等】釋迦は是化生化滅非實生實滅の故に如來身は無爲なるを以てなり。

【定法あるなし】化說化證にして實證化なし。

【不可說不可取】言語滅の故に不可說心行滅の故に不可取なり。

【法にもあらず等】諸法實相は非有非無なり、非有の故に非法、非無の故に非非法なり。

【無爲法を以て等】一切聖衆は皆體に無爲を悟るも、所悟不同の故に差別あり。

【七】菩提此經に

世尊、佛は「我、無諍三昧を得て人中にて最第一たり、是れ第一の離欲の阿羅漢なり」と說きたまへども、我れ是念を作したまはず「我は是れ離欲の阿羅漢なり」と。世尊、我若し、我は阿羅漢の道を得たりとの念を作さば、世尊は則ち須菩提は阿蘭那の行を樂ふ者と說きたまはざらん。須菩提とは實に所行なきを以て、須菩提は是れ阿蘭那の行を樂ふと名くればなり。』

(九)佛、須菩提に告げたまはく『意に於て云何。如來は、昔然燈佛の所にありて、法に於て所得有りしや不や。』『不、世尊。如來は、然燈佛の所にありて、法に於て實に所得無かりき。』『須菩提、意に於て云何。菩薩は佛土を莊嚴するや不や。』『不、世尊。何を以ての故に。佛土を莊嚴すと云ふは則ち非莊嚴を以て莊嚴と名くればなり。』『是故に、須菩提、諸の菩薩摩訶薩は、應に是の如く淸淨の心を生ずべし。色に住して心を生ずべからず。聲香味觸法に住して心を生ずべからず。應に住する所無くして而も其心を生ずべし。須菩提、譬へば人ありて、身須彌山王の如くならば、意に於て云何。是身は大と爲すや不や。』須菩提言さく『甚だ大なり、世尊。何を以ての故に。佛は「非身を是れ大身と名く。」と說きたまへばなり。』

(一〇)『須菩提、恆河の中の有ゆる沙の數の如く、是の如き沙は恆河と等し、意に於て云何。是諸の恆河の沙は、寧ろ多しとせんや不や。』須菩提言さく『甚だ多し、世尊。但だ諸の恆河すら尙ほ多くして無數ならん、何に況んや其沙をや。』『須菩提、我れ今實言を以て汝

に告ぐ。若し善男子善女人ありて七寶を以て、爾所の恒河沙數の三千大千世界に滿てて、用て布施せんに、福を得ること多きや不や。」須菩提言さく「甚だ多からん、世尊。」佛、須菩提に告げたまはく「若し善男子善女人、此經の中に於て乃至四句の偈等を受持し、他人の爲に說かば、此福德は前の福德に勝れり。

（一二）復次に須菩提、是經の乃至四句の偈等を說かば、當に知るべし、此處は一切の世間、天人阿修羅の、皆應に供養すること、佛の塔廟の如くなるべし。何に況んや人ありて、盡く能く受持し讀誦せんをや。須菩提、當に知るべし、是人は最上第一の希有の法を成就し、若し是經典所在の處には、則ち佛、若くは尊重の弟子有りと爲す。」

（一三）爾時に須菩提は佛に白して言さく「世尊、當に何とか此經を名け、我等は云何が奉持すべき。」佛、須菩提に告げたまはく「是經を名けて金剛般若波羅蜜と爲す。是名字を以て汝は當に奉持すべし。所以は何ん、須菩提、佛は『般若波羅蜜は即ち般若波羅蜜に非ず。』と說きたまへばなり。須菩提、意に於て云何。如來は所說の法ありや不や。」須菩提、佛に白して言さく「世尊、如來は所說無し。」「須菩提、意に於て云何。三千大千世界の有ゆる微塵は、是を多しと爲んや不や。」須菩提言さく「甚だ多し、世尊。」「須菩提、諸の微塵を如來は『微塵に非ず、是を微塵と名く。』と說きたまふ。如來は『世界は世界に非ず、是を世界と名く。』と說きたまふ。須菩提、意に於て云何。三十二相を以て、如來を見たてまつるべきや不や。」「不、世尊、三十二相を以ては如來を見たてまつることを得べからず。何を以

依りて出づるを明す。

【福德は…に非ず】福德は即ち世諦にして虛假、眞諦に非るなり。

【福德多し】世諦の故を以てなり。

【佛法……あらず】佛法とは佛の無上菩提法にして二乘菩薩に此事あることなし。

【八】一相無相を明す。

【須陀洹】スロータパンナ(Srota-panna)入流と譯す。三界の見惑を斷じ修道に入りたる位。

【斯陀含】サクリダーガーミン(Sakṛdāgāmin)欲界修惑の前六品を斷じたるもの。

【阿那含】アナーガーミン(Anāgāmin)九品の修惑を斷じ盡したる聖者。

【阿羅漢】アルハン(Arhan)應供等

ての故に、如來は「三十二相は即ち是相に非ず、是を三十二相と名く。」と說きたまへばなり。』「須菩提、若し善男子善女人有りて、恒河の沙に等しき身命を以て布施せんものと、若し復人ありて、此經中に於ける乃至四句の偈等を受持して他人の爲に說くものと有らんに、其福は甚だ多し。』

（一三）爾時に須菩提、是經を說きたまふを聞き、深く義趣を解して、涕淚悲泣し、佛に白して言さく『希有なり、世尊。佛は是の如き甚深の經典を說きたまふ、我が昔より來得たる所の慧眼も、未だ嘗て是の如きの經を聞くことを得ざりき。世尊、若し復人あり、是經を聞くことを得て、信心淸淨ならば、即ち實相を生ぜん。當に知るべし、是人は第一希有の功德を成就せん。世尊、「是實相とは即ち是れ相に非ず、是故に如來は實相と名く」と說きたまふ。世尊、我れ今、是の如きの經典を聞くことを得て、信解し、受持することは難しと爲すに足らず。若し、當來世の後の五百歲に、其衆生ありて、是經を聞くことを得て、信解し受持せば、是人は即ち第一の希有と爲すべし。何を以ての故に。此人は我相人相衆生相壽者相無ければなり。所以は何ん。我相は即ち是れ相にあらず、人相衆生相壽者相も即ち是れ相に非ざればなり。何を以ての故に。一切の諸相を離るるを則ち諸佛と名くればなり。』『佛、須菩提に告げたまはく「是の如く是の如し。若し復人あり、是經を聞くことを得て、驚かず、怖かず、畏れずんば、當に知るべし、是人は甚だ希有と爲すべし。何を以ての故に。須菩提、如來は「第一波羅蜜は即ち第一波羅蜜に非ず、是を、第一波羅蜜と

と譯す、三界の見思惑を斷じ、盡智無生智を得て無學位に住する者。

【無諍三昧】衆生一として我に於て諍を起さざるに名く。

【阿蘭那】アラナ（Arana）無諍と譯す。

【九】佛土莊嚴に就て。

【然燈佛】ディーパンカラ（Dipaṁkara）の譯、過去七佛の一。

【法…所得ありや】授記を得たりといはば諸法可說と名くべく、不可說といはば授記なし、といふこの疑を會せんための問答なり。

【不なり等】如來の法身は實に七寶の形相莊嚴なきを以て、七寶淨土の取るべきなし。

【非莊嚴】第一義眞淨土なり。

【莊嚴と名く】第一義眞實莊嚴は諸

名く」と說きたまへばなり。須菩提、如來は「忍辱波羅蜜は、忍辱波羅蜜にあらず、是を忍辱波羅蜜と名く。」と說きたまふ。何を以ての故に。須菩提、我昔、歌利王の爲に身體を割截せられたるが如し、我れ爾時に於て、我相も無く、人相も無く、衆生相も無く、壽者相も無かりき。何を以ての故に。我往昔、節節に支解せられし時に、若し我相人相衆生相壽者相有らんには、應に瞋恨を生ずべければなり。須菩提、又過去を念ずるに、五百世に於て忍辱仙人と作り、爾所の世に於て我相も無く、人相も無く、衆生相も無く、壽者相も無かりき。是故に、須菩提、菩薩は應に一切の相を離れて、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すべきなり。色に住して心を生ずべからず、聲香味觸法に住して心を生ずべからず、應に住する所無きの心を生ずべし。若し心に住あらば則ち住に非ずと爲す。是故に、佛は「菩薩は心を色に住せしめて布施すべからず。」と說きたまふ。須菩提、菩薩は一切衆生を利益せんが爲の故に、應に是の如く布施すべし。如來は一切の諸相は即ち是れ相に非ずと說き、又一切衆生は即ち衆生に非ずと說きたまふ。須菩提、如來は、是れ眞語者なり、實語者なり、如語者なり、不誑語者なり、不異語者なり。須菩提、如來の得たまふ所の法、此法は、實も無く、虛も無し。須菩提、若し菩薩にして心を法に住せしめて布施を行ぜば、人の闇に入るが如く、即ち所見無けん。若し菩薩にして心を法に住せしめずして布施を行ぜば、人の目有りて日光明かに照して種種の色を見るが如し。須菩提、當來の世に、若し善男子善女人有りて、能く此經に於て受持し讀誦せば、則ち如來は佛の智慧を以て悉く

法實相德として備はらざるなきに名く。

【非身】佛は有爲有漏の身に非るをいふ。

【一】無爲福の勝るるを明す。

【二】正教の尊重すべきを明す。

【阿修羅】アスラ(Asura)非天等と譯す、十界六道の一。

【佛塔廟等】法身を尊ぶが爲の故に塔を敬ふなり。

【是經典等】此經は諸佛の母、能く諸佛三乘十地を生ずれば、此經を供養することは即ち佛を供養するなり。

【三】如法に般若を受持すべきを說く。

【般若波羅蜜は等】是れ佛の般若佛の金剛にして、二乘の智慧、金剛に非るなり。

【如來は所說なし】

釋迦の所說は十方三世の諸佛說に同じく、是を離れて別に說あることなし。

【微塵に非ず等】二種微塵の中成地微塵を諸の微塵といひ、塵染の塵に非るを非微塵といふ。

【三十二相：見まつる等】相好身を以て法身を見るべきやとの問なり。

【三十二相：相に非ず等】所說の身は法身に非ずして相好身を明すとなり。

【福甚だ多し】持經を以てするは法身法なるが故に福多きなり。

【一三】離相寂滅是れ般若なるを明す。

【實相を生ぜん】但だ實相の慧を生ずるのみなり。

【實相：相に非ず】是の實相は但佛法大乘にあるのみ、

是人を知り、悉く是人を見たまひ、皆無量無邊の功德を成就することを得と爲す。

(一四)須菩提、若し善男子善女人有りて、初日分に、恆河の沙に等しき身を以て布施し、中日分に、恆河の沙に等しき身を以て布施し、後日分にも亦、恆河の沙に等しき身を以て布施し、是の如く無量百千萬億劫、身を以て布施せんに、若し復人あり、此經典を聞いて、信心して逆はずんば、其福は彼に勝たり。何に況んや、書寫し、受持し、讀誦し、人の爲に解說するをや。須菩提、要を以て之を言はば、此經は不可思議不可稱量なる無邊の功德有り。如來は、大乘を發す者の爲に說き、最上乘を發すものの爲に說きたまふ。若し人有りて、能く受持し、讀誦し、廣く人の爲に說かば、如來は悉く是人を知り、悉く是人を見たまひ、皆不可量不可稱にして、有邊無き不可思議の功德を、成就することを得ん。是の如き人を、即ち如來の阿耨多羅三藐三菩提を荷擔すと爲す。何を以ての故に。須菩提、若し小法を樂ふものは、我見人見、衆生見壽者見に著し、此經に於て聽受し、讀誦し、人の爲に解說すること能はざればなり。須菩提、在在處處に若し此經有らば、一切世間の天人阿修羅の供養すべき所なり。當に知るべし、此處は即ち是塔と爲り、皆應に恭敬し、作禮し、圍繞して、諸の華香を以て其處に散ずべし。

(一五)復次に須菩提、善男子善女人あり、此經を受持し、讀誦し、若し人の爲に、輕賤せらるれば、是人の先世の罪業は、應に惡道に墮すべきも、今世の人に輕賤せらるるを以ての故に、先世の罪業は、則ち爲に消滅して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提、我れ

天魔外道に是事なし。

【第一の希有】後五百歳には子得道者多きを以てなり。

【我相は…相に非ず】我等の相を取らざるは我相なきを以て、即ち無我なるを以て所取なきなり。

【一切の諸相を離る】一切相は無所得にして涅槃と名け、佛と名くるなり。

【第一波羅蜜】般若波羅蜜なり、般若は他五度に勝るを以てなり、故に他の五度は第一波羅蜜に非ざるなり。

【忍辱…非ず】無所得の忍を修すれば菩提を得、有所得捨身の忍なれば忍に非るなり。

【歌利王】カリンガ・ラージヤ（Kalinga-raja）

【住することなく】

過去の無量阿僧祇劫を念ふに、然燈佛の前に於て、八百四千萬億那由他の諸佛に値ひたてまつることを得て、悉く皆供養し承事して、空しく過すこと無かりき。若し復人あり、後の末世に於て、能く此經を受持し、讀誦するものの功德と、我が諸佛を供養する功德に於て百分の一にも及ばず、千萬億分、乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。須菩提、若し善男子善女人の、後の末世に於て、此經を受持し、讀誦する有らんに、得る所の功德を、我れ若し具に說かば、或は人あり、聞いて、心即ち狂亂し、狐疑して信ぜざらん。須菩提、當に知るべし、此經の義は不可思議にして、果報も亦不可思議なり。」

（一六）爾時、須菩提、佛に白して言さく「世尊、善男子善女人にして阿耨多羅三藐三菩提を發さんには、云何が應に住し、云何が其心を降伏すべき。」佛、須菩提に告げたまはく「善男子善女人にして、阿耨多羅三藐三菩提を發さん者は、當に是の如きの心を生ずべし。我應に一切衆生を滅度すべし、一切衆生を滅度し已りて、而も一衆生の實に滅度すべきものあること無し。」と。何を以ての故に。須菩提、若し菩薩に我相と人相と、衆生相と壽者相と有らば、則ち菩薩にあらず、所以は何ん、須菩提、實に、法として、阿耨多羅三藐三菩提を發す有ること無ければなり。須菩提、意に於て云何。如來は然燈佛の所に於て、法として、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふことありしや不や。「不、世尊。我佛の所說の義を解するが如くんば、佛は然燈佛の所に於て、法として阿耨多羅三藐三菩提を得たまふこと有ること無し。」佛言はく「是の如く是の如し。須菩提、實に法として、如來は阿耨多羅

初の不住は檀度義を成ぜんに無得の施を行ずべきを、次には心無所住なれば淨土の因たるを、次に菩提心を成ぜんために不住發心を勸むるなり。

【一切相…非ず】衆生の利すべきありといはば是法見、故にかくいふなり。

【是れ眞語者等】眞諦に依るをいひ、世諦に依りて說くを實語といひ、諸佛の二諦に依つて說くに同ずるを如語といひ、衆生を誑さざるを不誑語といひ、一道を成ずと說く不異語といふ。

【二四】經を受持するの功德を述ぶ。

【大乘…最上乘】通じては異ならざるも別しては大は廣博の義を表し、最上は高く二乘義を超出するなり。

三藐三菩提を得たまふこと有ること無し。須菩提、若し法として、如來、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふこと有らば、然燈佛は則ち我に授記を與へて「汝は來世に於て當に佛と作ることを得て、釋迦牟尼と號すべし。」と言ふべからず。實に、法として、阿耨多羅三藐三菩提を得るもの無きを以てなり。是故に然燈佛は、我に授記を與へて、是言を作したまはく「汝は來世に於て、當に佛となることを得て、釋迦牟尼と號すべし。」何を以ての故に。如來は卽ち諸法如の義なればなり。若し人ありて、如來は阿耨多羅三藐三菩提を、得たまふと言はんも、須菩提、實に法として、佛、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふこと有る無し。須菩提、如來の得たまふ所の阿耨多羅三藐三菩提は、是中に於て、實もなく、虛も無し。是故に如來は、一切の法皆是れ佛法なりと說きたまふ。須菩提、言ふ所の一切の法とは、卽ち一切の法に非ず、是故に一切の法と名く。須菩提、譬へば人の身の長大なるが如し。』須菩提言さく、「世尊、如來は「人の身の長大は卽ち大身にあらず、是を大身と名く。」と說きたまふ。』『須菩提、菩薩も亦是の如し。若し是言を作して「我當に無量の衆生を滅度すべし。」と言はば、則ち菩薩と名けざるなり。何を以ての故に。須菩提、實に法として、名けて菩薩と爲すもの有ること無ければなり。是故に佛は、一切の法は我も無く人も無く、衆生も無く壽者も無しと說きたまふ。須菩提、若し菩薩にして、「我當に佛土を莊嚴すべし。」と言はば、是を菩薩と名けず。何を以ての故に。如來は、「佛土を莊嚴すとは、卽ち非莊嚴を以て莊嚴と名く。」と說きたまへばなり。須菩提、如來は「菩薩にして、無我

【小法を樂ふ者等】小乘人なり、我見等に著する是れ外道人なり。【一五】此經を受持せば、業障を淨むといふ。【是の人先世の罪業等】應に八難處に墮すべきも、持經の力の故に現世に輕受するなり。【一六】無我を究覺せば菩提を得るを明す。【諸法如の義】體如なるを以て如來なり、亦授記を得るなり、如中に法の得べきことなきが故なり。若し得あらば體は如ならず、亦受記を得ず。【實に法として等】初發心時既に「無所得」と悟了せば、佛に至って我人の菩提を得ることなきなり、有見を破す。【實もなく等】今無見を破す。有得の得なきを以て無實無得の得無きに

の法に通達する者を、眞に是れ菩薩と名く。」と說きたまふ。』

(一七)『須菩提、意に於て云何、如來に肉眼有りや不や。』『是の如し、世尊。如來は肉眼を有したまふ。』『須菩提、意に於て云何、如來に天眼有りや不や。』『是の如し、世尊、如來は天眼を有したまふ。』『須菩提、意に於て云何、如來に慧眼有りや不や。』『是の如し、世尊。如來は慧眼を有したまふ。』『須菩提、意に於て云何、如來に法眼有りや不や。』『是の如し、世尊。如來は法眼を有したまふ。』『須菩提、意に於て云何、如來に佛眼有りや不や。』『是の如し、世尊、如來は佛眼を有したまふ。』『須菩提、意に於て云何、恆河中の、有ゆる沙を、佛は是沙を說きたまふや不や。』『是の如し、世尊、如來は是沙を說きたまふ。』『須菩提、意に於て云何、一の恆河中に有る所の沙の如き、是の如きの沙に等しき恆河あり、是諸の恆河の有らゆる沙數の佛の世界あらば、是の如きは寧ろ多しと爲さんや不や。』『甚だ多し、世尊。』『佛、須菩提に告げたまはく、『爾所の國土中の有ゆる衆生の若干種の心を、如來は悉く知りたまふ。何を以ての故に。如來は「諸心を皆非心と爲す、是を名けて心と爲す。」と說きたまへばなり。所以は何ん。須菩提、過去の心も不可得なり、現在の心も不可得なり、未來の心も不可得なればなり。』

(一八)『須菩提、意に於て云何、若し人あり、三千大千世界に滿てる、七寶を以用て布施せんに、是人は、是因緣を以て、福を得ること多きや不や。』『是の如し、世尊。此人は是因緣を以て、福を得ること甚だ多からん。』『須菩提、若し福德實に有らば、如來は福德を得る

非る故に非虛といふなり。

【一切法皆是れ佛法】一切法如を體となすを以て如來とならば、一切法如即ち如來、故一切法皆是れ佛法といふなり。

【一切法に非ず】一切顚倒の法は如來の所證に非らざるを以てなり。

【人の身の長大等】佛は眞如を身となし一切處に遍滿し一切の功德を具足する故大身なり、而も一切の患累なきが故に大身に非らざるなり。

【菩薩も亦是の如し】上の發心、授記の菩薩の如く、今の成就衆生淨佛國土の菩薩も亦不可得なり。是れ亦上求菩提の法、身の有無も不可得、故に菩薩の有無を、求むるも亦不可得なり。

【無我の法に通達

こと多しと說きたまはず。福德無なるを以ての故に、如來は福德を得ること多しと說きたまふ。』

〔二九〕『須菩提、意に於て云何、佛は、色身を具足するを以て見たてまつるべきや不や。』『不、世尊。如來は色身を具足するを以て見たてまつるべからず。何を以ての故に。如來の色身を具足すと說きたまふは、即ち色身を具足するには非ず、是を色身を具足すと名くればなり。』『須菩提、意に於て云何、如來は諸相を具足するを以て見たてまつるべきや不や。』『不、世尊、如來は諸相を具足するを以て見たてまつるべからず。何を以ての故に、如來は「諸相の具足は即ち具足に非ず、是を諸相具足と名く。」と說きたまへばなり。』

〔三〇〕『須菩提、汝如來は「我當に所說の法あるべし」との是念を作したまふ」と謂ふこと勿れ。何を以ての故に。若し人あり、如來に、所說の法ありと言はば、即ち佛を謗ると爲す、我が說く所を解する能はざるが故に。須菩提、說法とは法の說くべき無き、是を說法と名くるなり。』爾時に慧命須菩提は、佛に白して言さく、『世尊、頗し衆生有りて未來世に於て是の法を說くを聞きて、信心を生ずることありや不や。』佛言はく、『須菩提、彼は衆生に非ず、衆生にあらざるに非ず。何を以ての故に。須菩提、如來は「衆生は衆生に非ず、是を衆生と名く。」と說きたまへばなり。』

〔三一〕須菩提、佛に白して言さく、『世尊、佛の阿耨多羅三藐三菩提を得たまふは、所得無しと爲んや。』『是の如く是の如し。須菩提、我れ阿耨多羅三藐三菩提に於て、乃至少法有ること

す等】發菩提心等の菩薩不可得とならば菩薩都て無しと疑ふを釋するなり。故に菩薩なしと了悟するを眞の菩薩とし、菩薩ありと見るを菩薩となさざるなり、是我人の見を破するなり。

【一七】如來は一體なるを明す。

【如來は肉眼を有す等】障内境を擧げて佛智に約するを肉眼、障外境を擧ぐるを天眼、二慧の境に約するを慧眼、佛性を見るを佛眼といふ。

【諸心を皆非心となす等】如來は一切衆生の心は唯顚倒心中の行なれば非心にして正觀中の行にあらずと爲すなり。

【過去の心も不可得等】三世に心を求むるも不可得なるに衆生は心ありと見る、此れ無に

無し、是を阿耨多羅三藐三菩提と名くるを得べし。

(二二)「復次に、須菩提、是法は平等にして高下有ること無し、是を阿耨多羅三藐三菩提と名く、我も無く人も無く、衆生も無く壽者も無きを以て、一切の善法を修すれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得。須菩提、言ふ所の善法とは如來即ち「善法に非ず、是を善法と名く。」と說きたまふ。

(二三)須菩提、若し三千大千世界の中の、有らゆる諸の須彌山王、是の如きに等しき七寶の聚を人ありて以て布施せんに、若し人あり、此般若波羅蜜經乃至四句の偈等を以て受持し、讀誦し、他人の爲に說かば、前の福德に於ては百分の一にも及ばず、百千萬億分、乃至算數譬喩も、及ぶ能はざる所なり。

(二四)須菩提、意に於て云何、汝等は、如來は「我當に衆生を度すべし、」との念を作したまふと謂ふこと勿れ。須菩提、是念を作すこと勿れ。何を以ての故に。實に如來の度したまふべき衆生は、有ること無ければなり。若し、如來の度したまふべき衆生、有りと云はば、如來には則ち我人衆生壽者ならん。須菩提、如來の、我ありと說きたまふは、則ち我あるに非ず、而も凡夫人は以て我ありと爲す。須菩提、凡夫とは如來則ち「凡夫に非ず、と說きたまへばなり。

(二五)須菩提、意に於て云何、三十二相を以て、如來を觀たてまつるべきや不や。「須菩提言さく、「是の如く是の如し、三十二相を以て、如來を觀たてまつらん。」佛言はく、「須菩提、若

し三十二相を以て、如來を觀たてまつるものならば、轉輪聖王は卽ち是れ如來ならん。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊、我佛の說きたまへる所の義を解するが如くんば、三十二相を以て如來を觀たてまつるべからず。」爾時に世尊は偈を說いて言はく、

若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば

是人は邪道を行ずるもの、如來を見たてまつること能はざるなり

（二六）「須菩提、汝若し此念を作さん、「如來は相の具足を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得るにあらず。」と。須菩提、是念を作すこと莫れ、「如來は相の具足を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得るにあらず。」と。須菩提、汝若し此念を作さん。「阿耨多羅三藐三菩提の心を發さんものは、諸法は斷滅の相と說く。」と。是念を作すこと莫れ。何を以ての故に。阿耨多羅三藐三菩提の心を發さんものは、法に於て斷滅の相を說かざればなり。

（二七）須菩提、若し菩薩にして恆河の沙に等しき、世界に滿てる七寶を以て布施せんに、若し復人あり、一切の法は無我なりと知つて、忍を成ずることを得ば、此菩薩は、前の菩薩の得る所の功德に勝れり。須菩提、諸の菩薩は福德を受けざるを以ての故に。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩は福德を受けたまはざる。」「須菩提、菩薩は作す所の福德に貪著せず。是故に福德に貪著せずと說く。

（二八）須菩提、若し人あり、「如來は若は來り、若は去り、若は坐し、若は臥す。」と言はば、是人は我が所說の義を解せざるものなり。何を以ての故に。如來と云ふは、從來する所も無

有といふなれば顚倒なり。【二八】無所得の福を明す。【二九】色相を離る是れ如來なるを說く。【如來具足すと說くは等】一見を破して色身の法身に非ることを明す、何の得か一となすと、是を具足となづけ、此れ異見を破して、何處にか相好を離れて法身ありやと。【三〇】非說に說法と名くを明す。【衆生にあらず等】無所得觀の衆生は則ち能く信ずるを以てこの衆生を有所得人に望めば衆生に非ず、而も未だ具足して了悟せざるが故に衆生にあらざるに非ず。【三一】菩提の得べきものなきをいふ。畢竟無所得に住する是れ道を得るなり。

く、亦去る所も無きが故に、如來と名くればなり。

(二九)須菩提、若し善男子善女人あり、三千大千世界を以て、碎いて微塵と爲さば、意に於て云何。是微塵衆は寧ろ多しと爲んや不や。」『甚だ多し、世尊、何を以ての故に。若し此微塵衆、實に有ならば、佛は即ち是微塵衆を說きたまはず。所以は何ん、佛は「微塵衆は則ち微塵衆に非ず、是を微塵衆と名く。」と說きたまへばなり。世尊、如來は「三千大千世界は則ち世界に非ず、是を世界と名く。」と說きたまふ。何を以ての故に。若し世界は實に有ならば、則ち是れ一合相なり。如來は「一合相は則ち一合相に非ず、是を一合相と名く。」と說きたまへばなり。』『須菩提、一合相と云ふは、則ち是れ說くべからず、但凡夫人のみ其事に貪著するなり。

(三〇)須菩提、若し人あり、佛は我見人見衆生見壽者見を說きたまふ。」と言はば、須菩提、意に於て云何。是人は我が所說の義を解するや不や。」『不、世尊。是人は如來の所說の義を解せざるなり。何を以ての故に。世尊は「我見人見衆生見壽者見は、即ち我見人見衆生見壽者見に非ず、是を我見人見衆生見壽者見と名く」と說きたまふを以てなり。』『須菩提、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さんものは、一切の法に於て、應に是の如くに知り、是の如くに見、是の如くに信解して法相を生ぜざるべし。須菩提、言ふ所の法相も、如來は「即ち法相に非ず、是を法相と名く。」と說きたまへり。

(三一)須菩提、若し人あり、無量阿僧祇の世界に滿てる七寶を持用て、布施せんに、若し善男

【二二】四義無上菩提釋の中後三平等淨心行善を明す。即體に法界平等の義を悟る是第二、無我無人な以ての故に菩提を得る是第三、無上方便あつて一切衆行を修し滿足するを無上と名く是第四なり。

【善法とは則ち善法非ず等】無所得の善法を明すのみにして、有所得の善法に非ずといふなり。

【二三】受持經の福德の比するなきを明す。

【二四】所化なきの化を明す。

【如來の度すべき衆生なし】若し衆生の度すべきありと見ば佛則ち有取我の過あるなり。

【二五】法身は相好に非ざるを明す。耳眼の徒は三十二相業を修するを以て三十二相身を得、是れ法身あり

子善女人の、菩提心を發す者あり、此經を持して、乃至四句偈等を受持し、讀誦し、人の爲に演說せば、其福は彼よりも勝れり。云何が人の爲に演說せん。相を取らざれば如如にして動せず。何を以ての故に。

一切の有爲法は、夢、幻、泡、影の如く、
露の如く、亦電の如し。應に是の如きの觀を作すべし

佛、是經を說き已りたまへば、長老須菩提、及び諸の比丘比丘尼優婆塞優婆夷、一切世間の天人、阿修羅は、佛の說きたまふ所を聞いて、皆大いに歡喜し信受し奉行せり。

とし、法身に相好ありとするを破せんために此章を擧ぐるなり。

【色を以て我を見等】若し般若方便用を得ば色聲、非色聲、非非色聲是れ佛なりと見るも方便なければ如來を見る事なし。

【二六】法に斷滅なきを明す。

【諸法は斷滅す等】菩薩は無生忍を得ば肉身を捨して法身を受け福德の因果なからんとの疑を斷ずるために明すなり。

【二七】菩薩は福德を受けず貪らざるを明す。

【二八】威儀寂靜なる是れ如來なり。

【二九】一合相を明す。

【微塵衆に非ず】假名の微塵は所有なきが故に。

【一合相】衆塵を合して世界を成すとなり。

【二一】法の不生を知見すべきを説く

【我見……に非ず】我見等なるを明さんとして我見をいふのみ、我見に即ち我見の説くべきありと説くに非ざるなり。

【二二】所化眞に非ざるを明す。

【一切有爲法等】諸佛常に衆生の爲に説法すとならば何故に涅槃に入るやとの疑を釋するなり故に諸佛は涅槃にも世間にも住せずと名くるなり即ち衆生を利し化身に説法をなすために涅槃に住せず、有爲は夢幻等の如しと觀ずるが故に世間に住せざるなり。

金剛般若波羅蜜經（こんがうはんにやはらみつきやう）終

大般若波羅蜜多經 第十般若理趣分

經典部 第四卷

大般若波羅蜜多經第十般若理趣分

三藏法師玄奘詔を奉じて譯す

（一）是の如く我れ聞けり。一時、薄伽梵妙に善く一切の如來の金剛住持と平等性智と種種希有の殊勝の功德とを成就し、已に能善く一切の如來灌頂の寶冠を獲て三界を超過し、已に善く一切の如來遍金剛智大觀自在を得、已に一切の如來、諸法を決定したまへる大妙智印を圓滿することを得、已に善く一切の如來、畢竟空寂平等性印を圓證して、諸の能作所作の事業に於て、皆善巧に成辦して餘なきことを得たまへり。一切の有情種種の希願、其罪なきに隨ひて、皆能く滿足して、已に善く三世平等にして、常に斷盡すること無く、廣大遍照せる身語心性に安住すること猶し金剛の若し。諸の如來に等しく無動無壞なり。是薄伽梵、欲界の頂、他化自在天王宮の中に住せり。一切の如來常に所遊の處、咸な共に稱美したまへる大寶藏殿なり。其殿は無價末尼の所成にして、種種の珍奇間雜して嚴飾せり。衆色交映して大光明を放つ。寶鐸金鈴處處に懸列し、微風吹き動かして和雅の音を出す。綺蓋、繒幡、華幢、綵拂、寶珠、瓔珞、半滿月等種種に雜飾し、用て莊嚴せり。賢聖天仙の愛樂せる所、八十億の大菩薩と倶なり。一切皆陀羅尼門、三摩地門、無礙の妙辯を具せり。是の如き等の類、無量の功德あり。設ひ多劫を經て讃ずとも盡すこと能はざらん。

【一】經の序分なり。
【薄伽梵】バガヷーン（Bhagavān）世尊と譯す釋尊を指す。
【妙に善く】以下佛の成就せる勝德を讃ず。
【金剛住持】一切の佛德を住持して諸惑を滅するなり。
【平等性智】畢竟空寂平等の法性、能證の智なり。
【灌頂の寶冠】法王位に登るを表す。
【遍金剛智大觀自在】佛智大圓鏡智なり。
【大妙智印】四智印中の妙觀察智。
【平等性印】平等性智を表す。
【善巧等】成所作智を表す。
【餘なき】圓滿無缺なり。
【三世平等】三世を悉く記別して無礙なり。

【是の薄伽梵等】說教處を明して第六天王宮とす。
【無價末尼】最上の如意寶珠。
【寶鐸等】主として外部の裝飾なり
【綺蓋等】主として内部の裝飾なり
【一切等】賢聖の德を讃ず。
【陀羅尼門】種種の總持力。
【三摩地門】種種の禪定力。三摩地は等持といひ三昧といふ。
【無礙の妙辯】法義詞辯の無礙を說くなり。
【其の名を等】大日の八方侍衞の上首菩薩なり。
【純一圓滿】純一乘の義を明はす法句なり。
【二】以下正宗分、大段章あり、第一に理趣法門章 菩薩の句義を明す。
【般若の理趣】諸法實相をいふ。
【極妙樂】一切の

具名を金剛手菩薩摩訶薩、觀自在菩薩摩訶薩、虛空藏菩薩摩訶薩、金剛拳菩薩摩訶薩、妙吉祥菩薩摩訶薩、大空藏菩薩摩訶薩、發心卽轉法輪菩薩摩訶薩、摧伏一切魔怨菩薩摩訶薩と曰ふ。是の如きを上首として八百萬の大菩薩衆あり。前後に圍繞せられて正法を宣說したまふに、初も中も後も善く、文義巧妙純一圓滿にして淸白梵行なり。

(二)爾時、世尊、諸の菩薩の爲に一切の法、甚深微妙般若の理趣、淸淨の法門を說きたまふ。此門は卽ち是れ菩薩の句義なり。云何なるをか名けて菩薩の句義と爲す。謂ゆる極妙樂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。諸見永寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。微妙適悅淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。渴愛永息淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。胎藏超越淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。衆德莊嚴淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。意極猗適淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。得大光明淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。身善安樂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。語善安樂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。意善安樂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。色蘊空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。受想行識蘊、空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。眼處空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意處、空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。色處空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。聲香味觸法處、空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。眼界空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意界、空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。色界空寂淸淨の句義、是れ菩薩の句義なり。聲香

苦永く無し。清淨は所有なく取著なく不可得なるなり。【諸見永寂】一切の邪見謬論凡て無し。【渇愛永息】貪欲を能く除きて惑なし。【胎藏】母胎の子を藏むる如く因中果あり、因果不二なるをいふ。衆德は三十二相等を具するに名く。【意極猗適】内取著なき故に意安適なり。得大光明は外大光明無量なるをいふ。【身善等】三業清淨安樂の義を明す。【色蘊等】五蘊空不可得を明す。【眼處等】十二處不可得を明す。【眼界等】十八界不可得を明す。【眼觸等】六觸不可得を明す。【眼觸を緣となして等】六受身不可得を明す。

味觸法界、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。眼識界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意識界、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。眼觸空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意觸、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。眼觸を緣と爲して生ずる所の諸受、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。耳鼻舌身意觸の緣と爲して生ずる所の諸受、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。地界空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。水火風空識界、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。苦聖諦空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。集滅道聖諦空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。因緣空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。等無間緣、所緣緣、增上緣、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。無明空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。行識名色、六處觸受、愛取有生老死、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。布施波羅蜜多、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。淨戒、安忍、精進、靜慮、般若波羅蜜多、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。眞如空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。法界、法性、不虛妄性、不變異性、平等性、離生性、法定、法住、實際、虛空界、不思議界、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。四靜慮空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。四無量、四無色定、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。四念住空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。四正斷、四神足、五根五力、七等覺支、八聖道支、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。空解脫門空寂清淨の句義、是れ菩薩の句

【地界等】六界空不可得を明す。【苦聖諦等】四諦不可得を明す。【因縁等】四縁不可能を明す。因縁は親生果の法、等無間縁とは前、後相續する縁をいひ、所縁は對境、増上縁とは與力と不障の縁なり。【無明等】十二因縁不可得を明す。【布施等】六波羅蜜不可得を明す。【眞如等】實相法不可得を明す。【四靜慮等】諸禪不可得を明す。【四念住等】三十七道品不可得を明す。【空解脱門等】三解脱門不可得を明す。【八解脱等】八解脱乃至十一切處不可得を明す。【極喜地等】菩薩の十地不可得を明す。【淨觀地等】菩薩

義なり。無相無願解脱門、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。八解脱空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。八勝處、九次第定、十遍處空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。極喜地空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。離垢地、發光地、焔慧地、極難勝地、現前地、遠行地、不動地、善慧地、法雲地、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。淨觀地空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。種性地、第八地、具見地、薄地、離欲地、已辦地、獨覺地、菩薩地、如來地、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の陀羅尼門空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の三摩地門空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。五眼空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。六神通空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。如來の十力空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。四無所畏、四無礙解、大慈大悲大喜大捨、十八佛不共法、空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。三十二相空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。八十隨好空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。無忘失法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。恒住捨性空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切智空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。道相智、一切相智空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の菩薩摩訶薩の行空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。諸佛無上正等菩提空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切異生の法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の預流、一來、不還、阿羅漢、獨覺、菩薩、如來の法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の善非善の

の通十地不可得を明す。
【五眼】肉、天、慧、法、佛の五眼の空を明す。
【六神通】天眼、天耳、神足、他心、宿命、漏盡の六神通空を明す。
【如來の十力等】佛力諸法の空を明す。
【異生】業煩惱を以て六趣に輪廻する衆生なり。
【預流】須陀洹、一來は斯陀含、不還は阿那含、阿羅漢と合して聲聞の四果なり。
【自性遠離】自性空無性の故に虛妄顚倒の相を遠離するなり。
【妙菩提の座】成佛をいふ。
【煩惱障】解脫を障ふる惑、業障は業有漏業、報障は業果としての報果報をいふ。
【十六大菩薩】金剛界の慧十六尊と金

法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。一切の有記無記の法、有漏無漏の法、有爲無爲の法、世間出世間の法空寂清淨の句義、是れ菩薩の句義なり。所以は何ん。一切の法は自性空なるを以ての故に、自性遠離なり。遠離に由るが故に、自性寂靜なり。寂靜に由るが故に、自性清淨なり。清淨に由るが故に、甚深の般若波羅蜜多最勝清淨なり。是の如きの般若波羅蜜多は、當に知るべし、即ち是れ菩薩の句義なり。諸の菩薩衆皆應に修學すべし。佛是の如きの菩薩の句義、般若の理趣、清淨の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、『若し此一切の法、甚深微妙の般若の理趣、清淨の法門を聞くことを得て、深く信受する者有らば、乃至當に妙菩提の座に坐すべし。一切の障蓋皆染すること能はず。謂ゆる煩惱障、業障、報障多く積集すと雖も、而も染すること能はず。種種の極重惡業を造ると雖も、而も消滅し易くして惡趣に墮せず。若し能く受持して日日に讀誦し、精進無間に理の如く思惟せば、彼れ此生に於て定んで一切の法平等性、金剛等持を得、一切の法に於て皆自在を得て、恒に一切勝妙の喜樂を受けん。當に十六大菩薩の生を經て、定んで如來の執金剛の性を得、疾に無上正等菩提を證すべし。』

(三)爾時世尊は復遍照如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の如來の寂靜法性、甚深の理趣、現等覺門を宣說したまふ。『謂ゆる金剛平等性現等覺門とは、大菩提の堅實にして壞し難きこと金剛の如くなるを以ての故に。義平等性現等覺門とは、大菩提共義一なるを以ての故に。法平等性現等覺門とは、大菩提の自性淨なるを以ての故

す。

【三】次に遍照理趣章、毘盧舍那身理趣を以て般若の理趣を說く。

【現等覺門】現等覺門を說く。正等覺を現成する義、體は無分別智にして、金剛、義、法、一切法の四門あり。

【金剛平等性】能く生死を斷じて性堅實の故に。

【義平等性】一切有爲無爲等の義、悉く平等にして、法本性眞如菩提其の義一なるが故に性に差別なきなり。

【法平等性】所證の理大菩提性は自性淸淨の故に、能詮の敎に於て其の平等を悟るなり。

【四】釋迦調伏章、釋迦身を以て般若の理趣普勝法門を說く。

【普勝の法門】能く普く衆惡に勝たざるなきは此の法門に由るなり。

【猶預】疑ふて信

に。一切法平等性現等覺門とは、大菩提の一切の法に於て分別無きを以ての故に。」佛是の如く寂靜法性、般若の理趣、現等覺を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、「若し是の如きの四種の般若の理趣現等覺門を聞くことを得て、信解受持し、讀誦修習するもの有らば、乃至當に妙菩提の座に坐すべし。一切の極重惡業を造ると雖も、而も能く一切の惡趣を超越して、疾に無上正等菩提を證せん。」

(四)その時、世尊、復調伏一切惡法釋迦牟尼如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の法、平等性を攝受せる甚深の理趣、普勝の法門を宣說したまふ。「謂ゆる貪欲の性、戲論無きが故に、瞋恚の性も亦戲論無し。瞋恚の性戲論無きが故に、愚癡の性も亦戲論無し。愚癡の性戲論無きが故に、猶預の性も亦戲論無し。猶豫の性戲論無きが故に、諸見の性も亦戲論無し。諸見の性戲論無きが故に、憍慢の性も亦戲論無し。憍慢の性戲論無きが故に、諸纏の性も亦戲論無し。諸纏の性戲論無きが故に、煩惱垢の性も亦戲論無し。煩惱垢の性戲論無きが故に、諸惡業の性も亦戲論無し。諸惡業の性戲論無きが故に、諸果報の性も亦戲論無し。諸果報の性戲論無きが故に、雜染法の性も亦戲論無し。雜染法の性戲論無きが故に、淸淨法の性も亦戲論無し。淸淨法の性戲論無きが故に、一切法の性も亦戲論無し。一切法の性戲論無きが故に、當に知るべし、般若波羅蜜多も亦戲論無し。」佛是の如く衆惡を調伏する般若の理趣普勝の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、「若し是の如きの般若波羅蜜多甚深の理趣を聞くことを得て、信解受持し、讀誦修習するもの有

ぜざるなり。【諸見】一切の邪見、別しては六十二見、略しては斷常二見として我見とす、我見によつて憍慢あり。【諸纏】諸の煩惱なり。【假令三界等】經の威力能く衆惡を調伏するが故に殺罪も銷除することを得、法性を悟るに由つて勝行あればこの大罪も惡果を招かざるなり。【五】性淨法門章。【性淨如來】清淨法身なり。【一切法平等性】眞如の自在に悲行を觀ずるなり。【一切の貪欲等】調伏によりて善化するに非ず本性眞如清淨なり。

らば、假使三界所攝の一切の有情を殺害すとも、而も斯に由りて復地獄傍生鬼界に墮せず、能く一切の煩惱及び隨煩惱惡業等を調伏するを以ての故に、常に善趣に生じて、勝妙の樂を受けて、諸の菩薩摩訶薩の行を修し、疾に無上正等菩提を證せん。』

(五)爾時、世尊は復性淨如來の相を以て、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の法平等の性、觀自在妙智印甚深の理趣、清淨の法門を宣說したまふ。『謂ゆる一切の貪欲、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の瞋恚をして清淨ならしむ。一切の瞋恚、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の愚癡をして清淨ならしむ。一切の愚癡、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の疑惑をして清淨ならしむ。一切の疑惑、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の見趣をして清淨ならしむ。一切の見趣、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の憍慢をして清淨ならしむ。一切の憍慢、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の纏結をして清淨ならしむ。一切の纏結、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の垢穢をして清淨ならしむ。一切の垢穢、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の惡法をして清淨ならしむ。一切の惡法、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の生死をして清淨ならしむ。一切の生死、本性清淨にして極めて照明なるが故に、能く世間の諸法をして清淨ならしむ。一切の法、本性清淨にして極めて照明なるを以ての故に、能く世間の有情をして清淨ならしむ。一切の有情、本性清淨にして

【六】勝王如來智藏章。
【和合灌頂】第十地に至りて如來の位を受けんとする時十方の如來和合して咸其の頂に法水を灌ぐなり。
【智藏の法門】甚深般若の法門。
【世間等】世間出世小円大果融即を明す、法空無自性なるを以てなり。
【身語心】身口意に同じ。

極めて照明なるが故に、能く世間一切の智をして清淨ならしむ。一切の智、本性清淨にして極めて照明なるを以ての故に、能く世間甚深の般若波羅蜜多をして最勝清淨ならしむ」佛是の如く平等智印般若の理趣、清淨の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、「若し是の如きの般若波羅蜜多清淨の理趣を聞くことを得て、信解受持し、讀誦修習すること有らば、一切の貪瞋癡等、客塵煩惱垢穢聚の中に住すと雖も、而も蓮華の猶く一切の客塵垢穢の過失の爲に染せられず、常に能く菩薩の勝行を修習して、疾に無上正等菩提を證せん」

(六)爾時、世尊は復一切三界勝王如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の如來の和合灌頂甚深の理趣、智藏の法門を宣說したまふ。謂ゆる世間灌頂の位を以て施して、當に三界法王の位果を得べし。出世間無上の義を以て施して、當に一切の希願の滿足とを得べし。出世間無上の法を以て施して、一切の法に於て、當に自在なることを得べし。若は世間の財食等を以て施して、當に一切の身語心の樂を得べし。若は種種の財法等を以て施して、能く布施波羅蜜多をして速に圓滿することを得しめ、種種の清淨の禁戒を受持して、能く淨戒波羅蜜多をして速に圓滿することを得しめ、一切の事に於て安忍を修學して、能く安忍波羅蜜多をして速に圓滿することを得しめ、一切の時に於て精進を修習して、能く精進波羅蜜多をして速に圓滿することを得しめ、一切の境に於て靜慮を修行して、能く靜慮波羅蜜多をして速に圓滿することを得しめ、一切の法に於て常

【七】智印金剛章。
【住持智印】正慧によりて身語心智印を具するなり。

【八】無戯論輪字章。
【輪字の法門】般

に妙慧を修して、能く般若波羅蜜多をして速に圓滿することを得しむ。』佛是の如く灌頂の法門、般若の理趣、智藏の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく『若し是の如きの灌頂甚深の理趣、智藏の法門を聞くことを得て、信解受持し、讀誦修習するもの有らば、速に能く諸の菩薩の行を滿足して、疾に無上正等菩提を證せん。』

(七)爾時、世尊は復一切の如來智印持一切佛祕密法門如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の如來の住持智印、甚深の理趣、金剛の法門を宣說したまふ。『謂ゆる具に一切の如來の金剛身印を攝受せば、當に一切の如來の法身を證すべし。若し具に一切の如來の金剛語印を攝受せば、一切の法に於て當に自在を得べし。若し具に一切の如來の金剛心印を攝受せば、一切の定に於て當に自在を得べし。若し具に一切の如來の金剛智印を攝受せば、能く最上の妙身語心を得ること、猶し金剛の動無く壞無きが若し。』佛是の如く如來の智印、般若の理趣、金剛の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく『若し是の如きの智印甚深の理趣、金剛の法門を聞くことを得て、信解受持し、讀誦修習するもの有らば、一切の事業皆能く成辦せん。常に一切の勝事と和合して、修行せんと欲する所の一切の勝智、諸の勝福業、皆速に圓滿して、當に最勝の淨身語心を獲べく、猶し金剛の破壞す可からざるが若く、疾に無上正等菩提を證せん。』

(八)爾時、世尊は復一切無戯論法如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多甚深の理趣、輪字の法門を宣說したまふ。『謂ゆる一切の法は空なり、自性無きが故に。一切の法は

若法輪の轉ぜらるをいふなり。この輪理所有の法門を詮ずるを輪字法と名く。

【九】輪攝如來章。

【廣大輪】勝法、大乘といふに同じ。

無相なり、衆相を離れたるが故に。一切の法は無願なり、所願無きが故に。一切の法は遠離なり、所著無きが故に。一切の法は寂靜なり、永寂滅の故に。一切の法は無常なり、性常無きが故に。一切の法は無樂なり、樂しむ可きに非ざるが故に。一切の法は無我なり、自在ならざるが故に。一切の法は無淨なり、淨相を離るるが故に。一切の法は不可得なり、其性を推尋するに不可得なるが故に。一切の法は不思議なり、其性を思議するに所有無きが故に。一切の法は所有無し、衆緣和合にして假の施設なるが故に。一切の法は戲論無し、本性空寂にして言說を離るるが故に。一切の法は本性淨なり、甚深の般若波羅蜜多本性淨なるが故に。佛是の如く諸の戲論を離れたる般若の理趣、輪字の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、若し此無戲論般若の理趣、輪字の法門を聞くことを得て、信解受持し、讀誦修習するもの有らば、一切の法に於て無礙智を得、疾く無上正等菩提を證せん。

〔九〕爾時、世尊は復一切如來輪攝如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多廣大輪に入る甚深の理趣、平等性の門を宣說したまふ。謂ゆる金剛平等性に入らば、能く一切如來の性輪に入るが故に。義平等性に入らば、能く一切菩薩の性輪に入るが故に。法平等性に入らば、能く一切の法性輪に入るが故に。蘊平等性に入らば、能く一切の蘊性輪に入るが故に。處平等性に入らば、能く一切の處性輪に入るが故に、界平等性に入らば、能く一切の界性輪に入るが故に。諦平等性に入らば、能く一切の諦性輪に入るが故

に。縁起平等性に入らば、能く一切の縁起性輪に入るが故に。寶平等性に入らば、能く一切の寶性輪に入るが故に。食平等性に入らば、能く一切の食性輪に入るが故に。善法平等性に入らば、能く一切の善法性輪に入るが故に。非善法平等性に入らば、能く一切の非善法性輪に入るが故に。有記の法平等性に入らば、能く一切の有記の法性輪に入るが故に。無記の法平等性に入らば、能く一切の無記の法性輪に入るが故に。有漏の法平等性に入らば、能く一切の有漏の法性輪に入るが故に。無漏の法平等性に入らば、能く一切の無漏の法性輪に入るが故に。有爲の法平等性に入らば、能く一切の有爲の法性輪に入るが故に。無爲の法平等性に入らば、能く一切の無爲の法性輪に入るが故に。世間の法平等性に入らば、能く一切世間の法性輪に入るが故に。出世間の法平等性に入らば、能く一切出世間の法性輪に入るが故に。異生の法平等性に入らば、能く一切の異性の法性輪に入るが故に。聲聞の法平等性に入らば、能く一切の聲聞の法性輪に入るが故に。獨覺の法平等性に入らば、能く一切の獨覺の法性輪に入るが故に。菩薩の法平等性に入らば、能く一切の菩薩の法性輪に入るが故に。如來の法平等性に入らば、能く一切の如來の法性輪に入るが故に。有情の平等性に入らば、能く一切の有情の性輪に入るが故に。一切の平等性に入らば、能く一切の性輪に入るが故に。』佛是の如く廣大輪に入る般若の理趣平等の性を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、「若し是の如きの輪性甚深の理趣、平等性の門を聞くことを得て、信解受持し、讀誦修習するもの有らば、

【一〇】供養眞淨章。

【供養甚深】衣食の供養よりも發心修行皆甚深なる供養なるをいふ。

能く諸の平等性に悟入して、疾に無上正等菩提を證せん。」

〔一〇〕爾時、世尊は復一切廣受供養眞淨器田如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多一切供養甚深の理趣、無上の法門を宣說したまふ。『謂ゆる無上正等覺の心を發すは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり、正法を攝護するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の波羅蜜多を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の菩提分法を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の總持等持を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の五眼六通を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の靜慮解脫を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の慈悲喜捨を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の佛不共法を修行するは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は常、若は無常、皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は樂、若は苦、皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は我、若は無我、皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は淨、若は不淨、皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は空、若は不空、皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は有相、若は無相、皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は有願、若は無願、皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供

【二】調伏章。

【忿平等】忿を以てせば一切法を攝受し、調伏するをいふ、人空ならば忿亦空なり。

養を設くるなり、一切の法、若は遠離、若は不遠離皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。一切の法、若は寂靜、若は不寂靜皆不可得なりと觀ずるは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。深般若波羅蜜多に於て、書寫し、聽聞し、受持し、讀誦し、思惟し修習し、廣く有情の爲に宣說流布し、或は自ら供養し、或は轉じて他に施すは、諸の如來に於て廣く供養を設くるなり。』佛是の如く眞淨供養、甚深の理趣、無上の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、『若し是の如きの供養、般若の理趣、無上の法門を聞くことを得て、信解し受持し、讀誦し修習するもの有らば、速に能く諸の菩薩の行を圓滿して、疾に無上正等菩提を證せん。』

【二】爾時、世尊は復一切能善調伏如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、智密を攝受し、有情を調伏する甚深の理趣、智藏の法門を宣說したまふ。『謂ゆる一切の有情平等の性、即ち忿平等の性なり。一切の有情調伏の性、即ち忿調伏の性なり。一切の有情眞法性、即ち忿眞法性なり。一切の有情眞如の性、即ち忿眞如の性なり。一切の有情法界の性、即ち忿法界性なり。一切の有情離生の性、即ち忿離生の性なり。一切の有情實際の性、即ち忿實際の性なり。一切の有情本空の性、即ち忿本空の性なり。一切の有情無相の性、即ち忿無相の性なり。一切の有情無願の性、即ち忿無願の性なり。一切の有情遠離の性、即ち忿遠離の性なり。一切の有情寂靜の性、即ち忿寂靜の性なり。一切の有情不可得の性、即ち忿不可得の性なり。一切の有情無所有の性、即ち忿無所有の性なり。一切

【三】性平等建立章。

【一切の有情等】前に有情についてのみ云ひしも、今は人法に就て平等の義を明し、般若を說明するなり。

の有情離思議の性、即ち忿離思議の性なり。一切の有情無戯論の性、即ち忿無戯論の性なり。一切の有情如金剛の性、即ち忿如金剛の性なり。所以は何ん。一切の有情眞調伏の性は、即ち是れ無上正等菩提なり。亦是れ般若波羅蜜多なり。亦是れ諸佛の一切智智なり。」佛是の如く能善く調伏する甚深の理趣、智藏の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、「若し是の如き調伏般若の理趣、智藏の法門を聞くことを得て、信解し受持し、讀誦し修習するもの有らば、能く自ら忿恚等の過を調伏し、亦能く一切の有情を調伏して、常に善趣に生じて諸の妙樂を受け、現世の怨敵皆慈心を起して、能善く諸の菩薩の行を修行し、疾に無上正等菩提を證せん。」

【三】爾時、世尊は復一切能善建立性平等法如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多一切の法性、甚深の理趣、最勝の法門を宣說したまふ。「謂ゆる一切の有情、性平等なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦性平等なり。一切の法、性平等なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦性平等なり。一切の有情、性調伏なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦性調伏なり。一切の法、性調伏なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦性調伏なり。一切の有情實義有るが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦實義有り。一切の法實義有るが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦實義有り。一切の有情即ち眞如なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち眞如なり。一切の法即ち眞如なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち眞如なり。一切の有情即ち法界なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち法界なり。一切の法即ち法

界なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち法界なり。一切の有情即ち法性なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち法性なり。一切の法即ち法性なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち法性なり。一切の有情即ち實際なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち實際なり。一切の法即ち實際なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち實際なり。一切の有情即ち本空なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち本空なり。一切の法即ち本空なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち本空なり。一切の有情即ち無相なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち無相なり。一切の法即ち無相なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち無相なり。一切の有情即ち無願なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち無願なり、一切の法即ち無願なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち無願なり。一切の有情即ち遠離なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち遠離なり。一切の法即ち遠離なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち遠離なり。一切の有情即ち寂靜なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち寂靜なり。一切の法即ち寂靜なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦即ち寂靜なり。一切の有情不可得なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦不可得なり。一切の法不可得なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦不可得なり。一切の有情無所有なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦無所有なり。一切の法無所有なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦無所有なり。一切の有情不思議なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦不思議なり。一切の法不思議なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦不思議なり。一切の有情無戲論なるが故に、

【罣礙】障礙なり、人法に通達すれば亦障礙なし。

【三】住持藏法章。

【勝藏】如來藏等能く一切佛法の功德を持するなり。

【如來藏】一切の衆生悉く佛性あり普賢の勝德を具するに名く。

【金剛藏】佛智なり、般若金剛藏を以てすれば生死法の壞して堅固なり。

【正法藏】般若の直教なり。

甚深の般若波羅蜜多も亦無戲論なり。一切の法無戲論なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦無戲論なり。一切の有情無邊際なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦無邊際なり。一切の法無邊際なるが故に、甚深の般若波羅蜜多も亦無邊際なり。一切の有情業用有るが故に、當に知るべし、般若波羅蜜多も亦業用有り一切の法業用有るが故に、當に知るべし、般若波羅蜜多も亦業用有り。」佛是の如く性平等性甚深の理趣最勝の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、「若し是の如きの平等の般若の理趣最勝の法門を聞くことを得て、信解し受持し、讀誦し修習するもの有らば、則ち能く平等の法性、甚深の般若波羅蜜多に通達して、法と有情とに於て心罣礙する無くして、疾に無上正等菩提を證せん。」

（一三）爾時、世尊は復一切住持藏法如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、一切の有情、住持遍滿甚深の理趣、勝藏の法門を宣說したまふ。「謂ゆる一切の有情皆如來藏なり、普賢菩薩の自體遍ずるが故に。一切の有情皆金剛藏なり、金剛藏の灌灑する所なるを以ての故に。一切の有情皆正法藏なり、一切皆正語に隨ひて轉ずるが故に。一切の有情皆妙業藏なり、一切の業事の加行依なるが故に。」佛是の如く有情住持甚深の理趣、勝藏の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、「若し是の如きの遍滿般若の理趣、勝藏の法門を聞くことを得て、信解し受持し、讀誦し修習するもの有らば、則ち能く勝藏の法性に通達して、疾に無上正等菩提を證せん。」

（一四）爾時、世尊は復究竟無邊際法如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多究竟住持

【轉ず】動轉なり、正語に依て聖法を行ずれば堅實法を得るなり。

【加行依】加力成業の所依處なり、有情ありて業事成ずるをいふ。

【四】無邊際法章。

【五】如來秘密章。

【大樂金剛不空】金剛薩埵の別名、大樂は無漏樂を得ること、金剛は一切の障法を破すること、不空は妙法の非空無果なるをいふ。

【金剛法性】諸佛の般若諸法中第一なるに名く。

【初中後位】一切圓滿なるをいふ。

【大貪等】貪欲等惡として斷捨すべきものなし、小我の小貪を非とする

法義平等金剛の法門を宣說したまふ。『謂ゆる甚深の般若波羅蜜多無邊なるが故に、一切の如來も亦無邊なり。甚深の般若波羅蜜多無際なるが故に、一切の如來も亦無際なり。甚深の般若波羅蜜多一味なるが故に、一切の法も亦一味なり。甚深の般若波羅蜜多究竟なるが故に、一切の法も亦究竟なり。』佛是の如く無邊無際究竟の理趣、金剛の法を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく『若し是の如きの究竟般若の理趣、金剛の法門を聞くことを得て、信解し受持し、讀誦し修習するもの有らば、一切の障法皆悉く消除し、定んで如來の執金剛の性を得、疾く無上正等菩提を證せん。』

（一五）爾時、世尊は復遍照如來の相に依りて、諸の菩薩の爲に般若波羅蜜多、諸の如來の祕密法性及び一切法の無戲論性大樂金剛、不空神咒、金剛の法性、初中後位最勝第一なることを得る甚深の理趣、無上の法門を宣說したまふ。『謂ゆる大貪等の最勝成就すれば、大菩薩をして大樂の最勝成就せしむ。大樂の最勝成就すれば、大菩薩をして一切如來の大覺の最勝成就せしむ。一切如來の大覺の最勝成就すれば、大菩薩をして一切の大魔を降伏する最勝成就せしむ。一切の大魔を降伏する最勝成就すれば、大菩薩をして普大三界自在の最勝成就せしむ。普大三界自在の最勝成就すれば、大菩薩をして能く遺餘無く有情界を拔きて一切の有情を利益し安樂ならしめ、畢竟大樂の最勝成就せしむ。所以は何ん。乃ち生死流轉の住處に至り、勝智有る者は此に齊りて、常に能く無等の法を以て有情を饒益して寂滅に入らず。又般若波羅蜜多方便善巧成立の勝智を以て、善く一切

清淨の事業を辦じて、能く諸行をして皆清淨なることを得しむ。又貪等を以て世間を調伏すること普遍く恆時にす、乃至諸行をして皆清淨ならしめ自然に調伏す。又蓮華の形色光淨にして一切の穢物の染する所と爲らざるが如く、是の如く貪等世間を饒益し、過有過に住して常に染すること能はず。又大貪等能く清淨を得て大樂大財三界に自在なり。常に能く堅固にして有情を饒益す。』

（一六）爾時、如來は即ち神咒を說きたまはく、

納慕薄伽筏帝、鉢剌壤波羅弭多曳、薄底、筏擦、羅曳、罨跛履弭多寠拏曳、薩縛呾他揭多、跋履布視多曳、薩縛呾他揭多、奴壤多奴壤多、邲壤多曳、呾姪他、鉢剌吩、鉢剌吩、莫訶鉢剌吩、鉢剌壤娑婆羯囉、鉢剌壤路迦羯囉、案駄迦囉、毘談末濕、悉遞蘇悉遞、悉殿都漫、薄伽筏底薩防伽孫達囉、薄底筏擦囉、鉢剌娑履多喝悉帝、參磨溼嚩娑羯囉、勃陁勃陁悉陁悉陁、劍波劍波、浙羅浙羅、曷邏嚩曷邏嚩、阿曷車阿揭車、薄伽筏底、毫毘濫婆、莎訶

『是の如きの神咒は三世の諸佛皆共に宣說し、同じく護念したまふ所なり。能く受持する者は一切の障滅して、心の所欲に隨ひて成辦せざること無く、疾に無上正等菩提を證せん。』

（一七）爾時、如來は復神咒を說きたまはく、

納慕薄伽筏帝、鉢剌壤波囉弭多曳、呾姪他、牟尼達謎、僧揭洛訶達謎、遏奴揭洛訶達謎

のみ、一切の衆生を愛貪するを大貪の最勝成就とす。【大樂の最勝】一切相を離れて法苑樂を得、所有る諸樂に勝れたるをいふ。【大覺】自證化他圓滿するなり。【普大三界自在】三界に周遍して主となるをいふ。【流轉の住處】生死の盡くるをいふ。【勝智有る者】我及我所、人法の執を離れて般若を學する菩薩なり。【無等の法】無相般若なり。【寂滅に入らず】人法相を離るるを以て自他の相なければ、有情に隨つて解脫涅槃に安住せざるなり。【過有過】過法罪惡と有過の人法となり。【二六】神呪章今第一の神呪なり。

【一七】第二の神咒。

【一八】第三の神咒。

【一九】結勸、經の勝德を歎ずるなり。

吡𠯗底達囇、薩馱奴揭洛訶達囇、吠室洛末拏達囇、參漫多奴跛履筏刺咀那達囇、蹇拏僧揭洛訶達囇、薩縛迦羅跛履、波刺那達囇、莎訶。

『是の如きの神咒は是れ諸佛の母なり。能く誦持する者は一切の罪滅して常に諸佛を見、宿住智を得て、疾に無上正等菩提を證せん。』

（一八）爾時、如來は復神咒を說きたまはく。

納慕薄伽筏帝、鉢刺壤波囉弭多曳、咀姪他、室囇曳、室囇曳、室囇曳、室囇曳細、莎訶

『是の如きの神咒は大威力を具ふ。能く受持する者は業障消除し、聞く所の正法を總持して忘れず、疾に無上正等菩提を證せん。』

（一九）爾時、世尊は是咒を說き已りて、金剛手菩薩等に告げて言はく、『若し諸の有情にして每日の旦に於て、至心に是の如きの般若波羅蜜多甚深の理趣、最勝の法門を聽誦すること間斷無き者は、諸の惡業障皆消滅することを得、諸の喜樂常に現在前して、大樂金剛不空神咒、現身に必ず得し、一切の如來金剛祕密最勝成就を究竟し成滿して、久しからざるに當に大執金剛及び如來の性を得べし。若し有情の類、未だ多佛の所にて衆の善根を植ゑ久しく大願を發さざれば、此般若波羅蜜多甚深の理趣、最勝の法門に於て聽聞し、書寫し、讀誦し、供養し、恭敬し、思惟し、修習すること能はず。要ず多佛の所にて衆の善根を植ゑ、久しく大願を發して、乃ち能く此甚深の理趣、最勝の法門に於て、下至一句一字をも聽聞す、況や能く具足して讀誦し受持せんをや。若し諸の有情、八十殑伽沙等俱胝那

【倶胝】コーテイ(Koṭi)十萬なり。
【那庾多】ナユタ(Nayuta)一萬倶胝なり。
【阿素洛】阿修羅に同じ。
【制多】又支提チヤイチヤ(Caitya)といふ塔祠なり。
【(二〇)】流通分。在會の得益歡喜を明す。

庾多の佛を供養恭敬し、尊重讃歎せば、乃ち能く具足して此般若波羅蜜多甚深の理趣を聞かん。若し地方に流行する所の此經をば一切の天人、阿素洛等皆應に、供養すること佛の制多の如くすべし。此經を置きて身或は手に在くこと有らんに、諸天人等皆應に禮敬すべし。若し有情の類此經を受持せば、多倶胝劫宿住智を得、常に勤めて精進して諸の善法を修するに、惡魔外道も稽留すること能はず、四大天王及び餘の天衆、常に隨ひて擁衛して未だ曾て暫くも捨てず、終に横死し、枉て衰患に遭はず。諸佛菩薩常に共に護持して一切の時に善增し、惡滅じ、諸の佛土に於て願に隨ひて往生して、乃至菩提まで惡趣に墮せざらしめん。諸の有情の類此經を受持せば、定んで無邊勝利の功德を獲ん。我れ今略して是の如く少分を說けり。」

(二〇)時に薄伽梵是經を說き已るに、金剛手等の諸の大菩薩及び餘の天衆、佛の所說を聞きて、皆大に歡喜し信受して奉行せり。

大般若波羅蜜多經第十般若理趣分　終

摩訶般若波羅蜜多心經

經典部
第四卷

【觀自在菩薩】觀世音の新譯。アワローキテーシュヷラ（Avalokiteśvara）の譯。
【五蘊皆空】諸法無自性の故に。
【舍利子】シャーリプトラ（Śāriputra）のこと。
【色は空に異ならず等】相依相卽を明す。
【空中には色もなく等】諸法空には六種相ある故に空中に五蘊法なし。
【眼耳乃至意識界なし】十二處十八界を遣捨す。
【無明…老死の盡くるなし】緣生門を遣す空中に流轉門なきを以て無明等なく還滅なきを以て無明盡等もなし
【苦…道なく】四諦門を遣す。
【智もなく等】智斷門を遣す。
【菩提薩埵】ボーディサットワ（Bodhisattva）覺有情

摩訶般若波羅蜜多心經

唐三藏法師玄奘譯す

觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊皆空なりと照見して一切の苦厄を度したまふ。舍利子、色は空に異ならず、空は色に異ならず、色は卽ち是れ空なり、空は卽ち是れ色なり。受想行識も亦復是の如し。舍利子、是れ諸法は空相にして、不生不滅、不垢不淨、不增不減なり。是故に空中には色も無く、受想行識もなく、眼耳鼻舌身意も無く、色聲香味觸法もなく、眼界も無く、乃至意識界も無し。無明もなく、亦無明の盡くることもなし。乃至老死もなく、亦老死の盡くることもなし。苦集滅道もなく、智もなく亦得もなし。所得なきを以ての故に。菩提薩埵は般若波羅蜜多に依るが故に心に罣礙なし、罣礙なきが故に恐怖あることなし。一切の顚倒夢想を遠離して涅槃を究竟す。三世の諸佛は般若波羅蜜多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。故に知りぬ、般若波羅蜜多は是れ大神呪なり、是れ大明呪なり、是れ無上呪なり、是れ無等等呪なり。能く一切の苦を除き、眞實にして虛しからず、故に般若波羅蜜多の呪を說く。卽ち呪を說いて曰はく。

羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶、般若心經。

と譯す。【無所得の故に等】眞性の空理は六相を離るる故に發意の菩薩は彼の觀智により慧を心と倶ならしめ空を證し障礙を斷ずとなり【大神呪等】呪とは妙慧の證空斷障に名く、神用測るなきに大神呪、遣暗除疑に大明呪、二乘を超過するに無上呪、佛慧と均しきを無等等呪といふ。【羯諦羯諦】度度といふ般若の大功能は自度度他なり【波羅羯諦】波羅は波羅蜜にして度彼岸なり、彼岸は度すべき處の意。【波羅僧羯諦】僧羯諦は到竟。彼岸を究竟するなり。【菩提薩婆訶】菩提は彼岸の體、薩婆訶は速疾。妙慧は能く速疾に菩提の岸に到る。

摩訶般若波羅蜜多心經（まかはんにやはらみつたしんぎやう）　終

金光明最勝王經

經典部
第四卷

【序品】佛鷲峯山に在して此の經及吉祥懺悔の要法を述べ、四方の四佛來りて加護證明するを明す。

【一】通序、說處及び在會の衆を明す、初に阿羅漢。

【薄伽梵】バガヴァン(Bhagavam)世尊と譯す。教主釋尊を指す。

【王舍城】ラージャグリハ(Rājagṛha)摩迦陀國の都城。

【鷲峯山】或は靈鷲山、梵にグリドラクータ(Gṛdhrakūṭa)といふ。

【最清淨等】靈鷲山の德勝を擧ぐ。

【苾芻】普通に比丘といふ、ビクシユ(Bhikṣu)の音譯、具足戒を受けたる佛弟子なり。

【阿羅漢】アルハン(Arhan)不殺、應供等と譯す。

【能善く等】以下十六句羅漢の德を

金光明最勝王經 卷第一

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

序品第一

(一)是の如く我聞けり。一時薄伽梵、王舍城の鷲峯山の頂に在したまふ。最清淨、甚深の法界、諸佛の境、如來の居す所に於て、大苾芻衆九萬八千人と與なり、皆是阿羅漢なり。能善く調伏すること大象王の如く、諸漏已に除き、復煩惱無し。心善く解脫し、慧善く解脫し、所作已に畢り、諸の重擔を捨て、己利を逮得し、諸の有結を盡くし、大自在を得て、清淨の戒に住し、善巧、方便、智慧もて莊嚴し、八解脫を證し、已に彼岸に到る。其名を具壽阿若憍陳如、具壽阿說侍多、具壽婆濕波、具壽摩訶那摩、具壽婆帝利迦、大迦攝波、優樓頻螺迦攝、伽耶迦攝、那提迦攝、舍利子、大目乾連と曰ふ。唯阿難陀のみ學地に住す。是の如き等の諸大聲聞各晡時に於て定より起ちて、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝して退いて一面に坐す。

(二)復菩薩摩訶薩、百千萬億人と俱なり。大威德あること大龍王の如く、名稱普く聞えて、衆に知識せられ、施戒清淨にして常に奉持を樂ひ、忍、行、精勤、無量劫を經、諸の

歎ず。

【諸漏】諸の煩惱。

【有結】三有に結縛せらるるなり。

【八解脫】八背捨ともいふ、欲界の五欲を棄捨し執著を斷じ、解脫を得て羅漢果を證する觀法なり。

【具壽】普通に長老といふ。アーユスマン(Āyuṣman)の譯。

【阿若憍陳如】アジュニャータカウンディニヤ(Ajñāta-Kauṇḍinya)

【阿說侍多】アシユヴジット(Aśvajit)威儀端正を以て名あり。

【婆濕波】ヴーシユパ(Vāspa)氣息と譯す。

【摩訶那摩】マハーナーマン(Mahānāman)大名と譯す。

【婆帝利迦】ブハドリカ(Bhadrika)

以上は釋尊初度の五比丘なり。

靜慮を超え、繫念現前し、慧門を開闡し、善く方便を修す。自在に微妙の神通に遊戯し、總持を逮得し、辯才盡くる無し。諸の煩惱を斷じ、累染皆な亡び、久しからずして當に一切種智を成ずべし。魔軍の衆を降し、法鼓を擊ち、諸の外道を制し、淨心を起さしむ。妙法輪を轉じ、人天の衆を度し、十方の佛土悉く已に莊嚴し、六趣の有情益を蒙らざる無く、大智を成就し、大忍を具足し、大慈悲心に住し、心大堅固力あり。諸佛に歷事し、般涅槃せず。弘誓の心を發し、未來際を盡し、廣く佛の所に於て、深く淨因を種ゑ、三世の法に於て無生忍を悟り、二乘所行の境界を逾ゑ、大善巧を以て世間を化導し、大師の教に於て、悉く能く敷演し、秘密の法、甚深の空性、皆已に了知し、復疑惑無し。其名を無障礙轉法輪菩薩、常發心轉法輪菩薩、常精進菩薩、不休息菩薩、慈氏菩薩、妙吉祥菩薩、觀自在菩薩、總持自在王菩薩、大辯莊嚴王菩薩、妙高山王菩薩、大海深王菩薩、寶幢菩薩、地藏菩薩、虛空藏菩薩、寶手自在菩薩、金剛手菩薩、歡喜力菩薩、大法力菩薩、大莊嚴光菩薩、大金光莊嚴菩薩、淨戒菩薩、常定菩薩、極清淨慧菩薩、堅固精進菩薩、心如虛空菩薩、不斷大願菩薩、施藥菩薩、療諸煩惱病菩薩、醫王菩薩、歡喜高王菩薩、得上授記菩薩、大雲淨光菩薩、大雲持法菩薩、大雲名稱喜樂菩薩、大雲現無邊稱菩薩、大雲師子吼菩薩、大雲牛王吼菩薩、大雲吉祥菩薩、大雲寶德菩薩、大雲日藏菩薩、大雲月藏菩薩、大雲星光菩薩、大雲火光菩薩、大雲電光菩薩、大雲雷音菩薩、大雲慧雨充遍菩薩、大雲清淨雨王菩薩、大雲花樹王菩薩、大雲青蓮花香菩薩、大雲寶栴檀香清涼身菩薩、大雲除闇菩薩、大雲破翳菩薩と曰ふ。是の如

き等の無量の大菩薩衆あり。各〻晡時に於て定より起ちて、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝して退いて一面に坐す。

(三)復梨車毘童子五億八千あり、其名を師子光童子、師子慧童子、法授童子、因陀羅授童子、大光童子、大猛童子、佛護童子、法護童子、僧護童子、金剛護童子、虚空護童子、虚空吼童子、寶藏童子、吉祥妙藏童子と曰ふ。是の如き等の人を上首と爲す、悉く皆無上菩提に安住し、大乘の中に於て深信歡喜す、各〻晡時に於て、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝して退いて一面に坐す。

(四)復四萬二千の天子あり。其名を喜見天子、喜悅天子、日光天子、月髻天子、明慧天子、虚空淨慧天子、除煩惱天子、吉祥天子と曰ふ。是の如き等の天子を上首と爲す、皆弘願を發し大乘を護持し、正法を紹隆して能く絕えざらしむ。各〻晡時に於て、往いて佛の所に詣り佛足を頂禮し、右に繞ること三匝して退いて一面に坐す。

(五)復二萬八千の龍王あり。蓮華龍王、翳羅葉龍王、大力龍王、大吼龍王、小波龍王、持駛水龍王、金面龍王、如意龍王なり。是の如き等の龍王を上首と爲す。大乘の法に於て、常に樂ひて受持し、深く信心を發し稱揚し擁護す。各〻晡時に於て、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝して退いて一面に坐す。

(六)復三萬六千の諸の藥叉衆あり。毘沙門天王を上首と爲す。其名を菴婆藥叉、持菴婆藥叉、蓮花光藏藥叉、蓮花面藥叉、顰眉藥叉、現大怖藥叉、動地藥叉、呑食藥叉と曰ふ。是

【大迦攝波】マハーカーシャパ(Mahākāśyapa) 上行第一の弟子。
【優樓頻螺迦攝】ウルヴィルヴァーカシヤパ(Uruvilvākāśyapa)三迦葉の一
【伽耶迦攝】ガヤーカーシヤパ(Gayākāśyapa)三迦葉の一。
【那提迦攝】ナディカーシヤパ(Nadikāśyapa)三迦葉の一。
【舍利子】シャーリプトラ(Śāriputra) 智慧第一の弟子。
【大目乾連】マウドガルヤーヤナ(Maudgalyāyana)神通第一の佛弟子
【阿難陀】アーナンダ(Ānanda)多聞第一の佛弟子。
【學地】未だ羅漢を證せざる聲聞。
【二】次に菩薩。
【大威德等】已下二十五句は菩薩の德を歎ず。

【果染】積聚したる果汚、即ち煩惱の意なり。
【一切種智】薩婆若を得たる如來の智。
【六趣】天、人、阿修羅、畜生、餓鬼、地獄の六道なり。
【般涅槃】パリニルヴーナ（Parinirvāna）涅槃に入ること。
【二乘所行の境界】聲聞緣覺は共に自利の證果にして他の用なし。
【大師】如來をいふ。
【三】次に梨車毘童子。
【梨車毘】リッチヤヸ（Liccahavi）毘舍離國に共和制を布ける一民族。
【四】次に諸天子
【天子】デーヴァプトラ（Devaputra）天上界の人人。
【五】次に龍王。
【六】藥叉衆。
【藥叉】ヤクシャ（Yaksa）八部衆の

等の藥叉、悉く皆如來の正法を愛樂し、深心に護持して、疲懈を生ぜず。各晡時に於て、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝して退いて一面に坐す。

（七）復四萬九千の揭路荼王あり。香象勢力王を上首と爲す。及び餘の健闥婆、阿蘇羅、緊那羅、莫呼洛伽等、山林河海一切の神仙、並に諸の大國王、あらゆる王衆、中宮、后妃、淨信の男、女、人、天、悉く皆雲集せり。咸く願ひて無上の大乘を擁護し、讀誦し、受持し、書寫し、流布す。各晡時に於て、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、退いて一面に坐す。是の如き等の聲聞、菩薩、人、天、大衆、龍神、八部、既に雲の如く集り已り各各至心に合掌恭敬し、尊容を瞻仰し、目未だ曾て捨てず、願樂して殊勝の妙法を聞かんことを欲す。

（八）爾時、薄伽梵、日の晡時に於て、定より起ちて、大衆を觀察し、頌を說きて曰はく、

金光明の妙法、最勝諸經の王は
甚深にして得て聞き難き諸佛の境界なり
我當に大衆の爲に、是の如きの經を宣說すべし
並に四方の四佛、威神共に加護せん
東方の阿閦尊、南方の寶相佛
西方の無量壽、北方の天鼓音
我復妙法吉祥懺の中の勝れたるを演べて

一。
【七】揭路荼王。
【揭路荼】ガルダ(Garuda)金翅鳥と譯す、八部衆の一。
【健闥婆】ガンダルヷ(Gandharva)天の樂神。
【阿蘇羅】アスラ(Asura)非天と譯す。
【緊那羅】キンナラ(Kinnara)天の歌妓神。
【莫呼洛伽】マホーラガ(Mahoraga)大腹行といふ。共に八部衆なり。
【八】已下發起序
【阿閦佛】アクシヨービヤ(Aksobhya)
【寶相佛】パトラケータ(Patraketa)
【無量壽】アミターバ(Amitābha)阿彌陀佛なり。
【天鼓音】ヅンヅビスヷラー(Dundubhisuarā)
【護世の四王衆】持國、增長、廣目

能く一切の罪を滅し、諸の惡業を淨除せん
及び衆の苦患を消し、常に無量の樂
一切智、根本の諸の功德莊嚴を與へん
衆生身具せずして、壽命將に損減せんとし
諸の惡相現前し、天神皆捨離し
親友瞋恨を懷き、眷屬悉く分離し
彼此共に乖違し、珍財皆散失し
惡星變怪を爲し、或は邪蠱に侵さる
若し復憂愁多く、衆苦の逼るところ
睡眠するも惡夢を見ん。此に因つて煩惱を生せん
是人當に澡浴し、應に鮮潔の衣を著すべし
此妙經王の甚深なる佛の讚ずる所に於て
專注して心亂るるなく、讀誦し聽き受持すべし
此經の威力に由りて、能く諸の災横を離れ
及び餘の衆の苦難、皆除滅せざる無し
護世の四王衆、及び大臣眷屬
無量の諸の藥叉、一心に皆擁衞し

多聞の四天王。
【辨才天女】ラクシュミー（Laksmi）大吉祥天女のこと。
【尼連禪河神】世尊滅度の尼連禪河の女神、訶利底母はハーリティー（Hariti）鬼子母神なり。
【堅牢地神】敎法流布の處に赴き法座の下にありて敬ひ護る神なりといふ。

大辯才天女、尼連河水神
訶利底母神、堅牢地神衆
梵王、帝釋主、龍王、緊那羅
及び金翅鳥王、阿蘇羅、天衆
是の如きの天神等並に其眷屬を將ゐて
皆來りて是人を護り、晝夜常に離れず
我當に是經の甚深なる佛の行處を說くべし
諸佛の秘密敎は、千萬劫にも逢ひ難し
若し是經を聞きて、能く他の爲に演說し
若は心に隨喜を生じ、或は供養を設くるものあらば
是の如き諸人等、無量劫に於て
常に諸の天人龍神の爲に恭敬せらるべし
此福聚の無量なる、數恆沙に過ぎん
是經を讀誦するものは、當に斯功德を獲べし
亦十方尊、深行の諸の菩薩は
持經者を擁護し、諸の苦難を離れしむと爲す
是經を供養するものは、前の如く身を澡浴し

飲食及香華に恆に慈悲の意を起せ
若し是經を聽かんと欲せば、心淨くして垢なく
常に歡喜の念を生じ、能く諸の功德を長ぜしめよ
若し尊重の心を以て、是經を聽聞せば
善く人趣に生じ、諸の苦難を遠離せん
彼の人善根熟し、諸佛に讚ぜられて
方に是經、及び懺悔の法を聞くことを得ん

如來壽量品第二

(一)爾時、王舍大城に、一の菩薩摩訶薩あり。名けて妙幢と曰ふ。已に過去の無量倶胝那庾多百千の佛の所に於て、承事し、供養し、諸の善根を植ゑたり。是時に妙幢菩薩、獨り靜處に於て、是思惟を作さく、『何の因緣を以て釋迦牟尼如來の壽命短促にして、唯八十年なりや』と。復是念を作さく、『佛の說きたまふ所の如く、二の因緣ありて壽命長きを得。云何が二と爲す、一には生命を害せず、二には他に飲食を施す。然るに釋迦牟尼如來、曾て無量百千萬億無數大劫に於て、生命を害したまはず。十善道を行ひ、常に飲食を以て、一切飢餓の衆生に惠し、乃至已が身の血肉骨髓、亦持つて施與して飽滿することを得しめ

【如來壽量品】如來の壽命は無量にして法身は常在なり、短促の壽を示現するは惟在纏の衆生を化導するのみなるを明す。
【一】妙幢菩薩佛壽の短促なるを疑へるに對し四佛壽命の無窮なることを說示す。
【妙幢】梵にルチラケーツ（Rucira ketu）といふ。
【倶底那庾多】コーチ・アユタ（Koti-ayuta）倶底は億那庾多は兆。

【贍部洲】梵にジヤムブドヸーパ(Jambudvīpa)といふ、此の人界を指す、須彌山の南に位す。

たまへり。況や餘の飲食をや。」

時に彼の菩薩、世尊の所に於て、是念を作す時、佛の威力を以て、其室忽然として廣博嚴淨に、帝靑、瑠璃種種の衆寶、雜彩間り飾り、佛の淨土の如し、妙香の氣ありて、諸天の香に過ぎ、芬馥として充滿せり。其四面に於て、各上妙の師子の坐有り、四寶もて成ずる所、天の寶衣を以て其上に敷く。復此座に於て、妙蓮花あり、種種の珍寶を以て嚴飾と爲す。量如來に等しく、自然に顯現せり。蓮花の上に於て四の如來あり。東方に不動、南方に寶相、西方に無量壽、北方に天鼓音。是四の如來、各其座に於て加趺して坐したまへり。大光明を放ちて、周遍く王舍大城及び此三千大千世界乃至十方恆河沙等の諸佛の國土を照曜し、諸の天花を雨らし、諸の天樂を奏せり。

爾時、此贍部洲中、及び三千大千世界に於て、あらゆる衆生、佛の威力を以て、勝妙の樂を受け、乏少有ること無し。若し身の具せざるは皆具足を蒙り、盲者は能く視、聾者は聞くを得、瘂者は能く言ひ、愚者は智を得、若し心亂るる者は本心を得、若し衣無きものは衣服を得、惡み賤しまるる者は人に敬せられ、垢穢あるものは身淸潔なり。此世間に於て、あらゆる利益、未曾有の事、悉く皆顯現せり。

爾時、妙幢菩薩、四如來及び希有の事を見、歡喜踊躍し、合掌して一心に諸佛殊勝の相を瞻仰し、亦復釋迦牟尼如來の無量の功德を思惟し、唯壽命に於て疑惑の心を生ず。「云何が如來の功德無量なるに、壽命短促して唯八十年なる。」

爾時、四佛、妙幢菩薩に告げて言はく、『善男子、汝今如來壽命の長短を思忖すべからず。何を以ての故に。善男子、我等、諸天世間梵、魔、沙門、婆羅門等、人及び非人、能く佛の壽量を算知して、其齊限を知るものある無し、惟無上正遍知者を除く。』

時に四如來、釋迦牟尼佛の所有の壽量を說かんと欲し、欲色界の天、諸龍、鬼神、健闥婆、阿蘇羅、揭路茶、緊那羅、莫呼洛伽及び、無量百千億、那庾多の菩薩、摩訶薩をして、悉く來り集會し、妙幢菩薩の淨妙の室中に入らしむ。

爾時、四佛大衆の中に於て、釋迦牟尼如來、所有の壽量を顯はさんと欲し、頌を說きて曰はく、

一切の諸の海の水は、其渧數を知るべきも
能く釋迦の壽量を數へ知るもの有ること無し
諸の妙高山を析き、芥の如くして、數を知るべきも
能く釋迦の壽量を算知するものあることなし
一切大地の土、其塵の數を知るべきも
能く釋迦の壽量を筭知するものあることなし
假使虛空を量り、邊際を盡し得べきも
能く釋迦の壽量を度り知るものあることなし
若人住すること億劫、力を盡して、常に算數するも

【我見】我我所に執するもの、人見は有情に執するもの、衆生見は數數諸趣に往いて厭ふなきもの、壽者は現に命あり未來にも更にありと執するもの、我我所見は五蘊に依りて十五見等を起し、斷常見は即ち邊見にして、前者は意識の斷滅を執し、後者は共の常住不變を執す◎

亦復世尊の壽量を知ること能はず
衆生の命を害せざると、及び飲食を施すと
斯二種の因に由り、壽命長遠なるを得たり
是故に大覺尊の壽命は數を知り難し
劫の邊際無きが如く、壽量亦是の如し
妙幢汝當に知るべし、應に疑惑を起すべからず
最勝の壽は量り無し。能く數を知るものなし

爾時、妙幢菩薩、四如來の釋迦牟尼佛の壽量の限なきを說くを聞きて、白して言さく、『世尊云何が如來は是の如き短促の壽量を示現するや。』時に四世尊、妙幢菩薩に告げて言はく『善男子、彼釋迦牟尼佛、五濁の世に於て出現の時、人の壽百年にして、性を稟ることと下劣、善根微薄にして、復信解なし。此諸の衆生、多く我見、人見、衆生、壽者、養育の邪見、我我所見、斷、常見等あり。此諸の異生、及諸の外道、是の如き等の類を利益し、正解を生ぜしめて、速に無上菩提を成就するを得しめんと欲するが爲に、是故に釋迦牟尼如來、是の如き短促の壽命を示現す。善男子、然も彼の如來、衆生に涅槃を見し已り、難遭の想、憂苦等の想を生ぜしめ、佛世尊所說の經教に於て、速に當に受持し、讀誦し、通利し、人の爲に解說して、謗毀を生ぜざらしめんと欲す。是故に如來斯短壽を現ず。何を以ての故に。彼諸の衆生、若し如來の般涅槃せざるを見て、恭敬難遭の想を生

【烏曇跋花】ウドンバラ(Udumbara)瑞應華と譯す、三千年に一度開花すといふ又天下に佛ある時開花すともいふ。

【二】佛自ら常安を陳ぶるを明す。

ぜざれば、如來所說の甚深の經典は、亦た受持し、讀誦し、通利し、人の爲に宣說せざらん。所以は何ん。常に佛を見るを以て尊重せざるが故に。善男子、譬へば人あり。其父母の多く財產あり、珍寶、豐に盈つるを見て便ち財物に於て、希有難想の想を生ぜず。所以は何ん、父の財物に於て常想を生ずるが故に。善男子彼諸の衆生も亦復是の如し。若し如來涅槃に入らざるを見ば、希有難想の想を生ぜず。所以は何ん、常見に出るが故に。善男子、譬へば人あり、父母貧窮にして、資財乏少ならんに、然るに彼貧人或は王家或は大臣の舍に詣り、其倉庫に種種の珍寶悉く皆盈滿するを見て、希有の心、難遭の想を生ず。時に彼貧人財を求めんと欲するが爲に、廣く方便を設け、策勤して怠ること無きが如し。所以は何ん。貧窮を捨て、安樂を受けんが爲の故に。善男子、彼諸の衆生も亦復是の如し。若し如來、涅槃に入るを見て、難遭の想乃至憂苦等の想を生ぜば、復是念を作さん、「無量劫に於て、諸佛如來の世に出現する、烏曇跋花の時に乃一たび現ずるが如し。」彼諸の衆生、希有の心を生じ、難遭の想を起し、若し如來に遇はば、心に敬信を生ぜん。正法を說くを聞きて、實語の想を生じ、あらゆる經典悉く皆受持し、毀謗を生ぜず。善男子、是因緣を以て、彼佛世尊、久しく世に住せずして、速に涅槃に入る。善男子、是諸の如來、是の如き等の善巧方便を以て、衆生を成就す。」爾時、四佛、是語を說き已りて、忽然として現ぜず。

(二)爾時、妙幢菩薩摩訶薩、無量百千の菩薩及び無量億那庾多百千の衆生と與に、倶に共に

往いて鷲峰山中、釋迦牟尼如來、正遍知の所に詣り、佛足を頂禮して一面に在りて立てり。

時に妙幢菩薩、上の如き事を以て具に世尊に白す。

時に四如來、亦鷲峰に詣りて釋迦牟尼佛の所に至り、各本方に隨ひて座に就きて坐し、侍者の菩薩に告げて言はく、『善男子、汝今釋迦牟尼佛の所に詣り、我が爲に問を致すべし。少病、少惱、起居輕利、安樂行なりや不やと』と。復是言を作したまはく、『善い哉善い哉、釋迦牟尼如來、今金光明經甚深の法要を演說すべし。一切の衆生を饒益して、饑饉を除去し安樂を得しめんと欲するが爲に、我當に隨喜すべし』と。時に彼侍者、各釋迦牟尼佛の所に詣り、雙足を頂禮し、却きて一面に住し、倶に佛に白して言さく、『彼天人師、問を致すこと無量なり『少病、少惱、起居輕利、安樂行なりや、不や』と。復是言を作したまはく「善い哉善い哉釋迦牟尼如來、今金光明經、甚深の法要を演說すべし。一切衆生を利益し、飢饉を除去し、安樂を得しめんが爲に」と。『爾時、釋迦牟尼如來應正等覺、彼侍者の諸の菩薩に告げて言はく、『善い哉善い哉、彼四如來、乃ち能く諸の衆生の饒益、安樂の爲に、我を勸請して正法を宣揚せしむ』と。

爾時、世尊、而も頌を說きて曰はく、

我常に鷲山に在り、此經寶を宣說す
衆生を成就するが故に、般涅槃を示現す
凡夫は邪見を起し、我が說く所を信ぜず

彼を成就する爲の故に、般涅槃を示現す

〔三〕時に大會の中、婆羅門あり。姓は憍陳如、名を法師授記と曰ふ、無量百千の婆羅門衆と與に、佛を供養し已り、世尊般涅槃に入ると說くを聞きて、涕淚交も流れ、前みて佛足を禮して白して言さく『世尊、若し實に如來は諸の衆生に於て大慈悲あり、憐愍し利益して安樂を得しむること、猶し父母の如く、餘に等しきもの無く、能く世間の爲に、歸依處となること、淨滿月の如く、大智慧を以て、能く照明を爲すこと、日の初めて出づるが如く、普く衆生を觀て、愛すること偏黨無き、羅怙羅の如くんば、惟願くば世尊、我に一願を施したまへ。』

爾時、世尊默念として止みたまふ。佛の威力の故に、此衆中に於て、梨車毘童子の一切衆生喜見と名くるものあり。婆羅門憍陳如に語りて言はく『大婆羅門、汝今佛より、何の願を乞はんと欲するや、我能く汝に與へん。』婆羅門言はく『童子、我無上世尊を供養せんと欲す。今如來より、舍利の芥子許りの如きを求め請はんとす。何を以ての故に、我曾て說くを聞く「若し善男子、善女人、佛舍利の芥子許りの如きを得て、恭敬供養せば、是人當に三十三天に生じて帝釋となるべし」と。』

是時、童子、婆羅門に語りて曰はく『若し三十三天に生じ、勝報を受けんことを欲願せば、應當に至心に是金光明最勝王經を聽くべし。諸經の中に於て最も殊勝たり。解し難く入り難し。聲聞獨覺の知る能はざる所、此經能く無量無邊の福德の果報を生じ、乃至

【三】喜見童子重ねて如來の不滅なるを說成す。

【法師授記】梵にアーチャールヤギヤーカラナ（Acaryavyakarana）といふ。

【羅怙羅】ラーフラ（Rāhula）覆障と譯す、佛の子、密行第一と稱せらる。

【默然等】方便の默然なり、默然に五あり、一、譏を除くがために、二、宣しく聞かんがために、三、相違を避くるために、四、佛德を顯はすために、五、他に疑を除かしむるためなり。

【梨車毘童子の一切衆生喜見】サルヴサットヴプリダルシヤ・ナリチヤギクマーラ（Sarvasattva priyadarśana Liccavikumāra）と梵にいふ。

【舍利】シャリーラ（Śarira）骨身と

譯す、佛の遺骨をいふ。

【三十三天】 忉利天トラーヤストリンシャーフ(Trāyastriṃśa)の譯、須彌山の頂閻浮提の上八萬由旬の處にあり。

【恆河の駛流等】 以下は舍利の不可得なるを述ぶ、十四頌中初三は有漏の三相を離るるが故に、次三は涅槃の三德を具するが故に、次四は四人障あつて眞實を得ざるが故に、次四は眞實身に四德を具するが故に、ともに舍利無きを明すなり。

【恆河等】 法身の無生相を明す。

【黃鳥等】 無變異相の故に舍利なきを明す。

【贍部樹】 ジャムブー(Jambu)喬木の名。

【多羅】 ターラ(Tala)

無上の菩提を成辦す、我今汝の爲に略して其事を說かん。」婆羅門言はく、「善い哉童子、此金光明は甚深最上にして、解し難く入り難し、聲聞獨覺も尙知ること能はず。況や我等邊鄙の人、智慧微淺にして、而も能く解了せんや。是故に我今佛舍利の芥子許の如きを求めて、持ちて本處に還り、寶函の中に置き、恭敬供養し、命終の後、帝釋となりて、常に安樂を受くるを得んとす、云何が汝今我が爲に明行足よりして此一願を求むる能はざるや。」

是語を作し已るや、爾時童子、卽ち婆羅門の爲に頌を說いて曰はく、

恆河の駛流の水に、白蓮花を生ずべく
黃鳥は白き形となり、黑鳥は變じて赤となり
假令贍部樹に多羅の果を生ずべく
朅樹羅の枝の中に
能く菴羅の葉を出さんも
斯等希有のもの或は轉變すべくも
世尊の舍利は畢竟じて得べからず
假使龜毛を用て、織りて上妙の服を成じ
寒時に被著すべくんば、方に佛舍利を求めん
假使蚊虻の足をもて樓觀を成さしめ

【瞻部樹等】法身無滅相の故に舍利無きを明す。
【竭樹羅】カルジューラKharjura)
【菴羅】アームラ(Amra)マンゴーの果。
【龜毛等】般若眞實にして虛妄を離るるを明す。
【蚊虻等】法身眞實微細の法に喩ふ。
【水蛭蟲等】解脫自性の不可得なるに喩ふ。
【兎角等】法身の常樂等を明す。
【鼠等】聲聞の苦障を畏るるを除く
【阿蘇羅】月蝕なり、月蝕は阿蘇羅神が大手を擧げて月を蔽ふといふ。
【蠅等】外道の我障に著するを除く
【驢脣等】闡提の不信障を除く。
【烏等】常の實德は無常虛妄と同處ならざれば舍利無きを明す。
【波羅葉等】大樂

堅固にして搖動せざるべくんば、方に佛舍利を求めん
假使水蛭蟲の、口中に白齒を生じ
長大して利すること鋒の如くならば方に佛舍利を求めん
假使兎角を持して、用て梯蹬を成じ
上天の宮に昇るべくんば、方に佛舍利を求めん
鼠此梯上に緣りて、阿蘇羅の能く
空中の月を障ふるを除去せば方に佛舍利を求めん
若し蠅酒を飲みて醉ひ、周く村邑の中を行きて
廣く舍宅を造らば、方に佛舍利を求めん
若し驢脣の色をして、赤きこと頻婆果の如くならしめ
善く歌舞を作さば、方に佛舍利を求めん
烏鵂鶹鳥と同く共に一處に遊び
彼此相順從せば、方に佛舍利を求めん
假使、波羅葉、傘蓋を成して
能く大雨を遮らしむべくんば、方に佛舍利を求めん
假使大船舶の、諸の財寶を盛滿し
能く陸地に行かしむべくんば、方に佛舍利を求めん

假使鵂鶹鳥、嘴を以て香山を銜み
隨處に遊行を任にせば、方に佛舍利を求めん

(四)爾時、法師授記婆羅門、此頌を聞き已り、亦伽陀を以て、一切衆生喜見童子に答へて曰はく、

善い哉、大童子、此れ衆中の吉祥なり
善巧方便の心あり。佛の無上記を得たり
如來の大威德、能く世間を救護したまふ
仁、至心に聽くべし、我今次第に說かん
諸佛の境は難思なり、世間與に等しきもの無し
法身の性は常住なり、修行に差別無し
諸佛の體は皆同じ、所說の法も亦爾り
諸佛には作者無し、亦復本より無生なり
世尊金剛の體は、權に化身を現ず
是故に佛舍利の芥子許りの如きすら無し
佛は血肉の身にあらず、云何が舍利あらん
方便して身骨を留むるは、諸の衆生を益せんが爲なり
法身は是正覺、法界は即ち如來なり

德を明す。波羅はバラシャ(Palasa)細小の葉を有す。【大船舶等】大我の德を明す。【鵂鶹等】大淨德を明す。【香山】梵にガンダマダ(Gandhamadha)といふ。五大の山嶽なり。【四】授記並に在會衆の領解得益を明す。【伽陀】ガーター(Gatha)頌なり。【諸佛の境等】法身不可思議相なり與に等しき等は樂依、相、常住は常住相、修行に等は自法所成相なり。佛の體等は無二相是れ法身の五相なり。【法身】以下は佛身の常住を明す。功德の所依及積樂を法身といひ、三身に通ずる故に覺性覺相共に正覺と名け、是れ諸法の因依の故に法界と名く。

此は是佛の眞身なり。亦是の如き法を說く

爾時、會中に三萬二千の天子、如來壽命の長遠なるを說くを聞きて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、歡喜踊躍して未曾有を得、異口同音に頌を說きて曰はく、

佛般涅槃せず。正法未だ滅せず
衆生を利せんが爲の故に、滅盡あることを示現す
世尊は不思議なり。妙體に異相無し
衆生を利せんが爲の故に、種種の莊嚴を現したまふ

(五)爾時、妙幢菩薩、親しく佛前及四如來幷に二大士諸天子の所に於て、釋迦牟尼如來壽量の事を說くを聞き已り、復座より起ちて、合掌恭敬して、佛に白して言さく、『世尊、若實に是の如く、諸佛如來般涅槃せず、舍利無くんば、云何が經の中に、涅槃及び佛舍利ありと說きて、諸の人天をして、恭敬供養せしむるや。過去の諸佛、現に身骨あり。世に流布し、人天供養し、福を得ること邊無し。今復無しと言ふ。疑惑を生ずるを致す。惟願くば世尊、我等を哀愍して、廣く爲に分別したまへ。』

(六)爾時、佛、妙幢菩薩、及び諸の大衆に告げたまはく、『汝等當に知るべし、般涅槃して舍利ありと云ふは、是密意の說なり。是の如きの義、當に一心に聽くべし。善男子、菩薩摩訶薩は是の如く應に知るべし。其十法あり。能く如來應正等覺、眞實の理趣を解し、究竟大般涅槃ありと說く。云何が十と爲す。一には諸佛如來究竟じて諸の煩惱障、所知障

【五】以下別して涅槃を明す、始に疑を陳べて分別を啓請するを明す。

【二大士】前の婆羅門及童子を指す。

【六】次に佛ために釋解をなすを明す。

【密意の說】今輕佛懈怠の二障を除かんがために涅槃を說く、留身舍利を名けて密意といふ。

【一には等】初めの三は順次に三解脫、般若、法身の三事に約して解す。

【四には等】次の三は有餘、無餘、無住の四涅槃に約して解す。

【七には等】以下四は三性によつて別して明す。

【一切の煩惱等】染淨一切法は皆欲を以て本となす。諸佛之を斷ず。

【去を取らず等】無欲の故に對境に於て愛著なければ亦去來なし。

【三】有漏滅盡するによつて所依の眞如は是れ功德依なるを法身と名く

【四】涅槃の體に約して言詮の性を離るゝに名く。

【五】執なければ我人なきも唯法の無我を悟るなり。

【六】客塵煩惱を離れたる眞如は常住にして生滅去來なし、佛は之を了知す。

を斷盡するが故に、名けて涅槃と爲す。二には諸佛如來、善能く有情の無性及び法の無性を解了するが故に、名けて涅槃と爲す。三には能く身依及び法依を轉ずるが故に、名けて涅槃と爲す。四には諸の有情に於て、任運に化の因緣を休息するが故に、名けて涅槃と爲す。五には眞實にして差別の相無き、平等の法身を證得するが故に、名けて涅槃と爲す。六には生死及以涅槃二性無きを了知するが故に、名けて涅槃と爲す。七には一切の法に於て、其根本を了じ、淸淨を證するが故に、名けて涅槃と爲す。八には一切の法に於て、生無く滅無く、善く修行するが故に、名けて涅槃と爲す。九には眞如法界、實際平等にして、正智を得るが故に、名けて涅槃と爲す。十には諸法の性と、及び涅槃性とに於て、差別無きを得るが故に、名けて涅槃と爲す。是を十法に涅槃ありと說くといふ。

復次に善男子、菩薩摩訶薩、是の如く當に知るべし、復十法あり。能く如來應正等覺の、眞實の理趣を解し、究竟大涅槃ありと說く。云何が十と爲す。一には一切の煩惱樂欲を以て本と爲し、樂欲より生ず。諸佛世尊は樂欲を斷ずるが故に、名けて涅槃と爲す。二には諸の如來は、諸の樂欲を斷ずるを以て一法を取らず。取らざるを以ての故に、去無く、來無く、所取無し、故に名けて涅槃と爲す。三には去來無く及び所取無きを以て、是れ則ち法身は不生不滅無り。生滅無きが故に、名けて涅槃と爲す。四には此無生滅は、言の宣る所に非ず。言語斷ずる故に名けて涅槃と爲す。五には我人ある無し。唯法の生滅に轉依を得るが故に名けて涅槃と爲す。六には煩惱、隨惑、皆是れ客塵にして、法性是れ主なり。來

なく、去無し、佛了知するが故に名けて涅槃と爲す。七には眞如のみ是れ實にして、餘は皆虛妄なり。實性の體は、卽ち是れ眞如にして、眞如の性は卽ち是れ如來なるを名けて涅槃と爲す。八には實際の性、戲論あること無し。唯獨如來實際の法を證して、戲論永く斷ずるを、名けて涅槃と爲す。九には無生は是れ實にして、生は是れ虛妄なり。愚癡の人生死に漂溺す、如來の體實に虛妄あること無きを名けて涅槃と爲す。十には不實の法是れ緣より生ず。眞實の法は緣より起らず。如來法身の體は、是眞實なるを名けて涅槃と爲す。善男子是を十法涅槃ありと說くと謂ふ。

復次に善男子、菩薩摩訶薩是の如く應に知るべし。復十法あり。能く如來應正等覺の眞實の理趣を解し、究竟大涅槃ありと說く。云何が十と爲す。一には如來は善く施及び施の果は、我と我所無きを知る。此施及び果の不正の分別、永く除滅するが故に、名けて涅槃と爲す。二には如來は善く戒及び戒の果は我と我所無きを知る。此戒及び果の不正の分別、永く除滅するが故に涅槃と爲す。三には如來は善く忍及び忍の果は、我と我所と無きを知る。此忍及び果の不正の分別永く除滅するが故に、名けて涅槃と爲す。四には如來は善く、勤及び勤の果は、我と我所と無きを知る。此勤及び果の不正の分別永く除滅するが故に、名けて涅槃と爲す。五には如來は善く定及び定の果は我と我所と無きを知る。此定及び果の不正の分別、永く除滅するが故に名けて涅槃と爲す。六には如來は善く慧及び慧の果は我と我所と無きを知る。此慧及び果の不正の分別、永く除滅するが故に名けて涅槃と爲す。

【七】實常にして不倒なるを眞如、その體性は法身なり。

【八】眞如法身は實際にして倒妄を離れて戲論なし。

【九】戲論を斷ずるが故に無生を得是れ實にして凡夫の生死に漂溺するが如きは如來になし。

【十】法身の實體は緣より生ぜず。

【一には如來等】以下十度を修するによりて能く大涅槃を證するを說く

七には諸佛如來は善く一切有情、非有情の一切諸法は皆無性なりと了知し、不正の分別永く除滅するが故に、名けて涅槃と爲す。八には若し自ら愛するものは、便ち追求を起す。追求に由るが故に、衆の苦惱を受く。諸佛如來、自愛を除くが故に、永く追求を絶つ。追求無きが故に名けて涅槃と爲す。九には有爲の法は、皆數量あり。無爲法は數量皆除く。佛は有爲を離れ、無爲法の無數量を證す。故に名けて涅槃と爲す。十には如來有情及び法の體性は皆空なり。空を離れて、有に非ず。空性は即ち是れ法身なりと了知するが故に、名けて涅槃と爲す。善男子、是を十法に涅槃ありと說くと謂ふ。

復次に善男子、豈惟如來般涅槃せざらん。是を希有なりとす。復十種希有の法あり。是如來の行なり。云何が十と爲す。一には生死の過失、涅槃寂靜生死及以涅槃の平等を證するに由るが故に、流轉に處せず、涅槃に住せず。諸の有情に於て、厭背を生ぜず。是如來の行なり。二には佛は衆生に於て、是念を作さず、此諸の愚夫顚倒の見を行じ、諸の煩惱の爲に纒迫せらる。我今開悟して、其解脫を得しめんと。然るに往昔の慈善根力に由り、彼有情に於て其根性、意業、勝解に隨ひて分別を起さず、任運に濟度し、示教し、利喜し、未來際を盡くして、窮盡あること無し、是れ如來の行なり。三には佛は是念無し、我今十二分教を演說し、有情を利益せんと。然るに往昔の慈善根力に由り、彼有情の爲に廣說乃至本來際を盡して窮盡あること無し。是れ如來の行なり。四には佛は是念無し。我今彼城邑、聚落、王及び大臣、婆羅門、刹帝利、薛舍、戍達羅等の舍に行きて、其より食を乞

【復次に等】涅槃の相を明すに涅槃せずといふに十種希有法あるを述ぶ。

【十二分敎】十二部經とも、十二部經等ともいふ、契經等佛の說法の體裁に十二種あるをいふなり。

【婆羅門】ブラフマナ（Brahmana）四姓中の最高位、僧侶の階級なり、刹帝利クシャトリヤ（Kṣatriya）は王及武士の階級、薛舍ヴイシャ（Vaiśya）は商工の階級、戍達羅シュードラ（Śūdra）は非アールヤ族なり。

はんと。然るに往昔の身語意行の慣習力に出るが故に、任運に彼に詣りて、利益の事を爲して乞食を行ず。是れ如來の行なり。五には如來の身は饑渇あることなし。亦便利羸憊の相無し。乞取を行ずと雖も、食する所無し。亦分別無し。然るに任運に有情を利益せんが爲に食相あるを示す。是れ如來の行なり。六には佛は是念無し。此諸の衆生、上中下あり。彼機性に隨ひて爲に說法せんと。然るに佛世尊分別あること無し。其器量に隨ひて、善く機緣に應じ、彼が爲に說法す。是れ如來の行なり。七には佛是念無し、此類の有情、我を恭敬せず。常に我が所に於て、訶罵の言を出す。彼と與に言論を爲す能はず。彼類の有情、我を恭敬す、常に我が所に於て共に相讃嘆す、我彼と共に言說を爲すべしと。然るに如來慈悲心を起し、平等にして無二なり。是れ如來の行なり。八には諸佛如來、愛、憎、憍慢、貪惜及諸の煩惱あること無し。然るに如來、常に寂靜を樂ひ、少欲を讃嘆し、諸の諠閙を離る。是れ如來の行なり。九には如來は一法として、知らず善く通達せざる無し。一切處に於て鏡智現前し、分別あること無し。然るに如來彼有情の所作の事業の見、彼意の轉ずるに隨ひ方便誘引し出離を得しむ。是れ如來の行なり。十には如來、若し一分の有情の富盛を得るを見る時、歡喜を生ぜず。其衰損を見て、憂戚を起さず。然るに如來、彼有情正行を修習するを見ては、無礙の大慈もて、自然に救攝し、若し有情邪行を修習するを見ては、無礙の大悲もて、自然に救護す。是れ如來の行なり。善男子、是の如く、當に知るべし、如來應正等覺、是の如く無邊の正行ありと說く。汝等當に知るべし、是を

【八難】在地獄の難乃至生佛前佛後の難にして、佛を見ず正法を聞くを得ざるの難なり。

【七】領悟得益を明す。

涅槃眞實の相といふ。或時は般涅槃ありと見るは、是れ權方便なり。及び舍利を留め、諸の有情をして恭敬供養せしむるは、皆是れ如來慈善根の力なり。若し供養するものは、未來世に於て、八難を遠離し、諸佛に逢値し、善知識に遇ひ、善心を失はず、福報無邊にして速に出離すべく、生死に纏縛せられず。是の如きの妙行、汝等勤修して、放逸なる勿れ。』

(七)爾時、妙幢菩薩、佛の親しく般涅槃せず、及甚深の行を說くを聞きて、合掌恭敬し白して言さく、『我今始めて如來大師般涅槃せず、及び舍利を留めて普く衆生を益することを知り、身心踊悅して未曾有なりと歎ず。』

是如來壽量品を說きたまふ時、無量無數無邊の衆生、皆無等阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。時に四如來忽然として現ぜず。妙幢菩薩、佛足を禮し已り、座より起ちて、其本處に還れり。

【分別三身品】法應化三身に就て詳說す。即ち前にて菩提涅槃を說くも更に智果の大用を說く爲に此品あり。

【一】虛空藏菩薩如法の修行を問ふ。

【虛空藏】梵にアーカーシャガルバ(Ākāśagarbha)といひ、智慧慈悲の廣大無窮なることの恰も虛空を庫藏とせるが如しといふ。

【二】佛爲に佛身を分別して答ふ。

【化身】梵にニルマーナカーヤ(Nirmāṇakāya)といふ。

【應身】梵にサムボーガカーヤ(Saṃbhogakāya)といふ。

【法身】梵にダルマカーヤ(Dharmakāya)といふ。

【阿耨多羅三藐三菩提】無上正等正覺なり。

【化身を了知等】化身の體を明す。

金光明最勝王經　卷第二

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

分別三身品第三

(一)爾時、虛空藏菩薩摩訶薩、大衆の中に在りて、座より起ちて偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌し恭敬して佛足を頂禮し、上微妙の金寶の花、寶幢、幡蓋を以て、供養を爲して、佛に白して言さく『世尊、如何が菩薩摩訶薩、諸の如來甚深の秘密に於て、如法に修行するや。』

(二)佛言はく、『善男子、諦に聽け諦に聽け。善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に分別解說すべし。善男子一切の如來に、三種の身あり。云何が三と爲す。一には化身。二には應身。三には法身。是の如きの三身具足して、阿耨多羅三藐三菩提を攝受す。若し正に了知せば、速に生死を出でん。云何が菩薩、化身を了知する。善男子、如來昔修行地の中にあり、一切衆生の爲に、種種の法を修す。是の如く修習して、修行滿つるに至る。修行力の故に、大自在を得、自在力の故に、衆生の意に隨ひ、衆生の行に隨ひ、衆生の界に隨ひ、悉く皆了別す。時を待たず、時を過ぎず、處相應し、時相應し、行相應し、說法相

【大自在】十あり一壽命自在、二心自在、三衆具自在、四業自在、五生自在、六勝解自在、七願自在、八力自在、九智自在、十法自在是れなり。

【時を待たず】現身說法に時節を擇ばざるなり。

【時を過ぎず】この應化の時をすぎざるなり。

【處相應等】如來の說法は處時行法の四非を離れて相應す。

【應身を了知等】應身の體を明す。

【如如】二空の眞性を重ねて名く。

【如如智】二空の智に達するをいふ。

【本願力の故】智境の兩如は都て分別なければ本願力によるが故に身を現ずるなり。

【法身を等】法身の體を明す。

【諸の煩惱等】自性法身なり。如如。

應し、種種の身を現ず、是を化身と名く。善男子、云何が菩薩、應身を了知する。謂はく諸の如來、諸の菩薩の通達を得んがための故に、眞諦を說く。生死と涅槃は是一味なるを了知せしめんが爲の故なり。身見の衆生の怖畏と、歡喜とを除かんが爲の故に、無邊の佛法の爲に本と作るが故に、如實に如如と如如智に相應し本願力の故に、是身現ずることを得、三十二相、八十種好項背の圓光を具す。是を應身と名く。善男子、云何が菩薩摩訶薩、法身を了知する。諸の煩惱等の障を除かんが爲の故に、諸の善法を具せんが爲の故に、唯如如と如如智とのみあり、是を法身と名く。前の二種の身は是假名の有なり。此第三の身のみ是眞實の有なり。前の二身の爲に根本と作る。何を以ての故に、法の如如を離れ、無分別智を離れて、一切の諸佛に別法あること無し。一切の諸佛智慧を具足し、一切の煩惱、究竟じて滅盡し、淸淨の佛地を得。是故に法の如如と如如智は、一切の佛法を攝す。

復次に善男子、一切の諸佛は、自他を利益して究竟に至る。自を利益するとは是れ法の如如、他を利益するとは、是れ如如の智なり。能く自他利益の事に於て自在を得、種種無邊の用を成就するが故に、是故に一切の佛法を分別するに、無量無邊種種の差別あり。善男子、譬へば妄想に依止し、思惟して、種種の煩惱を說き種種の業用を說き、種種の果報を說くが如し。是の如く、法の如如に依り、如如の智に依りて、種種の佛法を說き、種種の獨覺の法を說き、種種の聲聞の法を說く。法の如如に依り、如如の智に依り、一切の佛

【諸の善法等】功徳法身なり。如如智。

【種種の煩惱】應身を得しめ、種種の業用を說きて化身を得しめ、果報を說きて法身をえしむ。

【日月等】日月は如如に、水鏡は本願慈悲に、光明は如如智に、影は應化身に喩ふ。

【水鏡等】水鏡は有情の機に、光に依るとは本願力に、空は法の如如如如智に、影は應化身に喩ふ。

【空は無相】空は形色なきが故に法身に喩ふ。

【二種の身】應化二身。

【有餘涅槃を說く】應化の二身は示現に約して後邊の依等を說くが故に、その所得涅槃は有餘依なり。

【無餘涅槃を說く】如如の法身は自受

法自在に成就す。之を第一不可思議と爲す、譬へば空に畫きて、莊嚴の具を作るが如し。是れ思議し難し。是の如く、法の如如に依り、如如の智に依りて、佛法を成就することも亦思議し難し。善男子、云何が法の如如と如如の智との二、分別無くして、自在を得、事業成就するや。善男子、譬へば如來涅槃に入り、願自在の故に、種種の事業皆成就を得るが如し。法の如如、如如の智の自在事を成すことも亦復是の如し。

復次に菩薩摩訶薩、無心定に入り、前の願力に依り、禪定より起ちて、衆の事業を作す。是の如く二法分別あること無く、自在に事成す。善男子、譬へば日月の分別有ること無きが如し。また水鏡の分別あること無く、光明亦分別なく、三種和合して影生ずることとあるを得るが如し。是の如く法の如如と、如如の智と亦分別無く、願自在を以ての故に、衆生應化身を現ずと感ずることあり。日月の影和合して出現するが如し。

復次に善男子、譬へば無量無邊の水鏡、光に依るが故に、空影、種種の異相を現ずることを得るが如し。空とは卽ち是れ無相なり。善男子、是の如く、化を受くる諸弟子等、是れ法身の影なり。願力を以ての故に、二種の身に於て種種の相を現ず。法身地に於て異相あることなし。善男子、此二身に依り、一切諸佛、有餘涅槃を說く。此法身に依りて、無餘涅槃を說く。何を以ての故に。一切の餘法究竟じて盡くるが故に。此三身に依りて、一切諸佛無住處涅槃を說く、二身の爲の故に、涅槃に住せず。法身を離れて、別の佛あること無し。何を以ての故に。二身涅槃に住せず、二身は假名不實にして、念念に生滅し、定

住せざるが故に。數數出現し、定まらざるを以ての故に。法身は爾らず。是故に二身は涅槃に住せず、法身は二ならず。是故に涅槃に住せず。故に三身に依りて、無住涅槃を說く。

善男子、一切の凡夫、三相の爲の故に、縛あり障あり。三身を遠離し三身に至らず。何者をか三と爲す。一には遍計所執相。二には依他起相。三には成就相。是の如き諸相解する能はざるが故に、滅する能はざるが故に、淨むる能はざるが故に、是故に三身の至るを得ず。是の如きの三相、能く解し、能く滅し、能く淨むるが故に、是故に諸佛三身を具足す。善男子、諸の凡夫人、未だ此三心を除遣すること能はざるが故に、三身を遠離して至ることを得る能はず。何者をか三と爲す。一には起事心。二には依根本心。三には根本心なり。諸の伏道に依り、起事心盡き、法斷道に依り、依根本心盡き、最勝道に依りて、根本心滅す。起事心滅するが故に化身を現ずるを得。依根本心滅するが故に應身を顯はすことを得。根本心滅するが故に、法身に至ることを得。是故に一切如來は三身を具足す。善男子、一切諸佛第一身に於て、諸佛と事を同うし、第二身に於て、諸佛と意を同うし、第三身に於て諸佛と體を同うす。善男子、是初の佛身は、衆生の意に隨つて多種あるが故に、種種の相を現ず。是故に多と說く。第二の佛身は弟子一意の故に、一相を現ず。是故に一と說く。第三の佛身は、一切種の相を過ぎて、執相の境界に非ず、是故に說いて不一不二と爲す。善男子、是第一身は、應身に依りて顯現を得るが故に。是第二身は法身に依り顯現を得るが故に。是法身は眞實有にして依處無きが故に。善男子、是の如き三身は、義あるを以て

身にして一切の依なければ無餘依涅槃と名くるなり。

【數數出現し等】衆生の爲の故に、或は受生のための故に入滅を現じ、又出現す、又涅槃に住せざれば定まらざるなり。

【法身は二ならず】應現と二ならざるなり。

【三相】三性なり下に明す。三性不了の故に縛障あるなり。

【遍計所執相】一切の境に於て遍く計度して執するなり。

【依他起性】衆緣によりて起るを得る故に名く。

【成就性】圓滿成就に名け眞如を體とす。

【起事心】前六識にして皮、依根本心は第七識にして肉、根本心は阿賴耶識にして骨なり

【諸の伏道により

等】地前三十心位に在るをいふ。
【法斷道に依り等】初地より金剛定以前を法斷道といふ
【最勝道に依り等】正しく捨命斷なれば解脱道にあり、常果一切の習氣を斷じて永く捨する故に能く法身を顯はすなり。
【事を同うし】多く八相を以て諸事業を現ずるなり、意樂同じき故意を同うし、法身如如所依の體は諸佛異なきを以て體同じ
【一切種の相を過ぎ等】眞如の妙體は一切種相を超過するを以て去來等の相に非ず、彼も執心所緣の境に非ず、故に不一不二といふ。
【義あるを以て等】常は三身通じて說き、無常を說くは法身に過ぎず。
【大用を具足し等】諸法の本に非れば

の故に、常と說き、義あるを以ての故に、無常と說く。化身は恆に法輪を轉じ、處處緣に隨ひ、方便して相續斷絕せざるが故に、是故に常と說く。是れ本に非ざるが故に、大用を具足し、顯現せざるが故に、說いて無常と爲す。應身は無始より來、相續して斷ぜず。一切諸佛不共の法、能く攝持するが故に、衆生盡くる無くば、用も亦盡くる無し、是故に常と說く。是れ本に非ざるが故に、用を具足し、顯現せざるを以て、說いて無常と爲す。法身とは是れ行法にあらず、異相あること無し。是れ根本なるが故に、猶し虛空の如し。是故に常と說く。善男子、無分別智を離れて、更に勝智無し。法如如を離れて、勝境界無し、是法如如と是慧如如と是二種の如如如如は一ならず異ならず。是故に法身は慧淸淨の故に、滅淸淨の故に、是二淸淨なり。是故に法身は淸淨を具足す。

復次に善男子、三身を分別する、四種の異あり。化身にして應身に非ざるあり。應身にして、化身にあらざるあり。化身にして、また應身なるあり。化身にも非ず、亦應身にも非ざるあり。何者か化身にして、應身に非ざる。謂はく、諸の如來般涅槃の後、願自在を以ての故に、緣に隨ひて利益する、是を化身と名く。何者か應身にして、化身に非ざる。是地前の身なり。何者か化身にして、亦應身なる。謂はく有餘涅槃に住する身なり。何者か化身にも非ず、應身にも非ざる。謂はく是法身なり。善男子、是法身は二無所有にして、顯現する所なるが故に。何者か二無所有と爲す。此法身に於て、相及び相處二皆是無なればなり。有に非ず、無に非ず。一に非ず、異に非ず。數に非ず、非數に非ず。明に非

滅道の功德は倶に現起せずして利生の機に還つて始めて起るが故なり。【無始より起る】應は法に依り起り、應の本性なるを以て無始といふなり。【行地】願行有成の行地。【異熟】生滅の異熟。【一ならず異ならず】如は無爲、智は有爲の法に不一、然も智は理に託して生じ如は性、故に而と異ならず。【慧清淨】善達の慧清淨あるに依て慧清淨を得、所設の淨あるに依て慧清淨あり。【化身にして應身に非ず】隨機化導の身なり。【應身にして化身に非ず】他受用身なり。【化身にして應身】二乘所見の身なり。【化身に非ず應身

す、相に非ず。是の如き、如如の智は、相及び相處を見ず。非有、非無を見ず。非一、非異を見ず。非數、非非數を見ず。非明、非闇を見ず。是故に當に知るべし、境界清淨、智慧清淨にして、分別すべからず、中間あること無し。滅道の本となるが故に、此法身に於て、能く如來種種の事業を顯はす。善男子、是身の因緣、境界、處所、果、本に依りて、思議し難きが故に。若し是義を了せば、是身は即ち是れ大乘、是れ如來の性、是れ如來藏なり。此身に依り、初心修行地の心を發することを得て、不退地の心を顯現することを得。また一生補處の心、金剛の心を現ずることを得、如來の心悉く顯現し、無量無邊の如來の妙法、皆悉く顯現す。此法身に依りて、不可思議の摩訶三昧顯現を得。此法身に依りて、一切の大智を現ずることを得。是故に二身は三昧に依り、智慧に依りて、顯現を得。此の如く、法身は自體に依り常と說き、我と說く。大三昧に依るが故に樂と說き、大智に依るが故に清淨と說く。是故に如來は、常住にして、自在、安樂、清淨なり。大三昧に依りて一切の禪定首楞嚴等、一切の念處、大法念等、大慈、大悲、一切の陀羅尼、一切の神通、一切の自在、一切法の平等攝受、是の如きの佛法、悉く皆出現す。此大智に依りて、十力、四無所畏、四無礙辯、一百八十不共の法、一切の希有不可思議の法、悉く皆顯現す。譬へば如意寶珠に依りて、無量無邊の種種の珍寶、悉く皆現ずることを得るが如し。是の如く、大三昧の寶に依り、大智慧の寶に依り、能く種種無量無邊の諸佛の妙法を出す。善男子、是の如きは、法身の三昧と智慧なり。一切の相を過ぎ、相に著せず、分別すべか

に非ず】是れ法身なり。
【是の法身等】法身の消極的說明。
【相及相處】相は人我、相處は法我。人我は法我によりて起こるが故に名あり。
【非數】情數の分別を絕したるもの無分別境を非非數といふ。
【非明】染を離るる時今始めて淨に非るをいひ、染にある時染に非るを非闇といふ。
【即ち是大乘】增上力のために大乘果を得るなり。
【是如來の性】此身に依り所修の諸善漸漸に增長するに名く。
【如來藏】異熟果の識。
【初心修行等】異熟果心增長力に由るが故に。
【法身は自體により等】法身の積極的說明、自體如如

らず、常に非ず、斷に非ず、是を中道と名く。分別ありと雖も、體に分別無し。三數ありと雖も、三體無し。增ぜず減せず、猶し夢幻の如し。亦所執無く、亦能執無し。法體如如、是れ解脫の處にして、死生の境を過ぎ、生死の暗を越ゆ。一切の衆生修行する能はず、至る能はざる所、一切諸佛菩薩の所住處なり。善男子、譬へば人あり。願うて金を得んと欲し、處處に求覓し、遂に金鑛を得、既に鑛を得已り、便ち之を碎き、精者を擇取し、爐中に銷錬して、淸淨の金を得、意に隨ひて廻轉して、諸の鐶釧、種種の嚴具を作る。諸用ありと雖も、金性改らざるが如し。復次に善男子、若し善男子善女人、勝解脫を求め、世善を修行す。如來及び弟子衆を見るを得て、親近を得已り、佛に白して言さく「世尊何等をか善とし、何等をか不善とし、何等をか正く修して、淸淨の行を得るや」と。諸佛如來及び弟子衆、彼問を見る時、是の如く思惟すらく「是善男子善女人、淸淨を求めんと欲し、正法を聽かんと欲す。即便ち爲に說きて其をして開悟せしめん」と。彼既に聞き已り、正念憶持し發心修行して精進力を得、嬾惰の障を除き、一切の罪を滅し、諸の學處に於て、不尊重を離れ、悼悔の心を息めて、初地に入り、初地の心に依り、利有情の障を除き、二地に入ることを得。此地中に於て不逼惱障を除き、三地に入り、此地中に於て、心軟淨の障を除き、四地に入る。此地中に於て、善方便の障を除き、五地に入る。此地中に於て、見眞俗の障を除き、六地に入る。此地中に於て、見行相の障を除き、七地に入る。此地中に於て、不見滅相の障を除き、八地に入る。此地中に於て、不見生相の障を除き、

九地に入る。此地中に於て、六通の障を除き、十地に入る。此地中に於て、所知障を除き、根本心を除き、如來地に入る。如來地とは三淨に由るが故に、極淸淨と名く。云何が三と爲す、一には煩惱淨、二には苦淨、三には相淨なり。譬へば眞金の鎔消治鍊し、既に燒打し已り、復塵垢無きが如し。金性本淸淨なることを顯さんが爲の故に、金體淸淨なり。金無しと謂ふには非ず。譬へば濁水の澄渟、淸淨にして、復滓穢無きが如し。水性本淸淨なるを顯はさんが爲なるが故に。水無しと謂ふにはあらず。是の如く法身煩惱を離る。苦集除き已りて、復餘習無し。佛性本淸淨なるを顯はさんが爲の故に、體無しと謂ふに非ず。譬へば虛空の煙、雲、塵、霧に障蔽せらるるが如し。若し屛を除き已れば、是空界淨し。空無しと謂ふに非ず。是の如く法身に一切の衆苦、悉く皆盡くるが故に、說いて淸淨と爲す。體無しと謂ふには非ず、譬へば人ありて、睡夢の中に於て、大河水に其身を漂泛するを見るが如し。手を運らし、足を動かし、流を截りて渡り、彼岸に至ることを得。彼身心懈退せざるが故に、夢より覺め已りて、水彼此岸の別あるを見ず。心無しと謂ふに非ず。生死妄想既に滅盡し已れば、是れ淸淨を覺す。覺無しと謂ふに非ず。是の如く法界一切の妄想、復生ぜざるが故に、說いて淸淨と爲す。是諸佛其實體無きに非ず。

復次に善男子、是法身は惑障淸淨にして能く應身を現ず。業障淸淨にして能く化身を現ず。智障淸淨にして能く法身を現ず。譬へば空に依て電を出し、電に依て光を出す

の故に常、常の故に我を說く、三昧に由るが故に樂を得、今因及二乘に簡ぶ故に大三昧といふ。

【大三昧】性得三昧なり、八あり、一禪、二定、三念處、四大慈悲、五陀羅尼、六六神通、七八自在、八一切法平等攝受是れなり。

【禪】四靜慮、定は四無色定、首楞嚴は健行定、一切念處は三念處四念處等、大法念は六念中の念法、大慈大悲は四無量心、一切陀羅尼は總持の德、一切神通は六通の德、一切の自在は十自在等、一切法平等攝受は法平等衆生平等を得るが故に能く一切有情を攝受するなり。

【一切の相を過ぐ】自體勝るるが故に諸執を離るるが故

に相に著せず、心言に非る故に分別すべからず、二邊を離るるが故に非常非斷なり。【三數等】法身三昧智慧の三數差別あるも分別心の縁に非ず、語境に非るが故に體に分別なしといふ。【增せず等】非斷の故に、非常の故に減ぜざるなり。【所執なく等】法身は所執なく、三昧智慧は能執なし【死生の境】有漏の果を出て苦諦を離るる苦諦の因を離るるを以て生死の暗を越ゆるなり。【勝解脱】無上菩提大涅槃の二乘に超越するに名く。【世善】善法の欲。【諸學處に於て等】學處は戒なり。體三寶を離れず淨戒にて證淨を得る故に不尊重心を離る【悼悔心を息む】永く分別を斷ずる

が如し。是の如く、法身に依るが故に、能く應身を現じ、應身に依るが故に、能く化身を現ず。性の淨に由るが故に、能く法身を現じ、智慧清淨にして、能く應身を現じ、三昧清淨にして能く化身を現ず。此三の清淨は是れ法の如如、不異如如、一味如如、解脱如如、究竟如如なり。是故に諸佛の體は異なること無し。

善男子、若し善男子善女人ありて、如來は是れ我大師なりと說き、若し是の如き決定の信を作さば、此人深心に如來の身、別異有ること無きを解すべし。善男子、是義を以ての故に、諸の境界に於ける不正の思惟、悉く皆除斷し、即ち知る、彼法二相有ること無く、亦分別無く聖の修行する所なりと。如如に彼に於て二相あることなし、正修行の故に。是の如く是の如く、一切の諸障悉く皆除滅す。如如に一切の障滅す。是の如く是の如く、法如如、如如の智、最清淨を得。如如に法界の正智清淨なれば、是の如く是の如く、一切の自在具足し、攝受皆成就を得、一切の諸障悉く皆除滅す。一切の諸障清淨を得るが故に、是を眞如の正智、眞實の相と名く。是の如く見るもの、是を聖見と名く。是を則ち名けて眞實の見佛と爲す。何を以ての故に。實の如く法の眞如を見ることを得るが故に。是故に諸佛は、悉く能く普く一切の如來を見る。何を以ての故に。聲聞獨覺は已に三界を出で、眞實の境を求むるも知見すること能はず。是の如く聖人知見せざる所、一切の凡夫皆疑惑、顚倒、分別を生じて、得度すること能はず。兎の海に浮び必らず過ぐること能はざるが如し。所以は何ん、力微劣なるが故なり。凡夫の人亦復是の如し。法の如如に

故

【利有情の障等】初地滿ぜんとする時修戒力增長するを以て能く衆生を饒益し邪行障を除くなり。

【不遍滿障】貪瞋癡に忍ぶるを得ざるを除くなり。

【心軟淨障】菩提分を障ふる微細の煩惱。

【善方便障】般若不住生死涅槃を障ふるもの。

【見眞俗の障】生滅の相に望む染淨相にして庇相の現行障なり。

【見行相の障】細相の現行相、六地中には緣生觀を生ずるに由て染淨相を除くも生滅相ありと見て執すればなり。

【不見滅相】無相觀なり。

【不見生相】八地には寂滅を樂觀するを以て緣生の相有るを見ず。

通達する能はざるが故に。然るに諸の如來分別の心無し。一切の法に於て大自在を得、淸淨深智慧を具足するが故に、是自境界は他と共にせざるが故に、是故に諸佛如來、無量無邊阿僧祇劫に於て、身命を惜まず、難行苦行し、方に此身を得、最上にして、比無く、思議すべからず、言說の境を過ぐ。是妙に寂靜にして諸の怖畏を離る。

(一)善男子、是の如く、法眞如を知見するものは、生老死無く、壽命限り無く、睡眠ある無く、亦饑渴無し。心常に定にあつて、散動あること無し。若如來に於て、諍論の心を起さば、是れ則ち如來を見ること能はず。諸佛の所說は皆能く利益あり、聽聞することあるものは、解脫せざる無し。諸の惡禽獸、惡人、惡鬼、相逢値せず。法を聞くに由るが故に、果報盡くること無し。然るに諸の如來に、無記の事無し。一切の境界に、欲知の心無し。生死涅槃異想あること無し。如來の記する所、決定せざる無し。諸佛如來は四威儀の中に、智の攝にあらざる無し。一切の諸法爲さざることあること無し。慈悲の攝する所爲さざるあること無し、諸の衆生を利益し安樂にす。善男子、若し善男子善女人ありて、此金光明經に於て、聽聞信解せば、地獄、餓鬼、傍生、阿蘇羅道に墮せず。常に人天に處し、下賤に生ぜず、恆に諸佛如來に親近し、正法を聽受し、常に諸佛淸淨の國土に生ず。所以は何ん、此甚深の法を、聞くことを得るに由るが故に。是善男子善女人、則ち如來の爲に、已に知られ、已に記せられ、當に阿耨多羅三藐三菩提を退せざるを得べし。若し善男子善女人、此甚深微妙の法に於て、一たび耳を經ば、當に知るべし、此人如來を謗ぜず、

【六通の障】諸法未自在の障、法自在なれば六通及大法智あり。【根本心】無間道斷餘の七有漏善、無記及相應の心所をいふ。【三淨】煩惱淨、苦淨、相淨なり。下に明す。【清淨を覺す】等しく三學を修して妄想を滅し已れば妙覺位に至をいふ【惑障】心をして決せざらしむるを惑といひ、體は即ち惑なり、造作を業といひ、謂ゆる有漏の三業なり惑障淨くして智慧生ずれば應身、業障淨くして神通自在なれば化身、所知障淨きに由り所覆の理顯はるれば法身を得るなり。【性清淨等】普通にいふ佛の三德なり。【法の如如等】この三清淨如如を離

正法を毀らず、聖衆を輕んぜず、一切の衆生未だ善根を種ゑざるものに、種うるを得しむるが故に、已に善根を植うるものには、增長成熟せしむるが故に、一切の世界のあらゆる衆生、皆勸めて、六波羅蜜多を修行せしむ。』

(四)爾時、虛空藏菩薩、梵、釋、四天王等、即ち座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、合掌恭敬して佛足を頂禮し、佛に白して言さく、『世尊若し所在の處に、是の如き金光明王微妙の經典を講說せば、其國土に於て、四種の利益あり。何んが四と爲す。一には國王の軍衆强盛にして、諸の怨敵無く、疾病を離れ、壽命延長に、吉祥安樂にして、正法興顯せん。二には中宮、妃后、王子、諸臣和悅して、諍ふこと無く、諂佞を離れて、王に愛重せられん。三には沙門、婆羅門及諸の國人、正法を修行して、病なく安樂にして枉死者なく、諸の福田に於て、悉く皆修立せん。四には三時の中に於て、四大調適し、常に諸天に增加守護せられ、慈悲平等にして、傷害の心なく、諸の衆生をして、三寶に歸敬し、皆願うて菩提の行を修習せしめん。是を四種利益の事と爲す。世尊、我等亦常に經を弘めんが爲の故に、是の如き持經の人、所在の住處に隨逐して利益を作さん。』佛言はく、『善い哉善い哉、善男子、是の如く是の如し。汝等當に勤心に此妙經王を流布すべし。則ち正法をして久しく世に住せしめん。』

夢見金鼓懺悔品第四

(一)爾時、妙幢菩薩、親しく佛前に於て妙法を聞き已りて、歡喜踊躍し一心に思惟して、還りて本處に至りしに、夜夢中に於て大金鼓を見たり。光明晃曜として猶し日輪の如し。此光の中に於て十方無量の諸佛、寶樹の下に於て琉璃坐に坐して、無量百千の大衆に圍繞せられて說法を爲すを見るを得たり。一の婆羅門ありて桴もて金鼓を擊ち大音聲を出すを見たり。聲の中に微妙の伽陀を演說して、懺悔の法を明かす。妙幢聞き已り皆悉く憶持し繫念して住す。

(二)天曉くるに至り、已に無量百千の大衆に圍遶せられ、諸の供具を將ちて王舍城を出で、鷲峯山に詣で、世尊の所に至り、佛足を禮し已り、香花を布き設け、右に遶ること三匝し、退きて一面に坐し、合掌恭敬し、尊顏を瞻仰して、佛に白して言さく「世尊、我夢中に於て、婆羅門手に桴を執りて、妙金鼓を擊ち、大音聲を出し、聲の中に微妙の伽陀を演說して、懺悔の法を明かすを見て、我皆憶持しぬ。唯願くば世尊、大慈悲を降して、我が所說を聽きたまへ」と。即ち佛前に於て、頌を說きて曰はく、

我昨夜の中に於て、夢に大金鼓を見たり
其形極めて姝妙にして、周遍金光あり

れざる故法如如。如の體別ならざる故に不異如如、無漏の故に一味如如、離縛の故に解脫如如、實際を證し滿ずる故究竟如如なり。

【善男子等】以下決定深信を述ぶ。

【聖の修行する所】智二相無ければ便ち能く修行を起すなり。

【如如に等】能く障を斷じ彼に於て無二相と見るを以てなり。

【一切の自在】即ち三身なり、一切の功德は三身を離れざるが故に具足攝受等といふ。

【眞如の正智等】一切清淨を得て、清淨如如を證すれば眞如の正智、眞實の相、即ち不二の相なり。

【聖見】正解なり

【眞實の見佛】凡夫も能く如を信解すれば聖者の證見

に同じ。
【一切の如來を見る】如如の理圓にして不二と見るが故に。
【聲聞獨覺等】定性の二乘の聖者は三界を出づと雖も種智無きが故に眞實境を知見する能はざるなり。
【大自在を得等】諸法實空相に達するが故に智如如を得るが故に深智慧を具足す。
【思議すべからず】情計を超ゆるが故に、言詮を越えたるを以て言説の境を過ぐ、大涅槃の故に寂靜、生死息むが故に諸の怖畏を離るるなり。
【三】金光明經の修行得益を明す。
【生老死なく】金剛身を得るが故に、五蓋を離るるが故に睡眠なし。
【四威儀】行住座臥。
【四】領解得益を

猶し盛なること日輪の如く、光明皆普く輝きて
十方界に充滿し、咸く諸佛
寶樹の下にありて、各琉璃坐に處し
無量百千の衆、恭敬して圍遶するを見たり
一の婆羅門あり、桴もて金鼓を撃ち
其鼓の聲の內に於て、此妙伽陀を說けり
金光明の鼓、妙聲を出し、遍く三千大千界に至り
能く三塗極重の罪と、及び人中の諸の苦厄を滅す
此金鼓の聲の威力に由りて、永く一切煩惱の障を滅し
怖畏を斷除して安隱ならしむ。譬へば自在牟尼尊の如し
佛は生死大海の中に於て、行を積みて一切智を修め成じ
能く衆生の覺品を具せしめ、究竟じて咸な功德の海に歸せしむ
此金鼓妙聲を出すに由りて、普く聞者をして梵響を獲て
無上菩提の果を證得せしめ、常に清淨の妙法輪を轉じ
壽を住むる不可思議劫にして、機に隨ひ法を說きて群生を利し
能く煩惱衆苦の流を斷じ、貪、瞋、癡等皆除滅せしむ
若し衆生ありて惡趣に處し、大火猛焰身に周遍せんに

明す。
【夢見金鼓懺悔品】妙幢夢中に人の懺悔を説くを見て、懺自ら佛前に悔過懺罪するを明す。
【一】妙幢夢中に一婆羅門の金鼓を撃ちて懺悔の法を見る。
【夢に金鼓を見る】佛の懺悔を説くを開かんとするを表す。
【二】佛前に詣りて發悟を陳説するを述ぶ。
【三塗】火、血、刀の三塗。
【自在牟尼尊】一切法に於て自在を得たるもの、即ち如來を指す。
【覺品】三十七道品なり、衆生をして大菩提を修せしむるをいふ。
【究竟して等】大涅槃なり。
【宿命智】前世のことを確知する力。六神通の一なり。
【無間獄】八大地

若是妙鼓の音を聞くを得ば、即ち能く苦を離れて佛に歸依し
皆宿命智を成就することを得て、能く過去の百千生を憶し
　悉く皆牟尼尊を正念して、如來甚深の教を聞くことを得ん
金鼓の勝妙音を聞くに由りて、常に諸佛に親近し
　悉く能く諸の惡業を捨離し、純ら清淨の諸善品を修することを得ん
一切天人有情の類、殷重至誠に祈願する者は
金鼓の妙音聲を聞くことを得て、能く求むる所をして皆滿足せしめん
衆生無間獄に墮在し、猛火炎の熾なる苦、身を焚きて
救護あるなく、輪廻に處らんも、聞くものは能く苦をして除滅せしめん
人天餓鬼傍生の中の、あらゆる現に受くる諸の苦難も
金鼓の妙響を發するを聞くを得ば、皆苦を離れ解脫を得ん
現在十方界の、常住の兩足尊
願くば大悲心を以て、哀愍して我を憶念したまへ
衆生歸依無く、亦救護ある無き
是の如き類の爲に、能く大歸依となりたまへ
我先に作る所の罪、極重の諸の惡業
今十力の前に對し、至心に皆懺悔す

獄中最極重の地獄なり。

【傍生】 畜生道なり。

【現在十方の等】 已下八十四頌別して勝利を明す中、初に懺願を明すなり。

【十力】 處非處智力乃至漏盡智力の十にして、之を具足したるもの即ち佛如來なり。

【諸佛を信ぜず等】 不信無慚等所造惡業を懺ず。

【尊高等】 憍慢等の造惡罪を懺ず。

【邪念等】 心口二業所造惡の懺。

【愚夫の行等】 癡所造惡の懺。

【諸戲樂等】 貪瞋所造惡の懺。

【不善人等】 惡友及小隨惑所造惡の懺。

【衆過等】 怖畏に由る惡業の懺。

【躁動心等】 大隨惑等による惡業の懺。

我諸佛を信ぜず、また尊親を敬せず
務めて衆善を修せず、常に諸の惡業を造り
或は自ら尊高と、種姓と及び財位と
盛年とを恃み、放逸を行ひ、常に諸の惡業を造り
心恆に邪念を起し、口に惡言を陳べ
過罪を見ず、常に諸の惡業を造り
恆に愚夫の行をなし、無明の闇、心を覆ひ
不善の友に隨順し、常に諸の惡業を造り
或は諸の戲樂に因り、或は復憂惱を懷き
貪瞋の爲に纏せらる、故に我諸の惡を造れり
不善人に親近し、及び慳嫉の意に由り
貧窮にして諂誑を行ふ、故に我諸の惡を造れり
衆過を樂はずと雖も、怖畏するが故と
自在を得ざるとに由りての故に、我諸の惡を造れり
或は躁動心のために、或は瞋恚と恨と
及以飢渴の惱に由るが故に、我諸の惡を造れり
飲食と衣服と及び女人を貪愛するに由り

【飲食等】食による惡業の懺。
【佛等】不敬三寶所造惡。
【無知等】五逆に由る惡。
【愚癡等】三不善根による惡。
【拔きて】拔濟の義。
【十地】菩薩位の最後地。
【含識】六識を含むもの。

煩惱の火に燒かるるが故に我諸の惡を造れり
佛、法、僧衆に於て、恭敬心を生ぜず
是の如き衆罪を造れり。我今悉く懺悔す
獨覺と菩薩とに於ても、亦恭敬心なく
是の如き衆罪を造れり、我今悉く懺悔す
無知にして正法を謗り、父母に孝せず
是の如き衆罪を造れり、我今悉く懺悔す
愚痴と憍慢と、及以貪と瞋との力に由りて
是の如き衆罪を造れり、我今悉く懺悔す
我十方界に於て、無數の佛を供養し
當に衆生を拔きて、諸の苦難を離れしめんと願ふべし
願くば一切の有情をして、皆十地に住せしめ
福智圓滿し已りて、成佛して群迷を導かん
我諸の衆生の爲に、苦行すること百千劫
大智慧力を以て、皆苦海を出でしめん
我諸の含識のために、甚深の經
最勝金光明を演說し、能く諸の惡業を除かん

【根等】五根五力七覺支八聖道支なり。

若し人百千劫に、諸の極重罪を造らんも
暫時に能く發露せば、衆惡盡く消除せん
此金光明に依りて、是の如く懺悔を作す
斯に由りて能く速に、一切諸の苦業を盡さん
勝定百千種、不思議の總持
根、力、覺、道支を修習して、常に倦むこと無けん
我當に十地に至り、珍寶處を具足し
圓かに佛の功德を滿し、生死の流を濟度せん
我が諸佛界、甚深の功德藏
妙智の思議し難きに於て、皆具足を得しめん
唯願くは十方佛、觀察して我を護念し
皆大悲心を以て、哀みて我懺悔を受けたまへ
我多劫の中に於て、造れる諸の惡業
斯に由りて苦惱を生ぜり、哀愍して願くは消除したまへ
我諸の惡業を造り、常に憂怖の心を生じ
四威儀の中に於て、曾て歡樂の想なし
諸佛大悲を具へて、能く衆生の怖を除きたまふ

【身の三等】殺生偸盗邪婬の三、妄語綺語兩舌惡口は語の四貪瞋邪見は意の三なり。即ち十惡業をいふ。

【諸の善業…隨喜】懺悔に次で諸善業に隨喜するは大乘の通法なり。

願くば我懺悔を受けて、憂苦を離るることを得しめたまへ
我煩惱障、及以諸の報業あり
願くば大悲の水を以て、洗濯して清淨ならしめたまへ
我先に諸の罪を作り、及び現に惡業を造れり
至心に皆發露す、咸な願くば蠲除することを得ん
未來の諸の惡業は、防護して起らざらしめん
假令違ふものあるも、終に敢て覆藏せじ
身の三と、語の四種と、意業に復三あり
諸の有情を繋縛し、無始に恆に相續す
斯三種の行に由りて、十惡業を造作す
是の如き衆多の罪、我今皆懺悔す
我諸の惡業を造り、苦報當に自ら受くべし
今諸佛の前に於て、至誠に皆懺悔す
此贍部州、及び他方世界の
あらゆる諸の善業、今我皆隨喜せん
願くば十惡業を離れて、十善道を修行し
十地の中に安住し、常に十方佛を見ん

【凡愚三有に等】以下順次に一、凡夫不了苦果の難、二長時恒造惡業の難、三、由計我所積集の難、四由貪流轉三界の難、五於世樂耽著の難、六由依凡身起惑の難、七、邪心散動起倒の難、八由惡友所攝の難、九不了生死染著の難、十由因三毒造罪の難、十一、生於無瑕惡報の難、十二無始未殖善因の難なり。

【八無瑕處】八難處の異名。

【最勝】ジナ（Jina）の譯、佛陀のこと。

【我今諸の等】已下十一頌は佛の功德を歎ずるなり。

【善逝】梵にスガタ（Sugata）といふ。又妙往ともいふ。佛の異名なり。

我身と語と意とを以て、修する所の福智の業
願くば此善根を以て、速に無上慧を成ぜん
我今親しく十力の前に對し、衆多の苦難事を發露す
凡愚三有に迷惑する難、恆に極重惡業を造る難
我が積集する所の欲邪の難、常に貪愛を起し流轉する難
此世間に於て耽著する難、一切の愚夫煩惱の難
狂心、散亂、顚倒の難、及以惡友に親近する難
生死の中に於て貪染する難、瞋癡闇鈍にして罪を造る難
八無暇の惡處に生ずる難、未だ曾て功德を積集せざる難
我今皆最勝の前に於て、無邊の罪、惡業を懺悔す
我今諸の善逝に歸依す。我が德海の無上尊
大金山の十方を照らすが如きを禮したてまつる。唯願くば慈悲、哀みて攝受したまへ
身色は金光なり、淨くして無垢なり、目は清淨の紺琉璃の如く
吉祥、威德、名稱の尊、大悲の慧日衆闇を除く
佛日の光明常に普遍に、善、淨、無垢、諸の塵を離る
牟尼の月は照らして極めて清凉なり、能く衆生煩惱の熱を除く
三十二相遍く莊嚴し、八十の隨好皆圓滿し

【瀑流】欲有見無明の四瀑流。

【妙高山】須彌スメール(Sumeru)の譯。

福徳難思にして、與に等しきもの無し、日の光を流して世間を照らすが如し
色は琉璃の如く淨くして無垢、猶し滿月の虚空に處するが如し
妙頗梨の網は金軀に映じ、種種の光明を以て嚴飾す
生死の苦しき瀑流の内に於て、老病と憂愁との水に漂はさる
是の如き苦海堪へ忍び難し、佛日光を舒べて永く竭きしむ
我今一切智、三千世界希有の尊を稽首す
光明晃耀の紫金身、種種の妙好皆嚴飾し
大海水の量り知り難きが如く、大地の微塵數ふべからず
妙高山の稱量し叵きが如く、亦虚空の際あるなきが如し
諸佛の功徳も亦是の如し、一切有情知る能はず
無量劫に於て諦に思惟せんも、能く徳海の岸を知るものある無し
此大地と諸の山嶽とを盡し、析きて微塵の如きを能く算知し
毛端の滴海、尚量るべきも佛の功徳能く數ふるなし
一切の有情皆共に世尊の名稱、諸の功徳を讚ず
清淨の相好の妙莊嚴は、稱量して分齊を知るべからず
我があらゆる衆善の業、願くば速に無上尊を成ずることを得て
廣く正法を説きて群生を利し、悉く衆苦を解脫せしめん

大力の魔軍衆を降伏し、當に無上の正法輪を轉ぜん
久しく劫數に住する思議し難く、衆生の甘露味を充足すること
猶し過去の諸の最勝の如くならん
六波羅蜜皆圓滿し、諸の貪欲及び瞋と癡とを滅し、
煩惱を降伏し、衆苦を除かん
願くば我常に宿命智を得て、能く過去の百千生を憶ひ
亦常に常に牟尼尊を憶念し、諸佛甚深の法を聽くことを得ん
願くば我斯諸の善業を以て、無邊の最勝尊に奉事せん
一切不善の因を遠離し、恒に眞妙の法を修行することを得ん
一切世界の諸の衆生、悉く皆苦を離れて安樂を得しめん
あらゆる諸根具足せざるもの、彼をして身相皆圓滿せしめん
若し衆生ありて病苦に遭ひ、身形羸瘦して所依なからんに
咸な病苦をして消除することを得しめ、諸根色力皆充滿せしめん
若し王法を犯して刑戮せらるべく、衆苦逼迫して憂惱を生ぜんに
彼斯の如く極苦を受る時、歸依して能く救護するものあること無し
若し鞭、杖、枷、鎖の繫を受け、種種の苦具其身を切り
無量百千憂惱する時、身心を逼迫して暫くも樂無らんに

【六波羅蜜】布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六度なり。

【願くば等】初半頌は宿命智の願、次半頌は六念の願、次の半は求善友の願、次の半は求離惡修善の願なり。

【一切世界の等】下二十頌は利他を明す中初十六は他世の果を得んと願じ、次四は他出世の果を得んと願ずるなり。

【若衆生等】諸疾病の苦を抜く。

【王法を犯す等】刑罰の苦を抜く。

【鞭杖等】枷鎖鞭杖の苦及殘言斷命の苦を離れしむなり。

【飢渇等】飢渇、不具諸根の苦を離る。
【貧窮等】貧窮の苦を離る。
【一切の人天等】得人天愛敬の樂及諸珍玩樂を得しむ
【彼の衆生等】得伎樂隨念及池沼隨心の樂、
【飲食等】得四事隨念七寶嚴具の樂
【惡響等】得善名和穆、瑞嚴慈愛の樂。
【世間の資生等】得資什隨心無貪樂施の樂。
【燒香等】得香華隨意、得供養三寶の樂。

皆繫縛、及以鞭杖苦楚の事を免るるを得しめん
將に刑に臨まんとするものには、命全きを得しめ、衆苦皆永く除盡せしめん
若し衆生ありて、飢渇に逼めらるるものには、種種殊勝の味を得しめん
盲者は視ることを得、聾者は聞え、跛者は能く行き、瘂は能く語らしめん
貧窮の衆生は寶藏を得て、倉庫盈ち溢れて乏くる所なく
皆上妙の樂を受けて、一衆生として苦惱を受くるものなからしめん
一切の人天、皆樂み容儀溫雅にして甚だ端嚴なるを見
悉く皆現に無量の樂を受けて、受用豐饒に、福德具はらん
彼衆生の伎樂を念ずるに隨ひて、衆妙の音樂皆現前し
水を念ぜんには即ち清凉の池を現して、金色の蓮花其上に汎ばむ
彼衆生の心の念ずる所に隨ひて、飲食衣服及び牀敷
金、銀、珍寶、妙琉璃、瓔珞、莊嚴皆具足せん
衆生をして惡響を聞かしむるなからん。亦復相違あるを見ずして
受くる所の容貌悉く端嚴に、各各慈心もて相ひ愛樂せん
世間の資生、諸の樂具、心に隨ひて念ずるとき、皆滿足し
得る所の珍財に悋惜なく、諸の衆生に分布し施與せん
燒香と末香と及び塗香と、衆妙の雜花一色に非ざる

【卑賤等】得不生八難、得常遇世尊の樂。
【富貴等】得常生富貴、壽命延命の樂。
【女人等】得男身聰慧、常行覺品の樂。
【十方無量等】得見佛出現、親承演說法の樂。
【若過去等】除自苦除生死の樂。

毎日三時に樹より墮ちて、心に隨ひ受用して歡喜を生せん
普く願くば衆生咸な、十方一切の最勝尊と
三乘淸淨の妙法門と、菩薩、獨覺、聲聞衆に供養せん
常に願くば卑賤に處するなからん、無暇八難の中に墮せず
生れて有暇人中の尊となり、恆に十方佛に親承するを得ん
願くば常に富貴の家に生れ、財寶、倉庫皆盈滿することを得ん
顏貌も名稱も與に等しきものなく、壽命延長して劫數を經ん
悉く願くば女人變じて男となり、勇健聰明にして智慧多く
一切常に菩薩の道を行じ、六度を勤修して彼岸に到らん
常に十方無量の佛、寶王樹下に安處し
妙琉璃師子の坐に處するを見て、恆に法輪を轉じたまふに親承するを得ん
若し過去及び現在に於て、三有に輪廻して造れる諸業の
能く厭ふべき不善趣を招くべきものは、願くば消滅して永く餘すことなからん
一切の衆生有海に於て、生死の羂網もて堅牢に縛せらるるを
願くば智劍を以て斷除し、苦を離れて速に菩提處を證せしめん
衆生此贍部の內に於て、若くは他方世界の中に於て
作す所の種種の勝福田、我今皆悉く隨喜を生せん

【有らゆる等】佛の已下勝功修を明す、初に前業を修して惡趣を越ゆるを明す。
【若し善男子等】宿命を得るを明す
【諸根清淨等】勝身福滿及天人敬仰を得るを明す。
【三】佛讃じて之を印可し、在會衆亦之を信受するを說く。

此福德を隨喜する事、及び身、語、意に造れる諸善を以て
願くば此勝業常に增長し、速に無上の大菩提を證せん
有らゆる佛の功德を禮讃する、深心清淨にして瑕穢なく
廻向、發願福邊り無く、當に惡趣を超ゆる六十劫ならん
若し善男子及女人、婆羅門等の諸の勝族ありて
合掌して一心に佛を讃歎せば、生生に常に宿世の事を憶し
諸根清淨にして身圓滿し、殊勝の功德皆成就せん
願くば未來所生の處に於て、常に人天に共に瞻仰せられん
一佛十佛の所に於て諸の善根を修して、今聞くことを得るに非ず
百千佛の所に於て種うる所の善根、方に斯懺悔の法を聞くことを得ん

(三)爾時、世尊、此說を聞き已り、妙幢菩薩を讃じて言はく『善い哉善い哉善男子。汝が夢みし所の金鼓聲を出して、如來の眞實功德幷に懺悔の法を讃嘆したるが如き、若し聞くことあらんものは福を獲ること甚だ多し。廣く有情を利して罪障を滅除せん、汝今應に知るべし、此勝業は皆是れ過去に讃嘆發願せる宿習の因緣と、及び諸佛威力の加護とに由れり。この因緣常に汝が爲に說けり。』時に諸の大衆此法を聞き已り、咸な皆歡喜して信受し奉行せり。

金光明最勝王經　巻第三

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

滅業障品第五

【滅業障品】前品に連關して懺悔の要法を說く。
【一】佛の光明を放つに由り大衆來會し、帝釋懺悔の方法を問ふ。
【五濁】劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁なり。
【五無間業】五逆罪なり。
【帝釋】三十三天の主、梵にインドラ(Indra)といふ。

(一)爾時、世尊正分別に住し、甚深微妙の靜慮に入り、身の毛孔より大光明を放ちたまふ。無量百千の諸の色あり。諸佛の刹土悉く光の中に現ず。十方恒河沙の校量譬喩も及ぶこと能はざる所なり。五濁の惡世光に照らされ、是諸の衆生、十惡業五無間業を作り、三寶を誹謗し、尊親に孝せず、師長婆羅門衆を輕慢し、地獄餓鬼傍生に墮すべきもの、彼各光の所住處に至るを蒙る。是諸の有情、斯光を見已りて、光の力に由るが故に、皆安樂を得、端正殊妙にして色相具足し、福智もて莊嚴し、諸佛を見ることを得たり。

是時に帝釋と一切の天衆、及び恒河女神並に諸の大衆光の希有なるを蒙りて、皆佛の所に至り、右に遶ること三匝し、退きて一面に坐す。

爾時、天帝釋佛の威力を承け、即ち坐より起ち、偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、佛に白して言さく、「世尊、云何が善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を願求し、大乘を修行し、一切邪倒の有情を攝受せんに、曾て造作する所の業障罪、云何が

【二】帝釋の問に對へて佛懺悔の要法を明す。

【妙法輪、照法輪】共に佛の說法を指すも前者は見道の理を示し、後者は修道の要を說くといふ。

【眞實慧】眞俗二智を具するをいひ、肉等五眼圓具せるを眞實眼、前二智を實證したるを眞實證明といひ、眞如平等の理を證得したるを眞實平等といふ。

【無間罪】大乘にいふ五逆罪中第四逆。

【正法を誹謗し】第二逆罪。

【十惡業を造り等】第五逆罪。

懺悔して除滅することを得べき。』

(二)佛天帝釋に告げたまはく『善い哉善い哉善男子、汝今修行し、無量無邊の衆生の爲に、清淨の解脫安樂を得しめ、世間を哀愍し一切を福利せんと欲す。若衆生ありて、業障に由るが故に諸罪を造るものは、當に策勵して晝夜六時に偏に右の肩を袒ぬぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬し、一心專念に口に自ら說きて言ふべし、『現在十方一切の諸佛、已に阿耨多羅三藐三菩提を得たまへるものに歸命頂禮したてまつる。妙法輪を轉じ、照法輪を持し、大法雨をふらし、大法鼓を擊ち、大法螺を吹き、大法幢を建て、大法炬を秉りたまふ。諸の衆生を利益し、安樂にせんと欲せんが爲の故に、常に法施を行じ、群迷を誘進し、大果を得て常樂を證することを得しめんが故に、是の如き等の諸佛世尊、身語意を以て稽首し、歸誠し、至心に禮敬す。彼の諸の世尊眞實慧を以て眞實眼眞實證明眞實平等を以て、一切衆生善惡の業を悉く知り悉く見たまふ。我無始の生死より以來、惡に隨ひて流轉し、諸の衆生と共に業障罪を造れり。貪瞋癡の爲に纏縛せられ、未だ佛を識らざる時、未だ法を識らざる時、未だ僧を識らざる時、未だ善惡を識らず、身語意に由りて無間罪を造りぬ。惡心もて佛身より血を出し、正法を誹謗し、和合僧を破り、阿羅漢を殺し、父母を殺害す。身の三と、語の四と、意の三種との行に十惡業を造り、自ら作し、他を敎へ、作すを見て隨喜し、諸の善人に於て橫に毀謗を生じ、斗秤を欺誑し、僞を以て眞と爲し、不淨の飮食を一切に施與し、六道の中に於てあらゆる父母更に相惱害せり。或は率堵波

【率堵波物等】是れ三寶財物を盜むを用て第一逆なり。
【世尊の法律等】第三逆。

物、四方僧物、現前僧物を盜み、自在に用ひ、世尊の法律は奉行することを樂はず、師長の教示は相隨順せず、聲聞獨覺大乘の行を行ふものを見ては、喜んで罵辱を生じ、諸の行人をして心に悔惱を生ぜしむ。已に勝るものあるを見ては、便ち嫉妬を懷き法施と財施とに常に慳惜を生じ、無明に覆はれ、邪見、心を惑はす。善因を修せず、惡をして增長せしめ、諸佛に於て誹謗を起し、法に非法を說き、非法に法を說く。是の如きの衆罪、佛、眞實慧眞實眼眞實證明眞實平等を以て悉く知り、悉く見たまふ。我今歸命して諸佛の前に對し、皆悉く發露して敢て覆藏せず。未作の罪は更に復た作らず、已作の罪は今皆懺悔せん。所作の業障は惡道地獄傍生餓鬼の中、阿蘇羅衆及び八難處に墮つべし。願くば我が此生の有らゆる有業障皆消滅することを得て、有らゆる惡報は未來受けざらん。亦過去の諸大菩薩、菩提の行を修し、有らゆる業障悉く皆懺悔するが如く、我業障今亦懺悔し、咸な悉く發露して敢て覆藏せず。已作の罪、願くば除滅することを得て、未來の惡更に敢て造らじ。亦未來諸大菩薩、菩提の行を修し、有らゆる業障悉く皆懺悔するが如く、我業障今亦懺悔し、皆悉く發露して敢て覆藏せず。已に作れる罪、願くは除滅することを得て、未來の惡更に敢て造らじ。亦現在十方世界の諸大菩薩、菩提の行を修し、有らゆる業障悉く皆懺悔するが如く、我業障今亦懺悔し、皆悉く發露して敢て覆藏せず、已作の罪、願はくば除滅することを得て、未來の惡更に敢て作らじ。善男子、是因緣を以て、若し罪を造るあらば一刹那の中も覆藏するを得ざれ、何に況んや一日一夜乃至

【四大王衆等】欲界の六天なり、【梵衆等】色界の十七天なり、【預流果等】小乘の四果、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢なり。【三明】阿羅漢三果の聖者の有する三明、宿命、天眼、漏盡の三通是れなり、【一切智智】根本智性なり、此智性三障を離るるを淨智、二餘の所知に非るを不思議智、生滅を離るるを不動智、下の三藐三菩提是れ正遍智、無上菩提、何れも佛果の智慧なり、【何を以て等】下懺悔滅罪の所以を說く、【一切の法は空】一切所有の生滅法

多時をや。若し犯罪ありて清淨を求めんと欲せば心に慚恥を懷き、未來に於て必ず惡報あるを信じ、大恐怖を生じ、是の如く懺悔すべし。人の火に頭を燒かれ、衣を燒かるれば、救うて速に滅せしむるが如し。火若し未だ滅せざれば心に安きを得ず。若し人罪を犯すも亦復是の如し。即ち懺悔して速に除滅せしむべし。若し富樂の家に生じ多饒の財寶を願ふあらば、復意を發して大乘を修習し、亦應に懺悔して業障を滅除すべし。豪貴の婆羅門種、刹帝利家及び轉輪王に生れ七寶具足せんと欲せば、亦應に懺悔して業障を除滅すべし。善男子、若し四天王衆、三十三天、夜摩天、覩史多天、樂變化天、他化自在天に生れんと欲するあらば、亦應に懺悔して業障を滅除すべし。若し梵衆、梵輔、大梵天、少光、無量光、極光淨天、少淨、無量淨、遍淨天、無雲、福生、廣果天、無煩、無熱、善現、善見、色究竟天に生ぜんと欲せば、亦應に懺悔して業障を滅除すべし。若し預流果、一來果、不還果、阿羅漢果を求めんと欲せば、亦應に懺悔して業障を滅除すべし。若し三明、六通、聲聞、獨覺自在菩提を願求し、究竟地に至り、一切智智、淨智、不思議智、不動智、三藐三菩提正遍智を求めんと欲せば、應に懺悔して業障を滅すべし。何を以ての故に、善男子、一切の諸法は因緣より生ず、如來說きたまふ所の異相の生と異相の滅と、因緣異なるが故に、是の如く過去の諸法皆已に滅盡し、有らゆる業障亦遺餘あること無し。是の諸の行法未だ現に生ずるを得ざりしに、今生ずるを得て、未來の業障、更に復起らず。何を以ての故に、善男子、一切の法は空なり。如來所說の法には我、人、衆生、壽者あること無く、亦

相は皆悉く空にして相に自性なし。
【諸法皆本に依る】一切法の本體は卽ち眞如なり。本眞如は無生滅、不可言說の故に一切法皆ここに歸するなり。
【一切相を過ぐ】眞如の理は生滅の相に超過するに由る。
【信樂心を生ず】二障を破し二結を斷ずる故に、我我所なく俱空の性あるが故に衆生無しといふ。是れ理の境なり。
【若し四法已下】業障を除き能行する人を明す。
【三業を護り】能く三業に於て正念成就し、親に隨つて成就するをいふ。
【四の業障等已下】四行を明して生善を遮ず。
【四種あり業障を對治等】大乘五悔

生滅無く、亦行法無し。善男子、一切の諸法皆本に依る亦不可說なり。何を以ての故に。一切の相を過ぐるが故に、若し善男子善女人ありて是の如く微妙の眞理に入り信樂の心を生ずるあらば、是を衆生無くして本に依ると名く。是義を以ての故に、懺悔業障を滅除すと說く。

善男子、若し四法を成就せば、能く業障を除き永く淸淨を得ん。云何が四と爲す。一には邪心を起さず、正念成就す。二には甚深の理に於て誹謗を生ぜず。三には初行の菩薩に於て一切智の心を起す。四には諸の衆生に於て慈無量を起す。是を四と爲すと謂ふ。』

爾時に世尊頌を說いて言はく、

身心に三業を護り、深法を誹謗せず
一切智の想を作し、慈心もて業障を淨めよ

『善男子、四の業障あり、滅除すべきこと難し。云何が四と爲す。一には菩薩の律儀に於て極重惡を犯す。二には大乘經に於て心に誹謗を生ず。三には自の善根に於て增長すること能はず。四には三有に貪著し、出離の心無し。復四種あり業障を對治す。云何が四と爲す。一には十方世界の一切如來に於て、至心に親近し、一切の罪を說く。二には一切衆生の爲に諸佛を勸請し深妙の法を說かしむ。三には一切衆生の有らゆる功德を隨喜す。四には有らゆる一切の功德善根、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提に迴向す。』

爾時、天帝釋、佛に白して言さく、『世尊、有らゆる男子女人、大乘行に於て能く行ずる

中機悔、隨喜、勸請、廻向の四なり、順次に之を說く。

【爾時天帝已下】隨喜の功德を明す。

【初行の菩薩等】即ち初めて菩提心を起すより、其の最上位の一生補處まで菩薩の五位を列す。之菩薩の福に隨喜するなり。

【現在十方等】如來の福に隨喜するなり。

【また復菩薩等】三乘の福に隨喜するなり。

ものあり、行ぜざるものあり。云何が能く一切衆生の功德善根を隨喜することを得ん。佛の言はく、「善男子、若し衆生ありて大乘に於て未だ修習すること能はずと雖も、然も晝夜六時に於て、偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬し一心專念に隨喜を作す時は、福を得ること量無し。應に是言を作すべし、「十方世界の一切衆生現在に施、戒、心慧を修行する、我今皆悉く深く隨喜を生ぜん。」と。是の如き隨喜を作す福に由るが故に、必ず當に尊重、殊勝、無上、無等、最妙の果を獲得すべし。是の如く過去未來一切の衆生の有らゆる善根皆悉く隨喜す。又現在に於ける初行の菩薩、發菩提心の有らゆる功德と、百大劫を過ぎて菩薩行を行ずる大功德あると、無生忍を獲たると、不退轉に至れると、一生補處と、是の如く一切功德の蘊、皆悉く至心に隨喜讃嘆す。過去と未來の一切菩薩の有らゆる功德を隨喜讃嘆すること亦復是の如し。復現在十方世界に於ける一切の諸佛應正遍知の、妙菩提を證し、無邊の諸衆生を度せんが爲の故に、無上の法輪を轉じ、無礙の法施を行じ、法鼓を擊ち、法螺を吹き、法幢を建て、法雨をふらし、一切の衆生を哀愍し勸化して咸な信受せしめ、皆法施を蒙りて、悉く無盡の安樂を充足することを得、又復有らゆる菩薩、聲聞、獨覺の功德善根を積集するに、若し衆生ありて未だ是の如き諸功德を具せざるものに、悉く具足せしむる。我皆隨喜せん。是の如く過去未來の諸佛、菩薩、聲聞、獨覺の有らゆる功德亦皆至心に隨喜讃嘆せん。善男子、是の如く隨喜は無量功德の聚、恆河沙の如きを得べし。三千大千世界の有らゆる衆生、皆煩惱を斷じ、阿羅漢を成ぜんに、若し善男子善女

【爾時天帝釋已下】勸請の功德を述ぶ。

【報身】ここには普通にいふ現身の意と見るべし。

人ありて、其形壽を盡くし、常に上妙の衣服、飮食、臥具、醫藥を以て供養をなさんとも、是の如きの功德は、前の如き隨喜の功德の千分の一に及ばず。何を以ての故に。供養の功德は數あり量ありて、一切の諸の功德を攝せざるが故に、隨喜の功德は無量無數にして能く三世一切の功德を攝すればなり。是故に若し人勝善根を增長せんことを欲求せば、應に是の如く隨喜の功德を修すべし。若し女人ありて女身を轉じて男子たらんことを願ふものは、亦應に隨喜の功德を修すべし。必ず心に隨ひて現に男子と成るを得べし。」

爾時、天帝釋、佛に白して言さく「世尊已に隨喜の功德を知れり。勸請の功德唯願くば說きたまへ、未來一切の菩薩をして當に法輪を轉ぜしめ、現在の菩薩をして正く修行せしめんと欲するが故に。」佛、帝釋に告げたまはく「若し善男子善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提を願求するもの、應に聲聞、獨覺、大乘の道を修行すべきもの、是人晝夜六時に於て、前の威儀の如く一心專念に是の如き言を作すべし。我今十方一切の諸佛世尊に歸依し已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへるもの、未だ無上の法輪を轉じたまはざるもの、報身を捨てて涅槃に入らんと欲したまふもの、我今至誠に頂禮して、大法輪を轉じ、大法雨を雨らし、大法燈を然し、理趣を照明し、無礙の法を施して、般涅槃する莫く、久く世に住し、一切の衆生を度脫し安樂ならしめ、前の所說の如く乃至無盡の安樂を得しめんことを勸請す。我今此勸請の功德を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、過去、未來、現在の諸大菩薩が勸請の功德を菩提に廻向するが如く、我亦是の如く勸請の功德を無上正

【一切の諸法を攝藏す】眞如の理體は遍常の故に諸法を攝し、餘法之に反する故攝せざるなり。

等菩提に廻向せん。善男子假使人ありて三千大千世界の中に滿ちたる七寶を以て如來に供養せんに、若復人ありて如來の大法輪を轉ぜんことを勸請せば、得る所の功德、其福彼に勝れたり。何を以ての故に。彼は是れ財施、此は是れ法施なればなり。

善男子且く三千大千世界の七寶の布施を置き、若人恆河沙數の大千世界に滿てる七寶を以て一切の諸佛を供養せんに、勸請の功德亦彼よりも勝れたり。其法施には五の勝利あるに由れり。云何が五と爲す。一には法施は自他を利することを兼ね、財施は爾らず。二には法施は能く衆生をして三界を出でしむ、財施の福は欲界を出でず。三には法施は能く法身を淨む、財施は唯色を增長す。四には法施は窮り無し、財施は盡くることあり。五には法施は能く無明を斷ず、財施は唯貪愛を伏す。是故に善男子勸請の功德は無量無邊にして譬喩すべきこと難し。我が如きは昔菩薩道を行ぜし時、諸佛に大法輪を轉ぜんことを勸請せり。彼善根に由るが故に、今日一切の帝釋、諸梵王等我に大法輪を轉ぜんことを勸請す。善男子、轉法輪を請ずるは、諸の衆生を度脫し安樂ならしめんが爲なり。故に我往昔に於て菩提行の爲に、如來の久しく世に住して般涅槃する莫らんことを勸請せり。此善根に依りて我十力、四無所畏、四無礙辯、大慈、大悲を得、無數不共の法を證得したり。我當に無餘涅槃に入るべきも我が正法は久しく世に住せん。我が法身は清淨無比にして種種の妙相、無量の智慧、無量の自在、無量の功德、思議すべきこと難し。一切の衆生、皆利益を蒙り、百千萬劫に說くも盡す能はず、法身は一切の諸法を攝藏す。一切の諸法は

【常住なるも等】境眞實の故に。【能く衆生等】已下他をして功德を成就せしむるなり。一に捨邪歸正の德、二に離縛斷障の德、三に應身の德、四に法身の德を圓證せしむ。【作なく等】惑業の作に非れば無作、今始めて生ずるに非れば無動なり。この常德は煩惱を悉く盡くす故に憒閙を遠離す。【寂靜等】寂靜無爲は法身自體の淨德を顯はし、大我の德を具する故に自在、逼惱に非るが故に安樂なり。【時に天帝釋等】已下廻向を明す。【不住想心】自身

法身を攝せず。法身は常住なるも、常見に墮せず。復斷滅すと雖も、亦斷見に非ず。能く衆生種種の異見を破し、能く衆生の種種の眞見を生ず。能く一切衆生の縛を解きて縛の解くべき無し。能く衆生諸善の根本を植ゑ、未だ成熟せざるものは成熟せしめ、已に成熟するものは解脫せしむ。作無く動無く、憒閙を遠離し、寂靜、無爲、自在、安樂なり。三世を過ぎて能く三世を現し、聲聞、獨覺の境、諸大菩薩の修行する所を出づ。一切如來の體、異有ること無し。此等皆勸請の功德善根力に由るが故に。是の如き法身、我今已に得たり。是故に若し阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲するものあらば、諸經の中に於て、一句一頌人の爲に解說するも、功德善根尙限量無し。何に況や如來に大法輪を轉じ久しく世に住して般涅槃する莫らんことを勸請するをや。」

時に天帝釋復佛に白して言さく、「世尊、若し善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を求めんが爲の故に、三乘道の有らゆる善根を修して、云何が一切智智に廻向するや。」佛天帝釋に告げたまはく、「善男子、若し衆生ありて菩提を求め、三乘の道を修して、有らゆる善根願うて廻向せんと欲するものは、晝夜六時に於て、慇重至心に是の如き說を作すべし、「我無始の生死より以來、三寶の所に於て修行し成就せる有らゆる善根、乃至傍生の一摶の食を施與し、或は善言を以て諍訟を和解し、或は三歸及び諸の學處を受け、或は復懺悔、隨喜、勸請、有らゆる善根我今作意し、悉く皆攝受して、一切衆生に廻施し、悔悋の心無し。是れ解脫分の善根の攝する所なればなり。佛世尊の知見する所、稱量すべから

及報恩果報等に執著せざること。

【不捨想心】空見に住せず斷滅の想なきをいふ。

【是の諸の善根已下】發願を明す中初に總願、次に別願八あり、一道樹下に坐す、二不思議清淨無礙、離障の故に無礙、除智の故に清淨なり、三無盡法藏陀羅尼に住す、門明呪、首楞嚴定とは健行定なり、五破四魔十軍、魔波旬とは天魔をいふ、六能了法、七獲甘露法菩提、甘露法は菩提、甘露の義は涅槃をいふなり、八證甘露義涅槃。

ず、無礙にして淸淨なるが如く、是の如く有らゆる功德善根悉く以て一切衆生に廻施し、不住想心、不捨想心あり。我亦是の如く功德善根悉く以て一切衆生に廻施せん。願くば如意の手を獲得し、空を撫りて寶を出し、衆生の願を滿し、富樂盡くる無く、智慧窮り無く、妙法、辯才悉く皆滯り無けん。諸の衆生と共に同く阿耨多羅三藐三菩提を證し、一切智を得ん。此善根に因り、更に復無量の善法を出生する、亦皆無上菩提に廻向せん。又過去諸大菩薩修行の時の如き、功德善根悉く皆一切種智に廻向せん。現在未來も亦復是の如し。然るに我有らゆる功德善根亦皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せん。是諸の善根もて、願くは一切衆生と共に倶に正覺を成じ、餘の諸佛が道場菩提樹の下に坐し、不可思議、無礙、淸淨にして無盡の法藏、陀羅尼、首楞嚴定に住し、魔波旬が無量の兵衆を破り、見覺知すべく通達すべきもの、是の如き一切は一刹那の中に於て、悉く皆照了し、後夜の中に於て、甘露の法を獲、甘露の義を證するが如く、我及び衆生願くば皆是の如き妙覺を證せんこと、猶し無量壽佛、勝光佛、妙光佛、阿閦佛、功德善光佛、師子光明佛、日光佛、網光明佛、寶相佛、寶焰佛、焰明佛、焰盛光明佛、吉祥上王佛、微妙聲佛、妙莊嚴佛、法幢佛、上勝身佛、可愛色身佛、光明遍照佛、梵淨王佛、上性佛の如くならん。是の如き等の如來應正遍智は過去未來及現在に應化を示現し、阿耨多羅三藐三菩提を得て無上の法輪を轉す。衆生を度せんが爲に我亦是の如くならん。廣說上の如し。

善男子、若し淨信の男子女人ありて、此金光明最勝王經滅業障品を受持し、讀誦し

【無量壽佛等】四方の諸佛なり、西方三佛、東方五佛、南方五佛、北方八佛を擧ぐ。

【若し淨信の男子等】此品の受持讀誦を勸むるを明す。

【踰繕那】ヨージヤナ（Yojana）舊譯には由旬といふ。

【三歸】佛法僧に歸依する誓式、三歸戒と稱す。

【四惡道】地獄餓鬼畜生の三惡道の上に修羅道を加ふ。

憶念して忘れず、他の爲に廣說せば、無量無邊の大功德聚を得ん。譬へば三千大千世界の有らゆる衆生、一時に皆人身を成就することを得、人身を得已りて、獨覺の道を成ぜんに、若し男子女人ありて、其形壽を盡して恭敬尊重し、四事一一の獨覺に供養し、各七寶を施す須彌山の如く、此諸の獨覺涅槃に入りたる後は、皆珍寶を以て塔を起し、供養し、其塔高廣十二踰繕那、諸の華、香、寶幢、幡、蓋を以て常に供養を爲すが如し。善男子意に於て云何。是人獲る所の功德寧ろ多しとなすや不や。』天帝釋言はく、『甚だ多し、世尊。』『善男子若復人あり、此金光明微妙の經典、衆經の王たる滅業障品を受持し、讀誦し、憶念して忘れず、他の爲に廣說せば獲る所の功德、前に說く所の供養の功德に於て百分一に及ばず、百千萬億分乃至校量譬喩の能く及ぶ能はざる所なり。何を以ての故に。是善男子善女人、正行の中に住し、十方一切の諸佛に無上法輪を轉ぜんことを勸請せば、皆諸佛に歡喜讚嘆せらるればなり。善男子、我が所說の如き一切の施中に法施を勝れたりとすればなり。是故に善男子、三寶の所に於て諸の供養を設けんも比となすべからず。勸めて三歸を受けしめ、一切の戒を持して毀犯あるなく、三業空しからざるも比となすべからず。一切の世界の一切の衆生、力に隨ひ、能に隨ひ、願樂する所に隨ひて、三乘の中に於て菩提心を勸發するも比となすべからず。三世の中に於て、一切世界の有らゆる衆生皆無礙を得て、速に無量の功德を成就せしめんも、比となすべからず。三世の刹土、一切の衆生障礙なく、三菩提を得しめんも比となすべからず。三世の刹土、一切の衆生勸めて速に四惡道の苦を出で

しめんも比となすべからず。三世の刹土、一切の衆生勸めて極重の惡業を除滅せしめんも比と爲すべからず。一切の苦惱、勸めて解脫せしめんも比となすべからず。一切の怖畏、苦惱、遍切皆脫するを得しめんも、比となすべからず。三世佛の前の一切衆生の有らゆる功德、勸めて隨喜して菩提の願を發さしめんも比となすべからず。勸めて惡行罵辱の業を除き、一切の功德皆成就を願ひ、所在の生中、一切の三寶を勸請、供養、尊重、讃嘆し、衆生を勸請して、福行を淨修し菩提を成滿せしめんも比となすべからず。是故に應に知るべし、一切世界、三世の三寶を勸請し、六波羅蜜を滿足せんことを勸請し、無上法輪を轉ぜんことを勸請し、世に住する無量劫を經て、無量甚深の妙法を演說せんことを勸請するは、功德甚深にして能く比するもの無し。』

爾時、天帝釋及び恆河女神、無量の梵王、四大天衆座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌頂禮し、佛に白して言さく『世尊我等皆是金光明最勝王經を聞くを得て、今悉く受持し、讀誦し、通利し、他の爲に廣說し、此法に依りて住せん。何を以ての故に。世尊、我等阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲し、此義種種の勝相に隨順し、如法に行ずるが故に。』

爾時、梵王及天帝釋等、說法の處に於て、皆種種の曼陀羅華を以て佛の上に散ず。三千大千世界の地、皆大に動き、一切の天鼓及び諸の音樂鼓たざるに自ら鳴り、金色の光を放ち、世界に遍滿して妙音聲を出す。

【爾時天帝釋等】此品の修行を勸むるを明す、初に修行を願ず。

【梵王等】諸天の供養なり。

【曼陀羅華】マンダーラヴ（Mandarava）

【三千大千世界等】諸瑞應を現ずるなり。

【時に天帝釋等】諸天の解悟及佛の印可を明す。

【授記】將來の成佛決定せるを豫言するなり。

【應供等】如來の十號。

時に天帝釋、佛に白して言さく、「世尊、此等皆是金光明經威神の力なり。慈悲普く救ひ、種種の利益あり、種種に菩薩の善根を增長し、諸の業障を滅す。」佛言はく、「是の如く是の如し。汝の所說の如し。何を以ての故に、善男子我往昔を念ふに、無量百千阿僧祇劫を過ぎて佛あり、寶王大光照如來應正遍知と名けたり。世に出現し、世に住する六百八十億劫なり。爾時寶王大光照如來、人、天、釋、梵、沙門、婆羅門、一切衆生を度脫して安樂ならしめんと欲するが爲の故に、出現の時に當り初會の說法に、百千億萬の衆を度して、皆阿羅漢果を得しめ、諸漏已に盡き、三明六通、自在無礙なり。第二會に於て、復九十千億億萬衆を度し、皆阿羅漢果を得しめ、諸漏已に盡き、三明六通、自在無礙なり。第三會に於て、復九十八千億億萬衆を度し、皆阿羅漢果を得しむ。圓滿なること上の如し。善男子、我爾時に於て女人の身となり、福寶光明と名けたり。第三會に於て世尊に親近し、是金光明經を受持し讀誦し、他の爲に廣く說きて、「阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。」故に時に彼世尊我爲に授記す。此福寶光明女、未來世に於て佛と成りて、釋迦牟尼如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號すべし。」と。女身を捨てて後、是より以來、四惡道を越え、人天の中に生じて、上妙の樂を受け、八十四百千生、轉輪王となり、今日に至り正覺を成ずることを得て、名稱普く聞えて世界に遍滿す。」

時に會の大衆、忽然として皆寶王大光照如來、無上の法輪を轉じて、微妙の法を說くを

【善男子我等】已下得益を明す。
【索訶世界】普通にいふ娑婆世界サハローカダートゥ(Sahalokadhātu)
【三】この經の利益を明す。
【苾芻等】比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆に同じ。

見る。善男子、此索訶世界を去りて、東方百千恆河沙數の佛土を過ぎて世界あり、寶莊嚴と名く。其寶王大光照如來、今現に彼に在し、未だ般涅槃せず、微妙の法を說きて、廣く群生を化す。汝等見るもの即ち是れ彼佛なり。善男子、若し善男子善女人ありて、此寶王大光照如來の名號を聞くものは、菩薩地に於て不退轉を得、大涅槃に至らん。若し女人ありて是佛名を聞くものは、命終に臨む時、彼佛其所に來至するを見るを得ん。既に佛を見已らば、究竟じて復更に女身を受けじ。

(三)善男子、是金光明微妙の經典は種種の利益あり、種種に菩薩の善根を增長し、諸の業障を滅す。善男子、若し苾芻、苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦あり、隨て何の處にあらんも、人の爲に此金光明經を講說せば、其國土に於て皆四種の福利善根を獲ん。云何が四と爲す。一には國王病なく、諸の災厄を離る。二には壽命長遠にして障礙あるなし、三には諸の怨敵なく、兵衆勇健なり。四には安隱豐樂にして、正法流通す。何を以ての故に。是の如き人王は、常に釋、梵、四王、藥叉の衆に、共に守護せらるるが故に。

爾時、世尊、天衆に告げて曰はく、「善男子、是事實なりや不や。」是時無量の釋、梵、四王及藥叉衆俱時に聲を同うし、世尊に答へて言さく、「是の如く是の如し。若し國王ありて、此妙經王を講宣し、讀誦せば、是諸の國王を、我等四王常に來りて擁護し、行住共に其王と俱にせん。若し一切の災障及び諸の怨敵あらば、我等四王皆消殄せしめ、憂愁、疾疫亦除差せしめ、壽命を增益し、禎祥を感應せしめ、所願、心遂げて、常に歡喜を生ぜ

ん。我等亦能く其國中の有らゆる軍兵をして、悉く皆勇健ならしめん。』佛言はく、『善い哉善い哉、善男子、汝が說く所の如く汝當に修行すべし。何を以ての故に。是の諸の國主如法に行ずる時、一切の人民王に隨ひて如法の行を修習せば、汝等皆色、力、勝利を蒙り、宮殿、光明、眷屬强盛ならん。』時に釋梵等、佛に白して言さく、『是の如し、世尊。』佛言はく、『若し此妙經典を講讀するあらば、流通の處、其國中に於て、大臣輔相四種の益あり。云何が四と爲す。一には更に相親睦、尊重、愛念せん。二には常に人王の爲に心に愛重せられ、亦沙門、婆羅門、大國、小國に遵敬せられん。三には財を輕じ法を重じ、世利を求めず。嘉名普く覽び衆に欽仰せられん。四には壽命延長し、安隱快樂ならん。是を四種の利益と名く。若し國土ありて、是經を宣說せば、沙門、婆羅門、四種の勝利を得ん、云何が四と爲す。一は衣服、飮食、臥具、醫藥乏少する所なし。二には皆安心を得て、思惟讀誦せん。三には山林に依り、安樂住を得ん。四には心の所願に隨ひて皆滿足を得ん。是を四種の勝利と名く。若し國土ありて、是經を宣說せば、一切の人民皆豐樂を得、諸の疾疫なく、商估は往還に多くの寶貨を得て、勝福を具足せん。是を種種の功德利益と名く。』

爾時、釋、梵、四天王及諸の大衆、佛に白して言さく、『世尊、是の如き經典甚深の義、若し現在せば、當に知るべし、如來三十七種の助菩提法、世に住して未だ滅せず。若し是經典滅盡の時は、正法も亦滅せん。』と。佛言はく、『是の如く是の如し。善男子、是故に汝等此金光明經の一句、一頌、一品、一部に於て、皆當に一心に、正しく讀誦し、正し

く聞持し、正しく思惟し、正しく修習し、諸の衆生の爲に、廣宣流布せば、長夜に安樂にして福利邊り無かるべし。[一]

時に諸の大衆、佛の說を聞き已りて、咸な勝益を蒙り、歡喜受持せり。

金光明最勝王經 卷第四

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

最淨地陀羅尼品第六

(一)爾時、師子相無礙光焔菩薩、無量億衆と座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に着け、合掌恭敬して、佛足を頂禮し、種種の華、香、寶幢、幡、蓋を以て供養し已り、佛に白して言さく『世尊、幾の因緣を以てか菩提心を得る。何者か是れ菩提心なる。世尊、即ち菩提に於て現在心も得べからず。未來心も得べからず。過去心も得べからず。菩提を離れて菩提心また得べからず、菩提とは言說すべからず、心亦色無く、相無く、事業ある無く、造作すべきに非ず。衆生亦得べからず。亦知るべからず。世尊、云何が諸法甚深の義、知ることを得べき。』

(二)佛言はく『是の如く是の如し。菩提は微妙なり。事業、造作皆得べからず。若し菩提を離れて、菩提心も亦得べからず、菩提は說くべからず。心また說くべからず。色相無く事業無し。一切衆生亦得べからず。何を以ての故に菩提及び心は眞如に。同じきが故に、能證、所證皆平等なるが故に、諸法は了知すべき無きに非ず。善男子、菩薩摩訶薩、是の

【最淨地陀羅尼品】前二品は地前凡夫の淺行を明かし、今は菩薩十地の深行に就ていふ。

【一】無礙光焔菩提心を得るの因緣を問ふ。

【菩提を離れて等】一法として眞如を離るるものなき故に、如心を離れ菩提心得べからず。

【言說すべからず等】眞如は語言道斷にして心行處滅する故に。

【衆生亦不可得】衆生とは我なり、我の體は無にして、假和合なること幻の如きが故に實に不可得なり。

【二】答ふる已下如來之を明す。菩提を離れて菩提不可得なるを答ふるなり。

【菩提と心とは等】菩提の義と心とは同じく眞如によるが故に能く說得する能はず、計執を

如く知るものは、乃ち名けて諸法に通達して、善く菩提及菩提心を說くと爲すことを得。菩提心は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず、心も亦是の如し。衆生も亦是の如し。中に於て二相實に得べからず。何を以ての故に。一切の法は皆無生なるを以ての故に。菩提得べからず。菩提の名亦得べからず。衆生と衆生の名も得べからず。聲聞と聲聞の名も得べからず。獨覺と獨覺の名も得べからず。菩薩と菩薩の名も得べからず。佛と佛の名も得べからず。行と非行も得べからず。行と非行の名も得べからず。不可得を以ての故に。一切寂靜法の中に於て安住を得。此一切の功德善根によりて生起することを得。

(三)善男子、譬へば寶須彌山王の一切を饒益するが如く、此菩提心衆生を利するが故に是を第一布施波羅蜜の因と名く。善男子、譬へば大地の衆物を持するが如きが故に是を第二持戒波羅蜜の因と名く。譬へば師子大威力あり獨步して畏るるなく、驚恐を離るる如きが故に是を第三忍辱波羅蜜の因と名く。譬へば風輪の那羅延力勇壯速疾なるが如く、心退せざるが故に是を第四勤策波羅蜜の因と名く。譬へば七寶の樓觀に四階の道ありて、清凉の風來りて、四門より吹きて、安隱の樂を受くるが如く、靜慮の法藏、求めて滿足するが故に是を第五靜慮波羅蜜の因と名く。譬へば日輪の光耀熾盛なるが如く、此心速に能く生死無明の闇を破るが故に、是を第六智慧波羅蜜の因と名く。譬へば商主の能く一切の心願をして滿足せしむるが如く、此心能く生死の險道を度り、功德の寶を獲るが故に是を第七方便勝智波羅蜜の因と名く。譬へば淨月圓滿にして翳なきが如し。此心能く一切の境界に於て

離るるが故なり。【心も亦等】前の心は第一義心、今は是れ緣心なり。【二相】人法なり。【不可得を以ての故等】菩提甚深の義を釋す。所證の菩提も能證の者も皆施說にして假定なれば實に不可得、この理を知るを一切寂靜法の中に於て安住すといふ。今は此の世俗道理に於て一切の功德善根により菩提の生起を說くなり。【三】以下菩提を說く、初めに發心。即ち十度心を發すなり。【寶須彌山等】此山は餘山に高く珍寶謐くるなきを以て施に喩ふ。【大地の等】戒は諸善功德の安穩住處の故に地に喩ふ。【師子等】師子に大威力等の三德あるが如く發心して

三種忍を修するに喩ふ。

【風輪等】那羅延とは力勝なり、風力の強烈は勇猛精進に喩ふ。勤策は普通精進といふ。

【七寶等】四禪八定の七最勝あるに喩ふ、四道は發心に喩ふ、四門は常樂我淨の四觀に喩ふるなり。

【日輪等】智の自性に喩へ、光等はその作用に喩ふ、共に般若度を修するに喩ふるなり。

【商主等】商主に善巧方便ありて寶を得るを、廻向方便拔濟方便によりて生死道を度し大菩提を獲るに喩ふるなり。

【淨月等】求菩提化衆生の願に、又自他障を除けば無驕といふ、卽ち二利要ず眞俗二諦の境に於て離障し滿足を得れば一切の境界等といふ。

清淨具足するが故に是を第八願波羅蜜の因と名く。譬へば轉輪聖王、主兵の寶臣意に隨て自在なるが如く、此心善能く莊嚴して、佛國土を淨め、無量の功德もて廣く群生を利す、故に是を第九力波羅蜜の因と名く。譬へば虛空及轉輪聖王の如し。此心能く一切の境界に於て障礙あるなく、一切處に於て皆自在を得て灌頂位に至る。故に是を第十智波羅蜜の因と名く。善男子、之を菩薩摩訶薩十種の菩提心の因と名く。是の如き十因、汝當に修學すべし。

(四)善男子、五種の法に依りて菩薩摩訶薩布施波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には信根。二には慈悲。三には求欲の心無し。四には一切衆生を攝受す。五には一切智智を願求す。善男子、是を菩薩摩訶薩布施波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩持戒波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には三業清淨。二には一切衆生の爲に煩惱の因緣を作さず。三には諸の惡道を閉ぢて善趣の門を開く。四には聲聞、獨覺の地を過ぐ。五には一切の功德皆悉く滿足す。善男子、是を菩薩摩訶薩、持戒波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩忍辱波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には能く貪瞋煩惱を覆す。二には身命を惜まず、安樂止息の想を求めず。三には往業を思惟し、苦に遭ふも能く忍ぶ。四には慈悲心を發す。衆生の諸善根を成就するが故に。五には甚深の無生法忍を得ると爲す。善男子、是を菩薩摩訶薩忍辱波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩勤策波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には諸の煩惱と共に住するを

樂はず。二には福德未だ具せざれば安樂を受けず。三には諸の難行苦行の事に於て厭心を生ぜず、四には大慈悲を以て一切衆生を攝受し、利益し、方便成熟す。五には不退轉地を願求す。善男子、是を菩薩摩訶薩勤策波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩靜慮波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には諸善法に於て攝して散ぜざらしむるが故に。二には常に解脫を願ひ二邊に著せざるが故に。三には神通を得て衆生の諸の善根を成就することを願ふが故に。四には淨法界の爲に心垢を蠲除するが故に、五には衆生煩惱の根本を斷ずる爲の故に。善男子、是を菩薩摩訶薩靜慮波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩智慧波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には常に一切の諸佛菩薩及明智者に於て供養親近して厭背を生ぜず。二には諸佛如來甚深の法を說くに、心常に樂み聞きて、厭足あるなし。三には眞俗の勝智、樂うて善く分別す。四には見修の煩惱咸な速に斷除す。五には世間の技術、五明の法皆悉く通達す。善男子、是を菩薩摩訶薩智慧波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩方便波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には一切衆生の意樂、煩惱、心行の差別に於て悉く皆通達す。二には無量の諸法對治の門、心に皆曉了す。三には大慈悲定、出入自在なり。四には諸の波羅蜜多に於て、皆修行し、成熟し滿足せんことを願ふ。五には一切の佛法皆了達、攝受して遺なからんことを願ふ。善男子、是を菩薩摩訶薩方便勝智波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩願波羅蜜を成ず。云何が五と爲す。一には一切法に於て、

【轉輪王等】大菩提心に喩へ、主兵の寶は力心を行ずるに喩ふ。

【虛空等】有情智を成就すること虛空の受容するに平等、無擇なるが如く、佛法智を成就すること輪王の灌頂位を受くるが如きに喩ふ。

【四】次に十度の修行を明す。

【信根】菩薩は信を以て根本となす。菩提心の體なり、攝慈悲は依止最勝、無求欲心は清淨勝、攝受一切は意樂勝、願求種智は廻向勝なり。

【三業清淨】三業戒の自性、戒は斷惡の因の故に一切衆生等といひ、衆生の諸惡道害を除くが故に諸惡道を閉ぢて等といひ、二乘に共ぜずして大菩提を求むる故に四、定慧を生ずる故に五。

本より已來、不生不滅にして、有に非ず無に非ずとして、心に安住を得。二には一切法最妙の理趣は、垢を離れて清淨なりと觀じて、心に安住を得。三には一切の相を過ぐる心の本なる眞如は、作なく行なく、異ならず動かずと、心に安住を得。四には諸の衆生を利益することを欲するが爲の故に俗諦の中に於て心に安住を得。五には奢摩他と毘婆舍那と同時に運行することに於て、心に安住を得。善男子、是を菩薩摩訶薩願波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩力波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には正智の力を以て、能く一切衆生心行の善惡を了ず。二には能く一切衆生をして甚深微妙の法に入らしむ。三には一切衆生の輪廻生死、其緣業に從ひて、實の如く了知す。四には諸の衆生三種の根生に於て、正智の力を以て能く分別して知る。五には諸の衆生に於て理の如く爲に說き、善根を植ゑて成熟度脫せしむ、皆是れ智力の故なり。善男子、是を菩薩摩訶薩力波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩、智波羅蜜を成就す。云何が五と爲す。一には能く諸法に於て善惡を分別す。二には黑白の法に於て遠離し攝受す。三には能く生死涅槃に於て厭はず喜ばず。四には福、智の行を具して究竟處に至る。五には勝灌頂を受け、能く諸佛の不共法等及び一切智智を得。善男子、是を菩薩摩訶薩智波羅蜜を成就すと名く。

(五)善男子、何者か是れ波羅蜜の義なる。謂ゆる勝利を修習する是れ波羅蜜の義。無量の大甚深の智を滿足する是れ波羅蜜の義。行と非行の法に心執著せざる是れ波羅蜜の義。生死

【貪瞋煩惱等】一は耐怨害忍、二は安受苦忍、三と四は耐怨害忍の因、五は諦察法忍、慧を性となす。

【諸煩惱と共等】一は被鉀精進、二は無退精進、三は無足精進、四は利樂有情精進、五は無下精進なり。

【諸善法等】一は安住靜慮、二と三は引發靜慮、四と五は辨事靜慮。

【淨法界】第一義心、定に依るが故に二心の垢を除く。

【諸佛菩薩等】智に三ある中、一と二は加行智、三と四は後得智、五は根本智なり。

【五明】聲明、工巧明、醫方明、因明、內明是なり。

【一切衆生等】初三は拔濟方便、後二は廻向方便、一は衆生を拔濟せんために、二は對治

のために除法を知るなり八萬四千の諸功德門、是れなり。三は除法を知るを以て諸趣に往いて自在に、大神通を現すなり、門は菩提に迴向せんため方便して諸度を修するなり。五は菩提涅槃智斷恩等の皆證了せんと願ふなり。

【一切の法等】初三求菩提の願、後二利樂他の願。一は八相の法の不生滅を觀ず、化身を觀ずるなり、二は報身を觀ず、三は法身を得んと欲するなり、法身を觀ずれば一切の相をすぐ、是心の本即ち眞如なり。煩惱の作に非るを無作、三世を離るる故無行、前後別異の相なければ不異、遷滅せざる故不動なり、四は他を利せんために俗

の過失と、涅槃の功德と正く覺り、正く觀ず、是れ波羅蜜の義。愚人も智人も皆悉く攝受する、是れ波羅蜜の義。能く種種珍妙の法寶を現ずる、是れ波羅蜜の義。無礙の解脫の智慧滿足する、是れ波羅蜜の義。法界、衆生界を正しく分別して知る、是れ波羅蜜の義。無生法忍能く滿足せしむる、施等及び智を、能く不退轉に至らしむる、是れ波羅蜜の義。無生法忍能く滿足せしむる、是れ波羅蜜の義。一切衆生の功德、善根能く成熟せしむる、是れ波羅蜜の義。能く菩提に於て、佛の十力、四無所畏、不共法等を成じ、皆悉く成就する、是れ波羅蜜の義。生死と涅槃と二相なきを了ず、是れ波羅蜜の義。一切衆生を濟度する、是れ波羅蜜の義。一切の外道來りて、相詰難せんも善能く解釋して其をして降伏せしむる、是れ波羅蜜の義。能く十二妙行の法輪を轉ずる、是れ波羅蜜の義。著する所無く、見る所無く、患累無き是れ波羅蜜多の義なり。

(六)善男子、初地の菩薩は是相先づ現ず。三千大千世界、無量無邊の種種の寶藏、盈滿せざるなきを菩薩悉く見る。善男子、二地の菩薩、是相先づ現ず。三千大千世界、地平にして掌の如く、無量無邊種種の妙色、清淨の珍寶、莊嚴の具、菩薩悉く見る。善男子、三地の菩薩是相先づ現ず。自身勇健にして、甲仗もて莊嚴し、一切の怨賊皆能く摧伏するを菩薩悉く見る。善男子、四地の菩薩是相先づ現ず。四方の風輪、種種の妙華、悉く皆散じ灑ぎて地上に充布するを菩薩悉く見る。善男子、五地の菩薩に、是相先づ現ず。妙寶女あり、衆寶の瓔珞もて、周遍身を嚴り、首に名華を冠とし以て其飾と爲すを菩薩悉く

く見る。善男子、六地の菩薩に、是相先づ現ず。七寶の華池に四階の道あり、金沙遍く布きて、清淨にして穢なし、八功德水、皆悉く盈滿し、嗢鉢羅華、拘物頭華、芬陀利華隨所に莊嚴し、華池の所に於て遊戲快樂するに清涼比無きを菩薩悉く見る。善男子七地の菩薩に是相先づ現ず。菩薩の前に於て諸の衆生あり。地獄に墮すべきを菩薩の力を以て便ち墮せざるを得て、損傷あるなく、亦恐怖なきを菩薩悉く見る。善男子、八地の菩薩に是相先づ現ず。身の兩邊に於て師子王ありて衞護を爲し、一切の衆獸、悉く皆怖畏するを菩薩悉く見る。善男子、九地の菩薩に是相先づ現ず。轉輪聖王、無量億衆に圍繞し、供養せられ、頂上の白蓋は無量衆寶の莊嚴する所なるを菩薩悉く見る。善男子、十地の菩薩に是相先づ現ず。如來の身、金色晃耀して、無量の淨光皆悉く圓滿し、無量億の梵王ありて、圍繞し、恭敬し、供養せられ、無上微妙の法輪を轉ずるを菩薩悉く見る。

(七)善男子、云何が初地を名けて歡喜となす。謂はく初めて出世の心を證得し、昔し未だ得ざる所、今始めて得、大事用に於て其願ふ所の如く、悉く皆成就して極喜樂を生ず。是故に最初を名けて歡喜と爲す。諸の微細の垢と犯戒の過失と皆清淨を得。是故に二地を名けて無垢と爲す。無量の智慧三昧の光明傾動すべからず、能く摧伏するものなく、聞持陀羅尼を以て根本と爲す、是故に三地を名けて明地とす。智慧の火を以て、諸の煩惱を燒き、光明を增長し、覺品を修行す。是故に四地を名けて焰地と爲す。方便を修行し、勝智自在極めて得難きが故に見修の煩惱伏し難きを能く伏す。是故に五地を名けて難勝とす。行法

諸にあり、五は他生を利するためには止觀によつて如幻離諸過等を了知するを要す。

【奢摩他】シャマタ(Samatha)止と譯す、精神の靜寂止住の狀態なり。

【毘婆舍那】ギバーシャナー(Vipaśyanā)觀といふ、正見正觀の用なり。

【正智の力等】正智とは增上慢行を離るる故に、一切の業を實了す、二は漏盡力の故に漏の盡不盡を知り無爲を證得す、三は生死生智力による、四に根とは根勝劣智力、性とは種種性智力なり、五は處非處智力、靜慮等の智力、靜解智力に通ず。

【智波羅蜜】一切法に於て如實に安立する清淨妙智をいふ。五の中初三は成熱有情、後二

相續して、了了として顯現し、無相に思惟し、皆悉く現前す。是故に六地を名けて現前と爲す。無漏を無間無相に思惟し、解脫三昧遠く修行するが故に、是地清淨にして障礙ある無し。是故に七地を名けて遠行と爲す。無相に思惟し、修得自在にして、諸の煩惱の行、動かしむる能はず、是故に八地を名けて不動と爲す。一切の法種種の差別を說くに、皆自在を得、患無く累無く、智慧を增長し、自在無礙なり。是故に九地を善慧と爲す。法身は虛空の如く、智慧は大雲の如く、皆能く遍滿して一切を覆ふが故に、是故に第十を名けて法雲と爲す。

(八)善男子、有相の我法に執著する無明、生死惡趣を怖畏する無明、此二の無明は初地を障ふ。微細の學處誤りて犯す無明、種種の業行を發起する無明、此二の無明は二地を障ふ。未だ得ざるを、今得たりと愛著する無明、能く殊勝の總持を障ふる無明、此二の無明は三地を障ふ。味著等の至喜悅の無明、微妙の淨法愛樂の無明、此二の無明は四地を障ふ。生死に背かんと欲する無明、涅槃を希趣する無明、此二の無明は五地を障ふ。觀行流轉の無明、麤相現前の無明、此二の無明六地を障ふ。微細の諸相現行する無明、作意して無相を欣樂する無明、此二の無明は、七地を障ふ。無相觀に於て功用する無明、相を執る自在の無明。此二の無明は八地を障ふ。所說の義及び名、句、文と此二の無礙に於て、未だ善巧を得ざる無明、詞と辯才とに於て隨意ならざる無明、此二の無明は、九地を障ふ。大神通に於て、未だ自在に變現するを得ざる無明、微細の祕密あり、未だ事業を悟解する能はざる

は成就佛法なり。【黑白の法】善惡の法なり。【五】波羅蜜の義を述ぶ。即ち十波羅蜜。【勝利】發心すれば衆生の尊重福田たり、能く無惱害の福を攝受する二種あり。【大甚深】二空を能了し、他の測る能はざる智なり。【行】善法なり、不善法を非行といふ。【生死】有漏果、涅槃は無漏果なり【愚人等】愚人は生死を樂ひ、智人は涅槃を樂ふ、平等は利益の悲心、二つながら攝受す。【珍寶】勝定に依て七寶等を現じ衆生に施す。【無礙等】八解脫により四無礙等を引く能く神通等を得るなり。【法界衆生界】五無損の二種。

【施等】前五度、智は後五度、能く修習して不退轉に至れば即ち第十地なり。
【無生法忍】三無生忍、初地に創めて得、八地に相續を得て能く滿足せしむれば佛地に至る。
【一切衆生等】利他善根の功德なり。
【十力等】十力は天魔を、無畏は外道を、不共法は二乘を降す。
【生死涅槃等】眞如無別に通達するなり。斷德なり。
【一切衆生等】これ彼岸の恩德。
【一切の外道等】邪彼岸を破す。
【十二妙行】苦集滅道四諦の三轉なり。正しく彼岸を顯す。
【著す所なく】無染著なり、無滯凝の故に無所見、無常色を捨して常色を得る故に無患累

無明、此二の無明は十地を障ふ。一切の境に於て微細の所知障礙の無明、極細の煩惱麤重なる無明、此二の無明は佛地を障ふ。

(九)善男子、菩薩摩訶薩初地の中に於て施波羅蜜を行ず。第二地に於て戒波羅蜜を行ず。第三地に於て忍波羅蜜を行ず。第四地に於て勤波羅蜜を行ず。第五地に於て定波羅蜜を行ず。第六地に於て慧波羅蜜を行ず。第七地に於て方便勝智波羅蜜を行ず。第八地に於て願波羅蜜を行ず。第九地に於て力波羅蜜を行ず。第十地に於て智波羅蜜を行ず。

(一〇)善男子、菩薩摩訶薩最初發心の攝受は能く妙寶三摩地を生ず。第二發心の攝受は能く可愛樂三摩地を生ず。第三發心の攝受は能く難動三摩地を生ず。第四發心の攝受は能く不退轉三摩地を生ず。第五發心の攝受は能く寶華三摩地を生ず。第六發心の攝受は能く日圓光焰三摩地を生ず。第七發心の攝受は能く一切願如意成就三摩地を生ず。第八發心の攝受は能く現前證住三摩地を生ず。第九發心の攝受は能く智藏三摩地を生ず。第十發心の攝受は能く勇進三摩地を生ず。善男子是を菩薩摩訶薩十種の發心と名く。

(一一)善男子、菩薩摩訶薩此初地に於て陀羅尼を得、依功德力と名く。(一二)爾時世尊、即ち咒を說いて曰く、

怛姪他、哺暲儞、曼奴喇剃、獨虎、獨虎、獨虎、耶跋蘇利瑜、阿婆婆薩底、耶跋旃達羅、調怛底、多跋達洛叉漫、憚荼鉢喇訶藍、矩嚕、莎訶

善男子、此陀羅尼は、是れ一恆河沙數の諸佛の說く所。初地の菩薩摩訶薩を護らんが爲

の故なり。若し此陀羅尼呪を誦持するあらば、一切の怖畏、謂ゆる虎、狼、師子、惡獸の類、一切の惡鬼、人、非人等、怨賊、災横及び諸の苦惱を脫するを得て五障を解脫し、初地を念ずることを忘れじ。善男子、菩薩摩訶薩、第二地に於て陀羅尼を得。善安樂住と名く。

怛姪他、嗢篅里、質里質里、嗢篅羅、篅羅、喃繕覩繕覩嗢篅里、虎嚕、虎嚕莎訶。

善男子、此陀羅尼は是れ二恆河沙數を過ぐる諸佛の說く所、二地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊、災横及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫して二地を念ずることを忘れじ。善男子、菩薩摩訶薩第三地に於て陀羅尼を得。難勝力と名く。

怛姪他憚宅、枳般、宅枳、羯喇撥高喇撥、鷄由哩、憚撥里、莎訶。

善男子、此陀羅尼是れ三恆河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。三地の菩薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊、災横、及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、三地を念ずることを忘れじ。善男子、菩薩摩訶薩第四地に於て陀羅尼を得。大利益と名く。

怛姪他、室利室利、陀弭儞陀弭儞、陀哩陀哩儞、室利室利儞、毘舍羅、波始波始娜、畔陀弭帝、莎訶。

善男子、此陀羅尼は、是れ四恆河沙を過ぐる諸佛の說く所なり。四地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊、

なり、是二種生死の患累を捨す。

【六】前に說きし修行に由り十地を證するを明す。初に地相を明す。

【初地の菩薩】初地は一切の施度を行ずるを表はす。

【二地】平等の理を證し淨戒を具持するを表はす。

【三地】三忍を行ずるに勇健の相あるを明す、

【四地】四正勤等を行ずるを明す。

【五地】禪定を行ずるを表はす。

【六地】智度を行ずるを表はす。

【四階の道】加行無間解脫勝進を表はす。

【八功德水】淨輕冷軟甘不臭飲不損喉飲不傷腸の八。

【嗢鉢羅華】ウトパラ(Utpala)青蓮華。

【拘物頭華】クムダ(Kumuda)赤蓮華。

【分陀利華】プンダリーカ（Pundarika）白蓮華。
【七地】善巧方便を以て衆生を濟度するを表はす。
【八地】願を行ずるを表はす。
【九地】力度を行ずる輪王の大勢力あるが如きを表はす。
【白蓋】四無量を以て蔭生ずること蓋の如し。
【十地】灌頂位の正覺を成ずるを表はす。
【七】十地の一一について釋す。
【歡喜地】梵にプラムディター（Pramudita）といふ。
【無垢地】ヸマラー（Vimala）或は離垢地といふ。
【無量の智慧】聞思修の三慧は無量にして定より發す。
【聞持陀羅尼等】三慧は定總持所發の故を以てなり、定總持を根本と名

災横及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、四地を念ずることを忘れじ。善男子、菩薩摩訶薩、第五地に於て陀羅尼を得。種種功德莊嚴と名く。

怛姪他、訶哩訶哩、儞遮哩、遮哩儞、羯喇摩、儞、僧羯喇摩、儞、三婆山儞瞻跋儞、悉耶婆儞、謨漢儞、碎闍步陛、莎訶。

善男子、此陀羅尼は是れ五恆河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。五地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を誦するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊災横及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、五地を念ずることを忘れじ。善男子、菩薩摩訶薩第六地に於て陀羅尼を得。圓滿智と名く。

怛姪他、毘徒哩、毘徒哩、摩哩儞、迦里、迦里、毘度漢底、嚕、嚕、嚕、嚕、主嚕、主嚕、杜嚕婆、捨捨設者、婆里灑、莎悉底、薩婆薩埵喃、悉甸覩、曼覩囉鉢陀儞、莎訶。

善男子、此陀羅尼は是れ六恆河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。六地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊、災横、及び諸の苦惱を脫し五障を解脫し六地を念ずることを忘れじ。善男子、菩薩摩訶薩第七地に於て陀羅尼を得。法勝行と名く。

怛姪他、句訶、句訶嚕、句訶、句訶句訶嚕、鞞陸枳、鞞陸枳、阿密栗多唬漢儞、勃里山儞、鞞嚕勅枳、婆嚕伐底、鞞提咽枳、頻陀鞞哩儞、阿密哩底枳、薄虎主愈、薄虎主愈、莎

く。

【明地】プラバーカリー(Prabhākarī)或は發光地といふ。

【燄地】アルチシユマティー(Arcismati)或は燄慧地、此の中に菩提分を修す。

【難勝地】スヅルジャヤー(Sudurjaya)

【了了として等】智常に正觀するをいひ、この加行のために無分別智を起すを無相思惟といふ。

【現前地】アビムックティー(Abhimukti)

【解脱等】八解脱三昧は三三昧、俱に遠く修行すれば功用の後邊に至る遠くとは二乘を出離するなり。

【遠行地】ヅーラムカアー(Duramgama)

【無相に思惟等】無相觀に於て任運

訶。

善男子、此陀羅尼は、是れ七恆河沙數を過ぐる、諸佛の說く所なり。七地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊、災橫及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、七地を念ずることを忘れじ。善男子、菩薩摩訶薩第八地に於て陀羅尼を得。無盡藏と名く。

怛姪他、室唎、室唎、室唎儞、密底、密底、羯哩、羯哩、醯嚕、醯嚕、主嚕、主嚕、畔陀弭、莎訶。

善男子、此陀羅尼は是れ八恆河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。八地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を、誦持するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊、災橫、及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、八地を念ずることを忘れじ。善男子、菩薩摩訶薩第九地に於て陀羅尼を得。無量門と名く。

怛姪他、訶哩、旃荼哩枳、俱藍婆喇體、覩刺死、拔吒跋吒死、室唎、室唎、迦室哩、迦必室唎、莎悉底、薩婆薩埵南、莎訶。

善男子、此陀羅尼は是れ九恆河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。九地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を、誦持するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊、災橫、及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、九地を念ずることを忘れじ。善男子菩薩摩訶薩第十地に於て陀羅尼を得。破金剛山と名く。

に起る故に名く、純無漏觀なれば修得自在なり。【不動地】アチャラー(Acala)【自在を得等】任運に由る故に、二愚障を離るる故に無患累なり。【善慧地】サーヅマティー(Sadhumati) 四無礙智任運能得の故に善慧といふ。【法雲地】ダルマメーガー(Dharmamegha) 法雨を雨らすこと雲の如き故に名く。【入】十地を障ふる無明を述ぶ。【初地】異生性の障。【二地】所知障。【三地】闇鈍障。【未得今障】無漏勝定なり。【四地】微細煩惱現行障。【味著】愛、下劣禪定の樂味を執するもの喜悦は受なり、菩提分法に著

怛姪他、悉提、蘇悉提、謨折儞、木察儞、毘木底、菴末麗、毘末麗、涅末麗、忙揭麗、呬攔若揭鞞、曷喇怛娜揭鞞、三曼多跋姪囇、薩婆頞他娑憚儞、摩捺斯、莫訶摩捺斯、頞歩底、菴室歩底、阿喇誓、毗喇誓、頞主底、菴密栗底、阿喇誓、毗喇誓、跋囇迷、跋羅甜麼、渉囇、哺喇儞、哺喇娜、曼奴喇剃、渉訶。

善男子、此陀羅尼灌頂吉祥句は、是れ十恆河沙數を過ぐる諸佛の說く所、十地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故に。若し此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏、惡獸、惡鬼、人、非人等の怨賊、災横、一切の毒害を脫し、皆悉く除滅し、五障を解脫し、十地を念ずることを忘れじ。』

(二二)爾時、師子相無礙光焔菩薩、佛の此不可思議の陀羅尼を說きたまふを聞き已りて、即ち座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して、佛足を頂禮し、頌を以て佛を讚じたてまつる。

譬喩なき甚深の、無相の法を敬禮す
衆生正知を失するを、唯佛能く濟度す
如來の明慧眼は、一法の相を見ず
復正法眼を以て、普く照らすこと不思議なり
一法を生ぜず、又一法を滅せず
斯平等の見に由り、無上處に至ることを得

するは法愛の無明なり。【生死に背く等】生死涅槃の眞の體は別なきことを了せざるを以て偏して欣厭有るなり。【觀行流轉等】苦集二諦の上に起る無明、麁の相現前は滅道二諦の上に起る。無明なり。【七地】前は麁相今は細相現行障。【八地】無相中に加行障をなすなり【九地】利他中の不欲行障。【十地】諸法中に於て不得自在の障【所知障礙の無明】是れ二障にして一は極めて微細の所知障と他は煩惱障の種子なり、是れ特に最後に殘存して異彩なる故に麁重と名く。【九】十地の各各に修するところの法を明す。【一〇】十地に於ける修行禪定を明す

生死を壞せず、亦涅槃に住せず
二邊に著せず、是故に圓寂を證す
淨不淨品に於て、世尊一味を知る
分別せざるに由るが故に、最清淨を獲得す
世尊の無邊身、一字を說かざるも
諸の弟子衆をして、法雨皆充滿せしむ
佛衆生の相を觀ずるに、一切種皆無し
然も苦惱者に於て、常に救護を興す
苦、樂、常、無常、有我、無我等
一ならず、又異ならず。生せず又滅せず
是の如き衆多の義、說くに隨ひて差別あり
譬へば空谷の響の如し、唯佛能く了知す
法界分別無し、是故に異乘無し
衆生を度せんが爲に、三ありと說く

爾時、大自在梵天王亦座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して、佛足を頂禮し、佛に白して言さく、「世尊、此金光明最勝王經は、希有にして量り難し。初、中、後善く、文義究竟し。皆能く一切の佛法を成就す。若し受持せば、是人則ち諸佛

【妙寶等持】條摩地は等持と譯す、定に由て施を起す故。【可愛樂】定能く戒を起すに名く。【難動】定能く忍を起すに名く。【不退轉】定精進を起すに名く。【寶華】定に由つて能く功德の勝因をなすに名く。【日圓光燄】定智を起すに名く。【一切願等】定よく方便善巧を起すに名く。【現前證住】定能く智を起し、無相の妙理を證するをいふ。【智藏】定四辯を起すをいふ。【勇進】神通廣大事業を起すをいふ。【二】十地の各各に於て陀羅尼を得衞護となすを明す。【五障】狀、惱、瞋、恨、怨にして信、進、念、定、慧の五根を障礙する

恩を報ずと爲す。』佛言はく、『善男子、是の如く是の如し。汝が說く所の如し。善男子、若し此經を聽聞するを得ば皆阿耨多羅三藐三菩提を退せじ。何を以ての故に。善男子、是れ能く不退地の菩薩の殊勝の善根を成熟す。是れ第一法印、是れ衆經の王なるが故に、應に聽聞、受持、讀誦すべし。何を以ての故に。善男子、若し一切の衆生、未だ善根を種ゑず、未だ善根を成熟せず、未だ諸佛に親近せざるものは、是れ微妙の法を聽聞すること能はず。若し善男子、善女人、能く聽受するものは、一切の罪障、皆悉く除滅し、最淸淨を得て、常に佛を見ることを得、諸佛及善知識、勝行の人を離れず、恆に妙法を聞き不退地に住し、是の如き勝陀羅尼門を獲得し盡くる無く減ずる無し。所謂海印出妙功德陀羅尼、盡くる無く減ずる無し。日圓無垢相光陀羅尼盡くる無く減ずる無し。通達衆生意行言語陀羅尼、盡くる無く減ずる無し。滿月相光陀羅尼盡くる無く減ずる無し。能伏諸惑演功德流陀羅尼、盡くる無く減ずる無し。破金剛山陀羅尼盡くる無く減ずる無し。說不可說因緣藏陀羅尼盡くる無く減ずる無し。通達實語法則音聲陀羅尼盡くる無く減する無し。虛空無垢心行印陀羅尼盡くる無く減ずる無し。無邊佛身皆能顯現陀羅尼盡くる無く減ずる無し。善男子、是の如き等の無盡無減の諸陀羅尼門の成就を得るが故に、是菩薩摩訶薩、十方一切の佛土に於て、佛身を化作し、無上種種の正法を演說し、法眞如に於て動ぜず、住せず、來らず、去らず。善く一切衆生の善根を成熟して、亦一衆生の成熟すべきものを見ず。種種の諸法を說くと雖も、言辭の中に於て、動ぜず、住せず、去らず、來らず。能く生滅に於て、無

生滅を證す。何の因緣を以て、諸の行法去來ある無しと說くや。一切の法體異なるなきに由るが故に。

（二四）是法を說くとき、三萬億の菩薩摩訶薩、無生法忍を得、無量の諸菩薩は菩提心を退せず。無量無邊の苾芻、苾芻尼、法眼淨を得、無量の衆生、菩提心を發す。

爾時、世尊、頌を說きて曰はく、

勝法は能く生死の流に逆ふ。甚深微妙にして見るを得べきこと難し
有情は盲冥にして貪欲覆ひ、見ざるが故に衆苦を受く

爾時に大衆倶に坐より起ちて、佛足を頂禮し、而して佛に白して言さく、「世尊若し所在の處に、此金光明最勝王經を講宣し、讀誦せば、我等大衆、皆悉く彼に往きて、爲に聽衆とならん。是說法師に利益安樂を得て、障りなく、身意泰然たらしめ、我等當に心を盡くして供養すべし。亦聽衆をして、安隱快樂に、所住の國土に、諸の怨賊、恐怖、厄難、飢饉の苦爲く、人民熾盛ならしめん。此法を說く所、道場の地、一切の諸天、人、非人等、一切の衆生、履踐及び汙穢すべからず。何を以ての故に。說法の所、卽ち是制底なり。當に香、華、繒綵、幡蓋を以て供養を爲すべし。我等常に守護を爲し、衰損を離れしめん。」佛大衆に告げたまはく、「善男子、汝等應當に精勤して、此妙經典を修習すべし。是則ち正法久しく世に住せん。」

煩惱なり。

【二三】陀羅尼を說くをきゝて之を領解し頌を以て讚ずるを明す。

【譬喩なき】法體殊勝の故に、唯佛のみ究了する故に、甚深、空有の相なきを無相といふ。

【衆生等】凡夫無正智にして邪業をなし生死に沈倫するを、唯佛能く二智を具して濟度す。

【如來の妙慧眼等】慧眼は空第一義諦を照す、無分別の故に不見一法相、諸法なきに非るなり。

【法眼等】教法及衆の根性を緣ずるをいひ、解了せざるなきを普照、餘の測る能はざるを不思議といふ。

【一法を等】眞如無生滅の故に。

【斯の平等等】二眼を修して圓滿を得る故に、無上處とは大菩提。

金光明最勝王經　卷第五

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

蓮華喩讃品第七

爾時、佛菩提樹神善女天に告げたまはく、『汝今應に知るべし、妙幢夜夢に妙金鼓の大音聲を出して、佛の功德幷に懺悔の法を讃ずるを見る。此因緣我汝等の爲に廣く其事を說かん。應當に諦に聽いて善く之を思念すべし。

過去に王あり。金龍王と名く。常に蓮華喩の讃を以て、十方三世の諸佛を稱歎す。

則ち大衆の爲に其讃を說きたまふ。曰はく、

過去未來現在の佛、十方世界の中に安住したまふ
我今至誠に稽首して禮し、一心に諸の最勝を讃歎す
無上清淨の牟尼尊、身光照耀して金色の如し
一切の聲中最も上と爲す。大梵響は震雷の音の如し
髮彩喩へば黑蜂王の若し、宛轉の旋文、紺靑色なり
齒は白くして齊密なること珂雪の如し、平正に顯現して光明あり

【淨不淨等】淨不淨の體は眞如にして一味なり、無分別智によつてこの一味を證す。

【世尊の無邊身等】形無量にして測り難ければ無邊といふ、遍計を離れ、眞理無の故に一字を說かず、然も因緣讃變の力に由りて衆に聞法を得しめ、皆充滿を得るなり。

【佛衆生の相等】平等觀に立つ大慈悲を以て一切種なきの苦惱者をも救護するなり。

【苦樂等】體一なりと雖も機に隨つて說くが故に差別あり、譬へば空谷本音聲なきも響緣に隨つて種々の聲を出すが如し。

【法界分別なし等】三乘の別は衆生の機に隨ひて設けたるに過ぎず其實は唯一乘あるのみ。

【二三】梵天此經を

讃じ佛之た印誠するを明す。

【勝陀羅尼門】一法を以て一切の佛陀を攝すべき勝妙の法門。

【海印出妙功德】已下は次での如く十地菩薩の獲得すべき妙法なり、大海潮の時を失するなき如く平等如を證して印となす、又陀羅尼によつて布施の勝妙功德を生ずるなり。

【通達衆生等】不了業患を除いてこの總持を得る故に自他身口意の三業に通達す。

【日闇無垢相光】闇鈍愚を離るる故にこの德持を得、能く殊勝妙定の三明を發す故。

【滿月相光】微細障を斷るる故精進殊勝にして能く已生未生の我見執を除き已生の善法を長ぜしむること、月光の蓮華を開長

目は淨く、無垢にして、妙に端嚴なり。猶し廣大の青蓮葉の如し
舌相廣長にして極めて柔軟なり、譬へば紅蓮の水中より出たるが如し
眉間常に白毫の光あり。右に旋りて宛轉し、頗梨の色あり
眉は細く纖長にして初月に類す、其色光耀蜂王に比ぶべし
鼻は高く脩直にして金鋌の如し。淨妙の光潤ひて相虧くること無し
一切世間の殊妙の香聞くとき悉く其所在を知る
世尊の最勝身は金色なり。一一の毛端相殊ならず
紺青柔軟にして右旋の文あり。微妙の光彩喩を爲すこと難し
初誕の身すら妙光明あり。普く一切十方界を照らし
能く三有の衆生の苦を滅し、彼をして悉く安隱の樂を蒙らしむ
地獄、傍生、鬼道の中、阿蘇羅天及人趣
彼をして衆苦を除滅せしめ、常に自然安隱の樂を受けしむ
身色光明常に普く照らし、譬へば鎔金の妙にして比無きが如し
面貌は圓明にして滿月の如く、脣の色は赤好にして頻婆に喩ふべし
行步、威儀、師子に類し、身光明耀にして初日に同じ
臂肘纖長にして立てば膝を過ぐ。狀は下に垂ること、娑羅の枝に等し
圓光一尋、照らすこと邊り無し。赫奕として猶し百千の日の如く

せしむる如し。
【能伏諸惑演功德】諦相應の增上慧を得る故に貪等を能伏し、修定勝るる故に功德流を演ず【金剛山】般若を習してよく愚癡障を破す。
【說不可說因緣藏】多く無相に住するをいふ。
【通達實語等】無相功用の智を得、大願力の故に能く實語に通達して法則を生ずるなり。
【虛空無垢等】四辨の自在を得ること空の如く、利他障を除くが故に無垢、所說法の義能く衆生心行の勝印となる。
【無邊佛身等】大智雲を得て法界に充滿す、無邊界を盡くして所願身皆顯現す、皆この總持によるなり。
【善く一切の衆生等】一切衆生を濟度するも善惡邪正

悉く能く遍く諸佛刹に至り、緣の在る所に隨ひて、群迷を覺す
淨光明の網は倫比無し、耀を流して百千界に遍滿す
普く十方を照して障礙なし。一切の冥暗悉く皆除く
善逝の慈光は能く樂を與へ、妙色映徹して金山に等し
光を流して悉く百千の土に至り、衆生遇ふものは皆出離す
佛身は無量の福を成就し、一切の功德共に莊嚴し
世間の殊勝にして與に等しきもの無し
有ゆる過去一切の佛、數は大地の諸の微塵に等し
未來、現在十方の尊、亦大地微塵の如き衆なり
我至誠の身語意を以て稽首して、三世佛に歸依し奉り
無邊の功德海を讚嘆して、種種の香華皆供養す
設ひ我口中に千舌あり、無量劫を經て、如來を讚ぜんも
世尊の功德は思議すべからず。最勝甚深にして說くべきこと難し
假令我が舌百千ありて、一佛の一功德を讚嘆せんも
中に於て少分すら尚知り難し。況んや諸佛の德邊際無きをや
假令大地及諸天、乃至有頂を海水となさんに
毛端の滴の數は知るべきも、佛の一功德甚だ量り難し

の差別見あるなし諸の妙法を演說するも、淺深大小の思あるなし、蓋し一味平等の眞如なるが故なり。
【三】開法の得益を明す。
【制底】梵にチャイトヤ(caitya)佛寺塔廟のことなり。
【蓮華喩讚品】金龍王常に蓮華を以て諸佛を讚ずる喩を明す。
【金龍王】梵にスヴァルナブジェーンドラ(Suvarṇabhujendra)といふ。
【過去等】已下二十頌は讚嘆を說く中初十五頌は佛の色身を讚ず。主として三十二相について。
【頻婆】ビムバ(Bimbha)其果熟せるとき美はしき色をなすを以て名あり。
【娑羅】シャーラ(Sāla)極めて修直なる樹。

我至誠の身語意を以て、諸佛の德の無邊なるを禮讚し奉る
有ゆる勝福の果、難思なるを衆生に迴施して、速に成佛せしめん
彼王如來を讚歎し已り、倍復深心に弘願を發す
願くば我當に未來世に於て、生れて無量無數劫にあつて
夢中常に大金鼓を見、懺悔を顯說する音を聞くことを得て、
佛の功德を讚ずるに蓮華もて喩へん
願くば無生を證し、正覺を成ぜん
諸佛の出世は時に一たび現ず。百千劫に於て甚だ逢ひ難し
夜は夢に常に妙鼓の音を聞きて、晝は則ち應に隨ひて、懺悔せん
我當に圓滿して六度を修し、衆生を拔濟し、苦海を出でしむべし
然る後に無上覺を成ずるを得、佛土清淨不思議にして
妙金鼓を以て如來に奉り、幷に諸佛の實功德を讚じ
斯に因りて當に釋迦佛を見て、我が人中の尊を紹がんことを記したまはん
金龍と金光とは是れ我が子なり。過去に曾て善知識となり
世世願くば吾家に生れて、共に無上菩提の記を受けん
若し衆生ありて、救護無く長夜輪迴して衆苦を受けんに
我來世に於て歸依となり、彼をして常に安隱の樂を得しめん

【あらゆる過去等】下五頌は名身を讃ず。
【我れ至誠の身語等】この一頌は廻向を明はす。
【彼の王等】下十四頌發願を明す。
【人中の尊を紹がん】佛位繼承、成佛の授記を受くること。
【金龍】梵にカナネーンドラ(Kananendra)といふ。
【金光】カナカプラーバ(Kanakaprabha)
【妙幢等】今古を會し授記を述ぶ。

三有の衆苦、願くば除滅し、悉く心に随ひて、安樂處を得
未來世に於て、菩提を修し、皆過去成佛の者の如くならん
願くば此金光懺悔の福、永く苦海を竭くして、罪消除し
業障、煩惱、悉く皆亡じ、我をして速に清淨の果を招かしめん
福智の大海は量邊り無く、清淨に苦を離れて深くして底無し
願くば我此功德海を獲て、速に無上大菩提を成ぜん
此金光懺悔の力を以て、當に福德の淨光明を獲べし
既に清淨の妙光明を得て、常に智光を以て、一切を照さん
願くば我が身光、諸佛に等しく、福德、智慧亦復然く
一切世界に獨り尊と稱し、威力自在にして倫匹無く
有漏の苦海願くば超越し、無爲の樂海願くば常に遊び
現在の福海、願くば恆に盈ち、當來の智海願くば圓滿せん
願くば我が刹土三界に超え、殊勝の功德量邊り無く
諸の有緣のもの悉く同生して、皆速に清淨智を成ずることを得ん
妙幢汝當に知るべし。國王金龍主は
曾て是の如き願を發しき。彼は則ち是れ汝が身なり
往時二子あり、金龍と金光は

【大衆等】發心修學を明す。

【金勝陀羅尼品】滅罪除障淨地修行の助業として持呪禮敬の法を說く。

【一】陀羅尼を受持すべきを勸む。

【善住】梵にスプラティスティタ(Supratisthita)といふ。

【二】神呪を持する前の方便を說く

即ち銀相と銀光となり。當に我が記する所を受くべし
大衆是說を聞きて、皆菩提心を發す
願くば現在未來、常に此に依りて懺悔せん

金勝陀羅尼品第八

(一)爾時、世尊復衆中に於て、善住菩薩摩訶薩に告げたまはく、『善男子、陀羅尼あり、名けて金勝といふ。若し善男子、善女人ありて、親く過去未來現在の諸佛を見て、恭敬供養せんことを欲せば、應當に此陀羅尼を受持すべし。何を以ての故に。此陀羅尼は、乃ち是過現未來の諸佛の母なればなり。是故に應に知るべし、此陀羅尼を持するものは、大福德を具し、已に過去無量の佛の所に於て、諸の善本を植ゑて、今受持することを得たり。戒に於て清淨にして毀たず、缺かず、障礙あること無し。決定して能く甚深の法門に入る。』

(二)世尊即ち爲に持呪の法を說きたまはく、『先づ諸佛及菩薩の名を稱し、至心に禮敬して然して後に呪を誦せよ。南無十方一切諸佛、南無諸大菩薩摩訶薩。南謨聲聞緣覺一切賢聖。南謨釋迦牟尼佛。南謨東方不動佛。南謨南方寶幢佛。南謨西方阿彌陀佛。南謨北方天鼓音王佛。南謨上方廣衆德佛。南謨下方明德佛。南謨寶藏佛。南謨普光佛。南謨普明佛。南謨香積王佛。南謨蓮華勝佛。南謨平等見佛。南謨寶髻佛。南謨寶上佛。南謨寶光佛。南謨無

垢光明佛。南謨辯才莊嚴思惟佛。南謨淨月光稱相王佛。南謨華嚴光佛。南謨光明王佛。南謨善光無垢稱王佛。南謨觀察無畏日在王佛。南謨無畏名稱佛。南謨最勝王佛。南謨觀自在菩薩摩訶薩。南無地藏菩薩摩訶薩。南謨虛空藏菩薩摩訶薩。南謨妙吉祥菩薩摩訶薩。南謨金剛手菩薩摩訶薩。南謨普賢菩薩摩訶薩。南謨無盡意菩薩摩訶薩。南謨大勢至菩薩摩訶薩。南謨慈氏菩薩摩訶薩。南謨善慧菩薩摩訶薩。』

(三)陀羅尼に曰はく

南謨、曷喇怛娜怛喇夜也、怛姪他、君睇、君睇、矩折嚟、矩折嚟、壹窒哩、蜜窒哩、莎訶。

(四)佛善住菩薩に告げたまはく『此陀羅尼は是れ三世諸佛の母なり。若し善男子善女人ありて此呪を持せば能く無量無邊の福德の聚を生ぜん。卽ち是れ無數の諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讃嘆するなり。是の如き諸佛、皆此人に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けん。善住若し人ありて能く此呪を持せば、其欲する所に隨て衣、食、財寶、多聞、聰慧、無病、長壽、福を獲ること甚だ多く、願求する所に隨ひて、意を遂げざる無し。善住、是呪を持せば、乃至未だ無上菩提を證せざるに、常に金城山菩薩、慈氏菩薩、大海菩薩、觀自在菩薩、妙吉祥菩薩、大氷伽羅菩薩等と共に居止し、諸の菩薩の爲に攝護せらる。善住、當に知るべし、此呪を持する時は、是の如き法を作すべし。

(五)先づ應に誦持して、一萬八遍を滿じ前方便を爲すべし。次に暗室に於て、道場を莊嚴

【三】正しく陀羅尼を說く。

【四】陀羅尼を持するものの得益を明す。

【大氷伽羅】梵にマハーピンガラ(Mahāpiṅgala)といふ。

【五】行ずべき方軌を敎ふるを明す

【黑月一日】月の虧け始めたる一日。大陰曆の下半第一日。

【淨黑食】黑色の食物。

【重顯空性品】前品に諸法の空を說かざるに非ざるも、此品に重ねて四大五蘊體性俱に空にして、六根六境妄に繫縛を生ずるを了達せしむるを說く。

【略して空法を說く】略しては人法二空、別しては十八空、中、內外內外畢竟無際無散自性一切法の八を說く。

し、黑月一日清淨に洗浴して鮮潔の衣を著し、燒香、散華、種種の供養と、幷に諸の飲食もて道場の中に入り、當に先に說く所の如く、諸佛菩薩を稱禮すべし、至心慇重に先罪を悔ひ已り、右膝を地に著けて、前呪を誦し、一千八遍を滿ずべし。端坐思惟して、其所願を念じ、日未だ出でざるとき、道場の中に於て、淨黑食を食せよ、日唯に一食、十五日に至り、方に道場を出でよ。能く此人をして、福德、威力不可思議に、願求する所に隨ひて、圓滿せざる無からしめん。若し意を遂げずんば、重ねて道場に入れ。既に心に稱ひ已らば、常に持して忘るること莫れ。」

重顯空性品第九

爾時、世尊、此呪を說き已り、菩薩摩訶薩、人、天、大衆を利益し、甚深眞實の第一義を悟解するを得しめんと欲するが爲に、重ねて空性を明にし、頌を說きて曰はく、

我已に餘の甚深の經に於て、廣く眞空微妙の法を說けり
今復此經王の內に於て、略して空法の不思議を說かん
諸の廣大甚深の法に於て、有情無智にして解すること能はず
故に我斯に於て重ねて敷演し、空法に於て開悟するを得しめん
大悲もて有情を哀愍するが故に、善方便の勝因緣を以て

【當に知るべし已下】三十頌別して空を明す。初一頌は初三空に就て。

【六賊】眼等の六根が罪業を起こし功德善法を害するに喩ふ。

【六塵】色、聲、香、味、觸、法。

【眼根等】已下三頌半内空を明す。中前二頌は根により、後一頌半は識によりて明す。

【事に隨ひて起る】能造大幷に能依等に隨つて事起り自境を照らして妄識分別を生ずるなり。

【常に色聲等】下一頌半は外空を明す。

【六根に遍行す】一意識の義。識の遍く境を緣ずること、鳥の無礙なるが如し。

【此の身は等】已下六頌は内外空を明す。

【堅固ならず】身

我今此大衆の中に於て、演説して彼をして空の義を明にせしむ
當に知るべし、此身は空聚の如し、六賊依止して相知らず
六塵の諸賊、別に根に依れり、各相知らず、亦是の如し
眼根は常に色處を觀じ、耳根は聲を聽いて斷絶せず
鼻根は恆に香境を嗅ぐ、舌根は鎭に美味を嘗め
身根は輕軟の觸を受け、意根は法を了じて厭くことを知らず
此等の六根、事に隨ひて起る。各自境に於て分別を生ず
識は幻化の如く、眞實に非ず。根處に依止して妄に貪り求む
人の空聚の中に奔走するが如し。六識の根に依るも亦是の如し
心遍く馳求して隨處に轉ず。根に託し境を緣じて諸事を了す
常に色、聲、香、味、觸を愛し、法に於て尋思し、暫も停まること無し
緣に隨ひて六根に遍行す、鳥の空を飛ぶに障礙無きが如し
此諸根を藉りて、依處を作し、方に能く外境を了別す
此身は知無く、作者無し、體堅固ならず。緣に託して成る
皆虚妄分別より生ず。譬へば機關の業に由り轉ずるが如し
地、水、火、風共に身を成す。彼因緣に隨つて異果を招く
同じく一處にありて相違して害す、四の毒蛇の一篋に居るが如し

此四毒蛇の性各異なり、一處に居ると雖も昇沈あり
或は上に或は下に、身に遍ず。斯等終に滅法に歸す
此四種の毒蛇の中に於て、地、水の二蛇は多く沈下し
風、火の二蛇は性輕く舉る。此に由り乖違すれば、衆病生ず
心識は此身に依止し、種種の善惡の業を造作し
當に人天三惡趣に往きて、其業力に隨ひて身形を受くべし
諸の疾病に遭ひて、身死するの後、大小の便利悉く盈ち流れ
膿爛蟲蛆樂むべからず。棄てて屍林にありて朽木の如し
汝等當に法を觀ずる是の如くなるべし
云何が我、衆生ありと執する
一切の諸法は盡く無常なり、悉く無明の緣力より起る
彼の諸の大種は咸く虛妄なり。本實有に非ず。體無性なり
故に大種の性は皆空と說く。此緣虛にして實有にあらざることを知る
無明の自性は本是れ無なり。衆緣の力を藉りて和合して有り
一切の時に於て正慧を失せしむ。故に我彼を說きて、無明と爲す
行、識を緣として名色あり。六處及び觸受隨ひて生ず
愛、取、有の緣老、死を生ず。憂悲苦惱恆に隨逐す

聚沫の如き故、四大合し成る故に緣に託す。【地水等】四大互に乖く故に無常なるを明す。【四種の毒蛇等】性各別の故に苦あるを明す。【心識等】此一頌は不淨業の故に五趣果を招くを明す。【諸の疾病等】不淨相無淨樂の故に空なるを明す。【汝等當に等】此一頌畢竟空を表はす。【彼の諸の等】無際空を明す。【大種】四大種チヤタル・マハーブーターニ（Catur-mahābhūtāni）即ち地水火風なり。【無明の自性等】已下十二因緣を明す。

【衆苦惡業等】輪廻の息むとき無きを明す。【我一切の等】此一頌無散空を明す【我甘露の大城門等】此一頌は自性空。【大城門】涅槃門なり。佛性を行ずれば能く涅槃を受證することを得るに微妙器といふ。【我最勝の大法鼓等】下三頌一切法空を明す。【大法鼓を撃ち等】權を開くなり、吹大法螺は說教、然大法燈は涅槃の理を照らす、降大法雨は智身を成就す、降諸怨結は破惡なり、無上の大法幢は無上菩提なり。【惡趣を關閉す】苦諦を捨せしむなり、煩惱の熾火等とは集諦を斷ぜしむ。甘露彼を充足すとは滅諦を證せしむ、身心の熱等とは道諦を修せし

衆苦惡業恆に纏迫し、生死轉廻息む時無し
本來行に非ず、體是れ空なり。理の如く分別を生ぜざるに由る
我一切の諸の煩惱を斷じ、常に正智を以て、現前に行じ
五蘊の宅は悉く皆空なりと了じ、求めて菩提眞實處を證す
我甘露の大城門を開き、甘露微妙の器を示現す
既に甘露眞實の味を得て、常に甘露を以て群生に施す
我最勝の大法鼓を撃ち、我最勝の大法螺を吹き
我最勝の大明燈を然し、我最勝の大法雨を降らし
煩惱の諸の怨結を降伏し、無上の大法幢を建立す
生死の海に於て羣迷を濟ふ。我當に三惡趣を關閉すべし
煩惱の熾火衆生を燒き、救護ある無く、依止無し
淸凉の甘露彼を充足し、身心の熱惱、普く皆除く
是れ我が無量劫に於て、諸の如來を供養せるに由れり
堅く禁戒を持し、菩提に趣き、求めて法身安樂處を證し
他に眼、耳及び子、足、妻、子、僮、僕を施し、心に悋む無く
財寶と七珍莊嚴の具、來り求むる者に隨ひて、咸く供給し
忍等の諸度皆な遍く修し、十地圓滿して正覺を成ず

むるなり。

【是れ我が等】一切功德を求むる爲に修行方に成ずるを明す。

【堅く禁戒等】已下二頌は妄想行を除いて慈悲を行ずるを明す。初に戒と施、忍等の諸度とは六度中前二を除きたるもの。

【一切智と稱す等】下五頌半我見を除いて般若觀を生ずるを明す。空を觀じて諸行滿ずる故に一切智と稱す。

【倶底】コーティ（一〇二）億なり。

【時に諸大衆已下】衆の獲益歡喜を明す。

【依空滿願品】菩提行は生滅相を離れ法界畢竟寂靜空なる上に萬善を修し善德を行ずべきを明す。

故に我一切智と稱することを得、衆生の度量するものある無し

假使三千大千界の、此土地に生長するものを盡くし

有らゆる叢林、諸樹木、稻、麻、竹、葦及枝條

此等の諸物皆伐りて取り、並に悉く細末にして、微塵と作し

隨處に積集して集量知り難く、乃至虛空界に充滿し

一切十方の諸刹土、有らゆる三千大千界の地土

皆悉く末して塵となす、此微塵の量數ふべからず

假使一切衆生の智、此智慧を以て、一人に與へ

是の如き智者の量無邊にして、彼微塵の數を知る容けんも

尼牟世尊一念の智は、彼智人をして共に度量せしめんに

多倶底劫の數の中に於て、其少分すら算知すること能はじ

時に諸の大衆、佛の此甚深の空性を說きたまふを聞き、無量の衆生悉く能く四大、五蘊、體性倶に空にして、六根、六境、妄に繫縛を生ずることを了達し、輪廻を捨て、正く出離を修せんことを願ひ、深心に慶喜し、如說に奉持せり。

依空滿願品第十

【一】如意寶光耀天女の修行する法を問ふ。

【兩足の最勝尊】人中の至尊の意なり。

【云何が諸菩薩等】菩提の正行と無住涅槃を問ふなり。

【二】佛ために習學の法を答ふるを明す。

【云何が法界に依て等】眞如は常、菩提行等は無常、常無常生死涅槃は相各別なるに云何が法界等といふやとの意。

〔一〕爾時、如意寶光耀天女、大衆の中に於て深法を說くを聞き、歡喜踊躍し、座より起ちて偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬し、佛に白して言さく、『世尊、惟願くば、爲に甚深の理に於て、修行の法を說きたまへ。』而も頌を說きて言はく、

我世界を照らす、兩足の最勝尊に問ひたてまつる
菩薩正行の法、惟願くば慈もて聽許したまへ

佛言はく、

善女天、若し疑惑あらば
汝が意に隨ひて問へ。吾當に分別して說くべし

是時に天女、世尊に請うて曰はく、

云何が諸菩薩、菩提の正行を行じ
生死涅槃を離れん。自他を饒益するが故に

〔二〕佛善女天に告げたまはく、『法界に依りて、菩提の法を行じ、平等の行を修す。云何が法界に依りて、菩提の法を行じ、平等の行を修する。謂はく、五蘊に於て、能く法界を現ず、法界即ち是れ五蘊。五蘊は不可說なり。非五蘊も亦不可說なり。何を以ての故に。若し法界是五蘊なれば、即ち是れ斷見なり。若し五蘊を離るれば即ち是れ常見なり。二相を離れ二邊に著せず、不可見にして、所見を過ぐ。名無く相無し。是れ則ち名けて法界を說くと爲す。善女天、云何が五蘊能く法界を現ずるや。是の如きの五蘊は、因緣より生ぜず。何

を以ての故に。若し因緣より生ぜば、已生なるが故に。生は未生の爲の故に生ず。若し已生ならば、生者何ぞ因緣を用ひん。若し未生ならば、生者は生ずることを得べからず。何を以ての故に。未生の諸法は、即ち是れ非有なり。名無く相無く、校量譬喩の能く及ぶ所に非ず。是れ因緣の所生に、非ざるが故に。善女天、譬へば鼓聲の木に依り、皮に依り、及桴手等の故に、聲を出すことを得るが如し。是の如く、鼓聲の過去亦空、未來亦空、現在も亦空なり。何を以ての故に。是れ鼓音聲は、木より生ぜず、皮より生ぜず、乃至桴手より生ぜず、三世に於て生ぜず、是れ則ち不生なり。若し生ずべからざれば、則ち滅すべからず。若し滅すべからざれば、從來する所無し。若し從來する所無くば、亦去る所無し。若し去る所無くば、則ち常に非ず、斷に非ず。若し常に非ず、斷に非ざれば、一ならず、異ならず。何を以ての故に。此れ若し一ならば、則ち法界に異らず。若し是の如くば、凡夫の人眞諦を見、無上涅槃安樂を得べし。既に是の如くならず、故に知る、一にあらず。若し異なりと言はば、一切諸佛菩薩の行相は、即ち是れ執著にして、未だ煩惱の繫縛を、解脫することを得ず。即ち阿耨多羅三藐三菩提を證せず、何を以ての故に。一切の聖人、行と非行とに於て、同眞實性なり。是故に異ならず。故に知る、五蘊有に非ず、無に非ず、因緣より生ぜず。因緣無くして、生ずるに非ず。是れ聖の知る所、餘の境に非ざるが故に、亦言說の能く及ぶ所に非ず。名無く、相無く、因無く、緣無く、亦譬喩無し。始終寂靜にして、本來自ら空なり。是故に五蘊、能く法界を現ず。善女天、若し善男子、

【五蘊に於て等】五蘊と法界との不即不離を說く。遍計所執に依らば相無自性及所顯空性の故に五蘊能く法界を現ずといふなり。故に所取の五蘊も能取の心も俱に體無く、即ち是れ眞如なれば不可說なり。

【非五蘊】二無の性體は積聚に非るをいひ、性離言の故に不可說なり。

【法界是れ五蘊等】遍計に約するに彼是れ無の故に斷見を離れ、若し五蘊を離れて別に法性を見ば常見なり。

【二相を離れ】常無常有無生滅等の二を離るるなり、增減を遠離する故に二邊に著せず、五識の境に非る故に不可見、意識に於て虛しく、計度する境を超ゆる故所見をすぐるなり

【云何が五蘊等】

善女人、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲せば、眞に異り、俗に異り、思量すべきこと難し。凡聖の境に於て、體、一異にあらず。俗を捨てず眞を離れず。法界に依り、菩提の行を行ず。」

(三)爾時、世尊此語を作し已るとき、善女天、踊躍歡喜し、卽ち座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬し、一心に頂禮し、佛に白して言さく、『世尊、上の所說の如き、菩提の正行、我今當に學すべし』と。是時索訶世界主大梵天王、大衆の中に於て、如意寶光耀善女天に問うて曰はく、『此菩提行、修行すべきこと難し。汝今云何が、菩提行に於て、自在を得たる』と。爾時善女天、梵王に答へて曰はく、『大梵王、佛の說きたまふ所の如きは、實に是れ甚深なり。一切の異生、其義を解せず。是聖境界は微妙にして知り難し。若し我をして、此法に於て安樂住を得しめ、是れ實語ならば、願くば一切五濁惡世の無量無數無邊の衆生をして、皆金色三十二相を得て、男に非ず、女に非ず、寶蓮花に座し、無量の樂を受け、天の妙華を雨らし、諸天の音樂は鼓たざるに自ら鳴り、一切の供養皆悉く具足せん。』時に善女天、是語を說き已れば、一切五濁惡世の有らゆる衆生、皆悉く金色にして、大人の相を具し、男に非ず女に非ず。寶蓮華に坐して、無量の樂を受くること、猶し他化自在天宮の如く、諸の惡道なく、寶樹行列し、七寶の蓮華世界に遍滿し、又七寶上妙の天華を雨らし、天の伎樂を爲す。如意寶光耀善女天、卽ち女身を轉じて、梵天の身と作る。

五蘊の不生を說いて遍計を破す。遍計無きに依り法界を現ずるなり。

【若し因緣等】諸法生じ已らば更に生等の因を待つて能生等をなし、未生ならば生等の因を待ちて生ずるなり。

【若し已生ならば等】若し法未生ならば因を、待ちて生ずべきに、已に生ずればなんぞ生等を以て因緣の生となさんとなり。

【若し未生ならば等】因緣未生ならば體無にして生ずる能はざるに何ぞ他を生ぜんや。

【名なく相なく】非有の故に法空なればなり。

【是れ因緣所生に非ず等】已生の法も未生の法も因緣生に非れば無名相にして譬喩し能はず此れ法界の故なり。

【譬へば鼓聲の等】

依他の假有を表はす。

【鼓聲の過去等】五蘊の法性を現ずるを明す既に緣生の故に實有に非ず過去已滅、未來未生、現在不住なれば皆空即ち法界なり。

【是れ鼓音聲等】遍計の無なるを顯はす。

【三世に於て生ぜず】過去生已滅、未來無不生、現在自已生の故に。

【當生ずべからざれば等】自ら現じて生ぜざれば過滅なし、未來に來ることなく又去るところなし、故に常斷と說くべからず、又諸法と一異なりとすべからず

【一切の聖人等】一切の聖人は行に於て即ち五蘊、非行即ち法界と見れば、同眞實性にして一異の相を證るなり。

時に大梵王、如意寶光耀菩薩に問うて言はく、「仁者云何が菩提行を行ずる。」答て言はく、「梵王、水中の月の菩提行を行ずる若く、我亦菩提行を行ず。夢中菩提行を行ずる如く、我亦菩提行を行ず。陽焰菩提行を行ずる若く、我亦菩提行を行ず。谷響菩提行を行ずる若く、我亦菩提行を行ず。」時に大梵王此說を聞き已り、菩薩に白して言さく、「仁何の義に依りてか此語を說く。」答て言はく、「梵王、一法として是れ實相あるものなし。但因緣に由りて成ずることを得るが故に。」梵主言はく、「若し是の如くならば、諸の凡夫人皆悉く阿耨多羅三藐三菩提を得べし。」答て言はく、「仁何の意を以て是說を作すや。愚癡人異に智慧人異に、菩提異に非菩提異に、解脫異に非解脫異なり。

梵王、是の如き諸法は、平等にして異無し。此法の異に於て、眞如は一ならず異らず、中間に執著すべきものある無し、增無く減無し。梵王、譬へば幻師及幻の弟子、善く幻術を解し、四衢の道に於て、諸の沙土草木の葉等を取り聚めて一處にあり、諸の幻術を作し、人をして象衆、馬衆、車兵等の衆、七寶の聚、種種の倉庫を視しむ。若し衆生ありて、愚癡無智にして、思惟すること能はず、幻本を知らず、若は見、若は聞きて、是思惟を作さん「我が見聞する所の衆馬等の衆、此は是れ實有にして、餘は皆虛妄なり」と。後に於て更に審察思惟せず。有智の人は則ち是の如くならず、幻本を了ず、若は見、若は聞きて、是の如き念を作さん。我が見る所の衆馬等の衆の如き、是れ眞實に非ず、唯幻事の人の眼目を惑はすありて、妄に象等及諸の倉庫と謂ふ。名ありて實無し。我見聞の如き

【因緣より生ぜず等】遍計所執の自性五蘊は因緣より生ぜず、依他の五蘊は因緣なくして生ずるに非るなり【眞に異り等】涅槃に住するに非る故眞に異り生死に住するに非る故俗に異る、この深行相は分別尋伺を以て思量すべきこと難し、凡夫所見の五蘊は眞如を離れず、聖者所見の眞如は五蘊を離れざる故不異、蘊如の性各別の故に不一なり。菩薩は五蘊に於て法界と體一異に非ずと見る故に俗を捨てず眞を離れざるなり、此の平等法界の理を得るに由て生死を怖れず涅槃を樂はず、大悲大智の二利妙行を修すことを得。【三】天女佛說を了悟して修學を誓ひ梵天の所問に答

は執して實と爲さず、後時に思惟して其虛妄なるを知る。是故に智者は一切の法皆實體無しと了し、但世俗に隨ひて、見るが如く聞くが如く、其事を表宣す。諦理を思惟するは則ち是の如くならず、復假說に由りて實義を顯はすが故に。梵王、愚癡の異生、未だ出世聖慧の眼を得ず、未だ一切諸法、眞如の不可說を知らざるが故に。是諸の凡愚、若は非行の法を行ずるを見、若は聞きて、是の如く思惟して、便ち執着を生じ、謂うて以て實と爲す。第一義に於て諸法の眞如は、是れ不可思議なることを、了知すること能はず。是諸の聖人は、若は非行の法を行ずるを見、若は聞きて、其力能に隨ひて、執著を生じて實有と爲さず。一切實無く行法實無く、非行の法は但妄思量なり。行と非行との相は、唯名字ありて實體有ること無しと了知す。是諸の聖人、世俗に隨ひて說く。他をして眞實義を知らしめんが爲なり。是の如く、梵王、是諸の聖人、聖智見を以て法の眞如不可說を了ずるが故に、行と非行の法、亦復是の如し。他をして證知せしめんが故に、種種世俗の名言を說く。』

時に大梵王、如意寶光耀菩薩に問うて言はく、『幾の衆生ありてか、能く是の如き甚深の正法を解する。』答へて言はく、『梵王、衆幻人の心、心數法あり、能く是の如き甚深の正法を解す。』梵王曰はく、『此幻化人の體是有に非ず、此心數、何よりして生じたる。』答へて曰はく、『若し法界の有ならず無ならざるを知らば、是の如きの衆生、能く深義を解す。』

爾時、梵王、佛に白して言さく、『世尊、是如意寶光耀菩薩は思議すべからず、是の如き

ふるを明す。【是の時索訶世界等】大梵王修相を問ふ中今觀自在の如何なる解を問ふ。索訶は娑婆なり。【仁者如何が菩提行等】如何が菩提行を證するやを問ふ。【水中の月等】行相知り難きを喩ふ。外境無きに定心所行の境の成ずるに喩ふ。水を縁とし水中に月なきも月の影起るが如く、定願心により諸境界を起す、是れ實身なきも衆生を利せん爲に似身の境を生ずとなり。【夢中等】心外に愛憎の境なきに而も之あるに喩ふ。三界に愛非愛の身を受けて菩提行を行ずるも夢中所見の如しとなり。【陽燄等】心心所迷亂する故所取の境をとるも實に非

甚深の義に通達す。』佛言はく、『是の如く是の如し。梵王汝が言ふ所の如し。此如意寶光耀、已に汝等を教へて發心せしめ、無生法忍を修學せしむ。』是時に大梵天王、諸の梵衆と座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、合掌恭敬して、如意寶光耀菩薩の足を頂禮し、是の如き言を作さく、『希有なり、希有なり。我等今日幸に大士に遇ひ、正法を聞くことを得たり。』

爾時、世尊梵王に告げて言はく、『是如意寶光耀、未來の世に於て、當に佛となるを得べし。寶焰吉祥藏如來、應正遍知、明行足圓滿、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號せん。』

(四)是品を說く時三千億の菩薩あり。阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉を得たり。八千億の天子、無量無數の國王、臣民、塵を遠かり垢を離れて、法眼淨を得たり。

爾時、會中に五十億の苾芻あり、菩薩の行を行じて菩提心を退せんと欲しぬ。如意寶光耀菩薩の是法を說くを聞く時、皆堅固不可思議を得、上願を滿足し、更に復菩提の心を發起し、各自ら衣を脫して菩薩に供養し、重て無上勝進の心を發し、是の如き願を作さく、『願くば我等が功德、善根、悉く皆退せざらしめて阿耨多羅三藐三菩提に廻向せん』と。梵王是諸の苾芻、此功德に依りて說の如く修行し、九十大劫を過ぎて、當に解悟を得、生死を出離すべし。

爾時、世尊卽ち爲に記を授けたまはく、『汝諸の苾芻、三十阿僧祇劫を過ぎて、當に作佛を得べし。劫を難勝光王と名け、國を無垢光と名けん。同時に皆阿耨多羅三藐三菩提を

得て、皆同一號に願莊嚴間飾王と名け、十號具足せん。

(五)梵王、是金光明微妙の經典は、若正しく聞持せば大威力あり。假使人あり、百千大劫に於て六波羅蜜を行ぜんも、方便ある無し。若し善男子善女人ありて、是の如き金光明經を書寫し、半月半月に專心に讀誦せば、是功德聚は、前の功德に於て百分一に及ばず、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。梵王、是故に我今汝をして、修學し、憶念し、受持し、他の爲に廣說せしむ。何を以ての故に。我往昔に於て、菩薩の道を行ぜるとき、猶し勇士の戰陣に入るがごとし。身命を惜まず、是の如く微妙の經王を流通し、受持し、讀誦し、他の爲に解說す。梵王、譬へば轉輪聖王の若し王世に在らば七寶滅せず。王若し命終すれば、有ゆる七寶自然に滅盡するがごとし。梵王、是金光明經微妙の經王、若し世に現在せば、無上の法寶悉く皆滅せず。若是經無くんば隨處に隱沒せん。是故に應に此經王に於て、專心に聽聞し、受持し、讀誦し、他の爲に解說し、勸めて書寫せしめ、精進波羅蜜を行じ、身命を惜まず、疲勞を憚らざれば、諸の功德の中に勝れん。我が諸の弟子、應に是の如く精勤修學すべし。』

(六)爾時大梵天王、無量の梵衆、帝釋、四王及び諸の藥叉と共に、座より起ちて偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け合掌恭敬し、而して佛に白して言さく、『我等皆願くば、是金光明微妙の經典を守護流通せん。及び說法の師、若し諸難あらば我當に除遣し、衆善を具せしめ、色力充足し、辯才無礙にして、身意泰然ならしめん。時會に聽くものは皆安樂を受

ずして似境生ずれば是れ眞實有に非ず。

【谷響等】說法利生は谷響の如く實に聲を出して他のために說法するに非ずとなり。

【仁者何の義等】何の道理に依りて是の如き修行を說くやを問ふ。

【諸の凡夫人等】實に修する者あらば得不得あるべきに皆假有といはば凡も亦菩提を得んとなり。

【愚癡人異に等】三種の相待をあげて一切平等なるを示す、卽ち賢愚、迷悟、繫解なり、皆實相の上の假相なることを明す。

【中間に執著等】諸法は定んで一異に非ず、亦一亦異なるに非ず。

【幻師等】幻師は心王、弟子は心所、善解幻術は境の總別等の相を了別す。

けしめん。所在の國土に若し飢饉、怨賊、非人に惱害せらるるものあらば、我等天衆皆擁護を爲し、其人民をして、安隱豐樂にして、諸の枉横無からしめん。皆是我等天衆の力なり。若し是經典を供養するものあらば、我等亦當に恭敬し供養する、佛の如く異らざらん。』

爾時佛、大梵天王及び諸の梵衆乃至四王、諸の藥叉等に告げたまはく、『善い哉善い哉、汝等甚深の妙法を聞くことを得たり。復能く此微妙の經王に於て、發心擁護し及び經を持するものは、當に無邊殊勝の福を獲て、速に無上正等菩提を成ずべし。』

時に梵王等、佛語を聞き已りて、歡喜し頂受せり。

四天王觀察人天品第十一

（一）爾時、多聞天王、持國天王、増長天王、廣目天王倶に座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、佛足を頂禮し已り、白して言さく、『世尊、是金光明最勝王經は、一切諸佛の常に念じ觀察する所、一切菩薩の恭敬する所、一切天、龍の常に供養する所、及諸の天衆の常に歡喜を生ずるところ、一切護世の稱揚讃嘆するところ、聲聞、獨覺の皆共に受持するところなり。悉く能く明に諸天の宮殿を照らし、能く一切の衆生に殊勝の安樂を與へ、地獄、餓鬼、傍生、諸趣の苦惱を止息し、一切の怖畏、悉く能く除殄し、有らゆる怨敵尋で即ち退散し、飢饉の惡時は能く豐稔ならしめ、疾疫病苦

るに、四衢道は四諦、幻處に、取諸相等は色の幻縁に、聚在一處は隨起の苦集等處に依るに、作諸幻術は幻の因縁業力種種の事業を起すに、人をして等は幻相に喩ふ。【幻本を知らず】五蘊の縁生なるを知らざるに喩ふ。【諸理】實理なり。【愚癡の異生】大乘見道已前を簡ぶ。是れ生空の悲眼を得て人我の無を了するも、未だ出世聖慧の眼を得ざる故、法我の無を了せず、一切法の眞如性の諸相を離れて不可説なるを知らざるなり。【非行の法】無爲法。【第一義等】無智の故に第一義を了せず、如を證せざるが故に諸法性の不可説を知らざるなり。【薬幻人等】一切

衆生能く依他起性の心心數法幻人等の如しと知れば、則ち此深法を解すとなり。

【若し法界等】若し有無に執せば眞如法界を知るなきも、雙ながら有無行を離れ平等の行にして縁生なりと悟らば、此の深義を解すとなり。

【四】大衆聞經によりて益を得るを明す。

【五】勸めて勝行を修せしむるを明す。

【七寶】七聖財或は七覺分に喩ふ。

【六】天等の守護流通を願ひ佛之を可するを述ぶ。

【四天王觀察人天品】本經を奉持修行する國王等あらば、四天王之を護衞し安隱豐樂を受けしむべきを明す以下二十一品は流通利益を明すもの本經としては末葉

皆蠲愈せしめ、一切の災變、百千の苦惱咸な悉く消滅せん。世尊、是金光明最勝王經は、能く是の如く我等を安隱にし、利樂し饒益す。惟願くば世尊大衆の中に於て廣く爲に宣說し、我等四王幷に諸の眷屬、此甘露無上の法味を聞いて、氣力充實し、威光を增益し、精進勇猛神通倍〻勝れん。

（二）世尊我等、四王正法を修行し常に正法を說き、法を以て世を化せん。我等彼天、龍、藥叉、健闥婆、阿蘇羅、揭路茶、倶槃茶、緊那羅、莫呼羅伽、及び諸の人王をして、常に正法を以て世を化せしめん。諸惡を遮去し、有らゆる鬼神、人の精氣を吸ふもの、慈悲なきもの悉く遠く去らしめん。世尊、我等四王二十八部の藥叉大將、幷に無量百千の藥叉と與に、淨天眼の世人に過ぐるを以て觀察し、此贍部洲を擁護せん。世尊、此因緣を以て、我等諸王を護世者と名く。

（三）又復此洲中に於て若し國王あり。他の怨賊に常に來り侵擾せられ、及び多くの飢饉疾疫流行し、無量百千の災厄の事あらんに、世尊、我等四王此金光明最勝王經に於て、恭敬供養し、若し苾芻法師ありて受持讀誦せば、我等四王、共に往きて覺悟し、其人を勸請せん。時に彼法師、我が神通覺悟の力に由るが故に、彼國界に往きて是金光明微妙の經典を廣宣流布せん。此經の力に由るが故に、彼無量百千の衰惱災厄の事をして、悉く皆除遣せしめん。世尊、若し諸の人王、其國內に於て是經を持する苾芻法師あり。彼國に至る時、當に知るべし、此經亦其國に至らん。世尊、時に彼國王、法師の處に往きて、其

所說を聽くべし。聞き已りて歡喜し、彼法師に於て恭敬し供養し、深心に擁護し、憂惱なからしめ、此經を演說し、一切を利益せん。世尊是緣を以ての故に、我等四王、皆共に一心に、是人王及び國の人民を護り、災患を離れて常に安隱を得しめん。世尊若し苾芻、苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦の是經を持するものあらん時に、彼人王其須むる所に隨ひて、供給供養し乏少なからしめば、我等四王、彼國主及び國人をして、悉く皆安隱にして災患を遠離せしめん。世尊、若し是經典を受持し讀誦するものあらんに、人王此に於て供養し、恭敬し尊重し、讚歎せば、我等當に彼の王をして、諸王の中に於て、恭敬し尊重して、最第一となし、諸の餘の國王に共に稱歎せしめん。」

大衆聞き已りて、歡喜し受持せり。

に屬す。內初十六品は學行流通。

【一】四王經を讚稱するを明す。

【多聞天王】梵にヴイシユラマナ(Vaiśramana)といふ。

【持國天王】梵にダリタラーシユトラ(Dhṛtarāṣṭra)といふ。

【增長天王】梵にギルーダカ(Virūdhaka)といふ。

【廣目天王】梵にギルーパクシヤ(Virūpākṣa)といふ。共に護國の四天なり。

【止息】一に四惡趣の苦を、二に五怖畏苦を、三に刀兵苦を、四に飢饉苦を、五に疾病苦を、六に災變苦を止息するなり。

【二】四王の自ら佛行すべきを述ぶ。

【三】四王人人に弘經を勸請するを明す。

【四天王護國品】四天王正法護持を力說し、本經傳持の國王を守護し、其國豐民安を得しむるを述ぶ。
【一】佛四王を讚嘆し修行せしむるを述ぶ。

金光明最勝王經　卷第六

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

四天王護國品第十二

（一）爾時、世尊は四天王の金光明經を恭敬し供養し、及び能く諸の持經者を擁護することを聞きたまひ、讚じて言はく「善い哉善い哉、汝等四王已に過去無量百千萬億の佛の所に於て、恭敬し、供養し、尊重し、讚歎して諸の善根を植ゑ、正法を修行し、常に正法を說き、法を以て世を化す。汝等長夜に、諸の衆生に於て常に利益を思ひ、大慈心を起し、安樂を與へんことを願ふ。是因緣を以て、能く汝等をして現に勝報を受けしむ。若人王ありて、此金光明最勝の經典を恭敬し供養せば、汝等應當に勤めて守護を加へ安隱を得しむべし。汝諸の四王及び餘の眷屬、無量無邊百千の藥叉、是經を護るものは、卽ち是れ去來、現在の諸佛の正法を護持するなり。汝等四王、及び餘の天衆、並に諸の藥叉が阿蘇羅と共に鬪戰するとき、常に勝利を得ん。汝等若し能く是經を護持せば、經力に由るが故に、能く諸の苦、怨、賊、饑饉及び諸の疾疫を除かん。是故に汝等四衆、此經王を受持し讀誦するものを見ては、亦應に勤心に共に守護を加へて、爲に衰惱を除き、安樂を施與すべし。」

【二】四王奉教して擁護せんと願ふ初に身を以て護法せんと願ずる中、初に護人を明す。

【三】願護人中、佛四天の護法を讃成し給ふを明す。

（二）爾時、四天王卽ち座より起ちて、偏に右の肩を袒き、右膝を地に著け、合掌恭敬して佛に白して言さく、「世尊、此金光明最勝王經の、未來世に於て若し國土ありて城、邑、聚落山、林、曠野、所至の處に隨ひ流布するの時、若し彼の國王、此經典に於て至心に聽受し稱歎し、供養し、幷びに復是經を受持する四部の衆に供給して、深心に擁護し衰惱を離れしめんに、是因緣を以て、我彼王及び諸人衆を護り、皆安隱にして憂苦を遠離し、壽命を增益し、威德具足せしめん。世尊、若し彼國王、四衆が、經を受持する者を見ば、恭敬し守護すること猶し父母の如く、一切の須むる所、悉く皆供給せんに、我等四王常に爲に守護し、諸の有情をして尊敬せざる無からしめん。是故に我等並に無量の藥叉諸神と與に、此經王の流布する處に隨ひて、身を潛めて擁護し、留難無からしめん。亦當に、是經を聽かん人、諸の國王等を護念して、其衰患を除きて、悉く安隱ならしめ、他方の怨賊は皆退散せしめん。若し人王ありて是經を聽かん時に、隣國の怨敵、是の如きの念を興さん、當に四兵を具して彼國土を壞るべしと。世尊此經王の威神力を以ての故に、是時隣敵、更に異怨あり來りて、其境界を侵し擾し、諸の災變多く疫病流行せん。時に彼王見已りて、卽ち四兵を嚴かにし、彼國に發向し、討伐を爲さんと欲す。我等爾時に、眷屬無量無邊の藥叉諸神と各自に形を隱し、爲に護助をなし、彼怨敵をして、自然に降伏して、尙敢て其國界に來至せざらしめん。豈復兵戈もて相伐つことを得んや。」

（三）爾時佛、四天王に告げたまはく、『善い哉善い哉、汝等四王、乃ち能く是の如き經典を擁護

【四王應に知るべし】已下は現世の得益を明す。

【大王等】已下は未來の益を明す。

す。我過去百千俱底那庾多劫に於て、諸の苦行を修し、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切智を證し、今是法を說く。若し人王ありて、是經を受持し、恭敬し、供養するものは、爲に衰患を消して其をして安隱ならしめん、亦復城、邑、聚落を擁護し、乃至怨賊悉く退散せしめ、亦一切贍部洲內の有らゆる諸王をして、永く衰惱鬪諍の事無からしめん。四王應に知るべし。此贍部洲の八萬四千の城邑聚落、八萬四千の諸の人王等、各其國に於て、諸の快樂を受け、皆自在を得、有らゆる財寶豐足し相侵し奪はず、彼の宿因に隨ひて其報を受け、惡念を起して他國を貪求せず、咸く少欲利樂の心を生じ、鬪戰繫縛等の苦あることなし。其土の人民は自ら愛樂を生じ、上下和穆すること、猶し水乳の如く、情相愛重し、歡喜遊戲し、慈悲謙讓にして善根を增長せん、是因緣を以て、此贍部州安隱豐樂に、人民熾盛に、大地沃壤し、寒暑調和し、時は序に乖かず、日月星宿常度虧くること無く、風雨時に隨ひて諸の災横を離れ、資產財寶、皆悉く豐盈し、心に慳鄙無く、常に慧施を行じ十善業を具せん。若し人命終せば、多くは天上に生じて、天衆を增益せん。大王、若し未來世に諸の人王ありて是經を聽受し、恭敬し供養し幷に是經を受持せば、四部の衆尊重し稱讚せん。復汝等及諸の眷屬無量百千の諸の藥叉衆を安樂にし、饒益せんと欲す。是故に彼王常に當に是妙經王を聽受すべし。此を聞くことを得るに由り、正法の水、甘露の上味、汝等の身心の勢力を增益して、精進、勇猛、福德、威光、悉く充滿せしめん。是諸の人王、若し能く至心に、是經を聽受せば、則ち廣大希有の供養もて、我釋迦牟尼應正等覺を供養す

【是因緣を以て等】弘經の得益を明す

【四】人王に弘法の義を教ふるを明す。

【世尊是の如く等】巳下弘法の軌則を教ふるを明す。

と爲す。若し我を供養せば、則ち是れ過去、未來、現在の百千俱胝那庾多の佛を供養するなり。若し能く三世の諸佛を供養せば、則ち無量不可思議の功德の聚を得ん。是因緣を以て、汝等當に彼王の后妃眷屬を擁護して、衰惱無からしむべし。及宮宅の神は常に安樂を受け、功德思ひ難し。是諸の國土の有らゆる人民亦種種の五欲の樂を受け、一切の惡事は皆消殄せん。」

(四)爾時四天王佛に白して言さく『世尊、未來世に於て若し人王ありて、是の如き金光明經を樂ひ聽き、爲に自身と后妃、王子、乃至內宮の諸婇女等、城、邑、宮殿を擁護せんと欲せば、皆第一、不可思議、最上の歡喜と寂靜と、安樂とを得て、現世の中に於ては、王位尊高に、自在に昌盛に、常に增長を得しめん。復無量無邊難思の福聚を、攝受せんと欲せば、自國土に於て怨敵、及び諸の憂惱災厄の事無からしめん。世尊、是の如く人王は放逸にして、心散亂せしむべからず。當に恭敬を生じ、至誠慇重に是の如き最勝の經王を聽受すべし。之を聽かんと欲する時、先づ當に最上の宮室、王の愛重する所の顯敞の處を莊嚴して、香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、師子殊勝の法座を安置し、諸の珍寶を以て挍飾となし、種種の寶蓋、幢、幡を張り施し、無價の香を燒き、諸の音樂を奏すべし。其王、爾時に淨く澡浴し、香を以て身に塗り、新淨の衣及び諸の瓔珞を著し、小卑座に坐し、高擧を生ぜず、自在の位を捨て、諸の憍慢を離れ、端心正念に、是經王を聽き、法師の所に於て大師の想を起すべし。復宮內の后妃、王子、婇女、眷屬に於て、慈愍の心を生

【爾時佛等】佛法師を請迎するの相を述ぶ。

【四王何の因緣等】已下請迎の所以を明す。

じ、喜悅して相見、和顏軟語し、自身の心に於て、大喜充遍して、是の如き念を作すべし、「我今、難思、殊勝、廣大の利益を得たり」と。此經王に於て盛に供養を興し、既に敷設し已りて、法師の至るを見て、當に虔敬渴仰の心を起すべし。』

爾時佛、四天王に告げたまはく、『是の如くにして法師を迎へざるべからず。時に彼人王純淨鮮潔の衣を著し、種種の瓔珞もて以て嚴飾と爲し、自ら百蓋及び香華を持し、軍儀を備へ整へ、盛に音樂を陳べ、步して城闕を出で、彼法師を迎へ、想を運らして、虔敬に吉祥の事を爲すべし。四王、何の因緣を以て彼人王をして、親ら是の如き恭敬供養を作さしむるや。彼人王の足を擧げ足を下す、步步即ち是れ百千萬億那庾多の諸佛世尊を恭敬し承事し尊重するに由る。復是の如き劫數の生死の苦を超越することを得、復來世是の如き劫數に於て當に輪王殊勝の尊位を受くべし。其步步に隨ひて、亦現世に於て福德增長し、自在に王となり、感應思ひ難く、衆に欽重せられ、當に無量百千萬億劫に於て、人天に七寶の宮殿を受用し、所在の生處に、常に王となることを得、壽命を增益し、言詞辯了かに人天信受し畏懼する所なし、大名稱あり、咸く共に瞻仰し、天上人中に勝妙の樂を受け、大力勢を獲、大威德あり。身相奇妙に、端嚴比無く、天人の師に値ひ、善知識に遇ひ、無量の福聚を成就し具足すべし。四王當に知るべし、彼諸の人王是の如き等の種種無量の功德利益を見るが故に、自ら往きて法師を奉迎すること、若は一踰繕那、乃至百千踰繕那なるべし。說法の師に於ては應に佛想を生ずべし。還て城に至り已り、是の如き念をなす

【爾時四天王等】已下天王の我がために軌則を教ふるを明す。

べし「今日釋迦牟尼如來應正等覺、我が宮中に入り、我が供養を受け、我が爲に說法したまふなり」と。我法を聞き已らば卽ち阿耨多羅三藐三菩提に於て、復退轉せず。卽ち是れ百千萬億那庾多の諸佛世尊に値遇するなり。我今日に於て「卽ち是種種廣大、殊勝、上妙の樂具もて、過去未來現在の諸佛を供養す。我今日に於て、卽ち是れ永く琰魔王界、地獄、餓鬼、傍生の苦を拔き、便ち爲に已に、無量百千萬億の轉輪聖王、釋梵天主の善根の種子を種ゑ、當に無量百千萬億の衆生をして、生死の苦を出で涅槃の樂を得、無量無邊不可思議の福德の聚を積集すべしと。後宮の眷屬及び諸の人民皆安隱を蒙り、國土淸泰にして諸の災厄、毒害、惡人無く、他方の怨敵、來りて侵し擾さず、憂患を遠離せん。四王當に知るべし。彼人王、應に是の如くに正法を尊重すべし。亦是妙經典を受持する、苾芻、苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦に於て供養し、恭敬し、讚歎し、獲る所の善根、先づ勝福を以て、汝等及び諸の眷屬に施與すべし。彼人王大福德、善根の因緣あり。現世の中に於て大自在を得、威光を增益し、吉祥の妙相、皆悉く莊嚴し、一切の怨敵、能く正法を以て之を摧伏せん。」

爾時四天王、佛に白して言さく、「世尊、若人王ありて能く是の如きを作し、正法を恭敬して、此經王を聽き、并に四衆持經の人に於て、恭敬し供養し尊重し讚歎せん時、彼人王我等に歡喜を生ぜしめんが爲の故に、一邊にありて法座に近く。香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、處所を安置し四王の座を設くべし。我彼王と共に正法を聽かん。其王の有らゆる自利の善根、亦福分を以て施して我等に及ばん。世尊、彼人王說法者を請ひて座に昇らしむる時、

便ち我等の爲に衆の名香を燒きて是經を供養せん。世尊時に彼香煙、一念の頃に於て虛空に上昇し、即ち我等諸天の宮殿に至り、虛空の中に於て變じて香蓋とならん。我等諸天衆彼妙香を聞くに、香に金光ありて、我等居る所の宮殿乃至梵宮及以帝釋、大辯才天、大吉祥天、堅牢地神、正了知大將、二十八部の諸の藥叉神、大自在天、金剛密主、寶賢大將、訶利帝母、五百の眷屬、無熱惱池龍王、大海龍王の居所の處を照耀せん。世尊是の如き等の衆、自の宮殿に於て、彼香煙の一刹那の頃に變じて香蓋となるを見、香の芬馥たるを聞き、色の光明遍く一切諸天の神宮に至るを觀ん。佛、四天王に告げたまはく、『是れ香の光明但に此宮殿に至り變じて香蓋となりて大光明を放つのみならず、彼人王手に香爐を擎り、衆の名香を燒き、經を供養するに由りて、時に其香煙の氣、一念の頃に於て、遍く三千大千世界の百億の日月、百億の妙高山王、百億の四州に至り、此三千大千世界の一切の天龍、藥叉、健闥婆、阿蘇羅、揭路茶、緊那羅、莫呼洛伽の宮殿の所に至り、虛空の中に於て、充滿して住し、種種の香煙變じて雲蓋となる。其蓋金色にして普く天宮を照らさん。是の如く三千大千世界の有らゆる種種の香雲と香蓋とは、皆是れ金光明最勝王經の威神の力なり。是諸の人王手に香爐を執りて經を供養するとき、種種の香氣は但に此三千大千世界に遍きのみにあらず、一念の頃に於て、亦十方無量無邊恆河沙等の百千萬億の諸佛の國土に遍く、諸佛の上の虛空の中に於て、變じて香蓋となり、金色にして普く照らさんこと亦復是の如し。時に彼諸佛此妙香を聞き、此雲蓋と及び金色とを視て、十方界に於て恆河沙

【堅牢地神】梵にドリダー、プリテイギーデーヷター（Dṛḍhāpṛthivi-devatā）といふ。
【正了知大將】梵にサンジャヤ（Sañjaya）といふ、藥叉神の軍將なり。
【金剛密主】梵にヷジラパーニイグルヤカーデイパテイ（Vajrapāṇigulyakādhipati）といふ。
【寶賢大將】梵にマニバドラ（Maṇibhadra）といふ、藥叉神の軍將。
【無熱惱池龍王】梵にアナヷタパタナーガラージャー（Anavatapta-nāgarājā）といふ。
【佛四天王已下】佛感應瑞行を述ぶ
【時に彼の諸佛已下】諸佛の稱揚を明す。

【若し是の如きの等】聽者を讃ずるなり。

【爾時十方に已下】未來の果を讃ず。

等の諸佛世尊神變を現じ已り、彼諸の世尊悉く共に觀察し、異口同音に法師を讃じて曰はん『善い哉善い哉、汝大丈夫、能く廣く是の如き甚深微妙の經典を流布す。則ち無量無邊不可思議の福德の聚を成就すと爲す』若し是の如きの經を聽聞することあらば、獲る所の功德其量甚だ多し。何に況や書寫し受持し讀誦し、他の爲に敷演し、說の如く修行せんをや。何を以ての故に。善男子、若し衆生ありて此金光明最勝王經を聞くものは即ち阿耨多羅三藐三菩提に於て、復退轉せず。

爾時十方に百千俱胝那庾多無量無數恆河沙等の諸佛刹土あり。此刹土の一切の如來、異口同音に法座の上に於て彼法師を讃じて言はん『善い哉善い哉、善男子、汝來世に於て、精勤の力を以て當に無量百千の苦行を修し、資糧を具足し、諸の聖衆に超え、三界を出過して最勝尊となるべし、當に菩提樹王の下に坐して、殊勝に莊嚴し、能く三千大千世界の有緣の衆生を救ひ、善能く起るべき形儀の諸の魔軍の衆を摧伏し、諸法の最勝、清淨、甚深、無上の正等菩提を覺了すべし。善男子、汝當に金剛の座に坐して、無上諸佛の讃ずる所の十二妙行、甚深の法輪を轉ずべし。能く無上最大の法鼓を擊ち、能く無上極妙の法螺を吹き、能く無上殊勝の法幢を建て、能く無上極妙の法炬を然し、能く無上甘露の法雨を降らし、能く無量の煩惱怨結を斷じ、能く無量百千萬億那庾多の有情をして、涯りなき畏るべき大海を度り、生死際りなき輪廻を解脫し、無量百千萬億那庾多の佛に値遇せしむ』と。

【五】護人願中、次に人王の依法修行は四王の擁護を得るを明す。

【六】身を以て護法せんと願ずる中、第二に護法を願ずるを明す。

(五)爾時四天王、復佛に白して言さく、『世尊、是金光明最勝王經は、能く未來現在に於て、是の如きの無量の功德を成就す。是故に人王、若し是微妙の經典を聞くことを得ば、卽ち是れ已に、百千萬億無量の佛の所に於て、諸の善根を植ゑたるなり。我當に彼人王に於て護念すべし。復無量の福利を見るが故に、我等四王及び餘の眷屬無量百千萬億の諸神自が宮殿に於て、是種種の香煙雲蓋の神變を見る時、我當に隱蔽して其身を現はさず、法を聽くが爲の故に、當に是王、淸淨嚴飾所止の宮殿講法の處に至るべし。是の如く、乃至梵宮、帝釋、大辯才天、大吉祥天、堅牢地神、正了知大將、二十八部の諸の藥叉神、大自在天、金剛密主、寶賢大將、訶利底母、五百の眷屬、無熱惱池龍王、大海龍王、無量百千萬億那庾多の諸天藥叉、是の如き等の衆、聽法の爲の故に皆身を現ぜず。彼人王殊勝の宮殿、莊嚴の高座說法の所に至らん。世尊、我等四王及び餘の眷屬の藥叉諸神、皆當に一心に彼人王と共に善知識と爲らん。是無上大法の施主、甘露味を以て我を充足するに因り、是故に我等是王を擁護し、其衰患を除き、安隱を得しめ、及び其宮殿、城邑、國土の諸の惡災は、變じて悉く消滅せしめん。』

(六)爾時、四天王俱に共に合掌して、佛に白して言さく、『世尊、若し人王ありて、其國土に於て此經ありと雖も、未だ嘗て流布せず、心に捨離を生じ、聽聞することを樂はず、亦供養し尊重し讚歎せず。四部の衆、持經の人を見て、亦復能く尊重し供養せず。遂に我等及び餘の眷屬無量の諸天をして、此甚深の妙法を聞くを得ず、甘露味に乖き、正法の流を失

【世尊若し人王已下】弘經護法の得益を明す。

【世尊大梵天の如き已下】他に校量してこの護法の勝れたるを述べ、弘經を勸むるを明す。

ひ、威光及び勢力あること無く、惡趣を增長し、人天を損減し、生死の河に墜ち、涅槃の路に乖かしむ。世尊、我等四王幷に諸の眷屬、及び藥叉衆等、斯の如きの事を見て、其國土を捨てて擁護の心無し。但に我等が是王を捨棄するのみならず、亦無量の國土を守護する諸大善神あるも、悉く皆捨て去らん。已に捨て離れ已らば、其國當に種種の災禍ありて國位をも喪失すべし。一切の人衆に皆善心無く、惟繫縛殺害ありて瞋り諍ひ、互に相讒諂し、枉無辜に及び、疾疫流行す。彗星數ば出で、兩日幷び現れ、薄蝕常なく、黑白の二虹は不祥の相を示し、星流れ地動き、井內に聲を發し、暴雨惡風時節に依らず。常に饑饉に遭ひ、苗實は成らず。多く他方の怨賊の侵掠あり。國內の人民諸の苦惱を受け、土地に樂むべき處あること無し。世尊、我等四王及び無量百千の天神、幷に國土を護る諸の舊善神、遠く離れ去る時、是の如き等の無量百千の災怪と惡事とを生ぜん。世尊、若し人王ありて、國土を護り、常に快樂を受けんと欲し、衆生をして咸く安隱を蒙らしめんと欲し、一切の外敵を摧伏するを得て、自の國境に於て永く昌盛を得んと欲し、正教をして世間に流布せしめ、苦惱惡法皆除滅せしめんと欲せば、世尊、是諸の國王必ず當に是妙經王を聽受すべし。亦應に經を讀誦し受持するものを恭敬し供養すべし。我等及び餘の無量の天衆、是法を聽く善根の威力を以て、無上の甘露の法味を服するを得て、我等の有らゆる眷屬を增益し、幷に餘の天神皆勝利を得ん。何を以ての故に。是人王至心に是經典を聽受するが故に。世尊、大梵天の如き、諸の有情に於て、常に爲に世出世の論を宣說す。帝釋復

【世尊我等巳下】獲益を明す。

種種の諸論を說き、五通の神仙も亦諸論を說く。世尊、梵天、帝釋、五通の仙人、百千倶胝那庾多の無量の諸論ありと雖も、然も佛世尊、慈悲哀愍し、人天衆の爲に金光明微妙の經典を說きたまふ。前の所說に比するに彼に勝ること百千倶胝那庾多倍にして、喩と爲すべからず。何を以ての故に。此に由りて能く諸の瞻部洲の有らゆる王等をして正法もて世を化し、能く衆生に安樂の事を與へしめ、自身及び諸の眷屬を護りて苦惱無からしむるが爲なり。又他方怨賊の侵害無く、有らゆる諸惡悉く皆遠く去り亦國土の災厄をして屛除せしめ、化するに正法を以てして諍訟あること無し。是故に人王各其國土に於て當に法炬を然し、明に照らすこと邊り無く、天衆幷に諸の眷屬を增益すべし。世尊、我等四王、無量の天神藥叉の衆、瞻部洲内の有らゆる天神、是因緣を以て、無上甘露の法味を服するを得、大威德勢力光明を獲て具足せざる無し。一切の衆生皆安隱を得、復來世無量百千不可思議那庾多劫に於て常に快樂を受け、復無量の諸佛に値遇することを得て諸の善根を種ゑ、然る後に阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。是の如き無量無邊の勝利は皆是れ如來應正等覺、大慈悲を以て諸の梵衆に過ぎ、大智慧を以て帝釋に逾え、諸の苦行を修すること五通仙に勝り、百千萬億那庾多倍にして稱計すべからず、諸の衆生の爲に、是の如き微妙の經典を演說し、瞻部洲一切の國主及び諸の人衆をして、世間有らゆる式法、國を治め人を化し、勸導の事を明了ならしむ。此經王流通の力に由るが故に、普く安樂を得。此等の福利は、皆是れ釋迦大師此經典に於て、廣く流通をなす慈悲力の故なり。世尊是因緣を以て、諸の人王等、皆應に此妙

【七】第二大段四王奉教願護の中次に呪を以て願ずるを明す。

【爾時多聞天王等】巳下四天王の法護を述ぶ。若し衆生ありて巳下は持呪の方軌を述ぶるなり。

【薛室羅末拏天王】多聞天王のこと。莫訶曷羅闍也の義即ち大王なり。

經王を受持し、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎すべし。何を以ての故に。是の如き等の不可思議殊勝の功德ありて、一切を利益すればなり。是故に名けて最勝經王といふ。」

（七）爾時に世尊、復四天王に告げたまはく「汝等四王及び餘の眷屬、無量百千俱胝那庾多の諸天大衆、彼人王を見て、若し能く至心に是經典を聽き、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せば、應當に擁護して其衰患を除くべし。能く汝等をして亦安樂を受けしめん。若し四部の衆能く廣く是經王を流布せば、人天の中に於て、廣く佛事を作し、普く能く無量の衆生を利益せん。是の如きの人を汝等四王、常に當に擁護すべし。是の如きの四衆、他緣をして共に相侵擾せしむる勿れ。彼をして身心寂靜安樂ならしめ、此經王に於て廣宣流布して斷絕せざらしめ、有情を利益して未來際を盡さしめよ。」

爾時、多聞天王座より起ちて、佛に白して言さく「世尊、我に如意寶珠陀羅尼の法あり、若し衆生ありて、受持を樂ふものは功德無量ならん。我常に擁護して彼衆生をして苦を離れ樂を得て、能く福智二種の資糧を成ぜしめん。受持せんと欲するものは先づ是護身の呪を誦すべし。」即ち呪を說いて曰はく、

南謨薛室羅末拏也、莫訶曷羅闍也、怛姪他、囉、囉、囉、囉、矩怒、矩怒、區怒區怒、窶怒、窶怒、颯婆、颯婆、羯囉、羯囉莫訶毘羯喇麼、莫訶毘羯喇麼、莫訶曷囉社、曷略叉曷略叉、覩漫、薩婆薩埵難者、莎訶。

「世尊、此呪を誦せんものは、白線を以て之を呪すること、七遍し、一遍に一結して之を

肘後に繫ぐべし、其事必らず成らん。應に諸香を取るべし。謂ゆる、安息、旃檀、龍腦、蘇合、多揭羅、薫陸なり、皆須らく等分に一處に和合すべし。手に香爐を執り、香を燒きて供養し、淸淨に澡浴して、鮮潔の衣を著し、一靜室に於て神呪を誦して、我が薜室羅末拏天王を請ずべし。』即ち呪を說いて曰はく、

南謨薜室囉末拏也、南謨檀那馱也、檀泥說囉也、阿揭搓、阿鉢喇弭多、檀泥說囉、鉢囉磨、迦留尼迦、薩婆薩埵、四哆振哆、麼麼、檀那、末奴鉢喇拽搓磔、闍摩揭搓、莎訶。』

『此呪を誦すること一七遍を滿じ已りて、次に本呪を誦せよ。呪を誦せんと欲する時、先づ三寶及薜室囉末拏大王を稱名敬禮すべし。能く財物を施し、諸の衆生の求むる所の願を滿し、悉く能く成就せしめて、其に安樂を與へしめん。』是の如く禮し已りて、次に薜室囉末拏大王如意末尼寶心神呪を誦せよ。能く衆生の意に隨ひて安樂を施さん。』爾時、多聞天王即ち佛前に於て、如意末尼寶心呪を說いて曰はく、

南謨曷喇怛、娜怛喇夜野南謨薜室囉末拏也、莫訶囉闍也、怛姪他、四弭四弭、蘇母、蘇母、梅荼、梅荼、折囉、折囉、薩囉、薩囉、羯囉、羯囉、枳哩、枳哩、矩嚕、矩嚕、母嚕、母嚕、主嚕、主嚕、娑大也頞貪、我名某甲、呢店頞他、達達覩莎訶。南謨薜室囉末拏也莎訶、檀那馱也莎訶、曼奴喇他鉢利脯喇迦也莎訶。

『呪を受持する時、先づ千遍を誦せよ。然して後、淨室の中に於て、瞿摩を地に塗りて、

【多揭羅】 零凌香なり。

【曷喇怛娜】 寶といふ。怛喇夜也は三の意、即ち禮三寶なり。

【檀那馱耶】 布施の義。曼奴は意、喇他鉢唎は我、唎喇迦也は滿、總じて財施我が意に滿つの意。

【瞿摩】 ゴーマヤ(Gomaya)牝牛糞、印度波羅門の修法には皆牛糞を最淨のものとして之を地上に塗るを常とす。

【時に已下】持呪の得益を明す。

【禪膩師】シャインニシイ(Sainniši) 西藏譯による

【迦利沙波拏】カールシャパナ(Karsapana)印度の銅貨。

【又此呪已下】持呪者の擁護を得るを明す。

小栴檀場を作り、時に隨ひて飮食し、一心に供養し、常に妙香を然して烟をして絕えざらしめ、前の心呪を誦し晝夜に心に繫げ、唯自耳にのみ聞きて、他をして解せしむるなかれ。」時に藥室囉末拏王子あり、其名を禪膩師と名く、童子形を現じ來りて其所に至り、問うて言はく「何故に我父を喚ぶことを須ふるや」と。卽ち報へて言はく「我供養三寶の事の爲に、財物を須ふ、願くば當に施與すべし」と。時に禪膩師、是語を聞き已り、卽ち父の所に還り、其父に白して言はく「今善人あり。至誠心を發し、三寶を供養するも財物少乏をもて、斯請召を爲す」と。其父報へて曰はく「汝速かに去りて、日日彼に一百迦利沙波拏を與ふべし」と。其持呪のもの、是相を見已りて、事の成るを知り、當に須く淨室に處し、香を燒きて臥し、床邊に於て一香篋を置くべし。天曉に至る毎に、其篋中を觀て求むる所の物を獲よ。物を得る時毎に、日に卽ち三寶に香華飮食を供養し、兼て貧乏に施し、皆盡せしむべし。停留することを得ざれば諸の有情に於て慈悲の念を起し、瞋諍詐害の心を生ずること勿れ。若し瞋を起さば卽ち神驗を失せん。常に心を護るべし。瞋恚せしむること勿れ。又此呪を持するものは每日の中に於て、我が多聞天王及男女の眷屬を憶ひ、稱揚讚歎し、恒に十善を以て共に相資助し、彼天等をして、福力明を增し、衆善普ねく臻り、菩提處を證せしめん。彼諸の天衆、是事を見已りて、皆大に歡喜し、共に來りて持呪の人を擁衞せん。又呪を持するものは、壽命長遠にして、無量歲を經、永く三塗を離れて、常に災厄無からん。又如意寶珠及以伏藏を獲しめ、神通自在にして、所願皆成

【世尊已下】持呪により見多聞王の益を明す。

【世尊我若し等】多聞の現身を説くなり。並に得益を明す。

せん。若し宦榮を求めば、意に稱はざる無し。亦一切禽獸の語を解せん。世尊、若し呪を持する時、我が自身の現ずるを見るを得んと欲せば、月の八日、或は十五日に於て、白氎の上に於て、佛の形像を畫き、當に木膠を以て、雜彩莊飾すべし。其像を畫かん人は、爲に八戒を受けよ。佛の左邊に於て、吉祥天女の像を作り、佛の右邊に於て、我多聞天の像を作り、幷に男女眷屬の類を畫き、坐處に安置し、咸く如法ならしめ、華彩を布列し、衆の名香を燒き、燈を然して明を續くること、晝夜歇む無く、上妙の飮食と種種の珍奇と、殷重の心を發して、時に隨ひ供養せよ。神呪を受持して輕心なることを得ざれ。我を請召せんときは、應に此呪を誦すべし。

南謨室唎健那也、劫陀也、南謨薜室囉末拏也、藥叉囉闍也、莫訶囉闍、阿地囉闍也、南麼室利耶裔、莫訶提鞞裔、怛姪他、怛羅、怛羅、咄嚕、咄嚕、末囉、末囉、窣率吐、窣率吐、漢娜、漢娜、末尼羯諸迦、跋折囉薜瑠璃也、目底迦楞訖嘌哆、設喇囉裔、蒲薩婆薩埵咽哆迦摩、薜室囉末拏、室唎夜提鼻、跋囉婆也、裔咽、裔咽。麼毘藍婆、瞿嘌拏瞿嘌拏、袜喇婆袜喇婆、達駄咽麼麼、阿日迦那末寫、達哩設那迦末寫、達哩設南、麼麼末那、鉢喇曷羅大也、莎訶。

「世尊、我若しこの誦呪の人を見、復是の如く盛に供養を興すを見ば、即ち慈愛歡喜の心を生じ、我即ち身を變じて小兒の形となり、或は老人、苾芻の像となり、手に如意末尼寶珠を持し、幷に金囊を持ちて道場の内に入り、身に恭敬を現じ、口に佛名を稱へ、持呪者

【八】第三大段佛の恩を荷へる四王頌を說いて佛德を讃ずるを明す。

に語りて曰はく「汝が求むる所に隨ひて皆願の如くならしめん。或は林藪に隱れ、或は寶珠を造り、或は衆人の愛寵を欲し、或は金銀等の物を求め、諸呪を持せんと欲せんに、皆驗あらしめん。或は神通壽命の長遠、及び勝妙の樂を欲せんに心に稱はざること無けんと。我今且らく是の如き事を說くも、若し更に餘を求めば、皆所願に隨ひて、悉く寶藏の無盡と功德の無窮とを成就することを得ん。假使日月は地に墜墮し、或は大地時ありて移轉すべきも、我が此實語は終に虛然ならず、常に安隱を得て、心に隨ひて快樂ならん。世尊若し人ありて、能く是經王を受持讀誦するものは、此呪を誦するとき、疲勞を假らず、法速かに成就せん。世尊、我今彼貧窮困厄苦惱の衆生の爲に、此神呪を說き、大利を獲て、皆富樂自在にして患なからしめん。乃至形を盡くして、我常に是人を擁護隨逐し、爲に災厄を除くべし。亦復、此金光明最勝王經を持して之を流通せしむるもの、及び持呪の人は、百步の内に於て、光明照觸し、我が有らゆる千の藥叉神亦常に侍し衞り隨ひ、驅使せんと欲せば、心に遂げざる無けん。我實語を說く、虛誑あること無し、唯佛證知したまへ。」

時に多聞天王此呪を說き已るや、佛言はく「善い哉、大王、汝能く一切衆生の貧窮の苦網を破裂し、富樂を得しめ、是神呪を說き、復此經をして廣く世に行はれしむ。」

(八)時に四天王俱に坐より起ち、偏に一肩を袒ぎ、雙足を頂禮し、右膝を地に着け、合掌恭敬し、妙伽陀を以て佛の功德を讃ずらく、

【佛面は等】總じて五頌ある中初四は別して佛の相好を讃じ、後一は總結にして三身を合せ讃ず。細説せば一は化身、二は報身、三四は報化二身、五は法身を讃ずるなり。

【九】第四大段佛更に四王を勸讃するなり。頌に十五あり、初五は總じて經を讃じ、次の五は人の受持得益を明し、次の二頌は諸天善神の冥祐を説き、最後の三は結文なり。

佛面は猶し淨滿月の如し、亦千日の光明を放つが如し
目は淨く修廣なる青蓮の若し、齒は白く齊密にして珂雪のごとし
佛德無邊にして大海の如く、無限の妙寶其中に積む
智慧の德水は鎭りて恆に盈ち、百千の勝定咸く充滿す
足下の輪相皆な嚴飾し、轂輞千輻悉く齊平に
手足の縵網遍く莊嚴し、猶し鵝王の相具足するが如し
佛身の光耀金山に等しく、淸淨殊特にして、倫匹なく
亦妙高の功德滿つるが如し。故に我佛山王を稽首したてまつる
相好は空の如く測るべからず、千日の光明を放つにも逾えて
皆焔と幻との如く、不思議なり。故に我心無著を稽首したてまつる

(九)爾時四天王佛を讃歎し已るや、世尊亦伽陀を以て之に答へて曰はく
是金光明最勝の經は、無上十力の說く所なり
汝等四王常に擁護して、勇猛不退の心を生ずべし
此妙なる經寶は極めて甚深なり。能く一切の有情に樂を與ふ
彼有情安樂なるに由るが故に常に贍部洲に流通することを得
是大千世界の中に於ける、有らゆる一切の有情の類
餓鬼と傍生と及び地獄と、是の如き苦趣は悉く皆除き

是南洲に住する諸の國王、及び餘の一切の有情の類
經の威力に由り常に歡喜し、皆擁護を蒙りて安寧を得ん
亦此中の諸の有情をして、衆の病苦を除き賊盗無からしめん
此國土經を弘むるに賴るが故に、安隱豐樂にして違惱無からん
若し人此經王を聽受し、尊貴及び財利を求めんと欲せば
國土豐樂にして違諍なく、心に隨ひて所願悉く皆從ひ
能く他方の賊をして退散せしめ、自國界に於て常に安隱ならん
此最勝經王の力に由りて、諸の苦惱を離れて憂怖無からん
寶樹王の宅内に在るが如く、能く一切の諸の樂具を生ず
最勝經王も亦復然り、能く人王に勝功德を與ふ
譬へば澄潔淸冷の水の、能く饑渴諸の熱惱を除くが如し
最勝經王も亦復然り、福を樂ふ者をして心滿足せしむ
人の室に妙寶の篋あれば、受用する所に隨ひて悉く心に從ふが如し
最勝經王も亦復然り、福德心に隨ひて乏くる所なし
汝等天主及天衆、應當に此經王を供養すべし
若し能く敎に依りて經を奉持せば、智慧威神皆具足し
現在十方の一切の佛、咸く共に此經王を護念し

【一〇】四王の慶喜護持及大衆の聞持得益を明す。

讀誦及び受持するものあるを見たまひて、善い哉甚だ希有なりと稱歎せん

若し人あり能く此經を聽きて、心身踊躍して歡喜を生ぜば
常に百千の藥叉衆ありて、所住の處に隨ひて斯人を護らん
此世界に於ける諸の天衆、其數無量にして不思議なり
悉く共に此經王を聽受し、歡喜護持して退轉無からん
若し人是經王を聽受せば、威德勇猛常に自在に
一切の人天衆を增益して、衰惱を離れて光明を增さしめん

(一〇)爾時四天王是頌を聞き已りて、歡喜踊躍し、佛に白して言さく『世尊、我昔より來、未だ曾て是の如き甚深微妙の法を聞くを得ざりし』と。心に悲喜を生じ、涕淚交流れ、擧身戰動して不思議希有の事を證し、天の曼陀羅華、摩訶曼陀羅華を以て、佛の上に散ず、是殊勝の供養を作し已り、佛に白して言さく『世尊、我等四王、各五百の藥叉の眷屬あり。常に處處に是經、及び說法の師を擁護し、智光明を以て助衞をなすべし。此經の有らゆる句義に於て忘失の所あらば、我今彼をして憶念して忘れざらしめ、幷に陀羅尼殊勝の法門を與へて、具足することを得しめん。復是最勝王經所在の處をして、諸の衆生の爲に、廣宣流布して速かに隱沒せざらしめん。』爾時世尊大衆の中に於て、是法を說きたまふ時、無量の衆生皆大智聰叡辯才を得、無量の福德の聚を攝受し、諸の憂惱を離れ、喜樂の心を發し、善く衆論を明かにし、出離の道に登り、復退轉せず、速に菩提を證せり。

【無染著陀羅尼品】陀羅尼の本義事緣生滅を超絕せるなるも、今菩薩利益のために、假にその功用正道等の安立を說くを明す。【無染著陀羅尼】呪力により染を離れ所住著なき故に名く、陀羅尼とは總持の義。【陀羅尼是何の句義等】諸の法體を以てせば即ち眞如にして非有非空等と言說すべからず如何がこの陀羅尼を說くべしとなり【方處に非ず】有を離るるなり。非方處に非ずとは空を離るるなり。【法に非ず】所詮に非ず、非詮の法を離れざるに非る故非法に非ず。【過去に非ず等】常を以ての故に三世を離る。【非事に非ず】事法を離れざるが故【功用等】眞諦門

金光明最勝王經　卷第七

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

無染著陀羅尼品第十三

爾時世尊、具壽舍利子に告げたまはく、『今法門あり、無染著陀羅尼と名く。是れ諸菩薩の修行する所の法なり、過去菩薩の受持する所なり、是れ菩薩の母なり。』是語を說き已るや、具壽舍利子、佛に白して言さく、『世尊、陀羅尼とは是れ何の句義ぞや。世尊、陀羅尼とは方處に非ず、非方處に非ず。』是語を作し已るや、佛舍利子に告げたまはく、『善い哉善い哉、舍利子、汝大乘に於て已に能く發起し、大乘を信解し、大乘を尊重す。汝が說く所の如く陀羅尼とは方處に非ず、非方處に非ず。法に非ず、非法に非ず。過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず。事に非ず、非事に非ず。緣に非ず、非緣に非ず。行に非ず、非行に非ず。法生ずるある無く、亦法滅する無し。然も諸菩薩を利益せんが爲の故に、是の如きの說を作し、此陀羅尼に於て、功用、正道、理趣、勢力、安立す。即ち是れ諸佛の功德、諸佛の禁戒、諸佛の所學、諸佛の秘意、諸佛の生處なり。故に無染著陀羅尼最妙の法門と名づく。』是語を作し已りたまふや、舍利子、佛に白して言さく、『世尊、惟願くば善逝、我が爲

よりせば陀羅尼は離言説なるも、俗諦門より見れば言詞を假り四種の義に於て安立す。即ち得果の力用たる功用、正理を讃ずべき道としての正道、正智の境界としての理趣、滅惡生善、證理得果の力としての理勢力是れなり。

【諸佛の功徳】此に依りよく佛の不共法等を得、能く過を離れしむる故に禁戒といひ、佛師たる故に所學、法身の妙理深くして測り難きを以て秘意、報化佛を成ずる故生處、能詮教詮この義に由る故に無染著法門等といふ。

【無上菩提等】陀羅尼を修する六種の益を擧ぐ。一不退轉は菩薩修行の階段を退轉なく進む、二正願は十種の大願等を滿了す

に此陀羅尼の法を説きたまへ。若し諸の菩薩能く安住するものは、無上菩提に於て復退轉せず、正願を成就し、無所依を得、自性辯才あり、希有の事を獲て、聖道に安住す。皆此陀羅尼を得るに由るが故に。』

佛、舍利子に告げたまはく『善い哉善い哉、是の如く是の如し。汝が説く所の如し。若し菩薩ありて此陀羅尼を得るものは應に知るべし。是れ人と佛と異なること無し。若し此菩薩を供養し、尊重し、承事し、供給するあらば、應に知るべし、即ち是れ佛を供養するなり。舍利子、若し餘人ありて、是陀羅尼を聞き、受持し讀誦し信解を生ずるものは、亦是の如く恭敬供養すること、佛と異なること無かるべし。是因緣を以て無上果を獲ん。』

爾時に世尊、即ち爲に陀羅尼を演説して曰はく、

怛姪他、珊陀喇儞、嗢多喇儞、蘇三鉢囉底瑟耻哆、蘇那麼、蘇鉢喇底瑟耻哆、鼻逝也、跋羅、薩底也、鉢喇底愼若、蘇阿嚧訶、愼若那末底、嗢波彈儞、阿伐那末底、阿毗師彈儞、阿鞞毘耶訶羅、輸婆、伐底、蘇尼室唎多、薄虎群社、阿毘婆馱、莎訶。

佛、舍利子に告げたまはく『此無染著陀羅尼の句は、若し菩薩ありて、善く安住し、能く正しく受持せば、當に知るべし、是人若は一劫、若は百劫、若は千劫、若は百千劫に於て、發す所の正願窮盡あること無く、身、亦刀、杖、毒藥、水、火、猛獸に損害せられじ。何を以ての故に。舍利子、是無染著陀羅尼は、是れ過去諸佛の母なり。未來諸佛の母なり。現在諸佛の母なればなり。舍利子、若し復人ありて十阿僧企耶三千大千世界の中

に滿ちたる七寶を以て、諸佛に奉施し、及び上妙の衣服飲食を以て種種に供養して、無數劫を經んに、若し復人ありて、此陀羅尼の乃至一句を能く受持するものは、「生ずる所の福、倍して彼より多し。何を以ての故に。舍利子、此無染著陀羅尼甚深の法門は、是れ諸佛の母なるが故に。」

時に具壽舍利子及び諸の大衆、是法を聞き已りて皆大に歡喜し、咸く受持せんと願ぜり。

如意寶珠品第十四

(一)爾時世尊、大衆の中に於て阿難陀に告げて曰はく、『汝等當に知るべし、陀羅尼あり、如意寶珠と名く。一切の災厄を遠離し、亦能く諸の惡雷電を遮止す。過去の如來應正等覺の共に宣說する所なり。我今時に此經中に於て亦汝等大衆の爲に宣說し、能く人天に於て大利益を爲し、世間を哀愍し、一切を擁護し、安樂を得しめん。』

時に諸の大衆及び阿難陀、佛の語を聞きて、各各至誠に世尊を瞻仰し、神呪を聽受す。

佛言はく、『汝等諦に聽け。此東方に於て光明電王あり、阿揭多と名く。南方に光明電王あり、設羝嚕と名く。西方に光明電王あり、主多光と名く。北方に光明電王あり、蘇多末尼と名く。若し善男子善女人ありて、是の如き電王の名字及び方處を知るものあら

三無所依は無住所涅槃にして生死に住せず、圓寂に入らざる妙境を得、四自性辯才は四無礙辯を得るなり、無自性は無師自發の謂なり、五希有の事は瑜伽に菩薩衆生濟度に就きての五種希有の事をあぐ、六聖道の安住は十聖位に入るをいふなり。

【佛舍利子に等】陀羅尼句の功能及校量を說く。

【如意寶珠品】四王電王離怖の呪、觀音等の諸呪を擧げその威力を說く。

【一】佛初めに呪を說き給ふ。

【如意寶珠】如意珠の諸災難を離れしめ所求をとぐるが如きに喩ふ。

【阿揭多】アーガタ(Agata)來といふ。

【設羝嚕】シャテール(Śateru)。

【主多光】チユタ

プラバ(Cyutaprabha)。
【蘇多末尼】スタマニ(Sutamani)密部消除一切閃電障難隨求如意陀羅尼經を參照すべし

【二】觀自在菩薩呪を説く

【觀自在】梵にアヴローキテーシュヷラ(Avalokitesvara)といふ。天眼耳及他心通を以て恒に世間を觀じ、能く皆を救ふ菩薩、觀音のこと

【三】執金剛秘密主菩薩呪を説く。

【執金剛秘密主菩薩】或人曰はく觀音の異形を稱して秘密となし、常に金剛杵をとりて三寶を守護すと。

ば、此人即便一切怖畏の事を遠離せん。及び諸の災横悉く皆消殄せん。若し住處に於て是四方電王の名を書するものは、所住の處に於て雷電の怖なく、亦災厄及び諸の障惱非時の枉死無く、悉く皆遠離せん。』

爾時、世尊即ち呪を説きて曰はく、

怛姪他、彌儞、彌儞、彌儞尼民達哩、窒哩盧迦、儞羯儞、窒哩輸攞波儞、曷咯叉、我某甲及此住處。一切の恐怖。所有苦惱、雷電、霹靂、乃至枉死皆悉く遠離せん。莎訶。

(二)爾時觀自在菩薩摩訶薩、大衆の中にありて、即ち座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、合掌恭敬して佛に白して言さく、『世尊、我今亦佛の前に於て、略して如意寶珠神呪を説かん。諸の人天に於て大利益を爲し、世間を哀愍し、一切を擁護し、安樂を得しめ、大威力ありて、求むる所意の如くならん。』即ち呪を説きて曰はく、

怛姪他、喝帝、毘喝帝、儞喝帝、鉢喇窒體雞、鉢喇底蜜窒嚟、戍提、目羝、毗末麗、鉢喇婆莎嚟、安荼嚟、般荼嚟、稅帝、般荼囉婆死儞、喝嚟、羯荼嚟、劫畢嚟、氷揭羅惡綺、達地目企、曷咯叉、曷咯叉、我某甲及び此住處一切の恐怖所有苦惱、乃至枉死悉く皆遠離せん。願くば我罪惡の事を見ることなく、常に觀自在菩薩大悲威光に護念せられん。莎訶。

(三)爾時に執金剛秘密主菩薩、即ち座より起ちて、合掌恭敬し、佛に白して言さく、『世尊、我今陀羅尼呪の、名けて無勝といふを説かん。諸の人天に於て大利益を爲し、世間を哀愍

【四】梵天王の説呪を述ぶ。

【五】帝釋天王の説呪を明す。

【跋折羅扇儞】ヴァジャルシャニ（Vajrsani）金剛土星の呪。

し、一切を擁護し、大威力ありて、求むる所願の如くならん。』即ち呪を説いて曰はく、
怛姪他、母儞母儞、母尼嚟、末底、末底、蘇末底、莫訶末底、訶訶訶、摩婆、以那悉底帝波跛、跛折囉波儞、亞甜姪嚟荼莎訶。
世尊、我が此神呪を名けて無勝擁護といふ。若し男女ありて一心に受持し書寫し、讀誦し憶念して忘れざれば、我晝夜に於て、常に是人を護り、一切の恐怖乃至枉死に於て皆悉く遠離せん。』

(四)爾時に索訶世界主梵天王、即ち座より起ちて、合掌恭敬し、佛に白して言さく、『世尊、我亦陀羅尼微妙の法門あり、諸の人天に於て大利益を爲し、世間を哀愍し、一切を擁護し大威力ありて、求むる所願の如くならん。』即ち呪を説いて曰はく、
怛姪他、醯里、弭里、地里、莎訶。跛囉甜魔布嚟、跛囉甜魔末泥、跛囉甜魔揭鞞、補澀跛僧悉怛嚟、莎訶。
世尊、我が此神呪を名けて梵治といふ。悉く能く擁護す。是呪を持するものは憂惱を離れしめ、及び諸の罪業乃至枉死悉く皆遠離せん。』

(五)爾時に帝釋天主、即ち座より起ちて合掌恭敬して、佛に白して言さく、『世尊、我亦陀羅尼あり、跋折羅扇儞と名く。是大神呪は能く一切の恐怖と厄難とを除く。乃至枉死悉く皆遠離し、苦を抜き樂を與へ、人天を利益せん。』即ち呪を説いて曰はく、
怛姪他、毘儞、婆喇儞、畔陀麼彈滯、麼膩儞撥、儞瞿哩、揵陀哩、旃荼哩、摩登耆、

【六】四王天の說呪。

【七】諸大龍王の說呪。

卜羯死、薩囉跋喇鞞、呬娜末底、答麼、嗢多喇儞、莫呼剌儞、達剌儞計、斫羯羅婆枳、捨伐哩、奢伐哩、莎訶。

（六）爾時、多聞天王、持國天王、增長天王、廣目天王、倶に座より起ちて、合掌恭敬して、佛に白して言さく『世尊、我れ今亦神呪あり。施一切衆生無畏と名く。諸の苦惱に於て常に擁護を爲し、安樂を得しめ、壽命を增益し諸の患苦無く、乃至枉死悉く皆遠離せん。』即ち呪を說いて曰はく、

怛姪他、補澁閉、蘇補澁閉、度麼鉢喇呵囇、阿囇耶鉢喇設悉帝、扇帝涅、目帝、忙揭例窣覩帝、悉哆鼻帝、莎訶。

（七）爾時復諸大龍王あり。謂ゆる末那斯龍王、電光龍王、無熱池龍王、電舌龍王、妙光龍王なり。倶に座より起ちて合掌恭敬し、佛に白して言さく『世尊我亦如意寶珠陀羅尼あり、能く惡電を遮ぎり、諸の恐怖を除き、能く人天に於て大利益を爲し、世間を哀愍し、一切を擁護し、大威力ありて、求むる所、願の如く、乃至枉死悉く皆遠離し、一切の毒藥皆止息せしめ、一切造作の蠱道、呪術、不吉祥の事、悉く除滅せしむ。我今此神呪を以て佛に獻じたてまつる。惟願くば哀愍し慈悲もて納受したまへ。我等をして此龍趣を離れしめ、永く慳貪を捨てしむべし。何を以ての故に。此慳貪に由りて、生死の中に於て諸の苦惱を受くればなり。我等願くば慳貪の種子を斷ぜん。』即ち呪を說いて曰はく、

怛姪他、阿折囇、阿末囇、阿蜜喋諦、惡叉裔、阿弊裔、奔尼鉢喇耶栗帝、薩婆波跛、

鉢唎苦摩尼裔、莎訶。阿離裔、般豆、蘇波尼裔、莎訶。

『世尊若し善男子善女人ありて、口の中に此陀羅尼明咒を說き、或は經卷に書して、受持し、讀誦し、恭敬し供養せば、終に雷電霹靂及び諸の恐怖苦惱憂患無く、乃至枉死皆悉く遠離し、有らゆる毒藥、蠱魅、厭禱、人を害する虎、狼、師子、毒蛇の類、乃至蚊蝱も悉く害を爲さじ。』

(八)爾時世尊、普く大衆に告げたまはく、『善い哉善い哉、此等の神咒皆大力あり。能く衆生の心に隨ひて求むる所の事悉く圓滿ならしめ、大利益を爲す。至心ならざるを除く。汝等疑ふこと勿れ。』

時に諸の大衆、佛語を聞き已りて、歡喜信受せり。

大辯才天女品第十五之一

(一)爾時大辯才天女、大衆の中に於て卽ち座より起ちて、佛足を頂禮し、佛に白して言さく、『世尊、若し法師あり、是金光明最勝王經を說くものは、我當に其智慧を益し、言說の辯を具足莊嚴すべし。若し彼法師此經の中に於て、文字句義を忘失する所あらば、皆憶持して、能善く開悟せしめ、復た陀羅尼總持の無礙を與へん。又是金光明最勝王經は、彼有情の、已に百千佛の所に於て、諸の善根を種ゑて、常に受持すべきものの爲に、贍部洲

【八】佛の印可、並に奉行を述ぶ。

【大辯才天女品】天女が本經の讀誦講說の行者に對し利益を與へ、また咒藥洗浴の法を明す。

【一】辯才天女本經講說に益を與ふべきを標するを明す。

【大辯才天女】梵(Sarasvati)にサラスヷテイといふ。本經護法の天女にして無礙の辯才を有し、佛法を流布し、壽命增益、怨敵退散等の益を施すといふ。

に於て、廣く行はれ流布して速かに隱沒せざらしめん。復無量の有情是經典を聞くものをして、皆不可思議の捷利の辯才と無盡の大慧とを得しめ、善く衆論及び諸の伎術を解せしめん。能く生死を出て、速に無上正等菩提に趣かしめん。現世の中に於ては、壽命を增益し、資身の具、悉く圓滿ならしめん。

(二)世尊、我當に彼持經法師及び餘の有情の此經典に於て、樂ひて聽聞するものの爲に、其呪藥洗浴の法を說かん。彼人の有らゆる惡星災變、初生時に與へし星屬の相違、疾病の苦、鬪諍、戰陣、惡夢、鬼神、蠱毒、厭魅、呪術、起屍、是の如きの諸惡の障難をなすもの、悉く除滅せしめん。諸の有智のもの、應に是の如き洗浴の法を作すべし。當に香藥三十二味を取るべし、謂ゆる菖蒲、牛黃、苜蓿香、麝香、雄黃、合昏樹、白及、芎藭、狗杞根、松脂、桂皮、香附子、沈香、栴檀、零凌香、丁字、鬱金、婆律膏、葦香、竹黃、細豆蔻、甘松、藿香、茅根香、叱脂、艾納、安息香、芥子、馬芹、龍華鬚、白膠、青木、皆等分。布灑星の日を以て一處に擣き篩ひて、其香末を取れ、當に此呪を以て呪すること一百八遍すべし。呪に曰はく、

怛姪他、蘇訖栗帝、訖栗帝、訖栗帝、計劫摩怛里、繕怒羯囉滯、郝羯喇滯、因達囉闍利膩、鑠羯囒滯、鉢設姪囇、阿伐底、羯細計娜矩覩矩覩、脚迦鼻麗、劫鼻囇劫鼻囇劫毘羅末底、尸羅末底、删底度羅末底、唖波伐矩、畔稚囇、室囇室囇薩底悉體羝、莎訶。

若し如法に洗浴せんことを樂ふときは、應に壇場の方、八肘なるを作るべし。

【捷利の辯才】一刹那に能く諸聲を現ずるをいふ。
【二】本經聽聞者のために呪藥洗浴の法を說くを明す初に持經及辯才を求むるの方便を明す今別して其の功能を標し、方を敎ふる中初に洗法を明す。
【星屬】凡そ人生るる日を二十八宿に屬す、中に於て或は相違あり。
【呪術起屍】西方の呪術能く死屍を起して處處に遊行せしむ。
【菖蒲】梵にヷチャー(Vaca)といふ。
【牛黃】ゴロチャナー(Gorocana)牛の膽石。
【苜蓿香】セーブアリカー(Sephalika)。
【麝香】マハーバーガー(Mahabhaga)。
【雄黃】マナスシ

寂靜安隱の處に於て、求むる所の事を念じ、心を離れざるべし
牛糞を塗りて其壇を作り、上に於て普く諸の彩華を散ずべし
當に淨潔の金銀の器を以て、美味並に乳蜜を盛り滿つべし
彼壇場に於て、四門の所、四人守護すること、法常の如く
四童子をして身を好嚴せしめ、各一角に於て瓶水を持せしめよ
此に於て常に安息香を燒き、五音の樂聲絶えず
幡蓋莊嚴し、繒綵を懸けて、壇場の四邊に安在し
復場内に於て明鏡と利刀とを兼ねて箭と各四枚を置き
壇の中心に於て、大盆を埋め、漏版を以て其上に安くべし
前の香抹を用ひて湯に和し、亦復壇内に安在すべし
旣に斯の如く布置を作し已り、然して後に呪を誦して、其壇を結べ

結界の呪に曰はく、

怛姪他、頞喇計、娜也泥、呬曬、弭曬、祇曬、企企曬、莎訶。

是の如く結界し已りて、方に壇の内に入り、
水を呪すること三七遍、四方に散灑し
次に香湯を呪し、一百八遍を滿ずべし
四邊に幔障を安じ、然る後に、身を洗浴せよ

イラー(Manassila)
【合昏樹】シーリーシャ(Sirisa)。
【白及】インドラハスタ(Indrahasta)。
【芎藭】シャーマーカ(Syamaka)。
【狗杞根】シャミ(Sami)。
【松脂】シュリギビタカ(Sri-vibhitaka)。
【桂皮】トヷチヤ(Tvaca)。
【香附子】ムスタ(Musta)。
【沈香】アガル(Agaru)。
【栴檀】チヤダナ(Candana)。
【零凌香】タガラ(Tagara)。
【鬱金】クンクマ(Kunkuma)。
【婆律膏】ガーラヷ(Galava)。龍腦香脂。
【竿香】ナラダムサ(Naradamsa)。
【竹黄】第二の重出。
【細豆蔻】スクマ

ーラー(Sukumārā)諸種の花の名。
【甘松】ミシ(Misi)。
【藿香】パトナ(Patna)。
【茅根香】ウシーラ(Uśira)。
【叱脂】サツラキ(Sallaki)。
【艾納】シヤイレーヤ(Saileya)。
【安息香】グッグラ(Guggula)。
【芥子】サルシヤパ(Sarsapa)。
【馬芹】ショオパグニ(Sophaghni)
【龍華鬚】ナーガケーシヤラ(Nāgakeśala)。
【白膠】サルジヤラサ(Sarjarasa)。
【靑木】クシユタ(Kustha)。
【布灑星の日】プシヤ(Pusya)。鬼宿相値の日、印度人は此の星日を以て吉辰とす。
【是の如く洗し已りて已下】洗浴後の發願を述ぶ。

水を呪し、湯を呪する、呪に曰はく、
怛姪他、索揭智、毘揭智、毘揭茶、伐底、莎訶。
若し洗浴し訖らば、其洗浴の湯、及び壇場中の供養の飲食は河池の內に棄て、餘は皆收め攝せよ。是の如く浴し已りて、方に淨衣を著し、既に壇場より出で、淨室の內に入り、呪師は其をして、弘誓願を發し、永く衆惡を斷じ、常に諸善を修せしめ、諸の有情に於て大悲心を興さしむべし。此因緣を以て、當に無量隨心の福報を獲べし。』
復頌を說いて曰はく、
若し病苦の諸の衆生ありて、種種の方藥もて治するに差えずとも
若し是の如きの洗浴法に依り、幷に復此經典を讀誦して
常に日夜に於て念散ぜず、專想慇懃に信心を生ぜば
所有の患苦盡く消除し、貧窮を解脫し、財寶足り
四方の星辰及び日月、威神もて擁護し、延年を得て
吉祥安隱にして福德增し、災變厄難皆除遣せん
次に護身の呪を誦すること三七遍せよ。呪に曰はく、
怛姪他、三謎、毘三謎、莎訶。索揭滯、毘揭滯、莎訶。毘揭茶、伐底、莎訶。娑揭囉。三步多也莎訶。塞建陀、摩多也、莎訶。尼囉建佗也、莎訶。阿鉢攞市哆、毗𠼪耶也、莎訶。泗摩槃哆、三步多也、莎訶。阿儞密羅。薄怛囉也、莎訶。南謨薄伽伐都、跋囉甜摩寫莎

【復頌を說いて等】三頌を說いて呪法の効能を說く。初半は衆生苦あるを標し、次一は依法修學を明し、後一頌半は學の得益を明す。

【次に等】護身の呪を明す。

【三】天女四衆に末經修行を勸む。

【四】佛天女を讚ずるを明す。

【五】方軌を求むる中正しく辯才を求むるを明す。中初に憍陳如天女を讚歎し求法を明す

【高山の頂】能く生死を出づるを表はす、憍慢を離るる故に茅室に居す、和忍を表す故に軟草を服す、恒に利物に勸むる故に常に一足を翹ぐ。

訶。南謨薩囉酸底、莫訶提鼻裔、莎訶。悉甸覩、漫、曼怛囉鉢拕莎訶。怛喇覩仳姪哆、跛囉甜摩奴末覩、莎訶。

(三)爾時大辯才天、洗浴壇場の呪を說き已り、前みて佛足を禮し、佛に白して言さく、『世尊、若し苾芻、苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦ありて、是妙經王を受持し讀誦し書寫し流布し、如說に行ぜんものは、若は城邑、聚落、曠野、山林、僧尼の住處に在らんに、我是人の爲に諸の眷屬を將ゐて、天の伎樂を作し、其所に來詣して擁護し、諸の病苦、流星、變怪、疾疫、鬪諍、王法の拘ふる所、惡夢、惡神障礙を爲すもの、蠱道、厭術、悉く皆除き殄くし、是等持經の人、苾芻等の衆及び諸の聽者を饒益して、皆速かに生死の大海を度りて菩提を退せざらしめん。』

(四)爾時世尊、是說を聞き已りて、辯才天女を讚じて言はく、『善い哉善い哉、天女、汝能く無量無邊の有情を安樂利益し、是神呪及び香水壇場の法式を說く。果報難思なり。汝當に最勝經王を擁護して隱沒せしむる勿く、常に流通することを得しむべし。』

爾時、大辯才天女、佛足を禮し已りて本座に還復す。

(五)爾時、法師授記憍陳如婆羅門、佛の威力を承けて大衆の前に辯才天女を讚請して曰はく、

聰明勇進なり辯才天、人天の供養悉く應に受くべし
名は世間に聞えて遍く充遍す。能く一切衆生の願を與ふ
高山の頂なる勝住處に依り、茅を葺きて室と爲し中に在りて居す

【六】天女請に依つて修習法を敎示するを明す。

恒に軟草を結ひて以て衣と爲し在處常に一足を翹ぐ
諸天大衆皆來集し、咸く同く一心に讃請を伸ぶ
惟願くば智慧辯才天、妙言辭を以て一切に施せ

(六)爾時辯才天女、卽便請を受けて、爲に呪を說いて曰はく、

怛姪他慕囇只囇、阿伐帝、阿伐吒伐底、馨遇隸名具隸、名具羅伐底、鴦具師、末唎只三末底、毘三末底、惡近、唎莫近唎、怛囉只、怛囉者伐底、質質哩、室哩密哩、末難地、曇末唎只、八囉拏畢唎裔、盧迦逝瑟盧迦失囉瑟耶、盧迦畢唎裔、悉駄跋唎帝、毘麼目企、輸只折唎、阿鉢唎底喝帝、阿鉢唎底喝哆勃地、南母只、南母只、莫訶提鼻鉢唎底近唎拏拏、南摩塞迦囉、我某甲勃地達哩奢呬、勃地、阿鉢唎底喝哆、婆跋覩、市婆謎毘輸姪覩、舍悉怛囉輸路迦、曼怛囉畢得迦、迦婢耶地數、怛姪他、莫訶鉢喇婆鼻、呬里密里呬里密里、毗折喇覩謎勃地、我某甲勃地輸提、薄伽伐點、提毘䫫、薩羅酸點、羯羅滯、鷄由囉鷄由羅末底、呬里密里、呬里蜜里、阿婆訶耶弭、莫訶提鼻、勃陀薩帝娜、達磨薩帝娜、僧伽薩帝娜、因陀羅薩帝娜、跋嚕拏薩帝娜、裔盧雞薩底婆地娜、羝釤、薩帝娜、薩底伐者泥那、阿婆訶耶弭、莫訶提鼻、呬里密里、呬里密里、毘折喇覩、我某甲勃地、南謨薄伽伐底、莫訶提鼻、薩囉酸底、悉甸覩、曼怛囉鉢陀彌、莎訶。

爾時辯才天女、是呪を說き已りて、婆羅門に告げて言はく、『善い哉、大士、能く衆生の

【先づ此陀羅尼等】十九頌半中初半先づ呪を誦す、次二歸敎求護、次一略示作法、次六頌半境に託して安心して本所求を修せしむ、次三は別して所求を示す、次二は廣く作法を示す、次四は池むる時限を敎ふ。

爲に、妙辯才及び諸の珍寶、神通、智慧を求め、廣く一切を利して速かに菩提を證せしむ。是の如く應に受持の法式を知るべし。』即ち頌を說いて曰はく、

先づ此陀羅尼を誦して純熟して謬失なからしむべし
三寶と諸の天衆とに歸敬して、加護を請ひ求め願くば心に隨はんと
諸佛及び法寶と菩薩と獨覺と聲聞衆とを禮敬し
次に梵王幷に帝釋、及び護世者の四天王とを禮せよ
一切常に梵行を修せん人は、悉く至誠慇重に敬すべし
寂靜の蘭若處に於て大聲に前の咒讚の法を誦すべし
佛像と天龍の前に於て、其所有に隨ひて供養を修すべし
彼一切衆生の類に於て、慈悲哀愍の心を發起すべし
世尊妙相紫金の身を、想を懸けて正念に心亂るる無かれ
世尊護念して敎法を說き、彼の根機に隨ひて定を習はしむ
其句義に於て善く思惟し、復空性に依て修習し
世尊の形像の前に在りて、一心正念に安座すべし
即ち妙智三摩地を得て、並びに最勝の陀羅尼を得ん
如來の金口は法を演說したまひ、妙響諸の人天を調伏す
舌相は緣に隨ひて希有を現じ、廣長にして能く三千界を覆ふ

是の如き諸佛の妙音聲、至誠に憶念して心に畏るるなかれ
諸佛皆弘願を發したまへるに由りて、此舌相の不思議を得たまへり
諸法は皆有に非ずと宣說し、譬へば虚空の著する所無きが如し
諸佛の音聲と及び舌相と、繫念し思量して圓滿ならんことを願へ
若し辯才天を供養するを見、或は弟子の師の教に隨ひて
此秘法を授けて修學せしむるを見て、尊重せば心に隨ひて皆成ずることを得ん
若し人最上智を得んと欲せば、應當に一心に此法を持すべし
福智と諸の功德とを增長し、必定して成就す、疑を生ずる勿れ
若し財を求めんものは多財を得、名稱を求むるものは名稱を獲
出離を求むるものは解脫を得ん、必定成就す、疑を生ずる勿れ
無量無邊の諸の功德、其內心の所願に隨ひて
若し能く是の如く依行する者は、必ず成就を得ん、疑を生ずる勿れ
淨處に於て淨衣を著すべし。壇場を作り大小に隨ふべし
四淨瓶を以て美味を盛り、香華の供養時に隨ふべし
諸の繒綵と幷に幡蓋を懸け、塗香と抹香もて遍く嚴飾し
佛及び辯才天に供養し、天身を見んことを求めば皆願を遂げん
三七日前の咒を誦して、大辯天神の前に對すべし

【七】憍陳如聞法によつて喜び讃じて頌を說く。
【世諦の法に依りて】勝義絕言の故に。
【那羅延】ナーラヤニー(Nārayanī)毘紐天后。
【往昔の仙人說】摩訶婆羅多其他の古典に天女を讃じたるを指す。
【吉祥成就し等】已下三頌總じて內外の德を讃ず。
【閻羅】ヤーマー(Yāma)天の妹。

若し其れ此天神を見ずんば、更に心を用ゐて九日を經べし
後夜の中に於て猶見ずんば、更に淸淨勝妙の處を求めて
如法に辯才天を畫き、供養し誦持し心に捨つる無かるべし
晝夜に懈怠を生ぜず、自利し利他して窮盡すること無く
獲る所の果報を群生に施せば、求むる所の願に於て皆成就せん
若し意を遂げずんば、三月、六月、九月、或は一年を經て
慇懃に求め請ひて心移らざれば、天眼と他心と皆悉く得ん

(七)爾の時憍陳如婆羅門、是說を聞き已りて、歡喜し踊躍し、未曾有なりと歎じ、諸の大衆に告げて、是の如きの言を作さく、「汝等人天一切の大衆、是の如く當に知るべし。皆一心に聽け。我今更に世諦の法に依りて、彼勝妙の辯才天女を讃ぜんと欲す。即ち頌を說いて曰はく、

世界の中に於て自在を得たる天女那羅延を敬禮す
我今彼尊者を讃歎する、皆往昔の仙人の說の如くならん
吉祥成就し心安隱に、聰明に慚愧ありて名聞あり
母となりて能く世間を生じ、勇猛にして常に大精進を行ず
軍陣の處に於て戰ひて恆に勝ち、長養し調伏して心慈忍なり
現じて、閻羅の長姊となりて、常に靑色の野蠶衣を著す

好醜の容儀皆具有し、眼目能く見るものをして怖れしむ
無量の勝行世間に超え、歸信の人咸く攝受す
或は山巖の深險なる處に在り、或は坎窟及び河邊に居り
或は大樹諸の叢林に在り、天女多くは此中に依りて住す
假使山林野人の輩も、亦常に天女を供養す
孔雀の羽を以て幡旗を作り、一切の時に於て常に世を護る
師子、虎、狼恆に圍繞し、牛羊雞等亦相依る
大鈴鐸を振ひて音聲を出だし、頻陀山の衆も皆響を聞く
或は三戟を執りて頭に髻を圓くし、左右に恆に日月の旗を持つ
黑月の九日と十一日、此時の中に於て當に供養すべし
或は婆蘇大天の妹と現じて、鬪戰有るを見て心常に愍れむ
一切の有情の中を觀察するに、天女は最勝にして過ぐるもの無し
權に牧牛の歡喜女を現じ、天と戰ふとき常に勝つことを得
能く久しく世間に安住し、亦和忍及び暴惡と爲る
大婆羅門四明の法、幻化の咒等悉く皆な通じ
天仙の中に於て自在を得、能く種子及び大地と爲る
諸の天女等の集會する時には、大海の潮の如くに必らず來應す

【或は山巖の深險なる處等】已下十七頌別して內外の德を讚ず。就中初四半は外德、後十二頌半は內德を讚ず。

【頻陀山】ヸンドヤ(Vindya)、印度南方の大山脈にして鬼神特に夜叉神の集まる所と信ぜらる。

【或は三戟を執り等】此の形大自在天の變身なり。

【婆蘇大天】ヷースデーヷ(Vāsudeva)、クリシュナの父として神傳等に軍神として有名なる神。

【一切の有情の中等】已下內德を讚ずる中初十頌半は大智尊勝の德を、次二頌は大悲救苦の德を讚ず。

諸の龍神藥叉衆に於て、咸く上首となりて能く調伏す
諸女の中に於て最も梵行あり、言を出すこと猶し世間の主の如し
王の住處に於ても蓮華の如く、若し河津に在れば橋栰に喩へん
面貌は猶し盛滿月の如く、多聞を具足し依處となり
辯才勝れて出づる高峯の若し、念ずるものには皆與に洲渚となる
阿蘇羅等の諸の天衆、咸く共に其功德を稱讃す
乃至千眼帝釋主も、慇重の心を以て而も觀察す
衆生若し希求の事あらば、悉く能く彼をして速に成ずることを得しめ
亦聰辯にして聞持を具せしめ、大地を持する中に第一たり
此十方世界の中に於て、大燈明の如く常に普く照し
乃至神鬼諸の禽獸にも、咸く皆彼の求むる所の心を遂げしむ
諸女の中に於て山峯の如し、昔の仙人の久しく世に住したるに同じ
少女天の如く常に欲を離れ、實語は猶し大世主の如し
普く世間の差別の類、乃至欲界諸の天宮を見るに
唯天女の獨り尊と稱するあり。有情の能く勝るものを見ず
若し戰陣恐怖の處に於て、或は火坑の中に墮在するを見
河津の險難と賊盜の時、悉く能く彼をして恐怖を除かしむ

【牧牛の歡喜女】梵にゴーピナンダー(Gopinandā)といふ。

【和忍と暴惡】婆羅門教に於て構取と調和とを代表する二女神形なり

【四明の法】四吠陀所謂リッグ(Ṛg)讚誦、ヤジュル(Yajur)祭祀、サーマ(Sāma)歌詠アタルヷ(Atharva)攘災の四是れなり。

【大世主】マハープラジャーパティー(Mahāprajāpati)

【爾時に婆羅門已下】次に咒を以て天女を讃ず。

或は王法に枷縛せられ、或は怨讎の爲に殺害を行ぜらる
若し能く專注に心移らざれば、決定して諸の憂苦を解脫せん
善惡の人に於て皆擁護し、慈悲愍念して常に現前す
是故に我至誠心を以て、大天女に稽首し歸依す

爾時、婆羅門復咒を以て、天女を讃じて曰はく、

世間の尊を敬禮し敬禮す。諸母の中に於て最も勝れたり
三種の世間咸く供養し、面貌容儀、人觀んことを樂ふ
種種の妙德を以て身を嚴り、目は修廣の靑蓮葉の如し
福智と光明と名稱との滿ちたること、譬へば無價の摩尼珠の如し
我今最勝者を讃歎す、悉く能く所求の心を成辦せよ
眞實の功德は妙にして吉祥なり、譬へば蓮華の極めて淸淨なるが如し
身色の端嚴は皆見んことを樂ひ、衆相希有にして不思議なり
能く無垢の智光明を放つ。諸念の中に於て最勝たり
猶し師子の獸の中の上たるが如し、常に八臂を以て自ら莊嚴し
各弓と箭と刀と矟と斧と、長杵と鐵輪と幷に羂索とを持す
端正にして觀るを樂ふ滿月の如し、言詞は滯るなく和音を出す
若し衆生ありて心に願求せば、善事は念に隨ひて圓滿ならしむ

帝釋と諸天と咸く供養し、皆共に歸依すべしと稱讃す
衆徳能く生ずること不思議なり、一切時の中に恭敬を起せ
莎訶。
若し辯才天を祈請せんと欲せば、此呪讃の言詞の句に依りて
晨朝に清淨至誠にて誦せよ、求むる所の事に於て悉く心に隨はん
爾時佛婆羅門に告げたまはく『善い哉善い哉、汝能く是の如く衆生を利樂し、安樂を施與す。彼天女を讃じて加護を請ひ求めば、福を獲ること邊り無からん。』

金光明最勝王經　巻第八

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

大辯才天女品第十五之二

(一)爾時、憍陳如婆羅門、上の讃歎及び、呪讃の法を說き、辯才天女を讃じ已り、諸の大衆に告ぐ「仁等若し辯才天女の哀愍加護を請ひて、現世の中に於て、無礙の辯と聰明大智巧妙の言詞、博綜の奇才、論議の文飾を得て意に隨ひて成就し、疑滯無からんとするものは、應に是の如く至誠殷重に請召して曰ふべし。

南謨佛陀也。南謨達摩也。南謨僧伽也。南謨諸菩薩衆、獨覺、聲聞、一切賢聖。

過去現在十方の諸佛、悉く皆已に、眞實の語を習ひ、能く隨順して機に當るの實語を說き、虛誑の語無し。已に無量俱胝大劫に於て、常に實語を說き、實語有るものは、悉く皆隨喜せり。不妄語を以ての故に、廣長舌を出だし、能く面を覆ひ、贍部洲及四天下を覆ひ、能く一千二千三千世界を覆ひ、普く十方世界を覆ひ、圓滿、周遍にして不可思議なり、能く一切煩惱の炎熱を除く。

敬禮し敬禮す、一切諸佛。是の如き舌相、願くば我某甲、皆微妙の辯才を、成就するを

【一】前品の續、大段正しく辯才を求むる中、憍陳如天女の教を聞き已りてその加被を請召するを明す。
【巧妙の言詞】詞無礙辯、博綜は法義無礙、論議文飾は樂說無礙。
【南謨佛陀也已下】正しく加被を請ふ初に諸佛の加被を請ふてその實語等を讃ず。

【諸佛の妙辯才已下】諸佛菩薩諸天の妙辯才を讃ず、要は上にいふ實語を中心とす。
【烏摩】ウーマー(Umā)毘紐天后。
【塞建陀】スカンダ(Skanda)軍將、所謂天大將軍。
【摩那斯】マナシ(Manasi)龍王。
【聰明夜天】ラートリデーヷター(Rātridevatā)夜神。
【吠率怒天】ヸシヌ(Viṣṇu)
【毘摩】ビーマー(Bhimā)大自在天后の一名。
【侍數天神】サンキヤーヤナ(Sāṃkhyāyana)
【室唎末多】シスマター(Sisumatā)軍神母。
【醯唎】ヘーリ(Helī)天女の名。
【諸母大母】史詩中の諸母天マートリカー(Mātṛkā)を擧ぐ。

得て、至心歸命せん。
諸佛の妙辯才、諸大菩薩妙辯才
獨覺聖者の妙辯才、四向四果の妙辯才
四聖諦語の妙辯才、正行正見の妙辯才
梵衆諸仙の妙辯才、大天烏摩妙辯才
塞建陀天妙辯才、摩那斯王妙辯才
聰明夜天妙辯才、四大天王妙辯才
善住天子妙辯才、金剛密主妙辯才
吠率怒天妙辯才、毘摩天女妙辯才
侍數天神妙辯才、室唎天女妙辯才
室唎末多妙辯才、醯唎言詞妙辯才
諸母大母妙辯才、訶唎底母妙辯才
諸藥叉神妙辯才、十方諸王妙辯才
所行の勝業我を資助し、無窮の妙辯才を得しめよ
欺誑なきを敬禮す、解脫者を敬禮す
離欲人を敬禮す、纒蓋を捨てたるを敬禮す
心清淨を敬禮す、光明者を敬禮す

【欺誑なきを敬禮す】已下廿五頌は加被を得しめんことを請ふ。中初十二は菩薩に敬禮して加被を請ひ、次一半は聲聞に、二半は色界天に、次に欲界天に、次五は八部に、次一は餘の人天に、次一は法界有情に加被を請ふを明す

眞實語を敬禮す、塵習無きを敬禮す
勝義に住するを敬禮す、大衆生を敬禮す
辯才天を敬禮す。我が詞をして無礙ならしめよ
願くば我が所求の事、皆悉く速に成就せん
病無く常に安隱に、壽命延長を得ん
善く諸の明呪を解し、菩提の道を勤修せん
廣く群生を饒益し、心に求むるの願早く遂げん
我眞實の語を説く、我無誑の語を説く
天女の妙辯才、我をして成就を得しめよ
惟願くば天女來り、我語滯りなく
速かに身口の內に入りて、聰明辯才を足らしめよ
願くば我舌根をして、如來の辯を得しめよ
彼語の威力に依りて、諸の衆生を調伏せん
我が語を出す時、事に隨ひ皆成就し
聞くもの恭敬を生じ、所作唐捐ならじ
若し我辯才を求めて、事成就せずば
天女の實語皆悉く虛妄を成ぜん

【妙高山】須彌山七海山は須彌周圍の七重の山と海。

無間の罪を作るあるも、佛語もて調伏せしめん
及び阿羅漢、有らゆる報恩の語
舍利子と目連、世尊衆の第一
斯等眞實の語、願くば我皆成就せん
我今皆佛の、聲聞大衆を召請す
皆願くば速かに來至し、我求むる心を成就したまへ
求むる所の眞實語、皆願くば虚誑無からん
上は色究竟より、及以淨居天
大梵及び梵輔、一切の梵王衆
乃至三千に遍ねき、索訶世界の衆
幷びに諸の眷屬に及び、我今皆請召す
惟願くば慈悲を降し、哀憐し同く攝受せよ
他化自在天、及以樂變化
慈氏の成佛すべき、覩史多天の衆
夜摩の諸天衆、及び三十三天
四天王衆の天、一切の諸天衆
地水火風の神、妙高山に依りて住せるもの

【滿財】プールナバドラ(Pūrṇabhadra)
【五頂】パンチャシキ(Pañcaśikhi)共に有名なる鬼神

【二】天女の婆羅門に修行を勵むるを明す。

七海山の神衆、有らゆる諸の眷屬
滿財及び五頂、日月と諸の星辰
是の如き諸天衆、世間をして安隱ならしむ
斯等の諸天神は、罪業を作すを樂はず
鬼子母及び、其最小の愛兒を敬禮す
天龍と藥叉衆、乾闥と阿蘇羅
及以緊那羅、莫呼洛伽等
我世尊の力を以て、悉く皆請召を申ぶ
願くば慈悲心を降し、我に無礙辯を與へよ
一切人天の衆、能く他心を了ずるもの
皆願くば神力を加へ、我に妙辯才を與へよ
乃至虛空を盡くし、法界に周遍せる
有らゆる含生の類、我に妙辯才を與へよ

(二)爾時、辯才天女、是請を聞き已りて、婆羅門に告げて曰はく、『善い哉、大士。若し男子女人ありて、能く是の如きの呪及び呪讚に依り、前に說く所の受持の法式の如く、三寶に歸敬し、虛心正念ならば、求むる所の事に於て、皆唐捐ならじ、兼ねて復此金光明經微妙の經典を讀誦せば、願求する所のもの果遂せざるなく、速かに成就することを得ん。不

【三】佛天女を讃じその修學を勸む

【大吉祥天女品】辯才の主として智辯を與へしに對し本品の天女は飲食衣服等所須の資具を本經の受持者に與へ、又五穀等の豐穰を得しむるを明す。

【一】吉祥天弘經者を見ば能く四事を供するを述ぶ。

【吉祥天女】梵にスリーマハーデヴー(Śrī-mahādeva)といふ。

至心を除く。」時に婆羅門深心に歡喜し合掌頂受せり。

(三)爾時佛辯才天女に告げたまはく、「善い哉善い哉、善女天。汝能く是妙經王を流布し、有らゆる經を受持するものを擁護し、及び能く一切の衆生を利益し、安樂を得しめ、是の如き法を說きて、辯才の不可思議を施與し、福を得ること量無く、諸の發心の者は速に菩提に趣かしめん。」

大吉祥天女品第十六

(一)爾時、大吉祥天女、卽ち座より起ち、前みて佛足を禮し、合掌恭敬し、佛に白して言さく、「世尊、我若し苾芻、苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦ありて、受持し讀誦し、人の爲に是金光明最勝王經を解說するものあるを見ては、我當に專心に此等の法師を恭敬すべし。謂ゆる飲食、衣服、臥具、醫藥、及び餘の一切の須ふる所の資具、皆圓滿にして乏少有る無からしめん。若は晝、若は夜、此經王所有の句義に於て、觀察し思量し、安樂に住し、此經典をして、瞻部州に於て、廣行流布せしめ、彼有情已に無量百千佛の所に於て、善根を種ゑたるものの爲に、常に聞くことを得て、速に隱沒せざらしめん。復た無量百千億劫に於て、人天の種種の勝樂を受け、常に豐稔を得、永く飢饉を除き、一切の有情常に安樂を受けしむべし。亦復諸佛世尊に値遇し、未來世に於て速に無上大菩提の果を證して、永

【二】四事を供する因緣を明す。

【三】奉經のことを勸むるを明す。

【是の如く等】已下頌に八あり一一に身眷無衰等、文義知り易し。

く三途輪廻の苦難を絶たん。

(二)世尊、我過去を思ふに。琉璃金山寶華光照吉祥功德海如來應正等覺十號具足したまふあり。我彼所に於て諸の善根を種ゑたり。彼如來の慈悲愍念の威神力に依るが故に、我をして今日念處に隨ひ、所觀の方に隨ひ、所至の國に隨ひ、能く無量百千萬億の衆生をして諸の快樂を受けしむ。乃至須ふる所の衣服飲食資生の具、金、銀、琉璃、硨磲、碼碯、珊瑚、琥珀、眞珠等の寶、悉く充足せしむ。

(三)若し復人ありて、至心に是金光明最勝王經を讀誦せば、亦當に日日衆の名香を燒き、及び諸の妙華もて、我が爲に彼琉璃金山寶華光照吉祥功德海如來應正等覺を供養すべし。復當に每日三時の中に於て我名を稱念すべし。別に香華及び諸の美食を以て、我を供養すべし。我を供養せば亦當に此妙經王を聽受して、是の如きの福を得べし。』

而して頌を說いて曰はく、

是の如く能く經を持つに由るが故に、自身と眷屬と諸衰を離れ
所須の衣食乏しき時無し、威光壽命窮盡し難し
能く地味をして常に增長せしむ、諸天は雨を降らして時節に隨ひ
諸天衆をして咸く歡悅せしむ、及び園林穀果の神
叢林果樹竝に滋養し、有らゆる苗稼咸く成就し
珍財を欲求すれば皆願を滿じ、所念者に隨ひて其心を果さしむ

(四)佛、大吉祥天女に告げたまはく、「善い哉善い哉、汝能く是の如く昔因を憶念し、報恩供養、無邊の衆生を利益し安樂ならしめ、是經を流布す。功德盡くる無からん。」

大吉祥天女增長財物品第十七

(一)爾時、大吉祥天女、復佛に白して言さく、「世尊、北方薜室羅末拏天王の城を有財と名く。城を去ること遠からずして園あり、妙華福光と曰ふ。中に勝殿あり、七寶の所成なり。世尊、我常に彼に住す。若し復人ありて、五穀日日に增多し、倉庫盈溢せんと欲求するものあらば、應に敬信の心を發起して、一室を淨治し、瞿摩を地に塗るべし。應に我像を畫き種種の瓔珞もて周匝莊嚴すべし。當に身を洗浴して、淨き衣服を著し、塗るに名香を以てし、淨室の內に入り、心を發し、我が爲に、每日三時に彼佛名、及び此經の名號を稱して禮敬を申ぶべし。「南謨琉璃金山寶華光照吉祥功德海如來、諸の香華及び種種甘美の飲食を以て、至心に奉獻し、亦香華及び諸の飲食を以て、我像に供養し、復飲食を持して餘方に散擲し、諸の神等に施こし、實言もて大吉祥天を邀へ請じ、所求の願を發し、若し言ふ所の如く、是虛しからずんば、我が請ふ所に於て、空爾ならしむること勿れ」と。時に大吉祥天女是事を知り已り、便ち愍念を生じ、其宅中の財穀をして增長せしめんとす。即ち當に呪を誦して我を請召し、先づ佛名及び菩薩の名字を稱すべし。

【四】佛の讚なり

【大吉祥天女增長財物品】人の佛名經名を稱して天女を供養請召するに財物の增長を得しむるを明す。即ち財物の得法を明すなり。

【一】財物を得るの方軌を明す。

【薜室羅末拏天王】多聞天王なり。

【有財】アラカヷチー（Alakavati）と梵にいふ。

【妙華福光】梵にプシュパクスマプラバ（Puṣpakṣumaprabha）といふ。

【琉璃金山寶華光照吉祥功德海如來】ラトナクスマグナサーガラヷイヅーリヤナカギリスヷルナカーニチヤプラハーサシュリー（Ratnakusumagunasāgaravaidūryanakagiri suvarṇakāñcanaprabhāsaśrī）。

一心に敬禮す南謨十方三世諸佛。南謨寶髻佛。南謨無垢光明寶幢佛。南謨金幢光佛。南謨百金光藏佛。南謨金蓋寶積佛。南謨金華光幢佛。南謨大燈光佛。南謨大寶妙佛。南謨東方不動佛。南謨南方寶幢佛。南謨西方無量壽佛。南謨北方天鼓音佛。南謨妙幢菩薩。南謨金光菩薩。南謨金藏菩薩。南謨常啼菩薩。南謨法上菩薩。南謨善安菩薩。是の如く佛菩薩を敬禮し已り、次に當に呪を誦して、我が大吉祥天女を請召すべし。此呪の力に依りて、求むる所の事、皆成就することを得ん。

即ち呪を説きて曰はく、

南謨室唎莫訶天女、怛姪他、鉢唎哺喇拏折囇、三曼跢、達利設泥、莫訶毘訶囉掲帝、三曼哆毗曇末泥、莫訶迦里也、鉢囇底瑟佗鉢泥、薩婆頞、佗婆彈泥、蘇鉢喇底哺嚗、痾耶娜達摩多、莫訶毗俱比帝、莫訶迷唎隖、鄔波僧呬羝、莫訶頡唎使、蘇僧近里呬羝、三曼多頞他、阿奴波喇泥、莎訶。

世尊若し人あり、是の如き神呪を誦持し、我を請召せんとき、我請を聞き已り、即ち其所に至り、願をして遂ぐるを得しめん。世尊、此灌頂法の句、定成就の句、眞實の句、無虚誑の句、是れ平等行なり、諸の衆生に於て是れ正善根なり。若し呪を受持し讀誦するあらんものは、七日七夜八支戒を受くべし。晨朝の時に於て先づ齒木を嚼み、淨く澡漱し已り、哺時に及びて、香華もて一切諸佛に供養し、自ら其罪を陳じ、己が身及び諸の含識の爲に、廻向發願し、希求する所をして速かに成就することを得しめよ。一室を淨

【寶髻佛】ラトナシキ(Ratnasikhi)
【金蓋寶積】スヷルナラトナーカラツチャヤツトラクータ(Suvarnaratnākaracchatrakuta)。
【金華光幢】スヷルナプシュパーンジャイラシュミケー・(Suvarnapuspanjairasmiketu)
【大燈光】マハープラディーパ(Mahāpradīpa)。
【妙幢】ルチラケーツ(Ruciraketu)
【金光】スヷルナプラボーツタマ(Suvarnaprabhottama)。
【金藏】スヷルナガルバ(Suvarnagarbha)。
【法上】ダルモードカター(Dharmodgata)梵本にはこの四佛に四方四佛を加へ八佛四菩薩を擧ぐ。
【灌頂法の句】已下六句を以て呪を讚ず、是は呪の最

勝法を定成就は所求、決定して滿ずるを、眞實は眞に契ふを、無虛誑は他を誑らかさざるを顯はし、平等行は一切有情皆行を得る故に、正善根は世出世善の根本の故に擧ぐるなり。
【二】加被を召請するにより得る利益を明す。
【三】勝妙果の受用を明す。
【四】佛の讃。

治し、或は空閑の阿蘭若處に在りて瞿摩を壇とし、栴檀香を燒きて供養を爲し、一勝座を置きて、幡蓋もて莊嚴し、諸の名華を以て壇內に布列せよ。當に至心に前の呪を誦持して、我が至るを悕望すべし。

(二)我爾時に於て即便ち是人を護念し、觀察し、來りて其室に入り、座に就きて坐し、其供養を受けん。是より以後當に彼人をして睡夢の中に於て我を見るを得しむべし。求むる所の事に隨ひ、實を以て告知せば、若は聚落、空澤及び僧の住處に、求むる所のものに隨ひて皆圓滿せしめ、金、銀、財寶、牛、羊、穀、麥、飮食、衣服、皆心に隨ひ、諸の快樂を受くべし。

(三)既に是の如き勝妙の果報を得ば、當に上分を以て三寶に供養し、及び我に施し、廣く法會を修し、諸の飮食を設け、香華を布列すべし。既に供養し已れば、有らゆる供養、之を貨して値を取り、復爲に我に供養せよ。我當に身を終るまで、常に此に住して、是人を擁護し、闕乏なからしめん、悕求する所に隨ひて悉く皆意に稱はん。亦時時に貧乏を給濟すべし。慳惜にして獨り己が身の爲にすべからず。常に是經を讀みて、供養して絕えざらしめよ。當に此福を以て普く一切に施し、菩提に廻向し、願くば生死を出でて速かに解脫を得べし。」

(四)爾時世尊讚じて言はく、「善い哉、吉祥天女。汝能く是の如く此經を流布し、不可思議に自他俱に益す。」

【堅牢地神品】本經奉持者に對する地神の守護利益を說く。
【一】地神奉經者に飲食の資持を益するを明す。
【堅牢地神】梵にドリダープリテイギーデーヴター(Drḍhāpṛthivīdevatā)。

堅牢地神品第十八

(一)爾時、堅牢地神、卽ち衆中に於て座より起ちて合掌恭敬して、佛に白して言さく、『世尊、是金光明最勝王經、若は現在世、若は未來世、若は城邑、聚落、王宮、樓觀、及び阿蘭若、山、澤、空林に在りて、此經王流布の處有らば、世尊、我れ當に其所に往詣して供養し、恭敬し、擁護し、流通すべし。若し方處有りて說法師の爲に、高座を敷置し經を演說せば、我れ神力を以て本身を現ぜずして、座の所に在りて其足を頂戴し、我れ法を聞くことを得て、深心歡喜し、法味を食することを得て、威光を增益し、慶悅無量にして、自身既に是の如きの利益を得、亦大地をして深きこと十六萬八千踰繕那ならしめて、金剛輪際に至り、其地味をして悉く皆增益ならしめ、乃至四海の有らゆる土地をして、亦肥濃にして、田疇沃壤常の日に倍勝ならしめん。亦復此贍部洲の中の江、河、池、沼、有らゆる諸樹藥草、叢林、種種の華、果、根、莖、枝、葉、及び諸の苗稼の形相愛すべく、衆の樂ひ觀る色香具足して、皆受用するに堪へしめん。若し諸の有情にして是の如きの勝飲食を受用し已らば、長命し、色力諸根安隱にして、光輝を增益し、諸の痛惱無く、心慧勇健にして堪能せざる無からん。又此大地、凡そ須つ所ある百千の事業、悉く皆周く備はらん。世尊、是因緣を以て、諸の贍部洲は安隱豐樂、人民熾盛にして諸の衰惱無く、有らゆ

る衆生皆安樂を受けん。既に是の如きの身心快樂を受け、此經王に於て深く愛敬を加へ、所在の處皆願くば受持供養し、恭敬し、尊重し、讃歎し、又復彼說法の大師法座の處に於て、悉く皆彼に往き、諸の衆生の爲に是最勝經王を說かんことを勸請せん。何を以ての故に。世尊、此經を說くに由りて、我れ自身幷びに諸の眷屬咸く利益を蒙り、光輝氣力、勇猛威勢、顏容端正にして倍倍常に勝ればなり。世尊、我れ堅牢地神法味を蒙り已りて、贍部洲縱廣七千踰繕那の地皆悉く沃壤し、乃至前の如く有らゆる衆生をして皆安樂を受けしめん。是故に世尊、時に彼衆生我が恩を報ぜんが爲に是念を作すべし、我れ當に必定して是經を聽受し、恭敬供養し、尊重讃歎せんと。是念を作し已りて、即ち住處より城、邑、聚落、舍、宅、空地、法會の所に詣でて法師を頂禮し、是經を聽受す。既に聽受し已りて各本處に還り、心に慶喜を生じ、共に是言を作さく、「我等、今甚深無上の妙法を聞くことを得たり、即ち是れ不可思議功德の聚を攝受す、經力に由るが故に、我等、當に無量無邊百千俱胝那庾多の佛に値ひ、承事供養したてまつりて、永く三塗極苦の處を離るべし。復來世百千生中に於て常に天上に生じ、及び人間に在りて諸の勝樂を受けん」と。時に、彼諸人各本處に還り諸の人衆の爲に是經王を說く。若しは一喩一品、一の昔因緣、一如來の名、一菩薩の名、一四句の頌、或は復一句も諸の衆生の爲に是經典乃至首題名字を說かば、世尊、諸の衆生の所住の處に隨ひて、其地悉く皆沃壤肥濃して餘の處に過ぎ、凡そ是土地に生ずる所の物悉く增長滋茂廣大なることを得て諸の

【三十三天】忉利天のこと、帝釋天の住所。

【六天】六欲天のこと、四王、忉利、夜摩、兜率、化樂、他化自在の六天。

【世尊是の如き等】聖經は唯宿植善根、福德深厚の衆生のみ之を聽聞受持するを得べし。

【二】地神の呪現身に加被を與ふべきを明す。

衆生をして快樂を受けしめ、珍財を多饒し、好く惠施を生じ、心常に堅固にして深く三寶を信ぜしめん。』是語を作し已るや、爾時、世尊、堅牢地神に告げて曰はく『若し衆生有りて是金光明最勝經王乃至一句を聞かば、命終の後當に三十三天及び餘天の處に往生すべし。若し衆生有りて是經王を供養せんと欲する爲の故に、宅宇を莊嚴し、乃至一傘蓋を張り、一繒幡を懸くれば、是因縁に由りて六天の上に、念の如く生を受け、七寶の妙宮意に隨ひて受用し、各各自然に七千の天女有りて共に相娛樂して、日夜常に不可思議殊勝の樂を受けん。』是語を作し已りたまふや、爾時に堅牢地神、佛に白して言さく『世尊、是因縁を以て、若し四衆にして、法座に昇り是法を說くものある時、我れ當に晝夜是人を擁護し、自ら其身を隱し、座所に在りて其足を頂戴すべし。世尊、是の如きの經典は、彼衆生の已に百千佛所に於て善根を種ゑたるものの爲に、贍部洲に於て流布して滅せず。是諸の衆生にして斯經を聽く者は、未來世無量百千俱胝那庾多劫、天上人中に於て常に勝樂を受け、諸佛に遇ふことを得て、速に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、三塗生死の苦を歷ざらん。』

(二)爾時、堅牢地神、佛に白して言さく『世尊、我れ心呪有りて能く人天を利し一切を安樂にす。若し男子女人及び諸の四衆有りて、親しく我が眞身を見ることを得んと欲すれば應當に至心に此陀羅尼を持すべし。其所願に隨ひて皆悉く心を遂ぐべし。謂ゆる資財、珍寶、伏藏なり。及び神通、長年、妙樂、並に衆病を療じ、怨敵を降伏し、諸の異論を制

【草座】普通吉祥神茅艸の座を指す。
【制底】チヤイトヤ(Caitya)寶塔なり。
【白月】大陰暦の前十五日、この八日は毎月必しも鬼宿と値はず、その値ひたる日を最上とす。

せんことを求むれば、當に淨室に於て道場を安置し、身を洗浴し已りて鮮潔なる衣を著け、草座の上に踞すべし。舍利有る尊像の前に、或は舍利有る制底の所に於て香を燒き、華を散じ、飲食を供養し、白月の八日布灑星と合ふときに於て、卽ち此請召の咒を誦すべし。

怛姪佗只里只里、主嚕主嚕、句嚕句嚕、拘柱拘柱、覩柱覩柱、縛訶縛訶、伏捨、伏捨、莎訶。

世尊、此神咒、若し四衆ありて一百八遍を誦し、我を請召せば、我れ是人の爲に、卽ち來りて請に赴かん。又復世尊、若し衆生有りて、我が身を現ずるを見て、共に語るを得んと欲すれば、亦復前の如く、法式を安置し、此神咒を誦すべし。

怛姪他、頞折泥、頡力刹泥、室哩尸達哩、訶、訶、咽、咽、區嚕、伐囇、莎訶。

世尊、若し人此咒を持する時、一百八遍を誦し、幷に前の咒を誦すれば、我れ必ず身を現じ、其所願に隨ひて悉く成就することを得て、終に虛然ならざるべし。若し此咒を誦せんと欲する時は、先づ護身咒を誦すべし。曰はく、

怛姪他儞室里末捺羯撥、捺撥矩撥、勃地、勃地囇、婢撥婢撥、矩句撥、佉婆只哩、莎訶。

世尊、此咒を誦する時、五色の線を取り、咒を誦すること二十一遍、二十一結を作して繫けて左臂の肘の後に在き、卽便ち護身せば懼るる所有ること無けん。若し至心有りて此咒を誦すれば所求必ず遂げん、我妄語せず、我佛法僧の寶を以て而して要契と爲し、是實

なることを證知す。爾時、世尊、地神に告げて曰はく『善い哉善い哉、汝能く是實語神呪を以て、此經王及び說法する者を護る、是因緣を以て汝をして無量の福報を獲得せしめん。』

僧愼爾耶藥叉大將品第十九

(一)爾時、僧愼爾耶藥叉大將幷に、二十八部藥叉諸神と大衆の中に於て、皆座より起ちて偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌し、佛に向ひ白して言さく『世尊、此金光明最勝經王、若は現在世及び未來世に、所在宣揚流布の處、若は城邑、聚落、山、澤、空林、或は王の宮殿、或は僧の住處に於て、世尊、我れ僧愼爾耶藥叉大將、幷に二十八部藥叉諸神と倶に共所に詣りて、各自ら形を隱し、處に隨ひて、彼說法師を擁護し、衰惱を離れて常に安樂を受けしめん。及び聽法の者、若は男、若は女、童男童女にして、此經中に於て、乃至一四句頌を受持し、或は一句を持し、或は此經王の首題名號、及び此經中の一如來の名、一菩薩の名を發心稱念して、恭敬し供養する者は、我れ當に救護攝受して、災橫無く苦を離れ樂を得しむべし。世尊、何が故に我を正了知と名くる。此因緣を是れ佛親しく證したまへ。我れ諸法を知り、我れ一切の法を曉らめ、有らゆる一切法に隨ひ、有らゆる一切の法の如く、諸法の種類、體、性を差別せり。世尊、是の如きの諸法、我れ能く了知す。我に難思の智光有り、我に難思の智矩有り、我に難思の智行有り、我に難思の智聚有り、

【僧愼爾耶藥叉大將品】僧愼爾耶藥叉大將廿八部藥叉と共に本經奉持者を擁護救攝し、一切の災難なからしめ福智を授くるを明す。

【一】正了知大將智慧を以て奉經者を利益するを明す。

【僧愼爾耶藥叉大將】普通サニヤヤ(Sañjaya)といふも、今經はサンチニヤヤ(Sañciñjeya)とし、正了知と譯せり。

【有らゆる一切法に隨ひ】福所有一切の種類に隨ふにて、所有性を盡すなり、一切法の如くとは諸一切所有の道理の如くとなり、前は諸法體の事、後は諸法

の道理、前は俗諦法、後は眞諦法なり。又知と曉とを分ちて前者は後得智の證知、後者は根本智の曉達とす。

【諸法の種類】所知性を明す。若し俗諦法によらば多種の體性差別あり、眞諦は無體と雖も體性差別せるは彼の眞性なり、その能依の說所依の義に隨へば又差別あるなり。

【智光】後得智、大乘の教理行果を照了して下の測るところに非る故難思といふ。

【智炬】根本智、無明の闇を破す。

【智行】差別行を了するなり。

【智樂】自體樂を了するなり。

【正知し等】順に前の智光等に配せ

【われ能く彼の說法師等】我に四種智あるを以ての故に能く法師を益す。

我れ難思の智境に於て能く通達す。世尊、我が如き一切の法に於て、正知し、正曉し、正覺し、能く正觀察す。世尊、是因緣を以て、我れ藥叉大將を正了知と名く。是義を以ての故に、我れ能く彼說法の師をして、言詞辯了、具足莊嚴せしめ、亦精氣をして毛孔より入らしめ、身力充足し、威神勇健にして、難思の智光皆成就することを得て、正憶念を得、退屈有ること無く、彼身を增益し、衰滅無からしめ、諸根安樂にして常に歡喜を生ぜしむ。是因緣を以て彼有情、已に百千佛の所に於て諸の善根を植ゑ、福業を修したるものの爲に、贍部洲に於て廣宣流布し、速に隱沒せず。彼諸の有情、是經を聞き已りて、不可思議大智の光明及び無量福智の聚を得、未來世に於て當に無量の俱胝那庾多劫不可思量の人天の勝樂を受け、常に諸佛と共に相値遇し、速に無上正等菩提を證すべく、閻羅の界三途の極苦を復經過せじ。」

(三)その時、正了知藥叉大將、佛に白して言さく「世尊、我に陀羅尼あり、今佛前に對して親しく自ら陳說す。諸の有情を憐愍し、饒益せんと欲するが爲の故に」と。即ち呪を說きて曰はく、

南謨佛陀耶、南謨達摩耶、南謨僧伽耶、南謨跋囉蚶摩耶、南謨因達囉耶、南謨折咄喃、莫喝囉闍喃、怛姪他、呬哩、呬哩、弭哩、弭哩、窶哩、莫訶窶哩、健陀里、莫訶健陀里、達摩弭雉、莫訶達羅弭雉、單荼曲勸第、訶、訶、訶、訶、訶、呬、呬、呬、呬、呬、呼、呼、呼、呼、呼漢魯雲謎、瞿曇謎、者、者、者、者、只、只、只、只、主、主、主、主、旃荼揷鉢

八益あり、辯才、益力、威光、增智、念力、不退、增壽、安樂これ、文に就て知るべし。
【彼の諸の有情等】聞法の得益を擧ぐ、前四智、福智、生人天、値諸佛、證菩提、離惡道の六益
【二】呪力を以て加被するを明す。
【若し復人ありて等】以下誦呪の益並にその行法得益を明す。

攞、尸揭囉、尸揭囉、嗢底瑟咤呬、薄伽梵、僧愼爾耶、莎訶。

『若し復人有りて、此明呪に於て、能く受持すれば、我れ當に資生の樂具、飲食衣服、華果珍異を給與すべし。或は男女、童男童女、金銀珍寶、諸の瓔珞の具を求むれば、我れ皆供給して願求する所に隨ひて、闕乏無からしめん。此明呪大威力有り、若し呪を誦する時には、我れ當に速に其所に至りて障礙無く、意に隨つて成就せしむべし。若し此呪を持せん時には、其法を知るべし。先づ一鋪僧愼爾耶藥叉の形像を畫すること高さ四五尺、手に鉾鑹を執る。此像前に四方壇を作り、四滿瓶の蜜水、或は沙糖水、塗香、末香、燒香、及び諸の華鬘を安じ、又壇前に地火爐を作り、中に炭火を安じ、蘇摩芥子を以て爐中に燒き、口に前の呪を誦すること一百八遍、一遍して一燒せよ。乃至我れ藥叉大將自ら來り、身を現じて呪人に問うて曰はん、「爾何の須むる所ぞ」と。意に求むる所の者即ち事を以て答へよ。我れ即ち言に隨ひ、求むる所の事皆滿足せしめん。或は金銀及び諸の伏藏を須め、或は神仙となり、空に乘じて去らんと欲し、或は天眼通を求め、或は他心を知る事、一切の有情に於て意に隨ひて自在に、煩惱を斷じ速に解脫を得、皆成就することを得しめん。』爾時、世尊、正了知藥叉大將に告げて曰はく、『善い哉善い哉、汝能く是の如く一切の衆生を利益し、此神呪を說き正法を擁護す、福利無邊なり。』

【王法正論品】佛堅牢地神の請に應じて王法正論を述ぶるを明す。
【一】堅牢地神佛に請うて王法正論をきかんことを明す。
【二】佛地神の請に應じて王正法を論ず。初に力尊幢の緣起を述ぶ。
【力尊幢】梵にバレーンドラケーツ(Balendraketu)といふ。
【妙幢】ルチラケーツ(Rucíraketu)なり。
【灌頂の位を受く】王儲の位をいふ。
【天主教法】デーヴェーンドラサマヤ(Devendrasamaya)の義譯。
【智力尊幢】ジニヤーバレーンドラケーツ(Jñābalendraketu)
【爾時力尊幢以下】頌を說いて往昔の正法を述ぶ。

王法正論品第二十

(一)爾時、此大地神女、名けて堅牢と曰ふ。大衆の中に於て、座より起ちて佛足を頂禮し、合掌恭敬して、佛に白して言さく、「世尊、諸國の中に於て人王たる者、若し正法無くば、國を治め衆生を安養し、及び自身長く勝位に居ること能はじ。惟願くば世尊、慈悲哀愍して、當に我が爲に正法正論、治國の要を說き、諸の人王をして法を聞くことを得、已に如說に修行して正しく世を化し、能く勝位をして永く安寧を保たしめ、國内の人民をして咸く利益を蒙らしめたまふべし。」

(二)爾時世尊、大衆の中に於て堅牢地神に告げて曰はく、「汝當に諦に聽くべし。過去に王あり力尊幢と名く、其王子あり、名けて妙幢と曰ふ、灌頂の位を受けて未だ久しからざるの頃、爾時父王、妙幢に告げて言はく、『王法正論あり、天主教法と名く、我れ昔時、灌頂の位を受けて、而して國主と爲る、我が父王を智力尊幢と名く、我が爲に是王法正論を說く。我れ此論に依て二萬歲に於て善く國土を治めぬ。我れ曾て憶せず、一念心を起して非法を行じぬ。汝今日に於て亦是の如きの非法を以て、國を治むること勿るべし。云何が名けて王法正論と爲す。汝今善く聽け。當に汝の爲に說くべし。』爾時、力尊幢王、即ち其子の爲に、妙伽他を以て正論を說いて曰はく、

【我れ王法論を說きて等】以下七十三頌中先づ天主と人主との問答を以て論を起す。

【往昔諸の天衆】已下正しく王正論を說く。

【金剛山】ヴジラプラーカラギリ(Vajraprakaragiri)世界の外側にある大山。

【護世間】ローカパラ(Lokapara)卽四天王なり。

我れ王法論を說きて、諸の有情を利安す
世間の疑を斷ぜんが爲に、衆の過失を滅除せん
一切の諸天王、及以人中の王
當に歡喜心を生じ、合掌して我が說を聽くべし
往昔諸の天衆、集りて金剛山に在り
四王座より起ちて、大梵に請問す
梵主、最勝尊、天中の大自在
願くば我等を哀愍して、爲に諸の疑惑を斷ぜよ
云何が人世に處して、名けて天と爲すことを得る
復何の因緣を以て、號名して天子と曰ふや
云何が人間に生れて、獨人主と爲ることを得る
云何が天上に在りて、復天王と作ることを得るやと
是の如く護世間、彼梵王に問ひ已る
爾時、梵天主卽便ち彼の爲に說く
護世、汝當に知るべし、有情を利せんが爲の故に
我に治國の法を問ふ。我れ說かん。善く聽くべし
先の善業の力に由りて、天に生じて王と作ることを得

【生れて人世等】人王の尊貴は福力の致す所、人世にあるも尊くして天と同じ。

【三十三天…人王を助け等】意は人神の助力により王をして他を化して捨惡修善せしめ、共に自他を護らしむとなり。

【羅刹梅茶羅】梅茶羅とは惡に執守する者の意にして、即ち羅刹中の執惡の者なり、この意惡すら尚護る況んや餘の善者をやの義

【國人惡業を造るも已下】五十二頌半は國政の得失により禍福自ら異なるを論ずる中、初三十五頌は正法に違へる故に鞫臻るを説く。

若し人中に在りては、統領して人主と爲る
諸天共に加護し、然して後ち母胎に入り
既に母胎の中に至れば、諸天復守護す
生れて人世に在りと雖も、尊勝の故に天と名く
諸天護持するに由りて、亦天子と名くることを得
三十三天の主、力を分ちて人王を助け
及び一切の諸天も亦自在力を資く
諸の非法惡業を滅除して、生ぜざらしめ
有情を教へて善を修せしめ、天上に生ずることを得しむ
人及び蘇羅衆、並に健闥婆等
羅刹梅荼羅、悉く皆半力を資く
父母半力を資けて、惡を捨て善を修せしめ
諸天共に護持して其諸の善報を示す
若し諸の惡業を造らば、現世の中に於て
諸天をして護持せざらしめ、其諸の惡報を示す
國人惡業を造るも、王捨て禁制せざれば
斯れ正理に順ずるに非ず、治擯して當に法の如くすべし

若し惡を見て遮せずんば、非法便ち滋長して
遂に王の國内をして奸詐日に增して多からしむ
王、國中の人の造惡を見て、遮止せざれば
三十三天の衆、咸く忿怒の心を生ず
此に因て國政を損じ、諂僞世間に行はれ
他の怨敵に侵され、其國土を破壞す
居家及び資具、積財皆散失し
種種の諂誑生じて、更に互に相侵奪す
正法に由りて王たることを得。而も其法を行はずんば
國人の皆破散すること、象の蓮池を踏むが如し
惡風起りて恆無く、暴雨非時に下り
妖星變怪多く、日月蝕して光無し
五穀と衆の華果と苗實皆成ぜず
國土飢饉に遭ふ、王の正法を捨つるに由る
若し王正法を捨てて、惡法を以て人を化すれば
諸天本宮に處し、見已りて憂惱を生ず
彼諸の天王衆、共に是の如きの言を作す

此王非法を作し、惡黨相親附し
王位久安ならずと。諸天皆忿恨す
彼忿を懷くに由るが故に、其國當に敗亡すべし
非法を以て人を教へ、國內に流行せば
鬪諍して奸僞多く、疾疫衆の苦を生ず
天主護念せず、餘天咸く捨棄し
國土當に滅亡すべし。王身苦厄を受け
父母及び妻子、兄弟並に姉妹
倶に愛の別離に遭ひ、乃至身は亡歿す
變怪ありて流星墮ち、二日倶時に出で
他方の怨賊來り、國人喪亂に遭はん
國に重ずる所の大臣、枉橫にして身死し
愛する所の象馬等亦復皆散失せん
處處に兵戈あり、人多く非法にして死す
惡鬼來りて國に入り、疾疫遍く流行す
國中の最たる大臣及び諸の輔相
其心諂佞を懷き、並に悉く非法を行ず

【三種の過】正法隱沒、有情無光、地肥沈滅の三、次の三種の禍は非時霜雹、稼穀の損減、衆生疾病の三。

【諸大】　地水火風の四大。

非法を行ずるを見ては愛敬を生じ
善法を行ずる人に於て苦楚して治罰す
惡人を愛敬し、善人を治罰するに由るが故に
星宿及び風雨、皆時を以て行はれず
三種の過生ずる有り。正法當に隱沒すべし
衆生光色無く、地肥皆下沈す
惡を敬ひ善を輕んずるに由り、復三種の過有り
非時に霜雹を降らし、飢疫の苦流行し
穀稼諸の果實、滋味皆損減す
其國土の中に於て、衆生疾病多し
國中の諸の樹木、先に甘美の果を生じたるもの
斯に由りて皆損減し、苦澁にして滋味無し
先にありし妙園林、可愛の遊戯處
忽然として皆枯悴し、見る者憂惱を生ず
稻麥諸の果實美味、漸く消亡して
食する時心喜ばず、何ぞ能く諸大を長ぜん
衆生光色滅じて、勢力盡く衰微し

【三種の世間】所謂三界、或は人畜百穀をいふ。

食啗復多しと雖も、飽足せしむること能はず
其國界の中に於て、有らゆる衆生の類
少力にして勇勢無く、所作堪能ならず
國人疾患多く、衆苦其身を逼め
鬼魅遍く流行し、處に隨ひて羅刹を生ず
若し王非法を作して、惡人に親近し
三種の世間をして、斯に因りて衰損を受けしむ
是の如きの無邊の過、國中に出在す
皆惡人を見て、棄捨して治擯せざるに由る
諸天の加護に由り、國王と作ることを得て
而も正法を以て、國界を守護せず
若し人善行を修すれば、當に天上に生ずることを得べし
若し惡業を造れば、死して必ず三塗に墮す
若し王、國人を見て、其過失を造るを縱さば
三十三天の衆皆熱惱の心を生ず
諸天の教及以、父母の言に順ぜざれば
此は是れ非法の人、王に非ず孝子に非ず

【若し自國の中に等】已下十七頌半正法を行ずるに依て福祿を說く。

若し自國の中に、非法を行ずる者を見ば
法の如く當に治罰すべし、捨棄を生ずべからず
是故に諸の天衆、皆此王を護持す
諸の惡法を滅して、能く善根を修するを以ての故に
王は此世の中に於て、必ず現報を招く
善惡の業に於て、行捨を衆生に勸むるに由る
善惡の報を示さんが爲の故に、人王と作ることを得
諸天共に護持して一切咸く隨喜す
自利利他に由り、國を治むるに正法を以てし
諂佞有る者を見ては、當に法の如く治すべし
假使ひ王位を失ひ、及以命緣を害すとも
終に惡法を行ぜざれ、惡を見て捨棄せよ
害中の極重なる者、國位を失ふに過ぎたるは無し
皆諂佞の人に因る、此爲に當に治罰すべし
若し諂誑の人を友とせば、當に國位を失ふべし
斯に由りて王政を損ずること、象の華園に入るが如し
天主皆瞋恨し、阿蘇羅も亦然り

彼れ人王と爲りて、法を以て國を治めざるを以てなり
是故に如法に惡人を治罰すべし
善を以て衆生を化し、非法に順ぜざれ
寧ろ身命を捨つるとも、非法の友に隨はず
親及び非親に於て、平等に一切を觀ぜよ
若し正法の王たらば、國內に偏黨無し
法王名稱有りて、普く三界の中に聞ゆ
三十三天の衆、歡喜して是言を作す
贍部洲法王、彼は卽ち是れ我が子なり
善を以て衆生を化し、正法もて國を治め
正法を勸行し、當に我が宮に生ぜしむべしと
天及び諸天子、又以蘇羅衆
王の正法の化に因りて常に心に歡喜を得
天衆皆歡喜して、共に人王を護り
衆星位に依りて行き、日月乖度無し
和風常に節に應じ、甘雨時に順ひて行はれ
苗實皆善を成じ、人飢饉の者無し

【是故に汝人王等】
巳下結勸の頌。

一切の諸の天衆、自宮に充滿す
是故に汝人王、身を忘れて正法を弘め
法寶を尊重すべし、斯に由りて衆安樂ならん
常に當に正法に親み、功德自ら莊嚴すべし
眷屬常に歡喜し、能く諸の惡を遠離す
法を以て衆生を化し、恆に安隱を得しむ
彼の一切の人をして、十善を修行せしめ
率土常に豐樂にして、國土安寧を得ん
王、法を以て人を化し、善く惡行を調へば
當に好名稱を得、諸の衆生を安樂にすべし

爾時に大地一切の人王、及び諸の大衆、佛の此古昔人王の治國の要法を說きたまふを聞きて、未曾有なるを得、皆大に歡喜信受し奉行せり。

金光明最勝王經　卷第九

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

善生王品第二十一

爾時、世尊、諸の大衆の爲に王法正論を說き已りて、復た大衆に告たまはく、汝等應に聽くべし、我れ今汝が爲に、其往昔の奉法の因緣を說かん。卽ち是時に於て、伽陀を說きて曰はく、

我れ昔曾て轉輪王たり、此大地並に大海
四洲の珍寶、皆充滿するを捨てて、持以て諸の如來を供養す
我れ往昔無量劫に於て、淸淨の眞法身を求めんが爲に
愛する所の物皆悉く捨て、乃至身命も心に悋む無かりき
又過去難思劫に於て正遍知有り、寶髻と名づく
彼如來涅槃の後に於て王有り、世に出でて善生と名く
轉輪王と爲り、四洲を化す、大海際を盡して咸く歸伏せり
城有り名けて妙音聲と曰ふ、時に彼輪王此に住す

【善生品】王正法論の例證として佛昔善生王として惠施等もて民を治め、本經を奉持するを明す。【われ昔等】已下三十二頌善生王としての修行を述ぶる中初二は佛を供養して求法せしを說く、【又過去難思劫等】已下二十三頌佛過去に此の經を修學せる本生を述ぶ。【寶髻】ラトナシキ(Ratnasikhi)【善生】スサムバワ(Susambhava)【妙音聲】ジネーンドラゴーシャー(Jinendraghosa)

【寶積】ラトノーツチヤヤ（Ratnoccaya）

夜夢に佛の福智を説きたまふを聞き、法師の寶積と名づくる有るを見るに、
處座端嚴にして日輪の如く、金光微妙の典を演説す
爾時に彼王、夢より覺めて、大歡喜を生じ、遍身に充つ
天曉に至り已りて、王宮を出でて苾芻僧伽の處に往詣し
聖衆を恭敬し供養し已りて、即便ち彼諸の大衆に問はく
頗し法師の寶積と名づけ、功德成就して衆生を敎化する有りやと
爾時に寶積大法師、一室の中に在りて而も住止し
正念にして斯微妙の典を誦し、端然として動かず身心樂む
時に苾芻有り、王を引導し、彼寶積所居の處に至り
室中に在りて、端身にして坐するを見るに、光明の妙相其身に遍し
王に白さく、此は即ち是れ寶積なり、能く甚深の佛の行處を持す
謂ゆる微妙金光明、諸經中の王、最第一なり
時に王即便ち寶積を禮し、恭敬し合掌し、而して請を致すらく
唯願くば滿月の面端嚴なるもの、爲に金光微妙の法を説きたまへと
寶積法師王の請を受け、許して爲に此金光明を説く
三千世界の中に周遍せる、諸天の大衆咸く歡喜せり
王は廣博淸淨の處に於て、奇妙の珍寶もて、而も嚴飾し

上妙の香水もて遊塵に灑ぎ、種種の雜華皆散布す
即ち勝處に於て高座を敷き、繒と幡蓋とを懸けて以て莊嚴し
種種の抹香及び塗香、香氣芬馥として皆周遍す
天、龍、修羅、緊那羅、莫呼洛伽及び藥叉諸天
悉く曼陀華を雨らし、咸く來りて彼高座を供養す
復千萬億の諸天有り、正法を聞かんことを樂うて、倶に來り集る
法師初めて本座より起てば、皆悉く供養するに天華を以てす
是時寶積大法師、淨く洗浴し已りて鮮服を著く
彼大衆の法座の所に詣り、合掌し虔心にして禮敬す
天主天衆及び天女、悉く皆共に、曼陀華を散らし
百千の天樂思議し難く、住して空中に在り、妙響を出す
爾時に寶積大法師、即ち高座に昇り、加趺して
彼十方の諸の刹土、百千萬億の大慈尊を念じ
遍く一切の苦の衆生に及び、皆平等に慈悲の念を起し
彼請主善生の爲の故に、微妙の金光明を演說す
王既に是の如きの法を聞くことを得て、合掌し一心に唱へて隨喜し
法の希有なるを聞き涙交流れ、身心の大喜皆充遍す

【應に知るべし等】已下二頌衆疑を除くがために古の善生と今の佛とを結會するなり。

【我れ曾て等】已下五頌修學の益を明す中初二は出世の果報、次二は出世間果報、次一は經力に依りて菩提を獲るを明す。

時に國主善生王、此經を供養せんと欲するが爲の故に
手に如意末尼寶を持し、願を發すらく、咸く諸の衆生の爲にせん
今斯贍部洲に於て普く七寶の瓔珞具を雨らすべし
有らゆる私財を匱乏する者は、皆心に隨ひて安樂を受くることを得んと
即便ち遍く七寶を雨らし、悉く皆四洲の中に充足し
瓔珞嚴身須ふる所に隨ひ、衣服飮食皆乏しきこと無し
爾時國主善生王、此四洲に珍寶の雨るを見て
咸く持して寶髻佛と、有らゆる遺敎と苾芻僧とを供養したてまつる
應に知るべし、過去の善生王は、即ち我れ釋迦牟尼是なり
是れ昔時に於て、大地及び諸の珍寶の四洲に滿てるを捨てたり
昔時の寶積大法師、彼善生の爲に妙法を說き
彼經王を開演するに因るが故に、東方にて現に不動佛と成れり
我れ曾て此經王を聽けるを以て、合掌して一言隨喜を稱し
及び七寶を施す、諸の功德もて此最勝の金剛身を獲たり
金光の百福相莊嚴して、有らゆる見る者皆歡喜し
一切の有情愛せざる無く、俱胝の天衆亦同く然り
過去曾て九十九俱胝億劫を經て輪王と作り

【諸天藥叉護持品】普く天界の諸神夜叉鬼神の名をあげ、此等が本經奉持者を擁護するを明す。

【甚深の行處】即ち二空の如なり。

【若し諸佛に等】已下七十九頌ある中初二十三頌は法說二行を聽くを說く。中初十二は聽法行を明す。

亦小國に於て人王と爲り、復無量百千劫を經たり
無量劫に於て帝釋たり、亦復曾て大梵王と爲りて
十力の大慈尊を供養す、彼數量窮盡し難し
我れ昔經を聞きて隨喜せる善、有らゆる福聚の量知り難し
斯福に由るが故に菩提を證し、法身眞妙の智を獲得す

爾時、大衆是說を聞き已りて、未曾有なりと歎じ、皆金光明經を奉持して、流通して絕えざらんことを願へり。

諸天藥叉護持品第二十二

爾時世尊、大吉祥天女に告げて曰はく、「若し淨信の善男子善女人有りて、過去、未來、現在の諸佛に於て、不可思議廣大微妙の供養の具を以て、而も奉獻せんと欲し、及び三世の諸佛の甚深の行處を解了せんと欲せば、是人當に決定して至心に是經王所在の處に隨ひて、城邑聚落、或は山澤の中、廣く衆生の爲に敷演流布すべし。其法を聽く者は、亂想を除き、耳を攝して心を用ふべし。」

時に世尊、即ち彼天及び諸の大衆の爲に、伽他を說いて曰はく、

若し諸佛に不思議の供養を施し、

【法性の制底】法華經のために寶塔を起すに舍利を須ひざるに已に全身ありしが如く、此の經にも能詮顯はるるの故に即ち法身を見る。

復諸の如來甚深の境界を了ぜんと欲する者
若し此最勝金光明を演說するを見ば
親しく彼方に詣り、其所住の處に至るべし
此經は難思議にして、能く諸の功德を生じ
無邊大苦海に諸の有情を解脫す
我れ此經王を觀ずるに、初、中、後皆善なり
甚深にして測るべからず、譬喩するに能く比する無し
假使恆河沙、大地塵、海水
虛空、諸山の石も、能く少分を喩ふる無し
深法界に入らんと欲せば、先づ是經
法性の制底を聽くべし。甚深にして善く安住せり
斯制底の內に於て、我が牟尼尊
悅意の妙音聲をもて、斯經典を演說するを見ん
此に由りて、俱胝劫の數量思議し難く
人天の中に生在して常に勝妙の樂を受けん
若し是經を聽く者は、是の如きの心を作すべし
我れ不思議無邊の功德蘊を得んと

【應に高座を等】下十一頌演說行を明す。

【妙吉祥】文殊菩薩、慈氏は彌勒菩薩なり。

假使ひ大火聚、百踰繕那に滿つるとも
當に此經王を聽き、直に過ぎて苦を辭する無からん
既に彼住處に至りて、是の如きの經を聞くことを得ば
能く罪業を滅し、及び諸の惡夢
惡星、諸の變怪、蠱道、邪魅等を除かん
是經を聞くことを得る時、諸惡皆捨離す
應に高座を嚴勝にすべし、淨妙なること蓮華の若くし
法師其上に處して、猶し大龍の坐するが如くなれ
斯に於て安坐し已りて、此甚深の經を說き
書寫し及び誦持し、并に爲に其義を解せよ
法師此座を捨てて、餘方の所に往詣せば
此高座の中に於て、神通一相に非ず
或は法師の像を見るに、猶し高座の上に在るがごとし
或時は世尊、及以諸の菩薩を見る
或は普賢の像と作り、或は妙吉祥の如く
或は慈氏尊の身、高座に處するを見
或は希奇の相及び諸の天像を見る

暫く容儀を覩ることを得て、忽然として還つて現ぜず
諸の吉祥を成就し、所作皆意に隨ひ
功德悉く圓滿す。世尊是の如く說きたまふ
最勝の名稱有りて、能く諸の煩惱を滅し
他國の賊皆除く、戰ふ時に常に勝を得ん
惡夢悉く皆無く、及び諸の毒害を消し
作す所の三業の罪を、經力能く除滅す
此瞻部洲に於て名稱咸く充滿し
有らゆる諸の怨結、悉く皆相捨離す
設ひ怨敵の至る有りとも、名を聞きて便ち退散せん
兵戈を動ずることを假らずして、兩陣歡喜を生ぜん
梵王帝釋主、護世四天王
及び金剛藥叉、正了知大將
無熱池龍王、及以娑揭羅
緊那羅樂神、蘇羅金翅王
大辯才天女、幷に大吉祥天
斯等の上首の天、各諸の天衆を領し

【諸吉祥成就等】已下五頌は演法の利益を擧ぐ、得吉祥、所作成、功德滿、有名稱、滅煩惱、除怨敵、無惡夢、消毒害、滅諸罪、無怨讎の十是なり。

【梵王帝釋主等】已下四十一頌天神の擁護を得るを明す。

【無熱地】アナヴタプタ（Anavatapta）

【娑揭羅】サーガラ（Sāgara）

常に諸佛と、法寶との不思議なるを供養し
恆に歡喜心を生じ、經に於て恭敬を起す
斯等の諸の天衆、皆悉く共に思惟して
遍く修福者を觀じ、共に是の如きの說を作す
此有情を觀ずべし、咸く是れ大福德なり
善根精進の力、當に來りて我が天に生じ
爲に甚深の經を聽くべし、敬心にて來りて此に至り
法制底を供養す、正法を尊重するが故に
衆生を憐愍して、而して大饒益を作す
此深經典に於て能く法寶の器と爲る
此法門に入る者は、能く法性に入る
此金光明に於て、至心に聽受すべし
是人は曾て無量の百千佛を供養す
彼諸の善根に由りて、此經典を聞くことを得たり
是の如き諸の天主、天女大辯才
幷に彼の吉祥天、及以四王衆
無數の藥叉衆、勇猛にして神通有り

【那羅延】ナーラーヤナ(Nārāyaṇa)
【自在】マヘーシユヴラ(Mhesvara)
【正了知】サンジヤヤ(Sañjaya)
【金剛藥叉王】ヷジラパーニ(Vajrapāṇi)
【寶王藥叉王】マニバドラ(Manibhadara)
【滿賢王】プールナバドラ(Pūrṇabhadara)
【曠野】アータヷカ(Atavaka)
【金毗羅】クムビーラ(Kumbira)
【賓度羅】ピンガラ(Pingara)孔雀。
【黃色】カヒラ(Kapila)

各共四方に於て、常に來りて相擁護す
日、月、天帝釋、風、水、火の諸神
吠率怒、大肩、閻羅、辯才等
一切の諸の護世、勇猛にして威神を具し
持經の者を擁護して晝夜常に離れず
大力の藥叉王那羅延、自在
正了知を首と爲し、二十八藥叉
餘の藥叉百千、神通大力有り
恆に恐怖の處に於て、常に來りて此人を護る
金剛藥叉王、幷に五百の眷屬
諸の大菩薩衆、常に來りて此人を護る
寶王藥叉王、及以滿賢王
曠野、金毗羅、賓度羅、黃色
此等の藥叉王、各五百の眷屬
此經を聽く者を見て、皆來りて共に擁護す
彩軍乾闥婆、葦王、常戰勝
珠頸及び靑頸、幷に勃里沙王

大最勝大黑、蘇跋拏雞舍
半之迦、羊足、及以大婆伽
小渠幷に護法、及以獼猴王
針毛及び日友、寶髮、皆來りて護る
大渠、諸拘羅、栴檀、欲中勝
舍羅及び雪山、及以娑多山
皆大神通有りて、雄猛にして大力を具し
此經を持する者を見て、皆來りて相擁護す
阿那婆答多、及以娑揭羅
目眞藍羅藥、難陀小難陀
百千龍の中に於て、神通威德を具し
共に持經の人を護り、晝夜常に離れず
婆稚羅睺羅、毗摩質多羅
母旨訶跋羅、大肩及び歡喜
及び餘の蘇羅王、幷に無數の天衆
大力勇健有り、皆來りて是人を護る
訶利底母神、五百の藥叉衆

【彩軍乾闥婆】チトラセーナ(Citrasena)著採衣を以て軍衆をなす。已下乾闥婆神。
【華王】ジナラージャ(Jinarāja)諸草神王。
【常戰勝】ジナリシャバ(Jinarṣabha)
【珠頸】マニカーンタ(Maṇikāṇṭa)
【青頸】ニーラカンタ(Nīlakāṇṭa)
【勃里沙王】ヴルサーアバチ(Varṣādhipati)牛神王。
【大最勝】マハーグラサ(Mahāgrasa)
【大黑】マハーカーラ(Mahākāla)
【蘇跋拏雞舍】スヴルナケーシン(Suvarnakeśin)金髮鬼神。
【半之迦】パーンチカ(Pañcika)五神。
【羊足】チヤガラパーダ(Chagarapada)
【大婆伽】マハバ

彼人の睡と覺とに於て、常に來りて相擁護す
栴茶、旃茶利藥叉旃稚女
昆帝、拘吒齒、吸衆生精氣
是の如きの諸神等、大力神通有りて
常に持經の者を護り、晝夜恆に離れず
上首辯才天、無量の諸の天女
吉祥天を首とし、并に餘の諸の眷屬
此大地の神女、果實園林の神
樹神、江河の神、制底の諸神等
是の如き諸の大神、心に大歡喜を生じ
彼皆來りて、此經を讀誦する人を擁護す
經を持する有る者を見ては、壽命、色、力
威光、及び福德を增し、妙相を以て莊嚴す
星宿災變を現じ、困厄此人に當り
夢に惡徴祥を見るも、皆悉く除滅せしむ
此大地神女は、堅固にして威勢有り
此經力に由るが故に、法味常に充足す

ーガ(Mahābhāga)大威德といふ。
【小渠】プラナーリ(Pranāli)
【護法】ダルマパーラ(Dharmapāla)
【獼猴王】マルカダ(Markada)
【針毛】シュチローマ(ucilomā)
【日友】スールヤミトラ(Sūryamitra)
【寶髮】ラトナケーシャ(Ratnakeśa)
【大渠】マハープラナーリ(Mahāpranāli)
【諸拘羅】ナクラ(Nakula)
【栴檀】チャンダナ(Candana)
【欲中勝】カーマシュレーシュタ(Kāmaśresta)
【舍羅】シャラ(Sara)
【雪山】ヘーマヴァンタ(Hemavanta)
【娑多山】シャータギリ(Sātagiri)
【阿那婆答多】ア

ナヅタプタ（Anavatapta）已下龍王を擧ぐ。【娑揭羅】サーガラ（Sāgara）【目眞】ムチリンダ（Mucilinda）【瞖羅葉】エーラパタ（Erapata）【難陀】ナンダ（Nanda）【小難陀】ウパナンダ（Upananda）【婆稚】ヴリ（Vali）已下阿修羅を擧ぐ。【羅睺羅】ラーフ（Rahu）【毗摩質多羅】ヹーマチトラ（Vemacitra）【母旨菩跛羅】サンヴァラ（Saṃvara）好食といふ。【大肩】カラスカンダ（Kharaskanda）【歡喜】プラフラーダ（Prahlada）【訶利底母】ハーリテー（Hāritī）已下羅刹女を擧ぐ。【栴茶】チャンダ

地肥若し流下し、百踰繕那を過ぎなば
地神味をして上らしめ、大地を滋潤す
此地の厚きこと、六十八億踰繕那
乃至金剛際にして、地味皆上らしむ
此經王を聽くに由り、大功德蘊を獲
能く諸の天衆をして、悉く共利益を蒙り
復諸の天衆をして、威力光明有り
歡喜して常に安樂ならしめ、衰相を捨離す
此南洲の內に於て、林、果、苗稼の神
此經の威力に由りて、心常に歡喜を得
苗實皆成就して、處處に妙華有り
果實並に滋繁して、大地に充滿す
有らゆる諸の果樹、及以衆の園林
悉く皆妙華を生じ、香氣常に芬馥たり
衆草諸の樹木、咸く微妙の華を出し
及び甘美の果を生じ、隨處に皆充遍す
此贍部洲に於て、無量の諸の龍女

ー(Caṇḍā)
【旃茶利】チャンダーリカ (Caṇḍālika)
【栴稚女】チャンディカー (Caṇḍika)
【毘帝】ダンティー(Danti)
【拘吒啇】クタダンティー(Kuṭadanti)
【吸衆生精氣】サルヴァサットヴァージャハリニー(Sarvasattvojahārinī)
【此の南洲の内に於て等】已下十四頌經の威力を讚ず。
【鉢頭摩】パドマ(Padma)紅蓮。
【分陀利】プンダリーカ(Puṇḍarīka)白蓮。
【若し此の金光明等】この一頌總結、聽所得の功德を擧ぐ。

心に大に歡喜を生じて、皆共に池中に入り
鉢頭摩及以分陀利、青白の
二蓮華を種植して、池中に皆遍滿す
此經の威力に由りて、虛空淨くして翳無く
雲霧皆除遣し、冥闇悉く光明あり
日は出でて、千光を放ち、無垢の焰淸淨なり
此經王の力に由りて、流暉四天を遶る
此經の威德力は、天子を資助し
皆贍部金を用ひて、宮殿を作らしむ
日天子初めて出で、此洲の歡喜を見
常に大光明を以て、周遍して皆照曜す
斯大地の內に於ける、有らゆる蓮華池
日の光照の及ぶ時、盡く開發せざる無し
此贍部洲に於ける、田疇諸の果藥をして
悉く皆善く熟せしめ、大地に充滿す
此經の威力に由り、日月所照の處
星辰度を失はず。風雨皆時に順ひ

此贍部洲に遍し、國土咸く豐樂にして
此經の有る處に隨ひて、殊勝なること餘方に倍す
若し此金光明經典流布の處にして
能く講誦する者有らば悉く上の如き福を得ん

爾時に大吉祥天女、及び諸天等、佛の說きたまふ所を聞きて皆大に歡喜し、此經王及び受持者に於て一心に擁護して、憂惱無く常に安樂を得しむ。

授記品第二十三

〔一〕爾時如來、大衆の中に於て廣く法を說き已りて、妙幢菩薩及び其二子銀幢、銀光の爲に、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けんと欲したまふ。時に十千の天子最勝光明有りて上首と爲り、倶に三十三天より來りて、佛の所に至り佛足を頂禮し、却つて一面に坐して佛の說法を聽く。爾時に佛、妙幢菩薩に告げて言はく『汝來世に於て、無量無數百千萬億那庾多劫を過ぎ已りて、金光明世界に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、金寶山王如來、應、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號して、世に出現すべし。時に此如來の般涅槃の後、有らゆる教法も亦皆滅盡す。時に、彼長者子を名づけて銀幢と曰ひ、即ち此界に於て次で佛處に補す。世界爾時に轉じて、淨幢と名く、當に作佛す

【受記品】佛妙幢菩薩等に成佛の記別を、諸天子のために菩提の果を得べき證明を與ふるを明す。
【一】妙幢等三大士に佛自ら記別を與へ給ふを明す。
【銀幢】ルピヤケーツ(Rupyaketu)
【銀光】ルピヤプラバ(Rupyaprabha)
【最勝光明】ジヷラナーンタラテージヤ(Jvalanantarateja)
【金光明世界】ス

ヴルナプラバーシターロカダーツ(Suvarṇaprabhāsitālokadhātu)
【金寶山王】スヴルナラトナーカラチヤトラクータ(Suvarṇaratnākaracchatrakūṭa)
【淨幢】ギラジヤドヴヂヤ(Virajadhvaja)
【金幢光如來】スヴルナドヴジヤカーンチヤナーバ(Suvarṇadhvajakāñcanābha)
【金光明如來】スヴルナヴルナシヤタラスミプラバーサガルバ(Suvarṇaśataraśmiprabhāsagarbha)
【二】十千天子に記を授くるを明す。
【最勝因陀羅高幢世界】シヤーレーンドラドヴヂヤーグラヴテイー(Śailendradhvajāgravati)
【面目清淨優鉢羅

ることを得て、名けて金幢光如來、應、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰ふべし。時に此如來の般涅槃の後、有らゆる教法も亦皆滅盡す。次子銀光即ち佛處に補し、此界に於て當に作佛することを得て、金光明如來、應、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰ふべし。』

(二)是時、十千の天子、三大士の授記を得已りしことを聞き、復是の如きの最勝王經を聞きて、心に歡喜を生じ、清淨無垢なること猶し虛空の如し。爾時に如來、是十千の天子の善根成熟せることを知ろしめして、即便ち大菩提の記を授與すらく、『汝等天子當來の世に於て、無量無數百千萬億那庾多劫を過ぎ、最勝因陀羅高幢世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、同一の種姓、又同一の名號ありて面目清淨優鉢羅香山十號具足と曰はん。是の如く次第して十千の諸の佛世に出現すべし。』と。

(三)爾時、菩提樹神、佛に白して言さく、『世尊、是十千の天子三十三天より法を聽く爲の故に、來りて、佛の所に詣りしに、云何が如來便ち當に成佛することを得べしと授記を與へたまへるや。世尊、我れ未だ曾て、是諸の天子は、六波羅蜜多の難行苦行を具足し、修習して、手、足、頭、目、髓腦、眷屬、妻子、象、馬、車、乘、奴婢、僕使、宮殿、園林、金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、珊瑚、琥珀、璧玉、珂貝、飲食、衣服、臥具、醫藥を捨つること、餘の無量百千の菩薩の如く、諸の供具を以て、過去無數百千萬億那庾多の佛を供養せることを聞かず。是の如きの菩薩各無量無邊劫數を經て、然して後方に菩提の記を受くることを得たり。世尊、

是諸の天子は、何の因緣を以て、何の勝行を修し、何の善根を種ゑてか、彼天より來り、暫時にして法を聞き便ち授記を得たる。惟願くば世尊、我が爲に解說し、疑網を斷除したまへ。」佛、地神善女天に告げたまはく、「汝が說く所の如く、皆勝妙善根の因緣により、勤苦し修し已りて、方に授記を得たり、此諸の天子は、妙天宮に於て、五欲の樂を捨て、故らに來りて是金光明經を聽く。既に法を聞き已りて、是經中に於て、心に殷重を生じ、淨琉璃の如く諸の瑕穢無し、復此三大菩薩の授記の事を聞くことを得るも、亦過去に久しく正行を修せし誓願の因緣に由る。是故に我れ今皆授記を與へて、未來世に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。」と。時に彼樹神、佛の說を聞き已りて、歡喜信受せり。

除病品第二十四

(一)佛、菩提樹神善女天に告げたまはく、「諦に聽け諦に聽け。善く之を思念せよ。是十千の天子の本願の因緣、今汝が爲に說かん。善女天、過去無量不可思議阿僧企耶劫、爾時に佛ありて世に出現したまふ、名づけて寶髻如來、應、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰ふ。善女天、時に彼世尊の般涅槃の後、正法滅し已りて、像法の中に於て王あり、名づけて天自在光と曰ひ、常に正法を以て人民を化すること猶し父

香山】プラサンナヅダノートパラガンダクータ(Prasannavadanotpalagandhakuta)

【三】菩提樹十千天子の授記に就て疑を起せるを佛釋し給ふを明す。

【菩提樹神】梵文によればボーディサットヷサムッチヤヤークラデーヷター(Bodhisattvasamuccayakuladevata) 菩薩集會善女天と譯すべし。

【何の勝行等】修六度行を問ひ、修福德行を問ふなり、能く修行して當果を得るを行といひ、後善の因を生ずるを根といふも體に別なし。

【五欲の樂】色聲香味觸の五官の欲樂。

【淨琉璃】信心澄淨なるに譬ふ。

【三大菩薩】妙幢、銀幢、銀光の三大士なり。

【除病品】前品に授記を得たる十千天子の因緣を述べて、長者子流水の衆病を救療せるを明す。
【一】十千天子得記の因緣を明す。
【寶髻】ラトラシキ(Ratraśikhi)
【像法】佛滅後の三時中第二時、教行あるも正しく證果を得ることの少き時代。
【天自在光】スレシュヴァラプラバーサ(Sureśvaraprabhāsa)
【持水】ヂャティンダラ(Jatindhara)
【流水】ジャラヷーハナ(Jalavāhana)
【時に王國の內等】流水醫術を習ふ緣を述ぶ。
【時に長者子等】已下流水父の許に至りて教を受けんと請ふ。

母の如し。是王國の中に一長者あり。名けて、持水と曰ふ、善く醫方を解し、妙に八術に通じ、衆生の病苦、四大の調はざる皆能く救療す。善女天、爾時、持水長者唯だ一子あり、名づけて流水と曰ふ。顏容端正にして人に樂ひ觀らる、性を受くること聰敏、妙に諸の論、書畫、算、印を閑ひて通達せざる無し。時に王國の內、無量百千の諸の衆生の類あり、皆疫疾に遇ひて衆の苦に逼められ、乃至歡樂の心有ること無し。善女天、爾時に長者子流水は是無量百千の衆生の諸の病苦を受くるを見て、大悲心を起して、是の如きの念を作さく「無量の衆生諸の極苦の爲に逼迫せらる、我が父長者醫方を善くし、妙に八術を通じ、能く衆病、四大の增損を療ずと雖も、然も已に衰邁、老耄し、虛羸にして扶策を假りて方に能く步を進む。復城邑聚落に往きて、諸の病苦を救ふ能はず。今無量百千の衆生ありて、皆重病に遇ひ、能く救ふ者無し。我れ今當に大醫父の所に至りて、治病の醫方、秘法を諮問すべし。若し解することを得已りなば、當に城邑聚落の所に往きて、諸の衆生の種種の疾病を救ひ、長夜に安樂を受くることを得しむべし。」と。時に長者子是念を作し已りて、即ち父の所に詣り、稽首して足を禮し、合掌恭敬して、却て一面に住し、即ち伽他を以て其父に請うて曰く、

慈父、當に哀愍すべし。我れ衆生を救はんと欲し
今諸の醫方を請ふ。幸に願くば、我が爲に說きたまへ
云何が身衰邁して諸大增損有るや

【痰癊】スレーシユミカ(Śleṣmika)膽汁質の病。

【二】長者子のために醫方を明す。三十二頌中、初一許說、次三十正說、後一總結。

【春時等】四時は梵にヴールシヤ(Varṣa)雨時、シヤーラダ(Śarada)秋時、ヘーマンタ(Hemanta)雪時、グリーシユミーカ(Grīṣmika)夏時といふ。

【二二を一節】二ケ月を一氣節とし一年を六時期に分つ。

復何の時中に在りて、能く諸の疾病を生ずる
云何が飲食を噉み、安樂を受くることを得て
能く內身の中に火勢をして衰損せざらしむる
衆生に四病あり、風と、黃熱と、痰癊と
及以び總集の病となり、云何が療治する
何の時にか風病起り、何の時にか熱病發り
何の時にか痰癊を動し、何の時にか總集生ずるや

(二)時に彼長者、子の請を聞き已りて、復伽他を以て、之に答へて曰く、

我れ今古仙の有らゆる療病の法に依り
次第に汝の爲に說かん、善く聽きて衆生を救へ
三月は是れ春時、三月を名づけて夏と爲し
三月を秋分と名づけ、三月は謂く冬時
此は一年の中に據りて三三を別說せるなり
二二を一節と爲せば卽ち歲の六時を成ず
初二は是れ華時、三四は熱際と名づけ
五六は雨際と名づけ、七八は秋時と謂ひ
九十は是れ寒時、後の二を氷雪と名づく

【味界】梵に阿羅婆といふ、飲食此に至れば佉羅界（滓質）と味界（資身分）との二となる。

【風】ヷーター（Vata）熱パッタ（Patta）痰癊カパ（Kapha）總集サンニパタ（Sannipata）

既に是の如きの別を知る、藥を授けて差はしむること勿れ
當に此時の中に隨ひて、飲食を調息して
腹に入れ、消散せしむべし、衆病則ち生ぜず
節氣若し變改すれば、四大も推移あり
此時に藥資無くんば、必ず病苦を生ぜん
醫人は四時を解し、復其六節を知り
身七界を明閑にして藥を食するに差ふ無からしむ
謂く味界、血、肉、膏、骨及び髓、腦なり
病此中に入る時は、其療ずべきや不やを知る
病に四種の別あり、謂く風、熱、痰癊
及以總集の病、發動の時を知るべし
春には痰癊動き、夏の內には風病生じ
秋時には黃熱增し、冬節には三俱に起る
春は澁、熱、辛を食し、夏には膩、熱、鹹、醋
秋時には冷、甜、膩、冬には酸、澁、膩、甜
此四時の中に於て服藥及び飲食
若し是の如きの味に依らば、衆病由て生ずること無からん

【消後】消化の後。

【三藥】滋養を主とするもの、便利を主とするもの、吐出せしむべきもの。

【八術】所謂アーユルヹーダの八術にして印度古代よりの醫方なり。

食後の病は癊に由り、食消の時は熱に由り
消後は風に由りて起る、時に準じて病を識るべし
既に病の源を識り已れば、病に隨ひて藥を設け
假令狀殊を患ふとも先づ其本を療すべし
風病は油膩を服し、患熱は利を良と爲す
癊病は變吐すべし、總集は三藥を須ふ
風熱癊倶に有る、是を名づけて總集と爲す
病の起る時を知ると雖も、其本性を觀るべし
是の如く觀知し已りて、時に順ひて藥を授くれば
飲食と藥と差ふこと無けん。是を善醫者と名づく
復八術を知るべし、諸の醫方を總攝す
此に於て若し明閑ならば、衆生の病を療すべし
謂く針刺、傷破、身疾、並に鬼神
惡毒及び孩童、年を延べ、氣力を增す
先づ彼形色、語言及び性行を觀じ
然して後に其夢を問ひ、風、熱、癊の殊を知る
乾痩にして頭髮少く、其心定住無く

【訶梨勒】ハリタキ(Haritaki) 黃木葡萄の一種。
【六味】苦、醋、辛、甘、鹹、淡。
【三果】訶梨勒、阿摩洛迦アーマラ

語多くして飛行を夢む。斯人は是れ風性なり
少年にして白髪を生じ、汗多く及び瞋多く
聰明にして、夢に火を見る、斯人は是れ熱性なり
心定り身平整し、慮審らかにして頭に津膩あり
夢に水白物を見ば、是は癊性なりと知るべし
總集の性は倶に有り、或は二、或は三を具し
一偏增存るに隨ふ知るべし。是れ其性なり
既に本性を知り已りて病に準じて藥を授けて
其死相無きことを驗して、方に救ふべきの人と名く
諸根倒して境を取り、尊と醫人とに慢を起し
親友に瞋恚を生ず、是れ死相と知るべし
左眼白色に變じ、舌黑く、鼻梁欹して
耳輪舊と殊り、下脣差ひて下に向ふを
訶梨勒の一種は具足して六味あり
能く一切の病を除く、忌むこと無し。藥中の王なり
又三果三辛は諸藥の中に得易し
沙糖と蜜と蘇と乳とは此れ能く衆病を療ず

カ(Āmalaka)毗毗得迦ビビタカ(Vibhītaka)

【三辛】干薑、胡椒、畢鉢。

【三】流水八術等を會得して衆病人を療治したるを述ぶ。

自餘の諸の藥物は、病に隨ひて增加すべし
先に慈愍心を起して、財利を規ること莫れ
我れ已に汝の爲に療疾中の要事を說く
此を以て衆生を救ひ、當に無邊の果を獲べし

(三)善女天、爾時、長者の子、流水は親しく其父に八術の要、四大增損、時節の不同、餌藥の方法を問ひ、既に善く了知して、自ら能く衆病を救療するに堪ふることを忖りて、卽便ち遍く城、邑、聚落所在の處に至り、百千萬億の病苦の衆生あるに隨ひて、皆其所に至りて、善言慰喩して是の如きの語を作さく、「我は是れ醫人なり、我は是れ醫人なり。善く方藥を治む。今汝等の爲に衆病を療治し、悉く除愈せしめん。」と。善女天、爾時に衆人長者子の善言慰喩して、許して治病を爲すを聞く。時に無量百千の衆生の極重の病に遇へる有りて、是語を聞き已りて身心踊躍して未曾有なることを得たり。此因緣を以て有らゆる病苦、悉く蠲除することを得、氣力充實して平復すること、本の如し。善女天、爾時に復無量百千の衆生の病苦深重にして、療治し難き者有り。卽ち共に長者子の所に往詣して、重て醫療を請ふ。時に長者子卽ち妙藥を以て服せしむ。皆除差を蒙むる。善女天、是長者子は此國內に於て、百千萬億の衆生の病苦を治し、悉く除差することを得たり。

【長者子流水品】流水更に池中十千の魚を救ひ、僻脱の結縁をなして昇天せしめし本生を明す。
【一】前品を受けて流水衆病者を救け療せる醫術の力を結ぶ。
【二】救魚行に就て明す。
【水肩藏】ジャラーンブガルバー(Jalāmbugarbhā)
【水滿】ジャラームブラ(Jalāmbra)
【水藏】ジャラガルバ(Jalagarbha)
【野生】アダギーサンバヴー(Aḍavīsambhavā)

長者子流水品第二十五

(一)爾時佛、菩提樹神善女天に告げたまはく、『爾時に長者子流水は、往昔の時に於て天自在光王國内に在りて、諸の衆生の有らゆる病苦を療じ、平復することを得て、安隱の樂を受けしめたり。時に諸の衆生、除病を以ての故に多く福業を修し、廣く惠施を行じ、以て自ら歡娛す。即ち共に長者子の所に往詣して、咸尊敬を生じ、是の如きの言を作さく、「善い哉善い哉、大長者子、善能く福德の事を滋長し、我等の安隱壽命を増益す。仁は今實に是れ大力醫王、慈悲の菩薩たり、妙に醫藥を閑ひ善く衆生の無量の病苦を療ず。」と。是の如きの稱歎、城邑に周遍せり。

(二)善女天、時に長者子の妻を、水肩藏と名く、其二子あり、一を水滿と名け、二を水藏と名く。是時に流水、其二子を將ゐて、漸次に城、邑、聚落を遊行して、空澤の中、深險の處を過ぎて、諸の禽獸、豺、狼、狐、玃、鵰、鷲の屬にして、血肉を食する者を見るに、皆悉く奔飛して、一向に而も去る。時に長者子是の如きの念を作さく、「此諸の禽獸、何の因縁の故にか、一向に飛び走るや。我れ當に後に隨ひて暫く往きて之を觀るべし。」即便ち隨ひ去りて見るに、大池あり、名けて野生と曰ふ。其水將に盡きんとす。此池中に多衆の魚あり。流水之を見已りて、大悲心を生ず。時に樹神ありて、半身を示現し、是の如きの

【水生】ジヤラーカマー(Jalagama)

語を作さく「善い哉善い哉、善男子。汝實義ありて、流水と名くれば、此魚を愍むべし。其に水を與ふべし。二の因緣有りて、名けて流水と爲す。一には能く水を流し、二には能く水を與ふ。汝今當に名に隨ひて作すべし。」是時に流水、樹神に問うて言はく、「此魚の頭數幾何有りと爲す。」樹神答へて曰はく、「數十千に滿つ。」と。善女天、時に長者子、是數を聞き已りて、倍悲心を益す。時に此大池、日の爲に曝されて、餘水幾くも無く、是十千の魚、將に死門に入らんとして、身を旋らして婉轉す。是長者を見て、心に希ふ所あり、隨ひ逐ひて瞻視し、目して未だ曾て捨てず。時に長者子、是事を見已りて、四方に馳せ趣き、水を覓めんと欲して、竟に得ること能はず。復一邊を望むに、大樹有るを見たり。即便ち昇上して、枝葉を折り取り、爲に蔭涼と作し、復更に推求し、「是池中の水、何處よりか來るや。」と。尋ね覓めて已まざるに、一大河を見たり。名づけて水生と曰ふ。時に此河邊に、諸の漁人ありて、魚を取らんが爲の故に、河の上流、懸險の處に於て、其水を決棄して、下過せしめず。所決の處に於て、卒かに修補し難し。便ち是念を作さく、「此崖深くして峻し。百千人を設けて時三月を經るとも、亦斷ずること能はず、況や我れ一身にして、濟辦するに堪へんや。」と。時に長者子速かに本城に還りて、大王の所に至り、頭面禮足し、却て一面に住し、合掌恭敬して、是の如きの言を作さく、「我れ大王の國土人民の爲に、種種の病を治し、悉く安隱ならしめ、漸次に遊行して、其空澤に至るに、一池有るを見る。名けて野生と曰ふ。其水涸れんと欲し、十千の魚有りて日に曝され、將に死

「便ち是の念を作さく」已下發願し慈心を以て樂を與ふるを明す。即ち既に財を施し終りて法施をなさんとして十二緣起を說くを明す。

せんとする、久しからず。惟だ願くば大王、慈悲愍念して、二十の大象を與へたまへ。暫く往きて、水を負ひ、彼魚の命を濟ふこと、我諸の病人に壽命を與へしが如くせん。」と。爾時、大王即ち大臣に勅して速疾に此醫王に大象を與へしむ。時に彼大臣、王の勅を奉じ已りて、長者子に白さく「善い哉、大士。仁、今自ら象の廐の中に至り、意に隨ひて二十の大象を選び取り、衆生を利益して、安樂なることを得しむべし。」と。是時に流水、及び其二子は、二十の大象を將ゐ、又酒家より多くの皮囊を借りて、決水の處に往きて、囊を以て水を盛り、象をして負ひて、池に至りて池中に瀉ぎ置かしむ。水即ち彌滿し、還て復故の如し。善女天、時に、長者子、池の四邊を周旋して視るに、時に彼衆の魚も、亦復隨逐して岸を循りて行く。時に長者子、復是念を作さく「衆の魚、何が故に我に隨ひて行くや、必ず飢火の爲に、惱逼せられ、復我に從つて、食を求索せんと欲す、我れ今當に汝に與ふべし。」と。爾時に長者流水、其子に告げて言はく「汝一象の最大の力ある者を取り、速に家中に至り父長者に啓して、家中に有る所の食すべき物、乃至父母食噉の分、及以び妻子奴婢の分、悉く皆收取して即ち持ち來るべし。」と。爾時二子、父の敎を受け已りて、最大の象に乘り、速に家中に往きて、祖父の所に至り、上の如きの事を說き、家中の食すべき物を收取して象の上に置き、疾に父の所に還り、彼池邊に至る。是時流水、其子の來るを見て、身心喜躍して遂に餅食を取り、遍く池中に散ず。魚食することを得已りて、悉く皆飽足す。便ち是念を作さく「我今食を施し、魚をして命を得しむ。願くば來世に於て

【此れ有なる故彼れ有なり】彼此相對因緣相生の法の故にいふ、唯緣あるに由て果法あり、緣に實の作用あつて果を生ずるに非ず、此れ諸外道の大梵神我に實作用ありてものの因となると執するを破すなり。

【此れ生ずるが故に彼れ生ず】無常緣生の義を明す、無生法の因を以て所生法成ずとの意に非ず、此れ外道常法によりて諸法生ずと執するを破す。

當に法食を施し、充ち濟はんこと邊り無からん。」と。復更に思惟すらく「我れ先に曾て空閑の林處に於て、一りの苾芻の大乘經を讀み、十二因緣生、甚深の法要を說けるを見たり。又經中に說くらく「若し衆生有りて、命終の時に臨んで、寶髻如來の名を聞くことを得れば、卽ち天上に生ず」と。我れ今當に是十千の魚の爲に、甚深の十二緣起を演說し、亦當に寶髻佛の名を稱說すべし。然るに贍部洲に二種の人あり、一は深く大乘を信じ、二は信ぜずして毀呰す。亦當に彼をして信心を增長せしむべし。」と。時に長者子是の如きの念を作さく、「我れ池中に入りて衆の魚の爲に深妙の法を說く可し。」と。是念を作し已りて、卽便ち水に入りて、唱へて言はく、「南謨過去寶髻如來、應、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊。此佛、往昔菩薩の行を修せし時に、是誓を作さく、「願くば十方界所有の衆生、命終に臨める時に、我が名を聞かん者は命終の後、三十三天に生ずることを得ん。」と。爾時流水、復池の魚の爲に、是の如き甚深の妙法を演說す「此れ有なるが故に、彼れ有なり。此れ生ずるが故に彼れ生ず。謂ゆる無明は行を緣じ、行は識を緣じ、識は名色を緣じ、名色は六處を緣じ、六處は觸を緣じ、觸は受を緣じ、受は愛を緣じ、愛は取を緣じ、取は有を緣じ、有は生を緣じ、生は老死の憂悲苦惱を緣ず。此れ滅するが故に彼れ滅す。謂ゆる無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六處滅し、六處滅すれば則ち觸滅し、觸滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち有滅し、有滅すれ

【所謂無明は等】已下十二縁起を説くに二段あり、前段は雑染縁起にして、流轉生死の次第に就き彼此相生を明かし、後段は清淨縁起にして、還滅斷除の次第に依り彼此相滅を示す。

【此れ滅するが故等】已下清淨順觀除滅の次第を明す。

【苦蘊】苦集滅道の中、苦諦は即十二縁起の中、生老病死の現在苦果と共に、また無明等の未來の集諦苦を總じて苦蘊と呼べり。

【三】諸人天衆佛が流子の昔縁を説きたまふをきき、頌呪を以て之を嘆ず。

【蘭香梢】アンヂヤカマンヂヤリチ(Anjaka-mañjalicti)

ば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死滅し、老死滅すれば則ち憂悲苦惱滅す。是の如く、純ら苦蘊を極めて悉く皆除滅す。」と。』

是法を説き已りて、復爲に十二縁起相應陀羅尼を説いて曰はく、

怛姪他、毘折儞、毘折儞、毘折儞、僧塞枳儞、僧塞枳儞、僧塞枳儞、毘爾儞、毘爾儞、毗爾儞莎訶。怛姪他、那弭儞、那弭儞、那弭儞、殺雉儞、殺雉儞、殺雉儞、颯鉢哩設儞、颯鉢哩設儞、颯鉢哩設儞、莎訶。怛姪他、薜達儞、薜達儞、薜達儞、窒里瑟儞儞、窒里瑟儞儞、窒里瑟儞儞、鄔波地儞、鄔波地儞、鄔波地儞、莎訶。怛姪他、婆毘儞、婆毘儞、婆毘儞、闍底儞、闍底儞、闍底儞、闍摩儞儞、闍摩儞儞、闍摩儞儞、莎訶。

(三)爾時、世尊、諸の大衆の爲に、長者子の昔縁を説きたまふ時、諸の人天衆、未曾有なりと歎ず。時に四大天王、各其處に於て、異口同音に是の如きの説を作さく、

善い哉、釋迦尊、妙法明呪を説き
福を生じ、衆惡を除きたまひ、十二支相應す
我等も亦呪を説きて是の如きの法を擁護せん
若し違逆を生じ、善く隨順せざる者有らば
頭破れて七分と作る、猶し蘭香梢の如くならん
我等佛の前に於て、共に其呪を説かん

【四】救濟を受けたる十千の魚の昇天の後流子に報恩するを明す。

【曼陀羅華】マンダーラヷ（Mandarava）悅意花。

曰はく、

怛姪他、唎哩謎、揭瞎健、陀哩、扇荼里地嚟、騷伐嚟、石唎伐嚟、補嚟布嚟、矩矩末底、崎囉末底、達地目契、婁嚕婆、栂嚕婆、具荼栂荼健提、杜嚕、杜嚕、毘嚟、醫泥悉悉泥祢娓達祢娓、鄔悉怛哩、烏率吒囉伐底、頞剌婆伐底、鉢杜摩伐底、俱蘇摩伐底、莎訶。

(四)佛、善女天に告げたまはく、「爾時長者子流水及び其二子、彼池の魚の爲に水を施し食を施し幷に法を說き已りて俱共に家に還る。是長者子流水は復後時に於て聚會する有るに因て、衆の伎樂を設け酒に醉ひて臥しぬ。時に十千の魚同時に命過ぎて三十三天に生じ是の如きの念を起す、「我等何の善業の因緣を以てか、此天中に生じたるや。」と。便ち謂て曰はく、「我等先に贍部洲の內に於て傍生中に墮し、共に魚身を受けたり。長者子流水、我等に水及以び餅食を施し、復我等の爲に、甚深の法、十二緣起及び陀羅尼を說き、復寶髻如來の名號を稱す。是因緣を以て、能く我等をして、此天に生ずることを得しむ。是故に、我れ今咸く彼長者子の所に詣りて、恩を報じ、供養すべし。」と。爾時、十千の天子、即ち天に於て沒して、贍部洲の大醫王の所に至る。時に長者子は高樓の上に在りて安隱にして睡れり。時に十千の天子は、共に十千の眞珠瓔珞を以て其頭邊に置き、復十千を以て其足處に置き、復十千を以て右脇に置き、復十千を以て左脇の邊に置き、曼陀羅華、摩訶曼陀羅華を雨らすこと積て膝に至り、光明普く照し、種種の天樂は妙音聲を出だし、贍部洲の

【摩訶曼陀羅華】マハーマンダーラヴ(Mahamandārava)大悦意花。

睡眠せる者をして皆悉く覺悟せしむ。長者子流水も亦睡より寤む。是時十千の天子供養を爲し已りて、即ち空中に飛騰して去り、天自在光王の國内に於て處處皆天妙蓮華を雨らせり。是諸の天子は、復本處たる空澤池中に至りて、衆の天華を雨らし、即ち此に沒して天宮殿に還り、意に隨ひて自在に五欲の樂を受けぬ。天自在光王天曉に至り已りて諸の大臣に問はく「昨夜何の縁にか、忽ち是の如きの希有の瑞相を現じて大光明を放つ。」大臣答て言さく「大王、當に知るべし、諸の天衆有りて、長者子流水の家中に於て、四十千の眞珠、瓔珞及び天の曼陀羅華を雨らし、積んで膝に至る。」王、臣に告げて曰はく「長者の家に詣りて其子を喚び取れ。」と。大臣勅を受けて即ち其家に至り、王命を宣べ奉りて長者子を喚ぶ。長者子即ち王所に至る。王の曰はく「何の縁ありてか昨夜是の如き、希有の瑞相を示現せりや。」と。長者子の言さく「我が思惟するが如くんば、定めて是れ彼池内の衆魚、經の所說の如く命終の後、三十三天に生ずるを得たりしなるべし。彼來りて恩を報ずる故に是の如きの希奇の相を現ぜり。」王の曰はく「何を以てか知ることを得るや。」流水答へて言はく「王、使を遣すべし、幷に我が二子と彼池の所に往き其虛實を驗せん。彼十千の魚死と爲すか、活と爲すか。」と。王是語を聞き、即便ち使及び子を遣して、彼池邊に向ひ其池中を見せしむるに、多く曼陀羅華有り、積みて大聚を成し、諸の魚並に死せり。見已りて、馳せ還り、王の爲に廣く說く。王是を聞き已りて、心に歡喜を生じ、未曾有なりと歎ぜり。」

【五】昔の流水今の釋尊等と今古を結會することと及衆の悟解を明す。

爾時に佛、菩提樹神善女天に告げたまはく「汝今當に知るべし、昔時長者子流水は即ち我が身是なり。持水長者は即ち妙幢是なり。彼二子の長子水滿は即ち銀幢是なり。次子水藏は即ち銀光是なり。彼天自在光王は即ち汝菩提樹神是なり。十千の魚は即ち十千の天子是なり。我れ往昔水を以て魚を濟ひ、食を與へて飽かしめ、爲に甚深の十二縁起并に此相應陀羅尼呪を說き、又爲に彼寶髻佛の名を稱するに因り、此善根に因りて、天上に生ずることを得、今我が所に來りて、歡喜して法を聽く。我れ皆當に爲に阿耨多羅三藐三菩提の記を授け、其名號を說くべし。善女天、我れ往昔生死中に於て、諸有を輪廻し、廣く利益を爲し、今無量の衆生をして悉く次第に無上覺を成ぜしめ、其授記を與へしむるが如く、汝等皆出離を勤求して、放逸なること勿るべし。」

爾時に大衆、是說を聞き已りて悉く皆悟解す。「大慈悲に由り一切を救護し、勤修苦行して、方に能く無上菩提を證獲せん。」と。咸く深心を發し、信受し歡喜せり。

金光明最勝王經　卷第十

大唐三藏沙門義淨制を奉じて譯す

捨身品第二十六

（一）爾時、世尊已に大衆の爲に此十千の天子の往昔の因緣を說き、復菩提樹神及び諸の大衆に告げたまはく、「我れ過去に於て菩薩の道を行じ、但に水及び食を施して彼魚の命を濟ふのみに非ず、乃至亦愛する所の身を捨つ。是の如きの因緣共に觀察すべし。」爾時、如來應正等覺、天上天下最勝最尊、百千の光明、十方界を照して一切智を具し、功德圓滿したまひ、諸の苾芻及び大衆を將ゐて、般遮羅聚落に至り、一林の中に詣る。其地平正にして、諸の荊棘無く、名華、軟草其處に遍布す。佛、具壽阿難陀に告げたまはく、「汝此樹下に於て、我が爲に座を敷くべし。」時に阿難教を受け、敷き已りて、佛に白して言さく、「世尊其座敷き訖んぬ、唯聖、時を知りたまへ。」爾時、世尊卽ち座上に於て加趺して坐し、端身正念にして諸の苾芻に告げたまはく、「汝等樂うて彼往昔の苦行、菩薩の本舍利を見んと欲するや不や。」諸の苾芻の言さく、「我等見んことを樂ふ。」世尊卽ち百福莊嚴の相好の手を以て、其地を按ずるに、時に大地六種に震動して開き裂け、卽便ち七寶の制底、忽然とし

【捨身品】廣く昔大車王の子摩訶薩埵として生れ、一身を犧牲にして菩薩行を修せるを說く。

【一】佛往昔摩訶薩埵王子として捨身修行を明す。

【般遮羅】パンチヤーラ（Pancala）。今のロヒルカンド地方。

【舍利】シヤリーラ（Sarira）遺骨なり。

【爾時世尊等】已下制底を現じて捨身を述ぶる序とす。

【六種震動】動、起、涌、振、吼、擊の六。

【拘物頭華】クムダ(Kumuda)夜間開く純白の蓮花。

【復阿難陀に告げたまはく等】已下正しく捨身を明す

て踊出し、衆寶の羅網其上を莊嚴す。大衆見已りて希有の心を生ず。爾時、世尊即ち座より起ちて禮を作し、右遶して還り本座に就き、阿難陀に告げたまはく、『汝此制底の戸を開くべし』と。時に阿難陀即ち其戸を開きて七寶の函を見る。奇珍、間はり飾る。白して言さく、『世尊、七寶の函有りて、衆寶莊挍す。』佛の言はく、『汝函を開くべし。』時に阿難陀教を奉じ、開き已りて、舍利有るを見る、白きこと珂雪と拘物頭華の如し。即ち佛に白して言さく、『函に舍利あり、色妙にして常と異る。』と。佛、阿難陀に言はく、『汝此大士の骨を持ち來るべし』と。時に阿難陀即ち其骨を取り、世尊に授け奉る。世尊受け已りて、諸の苾芻に告げたまはく、『汝等苦行の菩薩の遺身の舍利を觀ずべし。』と。而して頌を說いて曰はく、

菩薩の勝德、相應の慧、勇猛精勤して、六度圓かなり
常に修して息まざるは菩提の爲なり、大捨、堅固にして心倦むこと無し

『汝等苾芻、咸く菩薩の本身を禮敬すべし。此舍利は乃ち是れ無量の戒定慧香の熏馥する所、最上の福田にして極めて逢遇し難し。』時に諸の苾芻及び諸の大衆、咸く皆至心に合掌恭敬して舍利を頂禮し、未曾有なりと歎ず。時に阿難陀前みて佛足を禮し、白して言さく、『世尊、如來大師一切を出過して、諸の有情の爲に恭敬せられたまふ、何の因緣の故にか、此身骨を禮したまふや。』佛、阿難陀に告げたまはく、『我れ此骨に因りて、速に無上正等菩提を得たり。往恩に報ぜんが爲に、我れ今禮を致す。』と。復阿難陀に告げたまはく、『我

【大車】マハーラタ(Mahāratha)。
【黔黎】人民のこと。
【摩訶波羅】マハーバラ(Mahābala)大衆といふ。
【摩訶提婆】マハーデーヷ(Mahādeva)大天といふ。
【摩訶薩埵】マハーサットヷ(Mahāsattva)大勇猛といふ。

れ今汝及び諸の大衆の疑惑を斷除せんが爲に、是舍利の往昔の因緣を說かん。汝等善思して、當に一心に聽くべし。』阿難陀曰さく「我等、聞かんことを樂ふ。願くば開闡を爲したまへ。』『阿難陀、過去世の時、一國あり。王の名を大車と曰ひ、巨富にして財多し。庫藏盈滿し、軍兵武勇にして、衆に欽伏せられ、常に正法を以て、化を黔黎に施す。人民熾盛にして怨敵有ること無し。國の大夫人三子を誕生す。顏容端正にして人樂ひ觀る所なり。太子の名を摩訶波羅と曰ひ、次子の名を摩訶提婆と曰ひ、幼子の名を摩訶薩埵と曰ふ。是時大王、遊觀して縱に山林を賞せんと欲す。其三王子も亦皆隨從して華果を求めんとす。父を捨てて周旋して大竹林に至り、中に於て憩息す。第一の王子、是の如きの言を作さく、「我れ今日に於て、心甚だ驚惶す。此林中に於て、將に猛獸の我を損害する無からんか」と。第二の王子復是言を作さく「我れ己が身に於て、初めより悋惜無し、恐らくは愛する所に於て、別離の苦有らんか」と。第三の王子、二兄に白して曰はく、

此は是れ神仙所居の處、我れ恐怖と別離との憂無し
身心充遍して歡喜を生ず、當に殊勝にして諸の功德を獲べし

と。時に諸の王子、各本心に念へる所の事を說き、次に復前み行くに、一虎の七子を生產して纔かに七日を經たるあるを見る。諸子圍遶して、飢渴に逼められ、身形羸瘦して、將に死せんとする久しからず。第一の王子是の如きの言を作さく「哀れなる哉、此虎產みて來た七日、七子圍遶して食を求むるに暇無し。飢渴に逼められ、必ず還て子を噉はん」と。

薩埵王子問うて言はく「此虎毎に常に食する所、何物なるか。」第一王子の答て曰はく、

　虎、豹、狼、師子は唯だ熱せる血肉を噉ふ
　更に餘の飲食の此虎の羸を濟ふべき無し

第二の王子、此語を聞き已りて、是の如きの言を作さく「此虎は、羸瘦して飢渴に逼められ、餘命幾くも無からん。我等何ぞ能く爲に是の如きの、得難き飲食を求めん、誰か復斯爲に、自ら身命を捨てて其飢苦を濟はんや」と。第一の王子の言はく「一切捨て難きは己が身に過ぎたる無し」と。薩埵王子の言はく「我等今は自己の身に於て各愛戀を生じ、復智慧無くして、他に於て利益を興すこと能はず。然るに上士ありて、大悲心を懷き、常に利他の爲に、身を亡して物を濟ふ」復是念を作さく「我れ今此身は百千の生に於て、虛く棄てて爛壞し、曾て益する所無し。云何が今日捨てて以て飢苦を濟ふこと、洟唾を捐つるが如くなる能はざらんや」と。時に諸の王子、是議を作し已りて、各慈心を起し、悽傷愍念して共に羸虎を觀じ、目して暫くも移さず。徘徊すること久しくして、倶に捨てて去る。爾時に薩埵王子便ち是念を作さく「我れ身命を捨つる、今正に是時なり。何を以ての故に、

　我れ久しより來た此身を持す、臭穢膿流、愛すべからず
　敷具并に衣食、象、馬、車乘及び珍財を供給し
　變壞の法なる體に常無し。恆に求むれども滿たし難く保ち守り難し

【塵累】六塵、即ち色聲香味觸法の煩累なり。
【定慧力等】已下は報身を說き、諸佛の讚ずる所已下は法身、諸の衆生已下は化身を明す

常に供養すと雖も怨害を懷き、終に歸りて我を棄てて恩を知らず

復次に「此身は堅からず、我に於て益無く、畏るべきこと賊の如く、不淨なること、糞の如し。我れ、今日に於て當に此身をして、廣大の業を修せしめ、生死海に於て大舟航と作り、輪廻を棄捨し、出離することを得しむべし。」復是念を作さく、「若し此身を捨つれば、則ち無量の癰、疽、惡疾、百千の怖畏を捨つ。是身は唯大小の便利有りて、堅からざること泡の如く、諸蟲の集まる所、血、脈、筋、骨、共に相連持し、甚だ厭患すべし。是故に我れ今當に棄捨して、以て無上の究竟涅槃を求め、永く憂患無常の苦惱を離れ、生死休息し、諸の塵累を斷ち、定慧の力を以て、圓滿薰修して、百福莊嚴し、一切智を成じ、諸佛の讚ずる所の微妙法身既に證得し已りて、諸の衆生に無量の法樂を施すべし」と。是時に王子、大勇猛を興して弘誓の願を發し、大悲の念を以て其心を增益す。彼二兄、情に怖懼を懷き、共に留難を爲し、祈る所の果さざることを慮り、即便ち白して言はく、「二兄、前に去れ、我れ且く後に於てせん」と。爾時に王子摩訶薩埵、還りて林中に入り、其虎の所に至り、衣服を脫ぎ去りて竹上に置き、是誓を作して言はく、

我れ法界の諸の衆生の爲に、無上菩提の處を志求す
大悲心を起して傾動せず、當に凡夫所愛の身を捨つべし
菩提は患無く、熱惱無し、有らゆる智者の樂ふ所と爲り
三界の苦海の諸の衆生をして、我れ今拔濟して安樂ならしめん

【羅睺】ラーフ（Rāhu）日月の蝕を起す惡星なり、障とは日蝕のこと

【大士救護等】初二句は悲の平等、次二はその布施、次四は當得の果を讚ず、得果中初二は菩提涅槃を讚ず眞常勝妙常に倶なるは常法身、後二は別して菩提涅槃を讚ず、寂靜とは涅槃、無生も亦涅槃に名く。

【附時第一の王子等】已下眷屬の悲嘆を述ぶ。

と。是時に王子、是言を作し已りて餓虎の前に於て、身を委ねて臥す。此菩薩慈悲の威勢に由りて、虎も能く爲すこと無し。菩薩見已りて卽ち高山に上り、身を地に投ず、復是念を作さく「虎は今羸瘦して我を食すること能はず」と。卽ち起ちて刀を求むれども、竟に得ること能はず、則ち乾竹を以て頸を刺し、血を出して、漸く虎邊に近づく。是時に大地六種に震動して、風の水を激するが如く、涌き沒みて安らかならず、日は精明無くして羅睺の障の如く、諸方闇蔽して復光輝無く、天は名華及び妙香末を雨らし、繽紛として亂れ墜ちて林中に遍滿す。爾時虛空に諸の天衆有り。是事を見已りて隨喜の心を生じ、未曾有なりと歎じ、咸共に讚言すらく「善い哉、大士」と。卽ち頌を說いて曰はく、

大士救護の悲心を運ぶに、等しく衆生を視ること一子の如し
勇猛歡喜して情に悋む無く、身を捨てて苦を濟ふ、福思ひ難し
定んで眞、常、勝妙の處に至りて、永く生死の諸の纏縛を離れ
久しからずして當に菩提の果を獲て、寂靜安樂にして、無生を證すべし

と。是時に餓虎、既に菩薩の頸下に、血の流るるを見て、卽便ち血を甜め、肉を噉ひ、皆盡し、唯だ餘骨を留む。爾時に第一の王子、地の動くを見已りて其弟に告げて曰はく、

大地山河皆震動し、諸方闇蔽して、日に光無く
天華亂れ墜ちて空中に遍し、定んで是れ我が弟の身を捨てし相ならん

と。第二の王子、兄の語を聞き已りて、伽他を說いて曰はく、

我れ薩埵の慈悲の語を聞く、彼餓虎を見るに身羸瘦して
飢苦に纒はれ、子を食せんことを恐る、我れ今疑ふ、弟其身を捨てたるか

と。時に二王子大愁苦を生じ、啼泣悲歎して、即ち共に相隨うて、還りて虎處に至り、弟の衣服を見るに、竹枝の上に在り、骸骨及び髮、在處に縱橫し、血は流れて泥と成り、其地を霑ほし汙がす。見已りて悶絕して自ら持すること能はず、身を骨上に投じて、久しうして乃ち甦ることを得たり。即ち起ちて手を擧げ、哀號大哭して、倶時に歎じて曰はく、

我が弟の貌、端嚴にして、父母偏に愛念す
云何ぞ倶共に出でて、身を捨てて歸らざる
父母若し問ふ時は、我等如何が答へん
寧ろ同じく命を捐つ可し、豈に自ら身を存することを得んや

と。時に二王子、悲泣し懊惱して漸く捨てて去る。時に小王子の將ゐる所の侍從、互に相謂て曰はく「王子何にか在ます、共に推求すべし」と。爾時に國の大夫人は高樓の上に寢ね、便ち夢中に不祥の相を見る、兩乳は割かれ、牙齒墮落し、三の鴿鷇を得たるを、一は鷹の爲に奪はれ、二は驚怖を被れり。地の動く時、夫人遂に覺めて心大に愁惱し、是の如きの言を作さく、

何故に今時に大地動きて、江、河、林、樹皆搖震し
日に精光無くして、覆蔽の如く、目瞤き乳動きて常の時に異なり

箭の心を射るが如く憂苦逼り、遍身戰き掉きて安隱ならず
我の夢みる所は祥徵ならず、必ず非常の災變の事有らん

と。夫人の兩乳、忽然として流出す、此を念ふに、必ず變怪の事有らん。時に侍女有り、外人の言を聞くに、「王子を求め覓むるに今猶ほ得ず」と、心大に驚怖して、即ち宮中に入り、夫人に白して曰はく、「大家知らずや、外に聞くに、諸人散じて、王子を覓め遍く求むれども得ず」と。時に彼夫人是語を聞き已りて、大憂惱を生じ、悲淚目に盈ち、大王の所に至り、白して言はく、「大王、我れ外人の是の如きの語を作すを聞く、我が最小所愛の子を失へり」と。王語るを聞き已りて、驚惶し、所を失し、悲哽して言はく、「苦しい哉、今日我が愛子を失ふ」と。即便ち淚を拭ひ、夫人を慰喩し、告げて言はく、「賢首、汝憂慼すること勿れ、我れ今共に出でて愛子を求覓せん」と。王と大臣と及び諸の人衆、即ち共に城を出でて各分散して、處に隨つて求覓す。未だ久しからざるの頃に、一大臣有り、前みて王に白して曰はく、「王子在せりと聞く、願くば憂愁する勿れ、其最小なるは今猶ほ見えず」と。王是語を聞き、悲歎して言はく、「苦しい哉、苦しい哉、我れ愛子を失へり。

初め子有りし時には歡喜少く、後ち子を失へる時には憂苦多し
若し我が兒をして重ねて壽命あらしめば、縱ひ我が身は亡ぶとも苦と爲さず

と。夫人聞き已りて憂惱纏壞すること、箭に中てられたるが如し。嗟歎して曰はく、

我が三子幷に侍從、倶に林中に往きて共に遊賞す

【賢首】人を呼ぶ敬語。

最小の愛子獨り還らず、定て乖離し災厄の事有りしならん

と。次に第二の臣、王の所に來至す。王臣に問うて曰はく、「愛子何れにか在る。」第二の大臣は懊惱啼泣し、喉舌乾燥して口に言ふこと能はず、竟に答ふる所無し。夫人問うて曰はく、

速に報ぜよ、小子今何れにか在る
我が身熱し惱み、遍く燒き然され
悶亂荒迷して本心を失す、我が胸をして今破裂せしむること勿れ

と。時に第二臣は即ち王子捨身の事を以て具に王に白して知らしむ。王及び夫人は其事を聞き已りて、悲噎に勝へず、捨身の處を望み、駕を驟せて前み行き、竹林の所に詣で、彼菩薩の捨身の處に至り、其骸骨の隨處に交り横はるを見て、俱時に地に投じて悶絶し、將に死なんとす。猶し猛風の大樹を吹き倒すが如し。心迷ひて緒を失ひ、都て知る所無し。時に大臣等、水を以て遍く王、及び夫人に灑ぐに、良や久しうして乃ち甦り、手を擧げて哭咨嗟歎して曰はく、

禍なる哉、愛子端嚴の相あり、何に因りてか死苦先に來り逼る
我が若きは在ることを得て汝前に亡ぶ、豈に斯の如きの大苦の事を見んや

と。爾時に夫人は迷悶稍や止み、頭髪蓬亂し、兩手をもて胸を椎ち、地に宛轉すること魚の陸に處するが如く、牛の子を失するが若し。悲泣して言はく、

我が子を誰れか屠割せる、餘骨地に散せり

【二】佛利生を說き、重ねて義を明さんとして頌を說く。五十六頌中前二は總じて修行を述べ後五十四は捨身を頌す。

我れ愛する所の子を失うて、憂悲自ら勝へず
苦しい哉、誰か子を殺し、斯憂惱の事を致せる
我が心は金剛に非ず、云何ぞ破れざらん
我れ夢中に見る所、兩乳皆割かれ
牙齒悉く墮落す、今大苦痛に遭ふ
又三の鴿雛を夢み、一は鷹に擒去せらる
今愛する所の子を失ふ、惡相表ること虛に非ず

と。爾時、大王及び夫人並に二王子、哀を盡くして號哭して瓔珞を御せず。諸の人衆と共に菩薩の遺身の舍利を收め、供養を爲して窣塔波の中に置く。

（三）阿難陀、汝等知るべし、此は卽ち是れ彼菩薩の舍利なり。』復阿難陀に告げたまはく、『我れ昔時に於て煩惱、貪、瞋、癡等を具せりと雖も、能く地獄、餓鬼、傍生、五趣の中に於て、緣に隨ひて救濟して、出離することを得しむ。何に況や今時煩惱都て盡きて復餘習無く、天人師と號し、一切智を具して一一の衆生の爲に、多劫を經て地獄の中に在り、及び餘處に於て衆苦を代り受けて、生死煩惱の輪廻を出でしむること能はざらんや。』爾時、世尊重ねて此義を宣べんと欲して頌を說いて言はく、

我れ過去世無量無數劫を念ずるに
或る時は國王と作り、或は復王子と爲る

【勇猛】サットヷ(Sattva)の譯語、讃文字句の都合上「大」の一字を略せり。
【大渠】マハーバラ(Mahābala)の譯。
【大天】マハーデーヷ(Mahādeva)の譯。

常に大施を行じ、及び愛する所の身を捨てて
生死を出離して妙菩提の處に至らんことを願へり
昔時大國有り、國主を大車と名づけ
王子を勇猛と名づく、常に施して心に悋む無し
王子に二兄あり、大渠、大天と號す
三人同じく出遊し、漸くにして山林の所に至る
虎の飢に逼めらるるを見、卽ち是の如きの心を生ず
此虎飢火に燒かる、更に餘に食すべき無し
大士の覩ること斯の如し、恐らくは其れ將に子を食はんか
身を捨てて顧る所無し、子を救ひて傷つけざらしむ
大地及び諸山一時に皆震ひ動き
江海皆騰り躍る。波驚き水逆まに流れ
天地光明を失して、昏冥にして見る所無し
林野の諸の禽獸飛奔して所依を喪ふ
二兄怪で還らず、憂煢して悲苦を生じ
卽ち諸の侍從と與に、林藪遍く尋求す
兄弟共に籌議して、復深山の處に往き

【六情】眼耳鼻舌身意の六感覺。

四顧するに有る所無し、虎の空林に處するを見るに
其母並に七子、口に皆血の汙れあり
殘骨並に餘髪、縱横として地上に在り
復流血有りて、樹林の所に散在するを見る
二兄既に見已りて、心に大恐怖を生じ
悶絶して倶に地に躃き、荒迷して覺知せず
塵土に其身を坌し、六情皆失念す
王子の諸の侍從、啼泣して心に憂惱し
水を以て灑ぎて蘇らしむるに、手を擧げて咷き哭す
菩薩捨身の時、慈母宮內に在りて
五百の諸の婇女と共に妙樂を受く
夫人の兩乳、忽然として自ら流出し
遍體針をもて刺すが如く、苦痛して安きこと能はず
欻ち失子の想を生じ、憂箭心を苦傷す
卽ち大王に白して知らしめ、斯苦惱の事を陳ぶ
悲泣して忍ぶに堪へず、哀聲もて王に向ひて說く
大王今當に知るべし、我れ大苦惱を生じ

兩乳忽ち流出して、禁止すれども心に隨はず
針をもて遍く身を刺すが如く煩寃して胷破れんと欲す
我れ先に惡徵を夢む、必ず當に愛子を失ふべし
願くば王、我が命を濟ひて、兒の存と亡とを知らしめたまへ
夢に見たる三の鴿鶵の、小なるは是れ愛子なり
忽ち鷹に奪ひ去らる、悲愁具に陳べ難し
我れ今憂海に沒し、死に趣きて將に久しからざらんとす
恐らくは子の命全からざらん。願くば爲に速に求覓したまへ
又外人の語を聞くに、小子を求むれども得ずと
我れ今意安らかならず、願くば王、我を哀愍したまへ
夫人王に白し已りて、擧身而も地に躃き
悲痛して心悶絕し、荒迷して覺知せず
婇女夫人を見るに、悶絕して地に在り
聲を擧げて皆大に哭し、憂惶して所依を失す
王是の如きの語を聞き、憂を懷きて自ら勝へず
因て諸の群臣に命じて、所愛の子を尋求せしむ
皆共に城外に出でて、處に隨ひて追覓し

啼泣して諸人に問はく、王子今何にか在る
今は存とせんや亡とせんや。誰れか去れる處を知る
云何が我をして見ることを得しめて、我が憂惱の心を解かん
諸人悉く共に傳へ、咸王子死せりと言ふ
聞くもの皆傷悼し、悲歎の苦、裁し難し
爾時に大車王、悲號して座より起ち
即ち夫人の處に就き、水を以て其身に灑ぎたまふ
夫人は水灑を蒙り、久しくして乃ち醒悟することを得
悲啼して以て王に問はく、我が兒は今在りや不や
王夫人に告げて曰はく、我れ已に諸人を使はして
四に向ひて王子を求めしむ、尙ほ未だ消息有らず
王又夫人に告ぐらく、汝煩惱を生ずること莫れ
且く當に自ら安慰して、共に出でて追覓すべし
王即ち夫人と與に、駕を嚴かにして前に進む
號勤の聲、感を悽み、憂心火の然ゆるが若し
士庶百千萬、亦王に隨ひて城を出で
各王子を求めんと欲し、悲號の聲絕えず

王は愛子を求めんが故に、目して四方を視る
見るに一人の來る有り、髮を被り身は血に塗れ
遍體に塵土を蒙り、悲哭して前に逆へ來る
王は是惡相を見て、倍復た憂惱を生ず
王便ち兩手を擧げて、哀號して自ら裁せず
初めに一りの大臣あり、忩忙王の所に至り
進んで大王に白して曰はく、幸に、願くば悲哀する勿れ
王の愛する所の王子、今求むと雖も未だ獲ざるも
久しからずして當に來至したまひて、以て大王の憂を釋かん
王復更に前み行き、次の大臣の至るを見る
其臣王の所に詣り、淚を流し王に白して言はく
二子は今現に存し、憂の火に逼められたまふ
其第三王子は、已に無常に呑まれたまひぬ
餓虎の初めて生めるを見たまへるに、將に其子を食はんとす
彼薩埵王子は、此を見て悲心を起し
無上道を求めんことを願ひ、當に一切衆を度すべし
想を妙菩提に繫け、廣大にして深きこと海の如し

【無常の羅刹】死の鬼の意味。

即ち高山の頂に上りて、身を餓虎の前に投じたまふ
虎羸れて食すること能はず、竹を以て自ら頸を傷けたまふに
遂に王子の身を噉み、唯だ餘の骸骨のみ有り
時に王及び夫人、聞き已りて俱に悶絕し
心憂海に沒し、煩惱の火燒然たり
臣栴檀の水を以て王及び夫人に灑ぐに
俱に大悲號を起し、手を擧げ胸臆を椎つ
第三の大臣來りて、王に是の如きの語を白す
我れ二王子を見るに、悶絕して林中に在しぬ
臣冷水を以て灑ぐに、爾乃ち暫くして蘇息したまへり
四方を顧視するに、猛火の周遍するが如し
暫く起ちて還た伏し、悲號して自ら勝へず
手を擧げて以て哀言し、弟は希有なりと稱歎す
王是の如きの說を聞き、倍憂火の煎るごとく增し
夫人は大に號咷して、高聲に是語を作す
我の小子偏に重愛す、已に無常の羅刹の爲に吞まる
餘に二子有りて今現に存するも、復憂の火に燒き逼めらる

我れ今速に山下に之くべし、安慰して其をして餘命を保たしめん
卽便ち駕を馳せて前路を望み、一心に彼が捨身の崖に詣る
路に二子と逢ひ行く啼泣し、胷を椎ち懊惱して容儀を失す
父母見已りて憂悲を抱き、倶に山林の捨身の處に往く
既に菩薩捨身の地に至り、共に聚りて悲號して大苦を生じ
瓔珞を脱ぎ去りて盡く心に哀しむ。菩薩の身の餘骨を收め取りて
諸の人衆と同じく供養し、共に七寶の窣堵波を造り
彼舍利を以て函の中に置き、駕を整へ憂を懷きて城邑に趣けり
復阿難陀に告げたまはく、往時の薩埵は
卽ち我れ牟尼是なり。異念を生ずること勿れ
王は是れ父の淨飯なり。后は是れ母の摩耶なり
太子を慈氏と謂ひ、次は曼殊室利なり
虎は是れ大世主なり。五兒は五苾芻なり
一は是れ大目連、一は是れ舍利子
我れ汝等の爲に說く、往昔の利他の緣
是の如きの菩薩の行は、成佛の因なり、當に學すべし
菩薩捨身の時に、是の如きの弘誓を發す

【復阿難陀に等】已下今古を會する三頌なり。
【慈氏】マイトレーヤ(Maitreya)彌勒菩薩なり。
【曼殊室利】マンジュシュリイー(Mañjuśrī)文殊菩薩なり。
【大世主】マハープラジャーパティ(Mahāprajāpatī)佛の姨母なり。
【五苾芻】世尊に從ひ學道せし憍陳如、婆須波、跋提迦、摩訶男、馬勝の五比丘なり。
【我れ汝等の爲に說く等】已下四頌に修學を勸勵せるを明す。

【三】佛說をきける大衆の得益を明す。

【阿僧企耶】アサンキヤ(Asaṅkhya)無數と譯す。

【十方菩薩讃歎品】十方來集の諸菩薩妙偈を以て佛を讃ずるを明す、以下四品は讃歎流通分なり。

【五輪】五體といふに同じ。

【佛身は微妙の等】已下十一頌中初十は佛身を讃じ、後一は發願なり。

願くば我が身の餘骨、來世に衆生を益せん
此れ是捨身の處、七寶の窣堵波は
以て無量の時を經て、遂に厚地に沈まんと
昔の本願力に由りて、緣に隨ひて濟度を興し
人天を利せんが爲に、地よりして涌出す

(三)爾時、世尊是往昔の因緣を說きたまへる時、無量阿僧企耶の人天大衆、皆大に悲喜して未曾有なりと歎じ、悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發す。復樹神に告げたまはく『我れ報恩の爲の故に、禮敬を致す』と。佛、神力を攝むるに、其窣堵波は還た地に沒せり。

十方菩薩讃歎品第二十七

爾時、釋迦牟尼如來是經を說きたまふ時、十方世界に於て無量百千萬億の諸の菩薩衆ありて、各其本土より鷲峯山に詣で、世尊の所に至り、五輪を地に著け、世尊を禮し已り一心に合掌して、異口同音に讃歎して曰さく、

佛身は微妙の眞金色にして、其光普く照して金山に等し
淸淨にして柔軟なること蓮華の若く、無量の妙彩而も嚴飾し
三十二相遍く莊嚴し、八十種好皆圓備す

【八種の微妙】最妙聲、易了、深遠、柔軟、不妄、不誤、尊、調和の八種。

【迦陵頻伽】カラヴィンカ（Kalaviṅka）、妙音を有する鳥。

【百福の妙相】百の意思の業をいふ。即ち初め五十思を起して福業索引の根柢を造り、後に五十思を起して之を圓滿せしむるなり。五十思とは十善の修行に各、離惡、勸道、讚美、隨喜、廻向の五を具足するがために五十思となる。

【安隱の路】八聖道を指す。

光明炳かに著はれて與に等しきもの無く、垢を離るること猶し淨滿月の如し
其聲は清徹して甚だ微妙なり、師子吼して雷音を震ふが如し
八種微妙にして群機に應じ、迦陵頻伽等を超勝す
百福の妙相以て容を嚴り、光明具足し、淨くして垢無し
智慧は澄みて明かなること大海の如く、功德廣大にして虛空の如し
圓光十方界に遍滿し、緣に隨ひて普く諸の有情を濟ふ
煩惱、愛、染集めて皆除き、法炬恆に然へて休息せず
諸の衆生を哀愍し利益し、現在未來能く樂を與ふ
常に爲に第一義を宣說して、涅槃の眞寂靜を證せしめたまふ
佛は甘露殊勝の法を說き、能く甘露微妙の義を與へ
甘露の涅槃城に引入して、甘露無爲の樂を受けしめ
常に生死の大海の中に於て、一切衆生の苦を解脫し
彼をして能く安隱の路に住せしめ、恆に難思の如意樂を與へたまふ
如來の德海は甚深にして廣く、諸の譬喩の能く知る所に非ず
衆に於て常に大悲心を起し、方便精勤して恆に息まず
如來の智海は邊際無く、一切の人天共に測量して
假使千萬億劫に中すとも、能く其少分をも知ることを得る能はず

我れ今略して佛の功德を讃ず、德海の中に於て唯だ一渧なり
斯福聚を廻らして群生に施す、皆願くば速に菩提の果を證せんことを

爾時に世尊、諸の菩薩に告げて言はく『善い哉善い哉、汝等善能く是の如く、佛の功德を讃じ、有情を利益し、廣く佛事を興す。能く諸罪を滅して無量の福を生ぜん。』

妙幢菩薩讃歎品第二十八

爾時、妙幢菩薩卽ち座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、而も讃を說いて曰はく、

牟尼百福の相圓滿し、無量の功德を以て身を嚴り
廣大淸淨にして人觀んことを樂ふ、猶し千日の光明の照すが如し
焰の彩邊り無く光熾盛なり、妙寶聚の相の端嚴なるが如し
日の初めて出でて虛空に映ずるが如く、紅白分明にして金色を間ゆ
亦金山の光普く照して、悉く能く百千の土に周遍するが如く
能く衆生の無量の苦を滅して、皆無邊勝妙の樂を與ふ
諸相具足して悉く嚴淨なり、衆生親んことを樂うて厭足すること無し
頭髮柔軟にして紺青色なり、猶し黑峰の妙華に集まるが如し

【妙幢菩薩讃歎品】續きて妙幢佛を讃ずるを明す。

【妙幢菩薩】ルチラケーツ、ボーディサットヴ(Ruciraketubodhisattva)

【牟尼百福の相圓滿し等】已下八頌半中初四は變化佛、次三は受用佛、後一半は二佛を通じて讃ず。

【菩提樹神讃歎品】菩提樹神また如來を讃ずるを明す。
【如來清淨の慧を敬禮す等】已下十一頌中初五は佛を讃じ、後六は發願を明す。
【清淨慧】障離れ智圓の故に。
【正法を求むる慧】能く衆生をして善を修せしむる故。

大喜、大捨、淨く莊嚴し、大慈、大悲、皆具足す
衆妙の相好嚴飾を爲し、菩提分法の成ずる所なり
如來能く衆に福利を施し、彼をして常に大安樂を獲しむ
種種の妙德共に莊嚴して、光明普く千萬の土を照す
如來の光明は極て圓滿にして、猶し赫日の空中に遍ずるが如し
佛は須彌の如く功德具はり、示現して能く十方に周し
如來の金口は妙に端嚴にして、齒白く齊密にして珂雪の如し
如來の面貌は倫匹無くして、眉間の毫相常に右旋し
光潤鮮白にして頗梨に等しく、猶し滿月の空界に居するが如し

佛、妙幢菩薩に告げたまはく、「汝能く是の如く、佛の功德の不可思議なることを讃じ、一切を利益し、未だ知らざる者をして隨順修學せしむ。」

菩提樹神讃歎品第二十九

爾時、菩提樹神も亦偈他を以て、世尊を讃じて曰さく、

如來清淨の慧を敬禮す、常に正法を求むる慧を敬禮す
能く非法を離るるの慧を敬禮す、恆に分別する無きの慧を敬禮す

【非法を離るゝ慧】能く衆生をして惡を捨せしむる故。【無分別の慧】三輪淨きが故。邪分別を離るる故。【山王】須彌山。

【等持門に住し】諸根定りて三昧に住すること。

【佛身は本淨くして】言詮を絶する大空の如く、その百福の表現幻焰水の月の如し。

希有なり世尊の無邊なる行、希有にして見難きこと、優曇に比す
希有なること海の山王を鎭むるが如し。希有なり善逝の光無量なることや
希有なり調御の弘慈の願希有なり。釋種の明なること日に逾ゆることや
能く是の如く經中の寶を說き、諸の群生を哀愍し利益す
牟尼は寂靜にして諸根定まり、能く寂靜にして涅槃城に入り
能く寂靜にして等持門に住し、能く寂靜にして深境界を知る
兩足中の尊は空寂に住し、聲聞弟子身も亦空ず
一切の法體性皆無く、一切の衆生悉く空寂なり
我れ常に諸佛を憶念し、我れ常に諸世尊を見ることを樂ひ
我れ常に慇重の心を發起し、常に如來の日に値遇することを得ん
我れ常に世尊を頂禮し、願うて常に渴仰して心捨てず
悲泣流淚し情に間無く、常に奉事することを得て厭ふことを知らず
惟だ願くば世尊、悲心を起し、和顏にして常に我をして
佛及び聲聞衆の清淨を見ることを得しめたまへ。願くば常に普く人天を濟ひたまへ
佛身は本淨くして虛空の若く、亦幻焰及び水月の如し
願くば涅槃甘露の法を說き、能く一切の功德聚を生ぜんことを
世尊有らゆる淨境界、慈悲正行の不思議は

聲聞獨覺の量る所に非ず。大仙菩薩も測る能はず
惟だ願くば如來、我を哀愍し、常に大悲身を視見せしめたまへ
三業倦むこと無く慈尊を奉し、速に生死を出でて眞際に歸らん

爾時に世尊、是讃を聞き已りて、梵音聲を以て樹神に告げて曰はく、『善い哉善い哉、善女人。汝能く我に於て眞實にして妄無く、淸淨法身、自利利他の妙相を宣揚す。此功德を以て汝をして速に最上菩提を證せしめ、一切の有情にして同じく修習する所、若し聞くことを得ん者は、皆甘露無生の法門に入らしめん。』

大辯才天女讃歎品第三十

爾時、大辯才天女、即ち座より起ちて、合掌恭敬して、直に言詞を以て世尊を讃じて曰さく、

『南謨釋迦牟尼如來、應正等覺、身は眞金色にして、咽は螺貝の如く、面は滿月の如く、目は青蓮に類し、脣口は赤好にして、頗梨色の如く、鼻は高く、修直にして、金鋌を載せたるが如く、齒は白く齊密にして、拘物頭華の如く、身光普く照して、百千日の如く、光彩映徹すること、贍部金の如し。有らゆる言説は、皆錯謬無くして、三解脱門を示し、三菩提の路を開く。心常に淸淨にして、意樂も亦然なり。佛所住の處及び所行の境も、

【大仙菩薩】 等覺の菩薩。
【爾時世尊】已下佛の印可を述ぶ。
【大辯才天女讃歎品】大辯才天女の讃佛を明す。
【南謨釋迦等】初に佛德を讃ず、身眞金色下相好を、あらゆる下は語無失、三解脫門を示し下所說法外化の德、心常に下四淸淨內證の德、非威儀を離る下永拔を六年苦行等現八相を、身相間滿等は身相を、六度熏習とは修行を、三業無失は三業不共の德を、具一切智下は智德を讃ず。
【贍部金】ヂヤムブナダスヷルナ(Jāmbunadasuvarna)砂金の一種。
【三解脱門】空無相無作三三昧ともいふ。

【釋種中師子】シヤーキヤシンハ(Śakyasinha)普通に釋師子と譯す
【願くば等】發願す を述ぶ。
【爾時等】已下佛の印可を明す。

亦常に清淨にして、非威儀を離る。進止謬ること無く、六年苦行して、三たび法輪を轉じ、苦の衆生を度し、彼岸に歸らしむ。身相は圓滿にして、拘陀樹の如く、六度を熏修して三業に失無く、一切智を具して、自他の利滿ず。有らゆる宣說は、常に衆生の爲なり。言虛設ならず。釋種の中に於て、大師子と爲り、堅固勇猛にして、八解脫を具したまふ。我れ今力に隨ひて、如來少分の功德を、稱讃したてまつる、猶し蚊子の大海の水を飲むが如し。願くば此福を以て、廣く有情に及ぼし、永く生死を離れて無上道を成ぜん。』

爾時に世尊、大辯才天に告げて曰はく『善い哉善い哉。汝久しく修習して、大辯才を具す。今復我に於て廣く讃歎を陳ぶ。汝をして速に無上法門を證せしめ、相好圓明にして普く一切を利せしめん。』

付屬品第三十一

【付屬品】二の經寶の付屬又天帝釋等の伽他を述べて擁護を約すを明す
【爾時衆の中に等】已下諸大菩薩等の大衆の擁護を約するを明す、

爾時世尊、普く無量の菩薩及び諸の人天、一切の大衆に告げたまはく『汝等當に知るべし、我れ無量無數の大劫に於て苦行を勤修し、甚深の法、菩提の正因を獲て、已に汝の爲に說けり。汝等誰か能く勇猛の心を發し、恭敬し、守護して、我が涅槃の後、此法門に於て廣宣流布し、能く正法をして久しく世間に住せしめん。』爾時に衆の中に六十俱胝の諸大菩薩と、六十俱胝の諸天大衆とありて、異口同音に、是の如きの語を作さく『世尊、我等

【世尊の眞實の語等】已下八頌一は絕對眞理の安住、二は大悲力の護持、三は具資糧の故に四に能く滅障を知る故に護持し、五は神鬼の加護、六は地空等の神の護持、七佛德具に此經を護持す、八は諸佛の護持なり。

【四梵住】初禪乃至四禪、離生喜樂定生喜樂、離喜妙樂、捨念清淨の四靜慮をいふ。

【四聖諦】苦集滅道、

咸く欣樂の心有り、佛世尊の無量の大劫に勤修苦行して獲たまふ所の、甚深微妙の法、菩提の正因に於て、恭敬護持して、身命を惜まず、佛涅槃の後、此法門に於て廣宣流布して、正法をして久しく世間に住せしむべし。』爾時、諸の大菩薩即ち佛前に於て伽他を說いて曰さく、

世尊の眞實の語は、實法に安住す
彼眞實に由るが故に、此經を護持せん
大悲は甲冑たり、大悲に安住し
彼慈悲力に由りて、此經を護持せん
福の資糧圓滿して、智の資糧を生起す
資糧滿ずるに由るが故に、此經を護持せん
一切の魔を降伏し、諸の邪論を破滅し
惡見を斷除するが故に、此經を護持せん
護世並に釋梵、乃至阿蘇羅
龍神藥叉等、此經を護持せん
地上及び虛空、久しく斯に住する者
佛教を奉持するが故に、此經を護持せん
四梵住相應し、四聖諦嚴飾し

四魔を降伏するが故に、此經を護持せん
虚空質礙と成り、質礙虚空と成るとも
諸佛に護持せられ、能く傾動する者無からん

爾時、四大天王、佛の此妙法を護持するを說きたまふを聞きて、各隨喜して、正法を護るの心を生じ、一時に同聲に伽他を說いて曰さく、
我れ今此經に於て、男女眷屬に及び
皆一心に擁護して、廣く流通することを得しめん
若し持經の者有らば、能く菩提の因を作し
我れ常に四方に於て、擁護して承事せん

爾時、天帝釋合掌恭敬して伽他を說いて曰さく、
諸佛此法を證したまふ、恩を報ぜんと欲するが爲の故に
菩薩業を饒益し、出世して斯經を演べたまふ
我れ、彼諸佛に於て、恩を報じ常に供養して
是の如きの經、及び持經の者を護持せん

爾時、覩史多天子合掌恭敬して伽他を說いて曰さく、
佛是の如きの經を說きたまふ、若し能く持する者有らば
當に菩提の位に住し、覩史天に來生せしむべし

【四魔】死、煩惱五蘊、天魔の四。
【質礙】一切の有形の物體。
【爾時四天王等】已下四天王護持の頌を述ぶ。
【爾時天帝釋等】帝釋の護持頌主として報恩より護持を說く。
【爾時覩史多等】已下兜率天の頌。兜率來生を眼目とする と共に、本經護持の爲にこの勝處を捨てんとす。覩史多はツシタ（Tuṣita）なり。

【爾時索訶世界主等】已下梵天王の頌禪及解脱の根本として本經の擁護を述ぶ。

【爾時魔王子等】已下第六天主の頌商主はサールタヷーハ(Sârthavâha)なり。

【爾時魔王等】已下天魔の頌。

世尊、我れ慶悦し、天の殊勝の報を捨てて
贍部洲に住し、是經典を宣揚せん

爾時、索訶世界主、梵天王合掌恭敬して、伽他を説いて曰さく、

諸の靜慮無量なり、諸乘及び解脱は
皆此經より出づ、是故に斯經を演ぶ
若し是經を説く處、我れ梵天の樂を捨てて
是の如きの經を聽かんが爲に、亦常に擁護を爲さん

爾時、魔王子あり、名づけて商主と曰へり。合掌恭敬して伽他を説いて曰さく、

若し此正義相應の經を、受持するもの有らば
魔の所行に隨はず、魔の惡業を淨除せん
我等此經に於て、亦當に勤めて守護し
大精進の意を發して、處に隨ひて廣く流通すべし

爾時、魔王、合掌恭敬して、伽他を説いて曰さく、

若し此經を持するもの有らば、能く諸の煩惱を伏せん
是の如きの衆生の類、擁護して安樂ならしめん
若し是經を説くもの有らば、諸魔便を得ざらん
佛の威神力に由りて、我當に彼を擁護すべし

【爾時妙吉祥等】已下文殊の頌。

【爾時慈氏等】已下彌勒の頌。【不請の友】他の請求を待たずして之を資助するの意

【爾時上座大迦葉波等】已下迦葉の頌、聲聞法の人大乘の理を解し得ず唯隨ひて善哉と讃ずるに止る、上座大迦葉波はスタギラマハーカーシヤパ(Sthavira Mahākāśyapa)

【爾時具壽阿難等】已下阿難の頌。阿難は常侍の弟子故に無量の經をきけばこの頌あり。

爾時、妙吉祥天子も亦佛前に於て伽他を説いて曰さく、
諸佛の妙菩提は、此經中に於て説く
若し此經を持する者は、是れ如來を供養するなり
我れ當に此經を持して、倶胝の天の爲に説き
聽聞する者を恭敬して、勸めて菩提の處に至らしめん

爾時、慈氏菩薩、合掌恭敬して伽他を説いて曰さく、
若し菩提に住するものを見ば、與に不請の友と爲り
乃至身命を捨つるとも、爲に此經王を護らん
我れ是の如き法を聞けり、當に覩史天に往き
世尊の加護に由りて、廣く人天の爲に説くべし

爾時、上座大迦葉波、合掌恭敬して伽他を説いて曰さく、
佛聲聞乘に於て、我が智慧鮮きを説きたまふ
我今自力に隨ひて、是の如きの經を護持せん
若し此經を持するもの有らば、我れ當に彼を攝受して
其詞辯力を授けて、常に隨ひて善い哉と讃ずべし

爾時、具壽阿難陀合掌して、佛に向ひて伽他を説いて曰さく、
我れ親しく佛に從つて、無量の衆の經典を聞きたてまつるも

【爾時世尊等】已下佛重ねて讃歎し勸修す。

未だ曾て是の如きの深妙法中の王を聞かず
我れ今是經を聞き、親しく佛の前に於て受く
諸の菩提を樂ふ者のために、當に廣く宣通すべし
爾時、世尊、諸の菩薩、人天の大衆各發心し、此經典に於て流通し擁護し、菩薩を勸進し廣く衆生を利するを見たまひて、讃じて言はく『善い哉善い哉、汝等能く是の如きの微妙の經王に於て、虔誠に流布し、乃至我が般涅槃の後に於て散滅せしめず。即ち是れ無上菩提の正因にして、獲る所の功德は恆沙劫に於て説くとも盡すこと能はじ。若し苾芻、苾芻尼、鄔波索迦、鄔波斯迦、及び餘の善男子、善女人等有りて、供養し、恭敬し、書寫し、流通して、人の爲に解説せば、獲る所の功德も亦復是の如くならん。是故に汝等應に勤めて修習すべし。』
爾時に無量無邊恆沙の大衆、佛の説を聞き已りて、皆大に歡喜し、信受して、奉行せり。

金光明最勝王經(こんくわうみやうさいしようわうきやう) 終

昭和三年十月　三日印刷
昭和三年十月十二日發行

昭和新纂國譯大藏經　經典部第四卷

不許複製

編纂者　昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者　三井晶史

發行者　東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社東方書院
代表者　坂戸彌一郎

印刷者　東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者　非波康三郎

發行所　東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社東方書院
電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

印刷所　西村山太郎　・　製本所　眞貝定次郎

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3696